
風と異邦の精霊術師

山際小道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風と異邦の精霊術師

【Nコード】

N9148T

【作者名】

山際小道

【あらすじ】

買い物帰りの自転車で、突っ込んだ先はファンタジー。異世界トリップ物です。

勢いで始めてしまった物語で、いきあたりばったり不定期更新です。

本作品には性的なものを含めた暴力的な描写がございます。苦手な方は回避してください。

序章（前書き）

文を書く習慣もなしにはじめた物語ですが、終わりが来るまで書いていこうと決意だけはしています。お目汚しにしかならない気が満々ですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

助言を頂いた部分を改変してみました。

序章

「はあ」

森を切り開いた街道を歩む人影から溜息が洩れる。

木々の間から茜色に染まる空。

（予定通りなら小さいとはいえ、ムロトの村で一息ついていたところ
なんだけど…。今日だけで3度も追剥に襲われるなんて、治安悪く
なってきたなあ）

陽は落ち切っていないが、森の中はもう足元が見難くなってきた。
右の人差し指を立て、空中に小さく魔法陣を描き、ほんの少し魔
力を込める。

「闇を照らせ道しるべ 灯火」

頭上の少し先に、握り拳大の光の球が浮かぶ。

「あとちょっとね。今日は屋根付きで寝れそう」

ここまで7日間の野宿生活だったのでベッドが恋しい。

「村に入ったら少し稼ごうかな」

手にした楽器の弦に軽く触れる。

「うっ！」

楽器を爪弾こうとした瞬間、風が嫌な臭いを運んでくる。

とてつもなく悪い予感！

「風の精霊たち。お願い！」

呼びかけに応えた精霊たちが、身を疾風で包む。さらに前方の空気を押し退け、後ろから背を押し出してくれる。

灯火の術はキャンセル。視覚はあきらめ、風の声に耳を澄まし、風の流れを肌で読み取り障害物を避ける。

(万が一もある…か)

村の手前で森の街道を外れて木々を縫い、走る。風を纏い、風を巻き、風の音だけを残して。

村と森との境界。大きな樹の梢に身を隠す。

ここまで来ると一層酷くなる異臭。間違えようもない。

死臭だ。

生者の気配はない。念のため、探索の風を飛ばしてみるが、命の息吹はどこにもなく、昏間なら正視できないであろう骸の数々を感じる。襲撃者の気配もない。

「生存者なし…」

魔素も瘴気も感じられないことから、襲ったのは魔物や魔族ではなく、人族かそれに準ずる者だと思われた。

風の知らせで遺体には爪や牙の痕がなく、使われた魔術も人魔術のようだ。

襲撃者は人間であると判断できた。

(この国も隣国との長い戦で治安が悪くなってきたわね。近隣で聞いた敗残兵たちの野盗かなあ。戦い慣れている上に、自棄になってるから始末に負えないわ)

「魔のモノも怖いけど、人も負けず劣らずね…ハア」

思わず呟いてしまったあとの溜息は、先ほどのものより暗く重かった。

暗闇が惨劇の痕を黒く染めていく中、ぽつぽつと青白い鬼火が灯りはじめ、数体の骸の眼に赤光が見える。魔物化してしまったようだ。

「っ！ 負の気に当てられたのが集まる前に退散しないと！」

風が逆巻き体を持ち上げる。

「風の精霊たち。お願いね」

梢から飛び出した身を風が優しく抱きとめ夜空へと飛翔させる。

「あなたたちの魂にいつの日か安らぎが訪れますように…」

小さくなるムロトの村へと別れの言葉を呟く。

月光に透けるかのような透きとおった淡い金の髪。翠瞳に悲しみの色を浮かばせ天翔る妖精の如き姿。

いや、彼女は正しく妖精だった。

フィリスティア・メイ・ファーン。

諸国を旅する吟遊詩人。風の精霊の化身と云われるエルフ。

一滴の涙を残して滅んだ村を後に明日へと宙を舞う。

キユウ

夜空に可愛らしい音が聞こえた。

「はぁぁぁ…、お腹空いた…」

……。

序章（後書き）

オチないほうが良かったか・・・いや悲惨なだけでは・・・いやいや
や・・・後悔と煩悶の繰り返しです（なさけなあー）

異世界へ(前書き)

タイトルセンスがない・・・絶望した！

近眼設定削除(10/10)

微修正(12/15)

異世界へ

その日、その時、その場所。

事故。奇跡。災害。偶然。様々あるが、めったに出会うことがないものに出合ってしまう。中にはひと目惚れなんて幸運な人もいるだろう。

しかし、今日。この時。この場所に居合わせた彼にとって、それは幸運との出会いであったのか、不幸のはじまりだったのか。判断は彼に委ねることになる。

日比野 ヒビノ 直時 タダトキ

身体的特徴。平均的日本人男性としては少し小さい165センチメートル。痩せ型。

顔、並。本人は眼つきが悪いと思っているため、意識してぼーっとした顔付きを心がけている。

運動神経悪くもないが秀でた点もない。特に運動するでもなく、お酒を飲みながらネットや漫画やアニメをだらだらと楽しむのがなよりの幸せという、世間一般的には無害だが地味な印象の男性である。

直時は上機嫌で愛車である3980円の折りたたみ自転車を駆っていた。なにしろ久しぶりの休みの休みである。実家が自営業とはいっても内実は家内制。家族なぞ賃金のいらぬ労働力と捉えている両親のもと、ひと月に一日あるかないかという休日である。このささやかな一日を、買い物という散財で得た戦利品で過ごす贅沢を満喫し

ようと家路へと急いでいた。

今、彼のシヨルダーバッグには、本屋で立ち読みの未購入した文庫本五冊新書三冊と、古本屋でまとめ買いしたシリーズものの漫画二冊と文庫本十二冊。煙草屋のばあちゃんに頼んでおいた、キセル用刻み煙草と銀の吸い口で黒漆のキセル（煙草の増税をきっかけに試したらハマってしまった）、今夜飲む予定の安いテーブルワイン（赤）一本が入っている。

肩にかかる重さはかなりのものだが、彼はその重さも幸せの重さであると感じて、上機嫌でペダルをこいでいた。トータルの値段を考えると安い幸せである。

書店で斜め読みした文庫本の粗筋に、心ときめかせながら家への最後の曲がり角でハンドルを切った先にあつたのは『白色の霧』だった。

「誰か変なもの燃やしたんだろか？ まあいいや。突っ切るべし！」

危険な臭いもしないうえ、休日と買い物でテンションが上がっていた彼は実に良い笑顔のまま『霧』に愛車を突っ込ませた。

その途端、『霧』は渦を巻きだし、周囲を暴風が吹き荒れる。いや、大気ごと前方へと途轍もない勢いで吸い込まれているのだ。

「うあーい！」

奇声を上げるも逆らえず直進すると…。

直時の予想通りすぐに抜けられた『霧』の先には、予想通りのいつも通りの町並みはなかった。

「樹い？」

彼の眼前に突然現れた森の一角。直進すればひときわ大きな樹に直撃する。ハンドル操作も間に合わないと判断した直時は、見かけに似合わない反射神経で、倒れない程度にハンドルを左に切りながら、右足で思いつきり地面を蹴った。

前輪に衝撃。

直撃はしなかったものの、大樹の根っこに引っかかり、前方に大きく投げだされるも、とっさに鞆を抱え込み背中を丸めて宙を飛ぶ。

「じぶっ」

背中からくる衝撃に耐えて地面を転がる。

「つつーっ。あああ！ 本！ ワイン！ 煙草！」

痛みに顔をしかめて慌てて戦利品の無事を確認する。安堵の溜息をついている様子を見るに、荷は無事だったようだ。

しかし、彼はすぐに混乱する。それはいきなり変化した周囲の情景のためではなく、いきなり顕われた存在によるものだった。

自分が突っ込んだものとはまた違う、突如現れた眼に見えるほどの空気の渦。高速回転ゆえに雲さえ引いている高さ五メートル幅二メートルほどの紡錘形ぼうすいけいの竜巻。

（あんな竜巻にちよこつとでも触ったら錐揉みしながら弾き飛ばされそうだなあ）

などと直時が暢気のんきに眺めていると、その竜巻から『緑色』の光が溢れ出した。

「プラズマ？ プラズマか！」

混乱のあまりおかしな勘違いを叫ぶ彼の前に、緑光の中から顕わ

れたのはこの世の者とは思えない美しい女性だった。

腰の下まであるオリブ色の髪を風に漂わせ、魂を吸い込まれるような翠瞳をもつ、神々しい美しさ…。

純白の薄衣うすぎぬを纏った姿に呆けていた彼は、陽に透けてうっすら見える肢体に赤面してあわてて視線を逸らす。

「戻りなさい！ 急いで！」

「え？」

直時の耳からは理解不能な言語が、そしてはつきりとした意味が頭に響く。

「（時間がないのです！ 早くしなさい！）」

女性は切羽詰まった様子で彼の背後を指さす。

あわてて振りかえる直時が思わず目を見張る。

『穴』が開いていた。それも何もない空間に。そこから猛烈な勢いで風が吹き出し、彼が自転車で突っ込んだ『白色の靄』が噴き出している。

「なんじゃこりゃあ！」

眼を白黒させる直時へ頭の声は続ける。

「（疑問も混乱も今は置いておきなさい！ 帰れなくなります！）」
有無を言わせぬ『声』に焦燥と若干の怒りが感じられる。何が何やら判断がつかないが、このままでは不味い状況に陥りそうだと直感した。

「了解しました！」

バッグを抱えつつ、地元消防団の癖で直立、敬礼し、『穴』へと

走る。しかし、逆風がきつく思うように前に進めない。

「（あと少しだけ維持します！ 頑張つて！）」
後ろからの『声』に押されるように、吹き飛ばされないようにと、腰を低くし一歩ずつ進む。向かい風はもはや呼吸するのもきついくらいで、とても走れそうにない。

でも、あと一息。

「（少しでも亀裂の向こうへ身体を入れることが出来れば帰ることが出来ます。さようなら、一瞬の客人さん）」
優しそうな『声』に多少の後ろ髪を惹かれつつも『穴』へと手を伸ばし…。

「あっ！自転車っ！」
振りかえり愛車を探した瞬間。

「ぶふうっ！」
吹き飛ばされ転がっていく直時に女性が眼を見開く。

「（　　っ！）」
暴風が止んだ瞬間、辺り一帯に声にならない怒りとも悲鳴ともつかない罵声が響きわたった。

異世界へ(後書き)

なかなか進めない・・・

異世界へ？（前書き）

まだまだ作者も主人公も混乱中です。

微修正（12/15）

異世界へ？

風廊の森。ユーレリア大陸中央を走る大山脈。その北西に位置する広大な樹海では、山脈から吹き下ろす風が森中を吹き清め、風の精霊達の息吹が活発なためそう呼ばれる。その森の中、風を纏って樹の梢から梢へと栗鼠リスのように翔る一人のエルフがいた。

腰まで届くまっすぐ伸びた淡い金髪。若草色の明るい翠瞳。細長く伸びた耳。人族に比してほっそりした肢体。風の神霊の加護を受けた彼女なら、エルフという種族のこともありこの森は町や村より段違いに心地よいはずだ。しかし、森を急ぐその姿は焦燥に彩られていた。

「なんなのこれ？ 魔力…のような違うような…。でも、とんでもない力が溢れ出してる！」

魔族と同等の魔力量を誇るエルフ。彼女が慌てるほどのあり得ない魔力（？）を、たまたま英気を養うために訪れていたこの森で感知したのである。長い寿命を持つ彼女にしても初めてのこと、驚愕しつつも知的好奇心を抑えられずその現場へと急いでいた。

「え？ ウソっ！」

感じている力の奔流のすぐ傍に、高位の精霊、いや神霊の波動が顕われる。風使いたる彼女はすぐに悟る。はるか以前加護を授けてもらった存在…。

「まさか顕現なされたの？ この波動は間違いなく『風を統べる女王』様…。一体何が起きてるってどういうの？」

驚愕しつつ先を急ぐが、感じていた力の奔流が突如止まった。

「（アホーーーーーっ！）」

高貴な神霊の思いもよらない低俗な叫びに身が固まる。

しかし、非常事態なのは確かのようなのだ。先を急ぐ。そして見た光景は、怒りのオーラを立ち昇らせた神霊の前に立ち竦む小柄な人族。尊崇する神霊に無礼を働いたに違いないその男を、背後から思い切り蹴飛ばした。

「あいたたた……。風速何メートルだよ。まったく」

文句を言いながら身を起こし、愛車である3980円の折りたたみ自転車を探す直時。

「ん？風が止んだ？」

先ほどまでの暴風は止み、そのかわり張り詰めた空気が流れているのに気付く。

吹き飛ばされる前に聞いた『声』を思い出し、とてもあんな神々しい人の台詞じゃなかったなと思いつつながら当人の方を向く。

「……………」

その美しい人はこめかみに青筋を立てていらつしやいました。さらに両拳を握りしめ、心なしか震えておられるようでした。

直時の背中に冷たい汗が噴き出る。言い訳を脳内検索しつつ何か言わねばと口を開きかけたとき、

「がっ！」

背後から突風とともにあらわれた人物に蹴飛ばされ、勢いよく飛んでいく。

「つつつつ！ もう何度目だよ…。風に祟られてるんじゃないのか、俺？」

風の神霊を前にバチあたりな発言を無自覚にしつつ起き上がる。

「（あら。御久し振りね。フィリスティア。息災でしたか？）」

「御意に。斯かよう様な場所にて、ご尊顔を拝する栄、喜びに堪えませんが神霊の前に跪くフィリスティア。

「（あらあらまあまあ堅苦しいこと。我とあなたの仲ではありませんか。もう少し気軽な言葉遣いをお願いしたいわ）」

「いや、しかし・・・」

「（頼みましたよ。でも、今はしばし置きましよう）」

この世界の言語が理解できないで、居心地悪そうに二人を眺めている直時に一瞬視線を向ける『風を統べる女王』。

「（ところでフィリスティア。貴女、人魔術も使えましたよね？）」

「はい。一通りは修めております」

「（彼にこの世界の言葉を憶えさせて欲しいの。今すぐに）」
「まさかそれでは！」

「この世界の」という台詞から直ぐに連想出来たのか、眼を見開くフィリスティア。それに頷く神霊。

この世界『アースファイア』には方言はあるものの基本的な言語がひとつしかない。世界もすべての命も神が創り、生み出したものだからだ。神が子らへと与えた数多くのものの中に言葉も含まれていた。

「（そこの貴方。こちらへ）」

言葉は理解できないが、神霊の念話は直接頭に意味が流れこむ。それに従いおそるおそる近寄る。先ほどのお怒り様が怖いらしい。

「（言葉が解からないままでは不便でしょう。今から彼女が魔術にて貴方に直接こちらの言語体系を与えてくれます。混乱するかもしませんが、どうか落ち付いて）」

（何が何やら解からんが、情報は必要だもんな。ただでもらえるのなら有難い。しかし魔術ですか…。まあ、あの人も浮いてるし、金髪さんは耳尖ってるし、もしかしてエルフってやつですか？ コスプレにしては本格的過ぎるし、とりあえず見たままを受け入れるしかないか…。判断は後でするしかないわな）

「お願いします」

神霊の微笑に頷くと、フィリスティアに頭を下げる。

彼の思考を読み取った神霊が頷き、フィリスティアが背囊はいのうから短杖を出し、構える。

「我が言の葉 我らの声 汝の知となり肉と為さん・・・」

直時の肩幅程の魔法陣が彼の頭上とフィリスティアの頭上に出現する。

「転写！」

呪文のあと直時の脳に直接アースフィアの言語体系の情報が流れ込む。

（おーーーーー。これは便利だ。さすがは魔術！睡眠学習も真っ青だ？）

感嘆もつかの間、脳から発熱しているかのような激しい頭痛に見舞われる。

「ぐががっ！」

両手で頭を抱え込み蹲る直時。

（ちよっ！ これはきっつい！）

本来なら少しずつ覚えるべきことを一瞬で覚えるのである。あまりの負荷に脳が悲鳴を上げ、目の前が赤くなる。

「はあっはあっはあっ……。ふうー！ー！ー！ー」

直時は何とか持ち堪え身体を起こす。涙目で汗まみれ、鼻血のおまけつきである。

フィリスティアが無言で近づき、ポーチから出した布切れで汗と鼻血を拭ってくれ、顔を覗き込んでくる。

「大丈夫ですか？ 私の言葉がわかりますか？」

「はい。なんとか大丈夫なようです。言葉も理解できます。自分もこちらの言葉を話せてますか？」

マシにはなつたものの酷い頭痛に顔をしかめつつ、なんとか微笑を返す。多少引き攣っていたが…。

「術式は成功のようですね。言葉はちゃんと通じてますよ。しかし、よく堪え切れましたね。言語体系全となると、普通なら丸三日は意識が戻ることはありませんのに……。さすが異世界人といったところでしょうか」

「えええっ？ そんな危ない魔法だったのか……」

最後の言葉に引っかかるが、今更ながら安易に頷いた自分を後悔しつつ、少し恨めしげな顔で神霊の方を向く。

「（あら。私は大丈夫だと確信しておりましたよ？）」「
罪の意識の欠片も見せず微笑む神霊。その屈託のない笑顔が真剣
になる。」

「（では、時間がありません。必要なお話をいたしましょう）」
直時ばかりか、フィリスティアも背筋を伸ばす。

あらためて神霊を直視した直時が少し顔を赤らめて視線を逸らし
た。

「あとう……。その前にいいですか？」

「（なんでしよう？）」

「もう一枚上着を羽織ってもらえませんか？ そのね……。透けてる
んで……。眼の遣りどころがないっていうか」

そうなのである。今の今まで落ち着いて見ていられなかったのも
あるが、神霊は真つ白で薄い衣一枚なのである。元の世界のシース
ルーほどではないが、それでもかなり透け透けなのである。

この世界において、高位の存在である神霊を性的な眼で見るもの
はいない。恐れ多くてそんな意識など欠片も浮かんでこないのが普
通である。

しかし、直時は神も神霊も精霊もない世界の人間である。宙に
浮かび神々しい雰囲気を纏っているといっても、妙齡の美しい女性
がシースルー姿であるというのはどうにも居心地が悪い上に直視で
きなかつた故の必然的な要望だった。

女性に対して及び腰であるが、男としての煩惱は充分以上に持つ
ている。もちろん今までの光景は脳内フォルダに永久保存されたの
は言うまでもない。

「（…………）」

「……………」

「……（チラリ）」

順番として神霊とフィリスティアと直時。皆が無言で顔を見合わせる。最後のチラ見は、見納めとばかりに眼に焼きつけた直時である。

「無礼者っ！」

一番に反応したのはフィリスティアである。竜巻を召喚し直時を吹き飛ばす。

「ぶへらっ！」

錐揉みしながら飛んでいく憐れな男に、虫けらを見るような一瞥を与えた彼女は、尊崇する神霊へと顔を向ける。

「（はわっ！ あわわわわっ！）」

そこには真っ赤になって両手で身体を隠すように抱きしめて身を縮込ませている『風を統べる女王』の姿があった。頭から湯気のおまけつきである。

あまりの光景に眼が点になるフィリスティアであるが、慌てて自身のローブを外して駆け寄る。

「（こここここの姿ってはしたなかったのかしら？ ねえ？ えぐっ！ えう）」

最後は涙目である。威厳もなにもあったものではない。

「（今までずっとこの格好だったのにつ！ もしかして私って、ろろる露出狂だとか思われてたり！ エ、エ、エロい神霊とか謂われてたり！ ままままさか春画のモデルだったりいいいいー！）」

「お気を確かに！ こやつはこの世界の尊きものを何ひとつ知らぬ慮外ものです！ 石や木に同じ！ むしろ虫です！ ゴミです！」

「貴女様が何一つ気になさる理由はございません！」
有史以来の大混乱である。

異世界へ？（後書き）

神霊様も大混乱です。

異世界へ？（前書き）

微修正（12/15）

異世界へ？

「(コホン！ あらためまして、私は『アースファイア』と呼ばれるこの世界における神霊で、『風を統べる女王』。名をメイヴァーユと申します)」

「こちらこそあらためまして、日比野 直時と言います。ちなみに名がタダトキ、姓がヒビノです。自分の世界に名は付いておりませんが、地球という惑星の数多くある国のひとつ。日本国の出身です」「フィリスティア・メイ・ファーン。ホルンの森の生まれ。吟遊詩人です」

漸く落ち着いた面々。お互いに、初めて名乗りあつた相手の名前と顔を記憶に刻む。

「(タダトキ。結論から申しますと、貴方から見てここは異世界です。そして元の世界には帰れません)」

フィリスティアから借りたローブをすっかり身体の前で重ね合わせながら言う。まだ、顔は赤い。一方直時は、痛む身体をさすりながらも、慌てずに言葉を返す。あまりに多くの事があり過ぎて何に驚いて良いのか判らなくなっているのだ。

「えーっつと。ここが異世界ってのは納得しました。メイヴァーユさんという女神様が眼の前にいらっしやいますし、魔法も自分の身で体験しましたし…。で、自分が元の世界に帰ることができないという理由はどういったものでしょう？ 不明というわけではなく、確定なのでしょうか？」

「(可能性としてはゼロではありませんが、任意に帰ろうとするとなるとゼロです)」

「……理由を聞いてもよろしいでしょうか？」

「（そうですね。貴方が堕ちてきた世界の綻び。あれはめつたな現象ではありません。少なくとも私は初めて眼にしました。他の神々や神霊に伝え聞くところでも五百年に一度くらいでしょうか。もちろん予測もできません。私が遭遇できたのはこの森が私との親和性が強く、気まぐれで顕現しようとしていたところ、偶然変事を感じできたからに他なりません。再度の幸運で綻びを発見しても、異世界との接合時間は短く、神霊である私の力をもってしてもほんの少し維持することが可能だけです。とても貴方を呼んで到着するまで待つていられません）」

直時が少し睨まれる。

（そついや、急がされてたな……。帰れるように頑張ってくれてたんだ）

バツが悪そうに上目遣いでメイヴアーユを見る。

「先程は申し訳ありませんでした。正直パニくってました」

言い訳とともに頭を下げる直時。

「（過ぎたことは仕方ありません。話を続けますが、つまり世界の綻びに遭遇しようと思うなら、五百年の間に一度、この広い世界の何処かに出現する一瞬に出会わなければいけないということです。）

この世の理の外の現象ですので予知が出来ません。そして、再び綻んだ裂け目の先が、貴方の世界であるかどうか解からないのです）」

「えーっと。頭の中が混乱してますが、とりあえず自分の理解の範囲でまとめてみます。ひとつ、自分は別の世界からこの世界に迷い込んだ。ひとつ、帰る可能性はほぼゼロ。結論としては、これからこの世界でどうにか生きて、どこかに骨を埋めるしか無い。ということとここで間違いないでしょうか？」

「（その通りです。ご理解が早くて助かりました。私はそろそろ自

分の領域に戻らねばなりません。聞きたいことはまだあるでしょうが……）」

「お心遣いありがとうございます。こちらの言葉とか自分の現状とかを教えてもらえて、本当に助かりました。あとは自分のできる範囲でぼちぼちとやっていきますのでご心配なく」

メイヴァーユに微笑む直時。

「（あとひとつ気になることがあります。あのとき綻びは膨大な力を吐き出していました。あれは、貴方の世界がこの世界より高次の世界に在るためです。水も力も高いところから低いところへと流れますから）」

「そうなんですか？ 本物の神様がいたり、先ほど自分を吹き飛ばしたあれって魔法ですよ？ そんなのがあつたりと、この世界の方が何か強そうなんですけど」

「（何が在って何が無いということは関係ありません。存在の力そのものがこの世界よりも高いということなのです。問題はそのような世界の存在たる貴方は、大きな力の塊であるということですよ）」

「……体が爆発したりしないですよ？」

高圧から低圧へというイメージから、釣り上げられた深海魚の姿を思い浮かべた直時が冷や汗を浮かべる。

「（力の使い方を間違えるとそうなる可能性もありますが、恐らくは元の世界では考えられないような力を得ることでしょう）」

「岩をも砕く戦士！ とか、世紀の大魔導師！ とかですかね？」

安易な表現であり、なんとなく嫌そうな表情だ。

「（ふふっ。力を使いこなせればなれますよ。ただ覚えていて欲しいのは、あなたが大きな力を得ているということ。大きな力は大きな影響力を持つということ。それだけです）」

「心得ました」

メイヴァーユの忠告に神妙な顔で返す直時。

「(タダトキにこれからも幸多からんことを)」

メイヴァーユが微笑み、少しずつ姿を薄れさせる。

「次にお会いする時は上着をプレゼントしますね」

「(っ！)」

再び真っ赤になりつつも、何も言えずに消えてしまったメイヴァーユ。

慌てた姿に思わず笑みがこぼれる直時であったが、黙って会話の推移を見守っていたフィリスティアに拳骨をもらうのであった。

「フィリスティアさん。お願いがあるのですが」

メイヴァーユとの別れの後、直時が振り向く。

「内容によるけど、まあいいわ。聞きたいことがいっぱいあるし。」

それから、私のことはフィアでいいわよ」

神霊の言葉を邪魔しないように無言で二人の会話を聞いていたのだが、好奇心が抑えられないようで、うずうずと眼を輝かせている。先程までの堅苦しい会話が嘘のようだ。

猫かぶってやがったな！ とは、直時の感想である。評価が上がったか下がったかは不明である。

「じゃあフィア。自分のことはタダトキでもヒビノでも適当にお願い

「い
初対面の女性に、ファーストネームで呼ばれることに慣れていない。というか、いいのかどうかも判らないので相手に丸投げする。」

「タダトキ・・・言いくい・・・タキは？」

「名字みたいで嫌だ」

「じゃあタデイ」

「・・・親父みたいでそれも嫌」

「むうーっ！ じゃあターキー！」

「それ、うちの世界じゃ食用の鳥だ！ 却下！」

「名前呼べないじゃない！」

「・・・ヒビノでいいんでない？」

丸投げしたくせに、ちよっと名前で呼んでもらえるのを期待していた直時。寂しいが諦める。

「・・・ヒビノ」

「はいよ」

「・・・」

「・・・」

両者ともに、敗北感が滲み出していた。

「でも、まずは落ち着ける場所に・・・だよな？」

「そうね。でも、この辺に村も町もないわよ。野営地を探して準備しましょ」

「いきなり野宿ですか・・・。了解」

異世界での初日は地面が寝床のようである。

溜息をつきながら愛車の自転車を確保する。興味津々、物問いたげな視線はあえて無視する直時であった。

異世界へ？（後書き）

進行が遅くてすみませぬ><

野宿の夜(前書き)

微修正(12/15)

野宿の夜

自転車を押す異世界人と、旅装のエルフが森を歩く。

片方は黒髪黒瞳の小柄な男性。モスグリーンのカーゴパンツにスニーカー。ライトグレーのTシャツの上に、ダークグリーンとライトグリーンで迷彩柄を模したようなデザインの長袖のフード付きパーカーを羽織っている。斜め掛けした革の鞆は、荷物でいっぱい膨らんでいて、ちよつとそこまで買物に行った帰りのようだ。

もう片方は隣を歩く男性とほぼ同じ背丈。淡い金髪に翠瞳の細身の女性。尖った耳からエルフと判断がつく。くすんで擦り切れているものの、丈夫そうな薄い若草色のローブ。オリーブ色の乗馬ズボンに脛^{すね}上まである革のブーツ。厚手の布の服の上から、肩当てのない軽そうな革の鎧。小振りな背囊の下部に毛布を丸めて括^くりつけ、幅広い革ベルトには大小さまざまなポーチや革袋。左腰には中型細身の刺突剣。背囊から少しはみ出した短杖。ときおり、革紐で鳩尾あたりにぶら下げられた弦楽器を気ままに摘弾く。旅の吟遊詩人そのものの姿である。

森の中、清水が湧き出る泉の近くの少し開けた空き地を野営地と決め、準備にとりかかる。直時はキャンプの記憶を辿りながら手順を考えるが、旅慣れたフィアがほとんどこなしてしまう。それも魔術で済ませてしまうので、直時としては手伝えることが無い。風で地面を掃き清め、呪文で竈^{かまど}に火を起こし、落ち葉を風で集めたのは毛布の下の簡易マットだ。

「魔術つてのは便利なもんだなあ。是非とも教えてもらいたいな」
せめてこれくらいはと、薪集めをしながら直時が感嘆の声を上げる。

「精霊術は魔術つていうより魔法かな。こればかりは特性がないと駄目なのよね。精霊と通じ合うことができないと使えないの。でも、人魔術は魔法陣で魔力を制御する技術だから、頑張れば覚えることができるわよ」
竈にかけた鍋をかき混ぜながら答える。

「ファイアからもう充分だと言われ、薪集めを終えて竈を挟んだ向かいに腰を下ろす。

鍋の中には、その辺で採取した香草を含む野草と茸、千切った干し肉がくつくつと煮え始めている。味付けは少しの香辛料と岩塩だけである。

鍋を煮込みながら、ファイアが大きなドングリの皮をナイフで剥く。掌一杯分のそれを丁寧に渋皮まで取り除き、予め火の中に放り込んであった平らな石の上で煎る。焦がさないようにナイフで転がしていると、香ばしい匂いが漂い始める。

「さて……。聞きたいことは山ほどあるだろうけど、どんなことから話そうか」

「この世界の一般常識と習慣、主な国の政治体制かな。非常識な振る舞いで眼を付けられたくないし、息をするにも税金がかかって王様や貴族が平民を気儘に殺しても平気な国には近寄りたくないし」
「習慣は種族ごとによりかなり違うしなあ。共通の一般常識と習慣、それとヒビノは普人族みたいだから普人族のそれが必要ね。政治体制はどこも似たり寄ったりよ。王と、それに連なる貴族がいて民を守る代わりに税だの賦役ふえきだのを課すって感じかな。あまり無茶苦茶や

つてる国は、無いとは言えないけど少ないわ。反乱が起きたりして国を乗っ取られたり、他国に攻め込まれる原因になつたりするからね」

（基本的に専制君主国家なのか……。暴君は少ないとはいえ、専制国家の制度的にいつ生まれるとも限らないしなあ。商人が力を持った商業都市国家とかもあるんだろうか？ あるとすれば大量輸送に有利な沿岸部だろうな。どうせならそっちの方が性に合う気がするな。しかし、そんなことは後回しだ！）

「主要国の情勢とかも聞いておきたいけど、今一番聞きたいのは魔術についてなんだ。うちの世界には無かったからね。魔術とか魔法とか精霊術？ そのへんの区分けとかわからないけど、是非とも御教授して欲しいっ！」

いきなりの異世界で多くの不安が湧きあがるなか、それらをおさりと覆す衝動が魔法であった。ゲームや漫画、小説の中にしかなかった能力が手の届くところにある。茫とした印象しかなかった直時が、太い眉毛を釣りあげ、眼を爛々と輝かせる。

「ちよっ！ 興奮しないで！ ある程度使えるようになるくらいは教えてあげるから。でも、対価は貰うから何か考えておいてね」

「くっ！ 有料か！」

「あはははは。ま、気長に待ってあげるから。術が一番って言うけど、ここはやっぱり世界の成り立ちを知ってもらわないとね。これから『アースファイア』で生きていくのなら、この世界に対する当然の礼儀じゃない？」

「……確かに。聞かせてくれ」

ファイアが弦楽器を手にする。

「それでは、この世界の成り立ち。神話のはじまりの物語…」
（神話からかよ…。長くなりそう）
覚悟を決めて耳を傾ける。

宵闇が辺りを染め始めた森の中、ゆっくりと流れる弦の音に乗り、
朗々とファイアの唄声が響き始める。

この世にあまねく生きるもの 其の始まりの物語

虚無の波間に顕われし ひとりの神の御姿

神の言霊響きたる

世界よ在れ 汝の名は『アースファイア』

はじまりの神より生まれしは 二柱の男神と女神

男神をア ril 女神をイリス 二柱に声は云う

世界を拓け わが子らよ

二柱は大地を創る 大地をこねては形を創る

高く積み上げ山を創り 低く掘り裂き谷を創る

流れた汗は大河となって 波の打ち寄せる海へと変わる

突然歌声が止む。怪訝そうにファイアに眼を向ける直時。

キユウ。

ファイアから可愛らしい音が聞こえた。

「まずはご飯にしましょう」

真っ赤になり、パイと横向く。

「……ぷっ」

「食べれるときに食べるっ！ 旅の鉄則よ！」

「了解」

笑いを噛み殺す直時に、不機嫌になりながらも山菜鍋をよそってくれる。煎ったドングリは大きな葉っぱに乗せて差し出される。

「じゃあ食べましょう」

「そうだね。いただきます」

料理を前に両手を合わせる。

「それって、ヒビノの世界の習慣？」

「うちの世界ってより、うちの国かな？ 料理を作ってくれた人と、食べ物として自分の血肉になってくれる食材に対するお礼みたいな感じ」

「そっか。そういう考えをする人なら、もしかして精霊も応えてくれるかもしれないね」

「そうなら嬉しいね」

山菜鍋は塩味だけの素朴なものであったが、干し肉からの出汁と

茸の風味が味わい深く、香草の清冽な香りが後味を清々しいものにしていて、大変美味であった。

「美味いつ！」

「ふふつ。お口に合って嬉しいわ」

直時の贅辞にフィアも満更ではなさそうだ。

煎りドングリは香ばしいながらも、中はほっくりとして僅かな甘みがありこれも美味だった。

満足のいく食事に、思いだしたかのように直時が鞆を探る。

「魔術とか色々教えてもらう報酬なんだけど、これなんかどうかな？ 異世界製の果実酒」

元の世界で購入したテーブルワイン（赤）を取り出す。1・5リットルのペットボトルに入った安物だが、『異世界製』を強調し希少感を煽る。

「おおおつ！ これは興味深い！ 是非ともっ！」

疾風の早さで何処からか出したコップを差し出す。

「え？ もう開けるん？ 売ったりしないの？」

「何をおっしゃる。初めて出会ったお酒を飲まないなんて、お酒に對する冒瀆よ」

チツチツチと人差し指を振り持論を展開するフィア。さあ！ とばかり催促される。

「御注ぎします」

トクトクトクトク。コップを満たす赤ワインを無言で見つめる眼は真剣そのもの。軽く香りを嗅いで、一口含む。コクリ。

「素晴らしい香り。それに果実酒特有の甘ったるさが殆ど無い。少しある渋味も後味に残らずコクを与えている。喉越しもすつきりとしてまるで流れるようね。美味しいっ！素晴らしいっ！」

ゴキユツゴキユツゴキユツぷはーっと、残りを一気に飲み干す。

「ちよっ？　語り出したかと思えばただの酒飲みかいっ！　一気に飲みすんなよ」

「あははははは。食べられるときに食べる。飲めるときに飲む。これが正しい在り方なのよ！　ほら、ヒビノも飲みなさい！」

新しいコップを突き付け、おかわりも要求する。

「ぷはーっ。いやー、こんな美味しいお酒は初めてだわ。知識でも世界情勢でも魔術でもどーんと任せておきなさい！」

控えめな胸を叩くフィアにそこはかとなく不安を抱く直時であった。

野宿の夜（後書き）

弟の結婚式でした。うらやましくなんかないんだからね！

野宿の夜？

「飲みながらでいいから続きを話してもらえる？」

「……どっからだったっけ？」

「始めの神様が二柱の神を生んで、この世界を開拓しはじめたところ」

「そうそう。それでその二柱の神を手助けするかのように、多くの神々が生まれていったの……」

世界を切り拓く手元を照らす光の神ラーナ、疲れた身を包みこむ闇の神アスタ、こねられた大地には地母神デーテイル、大河や海からは水神リユーシン、火照った身を癒す風神シエルフィード、暖をとるのに起こした炎からは火神アグニスタ、その他数多の神々が生まれていった。

生まれた神々は手を取り合い、時には争い、また愛し合しあっては結び、さらに多くの神々、それだけでなく神霊、精霊、木や草や花、竜、獣、蟲、人を生み、世界は賑やかになっていった。

「ふむ。じゃあ力を持った存在を順に言うと、始まりの神 二柱の神 光、闇、大地、風、水、火の神って感じで、古い神になるほど力が強いつてことかな？」

「そうね。その理解で合ってる」

「んでちよつと質問。神々ってどこにいるの？たとえば神殿とか祠とか？風の女神様、メイヴアーユ様は神霊だつて言つてたけど、消えちゃったよね？何処か訪ねて行ったら会えたりするのかな？」

「神々も神霊も力が大きな存在は、常時地上に顕われているわけではないのよ。基本的にはこの世界に属するんだけど違う領域、『神域』で見守つていてくださるの。それでまあ御心のままに顕われては、加護を与えたり神具を授けたりしてくださるのよ」

「……それって気まぐれで餌あげてるってことなんじゃあ」「バチあたりなこと言わないの！でも間違いとは言えないわね。信仰心とか供物とかで神々や神霊が何かをしてくれるわけじゃないからね。地上に住まうものの祈りとは全く無関係に、自らの御心のままに動かれるのよ。もつとも、地上の争いに介入することは殆どないんだけどね」

「地上に普段いないのは何故？」

「力が大きすぎるから。地上に広がった命は皆、神々の子供達だもの。少し力を使っただけでもたくさん命を刈り取ってしまうから、地上に影響のない『神域』におられるの」

大きな力は大きな影響も持つ、との神霊の忠告を思い出す直時。

(調子乗んなよ！つて釘刺されたのかな？)

「この世界の生き物って、何らかの神々の末裔ってか眷属ってことなのかな？」

「そう。ちなみに私達ウッドエルフは、妖精神エルテイルと風の精霊の子なの」

実在する神様が祖先とは、はつきり言つて驚きである。話通りなら、この世界の生き物全てがそうなるらしい。

「そうか……。どんな命もこの世界の命は神様に繋がってるってことか」

考え込む直時。

（異世界人である自分はどんな神とも繋がりを持たない。しがらみが無いとも考えられるけど、神々でさえ極力影響を抑えているところへ、大きな力を持っていると認識されている自分が暴れるのは非常に拙い。下手したらこの世界そのものが敵になる可能性もある）

「この世界のこと、だいたいは理解してもらえたみたいだね」
先程までの酔っ払いの雰囲気は嘘のような真剣な眼差しのフィア。

「で、どんな術と、どんな世界情勢が聞きたい？」
（ああ、やっぱり警戒されてたつてことか。そりゃそうだよな）

メイヴァーユから大きな力を持った異世界人だと示唆され、その場に残されたフィアは、この世界に悪影響を及ぼすなら自分の力全てをもって止める。最悪、直時を殺す覚悟があった。

「攻撃魔術は諦めるよ。ただ、使ってみたってだけだったしね。でも、この世界で使われている一般的な魔術は教えてね。生活必需品的なやつ。世界情勢つてか、主要国の情報は大雑把なところだけお願い。できれば、他国に攻め込まれそうにならないような平和な地方都市を教えてもらえたら嬉しい。まあ一般常識とか一般教養レベルくらいで」

未知の世界故の情報収集であったが、情報とは財産であり生命線であるとの元の世界の認識を思い出した直時。知り過ぎたときの相手の反応に、『抹殺』の二文字が脳裏にチラつき出し、改めて危うい自分の立場を感じるのだった。

「本当にそれだけで良いんだね？」

ファイアが念を押す。
「それで充分以上に有難い」
笑う直時。

幾分かほつとしたファイアはにこやかにワインを要求し、直時も杯を干す。気儘な酒宴の話題は、直時の日本での生活の話になっていく。

食べ物とワインの尽きたあと、ファイアが落ち葉のマットの上に毛布を敷いて横になる。食器の後片づけをしようとする直時に、明日魔術でやるからそのままでもいいと指示する。

「今日は色々あり過ぎた。俺ももう寝るよ。後のことは明日にしよう」

着の身着のままの直時は、パーカーのフードだけを被ってもう一つの落ち葉の山にそのまま寝転ぶ。

頭も体も疲れているはずの直時は夜が更けても眠れずにいた。竈の火が小さくなったことで身体を起こし、茫洋としながらも消えないように薪をくべる。

男の傍で普通に寝入っているエルフ美女を視界の端に収め、それはうら若き女性としてどうなんよ？と、無言の突っ込みを入れつつも考え込んでいる。

(気分転換でもするか)

鞆からキセルと煙草の葉を取り出し、水汲みをした泉に向かう。真っ暗な森の中、木の根や下生えに足をとられつつ、微かな月明かりだけを頼りに歩く。

(電灯も何もないってこういう感覚なんだな)

ともすれば、平衡感覚さえ危うくなりながら、眼の前の梢の闇か

ら開けた泉へと辿り着く。日本なら街の明かりに埋もれてしまいうな星空が、眩いほど煌めいている。

水辺の木に背を預け、腰を下ろす。ポケットから取り出したキセル。火皿と吸い口は銀製。羅宇は葦に黒漆、桜の花を散らせた柄。刻み煙草を一滴取り出して丸め、火皿へと詰め込む。マッチと百円ライターがあった。少し考えてマッチで火を点ける。

スパッスパツ。フウー……。吸い口から煙の輪が、口からは紫煙が吐き出される。

「所詮は余所者だしな」

溜息とともに盛大に煙を吐き出す。

「うん。すつきりした！」

直時としても、英雄だの支配者だのになる気は毛頭ない。まったく平穩に過ごせれば充分幸せだ。魔術への憧れで相殺されていたが、いきなりの異世界という混乱と不安まみれだった思考に、本来の楽天的な部分がようやく戻ってくる。

（できるだけ回避したって、しがらみだらけだった日常だったんだ。そこから解放されたと思えば何でも好きなことが出来るんだ。この世界の調和を壊さなけりゃ問題なかるう！現代日本では難しかった、誰にも干渉されない自給自足生活ってのも面白い！異世界へ島流し？上等じゃないか。ロビンソン・クルーソー気取ってやんよ！）

自営業という環境から、幼い頃から労働力としてこき使われ、いつの間にかクラスの何とか委員とかを押しつけられたり、拳句、勝手に生徒会長として推薦されたり、適当にやってたはずの部活の部

長をやらされたりと、不本意にもしがらみに縛られて走り回っていた過去が浮かんでくる。

ちなみに成人してからは、町内会の役職やら、祭りの神事係やら、消防団の幹部やらを歴代最年少で任命され、周囲に怒鳴られながら必死でこなしていた。

「ふふふふふふ……。そうだ！今、この時、この場所！俺は真の自由を得たんだ！フリーーーーーーダムウウウーーーーー！」

。。
全てから解放された男がヤケクソ気味な雄叫びをあげた……。

野宿の夜？（後書き）

ようやくスタートラインに立ったような気がします。

はじまりの朝

色々つぶつきれた直時は、その辺で採れた果実と煎りドングリという簡単な朝食を済ませたあと、早速ファイアへと教えを請う。

「元の世界じゃ普通の一般人だったんで、この世界の平民が身につけているレベルの習慣と一般常識、日常生活に使う魔術を教えてください」

「わかったわ。でも一からだと時間掛かるから、辛いだろっけどまた魔術使うよ？」

「・・・それって言葉覚えるのに使ったやつ？」
昨日の苦痛を思い出し、顔色が悪くなる。

「そう！（ニッコリ）」

「うっう・・・。。優しくお願いします」

「任せなさいっ。じゃあいくよ！」

我が知の欠片 汝の知となり肉と為さん！」

それぞれの頭上に魔法陣が顕われる。直時は、次に来るだろう情報奔流と激しい頭痛に身体を強張らせる。

「転写！」

「っ！」

心構えがあつたため、脂汗にまみれながらも無言で耐える。

「今回は頑張ったわね。鼻血は出てるけど」

「はあっはあっはあっ。とりあえず顔洗ってくる」

覚束ない足取りで泉へと向かう。

「ファイア。知識の伝授ありがとう」

「美味しいお酒貰ったしね。これくらいは対価として当然よ。

「じゃあ、簡単な魔術の実践をしてみましよう。知ってるのと使えるってのが全然違うことだってのは、どんな知識でも同じだからね。まずは、火の術式。着火の術式を行使してみましよう」

「お手本よと、人差し指の先に火を出すための魔法陣を編む。さっきまでならただの模様には見えなかつただろうが、今は魔法陣の意味も構成も理解できる。」

頷いた直時は魔法陣を編もうとして、そのまま止まる。

「どうしたの？魔法陣を編んでしまえば、魔術に必要な魔力が自動的に吸い上げられるから簡単でしょ？」

苛立たしげに睨む。

「魔法陣を編むのにも魔力いるよね？」

「魔法陣自体にはほとんど消費しないでしょ？」

「………魔力ってどうやって出すの？」

「………そこから……。そう言えば魔法のない世界だつて言ってたわね。私達が無意識にできることも、意識的にしないといけないのかあ」

溜息を吐くファイアに申し訳なさそうに頭を下げる。

ファイアがイメージを伝えるも、もともとその感覚がわからないの

で、直時の魔術実践訓練は苦戦する。

「もしかして魔力を認識出来てない？」

「全くもってわかりません」

「ヒビノから感じる力もすごく大きい力だけど魔力とは違うし、それも関係してるのかもしれないわね。力の自覚はできてる？」

「全然。メイヴアーユ様からもそんなこと言われてたけど、自分にそんな力があることすら信じられないよ」

「これは先ず魔力を体感してもらわないといけないよね・・・その前に感覚を上昇させる魔術をかけるわね。」

視えざるを視 聞こえぬを聞き 触れ得ぬものに触れよ

探知強化！」

(ほほう。これはもらった魔術知識の中には無かったなあ。ふむふむ。この魔力回路がこうなって、五感だけじゃなく第六感的な感覚まで増幅されるのかあ。憶えておこうっと)

転写された魔術の基礎知識を活用しつつ、頭上の魔法陣を興味深げに観察する。

魔法陣が消えるとともに、直時の五感が跳ね上がる。視界は超高画質、超望遠、高速オートフォーカス付き。聞こえる周囲の音も大きく、種類も格段に増えたことから可聴域も広がったようだ。風が運ぶ匂いも噓せ返るほど。肌をなぶる風の筋、着衣の繊維の一本一本さえ判る。心臓の大きな鼓動や流れる血潮、肺が吸い込む空気の音まで全てが鮮明である。押し寄せる五感の情報も認識力ごと強化されたため、なんとか判別、分類し、捌くことができる。

「これは凄いね。まるで世界が広がったみたいに感じるよ」

「ここからが本番よ。今からヒビノに魔力をぶつけるわ。安心して、

変換前の魔力は特性を持たないから攻撃魔術を受けるのとは違うから。兎に角魔力を感じて欲しいの」

「わかった。感じられるよう集中する」

五感以外で感じられるものに集中しようと、あえて意識を五感から逸らす。

（視ているようで視ない、聞こえる音はBGM、匂いはスルー、身体にはなーんも触れてない、その他に感じるもの、感じるもの……）

傍から見ると、眼を半眼にしてぬぼーっ涎を垂らしそうである。

ファイアは自身が内包する魔力をかざした右手へと集める。術を使用するわけではないし、本来の使い方ではないため、慎重に制御する。身体の中央から腕を通り、掌へ流していく。そして、放出。イメージを補強するため、あえて軽く手を突き出す。

直時が最初感じたのは『風』だった。その後、実体がかめないのに密度だけが風を纏って迫ってくる感覚。風の精霊術を自在に使いこなすが故に、極僅かながらその魔力が風の精霊によって変換されてしまったようだ。

そして、その密度の塊が肌に触れ身体を通り抜けてこうとする瞬間、直時の内部の何かと衝突し弾き返された。

「えっ？」

放出したはずの魔力が逆流する。自分のイメージと反する現象に無意識で防衛体制をとってしまう。ファイアを中心とした周囲に逆巻く風の壁が唸りをあげ、直時を弾き飛ばす。

「しまったっ！」

慌てて精霊達を宥めて、術をキャンセル。5メートル以上飛んで、

仰向けに倒れている直時へ駆け寄る。焦るファイアが怪我の有無を確かめようと膝を着いたそのとき、半眼だった眼が開き。唇が笑いに歪む。

「なるほど。この感じが魔力か」

はじまりの朝（後書き）

やっと一歩を踏み出したところです

はじまりの朝？

ファイアの魔力が自分の中の何かとぶつかった瞬間。直時は力の流れを感じ取った。それは背骨に沿って緩い螺旋を描きながら流れていた。血が心臓に押し出され、身体の隅々まで血管を巡っていくように、螺旋から放たれた力が体中に行き渡っている。

（これがそうか！なんだろう？重くて軽い？風のような水のような・・・でも、ぶつかってきた力とはなんか違う・・・。色？重さ？匂い？）

未知の感覚に、どうしても既存の感覚で捉えようとして混乱する。

（ファイアの魔力。あれにイメージを合わせる！もっとこう・・・なんかこうで、ちょっとこんな感じで・・・）

集中するあまり、吹き飛んだことも地面を転げたことも、打撲や裂傷、擦過傷の痛みも気付かない。

（これだ！そうっ！こんな感じ！これ魔力に変換できたんじゃないか？）
ファイアに向けた眼を向けるその顔には、湧き上がる達成感が溢れている。

倒れていた直時が心配するファイアの様子を気にする風もなく立ち上がる。

「今度こそ見ててくれよ！」
眼の前に人差し指をかざし、集中する。描き出される魔法陣。

(正確な魔法陣。必要な魔力。呪文は言霊。現象への道標。要はイメージの固定！)

「ライター」

シユボツ。

小さな音を発して、指先に小さな火が立ち昇る。

「おっしやーっ！」

反対の腕を軽く曲げ拳を握る。どんなもんだと満面のドヤ顔でフイアを見る。

「ふふっ。おめでとう。」

苦笑気味なのは、基本も基本、初歩の初歩である術を成功させただけだからである。

「ありがとう！これで俺も魔術師の仲間入りか！ふっふっふっ」
直時は子供のように興奮している。確かに使えた呪文は子供レベルだった。

「で、あの呪文はなんなの？」

「あー、あれは俺がイメージしやすいから。魔術は無いけど、似たようなことができる道具があるからね。ちょっと待って」

直時がポケットから百円ライターを取り出し、火を点ける。

「こんな感じ。この道具の名前が『ライター』って言うんだ」

「ほんとに魔力いらすなんだねえ。小さいのに細かく造り込まれているのね。火の出る下のところは赤く透きとおってて綺麗ね」

着火の術式自体が簡単すぎるため、機能自体に驚きがないファイアだが、部品の精密さや、赤い半透明のプラスチックとその中の液体ガスが揺れている美しさに興味が湧いたようだ。

直時から受け取ったライターを眺めまわしては、火を点けている。

「それにしても……。確かに魔力に変換出来たみたいなのに、直時の力の量は変わらないみたいね」

ライターを返して、あきれたように言う。

「え？そりゃ、簡単な魔術だからじゃないの？」

初歩の魔術だとは理解していたようである。

「消費したのはほんの少しなだけどね。今のヒビノからは大きな魔力と大きな謎の力の両方を感じるのよ」

「確か魔力に変換した分は少しだけだったはずだけど……。残ってる魔力、そんなに多い？」

「エルフである私と同じくらいの魔力量よ。普人族じゃ考えられない量ね」

「ふうん。ちなみに普人族と比較すると？」

「宮廷魔術師三〇人分くらい」

「……。拙いよね？」

「間違いなく目立つわね」

直時は、人魔術の知識を脳裏で検索するが、魔力を隠す術が見当たらない。

「……。魔力を隠すような魔術を教えてください」

「高等魔術で教えるのは気が引けるのだけど、こればかりは仕方ないわね。でも、その前に治療しましょ？」

「つつつづあー！」

漸く痛みを自覚した直時が奇妙な悲鳴をあげた。

「初歩の治療術はヒビノにも教えてあるけど、結構酷い傷だから精霊術で治してあげるわね」

「ううう……。お願いじまず……」

頭を切ったのかこめかみからは血が流れ、顔にも擦り傷切り傷、両膝と右肘はも服が破れて血が滲んでいる。服の下は見えないが、あちこち打撲による内出血がみられた。満身創痍である。

「精霊たち、彼に癒しを……」

(これは……。子供？笑い声？)

周囲に集まった風と水の精霊達が、ファイアの魔力を現象へと変換する。熱を持った傷が、ひんやりと心地よい冷たさに包まれる。

直時はキョロキョロと辺りを見回し、何かを眼で追っているようだ。

「っ！」

傷が塞がっていくのを見守っていたファイアであったが、突然激しく咽ながら蹲る直時に仰天して走り寄る。

「どうしたのっ？」

異世界人ということ、何か不都合な事態でも起きたのかと焦る。咳き込む背をさすると、直時は小さな金属片をいくつも吐きだしていた。

「あー、吃驚したあ。治療って全身してくれるんだね」
涙目で笑いかける。

「え？そうだけど、どっか苦しかったんじゃない？」

「大丈夫。でも、まさか歯の治療までしてくれるとは思わなかったよ。元の世界の治療で使った詰め物やら被せた物やらが口の中を跳ねまわってねー。気管に入って咽た」

元の世界では、歯の治療には激痛が伴って、患部を削り取るだけだったので、涙目ながらも真っ白な自前の歯が復活したことに上機嫌である。

「ほんとありがとう！傷が跡形もないし、痛みも消えた。すげーわ、魔術！いや、今のは精霊術だったっけ？」

「どういたしまして。でも吃驚したわよ、もう！」

「ごめんよー。あ、君達もありがとねー」

周囲に感謝の言葉を掛ける。笑顔で誰かに手を振る直時に、ファイアが息を呑む。

「ねえ。もしかして精霊が見えてる？」

「半透明なヒラヒラした虫の羽根みたいなの？あ、フワフワした水滴みたいなのも？」

「………見えてるんだ」

「あ！あれが精霊かあ。なーんか小さな子供が笑ってるみたいだね」

「………声も聞こえるんだ。しかも好意まで持たれてるっばい」

「はっはっは。敵意を持たずに誠実に接すれば好意を持たれるものさ」

難しい顔で考え込むファイアに、何の事かも分らないまま適当な（俺良いこと言ったる？的なこと）を言う。

「魔術も覚えたことだし、これからどうするの？」

ファイアが直時に問う。

「そつだなあ・・・」

昨夜考えていたことをぼつぼつと話し出す。

「住みやすそうな町を見つけて、その町からちよつと離れたところに居を構えてゆっくりまったり過ごそうかなと思ってる。人付き合いは極力避けた方が良さだろうし、のんびり生きるならひとりの方が気楽だしね。後はちっこい家庭菜園でも作って、自給自足でもするかなあ。んで、時々旅に出て各地を観光！」

「・・・えらく暢気な生活を目指してるのね」

「せかせかしないでゆったりスローライフ！最高じゃん！元の世界じゃ予定の間に臨時を捻じ込んで、睡眠時間削ってた生活だったもんな」

遠くを見るように眼を細める。

「まあ、そんな生活も元手が無ければ始められないだろうし、まずは資金を稼ごうと思う」

急に現実的なことを言い、うーん、と唸りながら知識の脳内検索を実行する。

「最初の目的地は南西のマケディウス王国の街道の町『ロッソ』。知識だと、隊商が多くて人の出入りが激しくて、普人族だけじゃなく、他種族も利用する町みたいだし目立ちにくい。そこで冒険者ギルドに登録して、ちまちまと確実に小金を貯める！」

「じゃあ、ロッソまでは付き合おうわ。目的のある旅でもないしね」
あまりの小市民っぷりに気が抜けたフィアであるが、同行を申し出る。

「ありがとう！本当に助かるよ！旅費貸してね」

「わたしはお財布かつ？」

はじまりの朝？（後書き）

ようやく魔術習得しました。

はじまりの朝？

旅の予定が決まったということ、懸案事項であった『魔力を隠す』魔術を教えてもらうことになった。

「さて、ヒビノの魔力と謎の力を隠す方法だけど、高等魔術に『アスタの闇衣』っていう能力を隠す魔術があるの。この魔術だと確実にヒビノの力を感知できなくなるわ。でも欠点が無くもないの」「触媒に生贄が必要とかじゃないだろうね？」

「この魔術には必要ないわ」「必要な魔術もあるのかよ・・・こえーな」

「経験を積んだ高位魔術師だと、力を隠蔽できていても『魔術で隠している』ことに気付く可能性があるの」

「魔術の存在自体が、不信がられるってこと？」

「そういうこと。冒険者ギルドに出入りするんだったら、他の冒険者に観察されるわ。強さの目安になる魔力量は、商売敵の情報としてもパーティーを集める情報としても知っておきたいだろうしね。まず間違いなくチェックされるわね」

「でもまあ、隠している内容さえバレなければ多少のマークは仕方ないな。それくらいの危険は許容範囲だ」

「仕方ないといえば、そうなのよね。じゃあ行くわよ。」

闇の神アスタの名に於いて 安息の暗き衣よ身を包め」

直時の頭上と足元に魔法陣が展開する。

(上下の魔法陣からの魔術で全身を包むわけか……。魔術回路としては、遮断っていうより攪乱かな？ 知覚を乱れさせて正確な情報を伝えないようにするみたいだな)

ふむふむと頷きながらもしっかりと記憶する。

「闇衣！」

(自分じゃどうなのか判らないな。相変わらず魔力も謎の力も自覚できるんだが)

「よし！これで完璧！魔力量も謎の力も感知できなくなってるよ」

「自分じゃ判らないんだけどね。ありがとう！それで効果はどのくらい続くものなの？」

「十日は大丈夫よ。『転写』しとく？」

「……できれば普通に教えてください」

副作用の頭痛はもうコリゴリのようである。

「じゃあ昼食後にロツソへ出発しましょ」

「了解。『探知強化』で知覚が鋭敏になってるから、なんか獲物でも捕ってくるよ。この術の効果時間は？」

「半日くらいよ。御馳走を期待してるわ」

「期待しないで待ってて」

「じゃあ私はお鍋の準備しておくわ」

泉の方へ歩く直時を見送り、フィアは山菜の採取へと森に向かった。

「憶えた魔術で魚でも捕りますか」

泉へと向かった理由である。弓も槍も持たない直時では、鳥も獣も狩れないから現実的な判断と言えよう。

「どんな魔術が適かなあーっと」

水際に腰を下ろし。脳内検索をかける。

「風で周囲の対象物を集める魔術………ってこれ落ち葉掃除か？持続性のある微風……扇風機だな。土を掘り起こす……園芸用だ。水旋回（弱）……弱ってなんだよ、食器洗い？強は……洗濯用か……強弱は時間設定で切り替え可………知るか！ろくなのが無いな。つーか殆ど家事用の魔術じゃないか。この世界の奴らは手を使わんのか？」

頼んだのが日常生活レベルの魔術であつたことを忘れてもしたのか、文句ばかりである。

「うーん。取水の魔術……水汲みに最適。バケツ一杯分の水を取り出す。この魔術なら魚ごと水汲みしたら捕れるんじゃないかな？」
使う魔術を決定し、水辺に近寄る。

「おっ！魚発見！えーっとこつこつか？」

一時的に上昇している視力ですぐに獲物を見つけ、魔術を実行する。

右手を伸ばし、掌を水底の魚へ向ける。掌の前に編まれる魔法陣。

「給水」

魚を中心として円形に魔力の囲いが出来上がる。直時はそれを手繰り寄せるようにイメージする。

水面から、まるで透明な金魚鉢に入ったかのように、魚と水底の一部が水面から飛び出してくる。

「おっし！昼御飯ゲットだぜ！」

嬉しそうに手元へと移動させ始めるが、突然水球は弾けて水面へと落ちていく。もちろん昼御飯は逃げて行った。

「えーっ？」

逃げていく魚を目で追いながら、首をひねる。

「なんで弾けちゃったんだ？魔法陣間違えたかな？」

再度魔法陣を編む。

術を行使せず、構築した魔法陣をチェックする。

「おかしいな。もらった知識通りなんだけどなあ？この魔術回路で間違いないよな？つて、あれれ？水限定なのか？

……さっきは水底ごと持ってきたから重量オーバーになったのか。魚だけなら、比重考えたら大丈夫そうだな。原因は砂とか泥も一緒に取り込んだからか……。まあ、砂やら泥やら一緒に水汲みしても使えないから当然か。

しかし、人魔術って魔法陣が全部制御してくれるから楽だけど、応用しにくい代物だな」

人魔術を編み出したのは、もつとも脆弱な人族である普人族である。故に、限られた魔力をいかに効率よく魔術として使用するかに主眼が置かれており、用途用法によって膨大な数の魔法陣を創ったのである。

構成が判らずとも使用すべき魔術の魔法陣の構築とそれに要する魔力、結果である現象を正しくイメージする能力があれば子供でも使える術。それが人魔術であり、それ故普人族以外にも広まっていた魔術である。

欠点としては、効果が魔法陣によって限定されてしまったため応用

が利かず、同じ系統でも複数の魔法陣を憶えないといけないという点である。

例えば火を使う術式であれば、着火の術式（ライターくらいの火種程度）、加熱の術式（主に煮炊き用、火力調整は小幅であれば可）、焼原の術式（焼畑、野焼き等、屋外での広範囲低火力）、焦熱の術式（鍛冶屋での使用）他多数、それぞれ違う魔法陣が必要になる。

使用する魔術の性能を理解した直時は再度昼御飯の捕獲を試みる。探知の術式の助けもあり、早々に6匹（ひとり3匹くらいとの判断から）の捕獲に成功した直時は、魚の口からエラへと蔓草を通しひとまとめにして野営地へと帰るのであった。

はじまりの朝？（後書き）

直時は魚を6匹手に入れた。

出発

風廊の森の中。街道から小一時間ほど奥まった場所で、昼餉を囲む二人の姿があった。

ひとりは黒髪黒瞳の小柄な男性。現代日本では手抜きと呼ばれかねない、カゴパン、パーカー姿である。両膝、両肘に穴が空いているのは、彼の過ごした激しい一日を物語っているようである。

もうひとりは金髪翠瞳の細身の女性。大きく尖った耳はエルフである。食事中のため、革の軽鎧とローブは荷物と一緒に置かれている。透きとおるような白膚。色素の少ない金髪は、身体の線の細さと相まって儂げな印象を与える・・・はずである。

直時とフィアは食事中であった。フィア特製山菜鍋と、直時が捕獲した魚の塩焼きがメニューである。鍋は例によって塩味であるが、淡泊な味付け故に飽きがこない美味であった。魚は内臓を取り、開いた腹に塩揉みした香草を詰め、軽く岩塩を振って小枝に刺して炙っただけだった。こちらも素朴ではあったが、上等な野外料理といえた。

「はぐつ。あちちちち！ほふつほふつ。あ、骨が挟まった」

豪快に齧り付いているのは誰であろうフィアであった。今は指を口腔に突っ込んで魚の小骨と格闘中である。

「いやまあ、あの飲みっぷりから想像はできるんだけど・・・。なんかこう納得いかない。ファンタジーなのに・・・。あんなに綺麗なのに・・・」

ちよつぴり心の中の憧れのようなものが穢された気がする直時だった。

「さて、腹ごなしも済んだことだし！旅の前の持ち物チェックです！」

野営の片付けを済ませた段階でフィアが直時へと宣言する。

「あーっと、了解。先に言っておくけど、俺は近所で買い物した帰りだからね？それと、お酒はあれで終わりだからね？」

「ちっ！もう無いのか・・・。まあそれはさておき、ヒビノは旅で必要最低限の装備は何もなし？」

「うい、まどまーぜる」

「意味わかんないし！はい！全部出して！」

フィアの命令に鞆とポケットの中身を並べ出す。

まずは文庫本が新規と古本合わせて一七冊、新書三冊、漫画二一冊。結構な量である。鞆のサイドポケットに入っていたA5判の手帳（中身は住所録以外何も書いてない）三色ボールペン、黒ボールペン各一本。ポケットタオル1枚。ポケットティッシュ三個。銀製火皿と吸い口、黒漆桜絵の煙管（中型）一本。煙管用刻み煙草が二種類各三個。百円ライター二個（燃料部プラスチックが赤と青）。マッチ一箱。携帯電話一個。サングラス一個（自転車の風除け用）。茶革の財布と日本円三万二千852円。何の役にも立たないカードと名刺とポイントカード数枚。

「これと、そこにある自転車で全部」

立てかけてある折りたたみ自転車を指さす。（水筒代りに空のワインペットボトルを使おうとしたら、フィアに所有権を宣言された）

「使い方とか全く判らないのとかあるけど、とりあえず旅に必要なものは何も無いってのは分ったわ。あと、ヒビノって学者？本の量がすごいんだけど」

フィアにとつては謎アイテムに興味を惹かれつつも、必要な装備は無しと断じる。その上で、この世界にはない綺麗に印刷された本の山を指さした。

「本は全部娯楽だよ。お伽噺とか絵本みたいなものかな？学術書とか全然ないからね」

(役に立ちそうなものがなーんもないな)

開き直って言う直時。

「小物とか本とかの異世界アイテムは追々説明してもらおうとして、その手押し車はなんなの？車輪が前後二個とか、不安定過ぎるんじゃない？」

「そうかあ。ずっと押してたから使い方解からないか。これは乗り物だよ。こんな風にね」

愛車に跨りペダルを踏む。路面が不安定なため、軽快にはいかないまでもそれなりの速度で走りだす。

「おおお！馬要らずの個人馬車？すごいすごい！」
目を見張るフィアに、得意になった直時。

「こんなことも出来るぞ」
鼻高々で重心を後ろにかけ、前輪を浮かす。いわゆるウィリーである。

ドガツシャン！

調子に乗ったのも束の間、すぐに木の根に後輪を取られてひっく

り返ってしまつ。ここは整地されている日本では無いのを忘れた報いである。

「あたたたた・・・」

旅に出る前に躓いた直時であつた。

「結論から言います。ヒビノの旅の装備はゼロです。私の装備を利用させてあげるので、感謝して尊敬して恩に着るようになさい」

「・・・宜しく願ひします。くうっ！」

直時が何も言い返せない悔しさに涙目になる。残念な美人エルフめ！とは心の声である。

「ここら辺からだとロツソまで歩いて二週間にかかるか・・・。長い間ご迷惑かけまふ」

やっぱり涙目である。

「よろしい！じゃあ、旅の間ゆっくりと二ホンってとこの話を聞かせてもらつからね」

「それはお互い様ってことで・・・では？」

「うん！しゅっぱーっっ！」

異世界人と吟遊詩人の旅がとりあえずはじまつた。

力の限り愛車のペダルを踏む直時。息を荒げつつ、かつて無い速度を叩き出す。アスファルトのないただ踏み固められただけの地道。そこを走る折りたたみ自転車は3980円とは思えない速さだ。

「うわちゃああああああ！」

横を掠める火球。速度の源は直時の生存本能だった。

「まーだ追ってくるわねえ。頑張るなあ」

暢気な声はファイアだ。

風の精霊術で飛ぶように駆けるファイアは、時折足を地につける程度である。背後からの火球は全て風で逸らされている。

「ちよっ！強盗ですかっ？盗賊ですかっ？神様が治める世界なのに治安悪いんじゃないんですかあああああああああ！」

矢が耳元を掠める音に堪えて叫ぶ直時。

「あきらめが悪いわね。喰らいなさい」

ファイアから身の丈の倍程の竜巻が五つ背後の盗賊達へと向かう。

「避けっ！ぎゃあああああっ！」

弾き飛ばされる盗賊達。

しばらく距離を稼いだ後、チアノーゼ状態の直時とケロリとした顔のファイアが立ち止まる。

「まったく！普人族って野蛮人が多いんだから！」

命を狙われたにしては、ちよこつと怒っているだけであるファイア。直時はハンドルに頭を凭れさせたまま、荒い息をついている。

「はあっ。はあっ。はあっ……ふうー……」

何とか呼吸を取り戻す。

「ファイア」

「ん？」

「これって普通？」

「これって？」

「あのっ！盗賊とかつ！攻撃魔法とかつ！」

「旅してたら当たり前よ？」

太い眉毛の間に深い皺を刻み、こめかみを揉む直時。

「この世界の一般常識にこんな危険なこと入って無かつたんですが？」

「生存競争なんて、一般常識以前の事でしょ？」

「犯罪は生存競争じゃねえー！っ！」

「食べるための争いなんだからその範囲に入るんじゃない？」

直時にとつてはびっくり理論が展開される。

（ちょっと待て！ここつてこんなぶっそうな世界なのか？俺はここであつたり生活なんて本当にできるのか？自己防衛のために要塞が必要なんじゃないか？重機関銃と迫撃砲と対地对空ミサイルと戦車を要求するうっうっうっうっうっ！）

激しく後悔と混乱の嵐である。

「神の教えは？神霊の導きは？精霊の愛は？」

「ん？世界を拓け？命を燃やせ？傍にいるから頑張れ？」

「慈悲がねえー！ー！ー！」

「自己の努力があたりまえじゃない？」

（おいおいおい！異世界人の俺には釘刺しておいて、自分らの子は自由奔放なのかよ！）

直時はあまりの理不尽にこの世界に喧嘩売りたくなってしまふ。

旅に出た初日、盗賊の襲撃を五度逃げ延びた二人は漸くゆつくりと歩む。

「なあ？転写の一般常識じゃあ、争い事って種族のテリトリーとか習慣とか侵さなければあんまり無いってなってるんだけど？」

「ああ。普人族以外はそんな感じかしらね。普人族だけは自分たちの国創ってはお互いつぶし合ったりしてるからね。たまに他種族に喧嘩売って大戦争とかもあるよ」

「………なんで？そこらへん一般常識に入ってるんですけど？」

普人族は直時にとつても同じ種族（異世界人だけ）らしいから、詳しく聞いておきたいところである。

「んー。これはエルフである私の主観が入っちゃうから詳しく転写したくなかったのかもね……。普人族は人族としては最後に生まれた種族ってのは解かってるよね？」

直時は頷く。

神人族、魔人族、竜人族、妖精族、獣人族等、先に生まれた人族は大きな魔力、強い生命力、特殊な力等を持っていた。較べて普人族は個体として極めて脆弱な存在だった。弱いが故に群れを成し、その群れを統率するのは強烈な欲望をもった者、しかしいくらでも替えが利くほど種族で頭角を成すための欲望を持つものは多かった。

普く（あまねく）ある人族。彼等の個々の力は弱いが、その欲望繁殖力（混血を成す力を含める）、群としての力はすさまじいものがあった。

現在のアースフィアにおいて各種族が己が定める住処を固守すれども拡張しないのに対して、普人族は常に拡散拡張増殖を求め、戦

い、血を流している。過去においては、普人族と他種族の戦が多々あったが、種族の個体能力と神々の干渉、そしてなにより普人族の欲望の強さによって殲滅戦は回避されてきた。

普人族が開発した人魔術はその使い勝手の良さが災いし、他種族にも簡単に習得された経緯もある。

そのはけ口として普人族はこの大地において多数派となった同族に牙を剥いたのである。

現在、国同士の戦争は小競り合いを除けば普人族同士のそれに限られているのだ。

「俺、普人族じゃない種族に入れてもらえないかな？」
平穏安穩まつたりゆつくりを旨とする直時の本音である。

「……他種族には嫌われてるから無理ね」
「バツサリ斬られた！ファイってエルフだよね？やっぱ嫌ってるってこと？」

「種族間戦争は過去の話だけど、今でも売られたり、殺されたりとかあるからね」

言葉を濁す。出会って短くはあるが、初めて見る暗い表情である。

「なんか町に行きたくなってきたな……」
同じくどんよりした直時。

突然ファイが前方にきつい眼を向ける。

「どっした？」

「風が教えてきた。誰かが襲われてるっ！」
慌てる直時が眼を向ける。街道の遥か先に炎が閃く。

「行くよ！」

弾かれたように飛び出すフィア。精霊術を使っているのだろう、あつという間に直時の視界から小さくなっていく。

「くっ！急がなきゃ！」

ペダルに力を込めるも先行するフィアとの差は広がるばかり。

「俺にも力を貸してくれっ！風の精霊達っ！」

そう。風廊の森で見えていた。半透明のトンボの羽のような存在。フィアの手助けをする彼らに直時の声が届く。

精霊たちの明るい笑い声とともに、直時の乗る自転車は加速した。

宙を翔るフィアは見た。

空気を切り裂き自分を置き去りにしていく直時を。

出発（後書き）

原稿ファイルが行方不明になってしまいました。うる覚えでアップ
（r y

盗賊と死と

戦争による荒廃で、治安悪化が続く普人族の国々。群をなした彼等は強い。だが、群をなしたがために個の想いは殺され、群の意思に従う。

普人族は奪う。自分より弱い者達から。食料を、富を、そして命を。

民は流れる。酷使され、搾取され、絶望の一步手前、一縷の希望に縋り。

僅かな財産と大事な家族を引き連れて、少しでもマシな領主、少しでも勇敢な衛士、少しでも賢い王を求めて。

そんな彼等ではあるが、群の中でこそ小なりといえ守られていた部分もあった。

群なす生き物が、群を離れる。それを狙うのは捕食者の本能とも言えた。

ただ、捕食者は食い殺すべき獲物と同族であった。

現場に向かって銀の弾丸が疾る。異世界製折りたたみ自転車は、風の精霊の加速を受け砂塵を巻き上げる。

「助けてくれるのは有難いっ！有難いんだけどっ！もうちょっと手

加減してえーっ！」

直時は高速走行する自転車を操るのに必死である。

先行したフィアを追い抜いてしまったが、自身が精霊術を行使したとは微塵も考えておらず、フィアの精霊術にのっかったとは思っていない。

「あれか！」

無蓋の荷馬車が横転し、十人前後の盗賊達が走り回っている。

直時の死角になっている馬車の陰から聞こえる子供の泣き声。声に向かってハンドルを切る。

金属の鎧を纏った体格の良い（直時より頭一つ分背が高く、肩幅もある）男が、重そうな両刃の剣をゆっくり振り上げている。下卑た笑いは、相手が恐怖し泣き叫んでいるのを楽しんでいるのだ。

男に向かって突っ込む直時は、ブレーキをかけ、自転車を横倒しに滑らせた。完全に転倒しきらないよう、片足で地面を削りながら滑りこむ。

「なにっ？」

後輪が男の足元を薙ぎ払い、弾き飛ばす。地面を滑る自転車から飛び降りた直時は、涙と埃でぐしゃぐしゃの顔をした子供へ駆け寄る。

「大丈夫かつ！怪我してないかつ？」

五歳くらいの男の子を二、三歳程の女の子が抱きしめ、庇っている。

傷を負っていない様子に安心するが、傍らの血溜りに倒れ伏す女性に息を詰まらせる。

「この糞餓鬼があつ・・・」

倒れていた盗賊が満面を怒りに染めて立ち上がる。直時に気付いた何人かの男達も集まってくる。他は荷の略奪に夢中だ。

最初警戒の色を見せたものの、直時の体格に余裕を取り戻したのか、周囲の仲間たちはにやにやと笑っている。

「巫山戯たマネしやがって！なぶり殺してやるよ！」

怒りつつも、余裕を取り戻し右手の剣を肩へ担ぎ上げる。

隙だらけであるが、それも当然だろう。直時は見ての通り丸腰である。体格も貧弱で、童顔である。魔力を低く見せかけてもいる。

「覚悟はいいか、糞餓鬼。楽に死ねると思うなよ？」

恐怖を煽るためだろう、血の着いた剣をこれ見よがしに向ける。

あまりの惨劇に硬直していた直時だったが、盗賊達の顔を見て表情を無くしていく。

（嬉しそうにしゃがって・・・コイツらは・・・コイツラも、人を蹴るのが好きな奴らなんだ・・・あー・・・ム力つくム力つくム力つくっ！）

無表情な裏で、怒りは極限まで高まっていた。頭の芯がキリキリと痛む。

（吠え面かせてやつからな！）

周囲を素早く見渡す直時を、盗賊達は怯えと思つて一層笑いを高くする。

「おらあ！」

大きく振りかぶつた剣が振り下ろされる。

(そんな重そうな剣の大振りなんか当たるかよ)

冷静に見切りつつも、ギリギリまで待つて転げながら避ける。荒い息使いは余裕がなさそうな演技だ。

笑いながらも斬りかかるのは一人だけで、他はこの一方的な殺しを見物する気のようにだ。

横薙ぎの剣を大きく後ろに飛んで躲す。返す払いはわざと掠らせる。千切れる服と一筋の傷。大袈裟に傷を手で庇う。

「ちょこまか逃げやがって！これでどうだ！」

初撃より早めの袈裟切り。盗賊の右手側へと逃げた直時をバックハンドの剣が追う。

(ここだ！)

躓いたかのように逆に前に出る直時。間合いが近過ぎ、剣ではなく手甲に守られた前腕に薙ぎ払われる。

崩れた積荷の横でよろめきつつ立ち上がる姿に、止めを刺すつもりになったのか殺気を漲らせて近寄る盗賊。

(武器はない。攻撃魔術も無い。でもそろそろ援軍が来る！その前に一矢報いる！)

「そろそろ死ね！」

上体を反らして貯めた力を全て右手の剣に乗せて振り下ろす。直時はギリギリまで待たずに男の横に素早く近寄る。

今迄にない素早い身ごなしに驚く盗賊の右膝へ、自身の右足の裏を軽く当てる。

直時は一瞬の溜めのあと、渾身の力を込めて関節を蹴り抜く。

嫌な音と共に地面に倒れ込む男は、信じられないような眼で直時と有り得ない方角に曲った自分の脚を見る。

「ぎゃあああつ！」

仲間の悲鳴にも何が起こったか把握できていない盗賊たちに向け、直時が魔術を行使する。

「風よ 吹き散らせ

送風」

弱くは無いが、強くもない風が盗賊たちへ吹きつける。目潰しのつもりか、積荷からこぼれていた穀物を挽いた粉を空中へ撒き散らしている。

（上手くいってくれよ！）

新たな魔方陣を編む。

「ライター」

盗賊たちを包む粉煙が、閃光と炎に変わる。

眼を押さえ、悲鳴をあげる男達。髪や衣服に燃え移った火を消そうと転げまわる者もいる。

可燃物の粉塵と空気が適度に混ざり合っている状態で静電気などで着火することにより起こる粉塵爆発である。坑道や屋内で起こることが多いのであるが、直時が狙ったのはこれであった。

（チャンスは今しか無い！）

脚を蹴り折った男の剣を拾い、のたうつ盗賊たちへ駆け寄る。

躊躇う直時の脳裏に先程までの、残忍で下卑た笑いを放つ男達の顔が甦る。

チラリと子供達の無事を確かめ、顔を顰めながら盗賊達の脚へと剣を叩きつけて回る。

膝や脛、足首を折られた男達の呻きを後に、残りの敵を探す。

「危ないーっ！」

追いついたフィアの叫びに、ついそちらを向いてしまう。

直時は突然の背後からの衝撃につんのめってしまう。左肩に痛みと冷気を感じて首を捻る。周囲に音をたてながら1メートル程もある氷柱が刺さる。咄嗟に前方フィアの方へと走りだすが、すぐに左脚に刺さる氷柱のため転げてしまう。

急ぐフィアの目前で直時が倒れ伏す。彼の後方からは三人の男が魔方阵を展開し、氷槍の攻撃魔術を放っている。

(間合いに入った！)

標準的な人魔術の遠距離攻撃より遙か遠いが、ファイアの精霊術にとつては射程距離内だ。

「風の精霊よ 汝は我が刃 切り裂けっ！」

ファイアの命令に精霊たちが彼女の魔力を巨大なカマイタチにして放つ。

千切れ飛ぶ男達を一瞥し、周囲に探知の風を飛ばし警戒しつつ直時へ駆け寄る。

「生きてるっ？すぐに治癒するから！」

ファイアの声によるめきつつ立ち上がる。

「ちょっと！動かないでっ！」

直時は右手を上げて怒声を押さえ、無言で視線を一点に向ける。

くすんだ金髪を癖だろっあちこち跳ねさせた五歳くらいの男の子。明るい赤茶色の髪を肩口で切りそろえた十代前半だろっ女の子。その傍らにうつ伏せに倒れていた母親であるっ女性。

抱き合っていた姉弟にも、氷柱は容赦なく降り注いでいた。

左腕を力無く垂らし、左足を引き摺って幼い亡骸の傍に膝を付く。

「ファイア、この子達の身体、綺麗にしてやってくれないかな？」

無言で付いてきた背後のファイアを見ずに言う。

氷の槍は女の子の喉を裂き、庇った男の子ごと背中を突き抜いて

いた。

「命の灯が消えた身体に治癒は効かないの」
精霊術も魔術も万能ではない。

痛ましそうな声は幼子に向けたものか、それとも頂垂れる異世界人へか。

「そうか・・・」

左肩を押さえていた右手で彼等の臉をそつと閉じる。直時の血が着いてしまい、それを袖口で拭う。

周囲の静寂を呻きが破る。盗賊達の中に生き残りがいるようだ。

苦鳴を漏らしていた男は一人だけ。他はもう息をしていない。

「痛え・・・。うう・・・」

男の右膝は直時に叩き折られ、左の太腿には仲間の放った氷の槍が刺さっている。

何かを引き摺りながら近寄る音に、呻きながら視線を向ける。先には、無表情で剣を杖替わりに歩み寄る小柄な黒髪の男がいた。

「ひいっ！」

引き攣れた悲鳴を上げて逃げようとするが、脚が動かない。両手を必死に動かして身体を引き摺り、少しでも遠ざかろうとする。

直時は男に向けて、ゆっくりと剣を振りかぶる。盗賊達の卑しい笑いに歪んだ顔と恐怖に震える男の顔が、激しい怒りを呼び起こす。

血溜まりの中の母親と幼い姉弟の死に顔が脳裡を占めた瞬間、憎しみを表情に表し渾身の力で男の頭に剣を振り下ろす。

ザガッ！

振り下ろした剣は、男の頭スレスレの地面に深く刺さった。

「ハヒイー、ハヒイー」

呼吸もままならず、涙と鼻水で盛大に顔を汚し、股間には染みが広がっている。

汚物を見る眼で男を一瞥した直時は、踵を返す。

その瞬間ファイアが近づいた。

「グエツ」

振り返る直時の目の前で、ファイアに刺突剣を喉に突き立てられた男が断末魔の痙攣を硬直に変え、血泡を吹いている。

直時は、眼を見開き驚愕していたが、血を振り払った刃を澄んだ音を立てて納刀したファイアを見て溜息をつき苦笑いで問いかける。

「これがこの世界か？」

「これがこの世界よ」

直時の躊躇いを断ち切るように、強くはつきりと美しい声で応えた。

盗賊と死と（後書き）

初めての戦闘です。精霊術まで気が回りませんでした。

精霊の声

盗賊の襲撃。惨劇の痕。横たわる襲撃者と被害者の屍。

ファイアによる治癒の後、直時は血臭の中を歩く。

幼い姉弟と母であろう亡骸。そこかしこに苦悶のまま息絶えた盗賊。全身をナマス斬りにされていた父親であろう男性も見つけた。そして、ファイアのカマイタチで細切れになった男達。

「野の骸はそのままにしておくのが通例よ。次の命を育む糧になるから」

辺りの様子を把握しただろう直時へと戒める。

「これをケジメにするから……。だからこの家族は俺が葬る」
ファイアの謂わんとすることは理解できたが、それを飲み込むために何かが必要だった。それが例え自己満足であつたとしても……。

否。直時がこの世界でこれから生きるためにこそ、それが必要だった。

直時は盗賊の持ち物だった幅広い両刃の剣をスコップ替りに黙々と地面を穿つ。

汗まみれの直時は荒い息をつくだけだ。ファイアも何も語らない。

墓穴は大きく、広く、そして深く掘った。子供達を真ん中に、両親が挟むように。家族が一緒であるように。直時の勝手な自己満足・

・願いだった。

街道の傍らの草原に大きな土の山が出来上がる。墓石のつもりの大きな石を安置する。石の横に積荷から少々の食べ物と子供達のものであるう髪飾りと竜の人形を供える。盗賊たちの腰から水筒を集めて戻ると、フィアが小さな花束を並べていた。

「この世界でも死者に花を贈るんだな」
少しだけ目元を緩める直時。

「生者も死者もないわ。愛しい人には等しくね」
「ありがとう」

「礼を言われる義理はないわよ」
「そうか」
直時は、気恥ずかしげなフィアに心の中でもう一度礼を言う。

集めた水筒の水を墓石に注いで、眼を瞑り両手を合わせる。弔いの言葉は無い。

「じゃあ、行くか」
合掌を解いてフィアに言う。

「次の町で服買わないとね。ポロポロよ?」
穴だらけの上、血で汚れてもいる直時の格好におどけてみせる。

「お?服をプレゼントしてくれる?」

「代金はまとめて返してもらっけどね」

「………けちんぼ」

意図的な軽いやり取りをしながら、フィアの勧めで必要な装備を盗賊から、ある程度の食料を荷馬車から集める。

残った水筒と保存食、毛布を一枚。護身用の武器として中型の槍（約1・8メートル）を失敬する。荷物は自転車のフレームに括りつけ、槍は革紐で背に斜めがけする。

あまりにも軽装な直時に盗賊の鎧を剥がすようフィアが言うが、何故か頷かない。

「重い鎧なんて動けなくなるし、攻撃魔術だって防げなさそうじゃないか」

戦いの素人を自覚する発言にも一理ある。

本音としては死者の衣を剥ぎ取るのがどうにも嫌だっただけであるが。

その割に、路銀だけはせつせと集めて全部をフィアに渡していたりする。直時の道徳観とか倫理観が掴みにくいと感じるのはフィアだけではなさそうである。

「これだけあれば、ヒビノの立て替え分はチャラにしてあげるわ
お墨付きもいただいたようで一安心した直時であった。

「色々あって疲れちゃったから、次の町まで精霊の力を借りるわよ
後ろから押してもらおうわけね」

「そう。街道沿いだと目立っちゃうから、ちよつと外れるわよ」

「了解。んじゃ風の精霊さんへ宜しくお願いします」

頼り切った発言に、直時の顔を凝視する。

「なに？」

「精霊術使ったの憶えてない？」

「………ファイアが？」

「ヒビノが！よ」

「さっきのはファイアのついでにお願い聞いてくれただけじゃね？」

少し迷いつつも、決心をするファイア。

「精霊術はね。適性があるの」

「ほっ」

「まず精霊が見えること。そして、精霊と話せること。単純だけれど、出来る人は少ないの。ヒビノは見えたって言ってたわよね？」

「この子達のことか？」

問いながら右手を空中に差し出す。

直時の掌には笑いながら半透明の昆虫の羽のような存在が集まってくる。呆れ顔のファイアが続ける。

「そう。そして貴方の言葉に反応してるってことは話せているってことなのよ」

「え？笑い声が聞こえるだけでこの子等の言葉なんてわからないぞ？」

「あのねエ。会話するのは何も言葉だけじゃないでしょう？試しに思いを伝えてみなさい。イメージしたものをお願いしてみてください」

「ふむ」

少し考えこむ直時。

「竜巻座布団作ってー」

直時がイメージしたのは小さな竜巻に座る自身の姿。

途端、お尻が持ち上げられフワフワと浮かぶ。

「おおー！」

空中で浮輪に座っているかのような感覚。下を覗き込むと風が旋回して小さな竜巻の上に確かに座している。

「・・・またあっさりとやってくれたわね」
「ファイアが深い溜息をつく。」

「人魔術なんかよりよっぽど楽じゃないか！なんで教えてくれんかったんだよ？」

「だからね。精霊が見えて、しかも自分の意思を相手が叶えてくれるなんて人は殆どいないのよ。エルフだってここまで精霊に好かれる人は少ないってのに！」

「好かれてるの？」

「好かれてるわよ！めっちゃくちや好かれてる！」

「なんか怒ってるようである。」

「精霊は本来ただそこに在るだけなの。好む場所には集まってくるってのはあるけどね。例えば風廊の森なんかもそうね。何もしてないのに集まってくるなんて精霊に対するハーレム体質としか言いようがないわ」

「あはははははっ！ヒラヒラしてるから君たちひーちゃんってことで！ひーちゃんズ？あはははははははっ！あっ、ちゅーされたあ！」
「聞けよこらっ！」

風の精霊と戯れる直時にファイアが半ギレである。

「というわけで、只今をもって風の精霊術士として免許皆伝になりました」

「あ、はい。有難うゴザイマス？」

まだ怒りが収まってないフィアが怖いが、とりあえず礼を返す。

「攻撃魔術を教えてなかったのは失敗だったかなーとも思ったけど、精霊術を使えるようになったんだからもういいよね？」

「風に由来しそうなことなら何でも出来るってこと？」

「明確にイメージ出来て、それを精霊に伝えられるならね。あとは魔力量だけどヒビノは心配ないだろうし」

「魔力が足りなかったらどうなるの？」

「生命力そのものが代償になるわ。命を落とすこともあるわね」

少し考えこむ直時。

「試しても？」

「そうね。いざというとき使えないと困るし、やってみなさい」

フィアが少し離れたところにある一抱えほどの岩を指差す。

(ひーちゃんズ。真空竜巻斬り！)

無言で右掌を岩に突き出す。

直時の右手から小さな竜巻が高速で撃ち出される。一瞬後、標的の岩が細切れになって吹き飛ぶ。砕けたのではない。裁断された後、吹き飛ばされたのである。

「ひーちゃんズ……。すげーな」

「あんたでしょ！」

息を呑む直時の後頭部にフィアの手刀が極まった。

「あと、治癒術使った時に水の精霊も見えてたようなこと言ってたわよね？」

「無重力の水滴みたいにプルプルしてたやつかな？」

「無重力つてのがちよつとわからないけど、多分それね。呼んでみてくれる？」

「呼ぶ？召喚するってこと？」

「難しく考えないでいいから、姿を思い出して呼んでみなさい」

「プルちゃん、出ておいでー？」

「・・・なによその名前？」

フィアのジト目を他所に半透明で拳大の水滴が漂ってくる。

「じゃあ先刻と同じく水にまつわる現象をイメージしてみなさい」

「うーん」

(水・・・水・・・噴水かな？プルちゃんズ、噴水お願い！)

直時の掲げた人差し指から小さな噴水が立ち上る。陽の光を反射して小さな虹が出来る。

「なごむう〜」

緩みまくっている後頭部にフィアのショートフックが極まる。

「治癒術つてのは精霊術でも高等な部類でね。最低でも2種類の精霊の協力がないと出来ないの。ヒビノは実際に風と水の精霊術を使えたから、治癒術に関してはもう問題ないと思うよ？」

「それはすごく嬉しいんだけど、医学的な知識とかなくても大丈夫なもんなの？」

「精霊術はイメージさえ明確なら問題ないわよ。そりゃ、傷が治っ

ていく過程を具体的な知識でイメージできれば効果的だけど、治癒したあとの健康な身体をイメージ出来ればそうそう問題ないわ。安心しなさい」

つまり、ファイアにも専門知識は無いが、直時の大怪我を治癒できた事実があるので、ひとまずは大丈夫と安心する。

「じゃあ次の町まで急ぐわよ？今夜は宿屋のベッドだからね！」
「了解！」

街道を少し外れたところで、風を身に纏い宙に浮くファイア。白っぽい金髪を風に広げて軽く地面を蹴る。風に舞うように、いや、風そのものとなって草原を翔ける。

その姿に見惚れていたのも束の間、直時も風の精霊に請う。

シルバーメタリックの自転車が弾かれたように地を駆ける。

天翔ける妖精を追いかける一筋の銀。

誰も眼にすることのない疾風の鬼ごっこは空が茜に染まるまで続いた。

精霊の声（後書き）

精霊術師としての目覚めです。自覚はあまり無いようです。

リスタルの町

ロツソへと続く街道沿いの町『リスタル』。小国ながら、四方を峻険な山岳に囲まれ、豊富な水脈からの恩恵により豊かな農地を持つシーイス公国の交通の要衝の町である。

ここから峠越えを含め、普人族の足およそ五日で、とりあえずの目的地であるマケディウス王国の街『ロツソ』へと辿り着く。

ちなみに風廊の森はカール帝国の版図であり、街道には関所が設けられていたが、街道を外れれば出入国は事実上フリーである。

しかし、街道を外れるということは普人族の勢力外を意味する。形成する群の範囲外は、未だ他種族の勢力範囲であった。・・・主に魔獣の。

白金髪のエルフと黒髪の異世界人は精霊術を最大限発揮しつつ、魔獣のテリトリーを駆け抜ける。

初めて見る魔獣達に度肝を抜かれる（体長0・5メートルから最大一〇メートルを超える）直時は完全スルーで遁走する。

「あの一角兎の角って高く売れるのよ！」

「鬼蛭の子供は肩こりの鬱血に効くから需要が！」

「監獄蜂の麻痺針は薬として高価なの！」

などというフィアの言葉はガン無視である。

いくら精霊術を使えるようになったとはいえ、野生獣としては罷り上のランクである魔獣など、戦闘素人の直時には逃げる以外の選択肢は無かった。

「早くベッドで休みたいじゃないっ！お財布も潤ってるじゃないっ！」
恨めしげなフィアを必死で説得する。

少々不満げな顔のフィアと疲労困憊の直時が『リスタル』に到着したのは鳥獣達が巢に戻り始める夕暮れ時だった。

「やっと・・・着いたけど・・・町ってこんな感じなの？」
息を切らせ、槍を杖代わりにした直時がフィアに問いかける。

木造八割石造二割といったところだろうか？外壁はなく、先を尖らせた丸太が町をぐるりと囲んでいる。
なんとなく中世の城砦都市をイメージしていた直時としては拍子抜けである。

「この国は周囲が城壁みたいなものだからね。町の周辺は首都以外こんなもんよ？」

直時の疑問を読み取ったフィアが補足説明する。

直時の疲労の原因は、精霊術とジテンシヤは目立つから駄目！とのフィアの言に従って、町からかなり離れた場所で徒歩へと切り換えたからである。

自転車はもちろん折り畳んで直時が背負っている。

「とにかく落ち着こう。そして御飯！」

久し振りどころか、異世界に来て初めての本格的な食事である。直時の眼が輝く。

「じゃあ、まず宿屋だね」

フィアもホツとしたのか緩んだ笑みを返す。

門衛に税を払って町へ入る。（直時としては入場料の感覚だった）

直時を驚かせたのは、基礎知識にある排他的である普人族の国にしては他種族が多いことであった。

全体の四割ほどは普人族であったが、町を闊歩する人は主に獣人が多い。猫耳、犬耳、狐耳に眼を奪われがちであるが、フィアのようなエルフや、竜人、鳥人も見かける。

「リアルコスプレ天国！」

意味不明な直時の魂の叫びを尻目に、フィアはそこら辺を歩いていた猫耳さんに声を掛ける。

「こんばんはーっ！」

「こんばんにゃー」

「この町で私ら向けお勧め宿屋ってある？」

「にゃー、それなら『高原の癒し水亭』がお勧めにゃー」

「ありがとねー」

エルフと猫耳おねーさんがにこやかに立ち話をしている。

「シニールだ」

思わず呟いてしまった直時の側頭部にフィアのレフトジャブが最

速で極まった。

猫耳ねーちゃんに教えてもらった宿屋に向けて歩く二人。町の中央からは随分離れていくようである。

「この町もたくさん種族がいるけど、基本的に普人族の国だからね。他種族にはちよつと不便なのよ」
歩きながら説明してくれる。

「だから普人族じゃない人にお勧めを聞いてたのかあ」
直時としても面倒なこだわりがある宿では居心地が悪い。元の世界でも、一見さんお断りとかの店で嫌な思いをした口である。

親しい顧客に優しくしたいのは理解できるが、そのために新規の客を蔑ろにしてお得意様に優越感を持たせるという感覚がどうにも理解できないのである。

卑下する存在が居てこそ自分が上等な存在であると思える人種のための店なのだと勝手にカテゴライズしてからは塩を振って清めてやろつかと思うほどである。

「普人族優先の宿屋も嫌だけど、その『お勧め』の店って見た目が普人族の俺が入っても大丈夫なの？」

敵視は敵視を生む。と、理解している直時に不安が見える。

「同じ部屋取れば問題無いつしょ？」

ケロリとしたフィアに一瞬焦る直時であったが、

(野営で隣に寝てたしそんなもんかな?)

恋愛経験未熟者の面目躍如である。

「任せた」

宿泊申し込みとか、フィアの方が慣れているだろうと丸投げである。

『高原の癒し水亭』は木造二階建ての民家の倍ほどの大きさの宿だった。受付の従業員は紺色の髪をポニーテールにした二〇代後半くらいの普人族の女性だった。白い詰襟のブラウスに革のベスト、茶色のロングスカート姿で背筋が真っ直ぐ伸びている。

しかし、立ち居振る舞いとは逆に少し垂れ気味の眼元はいかにも優しそうな若奥さんという雰囲気だ。先客の牛の角と耳を持った獣人、筋骨隆々で強面の男が笑い崩れながら話している。

受付の女性は背面の棚から鍵を取り出して男に渡す。礼を言った男が奥の階段を登っていく。その際、ちらりと順番を待つフィア達の方を向く。直時に向けた眼には少し警戒感が浮かんでいた。

「今晚は。部屋は空いているかしら？」

「今晚は、いらっしやいませ。何名様でしょうか？」

「二人です」

「二人部屋、一人部屋ともに空きがありますが？」

「良かった。二人部屋を一室。三泊の予定でお願い」

「銀判貨4枚と銀貨1枚になります。朝食は料金に含まれます。夕食は別料金になります。今夜はどうされますか？」

「お代はここに。夕食はこの食堂を利用させてもらうわ。」

「有難うございます。夕食代は食後にお会計させていただきます。」

部屋は二階の『白岳草の間』になります。どうぞ、ごゆっくり」

「ありがとう」

フィアは木彫りのプレートを紐で繋いだ鍵を受け取る。

「御世話になります」
直時は挨拶をしてフィアの後続いた。

リスタルの町（後書き）

流通貨幣は金貨（20万円相当）銀判貨（1万円）銀貨（5千円）
白銅判貨（千円）白銅貨（5百円）銅貨（百円）です。

判貨は小判みたいなものと思ってください。
貨幣価値を中に入れるかどうか悩み中です。

リスタルの町？

階段を上がると左右に分かれる廊下があり、右手に大部屋が三室、左手に個室が八室ある。木の扉にはそれぞれ種類の違う花が彫り込まれており、鍵に付いたプレートに彫られた花と合わせてあった。

「うーんっ！」

荷物をそれぞれのベッドの傍らに置き、二人して伸びをする。

部屋の広さは八畳程。扉の反対に窓が一つ。ガラスではなく木製で観音開きになっている。ベッドは窓を頭に、部屋の左右へ配置され、中央には木製の小さな丸机が一つ、椅子が二脚ある。ベッドの足側、入口付近には外套掛けがひとつ。大きめの洗面器が置かれた木の台が一つ備えられていた。

「身だしなみ整えるから、ちょっと部屋出ててね」

さすがに男の眼の前で着替える気がないフィアが直時に言う。

「じゃあ、俺も顔とか洗ってくるよ」

鞆から、手拭い（街道で死んだ家族の荷物にあった）を取り出して部屋を出る。

洗面所の場所を聞こうと、受付へと降りていく。先程の女性がカウンターの内から町の様子を眺めていた。

「すいませーん。顔洗いたいんですけど、洗面所の場所は何処です

かー？」

手拭い片手の直時が声をかける。

「洗顔ですか？それなら裏庭に井戸があるので、そちらをご利用ください」

「わかりました。ありがとうございます。えーっと・・・」

「アイリスです。アイリス・グノウ。この宿の主オットー・グノウの娘で仕事を手伝っております」

「改めまして、アイリスさん。御世話になります。自分はタダトキ・ヒビノです。連れはフィアと言います。宜しく願いますね」

フィアの本名は言って良いのか判らなかったので、愛称のみを伝える。

「こちらこそ宜しく。井戸へは階段横の勝手口からどうぞ」

「ありがとうございます」

自己紹介を済ませて、礼を言い井戸へと向かう。

「あれ？」

井戸には雨水避けの屋根が付いているが、組み上げ用のバケツも手押しポンプのようなものも無い。あるのは洗面器と大きめのタライだけである。

「ああ！そうか、生活魔術か。掌を水面に向けてっと・・・ 給水」

取水の魔法陣を編み、水を捕まえる。

そつと持ちあげた水球を洗面器へと解放する。

「便利は便利なんだけど、道具が少ないってのは寂しいなあ
異世界人としての感想が漏れる。」

顔を洗ったあとの水を排水溝へと流し、少し考えた直時は新しい水を汲む。

服を脱いでいき、よく叩いて木の枝へ引っ掛けていく。肉付きの少ない上半身を露わにし、ゆるく搾った手拭いで拭いていく。

脳内検索の結果、残念なことに殆どの国で平民の入浴習慣は無く、水浴びか、お湯や水で身体を拭くだけのようである。

ついでとばかりに、パンツ一枚になって身体を綺麗に拭いた直時は、身も心もさっぱりして部屋へと戻った。部屋に入る前にキッチンとノックをしたのでお約束は無しである。

「まずは、夕食前にヒビノの服を買いにいきましょう」

ローブと革鎧を脱ぎ、普段着なのか萌黄色で膝下までのワンピース、短い丈の革の上着（デザイン的にはGジャンのような）を着ている。ベルトとポーチは旅の間身に付けていたのと同じものだ。

破れを隠すため布を巻きつけていたので、関節部など窮屈な思いをしていた直時は、大きく頷いて早速出かける準備をする。といっても、鞆を肩に引っ掛けるだけであるが。

「少し買い物に出てきます。夕食には戻ります。近くに古着屋はありますか？」

フィアがアイリスに鍵を預けて伝える。

「北へ八軒のところ、左側の店ならまだ開いてると思います」

「ありがとうございます」

「いってらっしゃいませ。フィア様、タダトキ様」

ニコリと声をかけるアイリス。フィアが怪訝そうに直時を見る。

「さつき自己紹介しといた」

アイリスに軽く手を振ってフィアの視線に応える。

「名前呼んでた」

「名字じゃなくて名前で呼ぶのが普通なんだろう？」

「ちゃんと発音できてた」

「そりゃ、商売だからだろう？」

「ふんっ」

不機嫌そうである。

アイリスの言葉通り、店はまだ開いていたが店じまい直前だったので慌てて買い物を済ませる。

とりあえずの調達だったので、安い布の服（灰色）と丈だけ合わせたズボン（焦げ茶色）を購入した。合わせて銀判貨2枚、銀貨1枚で直時の感覚だと安い古着にしては高過ぎる値段に眉を寄せた。

直時の体格の関係上、大き目の女性物であった。

フィアにからかわれた直時は少し落ち込んでいたようである。

宿に戻った二人は、直時の着替えを終わらせ早速食堂へと向かう。

夕食時の『高原の癒し水亭』の食堂は大きな賑わいを見せていた。十人掛けの大テーブルが5つ。二人掛けの小テーブルが壁際に4つ。カウンターには8人分の席がある。

既に八割がた席が埋まっている。二人掛けも空きが無い。幸い力ウンターは二人連れの客が端に座っているため、二人は反対側の力ウンター席に陣取る。

「食べに来てるお客さん、宿泊客だけじゃないね」

「そうね。評判のお店なのかな？夕食は期待できそうね」

何気ない会話をしつつも、直時は時折向けられる視線を背中に感じる。

座る前にざっと見まわしたが、普人族らしき人は直時を含めて3人だった。

（お客は酒も入ってるし、食べたらず早々に部屋に引き揚げよう。久しぶりのお酒飲みたかったなあ。ルームサービスしてもらえんのだろうか？）

なるだけトラブルを避けようと思える直時だったが、

「おねーさんっ！とりあえず麦酒二つつ！」

フィアが料理を運ぶ兎耳の給仕に声をかける。

（しまった！この酔いどれエルフを忘れてた……。）
軽く頭痛に襲われる直時。

フィアは久し振りの町泊でテンションが上がり、満面の笑みだ。

この笑顔に諫言などできようはずがない。

直時も異世界での初めてのの食事を楽しもうと気分を切り替える。

「おまちどお！」

先程の兎耳ねーさんが二人の間に泡の立つ大きなジョッキを勢いよく置いてくれる。

「きたきたーっ！」

ファイアが歓喜の声を上げる。

「ありがとう」

ファイアの様子に微笑みつつ、兎耳ねーさんに礼を言う。

そんな直時を少し驚いた眼で見る兎耳さん。獣人に対して普通に接する普人族が稀なためである。それに気付かず、オーダーを告げる。

「えーっと、注文いいですか？」

「あ、はい！どうぞ」

「肉料理のお勧めを二品、生野菜のサラダ一品、あと野菜が美味しいんだっけ？」

「はい！水が美味しいので野菜も美味しいですよ！」

「じゃあ、野菜料理のお勧めを二品。以上でお願いします」

「かしこまりました！」

「おかわりっ！」

「はえーよっ！乾杯もしてないじゃないかっ？」

直時の突っ込みをまあまあと抑え、すぐにお持ちしますからと兎耳さんは厨房に戻る。

「改めて！リスタル到着！かんぱーい！」

「乾杯！」

ファイアと直時の陶器製ジョッキがぶつかり、カチンと澄んだ音を立てる。

（ふむ。日本のビールよりはちょっと酸味がきつくて癖も強いかな。地ビールでこんな味のやつ飲んだことあるかも。まあ、美味しいからいいや）

一気に半分ほど飲み干し、残りもハイペースで干していく。

直時が二杯を空け、フィアが五杯目を注文したときに肉料理がきた。

ひとつは少々臭みのある肉を大量の香草と一緒に炒め、甘辛い特製のタレを絡めた肉野菜炒め。もう一つは塩と香辛料が良く効いた手羽先（三〇センチくらいある）のグリルだった。

どちらも麦酒に良く合い、二人の食も進む。サラダも鮮度がよく、しゃきしゃきと歯に心地よい。

美味しい料理と久し振りの酔いにご機嫌の二人の背中に声がかかる。

「見かけによらず、良い飲みっぷりじゃねえか」

野太い声の主に顔を向ける直時。フィアはお酒と料理に夢中（主に酒）で完全スルー。

「美味しい料理について飲み過ぎちゃいましたねー」

無難な笑顔は日本人の必須スキルである。上辺の友好度の裏で直時は相手を観察する。

（大テーブルの五人連れ。虎系獣人。身長一九〇、絞った筋肉質から力と速さ兼備。丸腰。仲間は、同じ虎系獣人女性1。竜人？蜥蜴系？女性が1。んで妖精族ドワーフかな？背は低いけど体重は俺の倍くらいあるのが1。それと魔術師っぽいけど、へえ。普人族みただいな。顔に不自由してなさげな優男。こいつ敵だな。が1と・・・）

一部主観的な判断をくだしつつ、なるだけ平穩無事に切り抜けられるよう考える。

「ここらじゃ見ない顔だが、旅人か？」

「はい。今日この町に着いたばかりなんですよー」
居酒屋で酔っ払いのおっちゃんに声を掛けられた時の対応を続ける。

「にいちゃん、普人族にしちゃあ珍しい毛色だなあ？生まれはどこだい？」

そうなのである。旅の間はエルフであるフィアと二人であったし、襲ってきた盗賊も、暴力を生活の一部とする人種であるから体格良いなーとしか思ってたが、リスタルの町に着いて直時が思ったのは、

（まんまファンタジーワールドじゃん！ヨーロッパっぽい普人族ばつかじゃん！髪の色は別として！東洋系いねーっ！）
であった。

さらに直時は既に三十路を越えてはいたが、小柄な体格と童顔のせいで日本でさえ若く見られがちであった。スーパールのレジのおばちゃんに、近所の高校生と似ているというだけでお酒を買うのに年齢認証を求められたこともある。

絡まれている直時を完全放置でフィアはお酒を飲み続けている。
口元に軽い笑いが浮かんでいるのは、良い酒の肴だと思っている節がある。

「あー、自分はこの大陸に来たばかりでして、生まれは遠い東の島国なんですよー」

適当に虚実を織り混ぜて応える。フィアには隠れてジト眼を送るも、黙殺される。

「ほう！そりゃ、はるばる遠いところから良く来たな！ようこそユ

「レリア大陸へ！俺は見ての通り虎人族で、ガラム・ガーリヤつてんだ」

「自分はタダトキ・ヒビノと言います」

ガラムは窺うようにフィアを見る。先程から直時と話しながらもチラチラと視線を向けていた様子から、本命はフィアにあったようである。

ガラムの仲間達の様子からも興味があるのはフィアのようだ。

放置された腹いせから、どうするよ？とでも言うようにフィアに顔を向ける。

「フィリスティア・メイ・ファーンよ」

仕方なしに応えたフィア。食堂中に驚愕のどよめきが広がる。

「やっぱりか！風の女王の加護持ち、晴嵐の魔女……」

ガラムが畏怖と憧憬の声で呟く。

「……酒乱の間違いじゃ？」

微かな直時の突っ込みだったが、フィアの左に座ったのが運の尽き。ワインチパンチが正確にレバーに突き刺さる。

「ぐふうっ！」

椅子から転げ落ちる直時であった。

リスタルの町？（後書き）

いきあたりばつたりの連続更新より、まとめて書いた方がいいのかなあ。あまりの雑さに自己嫌悪です。

リスタルの町？

「話がある」

ガラムが突然真剣な顔で話しかける。

あまりの空気の変わり様に戸惑う直時を余所に、フィアは悠然とジヨッキを呷る。

「私達、まだ食事中よ？」

口元に微笑を浮かべつつも、眼が笑っていない。

「ああ、わ、悪かった。食事後に聞いてもらっていいか？」
焦った様子を滲ませたガラムが振りかえりつつ席にもどる。

「ふむ」

「どうしたの？」

「フィアってさ・・・結構有名人？」

「なんだか知らないうちにね」

うんざりした様な顔であるが、少し得意げでもある。

「おまちどお！」

おかわりの麦酒と料理を兔耳さんが持ってきてくれる。

「フィアさんって、フィリスティアさんだったんですねー！」
眼を輝かせながら話しかけてくる。

「マルカライ平原の決戦！ファイラン王国防衛線！血の双刃団殲滅！憧れますう！」

「昔の話よ」

「英雄譚だな」

「あのっ！よろしければっ！刻印をいただけませんかでしょうか？」
刻印とは、神々や神霊の加護とは較べるべくもないが、与えた対象にはんの少し自分の能力との親和性をもたせるものである。自分と似たような縁を持たせるのである。

風使いたるファイアの刻印をもらえば、本人に素養があれば風の精霊術を身につける切っ掛けになるかもしれないかなあ？（疑問形）
という代物である。

「ごめんね。そういうのしないことにしてるの」
済まなさそうなファイア。

「いいえっ！無理を言ったのはこちらですし！それよりご滞在の間は何でも言ってくださいね！私、ミュレーネン・トゥーンと言います。ミュンと呼んでください！」

「しばらく宜しくね、ミュン」

英雄と追っかけの会話に今度は直時が我関せずで食事続ける。

厨房からの声ミュンが慌てて戻っていく。ファイアが苦笑いを浮かべ、ジョッキを軽く持ちあげる。

出来上がった料理は直時注文の野菜料理であった。

「ミネストローネっばいな」

「ヒビノの国の料理？」

「いや、他国の料理だけど、食べ物を美味しくしようと工夫すれば

似たような料理になるもんなんだな。和食っぽい料理に出会えることにも期待できそうだ」

嬉しそうに料理をパクつく直時に、声を抑えながらファイアが話かける。

「さっきの虎人族の話だけど、たぶん助っ人の依頼だと思うの」

「ガラムだったっけ？五人連れっぽかったね」

「冒険者のクエストパーティーみたいね。攻守、前衛後衛のバランスが良いように見えるのに、私に声を掛けるってことは相当厄介な依頼と判断していい」

「ヤバそうな話だなあ」

「速度と攻撃力の虎人族、タフなうえ精霊術も使うドワーフ、後衛に魔術師、そのうえ竜人までいるのに・・・」

「やっぱ竜の人だったか」

竜人族。アースファイアに於いて下位の神々にも匹敵する竜族の血を引く種族である。強靱な生命力と力、高い魔力を有する。対魔力にも優れ、生半可な人魔術で倒すことは不可能と言われている。

「で、話を聞いてからになるけど、助っ人を引き受けた場合ヒビノは留守番だからね」

プロ集団が苦戦する戦場など真っ平御免な直時は当然頷く。

「問題はその件に関わってしまった場合、滞在が伸びるってことなのよ」

「そりゃ、厄介な依頼を片付けられるなら、ある程度時間も取られるだろうからな」

「だから、冒険者ギルドで登録しなさい」

「は？何で？」

「路銀が少なくなってきたよ。私はけっこう貯金あるから問題ないけど、自分の分は自分で払うのよね？」

「もちろんでございます」

「じゃあ働いて稼ぎなさい。これも練習よ！」

「・・・了解」

初めての冒険がいきなり決まってしまうと、不安そうだ。

「おまちどうさま！ご注文の品は以上になります」

ミュンが置いた皿を見る二人。

量としては多くはないが、数種類の野菜を一口大にぶつ切りしただけのようである。

「これがお勧め？」

フィアが顔を顰めるが、直時が制止する。

フォークで白い根野菜を選んで口に運ぶ。

「コリコリとした歯応え。適度な塩。爽やかな香りは柑橘類の皮を削って入れてあるんだな・・・。しかし！なによりもこの旨味！これはコンブの出汁にちがいない！」

日本で言う浅漬けに興奮を隠せないようだ。

ミュンに味付けを問うが、調理法はわからないと言う。旅を続けるにしても昆布の乾物は携行に便利だし、何より日本の味である。

ミュンを拝み倒して、材料の情報を料理長から聞きだしてもらったことになった。ちなみに料理長はオーナーであるオットー・グノウ

氏であった。

「よっしゃあ！何としてもコンプを手に入れねば！稼ぐぜえ・・・超稼ぐぜえ・・・」

息を荒げる直時の脳天に、落ち着けとばかりにフィアのチョップが落とされた。

「まあやる気が出てなによりだね。それじゃ向こうの話に付き合おうとしましょうか。ヒビノはどうする？」

「俺は話聞いても解からないし、役に立てることもないだろうから、部屋で本でも読んでるよ。買ったけどまだ呼んでないからなー」

「あの異世界の本ね。わかった。じゃあ、話聞いてくるわ。ヒビノの世界の文字も習ってみたいところだけど、時間があるときにお願いするわね」

「りょーかい。んじゃまた後でー」

食事の会計を済ませて、フィアはガラム達のテーブルへ、直時は自室へと別れる。

部屋に戻った直時は鞆の文庫本を開くも、すぐにテーブルへと置く。

「事实は小説よりも奇なり・・・だな」

開け放たれた窓から見える異世界の夜の賑わいを眺めている。

ほどよい酔いに身を任せ、荷物から取り出した煙管を燻らせている。

「今日ぐらいは、なーんもしなくていいや」

驚きの連続だった毎日を振りかえり、暢気な様子ながらもこれらの身の振り方を考える。

フィアを待つ直時の思考は千々に乱れながらも、表情は穏やかであった。

ガラム達の待つテーブルへと腰を下ろしたフィアは、まず名乗りを受ける。

「憶えていてくれるか判らないが、今このPTリーダパーティーをしているガラム・ガーリヤだ」

席に着いたフィアに改めて名乗る虎人族の青年。髪は黄と黒の縞模様。瞳は金色である。

「ラーナ・ガーリヤ。ガラムの妹です」

同じく虎人族の若い女性が名乗る。こちらは銀と黒の髪で、瞳は青い。身長はフィアより一〇センチほど高い。

「僕はリシュナンテ・バイトリ。魔術師です。以後お見知り置きください」

普人族の優男である。金髪碧眼で優雅な立ち居振る舞いは何処ぞの貴族かと思わせるが、軽薄そうな口元の笑みがフィアの印象と直時の主観が一致する。つまりは女たらし。

「ダン・ベルケンじゃ」

ぶっきら棒であるが、同じ妖精族としてフィアには親近感を持っているようだ。

「ヒルデガルド・ノインツ・ミューリッツ。宜しく頼む」

薄い微笑を刻む竜人族の女性。白髪紅眼で耳はエルフのように尖っている。額と頬、首が鱗に覆われている。

「フィリスティア・メイ・フアーンよ」

全員の紹介を受けてフィアも応える。

「聞かせてもらえるかしら？」

リーダーであるガラムへと水を向ける。頷いたガラムは話し出す。

「見ての通り、俺達は冒険者ギルドのクエスト遂行のPTだ。高額な報酬だったし、依頼内容の敵性魔獣が魔狼だというんでつてを最大限使つて、考えうる最高のメンバーだったと自負していたんだが……」

依頼内容はリスタルより北東へ十日の森の中、リメレンの泉に最近住み着いたという魔狼の駆除だった。

リメレンの泉では五年に一度、水の神霊であるヴィルヘルミーネが加護を与えるために顕現する神事がある。今年はその年でもあるが、何故か魔狼が泉の周辺を徘徊しはじめたというので、シーイス公国から討伐依頼が出ていたのである。

魔狼は高い知能と攻撃力を持ち、特に素早さと魔術防御に秀でている。普人族であれば大隊規模の騎士団でも蹴散らされてしまうだろう。そこで、高い戦闘能力をもつ冒険者の精鋭に白羽の矢が立ったようだ。

「この面子なら魔狼ならなんとかかなると思っていたんだが、念のため偵察を行った結果全部で五頭の魔狼を確認したんだ」

下手に刺激すれば、小国のシーイス公国が滅びることもある。

「番と子供・・・だったのね？」

「その通りだ。成獣が二頭に、仔が三頭。ギルドに報告したところ、殲滅じゃなくてもいいから追い払えと来た。戦う方としては変わらないけどな」

いかつい顔で苦笑しつつジョッキを呷る。

ガラム持ちの酒ということでファイアもジョッキを傾けながら先を促す。

「俺達としては魔狼を殺したいわけじゃない。子供もいることだしな。まあ、こちらが圧倒的な力を見せつけてやれば、神事の間リメレンの泉を離れてくれるだろうと思ってる。

その圧倒的な戦力のために力を貸してもらいたい」

「加護祭は確か十日後だったわね。追い払ったとしたら、神事の護衛もあるのかしら？」

「ああ。その通りだ」

撃退だけでなく、事後のフォローも入っている依頼にファイアは好感を抱く。

「目的は神霊の加護祭が恙なく終ること。魔狼撃退はその手段。殲滅は条件には無い。ということの問題無い？」

「その通りだ。どうだろうか？力を貸してもらえないか？」

「いいわ。その話受けましょう」

「有難う！感謝する！」

ファイアの承諾を得たガラムは肩の荷が下りたとばかりに安堵した。

リスタルの町？（後書き）

次回より諸事情のため更新が不定期になります。
しかし、思うように話が進まない・・・。

リスタルの町？

宿屋で独り、まったりとフィアを待つ直時を忘れたかのようにフィアの酒宴は続く。

ガラム達のPT参加を決めたフィアはメンバーの人となりを知るためという名目を掲げてタダ酒を呷っていた。

「ところであの坊やは同行させないのか？」
ヒルデガルドが興味を持った様子である。

「あー。ないない。あの子は風廊の森で拾っただけの普人族だから」
三十路過ぎの直時が坊や、あの子扱いである。竜人族もエルフも長命種であるためいたしかたない。

「でも普人族には見慣れない容姿であるし、僕としても興味をそそられますね。黒髪黒瞳なんて神秘的だなあ」
直時と同じ普人族のリシュナンテ。

他種族PTに加わっていることから、魔術の腕も高いとフィアは判断して秘密を嗅ぎつけられないか警戒している。

「あんだ男もいけるクチ？きもいんだけど」
ラーナが不機嫌そうに言う。ガラムのやきもきした様子からリシュナンテに好意をもっているようだ。

「普人族である体格では激しい戦いは無理だろうて。当人も分をわきまえているようであるし、なかなか謙虚な若者よな」

高い報酬のPTへ無理矢理参加しようとしなかったことが、欲深いと言われる普人族のイメージを覆し、好意的な評価を謹厳実直そうなドワーフのダンに与えたようだ。

「普人族は短命だけに性急だ。できればゆっくりと育ってもらいたいものじゃ」

豊かな顎鬚を撫でながらダンが言う。

「わたしもそう思ってるんだけどね。普人族の面倒見るのは大変だわ」

フィアの『大変』には異世界人である直時の特異性も入っていたのだが、説明などできようはずもない。

「事情の説明とかあるからそろそろ部屋に戻るわ。出発は明日よね？ 集合場所と時間は？」

フィアがガラムへ聞く。

「時間も無いことだし、冒険者ギルド前に正午集合でいいか？ 昼食は済ませておいてくれ」

「わかった。午前中にお子様のギルド登録したいから都合だわ」

くれぐれも言うが直時は三十路過ぎの三二歳である。

「じゃあまた明日」

フィアは片手を上げて腰を上げ、部屋へと立ち去る。

「宜しく頼む」

ガラムがその背に声をかけた。

「たっだいまー」

フィアのために鍵を空けておいた部屋にノックもなしに入ってきたご機嫌エルフ。

「おつかえりいー」

灯火の術式で照明を確保していた直時が同じノリで応える。

「虎男のPTに参加することになったから、明日から留守番お願いねー」

「急だね」

「明日から十一日・・・いや一二日はかかるかな？その間に路銀稼ぎしときなさい」

「結構長いな。まあ酒乱の魔女に助っ人頼むくらい厄介な依頼なんだろな」

「酒乱ちやうわっ！」

「まあそれはいいや」

「スルーされたっ？」

「突っ込みは俺の役目だ！って、話を進めるよ？冒険者ギルドでクエスト受けるのは良いんだけど、やっぱり精霊術を使うと目立つんじゃないかな？」

「当然！精霊術は使用禁止よ」

「じゃあさ。人魔術の攻撃魔術を覚えてくれるかな？せめて、こないだの盗賊達に対抗できるレベルのを・・・」

直時の顔が少し曇る。犠牲になった名も知らない家族達のことを思い出しているようだ。

「あの魔術レベルはあいつらが兵士崩れだったからだよ？戦争に使える遠距離攻撃魔術なんて、あんまり教えたくないのよね」

「武術なんて経験ないし、魔術も精霊術も禁止されたら何もできねーよ？」

「場合によるけど、あの時のような状況なら精霊術は使ってもよし！それ以外は人魔術だけね！教える攻撃魔術は冒険者の初級レベルだけ。どうせ登録しても新人は難易度の高いクエストは受けられないからね」

「ふむ。了解。じゃあ時間もなしし教えてもらえる？」

フィアの慎重な意見を考慮し、仕方ないと諦める直時。

「教える魔術は一つだけだけど、一番使い勝手がいいからこれひとつで頑張りなさい」

「一個だけかよ・・・」

「炎弾の術よ。魔獣は基本的に火が苦手だから、火属性の魔獣と出会わない限りこれだけで大丈夫。明日は早いし転写の術式で伝授するからね」

「えええっ？せっかく美味しい御飯とお酒で良い気分なんだから、普通に教えてくれーっ！あの術は頭痛くなるから嫌だーっ！」

直時は断固拒否である。

「宿屋の中で実演するわけにもいかないし、朝にでも町の外でやるうか・・・」

「是非その方向をお願いします！」

（魔法陣だけ教えてもらえばいいんだけど、酒飲んでるからなあ）
直時は自身の判断を支持しつつ、フィアに就寝を促した。

酔いが醒めてしまった直時は眠れずにいた。

明日は冒険者としての第一歩、ギルド登録後にクエストが待っている。隣に見目麗しいエルフが寝息を立てているのも一因ではある。

喫煙道具一式を持って、宿の裏庭に向かう。

井戸近くの石に腰を下ろし、煙管を燻らせながら考えを巡らせる。

直時の不安の殆どは、クエスト⇨戦闘という認識から来ていた。元の世界でのゲームや物語の偏った知識からは、魔物を狩る、盗賊討伐任務等いずれも戦闘が前提となっていたし、薬草などの採取も危険地帯での採取が殆どで、モンスターとの戦闘が不可避だとの先入観がある。

(同じ資金稼ぎなら屋台とかの方がいいんだけどなあ)

実家が自営業であったため、起業における面倒さが頭にある。戸籍や素性を問わない冒険者ギルドに頼るのも仕方ないと諦めるも、平和ボケした日本人の自分に戦闘がこなせるか甚だ疑問にも思う。

盗賊達の襲撃で命を落とした一家を葬った記憶が甦り、この世界の法を再び意識に刻みつける。

(誰も彼も生きるために戦ってる。戦ってるんだ!)

文字通り、生存のための戦いを生き抜く彼らに対抗するためには自分も同じ土俵に上がらねばならない。

(でもあいつらは生きるためっただけじゃなかったよな。子供まで殺す必要なかっただろうに……。それにあの顔……)

弱者をいたぶる快樂に歪んだ醜い顔。直時はあの顔が大嫌いだった。

(次は容赦しないさ。したら死ぬんだ)

吸い殻をこつんと叩き落とした直時は、軽く溜息を吐いた。

冒険準備

盆地と周囲の山岳部が国土のシース公国の標高は高い。初夏にさしかかりつつあるとはいえ、明け方はまだまだ気温が低い。

異世界に来て初めて屋根のある場所で眠りについた直時は、けして寝心地良いとは言えないベッドであったが、その温もりに熟睡していた。

「朝よ。起きなさい」

ファイアが声を掛けるが、反応がない。

朝と言っても、漸く空が白み始めたばかりである。町の通りも人の気配はない。

野宿中は太陽とともに起きだしていた直時も、固い地面や夜露を気にせずに済む寝床に昨夜の酒も手伝って、起きる兆しは見えなかった。

数度声をかけても寝息のリズムさえ崩さない直時に実力行使を敢行する。

ファイアの目の前に魔法陣が構築される。

「凍てつく息吹・・・」

おらしも
落霜」

主に食材などを低温保存する場合の魔術である。

「　　っ！」

声にならない悲鳴を上げて跳び起きる直時。

以前、休日の惰眠を貪っていると、妹に寝巻の中へ氷を放り込まれたことがある直時だが、それを遥かに上回る衝撃である。

「なっ？なっ！なあっっっ？」

真っ黒な髪と眉毛と睫毛が霜で真っ白で、鼻毛からは小さな氷柱が下がっている。

「時間が無いんだからさっさと支度する！」

有無を言わず準備をさせるフィアという名の鬼がいた。

リスタルの町からかなり離れた森の中でフィアの魔術教室が始まった。

「まずはどんな魔術か見てみなさい」

フィアが右手を前に突き出す。

「焼けつく炎　　炎弾！」

極短い呪文のあと掌から現れたかのような魔法陣。その中心から火球が飛び出す。

勢い良く十メートル程先の岩へ飛んでいく。大きさは炎が揺らめいて視認しづらいが、炎の核となっている部分は人の頭ほどの大きさである。

標的となった岩へ着弾後、炎が対象を包み込むも、五秒ほどで消えてしまった。

「………火炎瓶より威力無いじゃん」

初の攻撃魔術を教えてもらえると、期待していた直時の肩が落ちる。

「文句言わない！攻撃魔術の基本術なんだからね！使いこなせたら次のを教えてあげる」

「うつつ。了解」

「眼にした後だから、イメージはできるわよね？じゃあ、魔法陣を憶えなさい。どんどん撃つから、構築される魔法陣をよく見て」

ファイアが間を置きながら三回の炎弾を放つ。

「だいたい憶えたから見てもらってもいい？」

「え？もう？まあ、間違ってると思うけど試しにやってみなさい」

「了解」

「焼けつく炎　炎弾！」

ファイアの数度の攻撃で焼け焦げた岩に、見事火球を当ててみせる。

「おお！あれだけしか見てないのに凄いじゃない！」

寸分違わぬ魔法陣を編んでみせた直時に称賛を贈るファイア。

「構成が簡単だったしね。これくらいはやれるよ。でも、わざわざ炎弾撃たなくても魔法陣だけ見せてくれればよかったのに」

「え？」

直時が言う魔法陣を見せるというのは、羊皮紙か何かに描いて教えてくれということだとファイアは勘違いして応える。

「魔法陣を描いて見せても、大雑把な形ならある程度構成を憶えられるだろうけど、魔力の流れを感じられないとなかなか憶えられないのよ？陣の大きさや構成する線の太さも正確じゃないといけなし」

「だから魔法陣だけをこうやって見せてくれたら憶えやすいよ？」
直時は今しがた憶えたばかりの炎弾の魔法陣を眼の前に編んでみせるが術は発動しない。

魔法陣は構築されると自動的に術者の魔力を吸い上げ、即座に発動する。そして発動後すぐに消えてなくなる。魔術の発動の効率化、合理化を極めたためである。人魔術の当然の現象が、ファイアの目前で覆されていた。

「……なにをどうやってるの？」

茫然としたファイアに気付かないまま直時が編んだ魔法陣を難しげに見ている。

「それにしてもこの攻撃魔術って、炎の速度は遅いし威力も微妙だし実戦で使えるの？離れたところから撃つても普通に避けられそうだよな？あの盗賊が使った氷の槍みたいに複数発射で面を制圧するような呪文にするか、せめて速度だけでもどうにかしたいところだよなあ。」

でさ、魔術回路の此処が発射速度決めてる部分でしょ？ここに風系の加速かける術式を組み込んで、あと火力も風速で消えないように上げて……って、どうしたの？」

魔法陣を発動させないまま維持しているのも驚きだが、魔法陣の改造までしはじめた姿にファイアの口はポカンと開いていた。

「……とりあえず改変してた魔法陣でもう一度やってみて

？」

「思いつきで触っただけだから、チェックしてないよ？」

「いいから！」

「怒らなくてもいいじゃないか……。じゃあ、いくよ？」

焼けつく炎　炎弾改！」

照準をよりハッキリイメージするため、人差し指で標的の岩を示す。描き変えられた魔法陣の中心から、通常の炎弾とは較べものにならない速度で炎が飛び出す。その形は火の球ではなく、高速で引き延ばされ葉巻型になっている。

ボヒュンッ！

当たっても、燃え広がらずに着弾点に炎が集中する。約五秒後、炎が消える。着弾点の岩は軽く溶け、小さな窪みを作っていた。

「うんうん！これならちょっとした焼夷鉄鋼弾並かな？でも魔術回路に無駄があるみたいだな。消費魔力の総量の割に威力上がらなかつたなあ。俺の魔力量は多いみたいだし、多少燃費悪くても問題ないか」

満足そうに頷く直時にファイアが無言で近寄る。

「ぐぼっ！」

ファイア渾身のボディブローが鳩尾に決まって倒れ伏す直時。

「……………なんで？」

「いやあ、理不尽な怒りが込み上げて来ちゃったのよ？ごめんね？
テへつと可愛く謝る姿に、

「その仕草が許容される年齢じゃないだろ……」

禁じられた言葉を聞かれた直時は、笑顔の踵落としを頭頂にもら

って沈むのであった。

「出発前にしつかり教え込まなきゃって早起きしたのにあっさり習得するわ、低威力の魔術で抑制しようとしてたら高等魔術に書き換えちゃうわ、おまけに魔法陣の術式発動無しの維持までしちゃうし！ああああああ！もう！」

「なんか変なことしたかな？」

「禁止事項に魔法陣だけを編むつての追加よ！普通あんなこと出来ないんだからね？」

「あはははは。なんかごめんね？」

激昂し混乱するフィアにとりあえず謝る。このあたり、なあなあまあまあな日本人のスキル発動である。

冒険準備（後書き）

初めての攻撃魔術を魔改造しちゃいました。

冒険準備？

ファイアの予定より大幅に早く町へと戻ると、ようやく人々が活動し始めたようで、そこかしこの店が開店の準備を始めていた。

「なんか余裕が出来たのに疲れちゃった気がする……。まあいいわ。ヒビノの装備を整えにいきましょう」

ファイアの出発は正午である。自分の準備はクエスト間の食糧くらいなので、まずは一人で活動する直時の準備を優先した。

「主武器は槍でいいとして、他にも何か見繕っておきましょう」
まずは武器屋に行くようだ。男として直時も、これには単純に喜んでしまう。

リスタルの中央大通りを歩く二人は、ファイアが見つけた店に足を向ける。木の看板には剣と楯が彫り込まれ、武器だけでなく防具も取り扱っていることを表している。

所狭しと並べられた武器に年甲斐もなく引き寄せられる直時。二メートルはあるつかという斧槍。刃が美しく波打つ大剣。普人族に扱えるとは思えない重量感溢れる戦斧。

「はいはい。眺めるのはそれまでにして、自分が扱えそうな武器を選びなさい。分をわきまえて選んでよね」

「了解」

ファイアの言葉に正気に戻る。

（格好いいけど両刃の両手剣とか無理だな。無茶苦茶重そうだ。戦国時代の合戦とかじゃ剣より槍と弓が合理的だったらいいしなあ。弓は当てるの難しそうだし、槍はあるから、近接戦闘用の武器が必要ってところかな）

自分の命に関わることだと改めて肝に銘じ真剣に選ぶ。

（実戦経験があるわけじゃなし、使ったことのある刃物といえば料理で包丁とナイフ、野外活動での手斧と鉈くらいか）

直時は大型の武器が並べられている前から、片手用の武器が陳列されている棚へと移る。

「これとこれにする」

選んだのは丈夫そうな刃渡り30センチ程の片刃のナイフと、同じくらいの刃渡りの肉厚の鉈であった。

ナイフと鉈を片手で軽く振って手応えを確かめてみる。

「地味なのを選んだみたいだけど、それでいいの？」

言葉とは裏腹に、フィアは感心しているようだ。

単に武器として使えるだけでなく、用途の広いナイフと鉈を選択したことに冒険者として最低限のスキルがあると判断される。

「これなら俺でも使えるからね。鉈の柄は一握り長いのにできますか？」

後半は店主に向けてである。

「もちろんだ。ちよいと待つてな」

直時の武器選びを興味深げに見ていた禿頭で髭面の親父が鉈を手に店の奥に引っ込む。

「剣とか選んだら殴ってやろうと思つてたのに、意外だったわ」

「分をわきまえるつて言つてただろ？実際に自分の命が懸かつてるんだから、使えない高価な武器より使えるものを選ぶに決まつてる」

店主が戻ってくるまで防具を見繕っていたが、金属鎧だの盾だのを装備して動ける体格じゃないと自覚している直時はフィアのような動きやすい革鎧を物色する。

「鎧は身体に合わせて調整しないといけないから時間が掛かるわよ？」

フィアの助言に今回は見送ることにした。

「待たせたな」

奥から店主が戻ってくる。

「持つてみな」

渡された鉈を手に取る。

先程までは片手で扱つたため柄は短く、握り拳二つくらいの長さであつたのが、今は握り拳三つ分ほどになっている。すっぱ抜けないように柄の先端には若干の返しが付いている。

直時はまず、刃元近くを片手で持つて振つてみる。重心が柄に寄つたため、刃の重みが軽減され取り回しが楽になっている。

次いで柄の端を握つて片手で振る。長くなつた分重い。しかし、威力は遠心力が増した分増えただろう。

最後に両手で握って振ってみる。左手でしっかりと固定し、右手は添えるだけ。振りまわすのは身体全体のバネ。軽い。

「にいちちゃん。本当に剣はいらねえのかい？」

意外そうな顔で聞いてくる店主。

「使ったことないですよ。少しこの町で稼ごうかなと思ってるんで、お金が貯まったら買いにきます」

頭を掻きながら済まなさそうに応える。

「あと、革鎧の材料になる革布みたいなのはありますか？」

「おう！どれくらい要り用なんだ？」

「マントの半分くらいの大ささで一番安いのでいいです」

「あつはつは！見込みがあるにいちちゃんだし、精々サービスさせてもらおう」

何故か気に入られたようである。ファイアは小さく笑っている。

「全部で銀判貨10枚つてとこだが、8枚に負けてやろう。鉈とナイフの鞘とベルトも持って行け」

「えええっ！嬉しいですけどいいんですか？」

「そのかわり次に武器を買う時は絶対にうちに来い！」

「もちろんそうさせてもらいます！」

「がははは！待ってるからな！鉈とナイフは何処に装備する？ここで調整してけ」

腰や太股、脇の下と色々試した結果、ナイフは左腰に、鉈は腰の後ろに右手で取れる位置に決まった。

「にいちちゃんの名前を聞いてなかったな。俺はブラニー・ベルツ。ベルツ戦具店の店主だ」

「タダトキ・ヒビノです。宜しく」

正午まで時間があつたので、ファイアの保存食と直時所望の裁縫道具を購入し、宿へと戻る。ファイアの食事の時間も取れるようなので、荷物を部屋へ置いた二人は食堂へと降りる。

「あら！こんにちは。早朝からお出かけのようでしたが、御昼食はこちらで？」

受付のアイリスが声をかける。

「ちょっと急ぎの用事があつたの。朝御飯食べ損ねちゃったわ」

「ふふ。その分お昼は存分に召し上がってくださいな」

直時も朝食抜きを思い出し、空腹感が増す。

「ちょっと早いけど、食堂開いてる？」

ファイアが確認する。

「大丈夫ですよ。御食事されているお客さんもいらっしやいます
アイリスの返事に安心して食堂に入る二人。

さすがに客はまばらであったが、見知った顔が見えた。

「おう！こっちだこっち！一緒に食おうぜ」

ガラム一行が大テーブルの一つを占有していた。

「あなた達もここで昼食？」

「まあな。ここの飯は美味いからな」

「集合場所はギルドじゃなくても良かったわね」

「いや、そっちのお連れさんがギルド登録するんだろ？」

テーブルメンバーの視線が直時に集中する。

「解からないことはギルドの職員さんに聞くのでお気使いなく。フ
イアも折角皆ここにいるんだし、ここから出発すれば？」

直時としては何から何まで面倒みてもらうのも居心地が悪い。

「じゃあそうするかなあ」

ちよつと不服そうなフィア。

「とりあえず、座りなよ。フィア嬢と・・・」

優男のリシュナンテが窺うように直時を見る。

「タダトキ・ヒビノです。御相伴に与ります」

ガラムの隣に座ったフィアの横に腰を下ろす。

ちなみに、ガラムの反対には妹のラーナ、続いてリシュナンテ、
ダン、ヒルデガルドと座っている。

「そう固くなりなさんな。俺の名はガラムだ」

「はい。昨夜の方ですね。ガラム・ガーリヤさんと記憶しております」

虎男の迫力についつい敬語である。

ガラムはリーダーとして、仲間を順に紹介していく。フィアとP
Tを組むことだし、名前と顔を憶えていく直時だったが、うち二人
の視線が少し気になった。

(リシュナンテは魔術師か・・・『アスタの暗衣』に反応したか？何が隠されているか知らなければ問題ないだろう。あとヒルデガルドって竜の人も気付いてるっぽいな。注意しとこう)

フィアを見つけて飛んできた給仕のミュンに昼食のオーダーを頼む。フィアはミュンお勧めの魔鳥のロースト。直時はヒルデガルドが執拗に勧めた自分と同じクリームシチューとイモのサラダ。パンは同席したんだからと、ガラム達のパン籠から頂戴することになった。

「出掛けていたのはヒビノの魔術指導と装備の購入か？。して、どのような武具を購入したのかの？」

ドワーフのダンが直時の装備を聞く。

「俺ははじめての冒険者登録ですし、護身用の槍の他に便利な品ということでナイフと鉈を購入してきました。鎧は装備した方が動けなくなるだろうし、買いませんでした」

うむうむとダンが頷いている。

「実用的な品だけを選ぶとは、初心者として優秀な部類であると思っぞ？これからは日々精進されるがよい」

謙虚な姿勢の直時を気に入ったようである。単に自信が無いとも言えるが。

「それでタダトキはどんな魔術を教わったのだ？」

いつの間にか直時の隣に移動したヒルデガルドである。

「基本の攻撃魔術ということで、炎弾の術を教えてもらいました」突然の至近距離からの質問に焦りながらも応える。フィアの眉が

ピクリと動く。

「ちょっと待て。冒険者になろうという者に、炎弾の術式だけしか教えてないのか？」

ヒルデガルドがファイアに質す。

「タダで教えてもらえるんだから、最初はそんなもんでしょ？」

「槍の手練なのか？」

「いやいやいや。俺は武器そのものが初めてですよ」

「おいおい！ 武術も魔術も素人な奴を冒険者ギルドに放り込むのか？」

流石にガラムが驚愕する。妹のラーナも可哀想にと呟く。

皆の非難が集中するファイアに居心地が悪くなった直時は、ちょっと言い訳する。

「まあ、ゆっくりこつこつと安全なクエストから経験を積んで行くと思うてますから大丈夫ですよ。攻撃魔術も段階的に教えてもらえるそうだし」

いざという時は精霊術全開で対処しますとは当然言えない。ファイアがブスツとしている。

「こちらのクエストが終わったら私が指導してやっても良いぞ？」
ヒルデガルドが直時の耳元で囁く。

「・・・遊んでますね？」

「お姉さんは本気だよ？」

確信を持って問う直時に、艶然とした微笑が返ってくる。

(いや！この顔は絶対に遊んでる！いじってる！玩具認定しているっ！)

直時の確信は深まるだけであった。

早めの昼食を済ませた一行を見送るべく、直時も宿屋の前に出る。

「皆さん、どうかご無事で！クエストの成功を祈ってます」

全員が直時に笑顔を返して旅立っていった。

冒険準備？（後書き）

更新できなかった分連発してアップしました。

冒険準備？

「とりあえず服の修繕から始めるか」

見送りを済ませた直時は、自室に戻って破れたパーカーとカーゴパンツを取り出す。

「破れちゃった膝と肘に革布を縫いつけといたらかなり丈夫になるだろ」

購入した革布を、新品のナイフで楕円形に切り取っていく。同じくらいの大きさのものを4つ切り抜いた。

カゴパンの破れた膝の部分に当ててみて、裁縫道具を手にとってみる。皮を縫いつけるためのものであるから、針も糸も相当ゴツイ。布地に直接縫いこんだら細かい布地が破れやすくなりそうだ。

思いついたのは、皮で布地を挟んで縫い込むことだった。切り抜いた皮の一つを裏から当て、表からもう一つを重ねて布地ごと裏の皮と縫っていく。

片膝分だけだが、仕上がり具合を確かめるため身に付けてみる。足を曲げたり伸ばしたり、膝を着いてみたりと感触を確かめる。

「かなりゴワゴワするけど、こんなもんだろ」
気に入ったようである。

もう一方も同じように仕上げ、パーカーの肘部分も同様に修繕していく。予定の倍の皮を使ってしまったが、まだ残りがある。

「丈夫そうな皮だし、紐でも作るか」

残った皮を細長く切り裂いていく。幅約5ミリ、長さ約80センチの皮紐が10本出来上がる。

補強修繕したカゴパンとパーカーに着替え、ナイフと鉈を装備してみる。革紐は半分をベルトに括りつけ、残りを鞆に放り込む。肩にかけて鞆は腰の後ろ、丁度鉈を隠す位置へと調整する。

左腰のナイフを抜いて感触を確かめる。右順手、右逆手、左逆手。パーカーの前を空けておけば問題無いようだ。

続いて鉈を抜く。パーカーの裾をかき分けないといけないので少し取り出し難い。

「咄嗟の時はナイフ抜けたらいいか。鉈は重いもんな」

右腰か右太腿に変えようかとも思ったが、重量があるので身体の中央に重心を置いていた方が疲れなさそうだと判断する。

「さて！冒険者登録にいきますか！」

槍を右手に持ち、準備を整えた直時は冒険者ギルドへと向かう。

直時が宿屋でお裁縫をしていた頃、フィアを含むガラムPTの面

々はリスタルの街の外、街道脇の草原で本当の出発をしようとしていた。

「さて、加護祭まであと十日、既に設営隊は現地入りを始めている。ここからは急行するが準備はいいか？」

リーダーのガラムがメンバーの顔を見回す。

リスタルから目的地のリメレンの泉まで十日かかるというのは、あくまでも普人族が普通に移動してのことである。移動補助魔術や、騎乗魔獣の移動でも基本的に街道に沿って移動するため、時間がかかる。

しかし、高い能力をもつ高レベル冒険者達に街道の有無はあまり意味がない。精霊術を憶えたばかりの直時でさえ、一般の三倍以上の移動力がある。

全員が頷いたのを見届けたガラム。

「じゃあ予定通り三日の行程で進むぞ？」

ガラムが魔力を四肢に集中し始める。ラーナも同様だ。

ダンが土の精霊術で石製の小船を作り、リシュナンテがそれに『浮遊』『地走り』の人魔術を施しはじめる。

ヒルデガルドは背中から竜翼を伸ばしはじめた。

「風の精霊で加速させるから、もうちょっと早くなるわよ？」
フィアが風を纏いながら言う。

「全員にいけるのか？」

「任せなさい」

ガラムの問いに力強く応える。

「精霊達、我と仲間を重さの楔から解き放って……。そしてその身を運んで……」

呪文ではなく精霊との対話である。

「身体が羽毛みたい」

ラーナが感嘆の声を上げる。

「流石は晴嵐の魔女……。これなら二日かからないんじゃないか？」

ガラムからは呆れたような声だ。

「では、往くか！」

ガラムが先頭を切って、目的地であるリメレンの泉へ最短の方角へ駆けはじめる。

四肢を魔力で強化し疾駆する虎人族。

空気を押し退け低空を飛ぶ石船にはドワーフと普人族。

その頭上には翼を広げた竜人族。

皆と自身に風を纏わせ宙を翔るフィアは少し後方だ。

六つの影は野を森を山を谷を一陣の風のように吹き抜けていった。

リスタルの町の大通りは中央広場を東西から貫くように、それぞれ東門、西門へと繋がっている。南北方向へは南への通りはあるが、北への大通りは無い。

中央広場周辺は、領主の仕事場であるリスタル総督府、格式のある旅館、各職業の大店が軒を並べる。

町の北側には、領主の邸宅や、国軍の駐屯地、兵営、町の実力者達など、高級住宅街となっている。

冒険者ギルド、商人ギルド、職人ギルド等は中央広場に面していた。

心の準備を終えた直時は、冒険者ギルドへ向かい町を歩く。

直時達が宿泊する『高原の癒し水亭』は南門に近かったため、南大通りから中央広場へと歩を進めるのだが、行き交う雑多な種族、大通り沿いの様々な露店、中世の田舎町を彷彿とさせる景色に眼を奪われる。

「あの串焼き屋、良い匂いがするなあ。あはは、錬金で造ったのかなあ？リアルな竜の置物か、カッコいいな。あっ！猫耳の美人さんだ！耳さわわわしたいなあ」

緊張感が欠片も残さず消し飛んでいる直時である。おのぼりさんモードでキョロキョロと辺りを見回しては露店の商品を覗いたり、ケモノ系おねーさんの魅惑のしっぽに付いていってしまいそうになったりしている。

なんとか誘惑に負けず、冒険者ギルドの建物前まで辿りついた直

時は、もう一度脳内検索をかけ情報を復習する。

『冒険者ギルド』はユーレリア大陸全土のみならず、ここアースフィアに於いて国や種族の壁を越えた大きな組織である。依頼されるクエストは一般人から国家まで多岐に渡り、稀に神々や神霊の依頼も入るらしい。

登録には国籍、種族、前身など何の制限もないが、唯一『ギルドに不利益を与えた』ことがある場合登録を拒まれる。多少の不利益ならば、ある程度のペナルティーを課され、タダ働きの未登録を許されるようだ。

漠然とした共通常識として、ギルド設立に関係したのは神々の一人であったという。

「ふむ。俺の登録には問題なさそうだな。じゃあ一丁いきますかっ！」

気合を入れなおした直時は冒険者ギルドの扉を開いた。

冒険準備？（後書き）

うううう。。。設定が未整理で頭がカオスです。

冒険者ギルド

リスタルの冒険者ギルドは三階建てである。一階には登録や連絡等、受付。ギルドによるアイテム購買部。クエストの対象物引取り部がある。

クエスト依頼の受付は二階であり、簡単なクエストは掲示板に貼り出されている。PTの打ち合わせや休憩に使われる喫茶室も備えられている。

三階はギルド職員のスタッフルーム、ギルド事務所等、関係者のみ立ち入りが許される区画である。

直時は少し緊張しながら受付へと足を向ける。

受付には五人の見目麗しい女性が間隔をとって業務にあたっていた。

「すみません。宜しいでしょうか？」

手の空いている受付の一人に声をかける。

「はい。ご用件をどうぞ」

営業スマイルを浮かべる浅黄色の髪に蒼い眼の若い女性。

「冒険者登録をお願いします。何分初心者なもので、判らないこと

の説明をお願いすると思いますが、お願いいたします」

「わかりました。では書類をお持ちしますので、少々お待ち下さい」

荒くれ者が集う冒険者ギルドとはいえ大組織である。対応は丁寧だ。

「お待たせしました。こちらにお名前と種族をご記入ください。他の項目はご都合の許す範囲で埋めていただければ結構です」

直時の手元に申し込みの羊（羊とは限らないが）皮紙とペンとインク壺が置かれる。

（名前と種族だけでいいのか。聞いてた通りアバウトな基準なんだな。でもまあ問題無い項目は出来る限り埋めておいた方が信頼も増すだろうな）

名前、タダトキ・ヒビノ。種族、普人族。年齢、32歳（アースフィアの時間の流れは地球とほぼ同じで一年は360日）。国籍、白。所属団体、無し。連絡先、未定。加護、無し。祝福、無し。刻印、無し。

たいして埋めることができなかったが、無しというのも情報になるだろうと申込書を受付嬢へと渡す。

「これで宜しいでしょうか？」

「はい。問題ありません。最後にこの水晶球に手を置いてください」
「はい」

指紋照合でもされるのかと訝しげな直時である。

「少々お待ち下さい」

受付嬢は個人連絡用の魔法陣を描き、連絡相手の反応を待つ。

(この水晶球で犯罪歴とか調べるのかな?)

直時の予想はほぼ的中している。ただ、犯罪歴ではなく、過去に冒険者ギルドへ不利益をもたらす活動をしたか否かの情報を、直時個人の生体波登録とともに調べているのである。

「確認しました。登録に問題はありません。ようこそ冒険者へ」
相手の声は本人にしか聞こえないようで、結果のみを直時にニッコリ伝える。

「有難うございます。これから宜しくお願いします」
無事に登録できてひと安心の直時。

「では初めて冒険者に登録された方へのご説明に移ります。こちらへお掛け下さい」

「はい」

「では基礎知識等の転写術を行いますので、気を楽にして下さいね」
にこやかに短杖を構える受付嬢に、直時は慌てる。

「えっ? ちょっと! 転写よりは口頭でお願いしたいんですがっ!」
「直ぐ終わりますからねえ。痛いのは少しの間だから我慢しましよ
うねえ」

病院で注射器を片手に笑う看護師さんのように、斟酌の無い天使の笑みで魔法陣を編む受付嬢。

「我与えるは 冒険者の知 そのはじまりの知 此の者への知とな
さん

転写!」

心の準備もないまま直時の脳裏へと情報が強制入力される。

フィアからの転写情報と被る部分もあるが、冒険者心得からはじまり、ギルド利用規約や便利情報が流れ込んでくる。

「不意打ちとは非道いです」

激しい頭痛に堪えながら、直時は恨みがましい眼で受付嬢を見る。

「転写術の知識は記憶に刻まれて忘れないので便利なんですよ。口頭だと何度も同じ質問される方が多いため、ある程度大きな支所だとこれが普通の対応なんです。まあ、初心者通過儀礼だと思ってください」

「……わかりました。有難うございました」
礼を言うのに抵抗を感じつつも律儀に返す直時。

「冒険者カードをお造りしますので、その間、知識の確認を兼ねて二階の喫茶店をご利用ください。こちらは飲み物券で一杯は無料になります。カード発行まで四半刻程かかりますので、そのくらい後に受付に申し出てください」

「了解です」

二階へと向かう直時に、受付嬢が再び声を掛ける。

「ヒビノさんはなかなかタフなんですな。医務室に運ばれる初心者さんも多いのですよ？冒険者としてのこれからの御活躍を期待しておりますね」

「有難うございます。まあ死なないよう適度に頑張ります」

初心者に対するリップサービスだと思った直時は階段を上っていく。

「久し振りに転写術に堪えた人を見たわねっ！」

「華奢なのに根性あるわよね」

「成長が気になるところね」

「次会うのが楽しみだわ」

他の受付嬢が対応し、登録に来た二〇歳前後だろっう遅しい若者が医務室に運ばれて行く。

担当した受付嬢が同僚と噂話しているのを知る由もない直時だった。

階段を上った直時は、クエスト依頼が貼り出された掲示板を気にしつつもまずは知識の確認のため喫茶店に入る。

隅の席に着くと、給仕の女性が注文を聞きにやってきた。三色の毛並みをした猫耳おねーさんである。肩までのポブカットは前髪が白、右耳側は明るい茶色、左耳側は黒である。

「ご注文を伺いますにゃー」

「気分転換に良いお勧めのお茶をお願いします。これ、飲み物券です」

「にゃっ！新人冒険者さんなのですにゃ？転写はきつかったでしょうから、スキッと気分爽快になるお茶をおもちしますにゃ」

「有難うございます。……なんて素敵な語尾だ」

顔色が悪いながら、猫耳おねーさんに魂を癒された直時である。

厨房へと戻っていく魅惑の尻尾付きお尻を見送りつつ、早速冒険者ギルド情報を脳内検索する。

登録された冒険者には、ギルドから身分証となるカードが発行される。記載内容は名前と冒険者のランクのみ。

ランクは八段階。最高ランクはS。次いでAから順にGまで（表記がアルファベットであるのは便宜上）。

同ランクのクエストは何度受けてもランクアップはしない。同ランククエストを10件以上完遂し、且つ一段上のランククエストを3件こなすことによりランクアップする。

クエスト失敗には、ランクアップに必要なクエスト達成数が失敗数の二倍必要になる。ただし、上ランククエストの失敗は同ランククエスト5件を新たに完遂せねば受けられない。

（つまり、俺がGランクを8件達成して次に失敗すると合計12件完遂がFランクを受ける条件になって、Fランクを1件失敗するとGランクを5件完遂しないとFランクを受けることができないってことかな？）

罰則規定。故意に冒険者ギルドに不利益を与えたものは除名され、罰則が科される。最悪討伐クエストの対象になることもある。故意でない場合はその旨を申告し、ギルドに了承されればある程度のペナルティ後、復帰を許される。

（身分保証と仕事の斡旋をしてもらえる代わりに、ペナルティもあるわけか。しかし討伐対象って・・・、冒険者みんなから狙われるってことか）

脳内情報の冒険者の心得を検索しつつ、真面目に働く決意を固める。

「お待ちどうさまにや」

猫耳ウェイトレスさんがトレイを片手に直時のテーブルにやってきた。

「鎮静効果のある花茶にや」

「有難う」

「ふむ」

「なにか？」

「お客さんは昨日エルフちゃんと一緒にこの町に来た人かじゃ？」
直時を覗き込んでくる。

「ああ！宿屋を紹介してくれた猫耳ねーさん！」

「やっぱりにゃ。その黒髪に見覚えがあったのにゃ」

「あのあとすぐに宿泊できました。有難うございました」

「堅苦しい挨拶は無しにゃ。うちはミケラ・カルリン。今はここで臨時の給仕をしているのにゃ」

「自分はタダトキ・ヒビノです。登録したばかりの駆け出し冒険者です。宜しくおねがいます」

「これから御贔屓にお願いするにゃ。うちのことはミケでいいのにゃー」

何故か直時の頭をわしわしと乱暴に撫でる。

「うむ！良い毛並みなのにゃー」

黒髪が気に入られたようであった。

冒険者ギルド（後書き）

煩惱の赴くままやってしまいました。

三毛猫ミケさあーん！

冒険者ギルド？

冒険者ギルド、リスタル支部二階。

清々しい花茶（香りは仄かな柑橘系だった）で気分を落ち着けた直時は、冒険者カードが出来るまで、同じ階にあるクエスト依頼掲示板を眺めて時間をつぶしていた。

（やっぱり魔獣の討伐とかが多いんだなあ。あとは護衛かあ。隊商の護衛、役人巡回の護衛、ん？国境警備隊の護衛？警備隊が守られてどうすんだよ！採取もランクが高いのは魔獣相手か・・・怖いなあ。地道に薬草の材料とか、畑の害獣駆除とかから始めるかあ）

同じように掲示板を物色している冒険者達がいるが、直時ののはほんとした雰囲気から初心者だと判っているようで、様子を伺うも声はかけてこない。

普人族としても小柄で華奢な体格であるし、面白半分のPT勧誘もされなかった。

具体的なクエスト内容を確認できた直時は、冒険者カードを受け取りに一階へと降りる。

「どうもー。先程登録させていただきました、ヒビノです。冒険者カードは出来上がってますか？」

対応してくれた浅黄髪の受付嬢に声をかける。

「ああ、ヒビノさん。喫茶店に呼びに行こうかと思っていた処でした。出来上がっておりますよ。こちらがヒビノさんの冒険者カードになります」

名刺大で厚さが5ミリ程のベッコウのような材質のカードである。

「今は名前が彫り込まれてあるだけですが、少し魔力を込めてみてください」

言われた通りに、ほんの少し直時が魔力を込める。

「文字が浮かび上がってきました。これは・・・ランクG」

「これでヒビノさんご本人の認証確認も済みました。ランクアップの際は、冒険者ギルド受付にお預けください。魔術処理の後、同じように魔力を込めていただきますと、新しいランクが表示されます」

「了解です」

「これでヒビノさんは冒険者として正式に登録されたことになりました。何かクエストを受けてみますか？」

「二階掲示板は覗いてみたんですけどね。初心者向けのクエストとかはなさそうですね」

「それでは共通クエストを受けてみてはいかがでしょう？」

直時は脳内のギルド情報を検索する。

『共通クエスト』簡単な採取依頼。各ギルド支部で掲示してある品があり、特にクエストととして受けなくても、品物だけを持ってくればギルドが買い上げる。主に需要が多いが単価が安い薬草の材料や、日用品の材料等がそれである。買い取り価格は時価であるが、採取のし過ぎによる値崩れも防いでいる。

「そうですね。慣れるまでは共通クエストにします」

「買い取り品の一覧と買い取り額は二階掲示板の裏側になっております。採取対象の情報は初心者向けですから、転写の知識に入っておりますのでご確認くださいね」

「裏側にもあったんですね。見ている人がいなくて気付きませんでした。初心者さんはあまりいないのですね」

「今日はもう夕刻近いですからね。皆さん午前中に確認して出掛けられますから」

「そうですね。じゃあ自分も確認だけして出掛けるのは明日にします。色々と有難うございました」

「いえいえ、これが仕事ですからお気になさらず。ではヒビノさんのこれからの御活躍を期待しておりますわ」

「ども」

直時は、最後にもう一度頭を下げ、二階へと階段をあがる。

「あつたあつた。なるほど裏にずらつと並んでるな」

採取対象をひとつずつ確認し、脳内情報と合わせて検討する。

「とりあえずメモって帰ろう」

鞆から手帳とボールペンを出し、書き出していく。

安易に日本の品を出していたが、掲示板が陰になり人目につくことは無かった。フィアがその場にいれば後頭部を叩かれたところである。

「これでよしっ。じゃあ明日に備えて早めに休まないとな」

直時の初冒険はぐだぐだのうちに明日へ延期となった。

ギルドを出て大通りを南へ向かう直時。往路と違い、時間の余裕ができたため、気になる店や、クエスト内容が採取と決まったことから必要になるかもしれない品をチェックしつつゆっくりと歩いていた。

先ず気になったのが魔法陣を描いた看板である。

(マジックアイテムの看板は確か杖だったよな？ちょっと覗いてみるか)

好奇心から店の扉を開く。

「いらっしやいませ」

魔術師というより商家の若旦那といった男性が声をかけてくる。

長身を包むゆったりとした藍色の上衣は膝近くあり、いかにも魔術師っぽいのが、人懐っこそうな笑顔に女性客が多いんだろうなと思わせる。

「本日はどのような魔術をお求めですか？今ならサービスで上位術への上書きを無料でさせていただきますよ？」

(ああ！なるほど)

男性の言葉に漸く合点がいく直時。

人魔術は魔法陣によって効率よく発動するものの、用途別に膨大な量が必要になってくる。そのため、知識として憶えるというよりは、転写術によって強制的に脳に刻みつけるのが一般的であるらしい。

つまりは直時の感覚では電気製品のようなものであると理解しはじめたのだ。

例えば洗濯したいときは洗濯機、灯りが欲しければ照明器具、加熱調理には電子レンジと、エネルギーは同じ電気ではあるが、必要に応じて品物をそろえねばならない。

人魔術もそれと同じで、一般人は魔法陣の構成や法則など知らずとも、魔術店で自分が欲しい魔術を購入して転写してもらうのである。

その際、理解できない多くの魔法陣を記憶しておくのと脳に負担がかかるらしく、同系列で高機能の魔法陣を購入する場合、古い魔法陣は上書きし消してしまう。

多くの魔法陣を欲する人には脳に高負荷がかかることになるが、使いこなしていけばある程度負荷が軽減していくようである。

「冒険者ギルドに登録したんですけど、憶えてる攻撃魔術が『炎弾』だけなんで、ちょっと財布と相談しながらどんな魔法陣があるかなあーって寄らせてもらいました」

若干貧乏アピールをしつつも情報だけは収集する気満々である。

「それはお困りですね。冒険に出られるのでしたら、せめて2系統、各3つくらいは攻撃魔術が欲しいところですね」

(ちっ！ファイアの奴、やっぱりケチってやがったな！)

心の中で文句を言う直時は、それでもまずは相場を確かめる。

「ちなみに水系統の初歩攻撃魔術だと、お値段はいくらぐらいですよっ？」

「水系統ですと、『水球』ですね。衝撃を内部に与える初級魔術ですが、金貨1枚と銀判貨3枚になります」

(……足りない)

直時の頬を汗が伝う。

「そうですね・・・。頑張つてクエスト達成してからまた来ます」
「お待ち申しております」

肩を落とす直時に気の毒そうに声をかける。見かけだけでなく心根も良い若者のようだった。

（くそう・・・フィアめ・・・。こうなつたら今晚は生活魔術を魔改造してやるう！）

直時が危ない計画を決めた瞬間であった。

宿屋までの帰り道、肩掛けタイプの鞆ではいざという時の邪魔になりそうだったので背囊を一つ購入した。

フィアの使っているものより一回り大きい。あと、採取アイテムを入れるための革袋を予備を含めて3つ買う。合計で銀判貨5枚と銀貨2枚、白銅判貨3枚であった。

宿に戻ると早めの夕食を済ませて、明日の準備のため部屋へ戻る。フィアが出掛けてしまったため寂しげな兔耳娘ミュンにお願いしてお茶セットを用意してもらい、夕食代とあわせてお金を払った。

煙管を燻らせつつお茶でお腹を落ち着かせた直時は、懸念事項であった攻撃魔術を考える。

「さてと。『炎弾』とは逆に水系統の術からいくか」

脳内の生活魔術から、改造しやすいそうな術をピックアップする。

(魔術店で聞いた『水球』っぽいのを作ろうとすると、水を放出するタイプの術を改造するのが手っ取り早いだろうな)

「うん。これがいいかな。」

花と草木に潤いを与えん

いでみず
出水

術を発動させずに、魔法陣だけを出現させる何故か直時だけの裏技である。

「本来は花や野菜に水をやる術か……。そこにある水を移動させるんじゃないくて、水を造り出すからかな？ 魔力の消費量が多いな。」

「まずは水の放出量と放出速度をいじってみよう。っと、うわ！ 必要魔力が多過ぎる！」

直時の常識外れの魔力量から見れば微々たるものであるが、小型軽量高出力高機能は日本人の性さがである。

「攻撃魔術の獲得という目的からはみ出し、あれこれと手を加えていく。」

「水球になるように描き変えるよりは、出しっぱなしでいいから水の集束を高くして……。噴出速度はやっぱり送風の術を改造して描き加えてブーストしよう」

ぶつぶつと呟きながら、使えそうな魔法陣を出したり引っ込めたりしているが、消し忘れた魔法陣が直時の周囲に光ったまま浮かんでいる。

「よし！ できた！ 名称『ウォーターカッター』の術！……」
「攻撃魔術じゃなくて加工用魔術じゃないか」

やっぱりモノ造り日本人であった。

直時は、攻撃に使えないこともないと言いつつ、記憶野に新たな魔法陣を仕舞い込む。

「やっぱり長年練り込まれた魔法陣に付け焼刃じゃあ敵わないか。とにかく手数は増やしておかないとな」

明日の冒険のための暫定魔術だと割り切り、数種類の攻撃魔術をでっちあげていく。

結果、出来上がった魔術は以下の通り。

『ウォーターカッター』 細い高圧水流で対象を切り裂く。放出は3秒まで可。放出角度変更可能。

『水塊』 初歩攻撃魔術『水球』もどき。水の塊を対象に高速でぶつける。

『崩土』 生活魔術『耕土』を改造。敵の足元の地面を耕して、体制を崩す。

『岩盾』 土木錬金魔術『石化』土から石を造り出す術を応用。眼前に岩を生成して敵を阻む。

『スタン』 電撃の魔術を知らなかったため、いろんな魔術を組み合わせ、フレミングの右手の法則を思い出しながら造った魔術。電撃で相手の運動神経を麻痺させる。

『炎弾・改』 ファイアに見せた炎弾改造版。

『炎弾・散』 改の炎を小さく分割し、広範囲へ攻撃。

「もう駄目だあ！知恵熱が出るわーっ！」

叫んで寝床へと潜り込む直時。

風系統については、いざとなったら風の精霊にお願いするつもりだ。

明日は漸く初クエスト。緊張はあるものの、初心者クエストだと思い出した途端、眠りに落ちていった。

冒険者ギルド？（後書き）

説明を台詞に混ぜるか、脳内検索に任せるか・・・。
説明を端折るのが筋なんでしょうが、性分なのかな・・・；；
徐々に減らしていこう・・・。

はじめての冒険

リスタルの町にその日最初の朝陽が差し込む。本日は快晴。通りを行き交わす人が増えていき、緩やかに活気が満ち始める。

「よしっ！朝飯も食ったし、装備も準備よしっ！」
冒険者として実質初日の直時は気合充分だ。

右手に槍をつき、ナイフと鉈を腰に装着。背囊に革袋を詰めて準備万端の戦闘態勢だ。日本でなら一步外に出れば即逮捕である。

自転車と冊子を部屋に残し、階段を下りる。

「わあ。格好良いですよ」
鍵を渡すと受付のアイリスが褒めてくれる。

「有難うございます！では出陣いたしますっ！」
いくらなんでも気負い過ぎである。頭がコスプレ武者化している。

「お待ちください。」ご注文のお弁当です」
呼び止める声に我に返った直時は今までの言動に赤面する。

アイリスが垂れ目を優しそうに細めてクスクス笑う。弁当は大きな葉で包まれた物が二つある。

「あ。すみませーん。ちなみに献立の方は？」

「内緒です」

「えええ？」

「お昼を楽しみにして下さい」

「はい。じゃあ稼ぎに行つてきます」

「いつてらっしゃい」

のほほんとした雰囲気に戻つた直時であつたが、玄関先で再び呼び止められる。

「タダトキさん。くれぐれもお気を着けて」

「お心遣い感謝します。安全第一で行つてきます」

経験者の付き添い無しでいきなりソコ活動をする直時に念を押すアイリスだった。

弁当の包みを背嚢へ納めた直時は片手を上げながら南門を目指した。

「おはようございまーす」

「おう！おはよう！若いの、出立かい？」

「ギルドに売る薬草採取に出掛けて来ます。夕刻には戻りますよー」

「ほう。冒険者かい。その分だと素人さんだな？」

「あははは。判ります？今日が初めてなんですよ」

「そうかい。無茶はするなよ？」

斧槍を軽々と持つ衛兵が直時に釘を刺す。

「薬草採取つてーと、南東の草原あたりかい？」

「はい。治療薬の触媒だと聞いた『イクサ』がその辺りにあると聞いてますので」

「そうかい。だが、あんまり南に下るんじゃないねえぞ？ちよつと南の

岩山に素人さんには厄介な魔物がいやがるからな」

「それは怖いな。ちなみにどんな奴なんです？」

「大岩猿って奴でな。固え上に群れて襲ってくる。一人じゃ良い餌食だぜ？」

「……近づかないようにします」

「それでいい。冒険者なんて臆病じゃなきゃ直ぐにおっ死んじまうからな」

「御助言ありがとうございます。行ってきます」

「おう！気をつけてなー！」

直時は背中を叩かれつんのめりそうになったが、乱暴ではあるものの貴重な情報に感謝して町を後にした。

精霊術を禁止されている直時は、のんびりと街道を歩く。

周囲に広がるのはなだらかな草原。疎らに生えているのは低木か、丈のある草むらだけ。リスタルの町に近いため、盗賊も現れない。

「そろそろかな？」

街道脇に生える低木の形を記憶して、東へ向かって草原に分け入る。

「歩きにくい」

遠目には芝のようだが、実際は膝上までの高さがある。かき分けて歩くのは骨が折れた。

「群生地までちょっと遠いかな？でもまあ、探しはじめるか」

直時は、とりあえず周りの足元を見渡してみる。資料にあった形の葉は無い。

「腰があ……」

中腰で草をかき分けていたので当然である。少し考えた直時は、魔法陣を編む。

「視えざるを視 聞こえぬを聞き 触れ得ぬものに触れよ 探知強化」

以前ファイアが使った魔法陣を盗み見していたが、間違いなく憶えていたようだ。

魔術により研ぎ澄まされた視覚をフル活用し、ゆっくりと歩き出す。

直時の広がった視界にそれらしき葉が映った。確認に近づく。

「ヨモギみたいな葉で、一番下の双葉だけは丸いっつと。これで間違い無さそうだ」

当たりのようである。

ジグザグに歩きながら探しまわり、昼までに5株を採取できた。

「さーって、お昼御飯はなーにつかなあ」

楽しそうに大きめの低木の根元に腰を下ろし、包みを開く。

包んだ葉の清々しい香りとともに手元にあるのは、

「………昆布巻き？」

片方は具を詰めたパンだと解かるが、もう片方は塩漬け肉に昆布

(?)を巻いたものであった。しかも手のひらサイズの。

「オットーさん、俺の好物だってサービスしてくれた？」

直時は確かに昆布を切望していたが、この使い方はあんまりである。

「いやいやいや、料理長渾身の一品だ！意外に美味いかもしれない」
気を取り直した直時だったが、踏ん切りがつかないのかパンの方から口へ運ぶ。

横からナイフを入れ、具が詰められたバケツト。しゃきしゃきの生野菜と炙った肉、そして昆布が入っていた。

「こつちも昆布かよ！」

正直昆布が無かった方が美味しそうだった。

惜し気もなく使われた昆布を見て、簡単に入手できそうだと期待が増すが、次の一品には正直期待が持てなかった。しかし、躊躇いしつつも齧りつく。

「昆布の旨味が塩辛いハムの味をやさしく・・・」

直時は、料理コメンテーターの呪文を唱えながら咀嚼する。

「おやつさん・・・。出汁の決め手が・・・昆布なんだ・・・」

微妙な料理を完食し、リスタルの方の空をみて呟いた。

昼食後、薬草採取を再開する。早速一本目を発見するが、直時は何か思いついたのかイクサだけでなく、周りの野草も丹念に観察す

る。

「よし」

額いた直時は、すぐに次も見つけ出す。それから、短時間で8株を見つけ出すことが出来た。

どうやら、周囲の植物相ごと探すことで見つける効率が上がったようだ。

「今日のところはこんなもんだろ」

汗を拭い、合計15株のイクサが入った革袋を満足そうに眺める。

帰途に着くべく踵を返した直時は、その瞬間微かな地響きを感じた。

(まさか大岩猿？注意された岩山には近寄ってないのに！つか、岩山すら見えないぞ！)

焦りながらも、地響きの方向に目を凝らす。

「あれか？」

草を千切り飛ばし、土砂を巻き上げながら向かってくる獣の群れ。

探知強化により、直時の視力はその姿を判然と捉えた。

猿と言うよりは類人猿、強いて言えば狒々(ひひ)のようだ。しかし、名前の由来であろう岩のような塊が額と上腕に生えており、体長は3メートルはある。

「あんなの相手にしたくないっ！早く逃げないと」

群れは十数頭いるようで、まっしぐらに直時のいる方へ疾走してくる。

「でも、俺が標的か？」

直時が疑問に思うのも無理はない。魔術で鋭敏化した感覚で察知する前から群れは駆けていたのである。

「横に逃げてみるか」

追われるように進行方向へ逃げてもすぐ追い付かれるだろう。直時は群れと直角になるよう走り出す。

必死に走る直時。迫る群れを横目で確認するが、進路を変えようとせず一直線だ。

直時は巨猿の暴走を辛うじて回避することができた。

っ！

その脚がもつれ始めた瞬間、魔獣の叫びが上がる。威嚇ではない。咆哮でもない。それは悲鳴だった。

直時は倒れるように背の高い草むらに飛び込む。

心臓は早鐘を打つかのようで、肺は酸素を求めて喘ぐ。そのまま地に伏したくなるのを堪え、悲鳴を放った巨猿を窺った。

大岩猿は苦しげにもがいていた。身体には数本の真つ黒な槍が刺さっている。そこへ黒々とした大きな獣が襲いかかった。

姿は巨大なヤマアラシ。体長は5メートルを超えている。

「そこそこリスタルに近いのにこんなのがいるの？」

戦慄を禁じえない直時である。

大岩猿は首を喰いちぎられ動きを止めた。

キユイーーーーっ

大ヤマアラシが勝鬨の声を上げる。

「長居は無用だな。撤退だ」

直時は早々に逃げ出したいが、距離をとったとはいえあの巨体である。追いかけられれば逃げきる自信がない。

脂汗を滲ませつつ、とりあえず匍匐後進でゆっくりと離れることにする。

血を啜っていた大ヤマアラシが突然鼻を高く掲げた。それを見た直時は即座に風の向きを確かめる。

(風上だ！)

直時に向かって疾走し始める大ヤマアラシ。

「逃げ切れない！迎撃するしかない！」

直接攻撃が通じるとは思えない。立ち上がって魔方陣を編む。

姿が見えたことで、一直線に向かってくる大ヤマアラシの行く手、直時の手前に魔術が放たれる。

「土は石に 石は岩に

『岩盾』！」

高さ5メートル、幅3メートル程の将棋の駒に似た五角形の岩が屹立する。

ひとつではない。直時の左前方に2つ。右前方に2つ。正面は無

防備だ。

大ヤマアラシの進路が変わらないのを睨みつつ、次の魔方陣を編む。

「焼けつく炎　炎弾・散！」

小さな炎の散弾が大ヤマアラシを覆い尽くす。

体表を焼かれながらも、直時に怒気を放ってくる。

「水よ　貫け　ウォーターカッター！」

至近に迫られながらも、止めの魔術が放たれる。

脚を止めていた大ヤマアラシにこれを避ける余裕は無かった。

糸のような水線が頭から胴の半ばまでを断ち割る。断面から血を噴出させる大ヤマアラシは、大きな音を立てながら倒れ伏した。

「ふへえ〜・・・」

緊張の連続に耐えかね、直時はその場に腰を落とす。

安堵も束の間で、またも地響きが鳴る。

「今度は何だよ・・・って、うええっ？」

先ほど別方向に逃げて行った大岩猿の群れが直時を目指してくる。その後ろからはもう一体の大ヤマアラシ。

大岩猿を仕留めた時の雄叫びは勝鬨ではなく、エサの確保を知らせる叫びだったのである。大ヤマアラシは番であった。番は他のエサを追い込んできたのだった。

「無理っ！勘弁してっ！」

泣き言を叫びつつも、魔方陣を編む直時。しかし、魔方陣はひとつたつではなく直時の眼前を埋め尽くす勢いで現れる。

「磐石の大地 其は幻なり 揺れよ 崩れよ 崩土！」

直時の眼前から放射状に大地が揺れ耕され、柔土へと化す。

巨獣達は自重を支えきれず、踏み込んで埋もれていく。

「波打つ水面 珠の海 進れ 水塊！」

ひと抱えもある水の塊が、身動きの取れない魔獣達に容赦なく降り注ぐも、致命傷には至らない。

そして最後の魔方陣が列を成す。

「進め 飛べ ならば左手に雷を スタン！」

晴天の下、大気に雷が満ちる。濡れた魔獣達は例外なく四肢を引き攣らせた。

「きよ、今日の、ところは、これで、勘弁、してやるっ！」

逃げることで頭がいっぱいの直時は、息も絶え絶えで捨て台詞を吐く。

喰いちぎられた大岩猿。切り裂かれた大ヤマアラシ。動けない魔獣達。そんな中に立つ小さな人影。

明るい陽射しに包まれたそれらを大きな影が包み込んだ。

「………鳥か」

見上げる直時が咳く。

明らかに縮尺がオカシイ。直時の眼が確かなら、翼長15メートルはあるだろう猛禽が頭上を旋回している。

滞空姿勢から突入し始めたのを認めた直時は呟く。

「ファイアさん。これは解禁だよな？」

直時の周囲で風の精霊達が舞い踊る。

「精霊さん達、いいよね？」

笑い声が聞こえる。

風切音が聞こえ出した時、直時は精霊に意思を伝える。

「風刃逆巻け」

瞬間、巨大な竜巻が巨鳥を飲み込んだ。強風が翻弄するだけではない。竜巻は無数の風の刃の集合であった。

血飛沫と肉片が降り注ぐ中、大きな羽毛がゆっくりと舞い降りてくる。

動けぬ魔獣達の怯えを他所に、直時は歩き出す。リスタルに帰るために。

「ん？」

周囲に体長1メートル程の蜘蛛が蠢いている。

血の匂いに集まってきたようだ。

脳内検索。斑土蜘蛛。脚の身は美味。食材として重宝される。

ズブツ

毒を持った強靱な顎が噛み付く暇もなく、直時の槍に頭を貫かれる。

「斑土蜘蛛、とっただどー」

血まみれの直時の口調からは抑揚が感じられなかった。

はじめての冒険（後書き）

この数日、なにがなにやらわからずに混乱しています。

でも感想を頂いたり、多くのお気に入りを登録頂き、本当にありがとうございます！

本日の更新は一区切りつけたかったので長めになりました。
以降、更新はちょっと間を置きたいと思います。

はじめての冒険？

直時が薬草採取に精を出している頃、移動中のガラムPTはアクシデントに見舞われていた。

「放て 七つ矢 穿て 風の虚うつろ 疾風槍」

リシュナンテの魔法陣から高速で風魔術が発射される。

撃ち落とされたのは、ひと抱え程の蜂だ。

「命中3匹ですか。相手が速過ぎます。人魔術ではきついですね」
口調に余裕があるのは、フィアの護風が襲い来る蜂を寄せ付けないからだ。

「リッテ！ダン！お前らは先行しろ！ヒルダ！二人の援護をまかせ
る！」

ガラムの支持が飛ぶ。

「じゃ、お先に」

リシュナンテが軽く手を挙げ、飛ぶ石船を加速させる。後ろに座ったダンは腕を組んで黙したままだ。

「上空から援護する。いざとなれば、炎の吐息フレスで焼き払うが良いか？」

ヒルデガルドが頭上から許可を求める。

「まかせる！が、やり過ぎるなよ？」

「ふっ、善処する」

ガラムの心配を余所に怖い微笑を残して二人を追う。

「全く……。いつの間に犬蜂が巣作りしてたのよ？」

ラーナがぼやくのも無理は無い。リメンの泉への最短コースはこないだ偵察の折に通ったばかりだったからだ。

「出来てたもんは仕方ない、さっ！」

ガラムが返事しながら、右から襲いかかった犬蜂を鋭い爪で掻き裂く。

「ファイア！済まないが俺達3人で殿だ。リツテとダンが距離を取るまで敵を引きつける」

「殿なら私が引き受けるから、あなた達も急ぎなさい」

「無茶っ……。てわけでもないか。じゃあ任せたぞ！晴嵐の魔女！」

「……。誰が魔女よ。了解よ！」

小声で不平を言いながら、犬蜂の群を乱気流でかき乱す。

短杖を構えたファイアが一番の障害だと認識した犬蜂達は、ガラム達の追撃を止めて集まりだす。

ファイアの周りに犬蜂の羽音が満ちる。

「巣を騒がせたのは悪かったけど、襲って来るなら容赦はしないわでも、その前にちよつと脅かしてあげましょうか？ね？」

周囲の精霊に笑いかける。

犬蜂達の飛行を乱していた風が、急に激しさを増した。

颯風くふうの中、蜂達はあるものは樹に叩きつけられ、あるものは地に落ちる。

羽搏きをやめ、手近のものに六肢でしがみつくと犬蜂の群れ。

「これでもやる？」

風を呼び戻したフィアは、自身で竜巻を身に纏う。

吸い込まれた小枝や木の葉は一瞬で粉々だ。

漸く飛ぶことを許された犬蜂達は、本能に従いその場から逃げ去って行く。

「もう大丈夫ね」

残らず逃げ去ったのを確認したフィアはガラム達の後を追いかけ始めた。

リメレンの泉まで、あと半日であった。

直時は槍を肩に担いでリスタルへと街道を歩いていた。

槍の両端には斑土蜘蛛が一匹ずつ（もう一匹狩った）括りつけられ、背囊には肉塊となった巨鳥の一部が薬草とは別の革袋に入っていた。

血塗れだった姿が跡形もないのは、生活魔術で洗濯乾燥を済ませたからだ。

冒険初日の薬草採取が、魔獣との大規模戦闘になったショックで考えるのを停止していた直時だったが、黙々と歩くうちに徐々に思考を取り戻しつつあった。

(薬草一株が銀判貨1枚なんてボロいと思った自分が莫迦だった・・・。異世界がこんなに物騒だったとは・・・)

直時の感覚だと、買い物に行ったら歩兵と戦車と戦闘機が襲ってきたようなものだ。

「冒険者って、傭兵よりすごいんだなあ」
襲撃者を撃退して生還している自分のことは棚上げである。

「大岩猿の装甲とか大ヤマアラシの刺とかもお金になったのかなあ？」

逃げることで頭が一杯だったため、そこまで気が回らなかったようである。ただ、食材という一点でのみ巨鳥の肉を持ち帰っただけだった。

(どうせこれ以上の荷物は重くて無理だったさ)
あれは酸っぱい葡萄だったのだと、無理やり思い込む直時だった。

「ただいまですー」
朝に見た衛兵に声をかける。

「おう！おかえり！無事だったようだな。それに大漁じゃねえか？」

「斑土蜘蛛はたまたまです。目的の薬草もちゃんと取れましたよ」

「ふはははは！初日にしちゃあ上出来じゃねえか！酒場で会ったら奢ってくれよ？」

「あはははは。見つからないようにしないといけないですね」

そう言つて、銀貨1枚を税として渡して町に入る。

「しかし無事でなによりだったな。南山岳地帯で大規模な魔獣掃討作戦があつたらしいから、とぼっちり受けてやしないかと心配したぜ」

初耳である。

確かに夕刻近いが、南門にクエストを終えて帰ってくる冒険者や交易商人達の姿が見当たらなかった。

「運が良かったみたいです。それじゃあ自分はギルドに寄ってきますので失礼しますね」

あの戦闘は黙っていたほうが無難だと判断した直時は、ギルドに逃げるように向かうのであった。

冒険者ギルドの扉をくぐった直時は、まず1階の買取カウンター
の列に並ぶ。

「薬草イクサが15株あります。確認お願いします」

自分の順番になつたので男性職員に申し出る。

「イクサが15株ですね。うーん。少し傷んでいるようですね。買取は8掛けで、銀判貨12枚になりますますが宜しいですか？」

戦闘時に傷んでしまったようである。

「了解です。あと、クエストを受けて無かったし、共通クエストにも入っていないのですが、この斑土蜘蛛は買い取ってもらえるんでしょうか？」

「2階掲示板に依頼があり、それを受付に申請すれば買い取らせてもらいますが、依頼が無ければご自身で市場に売っていただくことになりますね」

「わかりました。確認してきます。では先に薬草の換金をお願いします」

「はい。報酬の銀判貨12枚です」

「有難うございます。また宜しく願います」

「頑張ってくださいね」

直時は銀判貨12枚を手に入れた。

運良く斑土蜘蛛捕獲の依頼はGランクで複数件出ており、直時は捕獲数の合う依頼書を剥がして受付へと持参する。

記憶にある浅葱髪の女性が入り、空いていたその受付嬢の前に行く。

「すみませーん。この依頼書をお願いします」

「ヒビノさん！ご無事で何よりです！」

受付嬢の勢いに腰が引ける。

「あ、有難うございます。何事です？」

「今朝、南方で大型魔獣の掃討クエスト行われまして、低レベル冒険者さん達に南方への避難勧告が出ていたんですよ！ギルドに寄られなかったそうで、知らずにお出かけになっていたらと心配していたんですよ？」

「あーっつと、それはご心配をお掛けして申し訳ありませんでし

た。でも無事に帰ってこれましたので、運が良かったんですね。あはははは」

魔獣の襲来はそういうことだったのかと納得しつつ、何も見なかったことにしようと決心する直時だった。

「これから、冒険に出られるときは事前情報の確認にギルドへ顔を出すようにしてくださいね？そのための冒険者ギルドなんですよ？」

「肝に命じておきます！」

強い口調に思わず敬礼しそうになる。

「ところでですね、薬草採取のついでに斑土蜘蛛2匹を狩ったのでこちらのクエスト依頼書の受理をお願いしたいのですが」

「あ、はい。承りました。じゃあ、この確認書を引取り係にお渡しください」

「有難うございます」

「薬草も採取できたのですか？」

「はい。先ほど買い取ってもらいました」

「初日でこれだけ成果を上げれるなんて、素晴らしいですね。おめでとうございます」

「運が良かっただけですよ。これからも精進いたしますので宜しくです」

本当は討ち漏らされた魔獣に襲われて運が悪すぎるのだが黙っていた。

斑土蜘蛛捕獲報酬は、1匹につき銀判貨15枚。2匹で金貨1枚と銀判貨10枚になる。

直時の冒険初日の収入は金貨1枚と銀判貨22枚であった。

その日、高原の癒し水亭に戻った直時と料理長のオットー氏の間
で料理戦争が勃発したのはまた別のお話である。

はじめての冒険？（後書き）

兄「今日の話はどうしよっかな」

妹「仕事に差し支えるよ？」

兄「ふはははは！兄をなめるでない！どんだけ調子悪くても仕事落としたことはないぞ！」

妹「健康管理も仕事の内じゃない？」

兄「……………ごもつとも」

内臓が……………な、作者です……

盗賊へ死を

直時達がリスタルに来て3日目の朝。

「おはようございます」

「おはようございます、タダトキさん」

「そうだ、アイリスさん。宿泊延長お願いできます?」

「有難うございます。何泊にさせていただきますでしょうか?」

「とりあえず10日延長でお願いします。クエスト報酬入ったんで、手元にあるうちにお支払いさせてもらいますね。持つてると必要なものまで買ってしまいそうで」

「うふふ。有難うございます。長期割引で銀判貨10枚になります」

「えっ!それってちょっと安すぎませんか?」

「長期割引は本当にしてるんですよ?それに鶏肉のお土産、美味しかったですからね」

直時は、オットー氏との料理戦争のおり、巨鳥の肉塊を食材として提供していた。

「父が言うにはとても珍しい食材だとか。食堂のお客さん達も大変満足されましたし」

「そう言ってもらえると嬉しいです。じゃあ、宿泊代です」

「毎度有難うございます。今日はどちらへお出かけですか?」

「また薬草採取のつもりです。その前にギルドで情報確認かな」

「では、お気をつけていつてらっしゃい」

「行ってきます」

昨日出掛けたときと同じ格好で宿を後にする直時だった。

南大通りを中央広場に向けて歩く。懐が温かいと目移りするものがあるようで、早朝にも関わらず営業を始めた店を覗いている。ギルドに到着するまでに、直時は木のコップ2つと携帯用乾パン、干し果物、干し肉を買った。無駄遣いはしなかったようである。

ギルド会館には、冒険者達の熱気が満ちていた。

公開情報掲示板（今日その場所に気付いた）を見ると、リスタル南部のランクE以下への避難勧告は、警戒レベルになってはいた。

しかし、街道の安全確保のために、シース公国からはぐれ魔獣の掃討クエストと偵察クエストの依頼が出ていたため、中堅より上ランクの冒険者が集まっていたのだ。

直時は、今日の薬草採取は南方を避けようと、近場の群生地を脳内検索する。

西方の平原にもイクサが採取できるところがあるようだ。

先日の失敗で懲りたため、まずは受付で情報を収集する。

ここ何日間か、大きな魔獣の出現は報告されていなかった。かわりに盗賊団が、町の近くまで出没するようになり、近々リスタル駐留軍が動くことになりそうだとの情報であった。

「イクサ群生地までは1日で採取往復できる近さのため、盗賊との遭遇はないと思いますが、十分に気を付けてください」

紅い髪をポニーテールにした受付嬢から注意を受けた直時は、さらに情報を求める。

「西のイクサ群生地付近で、過去に目撃された魔獣の種類とランク

を教えてください」

「少々お待ち下さい」

魔法陣を描き、直時の要望を相手に伝える。実際の情報検索は専門の職員がいるようだ。

「お待たせしました」

列挙される名前は、どれも基礎知識にある魔獣ばかりで、群に囲まれたりしなければなんとか対処が可能だと判った。

「有難うございました。助かりました」

「いえいえ。お気をつけて行ってらっしゃい」

営業スマイルとはいえギルドの花である。直時は照れくさそうに受付を後にした。

西大通りから西門を出る。昨日の南街道と違い、商人や旅人の姿が散見される。

「普人族ばかりだな？」

西へ向かう、または西からくるのは殆どが普人族であり、たまに見かけるのは妖精族か竜人族くらいだ。獣人族は全くと言っていいほど目にしない。

直時が脳内検索をかける。

これより西の普人族の国は軍事大国が多く、国としての結束は強いが、その分他国や他種族への蔑視や差別が顕著である。

かつて竜人族と戦争を起こした国が、守護竜に滅ぼされたこともある。そのため竜人族には恐怖を精霊魔術を能くする妖精族には畏

怖を感じる普人族が多い。

その分、獣人族を蔑み、差別や迫害が日常的になっている。

「猫耳や兔耳に萌えないとは、憐れな奴等だな」

直時は脳内情報に眩きを落とした。

リスタルの西に広がる平野も低木が多く、森は少ない。南部との違いは、石灰岩であろう大きな岩がそこかしこに点在しているところである。

そんな岩のひとつに、なんとなく地蔵を思わせるものがあり、直時はそれを街道側の目印として草原地帯へと踏み込んだ。

群生地付近へと辿り着いた直時は、探知強化で知覚を増強する。

増した聴覚に、突然争いの音が入ってきた。

怒りの叫び、悲鳴、呻き、断末魔、そしてあのとときの盗賊の笑い声。

一瞬で頭に血が昇り、直時は駆け出す。

「見えた！襲われてるのは2人。獣人か？動きが早い。でも多勢に無勢だ」

素早い動きで盗賊と渡り合うのはネコ科の獣人だ。体格は虎人族のガラムよりかなり細い。

振り下ろされる長剣が背にした岩を叩く。すり抜けざま、長く伸

びた爪が脇の下を切り裂いた。動脈が損傷したのだろう、激しく血が噴き出す。

懸命に駆ける直時の眼の前で、盗賊達は翻弄され倒れていく。二人の連携も素晴らしい。ひとりが素早い動きで敵を誘い、体制を崩したところへもう一人が襲いかかる。

群がっていた盗賊達は、鋭い笛の音に一齐に距離をとる。思わず動きを止めてしまふふたり。

「やばい！伏せろっ！魔術がくるぞっ！」
やや離れた場所から二人の盗賊が魔法陣を編み、呪文を口に精神集中している。

直時の声が聞こえたのだろう、獣人族の二人はあわてて身を翻す。盗賊が放った魔術は火系の攻撃魔術だった。炎弾より高速で撃ち出される炎は、魔法陣ひとつから5個を数えた。計10発の高速炎弾が、二人の周囲に着弾する。

しかし流石は獣人族。直時の警告で事前に察知できたことで、これを全て回避していた。

そして、一瞬の油断。

岩陰から盗賊が放った矢は、一人の腿を貫く。

呻きをあげ、傷を押さえ蹲る。それを庇うように立つもつひとり。

留めとばかりに再度魔法陣を編む盗賊。

「大丈夫っ！届く！」

直時は走りながら魔法陣を編む。その数4つ。

「土は石に 石は岩に 岩盾！」

獣人族の二人の四方を岩の壁が塞ぐ。

驚きつつも構わず放たれる炎弾。着弾とともに火の粉が飛び散るが、強固な岩の盾はびくともしない。

獲物を横取りされた怒りが、直時に向けられる。放たれる矢を援護に、武器を手にした盗賊達が突っ込んでくる。

「精霊さん、やるよ？」

風の微笑。直時は岩盾が目隠しになっているのを幸いに、精霊術の使用に踏み切る。

鋭敏化した感覚で盗賊達の位置を把握する。

イメージするのはファイアが作った大きなカマイタチ。

「風の精霊よ 汝は我が刃 斬り裂け！」

辺りを風の刃が乱れ飛ぶ。

直時に肉薄していた盗賊達は横合いから襲った風の一刃に鎧ごと斬り飛ばされた。

岩陰から弓で狙っていた盗賊達は、岩塊を縫うように襲いかかった刃に分断された。

魔法陣を編んでいた盗賊達は、魔術を放つ前に首から上が高く舞

っていた。

そして、巨大な岩の盾に驚いて逃げ出そうとしていた盗賊達は、背後からの風の刃に命を散らした。

「殲滅終了。生存なし」

機械的な口調で確認する直時。溜息をひとつ吐いて肩の力を抜く。

「おーい。無事かあ？」

岩盾に囲まれた中に声をかける。

「早く出してくれ」

「ちよつと待ってくれ。えっと、地面から生えるように発動するんだから、魔法陣を逆操作すれば・・・」

消えたように見えた岩盾は、一瞬で地面に引き込まれていったようだ。

「一枚消えたら出られるだろ。大丈夫かあ？」

中を覗くと、二人の若い女性がいた。一人は編んだ髪を肩の後ろまで下げた女性。腿を射抜かれている。もう一人はその女性に肩を貸し、外に出てくるショートの女性。よく似た顔立ちから姉妹であると思われた。

「盗賊は殺した。傷は大丈夫か？」

ネコ科特有の猫耳は同じだが、ガラム兄妹のような猛々しさはなく、かといってミケのような丸さもない。あえていうなら鋭利な感じである。

「豹人族？」

直時は勘で問ってみる。

「まずは助けてもらったことには礼をいう。そして問いには応えよう。私達は察しの通り豹人族だ。傷のほうは、手当しないとイケないが、この場で時間をかけたくはないな」

短髪の女豹が鋭い眼のまま、見回す。

「これはあなたひとりの業わざか？」

盗賊だったモノをさして直時に問う。

「まあ、そういうことだね。ところで治療だけど、治療術はできる？」

「薬丸の持ち合わせはあるが、残念ながら治療術は修めていない」

「ちよつと傷見せて」

直時はおさげ女豹の傍らに膝を着く。

矢は腿の反対に突き出ており、傷は中心に近い。

「まずいな。矢が骨を傷つけているかもしれない。足に感覚はあるか？」

直時に無言で首を振る。専門の医学知識はないが、応急処置等の訓練や知識は消防団である程度講習を受けさせられている。

短髪女豹が焦りを見せる。

「すぐに治療しよう。治療術なら使える。ただ約束して欲しいことがある」

二人の眼をそれぞれ見る。

「言ってくれ」

「自分が使える治療術は精霊術のそれなんだ。ある理由で精霊術が

使えることを隠している。そのことを口外しないで欲しい」

「普人族がつ？それは本当か！いや、しかし、なるほどこれもそうか」

直時の言葉に信じられないといった様子であったが、全滅した盗賊達に納得もしたようだ。

「じゃあまず、矢尻を折取るぞ。傷に響くが我慢してくれ。布か何か噛ませてやってくれ」

二人にそれぞれ声をかける。

「風の精霊達、水の精霊達、力を貸してくれ。痛みを和らげてあげてくれ」

直時の周囲に精霊が集まる。精霊が見えない豹人族の二人にはただ呟いているだけを感じる。

「うそ！痛みが・・・消えた？」

初めて声を出すおさげの女豹。

「折るよ？」

槍で矢の下を固定し、鉈で先端を叩き折る。

「くっ！」

「大丈夫？」

「大丈夫。思ったより痛くない」

気丈にも笑顔をみせてくる。

「精霊たちよ この者に 癒しを」

直時は精霊に語りかけながらゆっくりと力を込めて矢を抜いていく。

矢を締め付けていた筋肉が、徐々に緩んで矢が抜けていくのは、癒えた傷口が異物を押しだしているのもあるようだ。

完全に矢が抜け落ちるが、直時はまだ治癒術を納めない。神経の損傷が気にかかっていたため、念入りに癒しの術を施す。

「どう？」

「すごい！痛みも違和感もない！」

「精霊術とは・・・これほど完璧な治癒を施すことができるのか」
二人とも驚きっぱなしである。

「さて、まずは礼を重ねさせてもらう。ありがとう」

「ありがとう」

改まった口調は短髪の方だ。

「いいえ。どういたしまして」

「それで、見返りは何を要求するつもりなのだ？」

「え？ああ、別にいいよ。精霊術のことさえ黙っててくれるのならね」

「普人族が見返りを要求しないわけがなからう。後で無理難題を押し付けられるのは真っ平なのでな」

「なんかえらい言われようだけど、本当にいらない」

「生憎と私達は持ち合わせが少ないが、有り金を全て渡そう」

「いらないうって言うてるだろ」

「もはや！か、身体で払えと言うのではあるまいなっ？」

「言っただろーし」

「誇り高い豹人族の乙女が普人族に鬻り者にされるなぞ！死んだ方がマシだ！」

「いいから話を聞けって！」

暴走し始めた短髪女豹をなんとか落ち着かせる。おさげ女豹は汚

らわしいものを見る眼だ。

「何も言っていないのにどうしてそんな眼で・・・」
泣きそうである。

「たまたま通りかかって、助けたかったから助けただけ。恩に着る必要もないし、見返りもいらぬ。盗賊連中には個人的な恨みがあったから、それをぶつけたただけとも言える。自分の勝手な理由で盗賊を皆殺しにしたいだけなの！以上！」

直時は相手に口を挟む余裕を与えず、言いたいことを言つと背を向けた。

「リスタルの町ならもうすぐだから、二人で行けるよね？あと、精霊術のことはくれぐれも秘密だからな？」

歩き出した直時は振りかえつてそれだけを言つと、目的である薬草探索に向かう。

(今回は助けることが出来た・・・な)

盗賊達の血の匂いがまとわりついているような気がして、精霊と共に疾風となって駆けていった。

盗賊へ死を（後書き）

久し振りの更新になります。

出火に出動したら嫌な経験をしてしまって、ちょっと鬱です。

「覚悟が足りない！」とか言われましたけど、本職じゃないんだよ・
・。

猫の人（前書き）

ミケさんとの会話に全力を投入してしまっただためのタイトルです。
猫耳萌えーじゃない片は飛ばしてくださいませ！><

猫の人

ハプニングがあったものの、直時は当初の目的通り薬草採取を開始する。

「無事に着けたかな？まあ、獣人族の足なら昼頃には町に入れるだろう」

少しだけ振りかえって、今来た方角に眼を向けた。

その場を逃げるように離れ、距離をとったため既に二人の姿は見えない。

「切り換えないと！旅費どころか生活費が掛かってるんだからな！」
視界を大きく取り、薬草を探しだした。

この日、直時は少しの休憩時間を取っただけで、探知強化の魔術効果が切れるまで探索を続けた。

途中、岩の近くで何匹かの魔獣と遭遇した。30〜60センチ程の団子虫に似た魔獣である。脳内検索すると採取クエストの対象外で、売れる部位はないらしい。

「団子虫みたいに丸ったりするのかな？」

直時が気分転換とばかりに、槍の石突きでつついてみると、見事にボール状になり身動きを止めた。

「地球のと同じだ！でっかいけどなんか可愛いな」

嬉しそうに転がしたり、手に持ってその重さに驚いたりしていた。

気晴らしの後、採集に集中した成果は薬草イクサ27株、薬草ゴモギ（解毒薬の材料）8株だった。

夕刻、リスタルの町に戻った直時は、ギルド会館の喧騒に目を見張る。朝よりさらに多くの冒険者達が入り込んでいた。

買取りカウンターにも列が並び、傷だらけの鎧を纏った彼等の手には、魔獣の角や爪、剥がされた鱗や皮、食肉だろっ肉の塊など様々な品があった。

（討伐クエストが多かったらしいからなあ）

列の最後尾に並びながら、生々しい戦利品の数々に怯む。

直時とて、先日斑土蜘蛛を2匹持ちこんでいるのだが数が違った。

列を成す殆どが血の臭いをさせているとあっては、冒険初心者としては腰が引けてしまうのも無理はない。

戦闘が多くこなされたためか、薬草の買値が少し高くなっていて、本日の収入は金貨1枚銀判貨18枚白銅判貨5枚であった。

直時は換金を終えた後、2階の喫茶店へと顔を出す。

この時間人影は意外に少ない。皆、手に入れた成果に祝杯をあげに繰り出すからである。

「いらつしゃいませニヤー」

「どうも」

席に着いた直時をミケが出迎えてくれる。

「渋めのお茶をお願いします。銘柄はお任せします」

「うちの好みでも良いかニヤ？」

「勿論ですよ」

「少々お待ちくださいニヤー」

ピヨコンと飛びだした短めの尻尾を振って厨房に戻る。直時がその後ろ姿を頬杖を付きながら楽しんでいたのは言つまでもない。

「お待ちどうさまニヤ」

「ありがとうございます」

直時の前でミケがカップへとお茶を注ぐ。そのまま向かいの椅子に座って、懐から取り出したマグカップへも注ぐ。マイカップらしい。

「いいんですか？」

「いいのニヤ、いいのニヤー。お客さんも少ないし、タッチィーとはちよつとお話してみたかったのニヤ」

「タッチィー？えらく妙な愛称ですね」

「ただヤとうきは言いくいのニヤ」

「まあ、構いませんが……。これもお仕事ですか？」

「おっ？なかなか鋭いでわニヤいか！」

「初心者への助言と注意ですかね？有難く拝聴させていただきます」
軽く頭を下げる直時。

「そんなに畏まることはないニヤ。タッチィーと話してみたかったのは本当ニヤよ？」

「あははは。有難うございます」

「じゃあ、今日までの話を聞かせて欲しいニヤ」

お茶を一口啜ったあと、直時は昨日今日の薬草採取の話始める。魔獣や盗賊との戦闘は勿論伏せた。

「2日間で薬草が合計50株に、斑土蜘蛛が2匹も取ったのニヤ。タッチーは優秀なのニヤ」

「そうなんですか？蜘蛛はたまたま遭遇しただけですけど、薬草は周りの植物相を憶えてからは探すのが楽になりましたからね」

「初心者なら、なかなかそこまで気が回らないニヤ。何も取れない日もあるニヤよ？」

「褒めてもらって有難うございます」

直時は少し恥ずかしそうに後ろ頭を掻く。

「昨日は南部の草原に行ってたのニヤ？」

「事前情報を知らなくて……。無事還れて運が良かったです」

「さつき南部への偵察PTが報告してたけど、薬草の群生地で大規模な戦闘の痕跡があったらしいのニヤ」

「……ほほう」

驚いた顔を見せるも、内心はそれどころではない。直時の背中に冷や汗が伝う。

「地面が広い範囲で崩れてたり、見たことない土系魔術の大岩が生えてたりしてたそうなのニヤ。魔獣の死骸は3体しか無かったけど、多数の魔獣が南方へと逃げ帰っていったようなのニヤ」

「町に来なくて良かったですねえ。自分も襲われなくてよかったです。さりげなく無関係をアピールする直時の発言を無視してミケが続ける。」

「死骸のうち一体は大岩猿、これは魔獣に襲われたようなので関係

ないニヤ。問題は残りの2体。大岩猿を襲っただろう黒槍ヤマアラシと富岳大鷲ニヤ。特に富岳大鷲はAランク冒険者でも苦戦する魔獣ニヤ」

ここでミケは言葉を切り、上目づかいに直時を窺う。

「すごく激しい戦いだつたらうニヤあ。タッチーは何か知らないかニヤあ？」

「い、いやあ！そんなの知る訳ないじゃないですか！怖い怖い！本当に巻き込まれなくて良かったなあ！」

「死骸には斑土蜘蛛がいつぱい集っていたそうだニヤあ」

「うぐっ」

「何を見たのか、ミケねーさんに教えて欲しいニヤあ」
獲物を狙う眼である。

（バレてはいないが確実に何かを知っていると疑われている！ここはひとつ・・・）

もはやポーカークフェイスどころか顔のあちこちが引き攣っている。

「・・・これは内緒なんですけど」

「ふむふむ」

「薬草採取中に魔獣の暴走に巻き込まれたのを助けてくれた人がいたんです」

「ほう！」

「瞬く間に魔獣を撃退したその人は、逃げる魔獣を追ってそのまま行ってしまったんです」

「顔は見たニヤ？」

「いいえ。フードを深く被ってましたから、顔は判りませんでした。でも種族はきつとエルフですよ」

「何故ニヤ？」

「だって、富岳大鷲でしたっけ？奴を一瞬で切り刻むような大きな

竜巻が魔法陣無しに現れたんですよ？精霊術に決まってますよ！」

普人族は精霊と会話できる者が殆どいない。そして、魔力量の關係で大きな精霊術を使えない。この常識を逆手に取った捏造である。

「他言無用だと言われていたので話せなかつたんです。自分も腰を抜かしてただけなので言つてまわる話でもないですしね」

嘘の補強もぬかりない。

「そんなことがあつたのニヤあ。タッチーも災難だつたニヤ」

「いやいや。命あつてのことですから。逆に幸運だつたとも言えますからね」

「エルフって町に来た時のエルフさんじゃニヤいよね？」

「違います。ファイアならガラムさんっていう虎人族のPTに付いていってますから」

「この話、ギルドへ報告してもかまわないかニヤ？」

「口止めされてたんですけど、広めなければ問題ないかな」

「了解ニヤ。情報はギルド内に留めておくニヤ」

「有難うございます」

なんとか納得してもらつたようで、ひと安心の直時である。

「ふふふ。実はもう一枚カードがあつたんだけどニヤあ、タッチーが降参するのが速くて使えなかつたニヤ」

「えっ？」

「昨日の高原の癒し水亭の鳥団子スープは美味しかったのニヤ」

「あーっ！あれかあ！食べに来てたんですか？」

「エルフちゃん、ファイアちゃんだったニヤ。ファイアちゃんに宿を紹介したのはうちのニヤ。あそこの食堂は美味しいのニヤあ」

直時にとっては思わぬ落とし穴である。

「もっともタッチーは厨房でオットー氏と意気投合してたから、

顔を見れなかつたニヤ」

「意気投合というか、喧々囂々というか……。誰に聞きました？」

「ミュンとは友達なのニヤー」

思わぬ身近に顔見知りが入りしることを知り、次は一緒に呑もう！と誘う直時であった。下心はほんの隠し味程度である。

それからは様々な雑談で花が咲き、そろそろ閉店となり客は直時だけになった。

それまでの緩んだ顔を少し引き締めた直時が尋ねる。

「ミケさん。ちょっと訊いてもいいですか？」

「何かニヤ？」

「………普人族って信用できませんか？」

「ふむ」

ミケは片眼を瞑りもう片方の眼で直時を見る。

「うちはこの町のここで仕事するようになって、普人族も色々だと思つたニヤ」

「でも種族としては……ということですか？」

「普人族は個としてより群として生きるからニヤあ」

「そうですよね」

溜息を吐く直時。

個として相手を知るには長い時間が必要である。だが、ひとつの群、コミュニティとして考えるとそのグループ全体の方向性が問題となる。

自分とそのグループが接触することで、どんな影響を与えるか？ もしくは反応があるのか？判断材料として、過去の実績や流布する

情報が大きな要素であることに変わりはない。

心安く話しかけてくれるものの、ミケにも普人族に対するカテゴライズはされているのだろう。異世界人である直時に非があるわけではないが、現実問題として自分もそのグループとして認識されていることに心が沈む直時だった。

普人族は獣人族の個体能力の高さを僻み妬み、そして怨む。魔力が低いながら、様々な人魔術を生み、身体能力が劣りながら集団戦闘を編み出し、どの種族よりある繁殖力で大きな国家を築いた己を誇り、他を卑下する。

ときには同じ普人族相手でさえも。

「でも、タツチイーだけはやっぱりちよっと違うかニヤー」

「フォロー有難うございます」

「違うニヤー！初めて会った時にこう、ピピツときたニヤー！」

「？」

「初めて眼が合った時、吃驚してたニヤー。だけどその後に嫌な意思が眼に映らなかったニヤー」

「そう・・・だったかな？」

直時にはあまり自覚がない。猫耳萌えーっ！とか思っていたのは内緒である。

「喫茶店で再会したときも、普人族から感じる視線ではなかったニヤー」

「ミケさん」

ミケには普人族からの隠しても判る蔑視や畏怖、嫉妬などが直時からは全く感じられなかった。

「うちの耳と尻尾に釘付けだったのは知ってるニヤ」

「ぬあああああ！」

羞恥に悶える直時を楽しそうに見るミケが追い打ちをかける。

「尻尾だけじゃなくお尻もだったニヤ？」

「すみませんごめんなさいかんべんしてください・・・」

「やっぱりタッチーは良い子だニヤ。正直者ニヤ」

「言っていないことはまだまだありますよ？」

あまりの絶賛に後ろめたいのか、隠し事の内容を明かす。

「ふふふ。嘘が下手なタッチーはやっぱ良い子なのニヤ。だいたい箔をつけるにしても32歳はやり過ぎなのニヤ」

「・・・そこは本当です」

にやにやしていたミケは吃驚して直時の眼を覗きこむ。

見つめ合う二人だが、先に視線を逸らしたのは直時だった。照れている。

「マジかニヤあああああああ！」

それでも真実だと悟ったミケの叫びがあがる。

「謎は美女だけの特権ではないのです」

勝ち誇った直時を恨めしげに見るミケであった。

猫の人（後書き）

今回はミケさんのターンでしたが、最後に主人公が反撃しました。

宴の夜

リスタルの町に宵闇が訪れ、そこかしこに魔術の光が灯りはじめる。

多くの飲食店や遊戯場では、その日を精一杯過ごした者達の笑い声が聞こえる。

冒険者、商人、職人、貴族、軍人、官僚、勤め人。成果があった者は素直に喜び、無かった者は明日への糧に、それぞれが今日の終わりを楽しんでいた。

ここ高原の癒し水亭でも、ささやかな成果を祝い、またそれを肴に杯を重ね、料理に舌鼓みを打つ者が集まっていた。

「では、タッチーの本日のクエスト完了を祝して、かんぱーい！」
「乾杯っ！」

「乾杯。有難うございます」
直時の酒の誘いを即座に了承したミケが音頭をとり、3つの杯が重ねられる。

威勢よく杯をぶつけてきたのはベルツ戦具店店主である、ブラニール・ベルツ氏である。彼もこの食堂をときどき利用しているそう
で、直時が食堂に顔を出したときに、特大の炙り肉に齧りついていたのである。

大テーブルの一角に直時を挟んで右にブラニー、左にミケが座っている。

「お待ちどうさまっ」

ミュンが新たな皿を追加していった。斑土蜘蛛の脚のボイルであった。

「どんだけ食べるつもりですか・・・」

三人の前には、討伐クエストで市場に溢れた食用魔獣の、様々な肉料理が並べられている。出された食事は残さずを旨とする直時としては、是非食べられる分量に抑えて注文してもらいたい。

「がはははは！そう言うな！おめーさんの祝いじゃねえか」

既に出上がっていたブラニーは上機嫌で直時の背中を叩く。

「そうニャー！ぱーっというこうー！」

ミケが再び杯をぶつけてくる。

「そうですね。じゃあいただきますよ」

「ご機嫌でピコピコ動く猫耳に顔を綻ばせながら麦酒を呷る。

「しかし、たった2日でなかなか稼いだようじゃねえか？そろそろうちにも買いにきてくれよ」

「武術とかまるつきりですよ？自分も欲しい武器はありますが、正直分不相応だと弁えてますから迷ってしまいますね」

「タッチーはどんな武器が欲しいのかニャ？」

「おう！言ってみな。分相応だろうが不相応だろうが、使うべきときに得物が無けりゃあ、どうしようもあんめーよ」

「でも宝の持ち腐れになってしまっそうで」

「そうとも言えねーなあ。お前さんうちで見繕ってた様子から見る

に、なんかやってたんじゃねえか？」

「・・・剣術と杖術を少し。でも、真剣は使ったことないし、どちらも齧った程度です」

これは本当である。

伯父が警察官で、家に寄ったときに手ほどきを受けていた。高校の体育の格闘技が剣道で、同じクラスの剣道部主将の鼻を明かしたいと教えを請うたら、後悔するほどの修練を受けた。

その結果、3本に1本は取れるようになったが、逆にその同級生に対抗心を燃やされて授業の度に相手をさせられたのだった。

杖術は伯父が機動隊に所属していたとき、憶えておけと叩きこまれたのである。

どちらにしても、真剣で実戦を繰り返しているアースファイアの者達に較べると、やはり齧った程度になってしまっただろう。

「杖術って何かニヤ？」

「あんまり聞かぬーけど、対人戦じゃあかなり有効だそうだけ。ただの木の棒つきれだが、呼吸や間合いを取り難いらしいんだ。剣を叩き折ることも出来るそうだ」

ミケの質問にブラニーが応える。

「おめえさん刃無しの槍を使ってるのはそういうことかい？」

武器での直接戦闘など怖くてやりたくもないが、とりあえず頷く直時。

「なら欲しい武器ってのは剣だな？どんな剣が欲しい？」

「いやいやいや！まだまだ生活費稼いでる段階なんですよ？使えるかどうかもわからない武器なんて贅沢はできません」

「冒険者なんだから、その生活費を稼ぐにも武器が必要だろうか？いいから言ってみな」

さらに催促をされる。

(確かに命懸けの商売だもんな。金が減っても設備投資は先行投資として割り切るか)

死んでは元も子もない。

「・・・切れ味に主眼を置いた片刃刀で、できれば少し反りがあれば嬉しいです。なければ直刀でも構いません。刃渡りは70センチから90センチくらい。振りまわしてみないと扱えるかどうかかわりませんが、お願いできますか？」

「ふむ。盾はいらんのか？」

「必要ありません」

「見繕っておこう。明日寄ってけ」

「ありがとうございます」

直時は頭を下げる。

三人は杯を重ね、料理は減っていく(主にベルツ氏の胃の中に)。

そんな中、新たな客が食堂へと入ってくる。二人連れだ。

片方がミケの背後から声を掛ける。

「その猫人族の方、良い宿を世話してもらった。感謝する。有難う」

ショートカットの女性が礼を述べ、半歩後ろのおさげの女性がピョコンと頭を下げた。

声に振りかえった三人。そこには豹人族の姉妹と思しき二人の女

性が立っていた。

「ああ、お二人さん！気にすることは無いのニヤ。持ちつ持たれつなの・・・ニヤ？」

ミケがにこやかに応える。町に来たときのフィアと同じようなやりとりがあつたようだ。しかし、二人はミケを見ていなかった。直時を見て息を呑んでいる。

一方直時は何とも言えない表情で眼を泳がせている。

ブラニーが説明を催促する視線をミケに向け、ミケが宿を紹介しただけだと応えた。

「お二人さんも一緒にどうかニヤ？大勢のほうに御飯も美味しいニヤ」

喫茶店での直時の話と三人の様子からピンときたのか隣の席を指す。

「ご相伴に与ります」

直時の拒否の視線を無視してミケの隣に座る二人。

「ダナ・リナレスと言う」

「ラナ・リナレスです。妹です」

金髪に黒のメッシュが入ったショートヘアが姉のダナ。同じ髪を長く伸ばし編んで背中に垂らしているのが妹のラナである。二人が名乗り、三人も自己紹介を済ませる。

五人で新たな乾杯をすると、料理の皿が二人の前に次々とまわされてくる。

「遠慮なく食べ！今日は薬草取り名人の奢りだ！」
ブラニーが告げる。

「ま、まあ、祝ってもらってるから・・・」
お祝いなのだからってつきり奢ってもらえると思っていた直時は、
ちよつと引き攣り気味だった。

ミケが直時の脇腹を突つき、何か喋れと促す。作り笑いを顔に貼り付けた直時は仕方なしに話題を振った。

「お二人は何処から来られたんですか？」

「・・・答えねばならないか？」

「嫌な質問だったのなら謝ります。すみませんでした。プライベートは大切にすよね」

あまりの返答に気分を害した直時は、笑顔で言外に何も言うなどの含みをもたせる。

ダナの剥き出しの警戒を余所にラナは黙々と料理を平らげていた。

失敗したとばかりにミケは苦笑いする。そのまま直時へと会話の矛先を向けた。

「タッチイー、次のクエストは何にするニヤ？そろそろ共通クエスト以外も受けてみないかニヤ？」

「まだ2日しか経ってないですよ？共通クエスト卒業するには経験不足じゃないですか？」

「2日でそれだけ稼げてんだから、もつと割の良い仕事選べよ！それで、うちでもつと良い武器を買え！」

「ギルドとしては初心者さんには経験を積んでもらって成長して欲しいのニヤ」

初心者という言葉にダナは訝しげな顔をする。ラナはせつせと口を動かしながら、チラチラと覗き見ていた。

「なるだけ安全な採取クエストでお勧めとかありますか？」

「うーん。ちよつと遠いけどノーシユタツトへの物資輸送依頼が複数出てたニヤ。タツチイーは移動系魔術は持つてるかニヤ？」

「速度が上がる術ですね？残念ながらありません」

「あれは冒険者やるなら持つておいた方が良いぞ？俺の武器は後で構わんから先に買っちまいな」

ブラニーが武器より勧めるということは余程便利なのだろう。

直時の高速移動は風の精霊術があるのだが、人目を避けて使う必要があった。だが、人魔術であれば問題ない。移動距離が増えればそれだけ活動範囲も広がる。魅力的な話であった。

「値段はどれくらいでしょうか？」

「初歩攻撃魔術よりは安いはずニヤ」

購入決定である。

「ノーシユタツトじゃあ、町の近くのリメレンの泉の加護祭で人がごった返してるらしいぜ。とにかく物が足りないんで方々の町にまで輸送依頼を出してるそうだ。移動魔術さえ買っちまったらなんとか祭りが始まるまでには着けるだろう。ついでに見物して来い」

「それは楽しみだなあ。やる気が出てきましたよ！」

ガラムPTのクエスト内容を聞いていないため、ファイア達がいるのを知らずにいる直時だった。

「ダナとラナは冒険者かニヤ？」

「ああそうだ。ちなみにランクEだ」

「姉さん、何かクエスト受けて稼ぐ？」

「ギルドに来たときは2階の喫茶店に寄って欲しいニヤ。美味しいお茶を御馳走するニヤ」

「武器、防具ならベルツ戦具店を頼むぜ！南大通りにあるからよ！」
ミケに便乗してブラニーが店の宣伝をしていた。

「ありがとう。是非寄らせてもらうことにしよう」
伶俐な美貌に微笑みが浮かぶ。

それを見た直時は、ブラニーとの扱いの差に理不尽を感じてしまった。

リスタルの町は他の普人族の町と較べると獣人族におおらかなところがある。リスタルの雰囲気を感じたりナレス姉妹は、町民であるブラニーにも自然と気を許しはじめていたのだ。

一方、直時は命を助けてもらったものの、精霊術を使い、素性を隠す普人族の冒険者。警戒するなと言う方が無理な相談である。

微妙な空気に居心地の悪さを感じる直時は、明日の準備があるからと宴席を抜け出した。ミケは苦笑いしながらもゆっくり休めと言ってくれる。

「それではお先に失礼します。皆さんはどうぞごゆっくり」
直時が抜けることでお開きにならない席を確認して胸を撫で下ろす。

ミュンに今までの飲食代を聞き、少し考えて5割増しの代金を渡した。

「余ったり、足りなかったら明日の朝言ってください」

そう言って、二階への階段を上っていった。

「あの男は何者なのだ？」

「タッチーは良いこ・・・良い男ニヤ」

実年齢を思い出したミケが言いなおす。

「眼を見なかったのニヤ？」

「眼？」

盗賊との戦闘、ラナの負傷、死の覚悟、初めて目にする魔術、生への安堵、そして精霊術。あまりの状況に相手をしっかりと見ていなかった気がする。

「・・・普通だった」

ラナがぼつりと呟く。

「私達を見る眼が普通だったの」

ダナが驚いたように妹を見る。ミケとブラニーは笑っている。

「あの時は姉さんに釣られて嫌な顔しちゃったなあ」

「私のせいだと言うのか？」

「ごめん。違うよね。私達のせいだよね」

「まあもともとの原因は俺達普人族のせいだからな。お嬢ちゃん達の気にすることちゃねえよ」

ブラニーが慰める。

「タッチーは良い男なのニヤ」

ミケが片眼を瞑ってもう一度言う。姉妹は困惑しながら、食堂の出口に眼を向けるのだった。

部屋に戻った直時はまず手持ちの金額をチェックする。

クエスト報酬と、最初の盗賊との戦闘後に死体の財布から失敬した分を含めて、金貨2枚、銀判貨30枚、小銭を含めた残り全部を銀判貨換算で17枚分であった。

「金貨1枚を残しておけば、とりあえず大丈夫だろう。移動魔術と出来れば雷か風の攻撃魔術が欲しいな。あとブラニーさんの剣か・・・」

残り全てを魔術と武器に充てることは出来ない。生活雑貨や、替えの衣類、旅の諸道具も重要だ。

「精霊術をおおっぴらに使うわけにはいかないし、風系攻撃魔術は改造すっかー」

魔術は移動系のみ購入することにして、風の生活魔術を見繕っては魔法陣を描く。

「送風の術式、服乾燥させるのに使ったな・・・。これに集束するよう回路を弄って・・・駄目だ！ドライヤーにしかない！えーっとカマイタチ作るにはどうするんだ？うーむ、参考になる術式が無い・・・」

次々と浮かぶ魔法陣。しかし、イメージ通りの魔術がなかなか出来ない。

フィアに転写してもらった魔術の魔法陣はその構成と意味が知識として付随していた。そのため組み合わせたり、出力を描き変えたりとアレンジは出来るものの、カマイタチを出すといった、もともとの式を知らない場合、直時にはどうしようもないのだ。

床に座り込み、魔法陣を大量に並べてあーでもないこーでもない」と呟いていたそのとき、不意に誰かが扉を叩いた。

「ヒビノ殿、ダナだ。少しよろしいか？」

まさかの豹姉の訪問であった。

「申し訳ないですが、明日の準備で散らかってまして……。御用はまた後日をお願いしたいのですが」

ベッドにはお金が、テーブルや床にはチェックしていた持ち物、何より部屋中に改造中や参考用の魔法陣が浮かんでいる。入ってこられるには不都合が多すぎた。

「気分を害されているのだろう。先程までの我等の態度は問題だった。きちんと謝らせて欲しい」

「……こうして訪ねて来てもらったことだし、もう気にしていません。自分も良い態度だったとは言えないですから。こちらこそ申し訳ありませんでした」

胸のもやもやが晴れた直時だった。ところが相手はそうはいかなかったようだ。

「そう言ってもらえると有難い。しかし、けじめは着けなくては。我等はヒビノ殿に命を救われた。せめて直接礼を言わせていただきます」

「お礼ならあの時にも言われましたよ。しっかりと受け取ってます」

「いやいやあの時は失礼なことばかりを……」

「いやいやもう充分ですから……」

終わりそうにないやり取りに業を煮やした人物が実力行使に出る。

姉と連れだっていたラナだが、身軽さを生かして廊下の窓から外へ出た。そして直接、直時の部屋の窓から侵入したのである。

直時が微かな着地音に窓を振りむくと、ニコニコとしたラナの姿があった。

一瞬後、周りの状況を理解する者と誤解する者。

直時は再度の口止めに頭を抱えたが、ラナの場合はそうはいかなかった。

「ヒイツ！」

恐怖の悲鳴をあげてしまう。

「ラナっ！」

ダナが悲鳴に反応し、鍵ごと扉を破壊して入ってきた。

身を竦ませる妹を見つけるが、ダナも身動きが出来なくなってしまう。

部屋中に浮かぶ多数の魔法陣。あまりに異様な光景は、今しも攻撃せんと待ち構えていたと判断されてしまったのだ。

「謀ったなあああああああっ！」

ダナが泣きそうな顔で叫んだ。

宴の夜（後書き）

ニヤーも会話を省略することで減らしてみました。

宴の後

扉の破壊音とダナの叫びに直時は迅速に反応した。

改造途中のものは惜しかったが、部屋中の魔法陣を残らず消して、集まってくるだろう人達に備えたのである。

「魔法陣のことは他言無用。説明は後でします。今は言い訳を考えて欲しい。自分はラナさんが窓から入ってきて、ダナさんが扉を壊して入ってきた事実だけを言います」

魔法陣を消したことで多少落ち着いたものの、二人とも涙目で顔が青い。

予想通り、部屋の入口へと人が集まってきた。

「どうしましたっ?」

壊された扉に眼を丸くしてアイリスが入ってくる。後ろから覗くのはミュンや他の宿泊客、ミケとブラニーもいる。

「ごめんなさいっ!」

ラナが勢いよく頭を下げた。

「姉とヒビノさんが扉越しに押し問答してたんで、開けてもらおうとこっそり窓から入ったんです。でもヒビノさんに賊と間違われてナイフを突き付けられてしまって……。もちろん私が悪いんですけど、吃驚して思わず悲鳴上げてしまっただんです。姉は私の悲鳴を

心配して扉を壊してしまっただけなんです！本当にごめんなさいっ
口をパクパクさせているダナを余所に、実に滑らかな言い訳をす
るラナ。

直時も余程意外だったのか、眼を丸くしていた。

「ほら、姉さん！私も悪かったけど、姉さんも！」

「ああ、取り乱してしまった・・・。皆、お騒がせして本当に申し
訳ない！アイリスさん、扉を壊したこと、心より謝ります。すみま
せん！」

「タツチイーに謝りに行くと言ってたけど、謝る相手が増えたニヤ
ー」

平謝りする姉妹に、ミケが呆れたように言った。

「と、ともかく先ずはヒビノ殿に詫びを入れねばならないので、お
叱りはその後で！扉の弁償も責任をもってさせていただきますので
この場は！」

ダナはアイリスに深々と頭を下げた。

「皆様、お騒がせをいたしました。こういった次第なので、後はご
心配なさらず御寛ぎ下さい。・・・ダナさんとラナさんは受付に寄
つてくださいね？」

アイリスは背後の野次馬に声をかけ、姉妹に念を押す。

「俺らも食堂で呑み直そうぜ？」

ブラニーがわざと大声でミケに言つと、まだ物問いたげだった者
もその場をあとにするのだった。

「ちゃんと謝るニヤー」

ミケも片手をひらひらさせて階下へ向かった。

「さてと・・・」

壊れた扉をなんとか入口に戻した直時が口を開く。

ビクつと肩を震わせた姉妹は、並んで床に座り込み両手を着いて頭を深々と下げた。

「申し訳ないっ！」

「ごめんなさいっ！」

見事な土下座であった。

(この世界にもあるんだ・・・)

感想を胸の裡で呟きながら、姉妹の土下座を眺める。

直時はしばし無言で二人を睨む。ダナとラナは微動だにしない。許しが得られるまで続けるつもりらしい。

溜息を吐いた直時は二人に声を掛ける。

「詫びは受け取りました。もう顔を上げて良いですよ」

「許してもらえらるうか？」

「とりあえずは」

迷惑しか被っていない直時からすれば当然である。

「ダナさん、思い込みが激しいって言われませんか？」

「ああ・・・いえ、はい。その通りです」

「ラナさん、考え無しだって言われませんか？言い訳は見事でしたけど」

「……はい」

改めて確認してみた直時だが、この姉妹に口止めが有効だとは感じられなかった。

（素直に謝るところ、悪い人じゃないんだろうけど、悪気なくてもボロを出しそつだな）

頭が痛いところである。

「まず、先程の魔法陣ですが、自分は魔術研究をしております。その改良中だったと言えば判ってもらえますか？」

「おお！なるほど！そつでしたか」

疑問もなく信じるダナ。

「じゃあ、あの岩の壁も？」

「うむ。そうだろうな。我々の知る人魔術ではなかった。ヒビノ殿？」

「自分の試作魔術です」

リナレス姉妹に直時が頷く。

「しかし、発動無しに魔法陣を描くなどは……」

「研究上の極秘事項です」

ダナの疑問をみなまで聞かず、力強く言葉を被せる。

「お二人とも、魔術の開発が各国のパワーバランスにどのような影響を与えるかお分かりになるでしょうか？」

眼に力を込め静かに語る（騙る？）直時からは、異様な圧力が感じられた。

「新魔術が手に入った国は、その魔術の対抗術が開発される前に他国に攻め入るでしょう」

闘争は生存の本能ゆえ、どの種族も認めるところであるが、普人
族の過剰な我欲による戦争は是としない。

姉妹は直時のその場限りのハツタリに吞まれ、戦慄に身を震わせ
る。

「ご理解いただけましたか？くれぐれも他言しないようお願いしま
す」

真摯に頷く姉妹だが、直時としてはどうしても信用しきれない。

(どうせ漏れる秘密なら、適当に嘘も混ぜておくか)

「二人とも自分が精霊術を使えるのを不思議に思われたでしょう」

「ああ、そつだ」

「あの治療術はすごかったね」

「実は自分にはエルフの血が流れているのです。いわゆる混血です」

「しかし耳が？」

「耳には普人族の血が色濃く出たのでしょう。ここに来るまでに色
々ありました」

「・・・お察しする」

目頭を押さえるダナと涙ぐむラナに多少後ろめたさを感じる直時。

(悪い人達じゃないんだけどなあ。でも念には念を入れておくか)
悪意が無いからと言って害が無いわけではない。直時は声を低く
して続ける。

「自分はこちらまで正直に説明しました。これに何をもって応えても
らえますか？」

「・・・我等はヒビノ殿に不利益をもたらすことを一切口外しない
！森の神ビラコチャに誓おう！」

「私も誓います！」

「有難うございます。でもそこまでの信頼をあなた達に持つことはできません」

「くっ！では、ではどうすれば？」

ダナは直時に必死な眼差しを送った。

（そろそろかな）

直時は少し考えるように間を置き、姉妹にとって信じられない言葉をついた。

「自分はあなた達にも期待はしません。ですが、これだけは覚えておいてください。もし自分の情報が漏れていたとしたら、豹人族はそれ以降自分の敵と見做します。盗賊に対した時のように容赦なく狩ります。何故と聞かれたら、あなた達が自分の敵にまわったからと答えましょう」

無表情に姉妹を見下ろし、最期通牒を突きつけた。

何かを言おうとして、何も言えずに頂垂れるダナ。ピンと張っていた耳も萎れてしまっている。

ラナは涙ぐみながらも、姉の肩を抱いて立ちあがらせ、扉へと身を寄せたまま歩く。

結局二人は何も言えないまま直時の部屋を出た。

階段を下りる足音が聞こえなくなると、直時は盛大に溜息を吐いた。

（まさか異世界に来てまでこんな面倒くさい演技するとは思わな

った)
のろのろと荷物から煙管を取り出し、椅子に腰を落ちつけて燻らせる。

ぼんやりと夜の町を窓越しに眺める直時だったが、その窓の外、すぐ傍で聞き耳を立てていた影に気付くことはなかった。

呆けていた時間は意外に長かったのか、ノックの音がするまで火の消えた煙管を手に持ったままだった。

「タダトキさん。よろしいでしょうか？」

アイリスの声だ。

「……………どござ」

「失礼致します」

壊れた扉を開けようとするが、なかなか上手くいかないようだ。

直時が内側から扉を持ちあげて部屋の中に下ろす。

「ありがとうございます」

アイリスが微笑みかける。

「扉は明日中に修理しておきますので、今夜のところは御容赦いただけますか？」

「わかりました。宜しくお願いします」

「だいぶ…………お怒りだったようですね」

「そうですね」

「お二人とも宿を換えたいとおっしゃいまして……………」

「…………すみません」

後ろめたさがあったので謝ってしまう。

「今夜は遅いですし、そのまま泊っていただきました」

「・・・そうですか。アイリスさんにはご迷惑をおかけしました」
「まあ！タダトキさんが悪いわけではないのですよ？」

「原因の一端はありますから・・・。それと、明日から遠出しますのでしばらく留守にします。それとなくあの姉妹にも臭わせておいていただければありがたいです」

「あらあら！クエストですか？」

「はい。ノーシユタツトまでの往復なので・・・部屋はこのままでお願いできますか？」

「もちろん。お代を頂いてますからね」

「有難うございます」

「では、今日も遅いですしお休みになって下さいまし」

「はい。お休みなさい」

「お休みなさいまし」

ニツコリ笑って出ていくアイリスを見送って、直時はガタガタと扉を入口にはめ込んだ。

「様子見かな？心配かけたか・・・」

大きく伸びをして欠伸をひとつ。

「っと、寝る前に防犯防犯っと」

流石に扉が壊れたままでは不安である。窓からの侵入も経験したばかりだ。

「適当な魔術はないなあ。仕方ない」

探知強化の魔法陣を編み、知覚の強化で対応することにする。眠れるかどうかはわからない。

「うわあ。思ったより煩いなあ」

眠れるかどうか、眠れたとしても咄嗟の対応ができるかどうかは判らないが、何もしないよりは良いだろうと知覚を増したまま寢床へと潜り込む。

窓の外の影は既に姿を消していて、直時の探知にかかることはなかった。

宴の後（後書き）

たくさんのお客様、ご感想に吃驚しました。

ご感想へは小説の更新をもって答えさせて頂くことにしました。

返答できず申し訳ありませんが、全ての感想に貴重なご意見だと眼を通させてもらっています。

ノーシュタットへ

直時が、高原の癒し水亭の階段を朝つばらから元気なく下りてきた。

「おはようございます」

「おはようございます。……タダトキさん、眠れなかったんですか？」

アイリスが心配そうに直時の顔を覗き込む。

「昨夜は色々とありましたから」

「大丈夫ですか？これからお出かけなのでしょう？」

「道すがら、休み休み行きますよ。それより一応5泊の追加をお願いします。向こうで滞在が伸びるかもしれないので」

「有難うございます。では、銀判貨6枚になります」

「一泊分少ないんじゃないですか？」

「ご夕食の余り分を引かせて頂いたんですよ」

「いやいやいや、引き過ぎなのでは？」

「昨夜は不自由をおかけしましたからね」

「有難うございます。ご厚意に与らせて頂きます」

「ふふふ。ミケちゃんじゃないですけど、タダトキさんは良い子ですね」

「……ギルドに寄って、準備してから出る予定なので、お昼は食堂を利用させてもらいます」

アイリスにまで子供扱いである。実年齢を言いたくなかったが、相手の対応を計るのには重宝する。

(アイリスさんにはらすタイミングはこれから考えればいいか)
昨夜の黒さが残っていた直時だった。

直時は、ギルドへ寄る前にまずは魔術店へと足を向ける。

過日寄った人当たりの良さそうな若旦那の店の扉をくぐった。

「いらっしやいませ！本日はどのような魔法陣をお求めでしょうか？」

爽やかな笑顔で客を迎えるのは見覚えのある若旦那だった。

「おや？その黒髪はこないだ来られた冒険者さんですね！クエストの達成おめでとうございます！」

訪れたことから、収入を得たことを察したのだろう。直時に微笑みかける。

「有難うございます。今日は知人から勧められた移動系の魔術を見繕っていただきに来ました」

男相手に歯を煌めかせる若旦那にちょっと引きつつも注文を告げる。

「そうですね。初歩ならば『推進』その上ですと『快進』さらに上位の『地走り』、お荷物の重量遮断なら『浮遊』などがございます」

初歩の移動魔術は購入予定だが、『浮遊』という魔術にも興味が湧く直時。

「『推進』と『浮遊』はそれぞれいくらかしますか？」

「『推進』が銀判貨15枚で、『浮遊』が金貨1枚になります」
残金の少なさに悩む直時だったが、輸送クエストを受けるなら『浮遊』は必須だと判断した。

「両方お願いします」

懐から金貨1枚と銀判貨15枚を出し、若旦那に渡した。

残金は予備費の金貨1枚を除けば、銀判貨換算で約20枚分である。思い切った判断だった。

「お買い上げ有難うございます！では、奥の部屋にて転写を行いますのでこちらへどうぞ」

満面の笑顔の若旦那に対して、転写から来る頭痛に苦虫を噛み潰したような直時だった。

若旦那に見送られ、頭痛に苦笑いしながら店を後にする直時は、懐具合を気にしながらもベルツ戦具店へと足を運ぶ。

「こんにちは」

「おう！ヒビノ！昨夜は大変だったなあ」

ニヤニヤしながら出迎えたのは、禿頭髭面の大男、ブラニー・ベルツ氏である。

「勘弁してください。ところで昨日はミケさんと一緒になって、あの二人を焚きつけたでしょう？」

恨みがましい眼だ。

「まあそう言うな！あれであの嬢ちゃん達は良い奴等だったぞ？」

「人柄には異論ありませんけど、あれは迷惑を撒き散らすキャラでしょう?」

「それも男の度量ってやつでなんとかしな!」

「厳しいですねえ……。それはさておいて、寄らせてもらいましたけど、さつき魔術店で買い物したからお金はありませんよ?」

「がっはっはっは! そうだろうな! だがよ、これは見ておけ。欲しくなったらクエストにも力が入ろうってもんだ」

直時のために品物を用意してくれていたらしい。

店の奥から鞘に収まった剣を3本持つてくる。

「抜いていいぞ?」

「……拝見します」

道具としてのナイフと違い、相手を斬るための得物である。唾を呑みこんだ直時は、一振りずつ鞘から抜いていく。

一本目は反りのあるサーベル様の剣だった。日本刀より薄く、刃幅は狭い。護拳が付いており、儀礼用にも思える。しかし、実戦が多いこの世界で売りに出されるということは使い手がいるということだろう。薄い刃に切れ味を感じさせるが、脆くもありそうで直時は刃を鞘に納めた。

二本目は更に反りが深く、地球の中東の曲刀を思わせた。柄の端には小指止めであろう湾曲した部分があり、刃も非常に薄い。技術が無く斬りつけても刃の湾曲が補ってくれそうだ。しかし、これも急所を捉えなければ刃こぼれどころか折ってしまいそうで直時には扱いかねるように思えた。

三本目の剣は反りが逆だった。鉞鎌を鋭くしたような剣。先端は重く、振れば威力はありそうだが、華奢な直時に振りきれれる自信は

なかった。武器としてでなく、汎用としてならそれなりに魅力的な一品であったが、これも鞆に納めた。

「・・・あまり気に入ったのはなかったみたいだな？」

「すみません」

ブラニーは少し気落ちしたようだった。

「クエスト完遂後にまた寄らせてもらいます」

考え込むブラニーに頭を下げて店をあとにした直時だった。

ギルド2階、クエスト依頼掲示板の前に直時の姿が見えた。

大柄な冒険者達の後ろから、邪魔にならないよう目的のクエスト依頼書を探している。

「Gランクの依頼書はそこに纏めてあるニヤ」

直時の肩を背後から叩いたミケは、掲示板の片隅を指さした。

「ありがとうミケさん。お店の方はいいんですか？」

「うちは今日、休みのニヤ」

「何故ここへ？」

「昨日は御馳走になったから、お返しのアドバイスニヤ」

「わざわざ済みません。昨日はまあ、クエスト成功の『お裾分け』

ということ、そんなに気にしてもらわなくていいですよ。じゃあクエスト選んできますね」

そう言って、直時は掲示板前を端の方へ移動した。

(Gランクの依頼の中じゃ、ノーシュタット行き of 輸送依頼は結構

報酬がいいな。それだけ必要に迫られているってことか)

「あまり大きくない荷物ならそれとそれニヤ。あと、あそこもニヤ」
いつの間にか直時の隣に寄っていたミケが指さした。

「有難うございます。じゃあ、報酬の高い魔石の運送にしようかな」
「報酬は金貨3枚だけど、保証金に金貨1枚いるニヤ」

「うーむ。商品の保険料か……。ノーシユタットで文無しになっ
てしまうな」

顔を曇らす直時に、ミケは向こうのギルド会館で報酬も受け取れることを教える。

直時は剥がした依頼書を1階受付に渡すと、保証金の金貨1枚と引き換えに、人の頭大の魔石の原石とクエスト証明書を渡された。

「こちらをノーシユタット支部の受付にお渡しくだされば、クエスト完了となります。報酬と保証金はあちらでお受取りになりますか？」

「お願いします」

「かしこまりました。それではその様に処理させていただきます」
受付嬢が一度渡されたクエスト証明書に一文を書き加え、改めて直時に手渡す。

「それではお気をつけて行ってらっしゃいませ」

「有難うございます」

紫紺の髪をアップにして頭上に纏めた受付嬢の笑顔に見送られ、ギルド会館を後にした。

直時は、道中必要になりそうなものを各店舗で揃えていく。干し果物、干し肉、小鍋、食器、岩塩、香辛料。雨避けの大きな皮布。

普通の布と裁縫道具。

最低限必要と判断した品を購入したあと、財布には銀判貨5枚分が残っていただけだった。今回のクエストに気合が入る。まさに背水の陣である。

宿屋に戻った直時は、装備の準備を整える。少し考えたが、長期間留守にするため、自分の荷物は全て持ちだすことにした。

日本から身に付けていた鞆に、漫画と文庫本を残らず入れ、着替えや手拭いも残らず詰め込む。

背囊と鞆になんとか全ての荷物が収まった。毛布と皮布は丸めてある。

「さて、問題は自転車だな」

折り畳んではあるものの、担いで行くには嵩張り過ぎる。

「そうだ。新しい魔法陣を試してみよう」

折り畳まれ、布に包まれた自転車の下に魔法陣が編まれる。

「眠れ 重さの精霊よ 今は軽き羽根を夢見よ 『浮遊』」

魔術が行使され、魔法陣が消えた。

「浮かないな？」

訝しげな直時は、自転車へと手を伸ばし、抱え上げようとした。

「うわっ！」

異様な手応えに驚きの声を上げる。自転車はまるで重さを感じなかったのである。

茫然とした直時は、抱えた自転車から手を離してみる。まるで、羽毛のようにふんわりと床へと落下した。地に付いた音も立てない。

転写された術の情報は最低限であったが、100キロまでなら羽根一本程の重量になること。持続時間は半日程であることが判った。

「これは便利だな。隊商とかじゃ重宝するだろうな。でも消費魔力は多いから、PTとかで交代して使っただろうな」

実際、大規模な隊商などには専属の魔術師が雇われている。

「準備よし」

すぐに持ちだせるよう荷物を固め、寝床の布団やシーツを畳んで食堂に下りた。

暫く本格的な料理とはおさらばなので、直時は欲望のままに皿を平らげた。

「行ってきます」

「お気をつけて、行ってらっしゃいませ」

アイリスに見送られて高原の癒し水亭をあとにする。直時が向かうのは東門だ。

ノーシユタツトまで普通の旅程では9日間。しかし、移動魔術を持つ者ならその半分、4、5日で到着できるらしい。

直時の依頼も加護祭初日に間に合うことが条件であったが、同じ様なクエストを受けた冒険者だろう。東門の外には魔法陣を編み、弾かれたように旅立っていく者が多く見られた。

そんな中、直時の眼を引いたのは『浮遊』とその他の移動系魔術を組み合わせて使っている者達だった。

ある者は幅広の板切れに荷を載せ、自らはその上に立ってバランスをとり宙を滑るように飛んでいく。見えない波に乗るサーフィンのようであった。

またある者は車輪のない三輪車のような木馬に跨り、同じように低空を駆けていく。

乗り物は殆どが木製であったが、直時は近未来に迷い込んだかのような錯覚をおぼえた。

飼いならした魔獣に跨ったり、荷車を引かせている者達もいたが、PTや商人等が多かった。少し離れたところでは、飛行能力を持つ魔獣を呼ぶ者達もいて、飛竜や巨鳥の威容に驚きを隠せない直時だった。

周囲で編まれる移動系上位魔術。呪文から、『地走り』であるようだ。直時はこっそりと、しかし、しっかりとその魔法陣を脳裏に焼き付ける。

ほぼ間違いなく記憶できたと判断した直時は自身も出発のため、魔法陣を編む。

「眠れ 重さの精霊よ 今は軽き羽根を夢見よ 『浮遊』」
自転車には既にかけていたのだが、全てを背負った自分へと魔術をかけなおす。

「風の追い手よ 我が身を運べ 『推進』」

直時の背が見えない手で押される。重さが無いため、踏ん張りが効かないようだ。

「よっ、はっ、とっ」と

一步を踏み出すが、次の一步がなかなか地に着かない。歩幅が5メートルほどになっている。

バランスを崩しながら飛ぶように駆けるが、労力は歩くのと大差ない。

次々と他の冒険者に追い抜かれていく直時は、今日中にコツを掴もうと心に決めるのだった。

直時の姿が見えなくなった東門外。そこから軽装の旅人が出発した。

人魔術を使わずに、下半身を中心に魔力を巡らせ身体能力を強化する。強化した脚力は、移動魔術に不慣れな直時に楽に追い付きそうになるが、一定の距離から近づこうとしない。

旅人は自分の感覚が届くぎりぎりの距離で直時を追走する。

姿を現さない旅の道連れに、直時が気付くことはなかった。

ノーシュタットへ（後書き）

更新できなかつたけど、毎日書いてました。
まとめてアップ！

監視者

「いちっ、につ、いちっ、につ……。よし！こんな感じだな」
日が傾きはじめて頃、直時は漸くコツを自分なりに掴みだしたようだ。

普通に一步を踏み出してしまうと、浮きが多くなり次のタイミングが取り難い。ベクトルも上向きになり、力のロスも大きくなってしまふ。

それよりは、ほんの少し地面を蹴る程度、一步が3メートル弱になるようにして、目線が下がったタイミングで次の脚でそっと地面を蹴る。

滞空時間が減り、一步の距離が少なくなるが、リズムよく進むことができた。速度もかえって上がっている。

スムーズになった移動に満足したのか、直時は早めに野営地を探しはじめた。

既に街道横では幾つかのPTや隊商が炊飯の煙をあげていた。人数が多いと準備にも時間が掛かるのだろう。

直時は防犯のことを念頭において野営地を探しながら街道を移動した。

街道から少し離れたところに森があり、とりあえずそこへ向かう

直時。

木陰に入るとまずは探知強化で知覚を強化する。気配を探ったが、この森にはどうやら直時しかないようだった。

少し広めの場所を探し、荷物を下ろす。まずは薪拾いである。

竈を設置した直時は、拾ってきた薪を適度な大きさに切ろうと鉈を振るった。

「あれ？」

枝を払おうとした鉈が細い小枝さえ落とせない。

鉈は本来その重量で叩き斬るものである。装備も含めて全身に浮遊の術式をかけてしまったため、刃物はその切れ味と腕力のみに依存することになる。

鉈のあまりの軽さにそのことに気付いた直時は、浮遊の魔術をキャンセルした瞬間、慣れてしまっていた身軽さが、途端に重いものになり逆になり手足の動きがぎこちなくなるのだった。

「武器は重量消したら逆に危ないな」

明日は疲労しようとも、武器だけは浮遊の術式から外さねばと思う直時だった。

日が暮れた森の中、直時は着火の術式で竈に火を点ける。月が明るいとあまり意味はないが、日暮れ前よりは煙が目立たないはずとの判断だった。これも防犯である。

火にかけた鍋には、脳内検索で食べられる野草と茸、干し肉が入

っている。塩と香辛料で味付けも完了していた。ファイアとの野営の賜物である。

「花と草木に潤いを与えん

いでみず
出水」

鍋に入れたのと同様に、水遣りの生活魔術でコップと椀に水を満たす。

コップの水で喉を潤した直時は、椀の水に小麦粉（盗賊に殺された家族の荷物から）を溶かす。

「すいとんってこんな感じだったよな？」

煮立った鍋にそつと溶いた小麦粉をなびかせる。具無しのワンタン。幅広のきし麺のようだ。

「お腹がくちくなればいい」

直時としては御飯を入れて雑炊にしたいところだが、米はまだ見つけていない。

「そういえば、一人の野営ってこれが初めてだったな」

これまではファイアに頼り切っていた気がする。いつまでも一緒にいられるわけではないことを自覚した直時だった。

実際に直時はこの異世界アースファイアに来てから浮かれていた。

初めて眼にする魔術や精霊術。しかもそれに才能があつた自分。強力な精霊術を使うファイアが道案内兼、保護者として傍にいたということもある。

豹人族の姉妹に騙ったハツタリが現実味をもって自身に降りかかってくることを予感した直時だったが、どこかに自分の責任じゃないかと思っていた。

しかし、こうして独り夜の森で過ごしてみると、改めて自分の不確かさ、異物としての危険さが感じられた。

風の神霊メイヴアーユの前で確認した『この世界でどうにか生きて、どこかに骨をうずめる』ということが、堪らない寂寥感をもつて直時の心を凍えさせる。

（誰に影響を与えることなく、静かにひっそりと死ねということか・・・）

英雄になりたいとも勇者を名乗ろうとも思わないが、自分の力をひた隠しに生きろというのは酷な話である。

（滅入るばかりじゃ仕様が無い。やれることを増やすかな）

気持ちを切り替えた直時は、便利そうな浮遊の魔法陣を描き、改造しようとした。

「っ？」

直時の強化された知覚に、近寄る存在が引つ掛かる。

（微かな衣擦れの音。足音は軽い。魔獣じゃないな）

魔法陣を即座に消して、人族だとの判断からそのまま野営を演じる。

「一日の終わりはやっぱり温かい御飯だよなあ」

独語しながら、緩い表情で食事を始める直時。

食器を洗淨魔術で洗って仕舞った後も、遠方の監視者から意識が向けられているのを感じる。

煙管を燻らせて一服着いたあとも、謎の人物はその場から動かなかった。

小用の振りをして、監視者の間に木を挟んで探知強化を上書きする直時。

欠伸をしたり、伸びをしたり、表面上の演技を終えて竈の傍で横になる。

眠った振りをしながら、一晚中謎の監視者への警戒を絶やさない直時だった。

熟睡できないまま夜を明かした直時は、監視者が動かないのを再確認し、出発の準備を整える。

だるそうに、ゆっくりと、暢気な様子を心掛ける。

「あーあーあー身体が痛い。野宿はやっぱり身体に酷だなあ」
直時は、寝不足のカモフラージュにそんなことを呟きながら節々をほぐす。

準備を整えた直時は、武器を外して横に置く。描く魔法陣は浮遊。

心はともかく、身を軽くした直時は槍とナイフと鉈の重みを確かめつつ身に付ける。

「移動魔術にも慣れたし、今日は『地走り』使ってみるか」
購入したのではなく盗み見ただけであったが、追跡者に聞かせるかのように独語する。

街道に出た直時は魔法陣を編む。見ただけの『地走り』を使うのは内心不安だらけである。

「我は風捲き 地を駆ける この身は疾風！ 『地走り』」
前傾姿勢を保った直時が地に着くこと無く、弾かれたように移動を始める。

(うあっ！早い速い疾いって！探知強化なかったらぶつかって大怪我する！精霊術は姿勢制御とか楽だったけど、この魔術は怖いっ！)
初めて使用する魔術の恐怖と闘いながら、高速移動する直時。

「我は風捲き 地を駆ける この身は疾風！ 『地走り』」
直時の気配が感じられなくなる寸前に、監視者が同じ魔法陣を編む。

同時に脚力強化へと魔力を巡らせ、見失うことなく直時を追いはじめた。

(これでも引き離せないか……。今日はこのまま引つ張るか)
探知強化を切らさずに背後の存在を捕捉する直時。

疾駆する姿は高ランク冒険者と同等の速度を保っていた。

直時は旅程を大幅に縮めていたが、浮遊を掛けずにいた武器の重

量が、思いの外疲労を蓄積させていた。

(眠いし疲れた……。安心して眠れそうな場所は無いか？)

街道を外れ過ぎると魔獣に襲われる。街道沿いとして盗賊に出くわすこともある。謎の追跡者のことも気になる。

直時の体力と神経はかなり磨り減っており、どこかで回復させないと不味いとの焦燥があった。

経験を積んだ冒険者なら、気の抜きどころや少ない睡眠での回復を自然と身に付けているのだが、直時にできるのはどこでも眠るということだけ。それも、危険が満ちた旅中では発揮させることが出来なかった。

直時の移動速度が落ち始めた。魔術の効果が切れつつあるようだ。

野営にはまだ早い時間だったが、街道からだいぶ離れた森へと向かう。森へ足を踏み入れたのと、直時から『地走り』の効果が切れたのが同時だった。

(街道からここまで目立った遮蔽物は無いぞ？さて、どう出るかな) 昨夜は闇を味方に近くまで来ていた監視者だったが、夜明けからは視認できる距離には近寄らず、強化された視力にもその姿は確認できなかった。

直時が選んだ森からは、街道の人影がかるうじて視認できる程度の距離であった。普通であれば、人物の判別など出来ないが、今の直時の視力なら問題ない。

街道では、一人の旅人が直時と同じように移動魔術の効果切れで

スピードを落とす。

しかし、すぐさま常人ではない脚力でそのまま走り去って行く。

直時は、その人物の顔をはっきりと確認した。

ミケラ・カルリン。ミケだった。

野営のため、野草や茸を採取しつつ、初期の混乱をなんとか収めた直時だった。だが、思考に没頭しがちで作業は捗らない。

昨夜と同じく、竈に火を点けたのは宵闇が下りてからだった。

直時は鍋に干し肉を千切っては放り込みながら、頭の整理をしていた。

（ミケさんは冒険者ギルドの喫茶店の従業員。初心者への助言等も業務に含まれる。ただのウェイトレスではなく、冒険者ギルドという組織の一員と判断していいだろう）

鍋から良い匂いが漂ってくる。食べ頃のような。

（俺を調べるのはギルドの意向だということか？異世界云々なんて確認しようも無いようもないから理由としては除外。リスタル南部での魔獣戦がそんなに問題になったんだろうか？）

直時は、ミケから聴き取りを受けたことを思い出した。

（得体の知れなさだけなら、冒険者なんて殆どそうだろうし、強さだって掲示板にはAランクの依頼がかなりあった。つまり数もそれ

なりにいるってことだろう。ファイアなんてランク外の強さがありそうだし、竜人族も規格外の強さらしい。ん？ファイアって有名人だったな……)

ファイアの連れだという理由もあるかもしれない。

鍋をかき混ぜる直時の手がほんの少し強張った。

(風が教えてくれるまで判らなかった！探知強化にひっかからないなんて！)

精霊術を行使したわけではないが、直時の警戒から風の精霊が空気の流れを教えてくれたのだった。

背後の梢に音もなく蹲る影。

知覚を強化する魔術があるなら、それを無効にする魔術も存在する。その可能性にまで思い至らなかった直時。

(監視だけが目的ならやりすぎす。襲われた時には……)
声に出さず、風の精霊達に念じる。意思が通じたようで、直時の周囲に精霊が集まってきた。

平静を装うよう努力する直時だが、肩に自然と力が入る。

「くつくつくつくつ。タッチーは演技が下手だニヤあ」
ミケが隠れていた梢から飛び降りてきた。

「……努力はしたんですけどね」
ナイフを抜いて身構える。武器はブラフで本命は精霊術だ。

「降参なのニヤー。ばれた時点でうちの負けなのニヤ。それよりお

鍋が煮えてるのニヤー」

笑いながらミケが近づくと、直時としては判断がつかない。

「ひとつだけ質問します。自分への監視は何処からの命令ですか？」

「言えば信用してくれるかニヤ？」

「難しいかもしれませんが、でも、理解したいとは思いますが」

「ふむ」

悩む素振りのミケ。本気がどうかは判らない。

「命令ではなく依頼です。依頼主は冒険者ギルド。私の直感ではかなり上からの依頼ですね。内容はタダトキ・ヒビノの情報収集。能力、性格、嗜好、考え方、知りえる全てです」

ミケが微笑を消して直時に応じる。

「・・・それが素ですか？」

「工作上的素です。でも、いつもの私も素なのですよ？」

落差に驚きを隠せない直時に、ニコリと笑いかける。

「ギルドの職員が依頼を受けるんですか？」

「ふふふ。自己紹介したときに言いましたよ？臨時だと」

「・・・そうでしたね」

「本業は冒険者です。ウエイトレスはまあ、趣味ということもありますが、情報収集のためですね」

直時はあつげにとられたままである。

「タダトキさんは何か神々の気を引くようなことをなさったんでしようか？直感の続きになりますが、依頼主はおそらくギルド創設にかかわった神だと思います。まあ他にも理由はありますが」

（もしかしてメイヴァーユ様経由で興味を持たれたのか？）

心当たりに行きついた直時。

「あなたは何者です？」

無言の直時にミケが一步近寄った。

「駆け出し冒険者、タダトキ・ヒビノ・・・としか言いようがないんですよね」

「私が信じられませんか？」

「正直、これだけ明かされたら嘘も交じってるんじゃないかと勘ぐってしまいますね」

「では私の秘密をひとつ。私は闇の精霊術が使えます。闇の精霊よ、我が身を包み、この身を隠せ・・・」

瞬間、ミケの気配が消える。先程、梢で蹲っていたときの状態だ。

直時の眼前にいるにもかかわらず、周囲の景色の中の一つのようだ。呼吸もなく、体温すら感じられない。ただそこに在るだけ。

「どうです？全面的に信じるとは言いません。これと交換にタダトキさんの真実をひとつ教えてくれませんか？」

ミケから闇の精霊が散り、気配が戻ってくる。

「・・・まさか自分の能力をさらけ出して来るとは。女性のこんな秘密、口が裂けても他人には言えませぬね」

軽口であるが口外はしないとの意思表示だ。

「ミケさんと秘密が共有できるなら、自分も晒さなくてはいけないですね」

直時はミケへの信頼を回復しつつあったが、明かす秘密の程度を計りながら言葉にする。

「これは薄々判つていると思います。自分は風の精霊術が使えます。風よ……」

直時は掌の上に小さな竜巻を起こして見せる。

「風の精霊術が使えるようになったのは、自分ではよく判りません。多分、カール帝国の風廊の森で、神霊たる風を統べる女王、メイヴアーユ様と会ったことが原因かと思ってます」

「加護を与えられたのですね？」

「いや、その辺りは正直わかりません。ただ、その場にファイアが現れて、その流れで一緒に旅をしてリスタルまで来ました」

判らないことは判らないと正直に言う。

「風を統べる女王か……神域で話のネタにされたのかもしれないね」

「……ネタですか？」

「神々は基本的に、物見高い方達が多いと聞きます」

「暇人か……」

「ふふふ。間違つてないと思いますよ？そうかあ。興味本位の依頼だったのニヤ」

「あれ？」

「仕事は肩が凝るのニヤ。こちらの方が気楽なのニヤあ」

「あれれ？今までの凜々しいミケさんはどこにっ！」

「タツチイーも今のキャラの方が良いニヤよ？」

わしわしと髪をかき混ぜられる直時。

「まだまだ謎だらけのタツチイーだがニヤ」

これから暴いてやるぞ！といった楽しそうな眼である。

「謎の美女のミケさんが言いますか？」

直時は苦笑いだ。

「とりあえずお腹空いたニヤあ。タッチー、ごはんー」

「あ！その鍋オルニオン（玉ねぎ様の野菜）入ってますから！」
獣人族は中毒症状が出るらしい。

「マジかニヤあああああああ！」

「嘘です」

にやりと笑う直時の頭にミケの爪が突き刺さった。

監視者（後書き）

日曜なので長めです。

仕事モードのミケさんのこれからの活躍に御期待！

・・・書くかはわかりません。

ふれあい(前書き)

サブタイトルと関係あるのは前半のみです。

ふれあい

ミケと敵対せずに済んだ直時は、一緒に夕餉を囲むことにした。

「ちょっと足りないですね。少し待ってもらえますか？」

もともと一人分の用意しかしていなかったので即興で料理を考える。

(すいとんもどきは昨日食べたからなあ)
悩む直時。

「適当でいいのニヤ。うちの携帯食は干し肉しかないから何でも嬉しいのニヤ」

「味の保証はしませんけどね」

言葉とは裏腹に、ミケはなにやら期待しているようだ。

直時は出水の術式で椀に水を少し、岩塩を削って入れ、小麦粉を練る。練りあがった塊に干し果実を刻んで混ぜる。

土木用の石化の魔術で煉瓦のような石をつくり、臨時のフライパンにする。加熱も生活魔術（料理用）である。

薄く伸ばした材料を焦げ過ぎないように焼くと、ドライフルーツ入りの膨らまないホットケーキのような、チャパティのような、そんなものが出来上がった。

「これでお腹を誤魔化してください」

大きめの葉を皿がわりにして、1枚ずつ盛る。

椀は洗浄し、ミケのために鍋をよそう。直時はコップだ。

「スプーン使ってもいいのニャ？」

ひとつしかないためミケに渡してある。直時はナイフで小枝を削り、使い捨ての箸を作った。

「うちの国じゃ、これが主流なんです」

2本の木切れを動かす直時。鍋の具も器用に挟んで見せる。

「確か、東方の島国だったニャ？」

「その調査結果の通りですよ」

直時はミケに語ったわけではないが、しっかりと調べられているようだ。

「聞いて判る程度は基本なのニャ」

「その分だとあの豹人族、リナレス姉妹からも聞き出してるんですよね？」

「ギルドからの事情聴取と勘違いさせたニャ」

実際は窓の外で聞き耳を立てていたのだが、リナレス姉妹からの事情聴取も行われていた。可哀相なくらい頑なな態度から隠し事があるのは明白で、飴と鞭を使い分けて聞き出したミケだった。

「どつするニャ？」

「どつもしませんよ？裏どりで苦勞するのはミケさん達でしょうかね」

どれが嘘でどれが本当の情報なのかは自分で確かめるとの直時の言葉だ。

豹人族に対して云々というのは単なる脅しということと、ミケとしては苦笑を返すしかなかった。

「このパンもどきは、即興の割に美味しいのニヤ。うちも作ってみるのニヤ」

自然な甘さが好評だったようだ。

「それは良かった」

ミケが美味しそうに食べてくれて、単純に嬉しい直時だった。

「美味しかったのニヤあ」

「おそまつさまです」

満足そうなミケに満足そうな直時。

「さてと。和んでしまいましたが、仕事は仕事。私は報告のためにノーシュタットへと先に行きます。料理の才もあると報告書に記さないといけませんね」

突然の仕事モードミケである。

「この程度で料理とは言えないですよ？自宅を手に入れたときには是非遊びにきてください。もっと美味しいものもおもてなしさせてもらいますからね」

「ふふふ。それは楽しみです。ところでノーシュタットで私を見かけても・・・」

「判ってますよ。自分は調査対象ですからね。見つからないように後を着けてくださいな」

仕事は仕事である。ポーズだけでも形は重要だ。

「忘れてました。これを・・・」

ミケが両手で直時の右手を包み込む。離れた後には金貨が1枚掌

に残っていた。

「今夜の夕食代と情報料です」

「随分と高く買ってもらってるみたいですね？」

「これからの繋ぎも考えてますから」

「じゃあ、しばらくミケさんとはお付き合いできるってことですね」

「できれば実力で調べ尽くしたいところですが、楽な落とし所は必要ということですよ」

「有難く頂戴します」

直時は金貨を握り、ミケに頭を下げる。

「ではまた近い内にお会いしましょう」

「はい。お気を着けて」

ミケは再会への言葉を後に、闇の中へ溶け込んでいった。

「何を何処まで掴まれてるんだか・・・」

愚痴りながらもどこか楽しげな直時。

（情報のやりとりという面では今回は得るものが多過ぎたな。バランスをとるためにも次回はもうちょっと晒してもいいか）

頭の中で屁理屈を捏ねるが、本音はミケとの関係が長く続くことを願っている。直時は異分子としての分をわきまえた上で、それでもなお誰かと関わっていたいと思いはじめていた。

食事の後片付けを済ませ、探知強化を上書きし、炭火となった竈の傍に横たわる。

煩いと感じていた周囲の音も、まぶし過ぎる月の光にも、今夜は

いらつくことなく眠りにつくことができた直時だった。

寝入りと違い、眼醒めは強制だった。

強化されていた直時の知覚に、近づく存在が感じられたのである。

地を踏みしだく蹄の音に、直時は跳ね起きる。

ナイフと鉈は傍にあったが、ベルトを着ける暇が無い。槍を構えて接敵に備える。

「精霊さん。いざという時は頼む」

武器が手にあるのは安心感があるが、直時は実戦で使ったことがない。

今の自分の中で一番確実な戦力は精霊術。ファイアの戒めはあるが、人目がないなら使うのに躊躇はない直時だった。

（力強い足音。4足獣だな。荒い呼吸はひとつ。乗騎じゃない。魔獣か？）
得られるだけの情報から、相手を推測する。

森の木立を警戒もせずにかき分けて現れた影は、猪のような魔獣だった。

対峙する小柄な人影と魔獣。両者は共に相手を値踏みする。

（イボイノシシみたいだけど、大きさが半端じゃない。5メートル

はあるぞ！それに顔のイボも骨ばってるってより岩ばってる）

「カウチウチウチ 甲骨猪は雑食とはいえ、捕食する生物は人よりずっと小型である。直時を餌とは認識しなかったようだ。」

お互いに警戒するも敵意とまではいかない。このまま、何事も無く別れるかと思われたが、甲骨猪が直時の荷物へ鼻を鳴らしながら近付いた。

直時は慌てて、食料だけを与えようと荷物に駆け寄る。その途端、甲骨猪が怒りの雄叫びをあげた。

餌を横取りされると思ったようだが、直時としても輸送クエストで預かった魔石が入っている。鞆ごとくれてやることはできなかった。

ブルオオオオオ！

咆哮を上げ、突進してくる甲骨猪。体長の3分の1以上もあるゴツゴツした巨大な顔面が直時に迫る。

荷物を守る直時はその場を動けない。何度かの使用で慣れた魔法陣を編む。

「土は石に 石は岩に 『岩盾』！」

魔獣の眼前に出現する岩の壁。

それでも直進を止めない魔獣は、まさに猪突猛進。凄まじい轟音を響かせて岩の盾へと衝突した。

次の瞬間、地面から生えた岩壁は根元から折れ、砕けながら崩れ

ていく。

岩盾の形は将棋の駒。それを盤上に立てて、最も簡単に倒せる方法を考えてみよう。一番大きな平面を押すことではないだろうか？

「そんな！」

所詮、思いつき、即興の改造魔術である。術の欠点の洗い出し、改善をしなかったのが災いした。

傷一つ無い魔獣が崩れた岩塊を乗り越えて迫る。

直時は用意していた『ウォーターカッター』の魔方陣をキャンセル。余裕がない。

「風よ！」

甲骨猪は、直時をその牙にかけようとした寸前、横合いからの竜巻に進路を逸らされる。

「焼けつく炎 炎弾！」

傍らを走り抜け、再び突撃をかけようと方向転換しはじめた魔獣へ、炎の攻撃魔術が放たれる。

直時の放った炎弾は、少し狙いを外し、標的の足元に炎を上げた。

『獣は炎を避ける』それだけを頼りに放った魔術だが、役に立たなかつたようだ。

一瞬怯むものの、すぐにその炎を踏みにじる。炎は消し飛び、地面に大きな窪みが出来た。

「やっぱり精霊術しかないか……」
手の中の槍など、巨大な甲骨猪に対しては玩具としか思えない。
使い手の問題ではあるが……。

「風の精霊よ 汝は我が刃 斬り裂け！」
疾走しはじめた甲骨猪の横合いから、大きなカマイタチが走り抜けた。

宙を舞う巨大な魔獣の頭。胴体は傾きつつも走り抜けていく。切断面から大量の血が吹き出すのと、首のない巨体が木立に突っ込むのは同時だった。

「なんとか助かったけど……。この肉どうしよう？」
咽るほどの血の匂いの中、新鮮な魔獣の肉の量に途方に暮れる直時だった。

ふれあい（後書き）

本日は筆が進みませんでした。

話がぶつぎりで申し訳ありません。><

『すいとん』への指摘ありがとうございます。

不見識にも懲りず、またもやでつちあげ料理……。
どんな味になるのか、実際に作ってみたいと……。

ノーシュタット(前書き)

言い訳がましい話になってしまった・・・。
もう見限ってください・・・。

ノーシュタット

『浮遊』の重量遮断は100キログラムが上限だったため、とりあえず血抜きするためにも魔法陣を描き変える。

周囲に誰もいない森の中は、探知強化の使用もあり、宿屋での魔法陣改造より安全と言えた。

「重量制限は魔力を吸い過ぎないようにブレーカー扱いか。必要魔力量多いもんな。じゃあこの設定値を上限無しにして対象重量に相応する魔力を供給するようにして・・・」

一般の普人族が限度を知らずに使ったら、干からびること間違いないような危険な改造を施す。

未だ血を流している甲骨猪の胴体の元へ歩み寄った直時は、完成したばかりの魔法陣を編む。

「眠れ 重さの精霊よ 我は羽根の夢を与えん 『浮遊・限定解除』」

頭を無くした胴体の重量は2トン以上あった。尋常ではない魔力量をもつ直時だったが、急激な魔力の消失に眼の前が暗くなる。魔力の不足分が体力で支払われたためだ。

「やばっ！」

膝を突いた直時は、メイヴアーユやファイアに指摘された『謎の力』、背骨を巡る螺旋の力を急いで魔力へと変換していく。

「ふう……。吃驚した……」

今までは寝れば回復していたこともあり、魔力の補給に意識が向かなかった。

（『アスタの闇衣』で隠蔽してるし、大目に魔力回復しておくか……。しかし対抗する魔術があれば面倒だな。まあ、そもそもそこまでの事態になったら、精霊術でも改造魔術でも使わざるを得ないだろうし良いだろう）

自身の力を魔力へ変換し溜めこんだ量は、エルフであるファイアに倍する量になってしまった。

風の力を借りて、重さの感じられなくなった胴体を木に吊るし、血抜きをする。

死体からは男の直時でさえ悲鳴を上げなくなるほど多くの寄生虫（異世界産巨大ノミ、ダニなど）が這い出して来た。食料である血が止まったためだろう。

直時は、甲骨猪の死体を出水いでみずで洗い流すだけでは足りず、改造魔術の『水塊』をぶつけていた。寄生虫の大群に肝を冷やしたようである。

しし鍋という、朝からなかなかヘビーな食事を摂った直時は、目立たず持ち運べるであろう100キロ分の肉塊を2つと、巨大な牙を戦利品として荷物に加えた。『浮遊』は改造前の既成術を使用する。

出発の準備を終えた直時が、もったいなさそうに残った死骸を見ると、血の匂いを嗅ぎつけたのであろう、以前仕留めた斑土蜘蛛を

はじめとする小型の魔獣達が集まってきていた。

死骸や血溜りに集りだした巨大な虫とは別に、木々の梢にも鳥や翼竜、蝙蝠のような魔獣が様子を窺いはじめる。

「置いていつでも無駄じゃないな。うかうかしてたら俺も餌にされそうだ」

荷物を担いだ直時は、急いでその場を後にした。

『落霜』おちしもで低温保存した肉塊の入った革袋を槍の両端に吊るし、街道をノーシュタットに向けて『地走り』で高速移動する。

町に近付くにつれ、加護祭目当ての観光客や隊商、輸送クエスト中の冒険者の姿が増えていった。

直時の姿もそんな冒険者たちに紛れ、ノーシュタット南門へと到着した。

残り少ない財布から税として判銀貨1枚を渡し、無事ノーシュタットの街へと入る。

（リスタルの倍の税じゃないか！お祭りとか、催事するときこそ半額とかにすべきだろう？）

領主の能力に低い評価を与える直時。しかし、水の神霊の加護を得る、もしくはその場に立ち会えるかもしれないということが如何に希少な体験であるのか理解してないためだった。

加護祭の度に増える参加者に運営能力の限りを尽くす街の領主や役所は、期間限定で税の引き上げも視野に入れていたのは直時の知る由もないことである。

加護祭にごったがえすノーシユタットの街。リスタルより大きく、木造より石造りの建築物が多く見受けられる。

許可を得ているのかいないのか、大通り沿いに所狭しと並ぶ露店身分の上下も入り混じった普人族。獣人族、妖精族、竜人族、魔族等の姿も見受けられる。

直時は、初めての街のお祭り騒ぎに後ろ髪を惹かれつつも、冒険者ギルドノーシユタット支部へと直行する。

ミケから思いもよらない収入があつたが、懐はまだ心許無い。預かった品を一刻も早く渡したいとの思いもある。

ノーシユタット支部は、加護祭のこともあり冒険者で溢れかえっていた。クエスト品の交換所もだが、リスタルでは並ぶ人もまばらだった受付にも多くの冒険者が列をなしている。

直時は列の後ろに並び、提出アイテムのチェックとクエスト証明書を荷物から出す。

(あれ？証明書になんか付いてる・・・)

リスタルで渡されたクエスト証明書に小さな紙片が挟まれていた。

宿泊は『岩窟の砦亭』で

文面のあとに横長の紡錘形が二つ並んで描かれ、それぞれの中に縦長の紡錘形が塗りつぶされていた。猫眼のようである。

(ミケさんだな……。油断も隙もないな)
苦笑する直時。

昨日の事を思い出す。監視者が現れるだろうことは、ファイアに『アスタの闇衣』を掛けてもらう時に予想されていた。それがミケであったのは予想外だったが、二人が警戒していた普人族の組織ではなく、冒険者ギルドからだったのは僥倖であった。

冒険者ギルドは普人族のための組織ではない。冒険者個人が義勇兵として参加することはあるが、組織としては各国の軍事行動に不干涉を貫いている。

公共の利益であると判断されるなら、増えすぎた魔獣の掃討作戦や、盗賊団討伐作戦の依頼を受けることもあるが、傭兵扱いの軍事作戦がクエストとして受理されることはない。

(ギルドの創設は神様だって言うし、世界中に広がっている大組織だ。隠すより、事情を理解してもらっておいの方が良いんじゃないかな?)

普人族の国や組織に対する後ろ盾にもなり得る。それには冒険者ギルドに直時自身が利益をもたらすことが前提であるが……。

(しかし、ミケさんの方が何者? って感じだよな。その気だったら知らない間に殺されていただろうに……)

風が知らせてくれたとはいえ、至近距離だ。闇の精霊にどんな攻撃があるのかは判らない直時だが、魔法陣の発動無しで攻撃されたらひとたまりもなかったであろう。

(気配に気付かれたからって、必要もないのにわざわざ姿を見せるあたり、あの人も良い人だよな。油断はできないけど……)

顔を確認されたことには気付いてなかっただろうから、そのまま逃げて何食わぬ顔で接していても良かったミケである。

（監視者はミケさんだった。調べる理由はギルドからの依頼。ミケさんは冒険者で、闇の精霊術を使う。依頼主のことを教えてくれたのは、そういう指示だったのか、ミケさんの独断か、あるいはブラフ。少なくともギルドで職員まがいのことをするくらいだから、ギルドからの依頼という線は妥当かな？）

直時は情報を整理し、これからのことを考える。

（正体を明かして、対話による情報収集。そして、俺にはその方が有効だと判断されたわけだ。対話する価値があると認めてもらったことで、喜んでいいんだろ。そして、対話する以上、俺が求める情報も渡してくれるはず。これは交渉次第か）

ギルドに頼り切ることは出来ないが、ギルドを敵にまわすことだけは避けなければならない。

（フィアがいれば相談できたんだけど、なるべく無難な情報を小出しにしていくしかないか……。わざわざ仕事だつてモード切り換えするくらいだから、この街じゃ接触してこないかもしれないけど、宿を指定するのは隠れて会うくらいは考えてそうだ）

思考に没頭しがちであったが、受付での順番が回ってきた。

直時は、予め手元に用意していたクエストの依頼品と証明書を渡す。依頼品の確認を待つ間、受付嬢に『岩窟の砦亭』の所在を聞く。

「今はこの宿屋もいっぱいですよ？予約されてますか？」

「自分は予約してないのですが、知人の紹介だったもので。とりあえず確認のために寄ってみます」

「そうでしたか。部屋の空きがなければギルドでご紹介できるかも

しれませんので、そのときはお気軽に声をかけてくださいな」

「はい。有難うございます」

宿屋の幹旋もしているようである。

「依頼品の確認がとれました。こちらが報酬の金貨3枚になります。それと、お預かりしておりました金貨1枚もお返しいたします」

「有難うございます」

「クエスト完遂お疲れ様でした。またのご活躍を」

「どうも」

財布に報酬を納め、受付を後にする。懐には金貨が合計5枚ある。

「これならお祭りも楽しめそうだ」

顔を綻ばせながらギルド会館を後にし、『岩窟の砦亭』へと向かう直時だった。

『岩窟の砦亭』は受付で聞いたより判り難い場所だった。直時は教えられた場所近辺を何度も歩き回った末、ご近所さんに聞くのが一番かと武器屋の扉をくぐった。

「いらっしやい」

店主は妖精族であるドワーフである。土や火の精霊術を使い、鍛冶を生業とするものが多いと知識にある。店の品は彼の作品なのだろうか？

「こんにちは。済みませんが紹介してもらった店がわからなくて、道を聞きに入っただんです。宜しければ『岩窟の砦亭』という宿屋を教えてくださいませんか？」

「ああ。それならうちのことだ」

「え？ここは武器屋さんですよ？」

ミケの指示から宿屋だとばかり思っていたが、違つようだ。

「誰に聞いた？」

店主が少し低い声で直時に問いただす。

「猫人族のミケラ・カルリンさんだと思います」

「暗爪か……。思ってますってなあどつうことだ？」

「メモだけがありまして、差出人の心当たりがミケラさんだけだったんです」

ミケの二つ名に実力者との意識を新たにするも、店主の威圧感に訳を話し、例のメモを見せる。

「ふむ……。確かにな。よし！何泊する？」

「ここ武器屋さんですよ？」

「かみさんが宿屋やっててな、まあ判り難いが入口はそこだ」

ドワーフが指したのは店の片隅から地下へと降りる階段である。壁に『岩窟の砦亭』の看板がかけられていた。宿屋を目的に来た人には探しようもない場所である。

「加護祭が3日後ですよね？じゃあ今日を入れて4泊お願いしたいです。空きはありますか？」

「それなら大丈夫だろ。かみさんが下で受付やってるから俺の許しが出たと言ってくれ」

「はい。有難うございます」

紹介制の宿屋なのかな？と思いつながら階段を下りる直時だった。

「いらつしゃいませ」

直時を出迎えたのは、褐色の肌に濃いオリーブ色の髪をした妖艶な美女であった。耳が尖っているのをみるとエルフのようだ。

「こんにちは。宿泊をお願いします」

「有難うございます。予定は上での声が聞こえておりましたわ。4泊でよろしゅうございますね？」

「はい。お願いします」

「お代は金貨1枚になります」

「えっ！」

あまりの高額に吃驚する直時。おかみさんは笑みを崩さずにいる。

「ミケからは何の説明もなかったようですわね」

「………はい」

「うちはこのような店構えでしょうか？お部屋は全て地下になります。壁は主人の土の精霊術で錬成されておりますし突破は不可能です。各部屋は闇の精霊により声も気配も漏らしません。侵入者は不肖わたくしめが排除させていただいておりますわ」

夫婦で精霊術の使い手であるという。つまりセキュリティが売りということだ。

「ギルド御用達の宿なんですか？」

「いいえ。信用のおける冒険者様であるか、そのご紹介がある方向けの宿屋でございます」

「自分の場合はミケさんの紹介になるんですね？」

「そうですね。それにミケはまあ、私の妹のようなものですからその紹介を無碍にはできません」

「お世話になります」

ミケからの報酬はこの料金のことであったようだ。直時は惜しみつつも金貨1枚をおかみさんへと渡す。

(ギルドとは関係ない・・・のか？ミケさんの独断なのかな？)
なんとなくミケの掌の上のようだが、セキュリティが万全なら魔
法陣の改造も安心してできそうである。其処ら辺りの事情も汲んで
のことだろう。

「ところでそのお荷物は食肉のようですが、クエストの品ですか？
おかみさんが二つの革袋に視線を向ける。

「いや、これはクエスト品ではなくて、たまたま襲われた魔獣の肉
なんです。ギルド会館は人でいっぱいだったので、そのまま持って
きてしまっただけです。あとで掲示板の確認に行かないと・・・」

「ちなみに何のお肉ですか？」

「甲骨猪です。部位は腿肉ですね」

「差し支えなければ買い取らせてもらえませんか？」

「それは助かります。正直困ってただけです。依頼が無かったら自分
で市場に売らないといけませんからね」

これで少しでもさっきの出費が回収できれば儲け物だと、直時の
顔が明るくなる。

「拝見させていただいても宜しいですか？」

「どうぞどうぞ！市場の買取りの7掛けくらいで買ってもらえたら
嬉しいですよ」

自分で売る手間を考えれば3割引くらいが妥当だろう。ただ、直
時は流通価格など知らないのだが。

「良い状態ですね。本当に7掛けでよろしいのですか？」

「はい。助かります！」

「では両方引取らせてください。金貨4枚で買い上げさせていただきますね
きますね」

「おおお！有難うございますっ！」

思わぬプラス収入である。興奮する直時におかみさんが確認する。

「牙も採取されましたか？」

「あ、はい。鞆に入ってます」

「宜しければそちらは旦那に見せてやってくださいませんか？武器の材料として必要としているかもしれません」

「もちろんです！部屋に荷物を置いてから伺うようにします」

「牙も買い手がつきそうな勢いだ。幸運とミケに感謝する直時だった。」

『岩窟の砦亭』の部屋数は少なく、8部屋だった。階段を下りた所に受付のカウンターと、小さいながら待合所があり、テーブルが2つに椅子が4脚あった。受付から左右へと廊下が伸び、それぞれが4部屋と繋がっている。

おかみが直時を案内した部屋は右の廊下側の一番奥だった。

灯火の術で真っ暗だった部屋の様子があらわれる。ベッドは扉から見て左の壁際。小さなテーブルと椅子が1脚中央に置かれている。右の壁に荷物置きのための棚がしつらえられていた。広さは8畳ほどだろう。

直時は案内の礼を言って、荷を下ろす。槍は壁に立てかけ、自転車の入った包みは床に。残りの荷物は棚へと並べていく。

ナイフと鉈は腰に残したまま、牙の入った革袋と日本で買った鞆を手に部屋を出る。鞆の中は重い本だけを部屋に残して日本から持ち込んだ品がそのまま入っていた。

おかみさんに出かける旨を伝えると、夕食の有無を聞かれる直時。

少し考えたあと、食事は外で摂ると答えた。

「ところで気になってたんですけど、宿泊するのに名前も何も聞かないのは何故ですか？」

「この宿の流儀ですわ。名乗られても問題はありませんけど、名乗りが必要のない方がほとんどですし、それ以外の方は必要があつて名乗らないので、私もそれに慣れていたようすわ。どうされますか？」

「自分は名乗っても差し支えありませんから。改めまして、タダトキ・ヒビノです。短い間ですが、お世話になります」

頭を下げる直時。

「リタ・シュタインです。ヒビノさんの滞在が実り多きものでありますように」

しっかりと頭を下げるリタ。

「主人はジギスムントと言います。無愛想なもので、上にあがたらヒビノさんから自己紹介していただけると助かります」

「承りました」

リタは好感を持ったようで、眼元が優しく感じられた。

「ミケが気に入るわけですね」

「え？」

「この宿に普人族の方が来られるのはめったにないのですよ？」

「・・・不味かったですか？」

「いいえ。珍しく気持ちの良い普人族の方で、嬉しいくらいです」

「はあ」

曖昧な返事をする直時。

「いってらっしゃいませ」

リタに見送られ、『岩窟の砦亭』の階段を上る直時だった。

「おう！坊主！かみさんから聞いたんだが、甲骨猪の牙があるって？」

「……坊主」

妖精族の寿命は長いからあながち間違いではない。

気を取り直した直時は、改めて自己紹介をし、品を見せる。

「この牙の大きさ……。大物だったようだな」

「5メートルくらいでした」

「よし！牙は全部引き取るう！下牙はそれぞれ金貨2枚。上牙は合わせて金貨1枚と銀判貨10枚でどうだ？」

「有難うございます！」

即決した直時だった。

ジギスメント曰く、金属加工はお手の物だが、牙や骨格、爪などは結構重宝するのだそうだ。折しも加護祭で品不足だったので、直時の戦利品は非常に助かったとのこと。

充分懐が暖まった直時は、お祭りに浮かれる街へと繰り出したのだった。

ノーシュタット（後書き）

今週は厄介事続きで更新がままなりませんでした。

自治会の清掃作業で脱水症状。熱中症か？

仕事後の訓練で筋肉痛。3日は痛かった・・・。

消防団の後任人事で揉める。会議と言う名の吊るし上げ合戦。

お酒を飲みながら腹の探り合い。うとう・・・お酒は美味しく飲みたい><

臍臓が泣きごとを言いだす。3日〜一週間禁酒すれば復活する・・・はず！

飲みながら書いていたため、保存せずに消してしまっ！立ち直るのに時間を要しましたorz

正直最期が一番つらかった・・・。

ノーシュタット？（前書き）

宿屋のトイレの有無を完全に忘れていましたorz

宿屋は基本的に部屋ごとにトイレがあるという設定で・・・><

・・・書いてませんが・・・在るんです・・・

ノーシュタット？

ノーシュタットの街は政庁を中心に東西南北へ大通りが走る、街道を基本に建設された街だった。街の外周は城壁と言うには低い、それでも3メートル程の石造りの壁が囲んでいる。一定の間隔で監視所が設けられているのは、治安面ではなく通行税のためだった。

普人族で対応できないほど力のある種族なら、監視所をかくぐるのは造作もない。しかし、それだけの力を持つ者の財力なら、わざわざ密入しなくとも税を払えば良いだけなのだ。ただ、緩い規則だとそれを基準にしてしまう者が続出するため、形だけとはいえ必要な措置なのだった。

宿泊する『岩窟の砦亭』は外壁に近い場所にあつたため、まずは一番近い南大通りへ向かう直時。

少し薄暗い路地から、夜にも拘わらず魔術で明るい大通りは目立つ。迷うことなく喧騒の真つただ中へと足を踏み入れる事が出来た。

「良い匂いだ」

所狭しと並んだ数々の露店。日本の縁日と同じく、飲食系が一番多い。

「おにーさん！串焼き3本と麦酒！」

「はいよ！焼きたてだからヤケドすんなよ！」

直時は早速手近の店で注文する。

店先で立ったまま食べるのが、この世界の露店のスタイルのようだ。紙コップなどの使い捨て品が普及すれば食べ歩きも可能になる

かもしれないな、と考えつつ木製コップに注がれた麦酒を呷る。

串焼きは小振りで、日本の焼き鳥ぐらいだった。肉は何の肉か判別がつかなかったが、塩と香辛料だけの味付けで素材の良さだろう肉の旨味を充分に引き出していた。

「美味い！おにーさん、これ何の肉？それに焼き方も上手いねえ。固くならないで、それでも火がしっかり通ってる。それに串からほろっと肉が取れるもの」

「イリキア産の黒地走り鳥の腿肉を叩いてほぐした肉さ！もう一本いっとくかい？」

直時の絶賛に若い店主の顔が綻ぶ。

「もう3本と麦酒おかわり頼むよ」

「はいよ！」

なんととはなしにやり取りを見ていた者が足を止め、新たな注文が増える。

勘定は商品と引き換えだったため、混みだした店先で慌てて食べる直時。串は店先のバケツの中に捨てる。

「ごちそうさま！」

カウンターの端にコップを置いて、次の露店を物色しつつ歩き出す直時だった。

その後、パスタだか焼きそばだか判らない料理や、大判焼きのような小さなパンケーキ、魔術で凍らせた果実などを食べ歩いた直時は、さすがに満腹になったのか、落ちつける店を探していた。

「露店ばかりだったけど、BARっぽいところでゆっくりしたいな」

膨れた胃を撫でながら、眼に着いた酒場に入る。

重厚な店構えのためだろうか。表のお祭り騒ぎとは無縁の静かな店内だった。客の入りもそれほどではなく、客の身なりからして富裕層のための店のようだ。

（場違いだったかな？まあ、一杯飲んで出たらいいか・・・）
少し怯むも、懐具合と酔いに後押しされカウンターへと腰を下ろす。

「ご注文は？」

「強いものを生きで。樽の香りが良いものをお願いします」
麦酒と果実酒ばかりだったので、強い酒はないものかと探りを入れる直時。銘柄を指定せず曖昧な表現で店の対応をはかる、

バーテンダーは壮年の普人族。真っ直ぐ伸びた背中と、表情を変えない静かな対応に年季を感じさせる。

「私のお勧めでよろしければ見繕わせていただきます」

「お任せいたします」

にっこりと頭を下げる直時。

（貴族や豪商っぽいのが多いけど、あそこの集団は役人かな？妙に息が合つてるところはもしかして・・・）

何気なく店内を見渡し、注意を引いた集団は、直時の直感通り軍人であった。それぞればらばらの私服であるが、集団訓練を受けた名残が、いちいち動作が揃うのである。

誰かが発言すれば全員が注視し、立ち上がれば踵を揃える癖がある。直時が自衛隊の基地近くの街で飲んだときによく見た光景だっ

た。

「紅玉の朝露という銘柄です。樽は竜鱗櫛。37年ものです」

コトリと微かな音とともに水晶グラスが直時の眼の前に置かれた。

ワンフィンガー分の紅茶色の酒を手取る。色を愛で、次に香りを楽しむ直時。

軽く含んだ酒精から、尖った中にもまるやかな味わい、樽から移った木の香り、強いアルコールの刺激が溢れる。

（これこれ！ウイスキーっばい！穀物系の蒸留酒ってやっぱりあったんだな。フラスクと合わせて滞在中に探そう）

決意とともに、口腔の酒を飲み下す直時。

滑りながら喉を焼く感触。そして胃に落ちて静かに燃える炎のような感触。

自然と綻ぶ直時の顔に、仕事を完遂したものだけが得る満足を浮かべるバーテンダー。

「初めて出会うお酒です。素晴らしい出会いに感謝します」

グラスを掲げる直時に無言で頭を軽く下げるバーテンダー。ご機嫌な直時はグラスを軽く揺すり、立ち昇る香りを楽しむ。ちびりちびりと少しずつ飲む姿は、ただの酒好きの姿だった。

静かな店内の空気が凍ったのは、新たな客を迎えた時だった。

そのグループ客はかっちりと制服を着こなした軍人だったが、奥で談笑していた軍人らしき集団から敵意の視線が放たれる。

(敵対国なのか・・・な?)

不穏な気配を感じた直時は、惜しみつつも残りの酒を一気に呷る。炎が喉から腹へと下っていく感触が堪らない。

「他を探そう」

制服集団の先頭にいた男が後ろを振り返り店から出ていった。凍った空気が時間とともに溶け出していく。

店が元の雰囲気を取り戻すのにさほど時間はかからなかった。しかし、気を削がれてしまった直時は会計を頼む。

「またのご来店をお待ちしております」

丁寧な頭を下げるバーテンダー。そして美味しいウィスキー(?)の発見に直時は1杯で銀貨1枚という値段を気にせず店を後にすることができた。

先程の店内での出来事が気になったのか、街を歩く直時の視線は自然と集団でいる普人族へと向けられる。

(あれも軍人だな。足並みが揃い過ぎてる)

思ったより多くのそれらしき集団が見受けられる。

直時は軽く喉を潤そうと氷菓子を売る露店で足を止める。

犬耳の売り子が果肉ごと搗り潰した果汁に、攪拌しながら『氷結』の魔術をかけている。

「おねーさん。その赤いのひとつお願い」

「はいはい。ちょっと待ってねー」

注文をさばきつつ、直時のオーダーに応える。

「いやー加護祭の熱気はすごいねえ。熱にあてられたみたいで、冷たいものが欲しくなっちゃたんだよ」

「5年に一回だからねえ。誰だって加護を授かるかもしれない望みがあるなら、参加もしたくなるからねえ」

「加護持ちってやっぱりすごいことなんだねえ。俺なんか加護を授かるなんて思えないからただの観光だよ」

「前の加護祭のときは誰も加護を得られなかったから、今回は熱気が違うのさ。集まって来た人もすごく多いみたいだよ？」

「皆、我こそは！って意気込んでるのかねえ」

「普人族なんかはそういう人は多いね。お客さんはあんまり乗り気じゃないね？」

「あつはつは。俺はまあ、みーてるーだーけーって感じかな」

日本での有名な台詞である。直時が揶揄する意図だけは伝わったようで、コロコロと楽しそうに笑う犬耳娘。

「はい。おまちどお！」

「おう！ありがとー」

代金の白銅貨を払う。攪拌で空気が良く入って、食べやすいシャリシャリ感だ。

「うん！美味しい！」

「あはは。ありがとー」

店先で酸味のあるイチゴのようなシャーベットを食べながら、直時は犬耳娘に話しかける。

「それにしても軍人さんが多いねー」

「毎回毎回懲りずに良く顔を出すもんだわ。精霊術を戦争の道具にしか考えてないような連中に、加護なんて得られるわけないのに」

犬耳娘が鼻を鳴らして、折しも店の前を歩く軍人らしき集団を見る。侮蔑の色が濃い。

「だよなあ」

適当に相槌を打つ直時。

「でも加護を授けられたって、戦争で精霊術使えるほどの魔力は普人族にはないだろう？」

「いやいや、普人族の軍隊はえげつないらしいよ？集めまくった魔石だらけの装備で戦場に放り出すらしいからね」

過去に精霊術を使える普人族が戦争に投入されたことがあるようだ。

「動きにくそうだね。的にしかならんדר？」

「だから他の兵を盾にして進むんだってさ」

「・・・えぐい戦法だな」

「全くだよね」

「あ、器ここに置いておくよ？美味しかった。ありがとねー」

「こつちこそありがとー！また来てねー」

犬耳娘に手を振りながら店から離れる直時。

食べ歩きに満足した直時は、あちこちの露店を冷やかしながら『岩窟の砦亭』へと帰る。

道すがら購入したのは、ベルトに装着可能な幾つかのポーチと小さな革袋が数個だった。探していたフラスクは見つからなかった。

(ウイスキーは明日、酒屋を探してみるかな)

必需品のひとつにお酒がカウントされている直時だった。

宿へ戻ると、ジギスメントの武器屋は灯りを落としていたが、入口の鍵は開いていた。地下への階段を下りると、受付にはまだ女将であるリタが待機していた。

「おかえりなさいませ」

「ただいま戻りました」

「街はどうでしたか？」

「すごい人でした。さすが加護祭だけはありますね」

「お楽しみになられたのなら宜しゅうございました」

艶めかしい雰囲気纏うリタの笑顔に一瞬頭が霞む直時だったが、軽く欠伸をしてそれを振り払う。

「今日は疲れました。ゆつくりと休ませてもらいますね」

「今を躲しますか・・・朝食はどうされます？」

「？ 何か不穏な台詞が聞こえたんですけど？」

「気のせいです」

「・・・・・・朝食の用意をお願いします」

「かしこまりましたわ。それではごゆつくり御寛ぎください」

深々と頭を下げるリタ。大きく開いた胸元から見える深い谷間が気になりつつも部屋に向かう直時だった。

扉が閉まる音が微かに聞こえ、受付にジギスメントが顔を出す。

「お前、魅了使ったな？」

「あら、あなた。やきもちをひつともないわよ？それに小手調べだったけど、自覚も無しに無効化されちゃったわ。精霊に好かれやすいのかしらね。ミケも面白い子と縁を持ったものだわ」

「お客なんだから程々にしておけよ？」

「そうね。次はミケを睨けてやるうかしらね」
フフフと楽しそうに微笑するリタ。ジギスマントは肩を竦めて寝室へと向かう。

「加護祭で人の出入りが激しい。入口は大丈夫か？」
振りかえったジギスマントがリタに聞く。

「もちろん。お客様と予約された方以外は入れないように闇の精霊に護ってもらってるわ」

「お前も早く寝ろよ」

「我が家のベッドメイキングは任せたわよ？」

「明日がつらい。早めに来い」

就寝をあっさり覆されたジギスマントは眠れるのは何時になるだろうかと考えながら、寝室へと向かうのだった。

自室へと戻った直時は、用意してあった洗面器に『出水』で水を満たす。衣服を全部脱ぎ、隅々まで身体を拭いた。汚れた水はトイレに流す。

新しい衣服を纏ってベッドに横になったが、すぐに置きあがって文庫本を手にしてもどる。

（疲れてるから寝たいけど、今晚はこの宿の様子見だ。寝ずに警戒しよう）

常に入口が視界に入るようベッドに座り、文庫本を読み始めた。旅の疲れと、酔いに誘われて眠ってしまいそうになる。

「危ない危ない。今日は我慢だ」

気分転換だろう。煙管を燻らせる。

直時が紫煙を吐きだしつつ、ぼんやりと入口を眺めていると、黒い靄のようなものが眼に映りだす。

「ん？」

注意して見ていると、黒い靄は半透明の拳大で、それがいくつも漂ったり扉の隙間を出たり入ったりしている。

微かな子供のような笑い声。

(この感じは、精霊か?)

風の精霊や、水の精霊と同じような気配を感じる直時。

「おいで？」

煙管の火を消し、近くを漂っていた黒い半透明の靄玉に手を伸ばす。

「君達は闇の精霊？」

ひとつが直時の掌に乗つかると、ベッドの下や、部屋に落ちる影の中からも次々と精霊達が出てくる。

「君達は何が得意なの？」

話しかける直時に声にならないイメージが次々と流れ込む。癒し、抱擁、安息、眠り、護り、そして死。

(全てを包み込む慈悲の闇・・・死は生の終焉、その看取り手・・・)

直時は、死のイメージを伝えてきた闇の精霊に対して不思議と恐怖は感じなかった。

それから朝まで、直時は闇の精霊達と遊びながら過ごした。

光の向きと関係なく。自分の影の手や首を伸ばしたり縮めたり、放り投げたコップの影を捕まえることで実体の方を空中停止させてみたり、濃い闇の塊をつくってみたり、その中に入ったりと随分と楽しんでいた。

若干不安があつたものの、何事もなく朝を迎えることが出来た直時は闇の精霊達との遊びを止めて、受付のリタの元へ向かう。

「おはようございます。お早いですね？」

「おはようございます。昨夜お願いした朝食ですけど、ここって食堂はないですよね？」

「朝食は部屋の方に用意させていただきます。もうお持ちしても宜しいですか？」

「はい。お願いします」

「では、少々お待ち下さいね。用意が調い次第お部屋へ伺います」

「宜しく願います」

軽く頭を下げ、部屋へと戻る直時。

散らかっていた本を片付け終った頃、扉を叩く音が聞こえた。

「はい。どうぞ」

「失礼します」

リタが扉を開け、湯気の立つ料理を載せたワゴンを押して入って来た。給仕のスタイルなのか、エプロンドレス姿である。

「お声を掛けてくだされば、片付けに参ります。では、ごゆっくり」

艶やかな微笑みを残して部屋を出ていった。

メニューは焼きたてのパンと、具だくさんのスープ。塩漬け肉と生野菜のマリネ風。搾った柑橘果汁だった。食後のお茶もポットに用意されている。

全てを平らげた直時は、お茶を飲み、煙管を燻らせる。

「朝までちょっかい出されることはなかったな。一応安心していいのかな？」

寝不足と満腹感が眠気を誘う。

「……昼まで寝よ」

限界のようである。

食器を載せたワゴンを受付のリタへと渡し、昼まで部屋で用事を済まし、昼から出かける旨を伝える。

部屋に戻った直時は、のそのそと寝具の間に滑り込む。

「闇の精霊さん……誰か来たら起こして」

昨夜から一緒に遊んだことで、仲良くなった闇の精霊に伝えたのが限界だった。次の瞬間、直時の緊張の糸が切れ、深いまどろみへと落ちていくのであった。

久し振りに深い眠りを得た直時は、身も心も回復し賑わう街へ繰り出した。

（それにしても人が多い。物見遊山だけなら構わないけど、必要な

買い物もしないとな。特に酒とか！)

大通り沿いを人波を縫いながら、店を物色する。

(あの魔法陣の看板は魔術屋さんか、防御系の魔術とか欲しいな。結界みたいな術を探してみるか・・・)

行きかう人の波を、誰にぶつかるともなく進む。ラッシュ時のホームや休日の繁華街などに較べればどうということはない。時折聞こえる肩が当たった、ぶつかった、足踏んだだのという怒声や謝罪の声は直時には無縁だった。

「いらつしゃいませ」

店の扉をくぐった直時を出迎えたのは、恰幅の良い壮年の男性だった。魔術師というより、商人にしか見えない。

(魔術屋だって、魔法陣を売る商売人だから当然か)

納得した直時は、自分の希望する魔術を伝える。

「防御系の魔術を探しています。駆け出しの冒険者なのですが、野営の時に安心して眠れる防御系の魔術とありませんか？」

「眠っているときですか・・・。戦闘中の防御系ならありますが、長時間発現させておく術は扱っておりませんねえ。警戒や警報を発する術ならありますがいかがですか？」

「ちなみに戦闘中の防御系ではどのようなものがありますか？」

「『炎壁』や『氷盾』、『風緩衝』など、各種取り揃えております。魔術カタログをご覧くださいになりますか？」

「お願いします」

「では、こちらへどうぞ」

直時は店内の応接椅子へと案内され、防御魔術一覧と書かれた羊皮紙を渡される。

魔術の名称と簡単な説明文、値段が記されている。

(どの魔術も戦闘中の短時間の発現のみか、改造したところで一晚中炎や氷に囲まれているわけにもいかないしな……。風系はエアクツションみたいなものか、逸らすような魔術だな。土系は『岩盾』改造すればいいだろうし……)

悩む直時に、店主がもう一枚のカatalogを持ってくる。

「発想を変えられてみてはいかがでしょう？」

「これは……。見つかりに難くする魔術ですね？」

ニコリと頷く店主。頷いた拍子に3重になった顎が、直時に抜群の安心感をもたらす。

(光系魔術は、周囲に溶け込ませる……。迷彩術？迷彩柄のシートを被って隠れるような感じかな。流石に光学迷彩とまではいかないか……。闇系魔術は、影に溶け込む、隠れるみたいな魔術だな。光を反射しにくくなるのか?)

他にも臭いや音を抑える風系魔術や、霧を発生させる水系魔術などがある。

いつくか心惹かれる魔術があつた直時だが、一番魅力的に感じた光系迷彩魔術を選ぶ。

「この光系魔術『幻景』(げんけい)と……。警戒用の魔術『報笛』(ほうてき)をお願いします」

「有難うございます」

『幻景』は金貨2枚。『報笛』は銀判貨15枚であつた。

直時が次に向かったのは魔具店だった。魔杖が看板に描かれている。

「いらつしやいませ」

直時を出迎えた声は二つあった。壮年の男性と、若い女性のものである。父娘だろうか。眼元がよく似ていた。

直時は、店内の品を眺めつつ、魔具に対する脳内情報を検索する。

魔具には大別して3種類ある。

杖等に組み込まれる増幅系。放出する魔力量をある程度増幅してくれる。眼に見えるほどではないが、消費魔力を節約できる。

次に装飾品等の貯蔵系。指輪や首飾り、服のあちこちに留められた魔石の装飾品は、普段から少しずつ魔力を貯め、任意に使用することができる。魔力の少ない普人族は、魔石をバッテリーのようにして、ある程度魔力量をカバーしている。

最後に系統強化系。見た目は装飾品であるが、はめ込まれた魔石が特別なもので、火系、水系、土系といった特定の属性に親和性を持つ魔石である。これにより自身の使う、同系統の魔術を強化したり、相反する系統の魔術を弱めたりすることができる。本来、魔法陣の効果は同じであるが、術との相性等があるのも事実で、自分の得意な系統の魔石を身に付けることが多い。

(結構良い値段するなあ。それなのに客は多い。需要が多いな) 軽く店内を見渡した直時は、あまり必要性が感じられなかったため、何も買わずに店をでた。

遅めの昼食を屋台を巡ることで摂った直時は、ぶらつきながら主目的である酒屋を探す。

酒樽を看板にした大きな店が眼に入った直時は、高速で人波を縫う。全ての障害物を確実に避け、目的地に向かうその姿は、プリプログラミングされた通りの巡航ミサイルのようだった。

入店した直時の目の前には、桃源郷が広がっていた。積み上げられた酒樽。芳醇な香り。試飲もできるようで、仕入れに訪れた者たち、真剣な顔で香りと味を試している。

「おや？その黒髪は昨日の？」

直時が掛けられた声に振り向くと、素晴らしい仕事振りのバーテンダーさんの姿があった。

「こんにちは。昨夜は大変美味しいお酒をありがとうございました」

「ご満足いただけたのなら私も嬉しいです」

凛々しい印象のバーテンダーが柔和に微笑む。

「昨夜の蒸留酒があまりに美味しかったので、酒屋さんを探してここに来たんですよ」

頭の後ろを掻きながら直時が話す。

「お酒を愛しておられるようですね」

「あはは。味とかあんまり判らないですよ？ただ好きなだけです」

「どのような品をお求めですか？よろしければお勧めなどさせていただきますよ？」

「それは有難いです。尖っていても構いませんが、樽の香りが良いものが好みます」

「ご予算は？」

「金貨1枚です。樽は一番小さいのがいいですね。旅の途中なので」「ガロン樽になりますね。それで金貨1枚なら・・・高級とはいきませんが、香りの良い銘柄があります」

「じゃあそれを購入することにします」

「試飲もできますよ？」

「初飲みも楽しみの内ですから、宿に帰ってこっそり楽しみます」顔を合わせたバーテンダーと直時はどちらともなく笑いはじめる。

「ノーシュタットにお寄りの際は・・・」

「もちろん一番に寄らせていただきます」

皆まで言わず断言する直時だった。

蒸留酒の小樽を抱え、ご満悦の直時はバーテンダーの勧めの店でフラスクを購入し宿へと帰った。

「待ってたニヤ」

直時を出迎えたのは、少し憔悴したようなミケだった。

ノーシュタット？（後書き）

禁酒設定した日だったのでお酒ネタになってしまった・・・。
話の方向性を見失ったまま走りだした感が・・・。

リメンの泉（前書き）

懲りずにやらかしました・・・。
でも後悔はしていません。

リメレンの泉

リメレンの泉に着いたガラムPTは、加護祭設営中のシーイス公国神事局の役人達に迎えられた。

PTリーダーとして話を聞いてきたガラムが他のメンバーに情報を伝える。

「魔狼はちよくちよく目撃されているらしい。だが、危害を加える様子はなく、離れたところからリメレンの泉を窺っているだけのようだ。実際に被害は皆無のようだ」

「それって加護祭に参加しようとしてるだけじゃないの？」
妹のラーナがガラムに問いかける。

「それが正解だと思う。泉南の広場は人族のお祭り騒ぎだが、北の方はいろんな種族が来てるからな」

ガラムの解釈に他のメンバーも異論は無いようだ。

「依頼内容は『シーイス公国が主催する加護祭』が無事終わること。魔狼の排除だけど、殲滅じゃないのよね？」
フィアが再確認する。

「神霊の加護祭に参加資格は無いわ。魔狼にも参加する権利はある」
「それはその通りなんだがなあ」
ラーナの言葉に髪の毛を掻きまわすガラム。

「仕事として受けてしまいましたからねえ。形だけでも遂行しないと報酬が貰えません」

普人族の優男、リシュナンテが気障つたらしく肩を竦める。

「依頼の完遂のためには、相手の事情を考慮に入れる余地は少ないのではないか？」

ヒルデガルドが問う。

「なるべく争い事は少ない方が良いのじゃがのう」
ダンが髭をしごきながら呟く。

「シース公国の祭壇設置は泉の南広場だ。神事係の眼にとまらなように牽制しつつ、加護祭を終わらせるといふ方向でどうだ？」

ガラムの提案にPTメンバー全員が頷く。

「魔人族か魔獣使い（テイマ）がいれば良かったのにね」
フィアの言葉に苦笑しつつガラムが応える。魔獣と意思を伝え合うことができれば戦闘せずに事をおさめることができたかもしれない。

「もしもの話をしてもし方無い。いざという時は頼むぞ？」
「了解」

「晴嵐の魔女の力・・・是非とも拝みたいものだ」
ヒルデガルドの言葉に頷くメンバー達だった。

「貴女に言われたくはないわね。ヒルデガルドさん？」
「そうかね？」

不敵に笑い合う両雄に戦慄を禁じ得ないメンバ だった。

加護祭祭壇近くを拠点としたガラムPTは偵察を繰り返していた。

ヒルダの上空哨戒。ガラムとラーナの隠密索敵。ファイアの風による広域索敵を駆使しつつ、拠点で連絡にあたるリシユナンテが念話の魔法陣を描き、PT内の遠話情報を統括する。ダンは拠点の仮住まいを土の精霊術でしつらえた後は、加護祭の設営に手を貸していた。

(親魔狼を視認した。相手も気付いているが、敵意は無い)

ヒルダからの『遠話』を受信したリツテは、同じく『遠話』で他メンバーに情報を送信する。

(こちらガラム。捕捉対象は無い。ヒルダの視認は1頭か?)

(うむ。片親だけだ)

(対象捕捉。多分母魔狼と仔魔狼2。追跡する)

(無理するなよラーナ。ヒルダ、フォロー頼む)

(親魔狼1は泉西岸。後は任せる。これよりラーナのフォローに入る)

リツテの中継で連携をとるガラムPT。

(ラーナの先に幼い仔魔狼1を発見した。追跡する)

ヒルダの報告が皆に伝わる。

(ラーナ、ヒルダのフォローが外れる。距離を取れ)

ガラムが妹に注意を促す。

(親魔狼を刺激しないでよ?)

ファイアが釘をさす。

(他の仔魔狼と較べると幼いな。確保すれば交渉も出来るのではないか？失敗しても仔魔狼を囿に泉からは引き離せる)

(囿か・・・気はすすまないが有効ではあるな)

ヒルダの提案にガラムが応える。

(それはその場凌ぎの策よ！怒らせると後がひどいわ。自重しなさい！)

フィアの声が響く。

(その場凌ぎではあるが、クエスト遂行に有効だと判断する)

ヒルダの冷静な声がメンバー全員に木霊する。

(ラーナより。反対！)

(フィアよ。反対！)

(リシュナンテです。アリじゃないかなあ？)

(ダンだ。納得は出来んが争いが小さくなるなら良からう。仔魔狼の安全は絶対条件じゃよ？)

PTリーダーのガラムの判断は、

「ヒルダ。リーダーとして任せる。仔魔狼を確保してくれ。傷を負わずなよ？」

ここまで言い切られては他のメンバーに異論を唱える事は出来ない。

(了解した。濟まん。ヒルデガルドはこれより仔魔狼の確保に向かう！)

ガラムへの心遣いへ詫びを入れ、己の行動を宣言したヒルダは空を駆ける。

他PTメンバーは憤りや同意を感じつつも、全てを引き受けたヒ

ルダへ任せるのだった。

夕暮れ前に『岩窟の砦亭』へと帰って来た直時を出迎えたのは、宿屋の女将リタと旦那のジギスムント、それに猫人族のミケだった。

「タッチー、話があるのニヤ」

いつもの雰囲気にしほり消し様の無い固さを滲ませたミケが、直時に歩み寄る。

(なんとなくだけど、碌でもない話な気がする)

直時は気分を引き締める。

「部屋で聞きましょう」

まだジギスムントの武器屋の店内だ。直時は小振りな酒樽を肩に担いだまま、地下の部屋へ向かう。

部屋の前で立ち止まった直時は、後ろの人影を振りかえる。

「ミケさん、お二方は席を外してもらっておくべきではないですか？」

当然のように付いて来たジギスムントとリタに眼をやる。無然としたドワーフと、面白そうなエルフがミケの後ろにいる。

「ここから先は仕事の話になるのニヤ。姐御とジギーおいちゃんは待ってて欲しいのニヤ」

「わたしは除け者なの？」

「あれ？リタが姉なのに俺はおいちゃんなのか？」

「姐御は面白がってるだけニヤ？仕事と趣味は別なのニヤ」

「偉そうに言うじゃないの？ミケだって今の仕事、趣味入ってる癖に」

直時を見て薄く笑うリタ。

「リタ姉さんっ、これは仕事です！これ以上は立ち入り禁止です！少し慌てたミケは仕事モードでリタに宣言し、直時の背中を押し、直時が入る。」

「おいちゃん・・・」

ミケはジグスマントの悲しそうな小声を無視し、荒々しく扉を閉めて闇の精霊に封印を頼みこむ。

部屋の隅に荷を下ろした直時は、ミケに問う。

「どういう関係ですか？」

「リタ姉さんは、私に精霊術を教えてくださいました人です。本来なら師匠と呼ぶべきですが、姉と呼ばないと怒るのです」

「ほう。自分も教えを請うかな？」

「止めておいた方が良いです。あれは鬼です
微かに身震いする。」

「闇の精霊を感じるようになれるまで、何日も何日も真っ暗な部屋に閉じ込められたり、延々と自分の影と対面させられたり・・・逃げ出しても影に捕まえられて・・・うう」

心的外傷トラウマだったのか、ぶつぶつと呟きだすミケ。

「ミケさんっ、お話を伺いますから！はいっ落ち着いて、ここに座ってください」

部屋にひとつだけある椅子を勧める。直時はベッドの端に腰を下ろした。

「ギルドからタダトキさんへ依頼があります」

「ホンと咳払いしたあと、思いもよらないことを告げる。」

「え？自分個人にですか？フィアとかじゃなくて？」

「そのフィアさん関連でタダトキさんに白羽の矢が立ったのです。先ずはこれを」

ミケは鞆から羊皮紙を取り出すと、直時に手渡す。

「ギルドからの正式な依頼書ですね。内容は、加護対象の保護？」

「そうです。実は」

フィアが臨時で参加したガラムPT。シーイス公国からの依頼内容はリメレンの泉に出没し始めた魔狼を加護祭までに排除することだった。

途中経過で魔狼の数が5頭に増え、殲滅は困難と報告される。ギルドとシーイス公国で話し合われた結果、加護祭の安全な終結が目的となった。魔狼へは設置される祭壇や、見物人が集まる泉南広場に近付くことのないよう牽制だけでも良いことになった。

話がこじれるのはここからだ。水の神霊『ヴィルヘルミーネ』の加護を持つ冒険者から、今回神霊が加護を与えようとしているのが、魔狼の仔であるとの情報が寄せられたのだ。

「依頼を出したシーイス公国、受理した冒険者ギルド、どちらも体面がありますからあからさまにクエストの撤回はできません。しかし神霊のご意思に背くようなことは出来ません。加護祭まで日も無く、ガラムPTとフィアさんに面識のあるタダトキさんに直接依頼することになったのです」

「ギルドの人が説明しに行った方が良いのでは？」

「もちろんです。ギルド喫茶店で面識のある私が明日の朝一番にリメンの泉へと向かうことになっております。調査の件とは別に依頼を受けました。タダトキさんへの依頼は予備ということになります。あと言いにくいことですが……」

「万一の際の言い訳？」

「……その通りです。ギルドとしては対策をとっていた。しかしクエストを受けたタダトキさんが失敗した。と発表されるでしょう」「この件でギルドに恩は売れますかね？」

「多少は売れるでしょう。公式にはできませんが、利用される報酬として毎月一定額をお支払いさせていただきます。具体的には金貨1枚ですね」

顎に拳を当てて少し考えるような直時。突然ニヤリとミケに笑いかける。

「ふむ、悪くないですね」

「ただ、冒険者として大きく評価を下げるようになりますから、これからの活動に支障が出てくるでしょう」

「自分としては危険なクエストで荒稼ぎとか、ランクアップで名声を！とか考えてませんか」

「失敗前提で引き受けるつもりなんですか？」

「そのために来られたのでしょうか？」

「私としてはお勧めのクエストではないのですが、ギルドには少々借りがあるので仲介を断り切れなかったのです。でも、そうですね。引き受けたからには、タダトキさんには是非ともこのクエストを完遂して欲しいですね！」

「ミケさんが連絡に成功する方が確率高いでしょう？」

徐々に声が入ってくるミケに苦笑を返す。

（クエストに俺がどう対応したのかったのも調査になるんだろな。

でもミケさんも別件で忙しいだろうし追跡してくる暇はないか）
嬉しいような寂しいような直時だった。

「そうと決まれば腹ごしらえニヤ！」

「まだ早いですけど、お互い明日は忙しくなりそうですからね」

「姐御！ご飯の用意を頼むニヤ」

モードを切り替えたミケが扉を開けると、当然のようにそこにいるリタへ注文する。

（なんでいるんだよ？怖いよこの人！）

驚くのは直時だけだった。

直時の部屋で一緒に夕食を摂ったミケは用意があるからと帰っていった。

「うちに泊まればいいのに。相部屋で」

見送るリタを横目で睨んだミケの顔は少し赤かった。

早目の夕食を食べてしまえば、寝るまでの時間が大量に残ってしまった。
まいった。

直時はまず、クエスト依頼書を再確認する。

「加護が無事授けられるよう対象を保護すること。魔狼がその対象だとは一言も触れてないな。言い訳に幅をもたせるためかな？成功報酬は・・・えっ？金貨10枚！結構すごいな。でも、失敗した方が安定して収入が得られるんだよなあ」

一度に貰う金額より魅力的に感じる直時だった。

「まあ、ファイア達と無事会えればめでたしなんだが」
リメレンの泉の南広場へはミケが向かい、広場を中心に探索する。
直時は泉の西岸から時計回りに探索する予定である。

（成功しても失敗してもギルドには恩を売れる。あれ？ミケさんが本命だよな？クエスト未達成って場合もあるよな？それが多分一番確率が高い……。ギルドとしての俺への評価自体が低ければそんなものか……。期待されていることは失敗したときの言い訳としての存在だけだな。ミケさんの調査ってギルド関係者のどのあたりから目を通してるんだろうか？今回のクエスト、支部の責任者ぐらゐの依頼のようだけど、俺の調査依頼はミケさんの言葉通りならもつと上か？今回の依頼はギルドに借りとか言ってたし、ミケさんも謎だな）

混乱してきた直時であるが、とりあえず今出来ることに手をつけることにした。

「魔狼って高ランク魔獣らしいからなあ。殺されないように防御系弄つとくか……」

扉をミケに倣って闇の精霊達に封じてもらう。

（ミケさんの師匠だという闇の精霊術師にどれだけ有効か判らないが、何もしないよりは良いだろう。精霊達も大丈夫だと言っている）

「さーて、まずは『岩盾』だ。甲骨猪にはあつさり砕かれたからなあ」

魔法陣を描きチェックをはじめ。

「平面部分を向けるから駄目なんだよ。でも石柱みたくすると必要魔力が多過ぎる。丁字にして背面補強するか……。いや、それなら

H型の方が強いか？全体が大きいから端はやっぱり弱いなあ・・・分厚くして中身を段ボールみたいなの波型に・・・いや蜂の巣状にするか？これなら魔力も少なくて済むし・・・形は半円形かな、円柱？楕円？曲面の方が良いよなあ」

出来上がった防御魔術は『岩盾』を円筒形にし、内部を六角形の蜂の巣状にした『岩盾・緩』。

（強度試験しとかないと不安だなあ）

ということ追加された『岩盾・塊』。こちらは魔力の力技で八角形の石柱の中身はみっちり詰まっている。

「泉の近くなら水は豊富だろうな、魔術屋にあった『氷盾』みたいなのも良いかもな。『水塊』と『落霜』の魔法陣つと・・・。『水塊』だと水を造り出してるから水辺とか関係ないのか・・・まあいや、『落霜』の冷凍部分はここか・・・食品の鮮度保持が目的だからかな？かなり制御されてる。制御部分とつばらったほうが魔法陣簡単になるんじゃないやね？あーでも水量に見合った出力じゃないと魔力が無駄になるな。氷は気泡が入らないように凍らせないと強度が落ちる・・・。『水塊』の量だと大きな盾にならないな。まあ、局的に使うってことでいいか。おっと！投擲の回路そのままだった。これじゃ飛んでいってしまう・・・あれ？攻撃用にも使えるな・・・」

出来上がった魔術は防御用『氷塊・硬』と攻撃用『氷塊・槍』である。

『氷塊・槍』は以前攻撃されたことのある魔術を参考に、10本の氷の槍で面を攻撃するようにする。貫かれた幼子達を思い出し、直時は少しだけ顔を顰めた。

改造した各魔法陣のチェックを終え、記憶野に仕舞い込む。

装備を確認し終えた直時は、酒樽からコップに3分の1ほど酒を注ぐ。

何気なく宙に掲げた酒だったが、何に乾杯しようとしていたのか判らなかった。

「まあいいや、とりあえず乾杯！」

一息に飲み干し、熱い息を吐くと、直時は寢床へと潜り込むのだった。

翌日に加護祭を控えたりメレンの泉では、ガラムPTと魔狼の小競り合いが行われていた。

親魔狼の1頭を見えるか見えないかの距離で追跡するPT一行。

「済まん。仔魔狼を逃してしまったのは私のミスだ」

「いや、ヒルダのフォーローが無ければラーナが無事に離脱できなかっただろう。兄として礼を言う」

「まさかあそこで逆襲されるとは思わなかったわ。肝が冷えたよ」

「多分誘われてるわよ？この先に布陣してるって風が言ってる」
フィアが警戒を促す。

「昨日は各個攻撃されて危なかったからって、全員で行かなくても……僕は戦闘は苦手なだけだなあ」

リッテは遠話での支援に徹していたかったようである。

「ぼやくな若造。お前さんのことは守ってやるから、支援を切らすなよ?」

ダンがリッテの背中を叩く。ドワーフの怪力に涙目になっている。

「来たっ!」

「散れっ!」

ファイアの声にガラムが指示を出す。ヒルダは翼で舞い上がり、ファイアは風と共に木々の間を舞う。

ガラムとラーナはリッテの『地走り』にプラスして、獣人特有の肉体強化で魔力を筋肉へ行きわたらせ疾走する。強靱な爪が長く伸びる。

少し身を退いただけのリッテに黒く巨大な影が躍りかかった。

「ガイーンッ!」

魔狼の爪をダンの巨大な戦斧が防ぐ。8メートルはある巨体の突進を止めたダンであるが、魔狼の鋭い牙が迫る。

そこへ左右から金と銀の矢が魔狼の横腹に突き刺さる。虎人族の兄妹だ。力いっぱい薙いだ爪に、魔狼の体毛が切り飛ばされ宙を舞う。

「兄さんっ、爪が通らないよ!」

「毛皮にまで魔力が通って強化してやがる! なまなかなことじゃ攻撃が通らないぞ!」

「シユバルツの鎧にしてやろう!」

上空から黒い大剣を突き出してヒルダが落ちてくる。

素早く飛び退く魔狼。それまでいた場所にヒルダの黒剣が突き刺さる。竜人族の膨大な魔力が腕力に乗り、剣の破壊力を増幅させる。

大きな衝撃音と共に土砂が飛び散る。窪んだ地面の底から、細腕に大剣を軽々と携えたヒルダが舞いあがった。

木々の間を風に乗って縫うファイアを追跡する黒い影は二つ。若い獣と見えるだけの体躯だ。仔魔狼と雖も6メートルはある巨体。連携した攻撃は見事だが、ファイアの放つ竜巻や豪風に弾かれ、逸らされて、牙も爪も届かない。

「もう1頭いるはずよ！気を付けてっ」

2頭を捌きつつ、警告を発する。

そのときファイアの頭上から大きな影が躍りかかってきた。もう1頭の親魔狼だ。

「風よ！切り裂けっ」

一息でファイアを飲み込めそうな顎を睨んだまま、カマイタチを放つ。

体毛と鮮血を飛ばして、親魔狼が身を捻って着地する。

「手加減したとはいえ、薄皮一枚つてどこかしら？流石は魔狼」

ファイアに退けられた親魔狼を見て、若い魔狼達は警戒心を高める。

強敵と判断したのか、親魔狼達がファイアとヒルダに正対し、それぞれ低い唸りを上げる。

喉を反らして空気を吸い込んだ親魔狼が大きく口を開けた。

「魔咆哮よ！避けて！」

フィアとヒルダは仲間を巻き込まないよう、ともに上空へと逃げる。

アオウウーン！

響き渡る魔狼の遠吠え。魔力を帯び指向性をもった咆哮は、フィアとヒルダに当たらなかつたものの、進路上にあつた木々を粉微塵に分解した。

森にぽっかりと大きな穴が出来上がる。

「なんて威力だ・・・」

ガラムが冷や汗を拭う。

「それでも多分本気ではないぞ？殺気が少ない」

攻撃するなり姿を消した魔狼達への警戒はそのままに、羽ばたきながら高度を低くしたヒルダが言う。

「そりゃ参つたね」

肩を竦めるリツテ。様になっている。

「こつちだつて本気になつてないのが3人もいるんだから大丈夫でしょ？」

ラーナがヒルダ、ダン、フィアへと目を向ける。

ヒルダは不敵に微笑み。ダンは目を瞑って自慢の鬚をしごく。フィアは苦笑を返した。

「次に当たったときにこれ以上来るなって意思を見せて本気でやるか？」

ガラムがその3人に確かめる。

「私はいつでも問題ないぞ？」

「土の精霊術は素早い相手にはキツイんじゃないかな？」

「かまないけど、殺す気はないからね？」

「よし！次の接敵時は、3人とも全力で頼む！」

ガラムに3人は了解とばかりに頷いた。

リメンの泉、ほぼ完成した祭壇の前で未だ忙しく動き回る神事局の役人達。そこへ、三色頭の冒険者が到着する。ミケである。

ガラムPTの所在を確かめるも、今日は魔狼討伐に全員が出発したという。

「今まで静かだったんですが、昨日から戦闘が起こってます。今日も何回か戦ってるんじゃないかな？大きな音や魔狼の遠吠えが聞こえますから」

役人の言葉に、焦るミケ。

「向かった方向はどちらです？」

「昨日戦いになった西岸の方へ向かわれました」

会話の最中にも小さな地響きが起こる。戦闘は続行中のようだ。

「間に合うかしら？」

ミケは呟いて戦場へと走り始めた。

一方西方向からリメレンの泉へと森に踏み入った直時はいきなり仔魔狼と対面していた。

探知強化に引っかけた魔獣がそうだったのである。対峙した両者は動かない。いや、動けなかった。

警戒している仔魔狼とは違い、直時の動けなかった理由は・・・、
（つぶらな瞳、ぼわぼわした体毛、大きな頭に短い手足・・・かつ、可愛い！）
余りの愛らしさに手に持った槍を足元に落としたことにも気が付かず、固まっていた。

産まれて日が浅いのか、体長は2メートル弱と随分と小さい。直時からすれば、大き過ぎるのだが、その外見に心を囚われてしまつて気にもならないようだ。

「でかい・・・でも！可愛いっ！」
（子供のころ遊園地に乗ったワンちゃんの子乗物じゃなく、実物として目の前に！）
身を屈め、右の掌を下から差し出して近寄っていく。

「よしよし・・・。怖くないからねえ。怖くないよお」
警戒に唸るが、それすら可愛い。甘噛みされても大怪我するのだが、気にせず近づく直時。

すぐ傍まで近寄った直時の掌の臭いを嗅いだ仔魔狼だったが、案の定次の瞬間噛みついた。

「痛くないよお。痛いけど痛くない・・・精霊さん癒して」

悲鳴を噛み殺し、涙目ながらも笑顔を崩さない直時に、仔魔狼が噛んでいた手を解放する。

待機してくれていた精霊が瞬く間に穴のあいた直時の手を治癒する。

「ほーら、痛くない」

仔魔狼は傷の消えた手を不思議そうに見るとペロりと舐めた。

（よっしゃあ！第一関門突破あ！）

心で勝鬨をあげる直時はそのまま舐められるにまかせる。

（そーっと。そーっとだぞ。焦るな俺！）

舐められている右手をそのままに、左手で仔魔狼の耳の後ろから顎の後ろまでを撫でる。

（嫌がってない・・・な？大きいしもうちょっとガリガリしたほうが良いか？）

少し力を込め、軽く爪を立てながら搔いてやる。

気持ち良かったのか、直時の左手に身体を擦り寄せてくる仔魔狼。

（なんつて！可愛い生き物なんだっ！勝った！これで俺も人生勝ち組だ！）

心で意味不明の勝利宣言をした直時は、仔魔狼に抱きついて柔らかい毛に顔を埋めて、尚も耳の後ろや首回りを搔いてやる。

気を許したのか、飛びかかってきた仔魔狼に押し倒され、歓声を上げる直時。その顔を舐めまわす仔魔狼。寝転がったままじゃれあいを始めた馬鹿（直時）と仔魔狼のはるか頭上から、突然大きな声がかかった。

「離れろっ！危ないぞっ！」

慌てて身を起こした一人と一頭の眼に映ったのは、黒い大剣シユバルツを片手に舞い降りてくる竜人族、ヒルデガルドの姿だった。

リメレンの泉（後書き）

今回は（も）ごめんなさい！

でも使ってみたい名台詞ってありますよね？

設定の確認のためにも以前の話の内容もちよくちよく入れるべきで
しょうか？

くどくならないか不安だ・・・^^；

リメレンの泉？（前書き）

戦闘シーンを調子に乗って書いてたのですが、なんか納得いかなかったってしまいました。

今回の話は思い切り方向変えた3パターンの中から採用しました。ちょっと短いです。ごめんなさい><

リメレンの泉？

時は少し遡る。

「ラーナ！リツテを護衛！後ろに下がれっ！」

ガラムの指示に魔狼を警戒しつつ、リシュナンテを背後に庇いながら退却するラーナ。

「護つてやるんだから、支援さぼらないでよね？」

「わかってますよ。あの御三方が前衛してくれるなら大丈夫でしょう？」

「ヴァカツ！さっきの攻撃見たでしょうがっ？巻き添え喰らったら即死よ！」

リシュナンテの軽口に応える余裕がラーナにはあった。ヒルデガルドの戦闘力、ダンの堅牢さ、フィアの名声に裏打ちされている。

「土の精霊よ 我が求めに応じよ」

ウオオーーーン！

親魔狼の突然の攻撃にダンが精霊術を行使する。

地響きを立てながら現れたのは、岩壁というのもおこがましい。

屹立する岩山であった。流石の魔咆哮も全てを粉碎することは出来ず、岩山を半ば削り取るだけだ。

正対する親魔狼の攻撃に合わせて、若魔狼が左右からPTに迫る。

2頭に対するは竜人族ヒルデガルドと妖精族フィリスティア。

ヒルダが呼気に魔力を込めた炎の吐息フレスを放ち、ファイアのカマイタチをともなつた竜巻が地を抉る。両者とも若魔狼の前方を攻撃。たたらを踏み、跳び退く若魔狼達。

「今だっ！ここから先は俺達の縄張りだと教えてやれっ！」
ガラムの叱咤が飛ぶ。

「土の精霊よ 我と敵を隔てよ」
ダンが低い声で精霊に命ずる。大地を踏みしめた足から土の精霊達へ魔力が送られる。

「フツ」
ヒルダが翼に集めた魔力を直接変換し、旋風をつくりだす。そこには精霊の働きも、魔法陣もない。竜人族特有の魔術だ。その旋風に炎の吐息を合わせる。

「風よ叫べ 荒れ狂え」
ファイアが宙を舞い、風の精霊へと大量の魔力を注ぎ込む。

地は震え、地割れが全てを飲み込もうとその顎を開けた。炎の渦が触れる全てを焼き尽くそうと鎌首をもたげた。全てを砕き尽くす竜巻が何本も喚び出された。

魔狼達と3人との間に、黒々とした地割れが大きく口を開き周囲の木々を飲み込んだ。そして、彼らの足元を激震が襲い、その敏捷さを奪う。

動きが鈍ったところへ襲いかかる、大蛇のような炎の渦とカマイタチが混じった竜巻。

親魔狼が魔咆哮を放つが、炎も風も少しの揺らぎを見せるだけで、攻撃の痕跡すら残すことはかなわなかった。

力押しでは分が悪いと見たのか、その周囲に闇が集まる。

「不味い！^{ハイド}隠密されたら面倒だ！」

ガラムの警告にファイアが追跡の風を送るが、闇に阻まれた。

魔狼達は纏った闇ごと、手近の影へと沈むように姿を消す。

残されたガラムPTは、それぞれ攻撃を止め、索敵へと移る。ダンは地の精霊に足音を訊ね、ファイアも探索の風を飛ばす。ヒルダは上空へと舞いあがった。

「退いてくれればいいんだけどな」

「楽観は禁物ですよ？」

ラーナの呟きにリツテが応える。

ガラムは無言で獣の気配を探っている。

(見つけた！仔魔狼だ！逃した小さい奴だ！)

上空を旋回するヒルダから突然の遠話がPTメンバーに響き渡る。

「確保を頼むと伝えてくれ」

「了解」

ガラムからの指示をリツテが遠話で伝える。

ヒルダの動向に気付いたのか、姿を見せた魔狼達が走りだした。焦りが見える。

「奴等も気付いた。全員で足止めするぞ！」

「……了解！」……」

リッテの氷槍とフィアのカマイタチが魔狼達の前方の地を抉り、ダンの地揺れがその足を止める。その隙にガラムとラーナの速攻が、ダメージを負わせることができないまでも牽制に成功する。

仲間の支援を意識しつつ、ヒルデガルドは視認した幼魔狼へと飛翔する。

眼にしたのは幼魔狼にのしかかられた黒髪の普人族。見覚えのあるフィアの連れだった。

「離れろっ！危ないぞっ！」

警告を発したヒルダは、身を起こした直時と仔魔狼から少し離れた場所に着地する。右手に抜き身の黒い大剣をぶら下げたその視線は鋭い。

頭を低くし、威嚇の体勢をとる仔魔狼。傍の直時は左手で頭を撫でてやり、落ち着かせようとしている。

「何をしている？早く離れろっ！」

ヒルダの眼が険しくなる。

「まずは事情を説明させて下さい」

竜人族の威圧感に直時の顔から冷や汗が滴る。

説明に口を開きかけたその時、遠くない場所で轟音と魔狼の吠え声が聞こえた。

「ちつ。説明は後だ。その仔魔狼をこちらによこせ！」

「どうするつもりです?」

「困にするだけだ」

「駄目です。この仔にはギルドから保護要請がありました」

「なんだと?」

近寄ろうとしたヒルダの足が止まる。直時はここぞとばかりに早口でまくしたてる。

「この仔が神霊に加護を授けられる対象であることが判明しました。そのためギルドから保護要請が出たのです。これがその書類です」

直時は依頼書を鞆から出し、証拠とばかりに眼の前にかざす。

「だとしても、今、我々は戦闘中だ。それをおさめるためにもこいつが必要だ」

「親魔狼が逆上したら?」

「なら、こいつを連れて泉から離れるまでだ」

「神霊の加護の対象なんですよ?」

「我々は我々の仕事を遂行する。それにフィアも今、戦っているのだぞ?」

ヒルダの意志は変わらない。それでも直時は説得を続ける。

(この依頼、失敗しても俺に損はないが、こんな可愛い生き物を戦いの場に放り込むなんてとんでもない!)

「神霊の邪魔をしたとなつてはギルドに瑕きずが付きます。そのための保護要請です。この依頼は複数出ており、他の冒険者もガラムさんPTの行方を追ってます。ご協力ください!」

「我々は冒険者だ。自らの信用に瑕きずが付く方が問題だ。それにギルドに瑕きずが付くと言ってもリスタル支部ぐらいのものだろう? ああ、

「シーイス公国もか。普人族の国の面子など知ったことではないしな」
ヒルダにとつて、自分達が受けたクエストを完遂することが大事
なようであった。

「そこまで判っているならお願いです。ここは引いてください！ギ
ルドの支部クラスや、普人族の国などどうでもいいんでしょう？普
人族の加護祭より神霊の加護祭を守ったという事実の方が信用にな
るはずですよ！」

「くどい。PTとしての決定はなされているのだ。私はPTメンバ
ーの一人に過ぎん。それに機会はこれが最後だ」

「自分が責任をもって泉の北側へ誘導します。あなたたちPTは普
人族の加護祭さえ乗り切れば良いのでしょう？」

必死な直時の言葉に、声を低くしたヒルダが応えた。

「責任？責任だと？あははははは！昨日今日冒険者になった素人
がっ！ならば、責任をとれる實力を見せてみるっ！」

紅の瞳が直時の無責任としか言えない発言に怒りに染まる。

（地雷踏んだかつ？しかし、竜の人、頭に血が昇ったようだな？こ
の仔から意識が外れたのは良かったけど、太刀打ち出来るのか？い
や、それよりこの仔の安全が第一だ！）

今にも襲いかかつてきそうなヒルダに向けて魔法陣を編む直時。

（まずは小手調べだけど、この人に小手調べて効くのか？）

「土は石に 石は岩に 『岩盾』がっしゅん」

4つの魔法陣で瞬く間にヒルダの四方を岩壁で囲む。視界が遮ら
れた瞬間に仔魔狼を連れて距離をとる直時。嫌がる様子もなく付い
てくる。

『地走り』と『浮遊』を自身に上書きし、落としていた槍を拾って構える。ヒルダから離れることが出来た直時は、危ないからと逃げるように仔魔狼を押しやるが、ある程度離れるだけで、逃げようとしないう。ヒルダに対する敵意が感じられる。

「逃げろって！」

やりたくはなかったが、怖い顔で『しっ！しっ！』と手を払う。

仔魔狼はヒルダに向かって小さな牙を剥き出していて、直時の言葉に耳を貸さない。

キンッ！

金属質な音と共に正面の『岩盾』に斜めの線が走る。

線に沿ってずれていく岩の壁が突然直時に向かって弾きとばされた。即座に回避する直時。方向は仔魔狼の逆だ。

(探知強化サウチカク様様だ。普段の反応速度じゃ絶対避けきれなかった！) 躲した岩の壁を確認せず、閉じ込めたはずだった竜人族に集中する。

「この人魔術は何だ？初めて見る術式だ」

紅い眼を輝かせ、笑いに口角を釣り上げるヒルデガルド。

(キレたかと思っただけ、意外と冷静だ。これは手強い)

「怪しい魔術商人から買いました」

「お前の方がよほど怪しい」

「退いてくれるのなら無料で転写しますよ？」

さりげなく交渉を続ける直時。相手が冷静なら、戦うよりマシだと考えている。

「珍しくはあるが一太刀で断たれては役に立つまい」

「やっぱり退いてはもらえませんか？」

「舐めるなよ。小僧っ！」

翼をひと羽搏きし、一気に加速するヒルダ。黒剣を袈裟懸けに斬りつける。

(実戦で試験とか怖いが初お目見えだ！)

同じ用な魔方陣を編む直時に、ヒルダが苦笑を浮かべる。

「土は石に 石は岩に 『岩盾・緩』 『岩盾・塊』」

魔力消費が激しそうな魔方陣を連発することには感嘆するが、ただの岩壁に阻まれるヒルダではない。余裕をもってシュバルツを構える。瞬間に眼の前に現れたのは滑らかな岩の円柱だったが、一刀の元に斬り飛ばされた。

(緩は衝撃吸収タイプだからな・・・目眩まし程度にしかならんだろう。本命の塊はどうだ?)

予想通り『岩盾・緩』はヒルダの黒剣に切り飛ばされるが、時間差で八角柱の『岩盾・塊』が立ちはだかる。

ガッツ!

黒い刃が柱の半ばで止まった。

「おおっ! 使えるっ!」

直時が歓声を上げる。

「ふんっ」

ヒルダが軽く気合を入れ、止まった刃を振り抜く。甲高い音の後

に、直径5メートルの八角柱が斜めにズレていく。地に落ち、轟音を立てて大地に倒れる石柱。

「……………マジですか？」

直時は『岩盾・塊』に込めた大量の魔力が無駄となる様さまに呆然となる。

（なんだこれ？こんな人居るのに俺に制限かけるとかおかしいんじゃない？理不尽だ！アキラカニオカシイ！）

力の制限を課したフィアに心の中で文句を言う直時。

禍々しいオーラを纏ったヒルダが、微笑みと言うには明らかに黒いものを滲ませつつ迫ってくる。

「面白い。並の魔力量ではないな？フッフ、お前の全てをぶつける。死にたくなければな！」

仔魔狼の確保という初期の目的を忘れたかのようなヒルダ。肌を覆う鱗の面積が増え、尾の太さも長さも増している。戦闘に高揚して竜寄りになっているようだ。しかし、なにより直時を恐れさせたのはその瞳だった。

「あはははははははははは！」

先程の冷静さは何処へ行ってしまったのか、狂気と歓喜に染まった瞳は直時しか見ていない。

（標的確実に俺になってる！知らない間に狙い通りになっているのは良いんだけど、怖過ぎだろ！ワンコよ逃げてくれーっ！）

魔狼であるが、直時の中では違う認識になっている仔魔狼は相変わらずヒルダを睨みつけていた。

(この竜の人の恐ろしさをもつと見ないと逃げてくれないのか？
しかしどうする？ 防御魔術は役に立たない。『岩盾・塊』が駄目な
ら『氷塊・硬』も無理。『崩土』^{ほつと}は飛ぶ相手には無効)

これまで直時は攻撃に踏み切れなかった。臨時とはいえファイアと
同じPT仲間であるし、遂行中のクエストも正式な依頼だ。何より
相手の立場からすれば、その主張が正当だと理解できていたからで
ある。

しかし、圧倒的な戦闘力、威圧感を持つヒルダに恐怖は限界へと
達する。

「焼けつく炎 『炎弾・散』！」

初めて攻撃魔術をヒルダへと向ける直時。威力の少ない術を選ん
だのは、未だ心理的歯止めがあつたせいだ。

「ぬるい！」

片翼の羽ばたきだけで、炎の散弾が霧散する。

「貫け 氷の槍 『氷塊・槍』！」

「同じことだ」

ヒルダの翼が起こした風に、10本の氷の槍が纏めて叩き落とさ
れる。

(精霊術を使うしかないのか・・・)

直時はここに全力で戦うことを決意した。

リメレンの泉？（後書き）

没った理由は超展開になり過ぎて、イメージしてた進行が不可能になりそうだったからです。

没原稿・・・もったいないから消してないけど、どっかで使えたらいいなあ。

リメンの泉？（前書き）

悩んだら駄目だ！筆が鈍る！

でも皆さんの指摘に、自分の拙さを思い知らされます。

今回も短いですが、更新することが読んでいただいていることに対する応えだと思いつアップします。

リメレンの泉？

攻撃魔術を片手どころか、片翼であしらわれた直時はヒルデガルドから視線を仔魔狼へと移す。少し迷ったあと、魔法陣を編む。

「土は石に 石は岩に 『岩盾・塊』」

仔魔狼の前方に八角形の岩柱が聳え立った。

巻き添えを恐れる直時は、いつそ困んでしまおうとも思ったが、それでは逃げ場が無くなってしまふ。仔魔狼が盾として身を隠せるように、そしていつでも逃げる事が可能なように考慮した結果だった。

「……用は済んだか？」

「一応は。待って頂いたようで恐縮です」

「ひとつ訊く」

鋭い眼光に怯む直時。

「人を殺したことは？」

「……あります」

「いつだ？」

「初めてお会いした日の二日後です」

「……冒険者に登録して初めて、ということか？」

「まあ、そうですね」

「戦闘もか？」

「命懸けの戦いという意味ならフィアと出会ってからが初めてでしたね」

「はあーっ」

深い溜息を吐いたヒルダは、全身から力を抜く。先程までの威圧感が嘘のようだ。

「つまらん！魔力量から何を隠しているのかと期待した私が馬鹿だった」

「あの？」

「闘^やる気が失せた。魔力は余りあるようだが、使い方を知らん。闘いを知らん。（竜人族の）赤ん坊のようなものだ。もういい。今、仲間と連絡をとってやろう」

取るに足らない者を見る眼で直時を一瞥し、『遠話』の魔法陣を編むヒルデガルド。

「リツテか？仔魔狼は確保した。親魔狼達とは距離をとって追跡してきてくれ。それと問題が発生した。今回、加護が与えられるのは仔魔狼だったそう。ギルドから保護の要請を受けた者がここにいる。ああ？私達には関係ないだろうか？まあ、お前達は気にするか。それと仔魔狼を保護しているのはフィリスティアの連れだ。そう。黒い奴だ。我々は魔狼には敵と認識されている。少し距離を保つ。こちらに向かえと伝えてくれ」

直時に聞こえるように声に出して『念話』をしていたヒルダが通信を終える。

「それでは自分はずっと離れてこの仔と一緒にいます。ご配慮感謝いたします」

深々と頭を下げる。

「先程高言した『責任』を果たしてもらおうぞ？我等と魔狼は敵対しているのだから。それと、その土系の人魔術、片付けられるなら早くしろ」

「すぐにやります！」

直時は魔法陣を逆操作して『岩盾』系であちこちに乱立する岩壁や岩柱を地に還す。その様子を興味深げに眺めながらヒルダが言う。

「その人魔術、リシュナンテには言うな。奴はカール帝国の宮廷関係者だ。それとラーナはリシュナンテに気があるようだから、ガールヤ兄妹にも悟られなないようにな」

そう言っつて距離をとるヒルダ。直時は再び頭を下げた。

（助かった……。様子見と手加減されてたのは理解してたけど、最期まで力試しが続かなくて良かった）

ヒルダの攻撃はほとんど威嚇で、直時の出方を見てから対応していた。先制するように見せかけて、反撃を煽っていたに過ぎない。

（キレたように見えたのは演技だったか？警告は俺への親切心か、特定の普人族国家に益をもたらすことのないように配慮したかどちらだろう？会ったばかりだし、多分後者だろうな）

ヒルダの警告に色々と安心する直時だった。

直時の安堵に反して、ヒルダは落胆していた。

竜人族は人族の中で、類稀なる戦闘力と生命力を持ち、独自の価値観で行動するため普人族と接点を持つことが少ない。敵意を向けられれば、火の粉を払うその腕は相手を容赦なく殲滅するが、基本的に個としての戦闘力が小さい上に、好戦的な普人族のことを取るに足らない、相手にするのも煩わしい存在とぐらいにしか認識していない。そして、己の強さを自覚する彼等は、強者との闘争に惹かれる傾向が強い。

ヒルダがガラムPTに参加したのは、古い知人の懇願があったのと、相手が高ランクの魔獣である、魔狼という獲物であったことに興味をもったためだ。

当初の予定であつた魔狼の殲滅が、普人族主催の神事を護ること、排除はするが積極的な戦闘が手控えられたことに気落ちした。しかし、『晴嵐の魔女』の二つ名をもつフィリスティアのPT参加が決まり、間近にその力を見られることが楽しみのひとつになった。

リスタルの食堂で妖精族であるエルフと一緒にいた風変わりな普人族も気になった。人魔術で何かを隠しているのはすぐに判つたし、なによりあのフィリスティアの連れだ。なにかあるに違いない。そう思っていた。

その男が眼の前に立った。ヒルダの強さに対する好奇心が刺激された。フィアの魔狼相手の戦振りは観た。力強い風だった。できるなら手合わせしてみたいと思つた。

自分の依頼と反する依頼を受けた黒髪の普人族。良い機会だ。次はこいつの力を計つてやろう。

フィアに『炎弾』しか教わっていないはずだったが、この大陸では見たことが無い人魔術を大量の魔力と共に放つ黒髪の男。心が躍つた。もつとだ！もつと力を見せてみる！

しかし、その男に対する内に、違和感が重なっていく。これ程の魔力を持ちながら、何故防御ばかりなのだ？その瑣末な攻撃魔術は何なのだ？

そして気付いた。言葉の端々。異様なまでの堅牢な防御魔術。消

極的な攻め。仔魔狼への配慮。

こいつは戦いを知らない。

ヒルダの興が削がれ、闘争に熱くなつた血が瞬く間に冷めていった。反面、あまりのアンバランスさに危うさを感じた。保護欲をかきたてられたのかもしれない。だから譲歩した。警告もした。

お膳立てはしてやったぞ？どう収める？少しの期待を持って推移を見守ろうと思うヒルデガルドだった。

直時達の元に先着したのは、ヒルダの指示から察した通り魔狼達だった。仔魔狼の傍の直時に胡乱げな視線を投げつつも、戦闘跡と我が仔の懐く様子から味方と判断したようだった。対峙した形のヒルダの配慮もある。

魔狼達も当面的であるヒルダへと警戒を向けている。

少し遅れて到着するガラムPT。唸る魔狼達。その中で直時に低い声で問いかける人物がいた。

「なにをやっているのかしら？」

フィアが無理矢理怒りを堪えたのが判るような怖い笑みを直時に向けた。

「しょ、詳細は後ほどっ！とりあえずはヒルデガルドさんに聞いてくださいっ！この仔達は泉北側に誘導します！」

冷や汗を浮かべた直時は説明をヒルダに丸投げする。

ガラムPTを威嚇する親魔狼と若魔狼。

直時は彼らが追隨してくれることを祈りつつ、仔魔狼に移動を促す。幸いに仔魔狼は尻尾を振りながら直時に付いてくる。

その様子を見た魔狼達は、背後を警戒しつつ移動を開始した。安堵の息を吐く直時。

リメレンの泉北端へと魔狼達を誘導出来た直時は、じゃれつく仔魔狼を別としてその家族である魔狼達の鋭い眼差しに脂汗を垂らしていた。

(高ランク魔獣ってことは、言葉通じるよな？この世界は統一言語らしいから、きっと通じるよな？)

楽観と悲観の狭間で苦悩しつつ、ともかく意思疎通を試みる直時は親魔狼に話しかける。

「先ずは人族として攻撃したことについて謝罪します。申し訳ありません！」

深々と頭を下げる。仔魔狼の可愛さとは違ってかわった精悍さである親魔狼と若魔狼。いつ襲いかかれるか内心はビクビクしていた直時である。

「遅ればせながら御仔様が加護を得ることを知り、事態の収束を図るべく動きがあったことをお知らせしたいと思います。冒険者ギルドからの正式な依頼がここにあります」

文字が理解してもらえるかどうか不安であったが、証拠として依頼書を見せる直時。

掲げた依頼書を一瞥した親魔狼は、直時を凝視する。直立不動でその視線に耐えるが、いつでも逃げ出せるように風の精霊にお願いしている直時だった。

ヒヤウンッ！

突然仔魔狼が飛びかかる。押し倒された直時が慌てるが、ぶにぶにした肉球に抑えつけられ逃げられない。舐めまわされ顔中唾液まみれだ。

焦る直時だったが、その笑み崩れる顔に魔狼達は警戒を緩める。

仔魔狼の誘惑を振り切った直時は改めて親魔狼に相對する。

「明日の加護授与まで、ご一緒させてもらえますか？人族からの干渉は全て自分が引き受けます」

人ではない大きな獣に真面目な顔で話しかける直時。人族に対する時とは違い、ありのまま、本心からの言葉だった。

親魔狼の表情が緩んだ気がした瞬間、お手だったのか、撫でようとしたのか定かではないが、その大きな前肢が直時の頭を優しく抑えた。

直時が、つぶれて地面に這いつくばったのは体格差から仕方なかった。

リメレンの泉？（後書き）

ヒルダのツンデレ発動！

地文で心理描写は一人称になってしまいましたね……。見苦しくなければ使いたい気がします。

こんな三十路いねーよ！とのご意見多数。

20代前半にして大幅改稿すべきか真剣に検討中です。

とりあえず主人公の心理描写を入れた回を考えてますので、それに違和感あれば改稿……。しよう……。かな？

水の神霊の加護（前書き）

仔魔狼のターンです。

改稿：にわか知識で書いてたらとんでもないことに！
塩 砂糖に変更！

水の神霊の加護

リメレンの泉北岸。宵闇が周囲を包み込み、昼の熱気を優しく冷ましていく。

水辺のすぐ傍に5頭の魔狼と一人の普人族らしき男がいた。対岸である泉の南岸では、シーイス公国が臨時で設えた祭壇に小さな光が灯っている。

リメレンの泉は名称と反して、その広さは湖と言って良い大きさであった。対岸は余りに遠く、『探知強化』で増幅された直時の視力をもつてしても人影の判別はつかなかつた。

（良い夜だ。涼風が頬を撫でていく心地よさ、宝石のような星の煌めき……）

直時は槍を片手に歩哨のつもりで魔狼家族に背を向けて立っていた。実は背後の光景を見ないよう現実逃避中であつた。

今、辺りには血臭が漂い、ブツリブツリと何かを引き千切る音や、固いもの同士が当たるカッンという音がしている。

親魔狼が自分と同じ体格の白黒まだらの山羊を何処からか狩ってきたのだ。現在は家族揃って食事中である。

（俺も肉は好きだよ。大好きですよ。でも顔中血塗れなんです！フサフサだった毛皮がべっとりなんです！）

獲物に仲良く顔を突っ込んでいる魔狼家族。これで足りなかったら餌認定されるのではないかと直時は背中に冷や汗をかいていた。

自身の空腹は気にする余裕すらない。

お腹が満足したのか、少しの残骸を残し、魔狼達はお互いに血の付いた顔を舐め合う。

(いいなあ、あれ。でも生血だしなあ・・・)

仔魔狼の鼻をペロペロする妄想に駆られるが、血の匂いに首を強く振る。

毛繕いを済ませた親魔狼の片方が直時へと近付いてきた。何事かと振り返った直時はデザートにされるかもと気が気ではない。

親魔狼(仔魔狼の態度から父親か?)は地面に置いた直時の鞆を嗅いで顔を向ける。

「荷物を見せる。ということですか?」

父魔狼の行動から意向を推量し訊ねる直時。頷くでもなく見つめられる。肯定と取った直時は、鞆の中身を取り出して並べていく。

魔狼が反応を見せたのは、食糧である干し肉ではなく、黒い塊だった。

「食べます?」

皮の小袋から取り出したのはノーシュタットの露店で買った黒糖の塊ソフトボール大で、そこそこ値は張ったのだが必要なら譲るのも構わない。自分が餌になるよりはるかにマシである。

差し出した黒糖の塊を大きな口に器用に啜え、家族の元へ戻っていく。尻尾を一振りしたのは礼のつもりだろうか?

仔魔狼、若魔狼と順に父魔狼の啜えた黒糖を舐める。小さくなつたそれを最後に母魔狼に舐めさせた。自分は母魔狼と舌を絡めている。

なんとなく赤面する直時だったが、ワンコの訓練所で角砂糖をご褒美に与えていたのを思い出して、魔狼も甘いモノには眼が無いのかなあ？と思うのであった。

夜半を過ぎ、眠りに就く魔狼達。仔魔狼は母魔狼（推定）の懷に、若魔狼は丸まってお互いの頭を相手の身体に預けて眼を閉じる。

父魔狼はそんな家族を背中に、伏せたまま前肢を組み合わせた上に顎を乗せる。顔は直時に向いていた。眼は閉じていない。

仔魔狼の寝顔を見ていたかった直時だったが、父魔狼の圧力に負け、まわれ右をして警戒に集中するのだった。ちなみに夕ご飯は食べ損ねた。

加護祭当日。リメレンの泉、南側祭壇前広場は人族で湧きかえっていた。

真摯に加護を請う者。ただ力を求める者。水の神靈『ヴィルヘルミーネ』をひと目でもと願う者。加護の授与に立ち合うことを光栄と思う者。ただの野次馬。お祭り好き。

そのような者達が続々と到着し、祭壇前へと押し合いながら集まってきた。

シーイス公国近隣だけでなく、大陸各地の普人国家から、軍人、貴族、はては王族までが参加しており、泉南岸の水辺は彼らが占拠していた。一般参加者は苦々しく思いつつも、それでも出来る限り岸辺に近付こうとする。

トラブルを恐れるシーイス公国の外交官や神事官達は右往左往しながらも、なんとか秩序を維持しているようだった。

「毎度のことながら呆れるわねえ。場所が良いからって、加護が得られるわけでもないのに・・・」

祭りの騒動を横目で見つつ呟くのは、風の神霊の加護持ちであるエルフ、フィアである。

(ガラムだ。各人異常はないか?)

遠話でPTメンバー全員に連絡が入る。

(ラーナ。なーんもなし)

(ヒルダだ。異常は見受けられん)

(リシュナンテです。祭壇付近はいつも通りごった返し。異常はありません)

(ダンだ。魔狼の足音は無い)

(フィアよ。風に異常なし)

(ミケにや。魔狼は北岸で待機してるニヤ。南への移動は無いようニヤ)

PTに新たな念話が入る。昨日合流したミケラ・カルリンだ。

直時と魔狼が去った後、面倒そうに説明を始めたヒルデガルドであつたが、そこに走り込んできたのが彼女だった。

ギルドのリスタル支部喫茶店で何度か顔を合わせ、話したこともあつたガラムPTの面々だったが、まさかギルド付き冒険者だった

とは思わなかったようである。しかし、正式の依頼書と詳細な事情説明、距離をおいてだが魔狼と直時への偵察をこなすミケに納得したのか、臨時での参加を認められた形となった。

ちなみにギルド付き冒険者とは、ギルド運営に深く携わっていてなお且つ高い能力を持ちギルドに貢献する者。若しくは、過去にギルドに不利益を与え、ペナルティーとしてタダ働きさせられている者のふたつがある。

「まさか私の連れっことで注目されるとはね。迂闊だったわ。ヒビノの特異性にはかり注意が行き過ぎてたか・・・」

自嘲を禁じ得ないファイア。

「だけどリスタル近辺で経験上げてると思ってたのにここまで来るなんて・・・。あいつ、精霊術使ってないでしょうね？」

火急の場合は使用を許可したが、初心者のクエストではそうそう遠方まで来ることはないはずである。移動速度も風の精霊術を行使しなければ、直時では不可能な距離と時間であった。

「メイヴァーユ様の戒めを蔑ろにするならそれ相応の報いを受けさせないといけないわね・・・あの阿呆には・・・」

何やら黒いファイアである。直時に幸あれ。

（そろそろ始まるぞ。神霊の邪魔をする奴がいるとは思えんが、今回は裏方に徹するからな。周辺警戒を厳に頼む！）

ガラムからの念話に皆が了解の旨を返した。

神霊の降臨は唐突だった。

突然巨大な水柱が泉の中央に聳え立つ。深くはない深度であるはずなのに、重力に負けて雪崩れ落ちた頂上は30メートルを超えた。集まった者達はこれが恒例であることを知るため、驚きは少ない。水柱の影響が、辺りを驟雨しゅううが覆い全てを洗い清めていく。

泉の中心から濃い霧が渦を巻き、その勢力を拡大していく。神霊が生み出す霧だ。加護を願う者。その他の者。全てを包みこんでいく。

加護を願う者は祈る。立ち込める濃霧に周囲と切り離され、濡れた肌を期待に火照らせ湯気を立ち昇らせながら……。

そんな中、濃霧が突然晴れ渡る。先程まで一寸先も白い視界でしかなかった世界に色が戻る。加護祭終了の徴しるしだ。

前回は加護を与えられた者がなく、このまま泉は平穏を取り戻した。今回は？誰か加護を得られたのか？ざわめき出す群衆。

それを破るかの様に宙に舞ったのは細い水の柱の数々だった。あるものは螺旋を描き、あるものは大きな放物線の果てに泉に吸い込まれる。旋回しながら飛び散り、飛沫が虹を生みだす。

湖面の狂乱は水の精霊の祝福だった。今日、この日、この場所で水の神霊の加護が与えられた証であった。

巨大な水滴が宙に打ち上げられ、花火のように無色の花を咲かせた。彩るのは七色の虹だった。

何も見えない霧が立ち込める中、泉から近付く存在を直時は感じていた。

傍にいないはずの魔狼達もその存在に気付いていたが、唸りもせず

に頭を垂れていた。神霊が顕現したことを理解しているようだ。

クウン・・・

不安そうな仔魔狼の鳴き声が聞こえる。

直時は抱きしめてやりたいのを堪える。

「（可愛い子。おいでなさい）」

突然響く声といえない声。直時の頭にも響く。初めてメイヴァー
と遭ったときと同じ感じだった。

直時の驚愕を他所に、仔魔狼は優しい声に導かれ歩き出す。濃霧
で見えなかったが、泉の岸边まで近付いた瞬間、仔魔狼は水中に引
き込まれた。

突然のことに暴れる仔魔狼を背後からそっと抱きしめる白い手。

「（怖がらないで。あなた、水は嫌い？）」

柔らかな感触に動きを止める仔魔狼。水に落ちた瞬間に閉じてい
た眼を恐る恐る開く。

水面へと立ち昇る気泡とは別に半透明の水塊が仔魔狼の周りを泳
いでいた。小さいが心地よさを感じる甲高い笑い声。次々と触れて
は離れていくのは水の精霊達だった。

水中であるにもかかわらず、息苦しさも感じない。水の精霊の愛
撫にうっとりとなる仔魔狼。

「（好きになってくれたようね）」

背後の柔らかい存在が耳元で囁く。

白い腕かいなの縛めを解かれた仔魔狼はくるりと半回転させられる。

眼の前には優しい眼差しの神霊『ヴィルヘルミーネ』がゆらゆらと水中を漂っていた。

深い水底のような濃い紺藍の瞳。揺蕩たゆとう長髪は濃いオリーブ色。曲線のみで構成された肢体には大きな水草の葉が貼りついていた。

「（我、深淵の『ヴィルヘルミーネ』。汝に水の加護を与えん）」
そう云った神霊は仔魔狼の鼻先に接吻を与えた。

その瞬間、水の精霊達は歡喜に包まれた。

水の神霊の加護（後書き）

酒飲みながら書いてますぜ！

肝臓？ 脾臓？

知らん！

水の神霊の加護？（前書き）

次話を書き上げてから投稿することになりました。
今回、2話分書いてたら区切りが悪くなってしまった・・・。

水の神霊の加護？

リスタルの泉は水の精霊達の舞台となっていた。

立ち合った全ての者達はその美しさに見惚れた。

「公園の大噴水なんて眼じゃないな。すごい・・・」

日本でも大きな噴水や、色とりどりのライトアップされた噴水、仕掛けて趣向を凝らした噴水を目にした直時だったが、規模も水の動きもまるで違う。息をするのも忘れる程に見入ってしまった。

ヒヤンッ！

可愛らしい吠え声と共に、仔魔狼が水面へと飛び出してきた。そのまま楽しそうに水面を走り回る。沈み込む様子はない。まるで、雨後の屋外コートのような大きな水溜りを走っている様に見える。

無事、水の神霊の加護を得たようだ。

家族である魔狼達は岸边へと並んで座り、仔魔狼を見守っている。精悍な風貌が心なしか柔らかく感じられた直時。彼も微笑みを浮かべて、はしゃぐ仔魔狼を見守るのだった。

彼等の眼前に、泉から大きな水の球が浮かび上がる。水面に浮かんだその球の中で、水の神霊『ヴィルヘルミーネ』が優しい眼差しを居並ぶ者達へ向けた。

驚く直時を他所に、魔狼達は頭を垂れる。神霊に敬意を表してい

るのだ。

「（此度、我が仔へ『ヴィルヘルミーネ』様のご加護を賜り、恐悦至極でございます）」

父魔狼が感謝の言葉を捧げる。

（喋れたのか？というかこれは念話？）

直時にとって吃驚の事実である。魔狼は声に出した訳ではない。相手特定しない広域念話は居合わせた者全てに届く。届く範囲は声に出すのとさほど変わらない。

「（元気があって可愛い仔ね。あなた達は今大変だろうけど、この仔を大切にね）」

『ヴィルヘルミーネ』が声をかける。こちらは念話だけでなく、音としても聞き取れた。

（水の中からののに聞こえる・・・）

不思議な現象に疑問を感じた直時だが、神様だからと無理矢理納得した。

「（有難き御言葉、感謝いたします。我が一族も我が仔も、必ず護り抜く覚悟でございます）」

直時に一瞥を向ける父魔狼。先程とはうってかわって眼には険しい光がある。

魔狼族は今、大陸の北に位置する普人族国家『ルーシ帝国』の、ある貴族から攻撃を受けていた。皇帝へと名乗りを上げるべく、魔狼討伐という実績が欲しいがためだった。

「（ああ、この人族はあの国の者ではないわ。関係もない。でしょ？いえ、普人族ですらないものね？）」

神霊が突然直時に顔を向ける。

「・・・メイヴァーユ様からお聞きに？」

「（あなた、神域ではちょっとした有名人よ？）」

動揺を隠し後ろ頭を掻く直時に、クスクスと笑うヴィルヘルミーネ。

「（失礼ですがこの者は？）」

父魔狼が神霊へ問いかける。

「（ついこの間、アースファイアに迷い込んできた異世界の人族よ）」

あっさりと正体を告げられ、慌てふためく直時。今度は魔狼達が驚きをもって直時を見る。

「（メイヴァーユが言ったこと、勘違いしているようだから助言してあげるわね？あの子は風の神霊だから心配性なの。風はあらゆるものに影響を与えるわ・・・）」

静かな水面を波立たせ、うねりを与え、雲を運び、雨を叩きつける。

「（だから、あなたの大きな力も心配したのね。釘を刺すようなことを言つて・・・でもね、そんなことは当たり前のことなの。変化しない、影響し合わないものなんて無いのよ。私が水の神霊だからかしらね？）」

どう形が変わろうが、「水」は「水」。流れ、巡る。炎に焼かれたつて、無くなるわけじゃない。小さな粒となって大気を漂う。やがて滴となり、大地を潤し草花に吸い込まれ命を育む。

「（あなたの中にも水は流れ込み、流れ出しているでしょう？）」
喉を潤す。血が巡る。汗を、涙を流す。

ヴィルヘルミーネは言葉と共に次々とイメージを直時に流し込む。

「（あなたはこの世界に存在している。アースフィアにその存在を認められているの）」

あなたは異物ではない。この世界はあなたを拒まない。排さない。

「（あなたはあなたの思う通りに生きて良いのよ？）」
神霊の言葉は寄る辺のない直時に沁み込んでいく。

直時はこの世界に来てから今まで、迷いの中に居た。

日本での直時は楽観を旨とし、出来ることはやる。出来ないことはしない。それでも必要なら出来る人に任せる。代わりに出来ることを引き受ける。悩むことは少なかった。悩むほど多くの選択肢を持つていなかったというのもあるが。

そんな直時が、この世界に来てからはずっと迷い悩んでいた。悩みを思考の中心に置くことは彼の性格上無かったが、その分脳裏の片隅で常に思考に影響を与えてきた。

世界の常識を教えられたが、果たして自分が何処までそれを根拠に行動して良いものか判らない。メイヴァーユの言葉にある意味齎しと受け取っていたことでもあるし、親しく接してはくれるし、会話も楽しんでいるものの、フィアは監視であると思っていた。ミケとの接触も、ある意味仕事上の付き合いであると割り切った上で楽しんでいた。楽しいと感じることだけが自分に出来る判断基準だった。

その場の勢いや、護身のためにちよくちよく力を使ってみたものの、神霊や神々の警告は感じられなかった。それが余計に迷いを深めることとなった。

『思う通りに生きて良い』

ヴィルヘルミーネの言葉は、この独りきりの世界で、初めて心からの安堵を与えてくれたのだった。

「私達神霊や神の力、いいえ、全ての力が生かすこともあれば殺すこともあるように、あなたの力もまた同じ。力を恐れるも良し、呑まれるも良し、望むままになさい」

優しい顔と声で、厳しい事を言う神霊に直時は苦笑いする。

「アースファイアに早く馴染みなければ・・・、そうね。子を作りなさい」

「は？」

「我が子が生きる場所なら、そこはあなたの故郷にもなるでしょう？何なら私と結ぶ？」

悪戯っぽく笑うヴィルヘルミーネが、腕を組んで豊かな果実を持ちあげるようにして見せる。

身体に纏った水草が一瞬緩み、視線が釘付けになる直時だったが、一瞬で我に返ってブンブンと首を横に振る。勿論、脳内フォルダにはしっかりと記憶された。

「（あら残念。新しい種族を生むのって神域に住む者にはとても嬉しいことなのに。でも、メイヴァーユに聞いた通りね。ふふっ。私達をそういう対象に思えるというだけでも興味深い人ね）」

普通、地上に住まう者が神霊や神々に性的な意味での異性を感じる事は殆どない。畏怖と尊崇の対象であるからだ。想像上の神しか知らなかった直時故の反応だった。

「（そろそろ帰らなきゃね。最後になるけど、神々も色々な思惑があるわ。あなたに何かをさせようとしている神も・・・ね。神意なんて気にせず、己の望むまま、己の意志で生きなさい）」

直時に警句を与えたヴィルヘルミーネは自身を包んだ水球ごと岸

から遠ざかる。

後を追う仔魔狼が尾を振りながら水球に突っ込む。抱き止めるヴイルヘルミーネ。別れに頭を撫でてやり、思い出したかのように父魔狼に言う。

「（この仔をくれぐれも大事にね。これはこの仔と逢わせてくれたことへのお礼よ）」

父魔狼の首に水晶球を付けた銀鎖の首輪が現れる。

「『水霊スイレイの涙』です。この仔を護る助けになるでしょう（仔魔狼を撫でながら言う）」

「（神器を賜るなど、勿体ない御心遣い。深く感謝いたします）」
魔狼達が深々と頭を垂れた。

「（あなたたちに幸多からんことを・・・）」
そう言っつて、ヴイルヘルミーネは水中へと姿を消した。仔魔狼が寂しそくに振り返りながら、家族の傍へと戻る。

泉を賑わしてした水の精霊達の動きが止んだ。水面が静寂を取り戻す。

一瞬後、空気を震わせて泉に水柱が聳え立つ。神霊の帰還だった。顕現時と同じように辺りを驟雨しゅううが濡らす。

滴る水を拭いもせず、そこに参集した者全てが加護祭の終了に祈りを捧げた。

（己の望むまま・・・か）

皆が祈る中、直時だけは神霊の言葉を脳裏で繰り返しながら、空に掛かった虹を見ていた。その表情は枷を外された喜びを表しては

いなかった。困惑に彩られていた。

(俺は何を望んでいるのだろうか・・・)

建前だけの、あやふやでいい加減な願望ならいくらでも思い付ける。欲望とて、表に出さないだけで心に黒々と渦巻いている。

(己の望み・・・望むまま・・・己の意志で・・・意志を持って・・・生きる)

ヤケクソで独り自給自足生活を目指しもしたが、進んで人との関わりを拒否したくはない。

(俺って、こんなに寂しがり屋だったかなあ?)

日本ではいつだって、独りの時間を作ろうとせかせかしていた。独りが気楽で好きだった。

(変化しないものはない。影響し合わないものはない)

当然だと、理解していると思っていた。単純な摂理。それが心の中で重みを増す。

(己の望み・・・望むよう変わっていけるのだろうか?)

改めて不安に駆られる直時だった。

水の神霊の加護？（後書き）

風に対するヴェルヘルミーネ様のお考えは水の神霊主観故です。

今回ちょっと短いかな・・・。

加護祭に集った者達が、三々五々己の場所へと帰って行く。魔狼達もまた、己の帰るべき場所へと帰ろうとしていた。

ヒヤンッ

思考に没頭していた直時に、仔魔狼が襲いかかる。不意を突かれた形だったので、そのまま地面に押し倒され、顔中を舐めまわされた。嬉しそうに苦笑する直時。

「（異界の人族よ。我が仔が世話になった）」

父魔狼が話しかける。慌てて立ち上がる直時。

「こちらこそ！勝手なお願いを聞きいれていただきまして、有難うございました！」

矛を収めてくれたことに深々と頭を下げる。

「（こちらとしても神事を血で穢すことは避けたかった。おぬしの提案は都合が良かった。我等と闘っていた人族達も同様だろう）」

「そう言ってもらえると幸いです」

「（無事我が仔が加護を授かることが出来た。目的は達した。我等はこれより仲間達の元に帰る）」

「御無事をお祈りいたします」

「（我等が無事ということは、普人族が喰い殺されるということだぞ？）」

何処か面白げな調子で直時に訊ねる。

「自分は普人族じゃないので。知らない国の軍人よりも、この仔の無事を祈ります」

そう言つて、仔魔狼の頭を撫でる。

「（これも何かの縁だ。機会があれば訪ねて来い。我の名は『ドウンクルハイト』北の大地の魔狼族だ）」

「タダトキ・ヒビノ。日本人です」

「（さらばだ）」

「お気を付けて」

木々の合間に去っていく魔狼達。振り返り振り返りしていた仔魔狼の姿もすぐに消えた。

グウ

緊張が解けたのか、直時のお腹が大きな音を立てた。

昨夜から何も食べていなかった直時は、とりあえず空腹を満たすことにする。周囲はまだ滴に濡れているので、竈を作るのは断念した。手近な石に座り、干し肉と干し果実を齧る。上着は枝に掛け、生活魔術『送風』で乾かしていた。

「無事、やり遂げたようだニヤ」

音も無くミケが現れる。

「遅いですよ。御蔭でヒルダさんに殺されるところでした。まさかとは思いますが、影で様子見してたとかじゃないですよね？」

わざと疑わしそうな顔で訊ねる。

「酷いニヤー！うちだつて一生懸命探したんだニヤ。それにタッチイーが逃げつた後に皆を探し当てて、事情説明だつてちゃんとやったのニヤ。フィアちゃんの怒りを鎮めたのは他でもないうちだニヤ！」

「……………鎮まりましたか？」

「その後は普通だったニヤ。さつきもタッチイーのクエスト完遂の遠話入れたけど、普通だったニヤ」

「連絡したんですか？」

「臨時でPT入れてもらってるから、報告はしないとニヤ」

直時は手に持った干し肉を慌てて飲み込むと、生乾きの上着を身に付ける。

昨日の今日である。とてもフィアの怒りが鎮まったとは思えない。時間は感情を癒すはずだと時間稼ぎに頭を回転させる。尤も、時間が感情を増幅する場合もあり、そのときは目も当てられない結果が待っている。

「とりあえずは街に戻らないと！荷物を引き揚げて……………クエスト完遂の報告はリスタルのギルドですよねっ？じゃあ、大至急移動の準備を……………」

慌てふためく直時は、予定を前倒しにして、クエスト完遂報告を理由にリスタルまで逃げるつもりだった。

「どつこつへっ、行くのか、なあー？」

白金の髪を風に靡かせて舞い降りた可憐な妖精族。満面の笑顔は大輪の花が咲いたかのような美しさであった。

直時はこの世のものとは思えない（日本人の感覚として）美しい光景に、魅入るところか背筋を氷柱が突き刺すような感覚に襲われた。視線はあさつての方向で泳いでいる。

「ハハハハッ。先ずはクエスト完遂の報告がありますのでリスタルに。冒険者として当然の行動じゃないですか！」

「そうねえ。冒険者としては当然ねえ。ところでつい最近冒険者登録した人が、どうしてこんなところまでクエスト遂行に来てるのかしらねえ？」

「フィアちゃん、それはギルドからの指名があつたつて説明したニヤ？」

見ていらなくてミケが口を挟む。

「確かノーシユタツトで依頼したつて聞いた気がするのよねえ。ところでノーシユタツトまではどうやって来たのかなあ？」

「そりやもちろんリスタルで移動魔術を購入して、それを使ってですよ？あはははは」

「魔術屋さんねえ。移動魔術つて結構高いのよねえ。何を買ったのかしら？」

「それは一番安い『推進』に決まつてるじゃないですか！」

「あれ？タツチイー、『地走り』使つてなかつたつけかニヤ？」

悪意があるのか無いのかミケが呟く。顔を青くしながら直時が見ると、すぐバレル嘘はやめておけと窘められる。

「まあ！『地走り』？あれつて金貨3枚くらいしたと思つただけど、短期間でどうやって稼いだのかしら！」

着々と追い詰められていく直時だったが、不意に魔法陣を編んだ。

「我は風捲き 地を駆ける この身は疾風 『地走り』！」

荷物を引つ掴んで雲を霞みと逃げ出した。

「風よ……」

フィアの低い呟きと共に現れる竜巻。直時は知る由もないが、魔

狼を阻んだカマイタチで構成された物騒な竜巻である。それが行く手を阻むように現れたのだ。

一本を回避しても囲むように次々と出現する竜巻に、たたらを踏む直時。唯一開いていたのは後方、ファイアへの方向だけだった。

脂汗を垂らしながら振り返る直時にファイアの死刑宣告が告げられる。

「詳細説明する前に、一本いつとく？」

直撃コースで放たれた竜巻は流石にカマイタチが混じってはいなかったが、吹き飛ばされれば肉片に早変わりである。無論、ファイアは後方の竜巻は触れる前に消すつもりであったが、直時は予想外の行動に出る。

「風よ！バリア！」

精霊にイメージを伝える。直時の前面に、大気が圧縮される。竜巻が触れた瞬間、弾け飛び消滅させた。

「なっ！」

ミケのいる前で精霊術を使うとは思ってなかったファイアが驚きの声を上げた。

「条件反射で逃げちゃったけど、話したいことがある。聞いてくれるか？」

ファイアへの『説明』で我に返った直時が突然真面目な顔で訊く。ファイアがチラとミケを見る。良いのか？と問うているのはすぐに判った。

「ミケさんの依頼にも関係あることです。あなたを信用します。同

席をお願いします。それと、他のPTメンバーの方達はどうかされますか？」

「祭壇撤去が終わるまで警戒に付いてるニャ……。コホン！警戒中です。こちらに近付かないよう誘導しますか？」

仕事モードになったミケが直時に意図を確認する。

「それは必要ありません。彼等がこちらに来るようならすぐに判りますか？」

「PT内遠話ならフィアさんにも聞こえます。私は気配を探ることに長けておりますから、近付けば判ります」

「私も警戒の風を飛ばしておくわ」

ミケとフィアの言葉に頷いた直時は、ヴィルヘルミーネの言葉を二人に告げて反応を見ることにした。

フィアは直時と同じく、メイヴァーユの言葉を牽制、警告といった意味でとっていただろうし、ミケはその言葉を信じるならギルド創設に関わった神からの依頼だと言っていた。

そして、直時は先程直接神霊の言葉を聞いたところである。人族ならざる高位の存在の意向で動く二人と話すチャンスだと思った。

「街で話すより、加護祭が終って注意する者が居ないこの方が安全でしょう。ミケさんは様子を窺ってみたいですね。事情は聞かれましたか？」

「会話内容まで判る距離には近付けませんでした。出来れば最初から話して下さると有難いです」

「フィア、ミケさんがギルドの仕事してるってことは？」

「聞いた。でも、終了じゃないの？ヒビノの話は関係ないでしょ？」
ミケとフィアにそれぞれ確認する直時。

「ヴィルヘルミーネ様から聞かされた話をする前に、少し前置きさ

せてもらいます……。あーっ！面倒くさいっ！敬語無しっ！ミケさんも仕事モードじゃなくて良いからね！俺はもともと腹芸するキャラじゃないっ。二人とも信用するって決めたから、もうこれで行くっ」

改まった空気が一気にくれたものになる。フィアは苦笑し、ミケは眼を丸くしていた。

「前置きはそうだな……。二人を信用するって決めたのは俺だから、これは俺の勝手。少し違うか……。腹の探り合いってのが面倒になったから本音をぶつけて反応を見るってところだ。前置きでこんなこと言うってこと自体疑わしいだろうから、二人に俺を信用しろとは言わない。俺は俺の好きなようにするから、二人とも自分の都合で動いてくれればいい」

仕事や地域社会での付き合いでなく、親しい者に接する態度に変更する直時。

「まあ、ヒビノはちょっと遠慮気味だったからそれで良いんじゃない？」

「いつもの良い子っぽいタッチーの方が可愛いんだけどニヤ。こっちの方が肩が凝らないニヤ」

女性陣には概ね好意的に取られているようだ。

「本音で話そうと思うから、俺が知る二人のことを言ってもいいか？自己紹介するならそれ以上のことは口を挟まないようにするけど？」

「ヒビノが私のことをどう思ってるかも知りたいから、あなたの口から言って良いわ」

「うちは自己紹介しとこうかニヤ。ガラムっちのPT加入時に言ったように、うちはギルド付き冒険者ニヤ。今はリスタル支部の使い走りみたいなことしてるニヤ。理由は悪いのと良いのが半々かニヤ

ア。良い理由は腕を買われたので、悪い理由は言いたくないニヤ。今回の依頼とは別にタッチーの調査を依頼されてるニヤ。ギルド職員の反応から依頼主はギルド創設に関わったあの神だと思ってるニヤ」

ミケは自分の能力については隠しておきたいようだ。闇の精霊術には触れなかった。フィアと直時の関係から知られることは十二分に判るだろうが、敢えて言わないことで直時の対応を見るつもりだろう。

「ミケさんは俺が風の精霊術を使えるのは知ってる。あと、魔法陣改造も把握してると思う」

フィアに自分に関わる部分だけを捕捉する直時。

「フィアは風の神霊『メイヴァーユ』様からのお目付け役。これだけじゃ判らないだろうからこれからそれを説明する」

ミケに言う直時にフィアが少し焦ったような表情を見せるが、直時の決心は変わらない。

「改めて名乗らせてもらう。俺の名前は『ひびの日比野 直時』。地球と言う星の上、あまた数多ある国々のひとつ、日本国の国民だ。生まれも育ちも日本人。この世界アースフィアにたまたま迷い込んできた異世界の人間だ」

主にミケに向かつての説明だ。漢字で地面に自分の名前を指で書いた時にはフィアも興味深げだった。

初めはミケに対しての説明からだった。

この世界に迷い込んだ経緯、風の神霊メイヴァーユとの出会い。元の世界に戻れないこと。魔力も魔術もない世界のこと。そんな自分が魔力（正確には魔力に変換可能な大きな力）だけは膨大に保有

していること。それをメイヴァーユに戒められたこと。自重のため、目立たない暮らしを求めたこと。リスタルが初めての町だったこと。不安から魔術改造してクエストに臨んだこと……。

「まあそんな感じでリスタルまで来たんだけどね。メイヴァーユ様の監視役だと思ってたファイアが結構簡単に眼を離してくれるし、ちよつとはしゃいでたらミケさんに眼を付けられたというわけ。ああ、眼を付けたのは依頼主か。じゃああれは問題無かったのかな？」

「問題ありまくりよっ！初心者とは町の周辺で薬草集めでしょうがっ！群生地とか欲張らないっつーの！」

ミケに説明していた直時にファイアが突然怒り出す。

「でもギルドで転写された知識にあるってことは初心者情報ってことだろ？」

「タッチイー…… なかったかニヤ？」

ミケの言葉に脳内検索する直時。

「あ。群生地は狩りがメイン。薬草は帰り道にどうぞ……って！初心者情報じゃねー！」

採取の効率を重視したために見逃していた情報だった。自分の迂闊さに頭を抱える直時。ファイアとミケは溜息を吐きながら顔を見合わせた。

「じゃあ、今からヴィルヘルミーネ様から聞いたことを……」
気を取り直した直時はつい先程のやり取りを語る。仔魔狼の可愛さも織り交ぜたのは言うまでも無かった。

「……じゃあメイヴァーユ様は、異世界人のヒビノがアースファイアを混乱させることを戒めたわけじゃないってこと？」

ファイアが直時に訊ねる。少し声が低いのは疑っているのだろうか。

「それは俺には判断できないな。むしろこちらが聞きたい。ファイアはメイヴァーユ様の加護持ちなんだろ？神託を得るとか、祈りを捧げると応えてくれるとかないのか？」

メイヴァーユの真意を確かめたいのは直時の方である。コンタクトがとればはつきりする。今回の依頼もヴィルヘルミーネの加護を持った冒険者からの情報ということは、何らかの連絡手段があるのだろうと直時は思っていた。

「加護持ちだと言っても、一方通行なのよ。御言葉が頂けるのは相手次第ね」

ファイアの表情が曇る。

「ふむ。神域の神々は地上に興味を持っているってことは、常時覗いているのかな？」

直時は二人に訊ねる。

「興味を持つてる神は見てるかニヤ？」

「メイヴァーユ様は穏やかな方だからゆっくりしてらっしゃるだろうな・・・」

二人の言葉に考え込む直時。

(見てる神は見てる。神同士交流があるのはヴィルヘルミーネ様から予測できる。そしてメイヴァーユ様とはそこそこ親密だと見た。神域で話題ってことは帰還後も見てる可能性はある。釣ってみるか) 試す価値はあるかと直時は大きな声で二人に言う。

「メイヴァーユ様の神託が来たら確かめられるんだけどなあ！どうやったらいいのかなあ！何も言ってくれないなら、像を作ってみようかなあ！初めてお逢いした姿を忠実に再現した像を大量生産して

広めればメイヴアーユ様の御威光を広げた功績で御声を聞かせてもらえるかもなあ！あの透け透け衣装を再現できれば飛ぶように売れるだろうなあ？」

直時の脳内フォルダには鮮明な画像が保存されている。聞こえていたら儲け物と大声で不遜なことを言う。

途端にファイアが膝を折る。眼を閉じ瞑想しているかのようだ。時折聞こえる相槌に、直時は目論見が達成したことを確信した。

（しかし……。こんなことで神の声とか安くないか？）

満足感とは別に虚脱感に襲われる直時であった。

枷（後書き）

戦闘書きたかったけど自重しました。

枷？（前書き）

私の浅薄な考えではこの設定で限界です……

説明くさい回なので、くどいのが嫌いな方は飛ばしちゃってください
い
>
<

枷？

ファイアがメイヴァーユと対話している。『遠話』のように見えるが、跪き頭を垂れている様は祈りを捧げているようにも見えた。

邪魔にならないようにと、ファイア以外の二人は少し離れて神霊との対話が終るのを待っていた。ファイアは、直時とヴェルヘルミーネの会話を報告し、自分の役割を再確認している。少し慌てた口調は、やはり監視は思い違いであったのだろうか？

「終ったようニヤ」

立ち上がったファイアが、二人へと歩み寄る。

「先ずは俺から訊いていいか？」

ファイアが口を開く前に直時が問う。自分と世界との関係を一刻も早く確認したいのだろう。ファイアが頷く。

「メイヴァーユ様が戒めたのは、異世界人がアースファイアに干渉するなという意味ではなかった？」

「ええ。ヒビノがその力に振り回されないようにとの御心配だった。不幸だけを振りまくような使い方をしないようにって」

「最初は『余所者はこの世界に手を触れるな！』って意味だと思っただよ。ファイアも怖かったしな。下手なことしたら抹殺されるとかビクビクしてたんだよ？」

「一番の懸念が杞憂だったと判り、軽くおどけた調子でファイアに言う。」

「悪かったわよ！でも、ヒビノも迂闊な行動多かったじゃないの。」

害意はなさそうだったけど……」

「タツチイーの大きな力って何ニヤ？魔力が多いつてだけじゃないのかニヤ？」

やりとりを黙って見ていたミケが二人に問う。魔力の話だけではないと感じたようだ。

「俺だつて判らない。まあ、ミケさんは気配とかに敏感みたいだし、ちよつと見てもらおうか？」

「そうね……。良い機会だからその力、私も観察させてもらうかな。町中じゃできないしね」

「じゃあ、『アスタの闇衣』を解除する」

直時は魔法陣を逆操作。覆っていた不可視の幕が払われる。

「どうかな？」

直時自身には変化は感じられないが、ミケが呆気にとられ、フィアさえ眼を丸くする。

「前より魔力量増えてるじゃない！」

「クエスト前に不安だったから増やしておいた」

「私の倍はある……」

「非常識な量だニヤ」

「二人とも『探知強化』は？」

直時の問いに頷くフィアとミケ。二人とも既に知覚を強化していたようだ。

「魔力じゃない方は判別できる？」

「魔力に似てるけど、やっぱり違うわね」

「そうだニヤア。でも、何かと言われればやっぱり魔力っぽいニヤ」

「でもこの力って、魔力に変換してやらないと使い方が判らないんだよ」

精霊術も人魔術も魔力が元になっている。魔獣や獣人族、竜人族の肉体強化、変化も魔力が源だ。直時から感じる魔力とは別の力が何であるか、二人には判別できなかった。

「初めて逢った時、メイヴァーユ様は次元がどうの、存在がどうのって仰ってたな。さつきはその辺の話は無かった？」

フィアは、問う直時に首を横に振る。考え込む三人。ふと思い付いた直時は地面に座り込む。

「力に意識を集中してみるから、観察しといてくれ」

フィアに吹き飛ばされながらも、認識することが出来た時のことを思い起こす。

（蓮華座は・・・身体が固くて足を組めない。胡坐でいいか。勘違いかもしれないが、やってみるか）

地面に胡坐をかいた直時は掌を上にもむけ、太腿に両手を軽く置く。息を吸う。肺に溜めた空気の酸素を取り込み体内の二酸化炭素を排出するイメージ。置換が終った空気を残らず吐く。ゆっくりとそれを繰り返す。

眼を閉じ、強化された感覚を自分の内部へと向ける。前回より明瞭に力の流れが感じられる。尾びていこつ？骨の先から背骨に沿って緩やかに螺旋を描き上がっていく力。それは肩甲骨の間を抜け、首の後ろから頭頂へと上りつめる。流れは次に身体の前を下りてくる。眉間、喉。喉を抜けた流れは心臓、鳩尾みそおち、臍へその下へと巡る。下腹部で少し留まり、また尾？骨へと巡って行く。

（気とかプラナとかそういうモノなのか？俺がそういうイメージを持っていたからそのように感じるだけかもしれないが・・・）

仮に『気』であったとしても、日本での生活の中ではこんなにも

明瞭にその存在を感じたことは無い。故に、その使い方が魔力への変換以外はさっぱりわからなかった。

「どう？何か判った？」

薄眼を開けた直時が、ファイアとミケに訊ねる。

「駄目。判らない。じゃあ次に魔力へ変換してみてくれる？どう変わるか見てみる」

ファイアの言葉に頷くと、再び眼を閉じる。下腹部で留まる力をひと掴み分、既に変換済みの魔力に重ね合わせるようにイメージする。離れた力は、魔力変化すると同化、合流を果たす。力の流れは僅かに細くなるが、意識して流してやるとすぐ元に戻った。

「ちよつと！増やし過ぎ！」

「ファイアちゃん3人分・・・」

「で、観察の方はどうなった？」

二人の反応を無視して結果だけを訊く直時。

「うーん。魔力に変換するっていうよりは、魔力を作りだしているように感じるのよね」

「そうだニヤあ。普通は少しずつ身体に貯まるはずが、ポンって増えるからニヤ。魔力に注意がいつてしまって、力の変化は良く判らなかつたニヤ」

「結局不明ってことか・・・神霊とか神々とかだったら判るかな？」

「私達よりはお判りになるはずね」

「顕現は気まぐれだったな。じゃあ神の気まぐれに期待しますか。ミケさんの質問へはこれで良いかな？」

直時の言葉に頷くミケ。

「じゃあ次は俺からミケさんに質問。俺への調査は神の興味本位な

らまあ良しとして、その報告如何でギルドが干渉してくる可能性はある？ミケさんの直感でいい。嘘でもいいよ」

さり気無く牽制も入れる。今、隠し事をして、事後何を隠したか知ることが出来ればミケの目的も推測することは出来る。

「ギルドがその組織として干渉してくることは考えられないニヤ。ただ、依頼主の興味次第で名指しの依頼が来ることはあるかもニヤ。でも指名依頼とは言え、本人次第で拒否は可能ニヤ」

「それにしても、今回の俺への指名依頼は、断わり辛い状況を見越してされたような気もするけどな」

体の良い生贄ていであると言えたから、直時の言にも頷ける。ミケはバツが悪そうに視線を彷徨たぐわせる。

「それについてはうちに原因があるニヤ。怨まれても仕方無いニヤ」
心なしか猫耳に元気がなくなる。直時は依頼時のミケを思い出す。リスタル支部とシーイス公国の面子保持の依頼。ミケ本人は薦めたくなかった。ギルドに借りがあつて直時との仲介を引き受けた等。

(この場合の借りつてのはリスタル支部の関係者なんだろう。事情を話す気はないようだな。庇かばっているのか?)

「あんまり気にしてないよ。ミケさんにはミケさんの事情があるだろうし、俺にも思惑はあるからね」

それぞれがそれぞれの事情と思惑を抱えて他人と接している。損得勘定もあれば、好悪の感情もある。その時に何に重きを置いて行動するか、そんなことはその時にならないとわからない。直時だつて、いざとなればミケに刃を向けることになるかもしれない。

「俺がどうしても確認したかったことはこれくらい。俺がどんな生き方をしようが、今この世界に生きる者として扱ってもらえると判

「ただけで満足だ」

実際、戦争を繰り返している国も放置なのだ。例え直時が独裁者になって世界征服を目指そうとも神罰が下ることはないはずだ。神の気まぐれで相手に手を貸すことはあるかもしれないが、直接的なことはしてこないだろう。

直時にその気はないが、独裁者や権力者など神罰が下るまでもなく、地上に住まう周囲からどんな反発、激しい攻撃をされるかわかったものではない。

「今後はまず手始めに『ロツソ』を目指すというのは俺の中では決定してる。交易の街らしいから、諸国の情報も入ってくるだろうし、住みやすい国の目星をつけることも出来るだろうしね。二人はどうする？ミケさんは今回の調査報告でひと段落するだろうし、ファイアも監視の必要は無くなっただろう？」

名残惜しいが、それこそ縁があったらまた会えるだろう。直時は別れを前提として訊いた。

「うちは依頼主の意向次第だニヤ。今回の依頼は調査期間の設定があつたからもうすぐ終わるけどニヤ」

「私もメイヴアーユ様の御意向は判つたから、一応はお役御免というところかしら？」

「・・・そっか」

「でも大きな問題が残ってるの。魔法陣の問題よ。ヒビノが自分流に改造する分には、構わない。並の人族には使えないでしょうから。でもね、改造のノウハウを広めようとしているなら、地上に住まうものとして監視しないといけないと思うの」

「それはうちも思うニヤ。人魔術は普人族以外も使えるけど、開発発展させてきたのは普人族ニヤ。扱いは長けているはずだし、新しい魔術が広まる前に戦場へ投入されたら、余計に戦禍が広がると思うニヤ。獣人族にも危害が及ぶニヤ」

普人族以外の人族である二人からすれば、尤もな心配であった。

魔法陣は描くため必要な魔力はごく微量だとはいえ、すぐに魔力を消費し発動、消滅してしまう。そのため、魔法陣の開発は、膨大な回数 of 試動と、数え切れない改善の連続となる。普人族の限られた魔力では長い開発時間が必要とされた。

「つまりヒビノのやり方だと、人魔術の開発が短縮されて、例えば攻撃魔法だと対抗する術が出来る前に戦場で使用することが可能になっってしまう」

「それぞれ独自の魔術を開発していれば、戦争に当たって新魔術に對抗する術が無いのはお互い様だろ？」

「普人族同士が戦争するのは勝手ニヤ。でも巻き込まれる他種族にはたまったものではないニヤ」

二人とも人魔術の急激な発展には否定的である。これだけ危険視されるとなると、直時としては逆に不安になる。今のところ魔法陣のみを描くのはどうやら自分だけ。狙われる危険が増す。

「じゃあ、ギルドを通じて全種族にその方法を広めてもらうのはどうだろうか？ 普人族の方が開発に長けているなら・・・。普人族の魔力じゃ使えないような魔法陣を開発販売してもらおう。人族以外も人魔術の開発に乗り出してもらおう良い機会だと思う。開発速度が間に合わないというなら、普人族が扱えないような改造魔法陣をギルドに提供してもいい。発表はその魔法陣と同時にしてもらおう。どうだろうか？」

直時としては、技術は広めてこそ発展すると思っていた。何も攻撃魔法ばかり開発することはない。より便利な生活魔術は、より日常を豊かにするはずだ。

建前だけではない。誰もが同じように魔法陣を扱えるなら、直時を狙う意味も無くなるというものだ。半分以上は保身のためだった。

技術を独占して敵を作るより、技術を拡散してその中に埋もれることを望んだのだ。

「それでも最初はたくさんの方が流れるわよ？」

「だろ。俺の世界でもそんな話はごろごろ転がってる。でもな、技術を何に使うかなんてのは使う者次第なんだよ。それにこの世界は見守ってくれる神様が実際にいるし、賢い長命種もいる。馬鹿な普人種の暴走を止めることだって、きつと可能だろう」

普人族に対する抑止という意味で、大魔力を必要とする人魔術の開発は必須だろう。そしてそれを使用するに足る存在もいる。

「それにこれの秘密なんて、そんな大したもんじゃないんだよ？むしろ、いつ誰が気付いても不思議じゃない」

そう言つて『灯火』の魔法陣を編んでみせる直時。術は発動しない。魔法陣は消えない。

「人魔術を使うのに必要なのは？」

直時は確認のため、二人へ訊く。

「正確な魔法陣を描くこと。魔術発動に必要な魔力があること。魔術が起こす現象を固定化するための呪文・・・かな？」

フィアが代表して質問に答える。ミケも頷く。

「精霊術だと、精霊との対話。必要魔力。イメージは精霊に伝えるから呪文は無し。それで、獣人族や竜人族の強化術はどんな感じ？」

精霊術は自分でおさらいして、強化術をミケに訊く。

「種族にもよるけど、魔力を身体の強化や変化部位に集中、イメージで強化や変化を促すニヤ」

ミケが応える。

「強化術は自分の身体だし、精霊術はイメージと同じくやってることだろうけど、人魔術はその前にやってることあるよね？イメージと同じかもしれないけど、これは俺が魔力のない世界出身だからかな？」

「何のこと？」

「魔法陣を描くのとイメージのための呪文が同時、術はすぐに発動される。このときのイメージは現象であって、対象じゃない」
「「？」」

フィアとミケが揃って首を傾げる。

「人魔術の発動先っていつ決めてる？」

直時の問いに二人はあつと、顔を見合わせる。攻撃魔術でも生活魔術でも、その魔術が作用する先を意識した上で魔法陣を編む。つまり発動する前に照準を定めているのである。

「えっ？嘘でしょ……。そんなことで？」

「フィアちゃん、ともかくやってみるニヤ」

「発動先を定めなくて魔法陣を編むんだ。その時、呪文も唱えない方が良く。暴発しないとも限らない」

驚愕が冷めないフィアにミケが提案し、直時が注意を与える。

「試す人魔術は、暴発しても大丈夫なように、直時と同じように『灯火』で試みる。」

直時のように魔力が無い生活では、離れた場所へ何か作用させようとすればまず照準を定めるといふ動作が重要になってくる。ダーツやエアガン等飛び道具だけではない。高枝切り鋏で枝を落とすのだって、狙いを定めないといけないのだ。

魔力が当たり前にあり、意識せずに行っていたことを止めるという感覚にフィアとミケは四苦八苦している。周囲には発動してしまった『灯火』の光球が多数浮かんでいた。

「できたニヤ！」

先に成功したのは意外にもミケであった。一通りの人魔術を使えると言っていたフィアはまだうんうんと唸っている。それでも、あまり間を置かず魔法陣だけを出現させる。

「はぁー……。これだけのことだけど、こんな使い方なんてしないからねえ」

感慨深げなフィアの隣で、ミケが早速魔法陣を弄っている。

「ミケさん。消費魔力には気を付けて。判つてて改造するならいいけど、魔力吸い取られると洒落にならないよ」

『浮遊』を改造、大質量を浮かせることに成功したものの魔力をこっそりもっていかれた直時の警告である。

ミケに助言を与えつつフィアの方を見ると、魔力の流れをチエックしながら問題無く改造している。直時の人魔術に対する知識も元々はフィアのものだ。直時より理解は早く、深いものになるだろう。

「月よ 灯りを 『灯火』」

「闇を照らせ 『灯火』」

改造した魔法陣をお披露目する二人。ミケは光球ではなく、三日月の形の発光体を出現させ、フィアは『灯火』と同じ呪文で、輝度と大きさを増した光球を頭上に喚び出した。

「二人とも御見事」

「これは楽しいニヤ」

「簡単な術だけど、こんな楽に魔法陣を変更できるなんて・・・」
フィアはこれまでの魔術開発の苦勞の歴史を知っていただけに、未だに信じられないようだ。実際に魔法陣の魔力の流れを確認しながらの改変はそれまでの苦勞が嘘のようだ。
幾何学的な図形ばかりでなく、不定形の模様も多いため再現は難しいだろうが、概略だけなら紙上で設計もできた。しかし、感覚やイメージに重きを置く文明であったため、精密な魔法陣を描くような器材等が発達していなかったことも原因の一端である。

「簡単なことだろう？」

直時の言葉に二人が頷く。

「ミケさん。このことは俺の調査依頼の報告に詳しく書いて欲しい。俺を殺せば隠蔽は可能だが、この発見には特別な能力なんていらない。そのうち誰かが思い付くだろう。そいつが独占を企んだらどうなる？国なら？俺が普人族ならこの方法を誰かが思い付くまでに独自の魔術をたんまり開発、溜まった時点で兵に転写。すぐに周辺国へと攻め込むだろう。ギルドは国家とは別の組織で多国間で活動を続けている。さっきの提案なんだが、検討してもらえないだろうか？普人族でない冒険者が高レベル魔法陣を取得することで、普人族国家の暴走を抑える。それをギルドの主導で行えば、冒険者ギルドが世界中で発言権を高める事になり得るんじゃないだろうか？」
直時の提案は一冒険者のミケに判断が出来るほど簡単なものではなかった。フィアも難しい顔をしている。実現したときの混乱が予測できないからだ。

「ところで二人とも判ってるかもしれないけど、これで俺らは共犯者だからね？」

直時がしてやったりと笑う。

別れを予感していた二人が直時の悪辣さに顔を見合わせる。どち
らともなく苦笑を交わすのだった。

枷？（後書き）

戦闘書きたいなあ・・・。

枷？（前書き）

更新したのに！
データはどこいった？

枷？

「あれ？なんか普通なんですけど・・・」

直時はここでフィアが風と暴れるとか、ミケが爪を喉に這わすとか、そのような場面だと思っていた。

「ヒビノも計算の内なんですよ？普人族でない私達にまず話すつてのは？」

「ギルドは普人族も登録してるから、この提案には慎重にならざるを得ないだろう。でも普人族以外に広めるなら、二人を巻き込む方が手っ取り早い。この情報は少なくともエルフにも猫人族にも益にはなっても損にはならないだろう？」

「信用してくれてるニヤ？」

「そんな綺麗事じゃない。利用してるんだ。俺の安全のためにね。多分二人が身内だけに広めたとしても、どこかで情報が漏れると思う。俺が迂闊だったのは認めるけど、豹人族の姉妹の件もあるしね。ミケさんがどんな話術使ったかは知らないけど、結果的に話している。あの姉妹の生真面目さは理解できるけど、またいつウツカリをやらかすか判らない」

「それはタツチーも同じなのニヤ」

ミケが笑う。反論できない直時は苦笑いを返す。

「ちよつとっ！もう誰かにばれてるの？」

フィアが声を荒げる。直時に詰め寄ろうとするがミケにまあまあと抑えられ、リナレス姉妹と直時の一件を説明される。

「ヒビノへの危険は切迫してるってことね。自業自得だけど」

「そうニヤ。特にタツチイーが脅したこともあって、同族へ迷惑が
かからないならタツチイーへの危害は看過する可能性もあるニヤ。
自業自得だけどニヤ」

二人のジト眼が直時を責める。

「ま、まあ、そう言う訳で俺としては一刻も早く安全を確保したい。
ギルドの対応が鈍いようなら、そうせざるを得ない状況を作って判
断を加速したいんだ。二人は実際に体験してどう判断する？この発
見を自分だけの胸の裡に閉じ込めておくべきか、同族に報せるべき
か？」

「エルフは精霊術があるから需要は少ないかなあ。でも、知り合い
の研究馬鹿達は欲しがる発見ね」

「猫人族は獣人族の中では強化術を施しても弱い部類だから、この
情報にはすごく価値があるニヤ」

猫人族は身体的な脆弱さを補って余りある魔力を持つ種族なので、
二重の意味で価値が高い情報だった。

「普人族以外の種族は言わば専守防衛だろ？侵略とか征服はしない
みたいだからね。個体としての能力が高いのは聞いたけど、獣人族
の個体戦闘力と普人族の集団戦闘力が拮抗してる。というよりは負
けてるんだろ？」

「・・・その通りニヤ」

「それはやっぱり獣人族同士の繋がりが薄いから？」

「・・・自分達に火の粉が降りかからない限りは敵対しないニヤ」
ミケが少し言葉に詰まったのが、直時の気に懸かった。

（獣人族、というか普人族以外は横のつながりが薄いつてのは脳内
知識通りなのか？）

地球よりはつきりと種族というカテゴリーが存在するこの世界。

普人族以外は争いが少ない。争わないということは、協力もしない。

「フィアにもらった知識として、普人族は数が多いって事だけどリスタルとかノーシユタット見るとそんなでもない気がするんだが。それに各種族だけが暮らす町もあるんだろ？実際どれくらい差があるんだ？」

リスタルでもノーシユタットでも普人族は半分以下くらいしか見なかった。

「シーイス公国は小国だからね。普人族以外の定住を奨励しているのは防衛の意味もあるのよ。マケディウス王国もそう。ロッソなんて普人族は3割くらいじゃないかな？でも、ユーレリア大陸の総数から言うと人族の8割は普人族ね」

「そんなに差があるのか？じゃあ普人族と争う時、まともに戦争なんて考えられないじゃないか！」

直時の試算は早くも崩れ去る。普人族と他種族が1：5であれば、種族ごとの対比だともっと下がる。普人族が国家単位でしか攻めてこないとしても、種族間の連携が無いならば単独種族で普人族の国と構えなければならぬ。いくら強大な魔術が可能になっても戦争に耐えられるか甚だ疑問だった。

「フィア。防衛のためにつて、普人族国家は他種族を国民として見ていないんじゃないか？それじゃ普人族の国がどうなつたつて、他種族にとつてはどうでもいいことなのじゃないの？」

直時は頭を抱えながらもフィアの言葉に抱いた疑問をぶつけてみる。

「確かに国民とは見られてないわね。国という組織に属する気もないんだけどね。でも、私達だって友人もいれば、町がむざむざ灰になるのを見過ごすのは嫌なもの。攻め込まれた町にいたら助力もす

るわ」

「ギルドは戦争に関与しないけど、個人が義勇兵として参加することを禁止してるわけではないニャ。ファイアちゃんも何回か参戦してるニャ」

「そっぴゃ『高原の癒し水亭』のミュンが言ってたな」

「防衛戦だけよ？」

ミケとファイアの言葉に考え込む直時。

(多国間にまたがるギルドという組織は、不干渉を建前にしてるけど戦争の抑止という面もあるのかもれない)

国家に拘りがない種族も、いざ自分の活動拠点の町が攻撃されるとなれば義勇兵として参戦するようである。ファイアやヒルデガルドのような人外の戦闘力を持つものが出入りしているとなれば、攻撃を躊躇うこともあるだろう。

直時にはまだこの世界の戦争を眼にしたことがないため、冒険者の戦闘力が普人族国軍のそれと較べてどうなのか判断をつけられなかったが、ファイアが勇名を馳せていることを考慮すれば質は数を凌駕する可能性を捨て切れなかった。

「やっぱり普人族以外に先に普及させて、ギルド主導で魔法陣の販売を請けおってもらうのが良い気がする。ギルドを敵に回したらえらいことになりそうだけど、決断を早めてもらうためだから仕方ない。取引材料としてある程度改造魔法陣を無償で提供するってことで」

「うーん。やっぱりそうなるかなあ」

「この情報、本当に回しても良いニャ？」

「是非お願いします。何よりこれは俺の自己保身のためだからね！」
控えめに聞くミケにニヤリと笑ってみせる直時。

「これでこの件は良いかな？」

直時の確認に二人は頷く。

「ここでお二人に御願があります」

態度を改めた直時はフィアとミケを交互に見る。いきなりの豹変に眼を白黒させるミケと、ボケるつもりなら吹き飛ばそうとするフィア。

「俺の戦闘能力を判断して欲しい。俺自身、何が出来て何が出来ないのか知りたい。フィアには旅の道すがら話したけど、俺の故郷じやせいぜい喧嘩程度のことしかしてこなかった。アースフィアに来てからは勘違いもあって消極的にしか闘ってこなかった。これからは場合によっては戦争に巻き込まれるなんてこともあるかもしれない。この世界に関わって生きていくと決めたからには避けては通れないと思う。勿論まだ躊躇いはある。その上で俺の闘い方を見て欲しいんだ。これは俺からのクエスト依頼だ。全財産とはいかないが、金貨6枚。受けてもらえるだろうか？」

直時は財布から出した金貨を布の上に置いて二人の前に差し出した。頭を深々と下げている。残りは合計判銀貨が10枚ほどであった。

「いつの間にそんなに稼いだのよ！」

「まあまあフィアちゃん。ここはタッチーの心意気を汲んであげようではないかニヤ」

ミケにとって調査依頼に情報が上乘せされることになる。

(ミケラ・カルリンよりガラムPTへ。これからフィアちゃんがタダトキ・ヒビノへ制裁を加えるとのこと。合流は遅れますニヤ)

流石に長時間連絡がないと怪しまれると思ったミケが、PT念話で痴話喧嘩を臭わすような調子で連絡を入れる。

(了解。程々にな)

リーダーであるガラムの苦笑気味な念話が返される。

「なななななんてことを！」

フィアがミケに抗議の眼を向ける。PT念話が聞こえない直時のが怪訝な顔をする。

祭壇付近を警戒するガラムPTで苦笑していたのはガラム、ライナ、ダンであった。

「ここは任せていいか？私は見物に行く」

ヒルデガルドが念話を使わずガラムの元へ舞い降りて許可を願う。

加護祭自体は既に終了し、シーイス公国神事官達の撤収を見守るだけであったため、ヒルダの単独行動に文句は無い。苦笑を深めつつガラムが許可する。

「悪趣味も程々にな」

「人聞きが悪いぞ。私の趣味は良い方だ」

ガラムの苦言に不敵な笑顔で答えたヒルダは天空へと舞い上がった。

弛緩した雰囲気のカラムPTであったが、PT念話を統括していたリシュナテが遠話をしていたことに気付いた者はいなかった。

(今回の加護は魔獣である魔狼の仔に与えられました。普人族はもとより人族に与えられることはありませんでした。今、この国には晴嵐の魔女と黒剣の竜姫が居ますが『ヴァロア王国』には知られて

いないと思われます。外省部に確認の上、作戦の開始を進言します（加護祭にかこつけて入国していたカール帝国情報省の官僚に連絡を取ったりシユナンテは何事もなかったように辺りを見渡していた。

「・・・ミケちゃん。周辺に気配は？」

「特に無いニヤ」

「私はこの依頼受けるけど、貴女は？」

「うちは観戦させてもらうニヤ。あの魔力量は結構怖いニヤ」

肩を竦めて下がり始めるミケ。直時としては残念な思いが無くもない。しかし、フィアと手合わせできることは願っても無い幸運だった。

「模擬戦ということでもいいのかな？フィアが風の精霊術を主に人魔術もほぼ使えるとして、俺の改造魔術知らないけど大丈夫？」

「魔力量が戦力の決定的な差じゃないのよ？」

「風の精霊術は多分相殺出来るよ？それでもこちらの手の内を見せなくてもいいのか？」

「闘いを知らないくせに舐めたこと言ってくれるわね」

フィアの魔力とは別の何か直時に冷や汗を流させる。

「まずは改造魔術からいくよ！」

ヒルダには力任せにぶった斬られたが、フィアに通じるか確かめたい直時は魔法陣を編む。

「土は石に 石は岩に 『岩盾』 『岩盾・塊』！」

複数の魔法陣を編み旧『岩盾』に混ぜて強度を増した魔術を発動させる。乱立する岩壁に直時の姿が隠れる。

「魔力の無駄遣いね。風使いには意味がないっ！」

フィアの精霊術が岩の壁と岩の柱を回り込んで隠れた直時を襲う。

回り込むことで時間をかけた精霊術は直時に理解されてしまう。

同じく風の精霊と対話できる直時は同様の効果を精霊に伝え対消滅させることに成功する。

(判らなければ判る間合いで戦えば良い)
手応えを感じた直時に余裕が生まれる。

そして、不意に思い出す『私と結ぶ?』というヴィルヘルミーネの誘惑。力を解放して余裕が出来たためか、岩柱の間から何気なくフィアとミケの胸元に眼を遣る。

(フィアはサーブスしてB。ミケさんはCかな。ヴィルヘルミーネ様はEかFだな。戦力差は覆せない)

直時の心中など判るはずがないのに、フィアとミケの眼が不快感に鈍く光る。

「ミケちゃん。私達同じPTよね？」

「当然だニヤ」

観客であると宣言したはずなのに、笑い合った二人の美女の片方が、直時に向けて走り出した。ミケである。

(いつもの成り行き任せだけど良い機会だ。フィアの精霊術、ミケさんの実力、存分に拝見させてもらおう)

フィアの精霊術は自分が使う場合の参考になる。ミケの実力は未だ不明のまま。多少でも力を量れば、いざという時の参考になる。

軽く小さな竜巻をミケに放つ。威力は弱い。当たると思われた瞬間

間、ミケが左側へ身体を傾ける。次の瞬間、ミケが直時の視界から消えた。

予想していた左とは逆、右から風を切る音が迫る。直時は地を蹴って身体を浮かせながら、右方向に突風を叩きつけた。

ミケを吹き飛ばす反動で、自分も跳躍し距離をとる。着地しようとした足元から強烈な上昇気流が直時を襲う。フィアだ。咄嗟に防御のため風を叩きつけるが、反発を強くしただけで余計に空高く放りあげられる。

その虚空で直時は見た。

「うわっ！ 凄い！」

黒髪と衣服をはためかせ、放りあげられた宙空の眺めに恐怖より感嘆を感じる直時。

何処までも高い空。鏡のような泉。緑溢れる地上。遠くには雪を被った山々が見える。

世界は美しかった。飛行機の小さな窓を通して見た景色より、遙かに美しいと感じた。

（これがアースフィア・・・）

この光景が世界の一部でしかないことは判っている。しかし、なんのフィルターも通さず、己の眼だけで見た世界。そして、ヴィルヘルミーネの『世界に存在を認められている』という言葉。

（単純なのはわかってる！でも、嬉しいよ！）

この世界に来て、良かったと思う直時。自然と顔が綻んだ。

感じる無重力感。上昇の頂点に来たようだ。直時は魔法陣を編む。

「眠れ 重さの精霊よ 今は軽き羽根を夢見よ 『浮遊』！」
重さを失った直時は風にその身を任す。流れる。流される。この世界と一体になったような感触。勘違いだったとしても構わない。自分は今、それを望んでいる。

風に舞う直時は瞬きする間も惜しんで、今、眼の前にある美しい世界を魂に焼き付けた。

宙を漂う直時だったが、突然乱気流に巻き込まれる。

(フィアだな。忘れてた！)

さっきまでの戦闘の緊張はもう無い。むしろ、彼女等を忘れていたことで罪悪感さえ感じた。

「今行く。だから、教えてくれ。この世界のこと。君達のこと」

聞こえないのを承知で呟いた直時は、重さを消した身体を風の精霊に委ね、二人が待つ地上へと舞い降りた。

怒り冷めやらぬ二人であったが、あまりに清々しい顔の直時を訝しげに見やる。

(フィアちゃん。変な所、攻撃したニヤ?)

(吹き飛ばしただけよ！ミケちゃんこそ頭殴った?)

(当たってないニヤ！)

ミケとフィアは直時に聞こえないよう念話でやりとりする。

「二人とも本気で頼む。どこまでやれるか判らないけど、自分も本気で臨ませてもらう」

直時自身、己が何をどこまで出来るのか判らない。フィアとミケ

の力を見せてもらおうと同時に、自分の力も見極めたいと願ったのだ。

「出し惜しみは無いですよ？先ずは、こちらから！風の精霊、水の精霊、闇の精霊、君達の助けが欲しい。力を貸してくれ！」

直時の周囲に、風が渦巻いた。水が集った。影が濃度を増した。

「ミケちゃん。私は風が本命、水は少しだけ。人魔術はそこそこよ」

「私は闇。人魔術もある程度」

「ミケちゃん。それが地？」

「タダトキさんが本気ですから、私も本気の地でいきます」

二人がお互いを確認する。頷き合いそれぞれ精霊に準備を伝えた。

枷？（後書き）

直時くんの黒さと白さを御覧ください。

束の間の安堵（前書き）

お盆前で仕事が集中。わたわたししています。
更新遅れてますorz

束の間の安堵

微笑みすら浮かべ、二人と対峙する直時。そこには殺気も鬨気も無く、場違いな喜びが溢れていた。

（フィア。タダトキさんは、見た魔術や精霊術を再現できる等なということは？）

（数回見た魔法陣を憶えることはあったわ。でも精霊術は・・・）
ミケからの念話にフィアが答えに詰まる。言いたいことはミケにも理解できる。精霊術は精霊を視認でき、且つ、自分の意思を伝達できてはじめて使えるようになる。精霊毎の相性差も大きい。見えだから、教えられたから使えるというものではない。

ミケとて、師匠であるリタにはひたすら闇の精霊を感じられるような状況に置かれていたに過ぎない（監禁ともいう）。闇の精霊術師としての素養を認められていたからだそうだが、会得するには相應の時間が必要だった。

リタ曰く『自分の闇と正面から向き合い、受け入れる事ができれば、闇の優しさに気付くことができる。闇の精霊に触れることが出来る』であったが、ミケにとってはリタの闇の深さに、己の浅い闇を受け止めることが出来たようなものだと思っていた。

（でもミケが闇の精霊術師だったとはね）

（タダトキさんには御披露してましたから、どうせフィアさんにも伝わることですし。それよりここは協力してタダトキさんを追い詰めた方が、私の調査報告の内容が濃くなると判断しました）

リタへの恩はあるが、過去の恐怖で心的外傷トラウマに引きずられそうに

なる意識をファイアの念話が引き戻した。

(思うように攻撃してください。わたしは不意を突きます)

(了解)

ミケの提案に了承するファイア。二人の周囲に精霊が集まる。

「風よ・・・」「闇よ・・・」

ファイアが風を纏って宙へ浮かび、ミケが姿はそのままに気配を完全に断つ。

準備を終えた二人へ直時は直径10メートルはあるだろう空気の渦を水平に放つ。直時から伸びた暴風の塊は二人に届く手前で斜め上方へと逸れた。ファイアは力任せに打ち消すようなことはせず、横からの風で向きを変えただけだった。

(流石はファイア。簡単に弾かれた！じゃあ、カマイタチにはどう対応する?)

少し躊躇ったが、直撃させないよう風の刃を放つ。

ファイアは正確にカマイタチの軌跡を読んだ。この期に及んで自分に当たらないよう配慮する直時に苦笑を浮かべる。

瞬時に気圧が下がる。ほぼ真空となった空気の断層が風の刃を吸い込んで、消し去った。

(さっきは簡単に弾かれたけど、これならどうだ?)

攻撃を無効化された直時は、風と同時に水の精霊にも呼び掛ける。水流を巻き込んだ竜巻が、暴風だけでなく質量をとまって放たれた。

「逸らすのは少し面倒ね」

水竜巻の勢いを見たファイアは自らの前方に圧縮した空気帯を形成。さらに前方、迫り来る水竜巻との間に真空の断層を作る。

真空の断層へと侵入した直時の水竜巻は、瞬時に沸騰、気化膨張して飛び散った。次の瞬間、通常の気圧で水蒸気が戻され、霧となり視界は白一色に閉ざされる。

慌てた直時は、風を巻き上げて霧を上空へと払い飛ばす。視界が戻る寸前、ファイアからの攻撃を警戒して注意が疎かになっていた背後から、ミケの手加減された蹴りが直時を襲った。衝撃の割に飛ばされたのは『浮遊』を自身に掛けていたためだ。地面を転がり、起き上がる。ダメージは少ない。

すぐに風を集めて舞い上がる。上空へ避難し、距離をとる。ミケの追撃はない。安心しかけた直時の更に頭上、ファイアが満を持して風の精霊術を放つ。

水分を含んだ急な上昇気流は、反作用として下降気流を作る。直時が霧を強引に吹き払ったことで条件は満たされた。

この状況に自分の精霊術を上乗せすることで、ファイアの攻撃は威力を倍加させる。

直時が気圧の高まりを感じたのと、微笑む頭上のエルフを見つけたのが同時だった。風を纏って避けようとした身体が引つ張られる動けない。足を掴まれた感触があるが、周囲にミケの姿は無い。

焦りながら見渡す眼に、地上で片手を振るミケが映る。霧が晴れた地面には、上空の直時の影がくつきりと落ち、それをもう片方の手でミケが掴んでいた。影を拘束することで本体の動きを阻害する闇の精霊術だ。

「ここまでね」

フィアの声とともに直時の頭上から暴風の塊、強烈なダウンバーストが叩きこまれた。

「ぎゃああああああ！」

風速80メートルを超す下降気流に思うように身動きをとれない直時。急激に迫る地面への恐怖に失神しそうになるが、大声を上げてなんとか耐える。

(今の俺に重さはないっ！地面には墜ちないっ。風に乗れ！)

風の精霊の声を聞き、流れを読む。地上へと叩きつけられた風は地面を舐めるように広がり、周囲の木々を薙ぎ倒した。一抱えもある木が放射状にへし折られる。

風に乗ることに成功した直時は、低空を障害物を避けながら風と直時が吹き抜けていく。勢いが衰えたところで、漸く風を操ることが出来た直時は、ダウンバーストの中心地へと戻った。

「あら、無傷？」

「死んだかと思ったよ。ミケさんは？」

フィアの意外そうな声に、苦笑で返す直時は全てが吹き飛ばされて空き地になってしまった周囲を見回す。

「フィアちゃん、酷いニヤー」

「わっ？」

足元の影から這い出してきたミケの声に、吃驚して跳び上がる直時。フィアの攻撃を影に潜むことで避けたようだ。

「ごめんごめん。でも闇使いなんだから、避けてくれると思ってたわ。実際大丈夫だったし」

「うちはフィアちゃんみたいに加護持ちじゃないニヤ。魔力だって

少ないのニヤ」

これは本当である。魔力量に関しては、猫人族が獣人族でずば抜けているとはいえ、エルフとは較べるべくもない。ミケの判断では、フィアの半分くらいだろうか。

「なんか冷めちゃったわね。どうする？もうちょっと手合わせする？」

「待つニヤ。誰か来る。空からニヤ」

「ヒルダね……。じゃあここまでよ。これからのことはリスタルで話しましょう。こちらのPTはシーイス公国の役人の撤収が終わるまでいなきやいけないから先に戻ってて」

「了解。俺はノーシユタツトに宿取ってるからもう一泊してから帰るよ。それと、二人とも付き合ってくれて有難う！」

「ま、クエストだからね。ミケちゃんも半分もっていきなさい。これは正式な依頼だったんだからね」

フィアはそう言って、躊躇^{ためら}うミケに金貨3枚を押しつける。

「評価とか聞きたいんだけど、リスタルに戻って落ち着いてからの方がいいかな？」

直時が、二人の顔を交互に窺^{うかが}う。

「細かいところはリスタルに着いてからにしましょ。でも一言だけ言わせてもらえば……」

「駄目ね（ニヤ）」

フィアとミケは顔を見合わせながら苦笑する。

がつくりと頂垂^{つひた}れる直時。

そこへ予想通りの人物が現れた。羽ばたきをひとつして、飛行速度を打ち消し、3人の傍へと舞い降りてくる。

「・・・随分と派手にやったものだな」

呆れたような顔で竜人族ヒルデガルドが近付いてきた。

「ファイアちゃんが怒り狂ってたのニヤ」

「ちよつと!」

突っかかりそうになるが、片眼を瞑ったミケの意図に気付き、不貞腐れた顔でそっぽを向く。

「もう終りなのか?」

ヒルダが残念そうに3人を見回した。

「終了です」

直時はきっぱりと答えた。

直時達はとりあえずガラムPTと合流し、それぞれの目的地へと向かう。

直時は荷物のあるノーシュタットへ。ミケはガラムPTと別れ、リスタルへ。その前にリタへ挨拶するからと、直時に同道すると言う。

ガラムPTの面々はシーイス公国首都『ヴァルン』へ。引き上げる神事官達の護衛がてら、王宮に向かう。王宮で感謝の宴に招かれているようだ。

「しかし、よく魔狼を手懐けられたものだな」

ガラムが感嘆をあげる。ラーナとリシュナンテも同じだ。ダン

満足そうに頷いている。

「ヴィルヘルミーネ様がとりなして下さったので、魔狼達も納得してくれたみたいです」

頭の後ろを掻きながら直時が答えた。

うんうんと頷くミケの隣では、フィアとヒルダが視線だけで何やらやり取りをしている。どうなんだ？ さあね？ と、いったところだろうか？

「皆さんには、勝手な都合で御迷惑をおかけしました。こちらのクエストに理解を示していただき有難うございました」

直時が頭を下げる。斜め後ろではミケも頭を下げて謝意を表していた。

「まあ、お互い無事にクエスト達成出来たんだから構わんよ。俺達も神霊の加護の邪魔をせずに済んだからな。・・・しかし、これだけは言っておく。冒険者同士でもクエストの邪魔になるような遠慮なく潰すぞ？」

「肝に銘じておきます」

途中から厳しいもの変わったガラムの声に、多少ビビりながらも真正面から視線を受ける直時。

「役人どもの準備が出来たようだ。俺達も出発しよう」

ガラムはPTの面々に指示する。

「お気を付けて」

「お前らもな。リスタルに戻ったら一杯付き合え」

最後は気安い様子で、背を向けるガラムだった。

直時とミケは『地走り』でノーシュタットに向かう。護衛も何もないたため、陽の高いうちに街へ辿り着くことが出来た。加護祭が終ったばかりであったため、通行税は高いままで判銀貨1枚を徴収された。懐具合が寂しい直時が不平をこぼしていたのは言うまでもない。

「腹減った……。何か食べたいんだけど、ミケさんは『岩窟の砦亭』に行く？」

「そうだニヤ。屋台はまだまだ仕舞ってないから、食べ歩きしながら一緒に行くニヤ」

「なら、有難い。クエストのことで訊きたい事があったから、ミケさんが急ぐなら飯抜きを覚悟してたよ」

「無事終わったことだし、うちもそこまで急がないのニヤ。それと、そろそろ『さん』付けで呼ぶのは止めて欲しいのニヤ。うちとタッチイーの仲じゃニヤいかあ」

「いやいや。まだまだ対等とはいかないからね。口調は改めたけど、呼び方は『ミケさん』で。馴れ馴れしくし過ぎると惚れちゃいそうだからねえ」

直時も正直なところ、ミケとは仲良くしたい。御近づきになりたいたとは思っている。しかし、精霊術を使うギルド付き高ランク冒険者が、直時に対して姑息なクエストの仲介をするというのも何だか解せない。事情が判るまで、適度な距離は必要だと考えての事だった。

本当なら実際に言葉にする必要はなかったが、直時も自分の迂闊うかつさは知っている。しかし、常時気を張り詰めていることも出来ない。ミケに釘を刺すことで、相手にも自分にも警戒を促したのであった。距離をとってくる相手には自然と距離をとることができるが、腹に一物あったとしても親しげにされると警戒を持続するのが難しい。男にとって、相手が女性であるならなおのことである。

「タッチイーのケッチ」

ぶくつとむくれるミケに心が揺れる直時だったが、何とか自制して美味しそうな匂いの屋台へとミケを促した。

「おにーさん！串焼き10本と麦酒2つ！」

二人が足を止めたのは、直時がノーシユタツト入りした日に食べた焼き鳥の露店だった。あの美味しさを憶えていたのである。

「はいよ！まずは串焼き6本と麦酒2つ！」

台の上に銀貨を置いた直時に、威勢の良い声で丁度よい焼き具合の串焼きと麦酒が差し出される。

「とりあえず、乾杯しよう」

「とりあえずじゃないニヤ。うちのクエスト達成に！」

「乾杯っ！」

杯をぶつけ、渴いた喉に麦酒を流し込む。二人とも一気に飲み干してしまった。息を吐いてお互い見合った顔は満面の笑顔に彩られている。

「くっくっくっ」

「ニヤっはっは」

どちらからともなく笑い出す。そう。これは祝杯だ。今はこの瞬間を楽しもう。ささやかな宴が始まった。

「二人とも良い呑みっぷりだねえ！もう一杯ずつどうだい？」

「当然ニヤ。よろしく頼むニヤ」

「ミケさん。この串焼き、ものすごく美味しいよ」

お代を渡し、麦酒を受け取るミケに直時が勧める。既に1本目を食べ終わりそうだ。麦酒の2杯目はミケの奢り。有難く受け取る。

「うんうん！これは極上なのニヤ！」
肉を一切れずつ齧りとり、むぐむぐと味わったミケの顔が綻ぶ。
気に入ったようだ。

「確かイリキア産の地鳥だったっけ？」

「黒地走り鳥さ。良く見りゃこないだの黒髪のにーちゃんじゃねえか」

「そそ！その黒地走り鳥！って、良く憶えてるね？」

「あつはつは！にーちゃんの御蔭であの後客入りが良くなってなあ。稼がせてもらったぜ」

確かに客足が増えて、急いで食べた気がする直時。

「タツチー、呼び込みでもやったのニヤ？」

「いや。なんにもしてないけど？」

「あれだけ美味そうに食ってくれりゃ、それが一番の宣伝よ！3杯目は俺からの礼だ。さっさと空けちまいな」

店主の勢いに、直時とミケは残りの麦酒を喉を鳴らして干す。二人してぶはーつと息を吐く。

美味しい串焼きを肴に、麦酒を干しながら談笑する3人。その光景にまたもや客足が増えていく。忙しくなる店主を他所に、新たな客が麦酒を片手に直時達に話しかける。もこもこした頭髪にくるりと巻いたように捻じれた太い角は羊人族ようじんの若者だ。

（草食じゃないんだなあ）

等とくだらないことを思いながらも、会話を楽しむ直時達。

増える客は獣人族が多い。普人族（に見える）直時と猫人族のミケが談笑する様子に、気安い店だと思っただようだ。普段なら腰が引けているが、獣人を特別視したくない普人族も集まってきた。まるで交易都市の様相を見せる店先。

通りを歩く普人族の中には、露骨に眉を顰めたり舌打ちしたりする者もいるが、今、この串焼き屋の店先では客達全てが笑っていた。

「美味かったよ。御馳走様」

「はっはっは。嬉しいねえ。串焼きを御馳走とは言ってくれるじゃないか」

「またニヤー」

直時の言葉を微妙に勘違いした店主に笑って手を振るミケ。直時も言葉のニュアンスをわざわざ説明したりせず、店を後にした。

串焼き屋だけでかなり飲み食いした二人は、満腹に近くなってしまった。食べ歩きを諦めデザートの屋台を探す。

ミケが走り寄ったのは魚の形をした焼き菓子の屋台だった。小麦の香ばしい匂いに甘い匂いが混ざっている。

ミケが差し出した皿には魚の形をしたパイ（の様なもの）が乗っていた。表面は融けた砂糖か、卵黄が塗ってあるのか滑らかに光り、生地は結構分厚い。5センチはあるだろうか？

皿に添えられた小さなフォークで生地を割るとサクツと音がする。とろっと流れ出したのはジャムだろう。

「美味しいのニヤー」

ミケは一口食べては幸せの余韻に浸っている。

「フォークを啜えるのは行儀悪いよ……。でも、こっちじゃどうか判らないか」

微笑みながら注意しようとしたが、アースフィアの慣習ではどうかと脳内検索してみる。残念ながらフィアの知識にはなかったようだ。

直時はミケに促され、皿に流れ出したジャムをパイの欠片に塗っ

て口に入れた。サクツとした食感はやはりパイに近い。全体的にサクツとしているのは満遍なく火が通っているからだろう。魔術で焼き上げたのだろうか？とろつとしたものはやはりジャムだ。僅かな酸味があり、直時の好みからすれば甘過ぎたが、疲れた体には非常に美味に感じられた。

「うん。甘くて美味しい」

ミケの笑顔に釣られたのか、焼き菓子の美味しさに釣られたのか自然と顔が綻ぶ。

(いかんいかん。これはデートじゃないぞ。そう！栄養補給！)

直時は笑顔の下で浮つく心を落ち着けようとしていたのであった。

『岩窟の砦亭』へと戻った直時は、リタに椅子をもう一脚借りて部屋の中でミケと向かい合う。テーブルの上には注文した香茶が湯気を立てていた。懲りずに同席しようとしたリタとジギスムントを締め出し、闇の精霊で扉を封印するミケ。直時が興味深く観察する。

「扉の隙間の影を固定化してるのかな？俺の足を掴んだみたいに。良く判らん」

「闇の精霊が出来る事は理解し難い事が多いニヤ。判らなくても出来れば良いのニヤ」

あっけらかんと言うミケに、それでいいのか？と突っ込みたくなる直時だったが、居住まいを正してミケに話しはじめる。

「聞いたかったのは、今回俺が受けたクエストのこと。クエスト自体は成功したけど、この依頼達成の証人はミケさんってことになるよね？」

「そうニヤ」

「リスタルのギルドとしては、この依頼、失敗はしなかったのなら無かったことにしたいんじゃない？」

ミスなど無かった。ガラムPTとは連絡が取れ、加護祭が無事終わった。そういうことにしたいはずだ。

「本音はそうかもしれないけど、依頼が発行されたのはうちが知ってるニヤ。無かったことにはさせないニヤ」

「ミケさんはギルド付きなんだろ？ギルドの利益を損ねるんじゃないか？それで良いのか？」

ギルド付きというのが、リスタル支部のことなのか、ギルド全体のことなのかで立場も違ってくる。

「ギルド付き冒険者はギルドという組織全体にかかわる存在ニヤ。今回の依頼はリスタル支部にいる恩人の知り合いが困っているというから仲介しただけニヤ」

「ミケさんにとってはあくまでも恩人の知り合いの依頼だったってこと？」

「そうニヤ。尻拭いの依頼を仲介したことで恩人の顔は立つはず。ここでうちが嘘を証言すれば、それは冒険者ギルドという組織に傷を付けることになるニヤ。納得してくれたかニヤ？」

ミケは真っ直ぐに直時を見た。どうやら嘘ではないようだ。

「じゃあこの依頼書はリスタル支部へ提出しても大丈夫なんだね？」

「勿論ニヤ」

ミケの言葉に漸く安堵の息を吐く直時。

「財布も随分寂しくなっていたから、この報酬が貰えなかったらどうしようかと思っただよ」

他の心配もあったが、一番気楽な心配事を口にすることで空気を

軽くしようとする。

「それにしてもミケさん。仕事モードにならないね」

「今回の仕事は実質もう終りだニヤ。肩の凝る喋り方は無しニヤ」
それはそれで残念な気がする直時だった。

「色々あって疲れたし、今日はこれで休むとしよう。ミケさんはどうする？」

「リタ姉さんに空き部屋あるか聞くニヤ。無かったら他所で泊るかニヤ」

「じゃあミケさんこれを」

そう言っただけ直時は部屋の隅の小樽から、蒸留酒をコップに少しだけ注いで渡す。自分の分も用意してミケに向かって杯を突き出した。

「乾杯！」

「乾杯！」

嬉しそうに直時の杯に合わせて、二人して強い蒸留酒を干す。胃の底で燃えるアルコールに満足気に頷く二人だった。

シイス公国の国境は高い峰々で囲まれたようになっていた。途切れているのは僅かに3カ所。カール帝国と接する北東部へは山からの清水で出来た湖から流れ出す大河があり、水上輸送を可能にしている。西部にはヴァロア王国へと続く街道が、南西にはマケディウス王国へと続く街道がそれぞれ山岳の切れ目に築かれていた。

直時の目的地である『ロツソ』は南西への街道を越境して出合う最初の街である。そして、リスタルの町は国境に近い所にあった。

シイス公国西部街道。ヴァロア王国へと続く街道から侵入する人の群があつた。ヴァロア王国の進軍だつた。軍団は出合う者全てを殺しながら進む。旅人、商人、冒険者。情報を隠すため容赦がなかつた。少なからぬ冒険者が地走りで逃走を試みたが、翼蜥蜴つばきとかげや、むくろおおがらす 軀大鳥、獅子胴鷲しじょうじゅうに跨つた空中騎兵団に追撃され、例外なく命を落としていった。

足の速い騎兵と空中騎兵団の素早い包囲、攻撃に、シイス公国の関所。国境防衛隊は瞬く間に殲滅される。

未だ、シイス公国にヴァロア王国の侵攻が知られることはなかつた。

束の間の安堵（後書き）

- ・ 直時は逃げるのか、戦争に巻き込まれるのか、戦争に参加するのか・
- ・

侵略（前書き）

軍事関係は素人なので御容赦を！><

侵略

「ヴァロア王国侵攻軍、移動司令部では初動の評価と今後の作戦行動の確認が行われていた。」

「越境に関して今のところ問題は出ておりません。進軍情報隠蔽のための塵殺作戦ちんころつは一部の懸念を除いて完遂されております。」

「参謀、懸念とは何だ？逃走した者は全て補足殲滅したと報告を受けているぞ？」

「順調に進捗しんぱくしている作戦に水を差す参謀の言葉に司令が避難の眼を向ける。」

「はっ！補足対象については完璧に無力化しております！小官の懸念は逃走ではなく潜伏であります。人魔術、個体能力、無いに越したことはありませんが精霊術により我軍の哨戒をやり過ぎし、離脱後、連絡を取られることにあります。」

「参謀の仕事は常に最悪を上官に意識させることだ、との言葉は軍学校参謀科で常々教えられる。」

「哨戒騎からは異常は認められないのだな？」

「参謀に即答はせず、空中騎兵団長に確認する。」

「はっ！空中騎兵の遠視による哨戒でも異常は認められません。」

「手入れの行き届いた髭を撫で付けながら、余裕をもって答える空

中騎兵団長。

「ならば、このままりスタルを目指す。本命はロツソだ！ロツソを手に入れるためにリスタルは灰塵に帰さねばならん。その惨禍を見せつけねばならん。我がヴァロア王国の力を知らしめねばならんのだ！マケデイウスなどという弱小守銭奴国家が、他種族と馴れ合い富を貯め込んでいるなど許し難い！祖国ヴァロア王国に栄光を！」

司令官の檄に居並ぶ將軍達が唱和する。祖国のために！と。渦巻く熱気に流されず冷やかな眼差しを崩さない参謀が自分と同じ、いや、より冷めた眼をした存在を確認した。

居並ぶ將軍達から距離をとり、末席に存在感を極力消した諜報部に所属する者だった。

軍議が終り、戦意に満ちた将官達が退席していく中、残ったのは司令官と参謀。そして、会議中一言も発しなかった諜報部。

「参謀の懸念は尤もだ。侵攻が露見している可能性は如何程か？」

司令官が参謀に問い質す。諜報部員と無言で視線を交わす参謀。

「希望的観測で5割。私の判断ですと7割以上の確率で何らかの情報は何れられていると思われます」

「しかし敵国軍の動きは無いぞ？」

「シイス公国としてはまだ確認の段階でしょうが、冒険者ギルドには既に把握されていると考えます」

「義勇兵が出てくるか……。リスタル在中の名立たる冒険者はいないはずだったな？」

参謀ではなく、諜報部へと訊ねる司令。

「本国からの情報ではAランクの獣人族が数える程とのことですが、ノーシュタットにはSランクの存在が確認されていますが、リスタルまで出張ってくることは無いと判断されております」

「しかし、奴等の交友関係は我等の情報に無い方が多いが？介入の

心配はないのか？」

「断言はできませんが、諜報部の評価ではその可能性は低いとのことです」

軍議の席では見せなかつた司令の弱腰を諜報部員は無駄な懸念だと一蹴する。慎重な進軍を望んでいた参謀が眉を顰めていたが無視される。

「作戦は発動されたのです。小国シーイス公国には首都防衛しか手立ては無いはず。リスタルごときは切り捨てられるでしょう。今作戦は交易の要衝たるロツソを手中にするための布石。司令には勇猛果敢な攻めを期待されております」

本当は冷酷残忍、狂気による惨劇を見せしめにし、ロツソ近くから狙うこの軍を牽制に使い、ロツソ侵攻本軍が無血開城（街）を迫る予定である。作戦終結後、戦犯として断罪されることは司令には知らされていない。

「我が軍は1万2千。リスタルの人口は多く見積もって1万。守備軍は500。いくら冒険者が参戦したとて勝敗は明白です」

諜報部員の言葉に取り戻した自信で鷹揚おつように頷く司令。リスタルは防衛のための城壁すらないのだ。

「では好きなようにやっても良いという言葉はそのまま取って良いのだな？」

犬歯を剥き出し、欲望に濁った眼を向ける司令の視線を正面から受け止める諜報部員。

「リスタルにおける権利は全て貴官に委ねられております」

言質げんちを与えられたことで、殺戮と蹂躪と略奪への全ての禁忌を解放した軍の長は下卑た笑いを抑えられなかった。参謀の諫言は脳裡から消え去っていた。

参謀の懸念に反して、リスタルの街に敵襲の警報が発令されたのはヴァロア軍が直撃する1日前であった。

直時はノーシュタットを出立し、行きとは違ってゆっくりとリスタルへと帰還していた。輸送クエストでも引き受けようかと思っていたが、リスタルに戻れば金貨10枚の成功報酬が待っている。野宿にはお金が掛からないこともあり、精々薬草でも見つかれば儲け物と暢気に進んでいた。

直時にとって、高速移動魔術は探知強化の知覚強化無しではきつい。移動がゆっくり過ぎるのもストレスが溜まるので移動初歩魔術の『推進』を身体に覚え込ませつつ進んでいたのである。

「タッチー！斑土蜘蛛発見ニヤ！」

「流石ミケさん！今日の晩御飯は蜘蛛足だ！」

直時の槍が地面に潜り込もうとする斑土蜘蛛の頭部に突き刺さる。苦し紛れに毒液を吐くが直時には届かない。

この世界に来て、直時がハマった食材のひとつが斑土蜘蛛を筆頭とする、大蜘蛛の足である。大味ではあるものの、触感かにかまほこは蟹蒲鉾で、味はそのまま蟹である。松葉ガニほど濃厚な味ではないが、充分郷愁を誘う味であった。

ノーシュタットからリスタルの旅程にミケが同行した理由は『依頼には能力よりも性格や考え方を重視せよ』とあったらしい。そこ

まで調査対象に言つて良いのだからと思つ直時であつたが、其処ら辺は自分の性格を見抜いたミケの判断だろうと苦笑交じりに納得するのであつた。

息絶えた斑土蜘蛛の8脚をナイフで切り離す直時を見守るミケの顔が不意に強張る。応答するミケの頭上に魔法陣が現れた。遠話の魔法陣だ。

一頻りひん対応した後のミケの表情は一変していた。

「リスタルに侵略軍が迫っています」
強張つた表情でそれだけを直時に告げる。

「戦争・・・なのか？」

実感が湧かない直時であつたが確かめざるを得ない。

「そうです。隣国のヴァロア王国が攻め込んで来たようです。シーイス公国はまだ詳細を把握しておりません。しかし、リスタルの街では防衛戦を決定。住民の避難と同時に義勇兵を募っています。私はリスタルに恩人がいますから先行させてもらいます」

ミケの断言は直時の都合だの思いだのとは別に、自身の立場を明確にし袂たもとを分かつとの宣誓だつた。

「ミケさんは参戦するんだね？」

「当然そうなります」

「・・・人魔術の新発見広める間も無かつたな」

「世界は自分を中心に動いているわけでは無いのですよ」

少し皮肉げに直時に告げるミケ。

「俺はそんなに傲慢じゃないよ。むしろ端つこで細々と生きてるタイプだから。これから直行するんだよね？ 防衛戦なら泉で見ただろうけど防御系人魔術が必要になると思うんだ。岩壁とか岩柱とか・」

「良いんですか？」

「消費魔力きついから普人族に教えたら駄目だよ？ 転写する。心の準備が終わったら言つて」

笑顔で返す直時にミケが呆れたような顔をする。新しい人魔術の魔法陣は、それが普及するまでは信じられないような高値で取引されるからだ。

「お願いします」

「我が知 我が識 汝の知となり肉と為さん 『転写』」
軽い眩暈を覚えたミケが額に指を当てる。

「『岩盾』3種、確かに頂きました」

「防御系だから他の人に教えることに遠慮はいらない」
攻撃系（相手の命を奪う）魔術には逡巡を覚える直時だが、防御系に忌避はない。

しかし、この魔術を盾にしながら攻撃がなされることに考えが至らない時点で本人のエゴ以外の何物でもなかった。

ミケがリスタルから敵襲の遠話を得ていた頃、スイス公国王宮にもその知らせはもたらされた。

獣人族という立場から控えめに会場の端で美酒と料理を楽しんでいたガラム兄妹、騒がしいのを嫌うダンを他所に、フィアとヒルダ

は物怖じせず酒杯を重ねていた。意外と気が合っているのかもしれない。リシュナンテにいたっては、上流階級の御婦人方を束で相手取り愛想を振りまいている。

「伝令！緊急です！」

突然息を切らした兵士が祝宴会場へと走り込んで来た。官僚と思しき数人を腰にまとわりつかせているのは強行突破してきたからだ。王族に連なる者達や、貴族達は眉を顰めて^{ひそ}いる。

「祝宴の席に敢えて伝えねばならんことなのか？」

国務大臣がやんわりと窺^{たしな}める。非難を込めつつも、緊急事態を無視する気はないようだ。兵の無礼に不快を感じているが、用件を聞く。

「ヴァロアより侵略です！国境は突破され、敵軍はリスタル目前！」
発言を許されたことを僥倖^{うへい}として、口を挟まれないよう簡潔に、
そして一気に報告を済ませる。

俄かにざわめき出す会場。それまでの陽気さを拭い去ったフィアは杯を手近のテーブルに置いて足早に歩きはじめ。その前にヒルデガルドが人の悪そうな笑顔を浮かべながら近付く。

「坊やが心配か？」

「リスタルの宿屋には私の荷物が置いてあるの。丸焼けにされちゃ嫌だからね」

ヒルダを軽く睨みながら強がるフィア。ガラム兄妹とダンも集まってくる。リツテは女性の輪を抜けるのに苦労しているようだ。

「俺達のクエスト報酬はリスタル支部で受け取る予定だった。緊急条項から他所の支部でも受け取れるだろうが、皆はどうする？」

PTリーダーであるガラムが問い質す。

「私は荷物を取りに戻るわ。邪魔する奴は吹き散らかすだけよ」

「私は坊やに稽古をつけてやるうと思っただけだから。実戦訓練ができるなら好都合だ。リスタルに向かう」

フィアの強がりを含み笑いしながらヒルダが答える。

「ワシはノーシュタットに向かう。防衛線を構築するならノーシュタットだろう。陣地構築に協力しようと思う」

ダンが戦況を踏まえた上で答える。どれだけ急いでもリスタルは間に合わないとの判断だった。

「俺もダンに賛成だ。クエストのクライアントだしそれくらいの義理はある。しかし、防衛戦に協力するとしてもリスタルはもう無理だ。シーイス公国軍も今から展開するならノーシュタットに陣を敷くだろう」

兄の言葉に頷くラーナ。虎人族の兄妹はノーシュタットへ向かうようだ。

そこへ漸く御婦人方の輪から抜けてきたリシュナテが遅れて合流する。戦争に怯える女性達がなかなか解放してくれなかったからだ。

「リツテはどうする？」

「僕は野暮用がありました。王城に留まります。末席とは言え僕はカールの宮廷魔術師ですからね。戦争に係わっちゃうと色々と面倒なことがあるので。まあ、好意的な軟禁みたいなもんです」

ガラムからの問いに常の軽さのまま答えるが、自分の立場だけは明確にする。シーイス公国としても隣国の大国、カール帝国の宮廷魔術師の保護は同盟関係にあるため蔑ろにはできない。カール帝国

からの派兵を促すためにも安全を確保するため行動を制限するのは致し方なかった。

「リッテの護衛はシーイスにだけ任せても大丈夫なの？」
ラーナが心配そうに兄に訊ねる。

「俺達が出張るより任せた方が無難だろう」
獣人族がシーイス公国の護衛にケチをつける方が不味い。王城は戦域から遠く、最悪の際の脱出路も確保されている。

「カールはどう出る？」
不意に発せられたヒルダの言葉に片眉だけを上げたりシユナントへらへらとした雰囲気は崩さない。

「僕は宮廷魔術師といっても下つ端ですからね。国の方針までは知らされてません」
暖簾のれんに腕押し状態のリッテに鋭い眼差しを向けるヒルダ。方々で情報収集と連絡を取っていたことは竜人族の鋭敏な知覚で知っていたが今はPTメンバーである。深く追求するのは諦めた。普人族国家同士のいざこざなど些事だと感じていることもある。

「カールも大きな獲物に狙いを定めたようだな」
皮肉を返すだけに留めたヒルダは、今にも走りだしそうなフィアを促して場を後にする。ヒルダの言葉に残るPTメンバーの問いかけるような視線をはぐらかしたリッテは軽く肩を竦めた。

（他メンバーが同行しなかったのは計算違いだったな。黒剣と晴嵐だけなら足手まといが無い。現地到着も早い。思ったより早く終わりそうだ。急がせるか・・・）

シーイス公国に潜り込ませたカール関係者との連絡を急ごうとす

るリツテだった。

ミケは脚力を強化した上に『地走り』でリスタルへと急行していた。同道していた直時とはリスタルを脱出してきた避難民と接触した辺りで別れた。

「避難を最優先に補助するよ。ミケさん、くれぐれも無茶はしないように」

直時は別れ際にそう言つて避難民に移動系術式を施すためその場に留まった。彼の魔力量なら『推進』『地走り』『浮遊』等を連続使用しても問題はないだろう。別れ際に見た彼は家財道具を抱えた者達に片っ端から人魔術を行使していた。

自分やファイアといった高ランク冒険者ならば直時を手玉にとることは可能だろう。しかし、彼の有り余る魔力を普人族の戦列に叩きこんだならば……。走りながらもその予測に心が揺れるミケであった。

闇の精霊術は日中にあつては効果が半減される。影を使った攻撃はそこそこの威力を期待できるが、風、水、土、火といった直接現象系精霊術と比して大規模攻撃には向かない。直時を戦力として迎える誘惑に駆られる。

ミケは防衛戦に参加する気はあつたが、第一の目的は自分の恩人を無事逃すことであつた。

ミケの幼少時の記憶は炎で焼かれる故郷だった。普人族とは隔絶した森の中、ただ安穩と過ごす毎日の連続。同族の友人達と遊び疲れた自分を笑いながら迎えてくれる我が家。家族達。それらが炎に消えていった。

ある日突然訪れた災禍。大声で走り回る大人達。その光景にただただ怯えるだけだった自分を、さして年の変わらない姉が抱きしめてくれていた。震える声で励ましてくれていた。

玄関先で剣を取った父と誰かが争う。母が魔術を放つ。追い払っても追い払っても入りこんでこようとする者達。激しく争う父の背中から尖ったものが生える。そのときは槍で貫かれたとは判らなかつた。悲鳴を上げる母。なだれ込んでくる鎧を纏った兵士達が、倒れた父に群がる。剣や槍、斧が振り下ろされる。何度も、何度も……。

真っ赤になった父に泣き継すがる母の衣服を引き千切った兵達がまるで祭りの供物のように担ぎあげ、歓声を上げながら連れ去って行く。姉は私を抱きしめ、きつく眼を閉じたまま震えていた。私もきつと震えていた。でも私は眼を開いて全てを見ていた。

我が家から出ていく最期の兵がこつちを見た。兜で顔は判らなかつたが、口元が笑つたのは判った。剣を片手に戻ってくる。笑つたまま……。

振りあげた剣の先には私と姉。その間に誰かが走ってきた。おじいちゃんとおばあちゃんだった。二人は私達に被さると口から赤い水を吐いた。衝撃が走るたび、おじいちゃんとおばあちゃんの口から私の顔に赤い水が掛かった。二人とも笑っていた。大丈夫だと言っていた。でも私は心配で泣きそうだった。

突然家の外から大声が聞こえた。「焼く」とか「燃える」だつたと思う。大きな足音がした後、不意に静かになつた。おじいちゃんとおばあちゃんは笑顔のまま動かなくなっていた。

「ぱちぱちという音と共に息が苦しくなってきた。私は家族に訴える。」

「ハアハアしないと苦しいよ？それに熱いよ？」

「祖母は笑い顔のまま動かない。仕方なしに姉の身体に手をまわし揺さぶってみる。」

崩れ落ちる祖母と姉。床には真つ赤な水が広がる。誰も起きない。祖母は眼を開けたまま動かない。姉は固く瞑つた眼のまま動かない。私は心細くなり大声で泣き出す。

泣いても誰も動いてくれない。誰も返事をしてくれない。火の粉が舞い落ちる。息が苦しい。喉が痛い。眼も痛い。私は泣くしかできない。泣いていれば眼が少しだけ痛くなくなったから……。

ミケを助けたのは闇の精霊術を叩きこんだリタだった。普人族の軍が戦意高揚のためだけに猫人族の集落を襲つたのを聞いて駆け付けたのだった。生存者はミケだけだった。

リタの元で闇の精霊術を身に付けたミケはその庇護しゅっぽんの元から出奔する。研いだ爪と牙を復讐に染め上げて……。

侵略（後書き）

ミケさんの過去話その1です。どのタイミングで入れるか迷ってましたが、戦争の前に入れてみました。

侵略？（前書き）

ほとんどミケさんの過去編です><

侵略？

ミケは夜の街を縫う。暗い路地裏や屋根を音も無く移動する。僅かな星の光がその眼を闇に浮かばせるが、活性化した闇の精霊が気配を完全に遮断している。姿を見られたとしても、意識されず、記憶にも残らない。

今までギルドで受けたクエストは地方領主、有力貴族、宮廷関係者からのもの。盗品から略奪品まで手広く扱う商人からの採取クエスト。その合間に酒場や夜の蝶達からの噂話を広く集めた。

そこから浮かんだある貴族の私兵団。当時、普人族国家同士の会戦が行われ、ミケの住んでいた集落が戦地への行軍と近かった軍勢は3つ。そのひとつだった。

未だその貴族の下で仕官しているという兵を酒場でひっかけた。兵士は舌舐めずりしながらミケを路地裏へと引きずり込む。宿に連れ込む手間も惜しいらしい。壁に押し付けられ、怯えた振りをした上で抵抗の素振りを見せた。

「お前も耳を切り取ってやろうか？」
その一言でミケが硬直した。炎の中からリタに連れ出され、目の当たりにした同族達の多くが耳と尾を切り取られていた。

抵抗を止めたミケを恐怖に凍すくんだと思った男が身体を弄もよほりだす。

胸元や腰回り、太腿に手を這わせた男はミケの尾を握りしめた。その瞬間ミケの視界が真っ赤に染まった。

故郷を焼いた炎の赤。家族の身体から流れる赤。同族達を染めた赤。

ミケが荒い息を吐きながら自分を取り戻した時、裏路地の泥と己の血に塗れた男が、悲鳴というにはか細い呼吸を繰り返しつつ許しを請うていた。

手足が不自然に折れ曲がり、体中なます切りでそれでも命乞いをする男の喉に、伸ばした爪を浅く突き刺す。ミケの脅しに洗い浚ウソクい喋らせた後、喉を掻き切つて路地裏に捨て置いた。

「これが始まりよ。闇に脅えるがいい……」
俯いたまま低く宣言したミケ。この日から件の部隊に所属していた兵が次々と命を落とす。

5人が殺された時点で部内では注意を喚起された。10人を超えた時点で警戒態勢が敷かれ、夜間外出が禁止された。それでも犠牲者が止むことはなかった。

夜の街へ出られない不満をこぼしつつ、部隊御用達の店に集められていた兵達十数人が殺害された。最後のひとりが断末魔を上げたとき、足を踏み入れた給仕が見たのは影から生えた鋭い爪だった。頸くびを貫いたそれが影に吸い込まれ、辺りを血飛沫が染め上げる。

それ以後、巷を賑わす暗殺者「暗爪あんそう」の名。一部の者は恐怖おのに慄おそき、大多数の者は好奇と興奮をもってその名を口にする。ミケが暗躍する度、その名は巷に溢れるのだった。

「・・・怯えるがいい」

陽の光の下で明るく元気に振る舞うミケが夜の帳とほじと共に眩く。塵殺せねば気が済まなかったが、こないだ手に掛けた中隊長は下級とはいえ貴族の次男だったようで警戒が厳しくなってきた。

兵を後回しに下士官、士官を優先して標的にしたが、本命の指揮をとっていた貴族の息子はその財力で警護隊ががちりと固めてしまった。高位の魔術師まで雇ったようだ。

しかし、それでも復讐を諦められない。あの日の光景を忘れられるはずもない。警戒の眼を逸らすため、比較的警備の緩い下っ端兵士を一人屠った。その知らせが届くのを見計らって貴族の屋敷へと闇を駆ける。

狙う貴族の屋敷もクエスト達成時に呼ばれたことがある。もちろん正門ではなく、裏門から入り使用人室で応対された。だが、およその配置は判る。ミケの瞳は僅かな光を反射して緑色に光っていた。

警備も厳重。灯火の術や篝火が皓々と照らす、夜の闇を駆逐するまではいかない。闇の精霊を味方にしたミケの侵入を阻むことは出来なかった。

「旦那様、そろそろお休みになられては如何かと・・・」
「うるさい！それより酒の代わりを持って！」

細身の老僕の諫言に怒声で答える男。貴族と言うには無骨さが目立つが、戦乱渦巻く中での貴族は武辺がモノを言う。しかし、その武辺も落ち着きのないイラつきが台無しにしていた。

「『暗爪』か……。獣人族であろうな。……遺恨か」

過去にも他の獣人族の集落を襲ったことがあったため、どの種族が自分たちを狙っているのか判然としない。

「覚えのある種族は領内から駆逐するか……」

ほうつと嘆息し呟く貴族の背後にミケがいつのまにか立っていた。

「その前に貴方を駆逐してあげましょう」

小声であったが、耳元で囁かれたことに驚愕して立ち上がる貴族。武器は戦場では使えない装飾過多の剣のみ。宝石が象嵌そうがんされ、精緻な彫刻を施されたそれを引き抜き構える。

「キサマ！猫人族かつ？卑しいケモノ人の分際でっ！」

「高貴な貴族様の言葉にしては品がないのですね？私の故郷を襲った軍はもつと卑しい人ばかりでしたけどね」

あくまでも傲慢な貴族の言葉に冷やかに答えるミケ。その姿がブレる。

一瞬後、相對していたはずの気配が背後にあるのを知って慌てて振り向く貴族の手から剣が落ちる。肘から先はその柄を握りしめたままだ。ミケが強化変形させた爪は長さを増し、血を滴らせていた。

「ケダモノ風情があっ！」

「吠えるな。下衆」

右手から吹き出す血に構わず、我を忘れて掴みかかる。男の下顎からミケの爪が突き上げられた。親指の爪は左耳を削ぎ飛ばし、残り4爪が口腔から舌を貫いて顔面へと突き出る。吹き出る血潮にミケの顔が真っ赤に染まる。痙攣する貴族。

「ちちうえ？」

舌つ足らずな子供の声が出た。赤く染まった自分と父親である貴族を眼にした小さな女の子が目尻が裂けるほど眼を開く。

クマを模した人形を抱いたその子が立ち竦んだ。命乞いをする兵を殺すことにも怯まなかったミケの身が凍る。

「あ・・・」

それがミケの声だったのか、女の子の声だったのか判らなかった。しかし、次の瞬間童女の悲鳴が屋敷に響き渡る。

ミケが動き出したのは衛兵が部屋に足を踏み入れた瞬間だった。咄嗟に闇の精霊術で気配を消したが、動揺からか完璧ではなかったようだ。窓から脱出する直前に放たれた攻撃魔術をその身に受けてしまう。悲鳴を噛み殺し、流れる血をそのままに逃走に移った。

ミケは走った。走りながら泣いた。それが復讐の成就だったのか、童女と自分を重ねた故の悔悟だったのか、それとも神に見守られてなお呪われているとしか思えない世界にたいする憤りだったのか判らなかった。

応急手当だけをして夜の闇を追っ手から逃れるミケは、国境を越えある町に入った。白み始める空。街は静けさに包まれている。冒険者として登録しているミケはギルドへと足を向けた。運が良ければ治療を受けられるかもしれない。

冒険者ギルド、リスタル支部の扉を肩で開けた時点で力尽きたミケは床に倒れ込む。そのとき当直としてたまたま在室していた普人族の女性が血相を変えて走り寄った。治療師の手配、ミケの看病をしてくれたその女性こそがミケが恩人と呼ぶ人だった。

ミケの傷は深く、治療師の治療魔術（人魔術）では命を取り留めることができたが、完治には時間がかかった。ギルドの救護所は一時的な治療を行うだけで、長期逗留はできない。彼女はミケを自宅へと連れ帰って看護を続けてくれた。

仇討ちをなした反動からか、それまで張り詰めていた気がプツツリと切れてしまった。ミケには世界が曖昧に感じられた。生存本能が命じたため必死に逃げたが、今思えば何故逃げる必要があったのかも判らなかつた。

そんなミケを傷が癒えるや、あちこち連れ回す彼女。珍しい装飾具や目新しい衣服、美味しい料理や菓子を見せてくれた。時折訪れる孤児院には種族の別なく彼女の来訪を歓声を上げて迎える子供達がいいた。

当初、無邪気な子供達とどうやって接して良いか判らなかつたミケだが、戦災孤児である彼等が自分と同じような地獄を見たのを知って積極的に遊ぶようになった。子供達もまたミケに良く懐いた。時折、血塗れた自分が子供達と接するのに気後れしてしまうことがあったが、そんな時はいつも彼女が後ろから微笑んでいてくれた。

「彼女がこの件の犯人だったとしても、ギルドへの討伐依頼は公共の福祉から逸脱しています！いち貴族の私怨ではありませんか！」
ミケがリスタル支部で働く彼女の元を訪ねたとき、常に微笑んでいる表情を一変させて上司と思える男に怒鳴っていた。

脂汗を垂らしつつ、彼女を宥めようとする上司はミケの存在に氣付いてバツが悪そうに眼を逸らす。

「兎に角！この依頼をクエストとして認めるならギルド本部の許可を取ってもらいます！リスタル支部の独断で引き受けるなら監査に直訴しますからっ！」

憤然と上司に叩きつけた彼女はミケを促してギルドを後にした。

「ヴァロアの貴族暗殺なら私です」

軽食屋で焼き菓子と香茶が並べられた後、ミケは彼女に切りだした。

「事情は聞かないわよ？問題は向こうのごり押しを受けようとしてるギルドの方なんだから。列強だからって、ギルドに干渉させちゃいけない。いくら弱小支部だってね」

髪と同じ紫紺の瞳に強い光を込めて言う彼女。普人族の彼女からは大した魔力は感じられない。体つきや掌を見る限り武術にも縁がないようだ。しかし、意思の強さは今のミケより遥かに強そうだった。

「はぁーっ。しっかし、なんであいつはあそこまで押しに弱いかなあ。仕事は出来るのに強く出られるといつつも引いちやうんだよなあ」

先程までの強さから一変してふくれっ面で不平をこぼす。不満はあるものの嫌悪は見られない。ピンときたミケがからかうように問いかける。

「恋人ですか？」

「ちよっ！あんな情けない奴恋人なわけじゃないっ！」

慌てた様子の彼女にミケの含み笑いが深くなる。懨然とした顔で言い訳が始まる。

「まあ、腐れ縁ってやつ？幼馴染なのよ。歳は向こうが上なんだ。

小さい頃は頼りがいがあるお兄ちゃんだったんだけどなあ。今は駄目駄目。もっとしつかりして欲しいんだけどなあ。あっ！でも仕事はそれなりに有能なのよ？」

言い訳と愚痴とフオローがごちゃ混ぜである。ミケは思わず笑い声を上げる。

「にゃっはっはっはっはっ」

なんだ。まだ笑えるんだ。心から笑えるんだ。ミケの目尻に涙が溜まったのは笑いだけのせいではなかったが、それを喚起した彼女には悟られなかったようだ。

ヴァロア王国貴族からのミケ討伐クエストは彼女が骨を折ってくれた御蔭で受諾されなかった。代わりに、多少なりともギルドへ不利益をもたらしたということで、ギルド付き冒険者として無報酬の仕事を引き受けることとなる。表面上はヴァロアへの言い訳にもなる。ペナルティではあったが、ギルドの庇護が得られるようにとの配慮でもあった。

感謝しつつも微笑ましく思っていたミケの態度が微妙なものに変わったのは、件の上司が既に妻帯者であり、恩人の彼女は未だに慕っているのを知ったからであった。直時へのクエストも彼からの頼みを断れなかった恩人の顔を立てるためであり、内心では憤慨していたのだった。

ミケが避難民の群を逆行して到着したりスタルは、予想以上の人が残っていた。武器を手にした男達。炊き出しをする女達。臨時に

P Tを組む冒険者達。誰もが殺気立っていた。

ミケはその中を真つ直ぐギルドへと向かう。ギルド前は庇護を求め、住人達と情報を求めて出入りする冒険者でごった返していた。人混みをかき分け建物に入ったミケは受付で忙しく対応する彼女の姿を確認した。

「カタリナ！」

ミケの呼びかけに一瞬顔を上げて答えるが、すぐに対応に戻る紫紺の髪。彼女の姿を確認したことで安堵するが、不安が鎌首をもたげてくる。

ギルドがいくら国家間に不干涉といっても町の施設の一部である。冒険者ではなく、ギルドへの攻撃は軍にとっては禁止事項だ。しかし、過去の戦闘に於いて襲撃されたことが何度かある。決意を固めたミケは義勇兵として参戦登録すべく、リスタル総督府へと足を向けた。

リスタルからの避難民に片っ端から移動系魔術を掛けていた直時は、人の波がひと段落したことで街道脇の草むらに倒れ込んだ。流石に消費魔力が追い付かなくなったようだ。荒い息をつきながら大の字になっている。

「戦争かぁ・・・」

日本では既に親の世代でさえ経験していない。歴史で習いはしたが、他界した祖父母から少し聞いたのが一番生々しい話だった。その記憶も遠い。

祖父からは満州で同僚が散髪屋で喉を掻き切られたことや、シベリア抑留での過酷な環境と捕虜の扱いの酷さを聞いた。

祖母からは危なくなつた防空壕から別の防空壕への退避中、米軍機からの機銃掃射を受けたと聞いた。

今でこそジュネーブ条約だのなんだのと言われているが、日本が経験した都市部への無差別爆撃や、原爆投下、病院船や疎開船への攻撃、狩りをするかのような機銃掃射等、軍人が民間人を殺すことに躊躇いのないことは歴史が証明している。第二次大戦下での便衣兵もテロリストの先駆けと言えるだろう。

起き上がった直時は『気』（？）の循環と魔力増量をこなしつつも思考の流れを止められない。

（この国は別に俺の祖国じゃない。相手国が憎い訳でもない。でも民間人まで標的にするのは軍人のすることじゃない。この世界でもそれが良識と思いたい。でもそれは俺の希望的観測だ。町の人達が戦域から逃げられるのなら手伝いたい）

悶々とする直時が避難民を助けるのはこの一点だけだった。軍人はそれが本意かどうかには拘わらず戦う者として定められた存在だ。自由は制限されるがその分強権が与えられている。日本は別として、地球においてはそのように認識されている。

だからこそその力をぶつける相手は同じ軍人でなくてはならない。無論直時も兵糧攻めや通商破壊の有効性を知ってはいたが、感情が許さなかつた。

（武士は農民兵を殺しても、農民は殺さない）

理想を実現する過程で実効的な作戦を取ることと、実利だけを

追求する作戦を取ることに大きな隔たりがあると考え。前者は、今日の痛みを未来に繋げられる。後者はただ今の実利のために未来へ遺恨を先送りするだけであると思えるのだ。

(ここはアースファイア。地球じゃない。日本じゃない)

『郷に入りては郷に従え』とは日本の言葉である。直時もそれは正しいと思う。

しかし、ここは地球ではない。海外であれば直時もその地の習慣を尊重し大事にしたらどう。訪れた日本人として、また日本から移住する人間として自覚をもって。

だが、ここには日本は無い。日本を知る者もない。

(でも日本人として育った俺がここにいる。国など関係無い個人として振る舞えば良いと言ったって、やっぱり俺は日本人なんだよ)

『思う通り生きれば良い』とのヴィルヘルミーネの言葉。だったら、現代を生きる日本人として、いや、自分が願って叶えられなかった日本人として振る舞うのも自由なんだと思う直時。

「専守防衛なら良いじゃないか。微力ながら助太刀する」

リスタル防衛戦に参戦を決意するが、あくまでも民間人が避難する時間稼ぎが目的だ。この国の戦争はこの国の軍隊の仕事。軍の応援が来るまでの我慢だ。それすら楽観だったと思いきるのはもう少し後のことである。

ノーシュタット方面、その延長上に首都ヴァルンがあるため、殆どの避難民はこの街道を通り、直時に魔術の補助を受けていた。

当初は補助を掛けられるために立ち止まる者を罵りながら追い抜

いていく人が数多かったが、移動系魔術を施された者達が悠々と追
い抜いて行く様を見て、皆がこぞって街道の片側に列をなした。直
時が割り込みを許さなかったのもあるが、これが混雑していた街道
の交通整理に役立った。

それまでは混乱のため、街道で荷車同士の接触事故や、人身事故
が多かった。しかし、直時が施術する間、次の者は出発できないた
め、一定の間隔で避難民が進むこととなった。しかも移動速度は段
違いである。直時が速度に不慣れな者には『推進』で左側を、高速
移動に難が無い者には『地走り』で右側を走行するよう指示したの
も良かったようだ。

速度による事故はあったが、それまで遅々とした移動にも拘わら
ず混乱の中で起こった事故よりは遙かに少なかった。

逃れる人が疎まばらになってきたのは、一応避難に区切りがついたの
だろうか？そう判断した直時はリスタルへと向かう。出会った中に
『高原の癒し水亭』のアイリス嬢、オットー氏、ミュン、そしてブ
ラニーらの顔が無かったことに不安を感じていた。

直時が到着した時にはリスタルの町は閑散としていた。門を護る
衛兵も、通りを歩く人も見る事はできなかった。退避済みなのかと
も思ったが、まずは『高原の癒し水亭』へと向かう。

「おやっさん！アイリスさん！ミュン！」
宿の入口に鍵は掛かっていなかった。扉を開けざま大声で呼んだ
が、返る声は無く人の気配もなかった。

退避済みならそれに越したことは無い。敵軍の接近に防衛を諦め
て避難したのだろうか？辺りの人気の無さに、『探知強化』を上書
きする直時。

「町の中心部にいる？」

南大通りへと戻った直時は人の気配を感じた。リスタル総督府や各ギルド支部が軒を連ねている場所だ。とりあえず冒険者ギルドへと急ぐ。

「なんだ……。これ？」

直時は茫然と呟く。予想より多くの人が残っていた。中央広場前は災害時の避難所の様相だった。臨時の露店が軒を連ね、炊き出しを並んだ人達に手渡している。毛布や衣類を配給している。国軍の守備兵がところどころで槍を手に立っている……。

避難せず町に残った者達は、国軍や義勇兵への補給や支援活動を引き受けた民間人だった。そして、戦闘前の不安から、情報や指示が得られ易い中央広場に集まっていた。

「おう！ヒビノ！」

群衆の中から目敏く直時を見つけ、近寄って来たのはベルツ戦具店主のブラニーだった。胸から腹までを覆う金属鎧を身に付け、右手に長剣、左手に真円の小振りな盾を装備している。禿頭は兜で覆われていた。

「ブラニーさん！避難しなかったんですか？」

「俺の店はここにあるからな。尤も商品は全部義勇兵やら自警団へくれてやったがよ」

片眼を瞑りながら直時に笑いかける。

「お前さんもえれえ時に戻ってきたもんだなあ。がっはっは！」

「笑いごとじゃないですよ！どうして避難しないんですか？女性や子供も残ってるじゃないですかっ！」

ブラニーにあたるのは筋違いであるが、どうしても声が荒くなってしまう。

「そうだ！『高原の癒し水亭』の皆は？」

「おやっさんとアイリス嬢ちゃんも炊き出ししてる。ミュンも手伝ってたな」

「やっぱり避難してなかったのか・・・」

「ここは俺達の町だ。俺達が守らなくてどうする？それに関係ない冒険者達も手助けしてくれるんだから、そいつらの飯を用意するのは礼義つてもんだろ」

「国軍はっ？増援はまだなんですか？」

「増援は知らん。駐留軍は敵より少ないからな。まともに防衛線を構築できんからと遊撃に出てる」

「義勇軍は？戦力はどれくらいなんですか？」

「そんなに矢継ぎ早に聞くなよ。俺だって全部把握してる訳じゃないんだぜ？」

直時の剣幕に押されブラニーが慌てて一步下がる。我に返った直時はブラニーに謝る。

「すみません・・・。ギルドに行って情報聞いてきます」

「おう！・・・。ところでこの時期にリスタルに戻って来たってことは・・・」

「微力ながらお手伝い出来る事があればと思つてです」

「義勇兵の登録ならリスタル総督府でやってる。しかしまあ、情報なら冒険者ギルドの方が早いかもしれんな」

「有難う御座います」

焦る直時の背にブラニーが声をかける。

「ヒビノ・・・。ありがとな」

突然掛けられた感謝の言葉。振り返ったのは良いが、何と云って

良いか判らない直時は少しの逡巡の後、ブラニーに正対し踵を揃え背筋を伸ばす。揃えた5指を体側から最短距離でこめかみに触れるか触れないかの距離で制止させる。上腕は水平に。僅かに掌を傾ける。

異国の敬礼に対して、ブラニーは胸の正面に剣を垂直に立てて応える。軽く頷き合った二人は同時に礼を解き、それぞれの往くべき場所へと向きを変えた。

国は違えども、二人には共通の思いが確認できていた。

『護る』と……。

侵略？（後書き）

ブラニーさんは自警団として町に残っています。

侵略？（前書き）

大規模な戦闘を書くスキルが無い・・・

侵略？

直時が冒険者ギルドリスタル支部へと足を踏み入れた時、会館内は大混乱だった。

受付前は、ギルドへの庇護を求める者でごった返し、怒声や金切り声が飛び交ってていた。財産を捨て切れなかった貴族や豪商。子供を抱えた親。泣き喚く幼子。

冒険者の姿は少ないが、慌ただしく2階から駆け下りてくる者が何人かいる。直時は受付を諦め、2階に行ってみることにした。

いつもならクエストの依頼が貼り付けてある掲示板には、リスタル周辺の地図が数枚、敵軍の規模、編成等が書きこまれ、時系列に沿って更新されている。その前では革鎧姿の翼人族の男性とローブを深く被った魔術師が意見を交わしていた。

「・・・リスタルへの救援はなさそうだね」

「シーイス公国の戦力では補給がしつかりしたノーシュタットを背後に陣を敷いた方が良いだろうって」

「低い石壁がある街中に籠った方が良くはないかい？」

「軍が展開するには狭いじゃろ。それより予備の伏兵を置いておるのではないか？」

「空中騎兵团だね。あそこの団長の乗騎って雪竜だったなあ」

「白乙女山地一帯を侵さないという契約で雪竜一族から若い竜が何頭か来ておるはずじゃ」

「彼等ならリスタルまで直ぐじゃないか？」

「敵の空中騎兵は殲滅出来るじやろうが、後が続かんよ。援護も何も無しに虎の子を出撃させるはずもなかるう」

緊張感が無いのは彼等が義勇兵として参戦するつもりが無いからだ。直時は二人の会話に聞き耳を立てつつ、今しがたギルド職員が貼り出した最新の戦況図を眺めた。

(リスタル駐留軍500は遊撃。流石に場所までは描いてない。冒険者義勇軍約300はPTパーティーごとに散ってる。ゲリラ的な攻撃するか?それとも、集団戦闘には慣れて無いのかな?国民義勇軍は町の防備に1000か……。一般人だから戦闘力としては数にいれられないだろう。敵軍は……)

「いつ?いちまんにせんつ?」

思わず大声を出してしまった。先程の二人が吃驚して直時の方を見る。

「はっはっは。驚いたようだね。どうやらヴァロアは本気みたいだよ?」

翼人族の青年が背の白い羽毛に覆われた翼と肩を竦める。お手上げだ。と表している。

「ヴァロア軍が来るのは進軍速度から見て明日の正午あたりだね。空中騎兵はそれより早く手を出してくるだろうから、逃げるのなら今日中だよ?」

「それに見てみなさい。シーイスはやはりノーシュタット近くに陣を敷くようじゃ」

魔術師の指が戦況図を示す。

新たに書き加えられた情報がある。シーイス公国が防衛の陣をノーシュタットの南西に敷いた事が、ノーシュタット支部からの報告

で判ったからだ。リスタルは切り捨てられたことになる。

「リスタル総督府が早う決断せんと、酷いことになるな」
魔術師の言葉に直時の背筋が凍えた。

ノーシュタットからの情報と、有志の冒険者が偵察してきた敵軍情報を手に、ギルドの支部局長がリスタル総督府で説得にあたっていた。内容は全住民の避難撤退、もしくは降伏である。援軍は無く、戦力差が開き過ぎている。正直どうしようもなかった。

「……手は無いのだな。リスタルは放棄する。総督府全職員は住民に決定を通知。即時、ノーシュタットへの避難誘導を行え。移動魔術の無料転写と冒険者義勇兵へ魔術支援の要請をしる。敵は眼の前だ。本日中に撤退だ。駐留軍にもその旨を遠話で連絡。本格攻勢はせず、時間稼ぎの牽制だけで良い。被害を最小限に押さえさせる」

侍従官（秘書のようなもの）達が走りだすのを見ながら、沈痛な顔のリスタル総督へとギルド支部局長が口を開く。

「総督。牽制だけでも彼等だけでは……」

「判っている。特に機動力があるわけではない小勢だ。牽制でも一当てすれば揉み潰されてしまうだろう。だからと言って玉砕させる訳にはいかん。それでは一瞬で終わりだ。時間稼ぎにもならん。逃げが前提ならば敵の一部でも引き付けられるかもしれん。そうならば儲けものと考えるしかない」

「お察し致します」

「同情はいらん。それより冒険者義勇兵は撤退を聞いても残ってくれるのか？出来れば避難民の殿しんがりを頼みたい」

「正直半分というところですか……。気分屋が多いですから、シイスがリスタルを見捨てる判断をしたということは面白くないでしょう。御存知のように冒険者は軍のように統率が取れた戦闘には不向きです。殿軍として機能するかどうかは微妙ですな。足止めのための攪乱であれば町に侵入した後、陣形を保てないリスタル町中での戦闘ならお役に立てるでしょう」

「期待させてもらおう」

「冒険者義勇軍への連絡はこちらから致しましょうか？」

「いや。情報は一元化させておきたい。義勇兵のとりまとめはこちらでさせてもらう」

リスタル総督としては国民を逃がすための盾として利用したい。しかし、それを許す程ギルドはほんくらではない。

「指揮に口を出すつもりはありませんが、撤退の決定は連絡させてもらいます。この情報が遅れるようであれば、残る数は更に減ってしまいますよ？土壇場で離脱されては……」

「……よからう。が、以後の指揮はこちらで取る」

「依存ありません。それでは私はギルドへ戻らせて頂きます」

踵を返す支部局長とリスタル総督の視線が合う。

「健闘を願う」

「お互いに」

閉まった扉の音を聞き、ひとつ溜息を吐いたリスタル総督は侍従官を呼んだ。

直時はギルドで聞いたばかりの情報から、リスタルから民間人の避難を最優先にと思っていた。総督府の義勇兵受付へと足を運ぶものの、国民でも無く、冒険者として有名であるわけでもない一個人

の意見など聞く者もないだろうことも判っていた。

（落ち着け！俺が判断するようなことより、総督府やギルドの上役の方が現状の把握や判断は確かなはずだ）

避難をしていない民間人が多過ぎて、実情を暴露してもパニックが広がるだけだと判断した直時は、義勇兵の登録だけを済ませようと思っていた。

直時が人を避けつつ総督府前に来た時、念話と拡声の術式により広場はもとよりリスタル中に宣言がなされた。

「（リスタル住民へ通達します。リスタルからの避難命令が発令されました。各人は必要最低限の荷を持って東門へと向かって下さい。ノーシユタツト方向に友軍が布陣し保護をしています。尚、移動魔術の無料転写は総督府にて実施。更に、魔力に余力のある冒険者には避難民への魔術補助をお願い致します。繰り返します。）」

職員による突然の通達に固まる群衆達、次の瞬間広場は混乱の坩堝と化した。

知り合いに遠話を試みる者、自宅へと荷物を取りに走る者、家族を探して叫ぶ者。

他にやり方は無かったのか？と苛立ちつつも、魔術補助への有志として職員へ近づく直時。今、自分が出来る事は、準備が済んだ人達へ支援をして早急に送り出すことだけだと思った。

「やあ。とんだ所で顔を合わせてしまいましたね」

直時に声を掛けたのは魔術屋の若旦那だった。相変わらず人好き

のする爽やかな笑顔である。

「無料転写に協力してたんですか？」

避難民の荷物に『浮遊』、本人達に『推進』を施術しつつ答える。移動魔術に慣れていない者に、体重まで消すと逆に動き難いことは身を持って知っている。

「へそくりしてた魔石分の魔力も転写で使いきってしまいましたよ。貴方はタフですねえ」

避難の最初から魔術支援していたのを見られていたようだ。顔を隠すことも考えたが、支援活動をするのに不信感を与えるような怪しい恰好はできない。緊急時で仕方無いとはいえ、一応の言い訳を試みる直時。殆どヤケクソだ。

「実は耳の短いハーフェルフです。実戦はやったことないけど、魔力量があるのでお手伝いさせてもらってます」

「いやいや。エルフの魔力量をとくに超えていますよ。貴方何者です？」

「そんなことより、若旦那は魔力使い切ってしまったてどうするんですか？避難の準備が出来てるなら施術しますよ？」

「それは有難い。少し休んだらお願いします」

「休むより逃げる！ですよ？逃げてから充分休んでください。俺も早く逃げたいんでね」

「はっはっは。わかりました！じゃあ直ぐに準備して列に並ぶことにします。ノーシユタツトで逢いましょうー！」

「急いでください」

若旦那は出来る事はやりきった。もう避難するべきだ。直時はまだ魔力が尽きていない。実は、魔力を使った分だけ『気』（直時の中で勝手に決めた）を魔力へと変換していたためまだ余裕があった。ただ、良い意味でも悪い意味でも目立ってしまったのは否めない。

総督府の職員は邪魔をしないように声を掛けてくることは無いが、驚きながらもギルドへ確認をとっているようだった。

（鬱陶しいことになりそうだが、全ては生き残ってからだ。いざとなれば他国へ高跳びするさ！）

いざとなれば逃げの一手。戦争が頻発しているなら、間に他国ひとつでも挟めば追跡も容易ではないだろうと考えていた。

それよりも直時の眼の前には避難を待つ人の列が並び、彼等を手助けできるなら今はそれをするだけだ。

空が茜色に染まり始め、避難民の列が途絶えた。いつの間にか中央広場前は閑散としていた。直時は息を荒げながらその場へたりこむ。

「避難は、間に合った、みたいだな」

呟く直時の顔には満足感が浮かんでいた。

しかし、『アスタの闇衣』で隠蔽していたとはいえ、使用量から尋常ではない魔力量を見せつけた直時に近寄る者はいない。自称ハーフエルフの怪しい冒険者と見做されたようだ。総督府職員も残っていたギルド職員も同じだった。

「お疲れ様でした。タダトキさん。冷たいものでもどうぞ」

そんな中、直時に近付いてコップを差し出したのは、『高原の癒し水亭』のアイリスだった。中身は搾った果汁を程良く冷魔術で冷やしたものである。

「アイリスさん！何やってるんですか！避難はっ？」

跳ね起きた直時の眼には、アイリス嬢をはじめ、オットー氏、ミンオンまでいる。他にも数十人が散見できる。

「なんでまだ避難してないんですかっ！明日は敵襲なんですよっ！」
齒噛みする直時の肩にオットー氏が手を置く。

「今日の避難はこれまでらしい。夜は魔獣の闊歩で危ないからな」
「だからって、なんで最期まで残ってるんですか・・・」

「うちはこの町が出来た時からある宿屋だ。最期を見届けたかったんだ」

「おやっさんのわがままにアイリスさんやミュンを巻き込んだんですか？」

「違うんです。タダトキさん。私もこれで見納めとなるなら、最期に町を出たいと思ったのですよ」

アイリスの視線が彷徨い、ある一点を見つめる。『高原の癒し水亭』がある方向だ。

「戻ってくると言って出ていった人を10年も待った町ですから、愛着も未練もあるのですよ」

寂しそくに微笑むアイリスを憮然とした表情で睨むオットー氏。
直時はアイリスをなんとなく既婚者だと思っていたがそうではなかったようだ。

「で、ミュンはなんで？」

矛先を変えた直時はウサ耳さんへときつめの視線を向ける。

「あたし達はシーイス公国の国民ってわけじゃないから後回しになっちゃったの」

良く見れば残っている者達は獣人族がほとんどであった。リスタル総督府としては当然の判断であったのかもしれない。

「・・・ごめん」

「ヒビノさんのせいじゃないよ？」

両手を前に着き出し、勢い良く首を横に振るミュン。

「まあ、今日一番の活躍を見せてお疲れだろう！わしが最期の晚餐を馳走してやるから宿まで来い！」

「明日の朝一で避難する予定です。タダトキさんの魔術支援、宜しくお願いしますね」

「今日はあたしも給仕じゃなくて一緒に食べるうー！」

「居残り組はうちで食ってけ！ありったけの食材でもてなしてやる！」

オットー氏の言葉にその場にいた者の殆どが『高原の癒し水亭』へと押しかけた。調理の手が足りなくなり、アイリスとミュンはもとより直時までかりだされたのであった。

食堂でも厨房でも酒が交わされ、オットー氏と直時が呑みながら作った和風創作料理も美味いモノから不味いモノまで幅広く振る舞われることとなった。

その際悪乗りのままに作ろうとした爆弾卵（殻ごと魔術で加熱した）が暴発し、酒で眼の据わったアイリスとミュンからフライパンとまな板をそれぞれ頭頂部にくらって翌朝まで厨房で眠ることになった二人であった。

リスタルの町へと別れを告げるための宴は狂乱のまま幕を閉じた。しかし、翌朝の幕開けはけたたましい警報であった。

「（ヴァロア空中騎兵の攻撃！残留住民は建物から出ないように！繰り返す！）」

広域念話でリスタル中に警報が響き渡る。『高原の癒し水亭』でつぶれていた面々は、酔いが残った身体を一気に覚醒させてそれぞれが行動に移る。

迅速に動く人々の中、直時だけは床に胡坐を組み眼を閉じている。何かの儀式か術式の最中と思つたオットー達は声を掛けずに見守る。

ゆっくりと息を吸う。しばらく息を止め、肺の空気を残らず吐く。ゆっくりとそれを繰り返す。

『気』は尾？骨の先から背骨に沿って緩やかに螺旋を描き、肩甲骨の間を抜け、首の後ろから頭頂へと上りつめる。次に身体の前を眉間、喉と下りる。喉を抜けた流れは心臓、鳩尾、臍の下へと巡る。下腹部で少し留まり、また尾？骨へと巡って行く。

繰り返すうち、流れは太くなり全身へと満ちていく。下腹部に留まる量が急増して溢れ出しそうだ。それを魔力へと重ね合わせるように変質させていく。

しばらくして眼を開き立ち上がった直時には酔いの痕跡は無かつた。誰にも気付かれていないが魔力量もこれまでにないほど身に満たしてある。今日、精霊術を全力で使つても大丈夫だろう。

「皆さんは中央広場へ。空中騎兵は排除します。一刻も早く避難してください」

「他の冒険者と連携取らないとヤバイだろう」

「登録が遅くて義勇兵登録してなかつたんですよ。PTも組めてません」

オットー氏の懸念に苦笑で答える直時。武器を床に置いたまま自身だけに『浮遊』を掛ける。そのままの重さの武器を装着し、他の荷物はその場に残す。

「荷物はここに置かせてもらいますね。じゃあ行ってきます」

「行くつて何処へ？」

問いかけたオットーに人差し指を上に向ける。

「空へ」

そう言つて宿の外に出た直時の周囲に風が集まり、宙へと連れ去つて行く。

「まさか……。精霊術師だったのか？」

啞然と見送るオットーを促すようにアイリスが肩に手を置いた。

厨房から長年使い続けて細くなつた包丁一本だけを布に包んで持ちだした。

「リスタルへの別れは昨日済ませた！皆！尻けつまくつて逃げるぞ！」

宿の中へ蛮声を轟かせたオットーは酔いどれ共を引き連れて総督府前、中央広場へと走り出した。

「視得ざるを視 聞こえぬを聞き 触れ得ぬものに触れよ 『探知強化』！」

リスタルの町の上を真っ直ぐに上昇しながら直時は感覚の強化を図る。突然現れた飛翔体に慌てるヴァロア空中騎兵团であったが、単身の、それも騎乗もしていない普人族と見て追撃してくる。

「一気に突つ切つたからこれより上に敵は……。いないな。敵の数は……。50いや55。やたらとでっかいカラスに乗ってやがる。まあ、クエスト初日に出合つた鷲に較べたら小さい。それにしても

寒い！」

高空へと舞い上がった直時を低気温が締め付ける。上を取られたことで動揺が見られた敵騎であったが、それもすぐに収まり上昇して追いかけてきた。

追いつくかどうかという距離を保ったまま飛び回る直時だが、連携しているのか何騎かに進行方向へと回り込まれてしまう。忽ち黒い翼に囲まれた。

（攻撃はやはり魔術だろうか？でもこれだけ動きまわる的に狙いを絞るのは困難なはず。範囲攻撃でもカバーしきれないだろう）

風を撓めた状態で敵の出方を見る直時。

隊長らしき一際立派な鎧を着た人物が何か命令を下す。攻撃の合図であることは判った。滞空しつつ風の精霊に語りかける。

数騎が更に上空へと駆け上がり、騎獣である軀大鳥が爪を立てて襲いかかってくる。更に左右からは鞍から外した長槍を小脇に突撃してきた。

直時は身体を倒し頭を下に垂直降下。耳元で風が唸る。爪を立てていた敵騎は翼を畳んで追撃降下。武器は嘴へと変更。背の騎士は必死にしがみついている。

それまで待機していた10騎程が直時に合わせて周囲を降下しつつ魔法陣を編む。逃走方向を絞ったところで魔術攻撃。炎弾と氷槍が放たれる。直時の強化された感覚が察知。回避のため螺旋降下。同時に精霊術で気流を乱し炎弾と氷槍を逸らせる。風の精霊に加速要請。追撃を引き剥がす。敵騎が追撃を諦め減速。直時は速度をそのままに下降から上昇へ。敵を眼の端に収めつつ距離をとったまま

同高度へ復帰。再び相對する。今度は囲まれていない。

「騎獣も騎士も直接攻撃してくるか……。そして、追い込んで魔術攻撃。複数で単騎を攻撃するなら効果的と認める。巴戦でもおそろく乗騎の爪や嘴は有効だろう。でも空を飛ぶものが相手なら、風の精霊を敵に回して無事でいられると思うなよ」

風の精霊に軽い乱気流を起こさせる。敵騎達は慌てて羽ばたきを繰り返し、自分の位置を確保するのに必死だ。

足元に小さくなったりスタルの町を一瞥し、直時は風の精霊に意思を伝える。明確な殺意を。

「風の刃よ 切り裂け！」

放たれた複数のカマイタチは回避する間も与えず騎獣と騎兵を寸断した。本当の軀むくろと化した大鳥とヴァロア兵が落下を始める。

叩きつけられたそれらは原型も残さず潰れ、飛び散る。そこへ上空から血の雨が降り注ぎ、大地を真っ赤に染めた。

ヴァロア侵攻軍司令部では、先行した空中騎兵からの最後の念話にリスタル侵攻へ新たな懸念が検討されていた。

（ 敵に風の精霊術師と思しき者あり。単身につき交戦に入る
それが最期の交信であった。威力偵察の55騎全てが未帰還。

「敵に風の精霊術師がいるのであれば、威力偵察は中止。空中騎兵は後方に下げた方が無難です。相性が悪すぎます」

参謀の言葉に司令が唸る。

「本隊周辺の哨戒を残し、他の空中騎兵は後方で待機。突撃の時期は追って命ずる。本隊はこのまま行軍隊形で移動。リスタル5キロ前で戦闘隊形に移行。攻撃に移る」

司令の命令を連絡兵が遠話で各大隊へと伝える。

「但し、総攻撃時には空中騎兵も投入する。厄介な相手だが、それ故、数で押し切っても始末しておきたい」

参謀も異論はないようで、軽く頭を下げて一歩下がった。

「哨戒08より遠話。リスタル駐留軍と思われる部隊が本隊後方へと移動中。歩兵400騎兵100。乗騎は小型の草蜥蜴くさどかげ。騎兵は少数に別れて歩兵前面に散っています」

連絡兵の一人から報告があがる。

草蜥蜴くさどかげは草原に生息する比較的飼い慣らし易い魔獣で、太い後脚と尾でバランスを取りながら2本足で疾走する。体高約2・5メートルのこの魔獣をリスタル駐留軍騎兵隊では採用していた。司令が参謀へと眼を向ける。

「足止めでしょう。狙いは補助部隊と思われる。小勢ですし、後方移動中の空中騎兵で一撃すれば事足りるでしょう」

「移動中の騎数は？」

「上空哨戒に30騎割いておりますから、415騎です」

「編隊を組ませて攻撃させる。ばらばらに突っ込まないよう念を押せ」

「了解しました。連絡兵！発、司令部。宛、空中騎兵团団長」
「当該部隊へ命令を通達する参謀を眺めながら、敵の精霊術師のことが司令の頭を過ぎる。それでも自軍の勝利は疑いようもなかった。」

侵略？（後書き）

空中戦つぼく・・・思っていただけなら幸いです。

侵略？（前書き）

序盤説明が続きます。不快な方は飛ばしてください。
後半グロい描写があります。苦手な方は飛ばしてください。

侵略？

リスタル駐留軍の遊撃は失敗した。後方部隊への奇襲を企図したものの、ヴァロア軍の空中騎兵による攻撃に壊滅したのである。

反撃されにくい空中からの遠距離攻撃魔術が歩兵部隊へと降り注ぎ、防御魔術で対抗するも徐々に数を減らされた。風系攻撃魔術や『推進』を施した矢で弾幕を張るが、高速移動する敵騎に殆ど効果はなかった。

歩兵部隊が隊形を維持できなくなる寸前、獅子胴鷲しじゅうの編隊が降下突入し、強靱な爪でシーイス軍の兵を蹂躪つみつぶした。

地上に降りた空中騎兵に、周囲へ散つていたシーイス騎兵が突撃を敢行するも、空中からの援護攻撃、乗騎の魔獣の力の差から軽微な損害を相手に与えただけだった。

この戦闘においてリスタル駐留軍は数騎の騎兵が逃れただけで、残りは全滅。対するヴァロア軍は獅子胴鷲しじゅう隊6騎が負傷、翼蜥蜴隊つばさとかげ2騎が喪失（対空射撃で翼の被膜を破られ墜落）、5騎が負傷、大鳥隊ろおおからす8騎が負傷であった。

なお負傷した騎獣、騎兵の半数は後方で治癒を受け復帰可能であった。

リスタル西部に展開中のヴァロア侵攻軍1万2千の編成が、冒険者の隠密偵察により明らかになった。

正面に布陣するのは全身を厚い鎧で固めた重装歩兵3000。武

器は長大な槍である。穂先の下には叩き潰すための分厚い斧の刃や、尖った鎚つちが付いている。普人族では扱えない重量であるが、今は『浮遊』が掛かっている。振り下ろす瞬間に解除するのだ。

両翼には胸甲と兜に短槍を携えた突撃軽装歩兵1000。盾と剣を装備している者もいる。移動魔術による高速移動で戦地を駆る。陸騎兵に次ぐ機動力を誇る。

重装歩兵の背後には遠距離攻撃を得意とする攻性魔術師隊500と、矢に様々な付与魔術を施す弓兵隊500。

陸騎兵隊2000は騎獣の種類みつまたくろさいごとに500ずつ両翼と後背に展開。両翼は突破力を重視した三叉黒犀隊かぶとこかけと兜蜥蜴隊。本隊後方には機動力を重視した一角馬隊いっかくばと八脚馬隊はっきゃくばが突撃を待つ。

補術兵1000は本陣前に軽装で待機し、要請次第で様々な支援魔術を掛けることになる。治療術もこの部隊が担っている。

その他に本陣を守る司令部付が500。後方から離陸し、上空に編隊を組む空中騎兵500（直時との戦闘とリスタル駐留軍との交戦で戦力を減じ、出撃騎数は350。残りは予備）。

特筆されるのが従兵と呼ばれる10代を少し過ぎたばかりの少年兵が2000もいたことだ。彼等は薄い革鎧姿で短い剣を腰に吊るし、前衛の重装歩兵に付き従っていた。彼等の役目は転写により刷り込まれた魔術をひたすら行使することのみである。重装歩兵の振るう武器への『浮遊』とその解除である。

ヴァロアでは高価な魔石より安易に入手できる魔力源として、国民の三男以降の男子を12歳で徴兵していた。戦地に送られた従兵は使い潰されるのが通例であり、同規模の軍との会戦において生還

率は1割を切った。

最後に輜重兵1000。兵や騎獣に必要な兵糧、替えの武器防具、各部隊ごとに管理される魔石（溜めた魔力は本人しか使用できないため、戦死者の出にくい攻性魔術師、弓兵、補術兵のための物が殆ど）の管理と配布、物資の輸送を行う。

以上がリスタル前に展開中のヴァロア軍の編成だった。対するリスタル側には町中に潜んでいる冒険者義勇軍が約200名。

リスタルからの撤退を聞き、義勇兵登録を解消した者は100。ギルド支部局長の予想より残った数は少し多かったが、較べるのもおこがましい戦力差であった。

侵攻を直前にした総督府前では騒動が持ち上がっていた。時間切れで翌日避難に回された住人が集まったのだが、職員数人が残っているだけで総督府は空になっていたのだった。

「つまり昨日の日没後に総督をはじめ、殆どの職員はリスタルを脱出したということですか？」

吊るし上げる皆を宥めたギルド支部局長が、咳き込む総督府職員に問いかける。

「・・・そうです。国民がほぼ脱出したからには、多くの避難民を指揮しなければならぬと・・・」

悔しさに涙を滲ませている若者は、怒りに拳を震わせていた。それでも残ったということは職責を全うしようとしたに違いない。

「では、最期の撤退は冒険者ギルド、リスタル支部が指揮をとりま

しよう。最期の抵抗が冒険者であるならギルドも無事では済まない。共に避難しましょう。ギルド職員に通達！住人の全てを引き連れて撤退します！」

支部局長の宣言にギルド職員が慌ただしく駆け出す。

リスタルに取り残されていたのは、住人237名。国民義勇兵78名。ギルド職員54名。総督府職員6名だった。『高原の癒し水亭』の面々に加え、ブラニーの顔も見える。僅かに残った国民義勇兵の中にいたのだ。

「まだいたんですかっ！早く避難してください！」

威力偵察の空中騎兵を退けた直時が駆けてくる。最期の確認と思つて様子見に戻つてみたのだが、まだ出発していないことにイラつきを隠せない。

「あ！タッチイー！」

紫紺の髪的女性と話をしていたミケが手を振る。

「ミケさんっ！避難だつて！」

「うちらはここで足止めニヤ。タッチイーは聞いてないニヤ？」

「義勇兵登録し損なつてたんで詳しい話は知らない」

ミケに走り寄つた直時は、冒険者義勇兵が町でゲリラ戦を仕掛けて時間稼ぎをすると聞かされた。

何人かの冒険者がギルド職員と打ち合わせをしている。逃げた総督の指示は無視するようだ。足止めの時間と撤退のタイミングを確認していた。

「ヒビノ君だったね。昨日からの魔術支援の連続を感謝します。無茶なお願いだとは重々承知の上なのだが、彼等にも魔術支援をお願

いできないだろうか？残った者全てに施術する魔力が不足しているのだ」

「貴方は？」

「冒険者ギルドリスタル支部局長を任じられているエドモンド・オルグレンと言います。君には余計なクエストで迷惑をおかけした。申し訳ない」

「今はいいです。それより準備が終わった人から並ぶよう指示してください。『浮遊』と『推進』を掛けます。自分で掛けられる人はすぐにノーシユタットに向かってください」

「有難う。恩に着る。それと、クエストの完遂はミケラ嬢から確認しています。報酬は今は無理ですが、どこのギルドでも受け取れるよう手配いたします」

エドモンドが直時に深々と頭を下げる。直時は彼が余計なことをしてくれた張本人と判って複雑な表情だ。姑息な工作をする割に、非常時には堂々としている。乱に生きる人物なのだろうか？

直時から離れたエドモンドは紫紺の髪的女性職員をともなって指しを飛ばしはじめ。ミケが言うには彼女がミケの恩人で、カタリナ・ベルティと言うそうだ。

「それよりヴァロア軍の最新情報があるニヤ。転写するけどいいかニヤ？」

「有難う。宜しく頼む」

直時とミケの頭上に魔法陣が描かれ、ミケが把握している敵情報と冒険者義勇兵の作戦の詳細が、魔法陣を通じて直時の脳裡に焼きつけられる。

（圧倒的な戦力差だな。奇襲をしても開けた場所じゃ自殺と同じか。確かにリスタルへ誘い込んで隊列を維持できないところを攻撃するしかないな。・・・それにしても使い捨ての少年兵か・・・

魔石の代わりだと?)

転写された内容と転写の影響が相まって頭痛が増す。

「タツチイー、PTに入っていないなら『遠話』の設定しておくニヤ」
「俺、その魔術持つてない」

「今はうちから設定しとくから大丈夫。我が声と汝が耳 汝が
声と我が耳を繋ぐ 『遠話』」

転写の魔法陣より小さい魔法陣が直時とミケの頭上に現れて消えた。一瞬であったが忘れないよう記憶に刻みつける直時。

(あーあー。聞こえるかニヤ?)

眼の前のミケが声を発しないで問いかける。

(こちらタダトキ。ちゃんと聞こえるよ。それにしても声が聞こえないのに声の質?みたいな特徴も念話に混じるんだね。ミケさんっばい念だわ)

(ふふふ。じゃあうちは持ち場に戻るニヤ)

(気を付けて!)

直時は、音も無く駆け出すミケの背に無言で手を振る。

離れた所から直時を呼ぶ声がする。準備が出来たようだ。魔術支援をするべく、並び始めた列の先頭へと向かう。

「支援をもらった人はすぐ東門からノーシュタットへ出発してくださいー!」

「次の人!荷物はそこに!『浮遊』を掛けます。終わったら荷物をもってください!『推進』!」

「荷物は最小限です!大きな荷物は置いていってもらいます!」

ギルド職員と直時が声高に指示を出し、身軽になった者から順に走り出していく。

「上空！敵空中騎兵多数！」

悲鳴のように報告が叫ばれる。

遂に攻撃が始まった。残りは数人の住人と殿しんがりを買って出た国民義勇兵、それとギルドと総督府職員だ。

（間に合わなかった！いや、まだだ！）

焦る心を無理矢理抑えつけながら、直時は魔法陣を編む。残った人達を囲むように数十の魔法陣が出現する。

「土は石に 石は岩に 『岩盾』がんじゆん！連結！」

魔法陣を改造するのではなく、使用法をアレンジする。

地面から並んで生えた五角形の岩壁。その岩壁に被さる様に次の岩壁が生えていく。瞬く間に岩のドームを形作り、避難を待つ人々をその中に包み込んだ。出入口は3方向に開いている。

「上空からの攻撃にはとりあえずこれで大丈夫！支援がいる人はこつちに！自分で掛けられる人は少し離れて準備して！」

啞然と口を開けた人々の反応を敢えて無視し、大声で指示する直時。殿しんがりを買って出るだけあって、国民義勇兵の殆どは自力で移動魔術等を掛けはじめた。

突然現れた岩のドームに驚愕したのはヴァロアの空中騎兵も同じだった。高度を保ち、警戒しながら攻撃魔術を放つ。

ズズウン

直撃するが、炎の矢も氷の槍も雷の刃も岩の盾を崩すことはできなかった。

侵攻軍の空中騎兵の中では一番頑健なのが獅子胸鷲部隊である。
反撃が予想される中、先程の波状攻撃より更に高度を下げ、魔術攻撃を試みる。それでも攻撃が通らない。

地上部隊が町に侵入をはじめたと念話で聞いた部隊長は、岩のドーム入口から直接攻撃するべく部下へ念話。低空へと降下姿勢を取ろうとした矢先に地上から高速で射出される小さな影を捉えた。直時だった。

「全員準備は終わりましたね？離脱の援護をします。ブラニーさん、後詰宜しく！空中騎兵は叩き落としますから、脱出の機会を逃さないように！」

人々を一通り眺めた直時は出入り口のひとつへ駆け出した。

（ミケさん、こちらタダトキ。避難を援護するため、空中騎兵を迎撃する）

（こちらミケ。私達も接敵した。地上部隊への迎撃を開始。お互い無事で再会しましょう）

（俺は他PTと連携できない。単独で動く。撤退時期だけ教えて）

（了解。タダトキさん、一言だけ聞いて！考えて戦えないなら、反射的に動いて！絶対に躊躇わないように！留まらないように！）

（了解！じゃあ後で！）

直時はミケとの念話を打ち切り、風を集めて空へと飛び出した。

降下姿勢を取ろうとしていた獅子胸鷲隊の編隊にすれ違いざま力マイタチを放つ。翼や手足を切断されて、5騎が血飛沫を上げて墜落する。上昇しながら右手の2編隊の動きを竜巻で封じる。

周囲を警戒しながら、竜巻に捕えた敵編隊を盾に回り込む。風の

檻と化したそれを地面に向けて加速させ、石畳に叩きつける。砕け散った騎獣と騎兵の血肉が赤い花を咲かせた。

本気モードのミケの忠告のまま、高速で移動を繰り返す。右旋回、左旋回、急上昇、加速しながら緩降下。攻撃を防ぐため常に周囲の風を乱しながら飛行する直時。

（大きな術を放つには間合いを把握しないと俺には出来ない。でも足を止める事になる。このまま動き続けて、俺が掴める間合いに入った敵を攻撃するしかない）

爪を立てた翼蜥蜴が左右入れ違いに襲いかかってくる。錐揉みと風の壁で避けつつ、すれ違う瞬間にカマイタチを放つ。3騎が墜ちるが、2騎は掠っただけで逃してしまった。

リスタルへと全軍を上げて侵入したが、抵抗の少なさに怪訝な様子のヴァロア本陣。午前の威力偵察が全滅したことも影響して、激しい抵抗が予想されていたからだ。

打撃部隊とは別の哨戒空中騎兵の報告によれば、リスタル総督府は町を放棄したようで、僅かな集団が町の中央広場で確認された他は、町に人の気配は皆無とのことだった。

「早々に尻尾を巻いて逃げよったかっ！腰抜け共めっ。楽しみが減ったわ！」

不機嫌な司令を他所に、参謀はあまりにも鮮やかな撤退に内心舌を巻いていた。しかし、リスタルの占領が楽になったことは参謀にとっては何の犠牲でもなかった。戦力を温存したままならば、本国のロツソ侵攻軍の囷という危険な任務も安全性が増す。安堵の息を吐こうとした矢先、連絡兵が身を強張らせた。

ヴァロア軍本陣に精霊術師見ゆとの報告が入った。

「囲んで殺せ。予備も投入しろ」
司令は短い命令を発した。

命令を達せられ、リスタルの空に散っていた空中騎兵が直時一人に群がった。四方八方どころか、全周からの攻撃だ。

「航空戦力が全部狙ってきてるの catt?」

加速した直時は追撃を振り切って、前方を囲もうとする敵騎の間へと強引に身を捻じ込んでいく。

襲う騎獣の爪から逃れた直時を騎兵の長槍が襲う。近過ぎて避け切れないと判断。手にした槍の柄で敵騎兵の穂先を擦りながら捌く。すれ違いの瞬間、切っ先の狙いを相手の喉へ。両手に激しい衝撃の後、荷重がかかるのを無視して包囲を突破。

編隊へ接近した際、周囲へ風の刃をばらまくのも忘れない。狙いをつける余裕などない盲撃ちだったが、数騎が被弾して血飛沫を飛ばす。

離れたところで槍先に刺さったままの騎兵を投げ捨てる。直時の身は返り血に染まった。

「風の精霊よ！もつと速く！」

直時の望みを精霊達が叶える。前方の気は道を開け、身体を運ぶ風は勢いを増す。追いつける敵騎は既におらず、前方へ回り込むにも速度差があり過ぎてタイミングを掴めない。

ヴァロア軍空中騎兵団は、周囲を高速で移動する直時へ散発的な攻撃魔術を放つ以外に何も出来ず空中を右往左往しはじめた。

(対峙したら負けだ。動き回って1対少数に持ちこまない！)

数で包囲されかけていた直時は、逆に速度で空中騎兵団をリストル上空へと釘付けにする。その様子は狩る者と狩られる者、大きさは全く逆であるが、鰯の群れを逃さずに周囲を泳ぐ海豚イルカの狩りのようであった。

直時が空に描く輪が徐々に小さくなり、次第に敵騎を掠めるように飛ぶ。その都度接近された敵騎が2騎、3騎と散っていく。

数を恃たのんで優位に立っていた筈が、劣勢に追い込まれたヴァロア空中騎兵団長は、焦りから機動性を無視した陣形を組む。

球形陣。その場で騎位を保ちながら球形に密集。背中を突き合わせ全騎が外側を向く。指揮官の命令の下、統率された一斉攻撃魔術が放たれた。全周に散っていく火炎や、氷槍、雷矢。陽の下であったにもかかわらず、リスタルの空は鮮やかな花火が咲いたようだった。

直時は一斉に現れた魔法陣を見て、空中に描く円の径を大きくとった。次の瞬間ばらまかれる攻撃魔術。放射状に放たれた様々な攻撃魔術は、射程を超えると途端に減衰、消滅するか、失速して落下していく。

次の攻撃魔術を放つ暇を、直時は与えるつもりはなかった。

「都合良く固まってくれたか。済まないが、終りだ」

弧を描く軌道を鋭角に切り、敵騎が集まる球形陣に突っ込む。接近することで精霊術の間合いを把握した直時は、垂直方向に進路を取り急制動をかけ宙に留まった。

「風の渦よ 我に仇なす輩の監獄となせ！」

直時の魔力を大量に消費しつつ、風の精霊達が巨大な竜巻でヴァロア空中騎兵団の全てを包む。中心部は無風であったが、慌てた数騎が脱出を試みて猛烈な風の壁に内側へと弾き飛ばされる。逃げる

事は不可能だった。

今まで咄嗟の攻撃で相手を殺してきた直時だったが、逃げる事も出来ず捕えられた敵を一方的に殺すことに、一瞬だけ深い罪悪感を覚えた。

「今更だな。……風の刃よ 全てを切り裂け！」

自嘲に歪んだ顔が、殺意に引き締まる。風の精霊に命じたのは、渦の中の存在を切断すること。切り刻むこと。

精霊達は忠実にそれを実行した。風の渦は瞬く間に血の渦へと変わった。

直時はその血肉で出来た赤い渦を、リスタル上空で解くことはなかった。空中を移動させたそれを、リスタルに侵入しつつあるヴァロア軍の真上で弾けさせた。

（制空権を失った事実を知らしめてやれば、地上軍は動揺するはず。数の上では大した損害じゃないけど、利用させてもらおう！）

気の利いた威嚇的な台詞が言えれば良かったのだが、生憎と直時にそのようなスキルは皆無である。前衛部隊へ空中騎兵の血と肉片を振り撒いたあと、返り血で染まった全身を敵前の空中へ晒し、傲然と睥睨するだけで精いっぱいだった。

味方の血によって、直時以上に赤く全身を染めたヴァロア軍前衛部隊の一部。驚愕と恐怖がその眼に移るのを確認した直時は、血飛沫を被らず未だ戦意に満ちた部隊へと大きく槍を振りかざして見せた。

「風の精霊 水の精霊 切り裂き 吹き飛ばし 呑み込み 砕け」
風の精霊がカマイタチを纏った竜巻を作りだし、水の精霊が周辺から水を呼びその竜巻に合流する。風の刃と水の激流の化身となった竜巻が、直時が向けた槍の切っ先方向へと奔る^{ほとばし}。

重装歩兵の分厚い金属鎧も、咄嗟に出した防御用魔術も何ほどの抵抗にもならなかった。彼等が踏みしめた大地ごと切り刻まれ、砕かれた。後に残ったのは辛うじて人体の一部だと判る残骸と、防具の部品が幾つかと、血の泥濘だった。瞬く間に100人程の命が潰えたのである。

乾きはじめて返り血で赤黒く斑^{まだら}に染まって判らなかったが、直時の顔からは血の気が音を立てて引き、唇は真っ青になっていた。

立ち込める血の臭い。それだけではない。人と騎獣の糞尿、腸^{はらわ}の生臭さ、内臓が分泌していた体液の鼻を刺す臭い……。狩りの後の腑分けとは全く違う酸鼻極まる臭気。そしてそれを現出したのが紛れもない自分であること。

この地獄を生み出したのが直時自身の意思であること。誰かからの命令でもなく、依頼でもなく、直時個人の考えを実行した結果であることに全身が震えだす。訳もなく叫び声を上げたくなつたが堪えた。

(まだまだ！まだ終わってない！)

力を入れ過ぎ、槍を握りしめる指が真っ白になる。

眼を背けそうになる惨劇を意識して視界から外さない。しかし、そこに映った光景が直時の精神を直撃した。

精霊術の範囲ぎりぎりにいたのだらう。右手と右足を失い、血と涙にまみれた少年がいた。10歳をいくつも過ぎていないように見

える。その子は突然泡を吹き、がくがくと全身を痙攣けいれんさせる。次の瞬間身を硬直させ、眼を開いたまま動きを止めた。死んだのだ。

その子だけではない。大柄な鎧姿に混じって、多くの従兵が悲鳴をあげ、泣き喚き、力尽きていく。

直時の胃から熱いものが逆流してくる。我慢できなくなった瞬間、高度を上げリスタルの町中まちなかへと逃げるように飛ぶ。

降下、着地した直時は誰も見ていないにもかかわらず路地裏へと走り込み思い切り吐いた。昨夜の美酒、オットー氏らの手料理、自分の創作料理、全てを吐きだした。息を吸う間も無い、胃の引き攣るまま吐き続けた。

喉を焼く胃液のためか、酸欠のためか、涙と鼻水が止まらない。それ以外の理由であってはならない。吐く合間に、自分にそう言い聞かせ荒い息をつく。

胃の内容物を全て吐き切っても、まだむかつきは治まらなかった。黄色い胃液と唾液が混じって口から滴る。最後には赤いものが混じったが気にする余裕はなかった。

（タダトキさん！ギルドから撤退が通達されました！大丈夫ですか？？撤退です！）

突然ミケから遠話が届く。

（町の人達はもう大丈夫なんだね？）

情けなく息を荒げている様子を悟られずに意思疎通ができる。直時はこの魔術に感謝した。

（空中騎兵が全滅したため追撃の危険が無くなりました。タダトキさんの御蔭です。陸騎兵は町の反対側ですし、迂回しての単独行動

はないでしょう。今の距離なら避難民の安全は確保されたと判断したようです)

(そうか・・・良かった)

(冒険者義勇兵にも撤退が指示されました。離脱しましょう)

(損害は?)

聞きたくはなかったが確かめざるを得なかった。

(・・・約200名のうち、連絡がとれなくなったのが57名です)

(そうか・・・で、撤退は出来そうなの?)

(侵入したのが前衛2個大隊約1200と陸騎兵が250といったところですよ。歩兵を振りきるのに問題はありますが、陸騎兵の機動力は厄介ですよ)

(わかった。じゃあ俺はこれから敵本陣に一撃をかける)

(駄目ですよ!)

(敵航空戦力はもういない。一撃仕掛けたら直ぐに離脱する。混乱に乗じて撤退してくれ)

(タダトキさんっ!)

(ミケさんも早く撤退してよ?逃げ足は俺の方が早いからね。なんせ風の精霊術師だよ?)

(・・・くれぐれも)

(無茶も無理もしない。死にたくないからね。じゃあ、また後で!)
念話では明るく振る舞ったものの、相変わらず顔色は最悪であった。

懐から出した布切れで口元を拭いた直時は、再度風を纏まとって空へと舞い上がる。

侵略？（後書き）

力は強くても使い方は悪い。
精神力も弱い主人公。堪え切るか壊れるか……。。

侵略？（前書き）

短めです。

投稿期間をあけたくなかった。><

侵略？

リスタルでの市街戦は、ヴァロア軍にとって悪夢の連続であった。

「リスタル侵攻に際して、魔石以外の戦利品は侵攻軍の裁量に一任する」

このような裁可が下りていたことが、出征時には既に兵達の間にも知れ渡っていた。戦意高揚を目的に、司令からの指示で敢えて情報を漏洩させていた侵攻軍首脳部の仕業だった。

これまでの戦闘であれば、リスタル規模の町は灰燼に帰すことも珍しくなかったが、囷という任務、リスタルの戦力等を勘案した結果、兵の私掠ししやくを限りなく認められた形となった。

司令すら戦略目的よりもそれを重視したために、町そのものへの破壊が、最小限に留まってしまうたのは皮肉と言う外なかった。

戦利品の確保のため、町への焼き打ち等を行われなかった。敵義勇兵への注意喚起はあったものの、さしたる抵抗もなく侵入を果たしたことで、ヴァロア軍は我勝ちに商店や裕福そうな邸宅へと殺到した。

気の早い掠奪者は侵入した西門近くの商店や邸宅へ侵入していたが、より目端の利く兵達は、中央広場周辺の大店や総督府、リスタル北側の高級住宅街へと急いだ。

リスタルの町に乗り込んだ兵達に統率は無かった。

そして指揮から外れた兵達は、冒険者義勇兵の格好の標的となった。

「おいつ。ここだ！床下に隠してやがったぜ！」

「棚には碌なもんが無かったから持って逃げやがったと思ったが、そんな所に隠してあったとはな」

装飾具店へ押し入ったヴァロア兵達が、そこかしこをひっくり返している。

「こつちにも隠し戸があるぜっ？」

「早く開けるよ！」

破壊音と兵の歓声が響き渡り、品物の奪い合いが始まる。

従兵として戦闘に参加していた少年兵は、邪魔だ！との一喝で店の外へ追い出されていた。従うべき正規兵は略奪に夢中で、新しい命令は下されない。途方に暮れた様子の彼等は従兵同士で固まって、正規兵を待っている。

店の暗がりにも音も無く忍び寄る人影があった。ミケだった。

彼女は手近な影に、鋭く伸ばした爪を勢い良く突き立てた。その肘までがなんの抵抗も見せず影に吸い込まれる。

床下の商品を物色していた兵の一人が、突然体を硬直させた。暗い床下から伸びたミケの貫手が、喉を貫いていたのである。隣にいた同僚が悲鳴を上げようとしたが、出来なかった。ミケのもう片方の爪が、兵のすぐ横、壁に落ちた影から出現し喉笛を斬り裂く。興奮状態の他の兵達は二人が斃れたことに気がつかない。

ミケは闇の精霊の力で影と影を繋ぎ、姿を見せることなく攻撃し

た。『転影』と云われる闇の精霊術のひとつである。接続先の影をはつきりと視認しないと繋げないため、あまり遠距離に攻撃はできないが、広いとはいえ同じ店内ならミケの間合いである。

5人を血祭りに上げたところで、他の兵が騒ぎ出し店の外へ声を掛ける。武器を構えた兵がなだれ込んでくる前に、ミケは気配を消したまま店の裏口から脱出。その姿を誰にも見られることはなかった。

(鐘楼より報告。ヴァロア兵の先頭は西大通りを中央広場に向けて移動中。今、ライラ雑貨店の手前あたりだ。手が空いてる奴は魔術でもぶちかましてくれ)

時計台の鐘楼に陣取り、偵察を担当している冒険者から遠話が響く。登録設定していた者だけにしか届かないが、情報を聞いた者が他の者へ情報を伝える。

(近くの安下宿の裏にいる。曲射で適当にぶちこんでやる。他に攻撃出来そうな奴はタイミングを合わせる。撃つぞ？3、2、1、今だ！)

攻撃要請に応えた冒険者が、周囲に散っている者へ同時攻撃を指示した。数か所から攻撃魔術が放たれ、大きな弧を描き西大通りへと着弾する。

『炎弾』の高位魔術である『爆炎』が着弾と共に周囲へ炎の子弾を撒き散らした。身体を焼かれ、のたうちまわるヴァロア兵。周囲からは水魔術の魔法陣が編まれ、火はすぐさま消し止められる。軽傷の者はすぐに動きだし、重傷、致命傷を受けた兵はその場に捨て置かれた。

『氷槍』の多段攻撃が降り注ぐ。重装歩兵の鎧を貫通することは出来なかったが、防御力の殆ど無い装備の従兵が幼い悲鳴と共に斃れる。軽装歩兵や、騎獣から下りて(大型の騎獣は邪魔になったため)町に侵入した陸騎兵の身体にも風穴を開ける。

堅牢を誇る重装歩兵であったが、その鎧が高位魔術師の放った頭程の石弾の直撃にひしゃげる。鎧の中身も無事では済まない。

治癒魔術を施してくれる補術兵は後方だ。そこまで戻れない者は死ぬしかなかった。

しかし、死者を続出させ、姿の見えない攻撃者に慄おのきながらも、ヴァロア兵の勢いは止まらなかった。

ミケをはじめとする隠密行動を得意とする者達は、略奪に夢中となつている背後からの急襲と離脱を繰り返し、着実に滅殺と混乱を与えていった。意図的に殲滅せず、気付かれないよう一部の者だけを狙うことで同志討ちを誘う義勇兵もいた。それに容易たやすく引つかかった者が多かったのは、略奪の高揚に酔っていた兵が多かったからだった。

また、荒つぱい冒険者達は掠奪者を内包したまま、建物ごと破壊した。ある大店の奥の金庫前に殺到したヴァロア兵等は、屋敷を支える大石柱を的確に破壊して小隊ごと圧殺された。他にも商店街ごと火を掛けられ壊滅した小隊もいた。

住民の避難が完全に終わったことで、彼等が暴れまわることには遠慮は必要なかった。

それでも数的優位は揺るがない。倒しても倒しても湧き出るように増えるヴァロア兵。ゲリラ戦いえむと雖も、敵中で孤立し連絡が途絶える義勇兵が続出してきた。

兵は恐れない。いや、恐れないではない。恐怖を狂気で塗り潰し、殺意と欲望を滾たぎらせ、死ぬのは自分ではない誰かだと言い聞かせ、ひたすら進み、侵す。立ち止まることこそ死であると信じて進む。

死んだ味方の恨みをぶつけるかのように、捕捉した冒険者義勇兵への攻撃は苛烈を極めた。四肢を切断され、全身を切り刻まれ、顔は判別できないほど破壊された。

義勇兵の遺骸に残忍な満足感を得ていたヴァロア兵達の表情が凍った。彼等が絶大な信頼を寄せる空中騎兵の残骸が、町のそこかしこに落下し始めたからである。

仰ぎ見た宙空では、たった一人の敵に総攻撃をかけるヴァロア空中騎兵団の精鋭の姿があった。

リスタルでの略奪行為や義勇兵との戦闘に気を取られていて、その空中戦に眼を留めていた兵は多くはなかった。が、少なくともなかった。

「彼等は空中騎兵団が一斉魔術攻撃を全周へと放った瞬間、『勝った！』と、確信した。実際は追い詰められた末の戦術であったが、それほどその光景は圧倒的な力に満ちて見えていた。

しかし、彼等の空中騎兵団が巨大な風の渦に捕らわれ、それが次の瞬間真紅に染まったのを見て恐慌にとらわれる。

頼もしい空中騎兵がリスタルの空から消えたのだ。

受け入れがたい現実とは、前衛の損害と共に本陣へ伝えられた。

「……全滅というのは間違いないのか？」

「現在、飛行中の空中騎兵の姿がありません。落とされただけで生存している可能性はありますが、飛行可能な者の確認はできません

でした。攻撃に参加した空中騎兵は全滅です」

眉間に深く刻まれた皺を、苛立たしげに揉みほぐそうとする司令。嫌な汗が頬をつたう。虎の子の空中騎兵を失った責任、丸裸になった軍の上空、敵精霊術師の戦力、何をどう回避すれば良いのか判らなかつた。

「残った空中騎兵は哨戒に充てていた8騎だけです。制空権は完全に失ったと言つて良いでしょう」

「ならどうする？一度退くか？」

「必要ないでしょう。制空権を失つたといつても相手は単独です。町に入り込んでしまえば、上空からの攻撃も難しくなります。突入を果たした部隊はそのままリスタルを蹂躪させましょう」

「本陣はどうする？空の守りが無い」

敵として現れた精霊術師に恐怖する司令。血の気が引いている。

「突入を果たせていない重装歩兵の一部と攻性魔術師隊は本陣の守りに呼び寄せています。代わりにリスタルへは弓兵を支援攻撃に充てます。風の精霊術師ということなら、矢が武器の弓兵では本陣を守りきれないでしょう。攻性魔術師隊に迎撃を命じました。更に、補術兵部隊にはいつでも防御魔術を発動出来るよう指示。本陣の天幕には既に付与魔術を施しました」

天幕がバタバタと音を立てているのは、風の精霊術を妨害するため、同系列である風の防御魔術のせいだった。ひとつひとつの出力は弱いものの、補術兵の数にものを言わせ幾重にも重ね気流の層を作つたのだ。

冷静さを崩さない参謀の声と、万全とは言えないが、現状で望み得る限りの対策に、司令も漸く安堵の息をつく。

「敵精霊術師は空中騎兵を殲滅した後、前衛にいくらかの攻撃を加えただけでリスタルへと撤収したそうです。単独であれだけの戦闘をこなしたのです。魔力の消耗が激しいでしょう。大規模な精霊

術はもう使えますまい。おそらく市街戦を仕掛けている義勇兵と合流するのではないでしょうか」

参謀の判断に鷹揚おつように頷いて見せる司令。精霊術師に対する怯えを見せたことなど忘れたかのような落ち着き振りだ。余程安心したらしい。

しかし、その予想は直ぐに裏切られることになる。

「哨戒より報告！敵精霊術師がリスタル上空に出現。こちらに向かってくるそうです！」

直時はリスタルの町から離陸し、空を翔けた。目標はヴァロア軍本陣である。

進路上どうしても眼に入ってしまう先程の攻撃跡。未だ戦闘中であるためか、死者を収容する気配は無く、直時の攻撃で骸むくろとなった兵が放置されている。

胃液も洩れ、血を吐いたにも拘わらず、その光景に嘔吐が突き上げてくる。喉と胸を焼く感覚を無理矢理飲み込んで本陣を目指す。

ヒュンッ

掠めた矢のひとつが直時の髪を数本切り飛ばした。リスタルへ侵入しつつある部隊の支援のため移動中だった弓兵と会敵したようだ。空中騎兵を屠ったことで油断があった。防御の風を忘れていたのだ。矢が掠めたことで弓兵から次々に矢が放たれる。『推進』等移動魔術を付与された矢が

高速で迫り、その他炎や氷、風の衝撃波を伴った矢が直時を襲う。

(あの矢が当たってたら死んでた・・・)

ここは戦場だ。一瞬の油断が死に繋がる。少年兵達に死を与えたことで、心が麻痺していた直時であったが、自身の死に無頓着ではいられなかった。冷たい汗を背に流しつつ、防御の風を身体に纏う。

戦闘へと切り換えた直時は、撃ち上げられる無数の矢を風で逸らしながら、少しずつ高度を上げ弓兵の対空射撃の射程を確認する。風による矢の妨害は空中騎兵の攻撃を避けるより簡単だったため、気持ちに余裕が出来た。

(射程はかなりあるな。魔術で撃ち上げているからか？防御無しだと当たったら危険だな。でも高度とったら狙い撃ちはなさそうだ。弾幕は怖いけど・・・)

直時の速度で飛び回る標的を狙って当てるのは、弓でも魔術でも難しい。地球であれば音速を超える銃器があるが、今まで見た中で射撃という過程が必要不可欠なため、動きをとめなければ単体での攻撃は脅威とならないと判断した直時だった。無論、そこにはフィアやヒルダといった圧倒的な力を感じる、判断が不可能な存在は含まれていない。

弓兵の攻撃を抜けると、ヴァロア軍本陣の天幕が見えた。

(大きい！大人数用のテントどころじゃないぞ！)

日本で見た某サーカスの天幕ほどでないにしろ、グループ用テントの大きさを上回る。直時の目算では50人は寝られるだろう大きさであった。

本陣前面には分厚い鎧に身を固めた重装歩兵、その後に攻性魔術師と補術兵が混在して控えていた。直時の接近に、補術兵が防御魔

術を展開し始める。

風の精霊術に対するには物理強度を上げるか、風を攪乱するかのどちらか。彼等は本陣の護りを気取られないよう、前者を選択した。

土系魔術『土壘』^{どろこ}で分厚い大地の陰に隠れる前衛。中衛、後衛は『氷盾』^{ひょうじゆ}、『石壁』^{せきへき}等、生成系防御魔術を張り巡らせた。

各防御魔術と重装歩兵の盾にに護られた攻性魔術兵が、指揮官の命令のもと、直時の予想進路に攻撃魔術を一斉に放った。

侵略？（後書き）

短いのは月末仕様ということでご勘弁ください。><

侵略？（前書き）

合間に書いてたのを繋ぎ合わせて更新です。
見苦しく感じられませんかよつに><

侵略？

「ヴァロア軍攻性魔術師隊500は、各中隊約120の兵ごとに、指定された空域へと攻撃魔術の一斉射を放った。直時の進路上に少しずつ間隔のずれた攻撃が4つの範囲に撃ち上げられる。」

「速い！雷系かつ？」

魔法陣が編まれるやいなや、攻撃を予測してその身に纏^{まと}う乱気流を強くし範囲を広げた直時だったが、風の防壁をすり抜けるように雷の矢は進路を変えない。

防御が無効と判断した直時は、急いで進路を垂直にとった。攻撃を恐れたための反射的な行動であったが、それが直時を助けることとなった。

垂直方向に逃げたことで、進路を埋め尽くすかのような弾幕に突っ込むことなく、被攻撃面積を最小限に抑えられた。そして、魔術の射出速度が直時の移動速度を上回っていたが、同方向に進路を取ることで相対速度が減少し、回避の余裕を得られたのであった。

避けた雷の矢が、直時を追い越した少し先で減衰して消えた。有効射程はどうやらこのあたりのようだ。胸を撫で下ろすが、敵兵の姿は遙か下方である。未だ使いこなせていない精霊術を行使するには遠過ぎた。

「本陣を囲むように円陣か…。上空からだとも全部隊から狙われるな。」

かといつて、地上での正面突破は層が厚くなるから囲まれるのがオチか」

射程外の高空に滞空しながら少し考え込んだ直時は、一度外縁へと進路を取り再度の突入を計る。先程より高度は低い。

「風と水の精霊よ。加護を願う」

呟いた直時は風の精霊に加え水の精霊に頼むことで大気中の水を集め、真空の断層と水の紗幕しゃまくを張り巡らせた。

（雷系なら水が遮ってくれるはず！頼んだよ！精霊さんっ）

風の精霊に遠慮していたかのような、ふよふよとした水の精霊が集まり、ひらひらと舞う風の精霊と一緒に直時の周囲を舞う。

「強行突破する気か？（進路前方第3中隊、左方第1、右方第4中隊は敵前にずらせて射撃！第2中隊は扇状に射撃！）」

ヴァロア軍攻性魔術師隊の指揮官が各中隊長に遠話で命令を下す。

突入方向を改めた直時が高度を下げた侵入する。射撃角度を制限できたが有効射程内である。精霊の防御を信じないわけではなかったが、飛翔速度は先程より速く進路も細かく変更している。

いくら攪乱をしても直時の最終目標は歴然としている。本陣だ。戦慣れしているヴァロア軍の読みは正確だった。速度や進路変更に惑わされながらも、殆どの攻撃が直時の進路上に打ち上げられた。

攻性魔術師隊が放った攻撃魔術は先程と同じく『雷矢らいし』であった。単発が直撃しただけでは即死には至らないが、一人の術者が連続して3発を放てるのが迎撃戦で採用された理由であった。

5000の魔術師が放つ15000の弾幕だが、直時が纏った水膜に

触れるやいなや飛沫とともに後方へと流れていく。

「いける！」

確信した直時は回避軌道を改め、本陣へと直行する。

（止める！雷系中級以上で迎撃！）

（間に合いません！）

（撃てる者だけでいい！撃て！）

（雷系中級以上！射撃！）

指揮官の無茶な命令を下命した各中隊長の遠話に反応できたのは少数であったが、『雷剣』、『雷槍』といった攻撃力の大きな魔術が直時を襲う。

この迎撃は数が少なかったが、幸運にも直時の水の防御膜を蒸発させ貫通したものがあつた。

「ぐがつ」

本陣の天幕を目前にした直時の左わき腹を掠めた『雷槍』があつた。外傷はパーカーが少し切り裂かれ、皮膚が焼け焦げただけだったが、魔術に込められた高電圧が身体の自由を奪つた。

全身の筋肉が意思とは無関係に硬直する。痛い！激痛に意識が遠のく。精霊への意思の伝達が疎かになる。

制御不能となつた身体はその速度のままに落下をはじめ。直時の身を受け止めたのは本陣の天幕だったのは幸か不幸か…。

「なんだっ？この風の渦、不規則な気流は！」

天幕に激突する寸前、補術兵によって施された防御魔術の風に巻き込まれ、天幕表面を弾き飛ばされ、引きずりこまれ空気の渦に翻

弄される直時。

本陣を背にしたことで、全周を囲む兵も魔術攻撃が出来なくなつたようだ。直時は精霊へと治癒を願うことで感電した身体の治癒をはかる。

しかし、近接戦を選んだ重装歩兵が『地走り』等の移動系魔術で肉薄する。

「空中戦で風の精霊使いと判断されたってことか。ここは水の精霊の力を借りる！」

天幕の風の魔術に護られた結界の直ぐ横に着地した直時は右手を地面に当てる。重装歩兵の突入にはまだ間がある。

土に沁み込み蓄えられた水、近くを流れる地下水脈の水、それらを水の精霊に集めてもらう。

「地に溶け、地に溜まりし水よ。我が願いに応えよ」

イメージするのは水の渦。天幕内部を迸る奔流ほんりゅう。本陣内部は瞬く間に水の渦で満たされた。

悲鳴の泡を口から盛大に上げながら息絶えたのは、司令を始め複数の高官達と連絡兵達だった。パニックになったことで水を吸い込んでしまったらしい。

参謀や情報部員、他数名だけが本陣の生存者であった。

「戦果確認とかやってられん！逃げる！」

直時は幾つかの生者の気配を感じつつも、本陣を混乱させられたことで目的は果たした。

本陣全滅を疑った兵が攻撃してくる前にと、空へと避難する。

高速で飛翔する直時に、追撃の魔術が放たれるが、そのどれもが掠りもしなかった。

(ミケさん！ミケさん！こちらタダトキ！本陣急襲は成功！敵司令の生死は不明だけど、指揮系統は混乱してるはず！義勇兵に撤退を指示してくださいっ！)

猫耳を頭にイメージして強く念じる。

(タダトキさんっ！無事ですかっ？怪我は無いですかっ？)

ミケのクールビューティーモードが慌てた様子であったことに直時の頬が綻ぶ。

(怪我は精霊に癒してもらったよ。何の問題も無い。これから『高原の癒し水亭』に残した荷物を回収してリスタルを離脱する。ミケさんも早く退避してね)

知人の無事を確かめられたことで安堵の吐息をつく。

(リスタル内部に、かなりの侵入を許しています。くれぐれも気を付けて！)

(了解！)

ミケとの遠話を終えた直時は真っ直ぐに『高原の癒し水亭』へと空を翔ける。

ヴァロア軍は西門から中央の行政と経済の中心へと進撃していた。それとは別に、特に町の北側の高級住宅街が狙い目である。対して獣人族が多かった南地区への侵入は少なかった。しかし、皆無ではなかった。

直時は南大通りに着地し、今は無人である『高原の癒し水亭』へと向かう。その途中、『探知強化』で鋭敏化した感覚にひっかかったものがあつた。押し殺した悲鳴と苦鳴。しかも女性のそれであつた。

気配を殺して侵入した邸宅ではヴァロア兵が凌虐の最中だつた。直時が眼にした光景で真つ先に映つたのは真紅の血と切り落とされた獣人族の耳であつた。

床に落ちていたのは獣人族の耳が3つと尾が二つ。息を呑んだ直時の眼前には両手がありえない方向に曲がつた獣人族の女性と、彼女に声をかけ続ける片耳が切り取られた身内と思える女性であつた。二人の後背には、息を荒げたまま下半身を打ち付けるヴァロア兵がいた。

「…風よ、切り刻め」

直時の声は小さかつた。しかし、その激情を酌くんだ風の精霊は忠実に役目を実行する。獣欲に身を任せていたヴァロア兵は悲鳴をあげる暇も無く、瞬く間に肉片へと変わった。

それまでの饅すえた男達の汗と体液の臭いに代わつて、血と臓物の生臭さが満ちる。

「ラナっ！ラナっ！」

両腕を折られ、両耳を削ぎ落されたまま凌辱されていた女性に、もう片方の女性が這いずりながら近寄る。彼女の片耳も削がれ、全身の傷口と下半身からは血が流れている。

豹人族であり、直時とも少なからぬ縁があつたりナレス姉妹だつた。

妹であるラナを人質に取られ、ヴァロア兵の凌辱に身を任せるし

かなかつたダナ。姉の心配を他所に妹の意識はないようだ。身体の切創から出血が続いているが、命の火は消えていない。

急いで治癒を施そうとする直時に精霊達の声が聞こえた。床に放置された血まみれの耳と尾を手にならへ近付く。

「…精霊達よ。此の者に癒しの御手を差し伸べ給え…」

両手を折られ、体中傷だらけのラナに切り落とされた耳を添えた直時が精霊達に請い願う。

両耳が癒着するのを待つて、尾も傷口へと押し付けた。直時の魔力は精霊達によってラナを癒す力へと変換される。両腕も、治りが早くなるとの精霊の声により、引っ張つて真つ直ぐに伸ばす。

意識は失つたままだったが、ラナの傷は全て完治した。負傷の痕跡は、付着した血の痕あとだけだ。ラナの胸が安定した呼吸で上下するのを見て、安堵の吐息を漏らすダナ。

彼女にも同様に治癒術を施す。

「痛む所は無いか？」

「大丈夫。疲労感はあるが、傷は塞がったようだ」

直時の問いにダナが答える。傷そのものは癒えても、体力までは戻らないようだ。

「貴方に助けられたのはこれで2度目だな。心より礼を言う」

意識の戻らない妹の傍らに跪き、両手を床に深々と頭を下げる。

「どういたしまして。それより何か着てくれ。眼のやり場に困る」

ダナもラナも下半身は剥き出し。胸元も引き裂かれ、体には衣服の残骸が少し残っているだけであった。真つ赤になるダナから視線を外し、手近の死体からマントを2枚引き剥がす。

1枚をダナの肩に掛け、もう1枚をラナに被せた。

「義勇兵も撤退だ。避難は終わったそうだ。妹を起こして早く逃げる」

「貴方は？」

「忘れ物だ。『高原の癒し水亭』に荷物を取りに行ってから逃げる」
「わかった。ラナ！ラナ！」

頷いたダナは妹の身を揺さぶる。

「姉…さん？」

「ラナ！」

「あ、あああああああああああ！」

意識を取り戻すが、先程のことを思い出したのだろう。ラナは元に戻った両腕で自身を抱き、震えるままに悲鳴をあげた。

「まずい！落ち着かせろっ！」

ダナに言い聞かせた直時は、玄関先へ飛び出し周囲への警戒をはじめめる。

上体を起こした妹に抱きつくダナ。背中を軽く叩いて子供をあやすようにしている。何度も大丈夫だと囁き、ラナが正気を取り戻した。直時の耳に嗚咽が届く。

「動けるか？移動するぞ」

同情を押し殺し、意識して冷たい声を背後にかける。退避が最優先だった。

「少し待つて欲しい。衣類を整える」

「急げよ」

ダナの返事を聞き、焦りながらも警戒しながら二人を待つ。

「しかし、意外だったよ。二人とも普人族には良い感情持つてなかったのに義勇兵に志願してたんだな」

「宿屋の皆には親身になってもらった。ブラニー氏も良い人だ。このギルドにも世話になった。ミケラさんにも。だから恩を返したかった」

「恩返しも自分達が生きていてこそだぞ？」

「わかってている。しかし、相手がまず生きていてくれないと返せない」

「そうか。そうだな。うん。君等は良くやった。皆、無事に脱出できた。次は俺達が逃げる番だ。もちろん無事にな」

敵中に取り残されたことを少し非難めいた台詞に混ぜた直時だったが、真っ直ぐな言葉に苦笑しながらもダナ達を褒めることにした。

「待たせてしまつて済まない」

「よし。行くかつ……て！君等のその格好はっ？」

振り向いた直時が絶句する。敵のマントを裂いて作ったのだから、布が覆っているのは胸元と腰回りだけだ。

胸元は巻きつけた布がずれない様、交差させた布を一度結んで、両端を胸の谷間を通し首の後ろで縛っている。問題は腰回りで、巻きつけた布の片側ずつを腰の左で結んでいるだけで、丈も短く落としてしまっていた。スリットが腰まであるミニスカートのようだ。

「動くのに邪魔な部分は切り落とした。これぐらいでないと身軽な動きが出来ない」

「あの、有難うございました」

堂々としているダナとは違い、姉の背中に隠れるようにしていたラナが直時に礼を述べる。俯き加減で視線を合わそうとはしない。

(あんな経験をしたんだ。無理もない)

「どういたしまして。ここからなら荷物を取りに寄った後、南門か

ら逃げた方が良いな。中央広場に戻るのは危険だ」
走り出す直時の後ろにリナレス姉妹が従う。

すっかり人の気配が絶えた『高原の癒し水亭』。直時の荷はその受付カウンター前に置いてあった。『浮遊』の魔術をかけたそれを掴んで玄関先に出る。

「私達も部屋から荷を取ってきてても良いだろうか？衣服が多少だけなのだが…」

直時が出てくるまで、周囲を警戒していた二人。時間が惜しかったが、直時も寄り道したことである。それに彼女等の格好のこともあった。

「わかった。君等が戻るまで周辺警戒は任せる。急げよ」

「有難う！」

ダナとラナは自室へと駆けあがっていった。

二人が離れるのと同時に、直時の感覚は複数の接近する気配を察していた。槍を受けの形で構え、風の精霊にも準備を伝える。

路地のひとつから現れたのは12、3歳ぐらいの少年達だった。一塊になり、怯えながら移動している。略奪に夢中の上官とはぐれた者や、冒険者の攻撃に上官だけが斃れた者が行動を共にしていたのだ。

「ヴァロア兵か！」

直時の誰何の声に全員の身が硬直する。8人の集団の中から3人が前に出て、震える手に短めの剣を構える。中央の一人が一步前に出て、仲間を背に庇ったまま気丈にも直時に叫び返す。

「ヴァロア侵攻軍408重装歩兵付き従兵エミール・カンテ准3等

兵である！貴様は何者かつ？」

怯えながらも気丈な少年兵の姿に直時の警戒が途切れる。

「タダトキ・ヒビノ、冒険者だ。君達の勇戦により撤退することになった。我々は逃げる。見逃してもらいたい」

「敵に背を向けるの catt?」

少年の眼に侮蔑の色が混じる。志が高いのは良い。しかしそれが他者を貶めることで得られるのはいただけない。内心眉を顰める直時であったが、彼等が受けてきた教育に干渉する理由も義理もない。

「君達の友軍は中央広場を目指している。合流するならここから北を目指すと良い。追撃するなら反撃するまでだが、君達の軍規でははぐれた場合速やかに友軍との合流を命じていないか？」

少年兵達の間で動揺が走る。当てずっぽうで適当なことを言ったが、直時の指摘は当たっていたようだ。

仲間内で囁きが交わされ、リーダー格の少年も振り返り振り返り会話に加わる。そのうち、後ろのひとりが直時を指さした。

「空中騎兵と戦ってたっ！」

少年達全員の顔から血の気が引く。

「風の刃よ 切り裂け」

苦笑したくなるのをなんとか我慢した直時は、出来るだけ冷酷な表情を装って従兵と自分の間の石畳に向けて精霊術を放つ。突風が去ったあと、地面と余波を食らった建物に深い切れ目が生じていた。数人が腰を抜かしへたり込み、残りは後ろも見ず走り出す。溜息をひとつ残して、宿屋前での警戒にもどる直時に、先程名乗った少年が問いかけた。

「あんたはシーイスの人？」

「違う。でもこの町で生活していた」

借り宿に過ぎないが、ファイア以外の知人がはじめて出来たのもこの町だ。直時に嘘を言っているつもりは微塵もなかった。

「何故皆殺しにしたんですか？あんた程の力があれば追い払うだけでも出来たんじゃないんですか？」

「攻めてきたのはお前達だ。殺しに来る者が殺されるのが納得いかないのか？ヴァロア人はそんなに偉いのか？」

涙声で訴える少年兵だったが、そのことに苛立ちを隠せない直時。つい、語調が厳しくなってしまう。リナレス姉妹に対するヴァロア兵の所業が頭から離れない。

「兄がいたんだ。空中騎兵に」

立ち上がったものの、俯いて肩を震わせる少年兵。見えない顔からはとめどない滴が落ちる。

掛ける言葉を探しながら直時はその少年に歩み寄る。嗚咽を堪え、それでも涙を流し続ける彼の肩に手を置く。

「君の兄は正々堂々自分と戦った。地上軍とは違う勇猛な相手だった。君は兄を誇って良……いい？」

直時は最後まで言葉を続ける事が出来なかった。腹腔に熱い感覚。見上げた少年兵の顔に紛れもない敵意と殺意が漲っていた。その右手は直時の腹へと続き、ナイフが刀身を沈めていた。

侵略？（後書き）

自己満足の優しさは自分にも相手にも有害であることが多いかもしれません。

直時君には身を持って味わってもらいましょう。

退却後（前書き）

描写について多くの御感想いただきました。

あまりに配慮が足りませんでした。><

今回もエグイ描写があります。苦手な方は飛ばしてください！

退却後

「兄がいたんだ。空中騎兵に」
そう直時に言った12、3歳の子供。

精霊術に腰を抜き、手の武器を地面に落とし、庇おうとした仲間
間は逃げ、家族の死に涙する少年。

まともな会戦であれば、ただ魔力の供給源として、死ぬまで魔術
を行使するだけだった少年兵。

直時にとつて、なまじ言葉が通じたことが裏目に出た。地球での
紛争地域でライフルを構えた少年兵ならまだしも、貧弱な装備の彼
等に対して精霊術という圧倒的戦力を有していたことも油断に繋が
った。

怯えていたこと。悲しんでいたこと。言葉を交わすことで彼に戦
意が無いものと判断してしまった。何より直時の半分にも満たな
い年齢であったことが保護欲をかきたて、警戒心を消してしまった。

近付いて嗚咽を堪える、か細い肩に手を置いた。彼の兄を殺した
自分出来る事は、その死を美化してやること、その勇戦を褒める
ことだけだと思ったのだ。

しかし、そんな直時の言葉は少年にとつて強者の驕りと感じられ
た。彼の心を不意に襲った殺意、敵意、怨讐は激しかった。次の瞬
間自分が殺されることさえどうでも良かった。

いや、少年兵にそこまでの意識はなかったかもしれない。ただ、
教え込まれたことを実行しただけ……。『敵を討て！』それだけだっ

たのかもしれない。

直時の腹腔を貫いたのは短いナイフだった。最初は鋭い痛み、その後は熱さを感じた。そして四肢を負傷したときとは違う深い喪失感が襲う。力が抜ける。

「あ……」

気の抜けた声が漏れる。

直時の反撃が無いことに、自分の力が届いたと思っただ従兵エミールは、刺さったナイフを引き戻し逆手に持つて振りかぶった。引き抜かれた傷口から血が噴き出す。そして、自分より少しだけ高い直時の顔面に刃先を叩きつけた。

「つつっ！」

力が抜けていく感覚に茫然とする直時だったが、視野に真っ赤に染まった刃先が迫る。咄嗟に庇った左腕にナイフの刃が激突する。皮膚を破り、筋肉線維を千切る音。刃先の骨を削る痛みが頭の芯まで響く。

「いけるぞ！仇をとれっ！」

血に塗れる敵の姿とエミールの声に、へたりこんでいた少年達も手に武器を取り直時へと突進する。

子供用のナマクラと笑われた短い剣を精いっぱい突き立てた。切っ先は敵の精霊術師の掠った腹を貫いた。力の限り振り下ろした剣は血にまみれた左腕を折り、頭部へも打撃を与えた。喉を狙った剣は右腕に遮られたが、掌に突き刺さった。

次々と襲う激痛に、精霊へ治療術を願う余裕は直時には無かった。ただ、生存本能のまま、致命傷を避けるために肉体を傷付けながら避け続けた。

（痛い熱い痛い痛い熱い熱い熱い痛い！）

直時の声無き悲鳴は念話となって周囲に撒き散らされる。

（なんで？なんで？なんでだ？死ぬ？痛い！死ぬ！）

血を噴き出し、悲鳴を上げる事も出来ず脳内を巡る疑問と痛みと死への予感。

（死にたくない！殺される！殺すっ！死ねええええええええええええええええ！）

そして死が弾けた。

ミケは直時と遠話で繋がっていた。それ故、悲鳴の念を一番最初に察知した。直ぐに踵を返し、『高原の癒し水亭』へと疾走する。

ヴァロア軍の少年兵に囲まれ、血塗れの直時を見つけたのは、宿から走り出たリナレス姉妹と同時だった。

駆け寄るミケは、闇の精霊が直時へと集まるのを感じる。それは尋常な密度ではなかった。昼間にも拘わらず周囲が闇に吞まれていく。

危険を察したミケはリナレス姉妹を捕まえて直時から離れようとする。抗う二人は直時へと向かおうとするも、ミケが無理矢理足元の影へと引きずり込んだ。ダナとラナの頭を押さえつけ、影に潜む。

その寸前に感じたのは、師匠であるダークエルフ、リタが多用を禁じた闇の精霊術の大規模発動であった。

リスタル上空へと辿りついた二つの人影があった。竜の翼を背に、その魔力を風として推進力に変え空を駆るヒルデガルドと、彼女に抱えられながらも風の精霊術で更なる移動補助をしていたフィアである。

二人の術の相乗効果は丸一日で首都『ヴァルン』と『リスタル』間の飛行を成し遂げた。

そんな規格外の二人にも眼下の光景は信じられなかった。リスタルの町が夜に吞まれて行く。高空から眺める限りでは、ある地点を中心として半円球に広がっているのは夜としか言いようが無かった。未だ陽が高いにも拘わらず、包まれた空間には影が存在しなかった。光が遮断された状態だったから影が出来なかった、いや、影が存在しなかったと言うべきかもしれない。

リスタルの町とその周辺までを吞み込んだその影は、不意にその濃さを増した。もはや闇と呼ぶしか無かった。

町に侵入していたヴァロア兵、逃げ切っていなかった冒険者義勇兵、侵入を町のすぐ傍で待っていたヴァロア前衛、そして草木、花、戦争など関係の無い虫や小動物達、闇に包まれた全ての存在が訊いた。

(死ね)

動物はその場で地に伏せ、眠りについたかのように命の灯を消した。植物も光合成を中止、導管は水を送ることを止めた。そこに在った魂は、闇の精霊によって全て冥界へと送られた。残ったのは生命活動を停止した遺骸、魂の抜け殻、物体となったモノと血に塗れた異世界人だけだった。

死の闇が去ったことを感じたミケは、潜んでいた影からリナレス姉妹ごと飛び出した。直前に見た直時は大きな傷を負っていたはずだ。

「タダトキさんっ！」

仰向けに崩れる直時が石畳に叩き付けられる寸前に抱き止めるミケ。

「ミケラさんっ！ヒビノ殿の容体はっ？」

ダナが駆け寄る。妹のラナはビクビクしながら周囲を見回している。

「タダトキさんっ！精霊術をっ！治癒しなさい！」

ダナを無視して、朦朧としている直時の頬を叩くミケ。虚ろな瞳は焦点を結んでいない。

「私は闇の精霊だけ……、治癒術はできないのにつ！タダトキさんっ！起きろ！」

ミケが直時の耳元で叫ぶ。反応は薄い。負傷によるダメージと出血、それに加えて闇の精霊術の広域発動で体力も魔力も気力も使い果たしてしまったようだ。

「聖霊よ 此の者に癒しを…」

天空より舞い降りたのは白金の髪を風に靡かせたエルフ、フィリスティア・メイ・ファーンであった。直時の傷が塞がり、欠損部位が修復されていく。

「…フィアさん。どうやって?」

突然の援軍にミケが茫然と問いかける。

「うむ。私の御蔭だな」

フィアの傍らに舞い降りる竜人族、ヒルデガルド・ノインツ・ミューリッツが口の端を上げて微笑する。

「私の風の御蔭もあるでしょうがっ!」

喰ってかかるフィアを軽くいなしつつヒルダがミケに問う。

「先程の闇の精霊術はヒビノか?」

この期に及んで言い訳は出来ない。フィアも苦い顔で頷いている。

「そうです」

「フフツ。面白い。面白いな」

「ミケちゃん。この馬鹿頼んでいい? ちよつと鬱憤晴らししてくる
フィアは、直時に命の別条がないことが確認できたことで生き残っている町外のヴァロア軍の方を見た。今ならあと一押し of 攻撃で崩せるだろう。」

「同道させてもらおう。カールの件もある。短期で事を収めるなら
ヴァロアを叩くのが一番だろう」

「カール? リシュナンテから何か聞いたの?」

「奴は何も言わないさ。ただ、カールの狙いはシィイスじゃない。」

同盟国だしな。まあ私に関係無いとは言え、いらぬ戦乱は無い方が
良い。だろ？」

「わかった。じゃあ行きましよう！」

ここに晴嵐の魔女と黒剣の竜姫が、ヴァロア軍リスタル侵攻軍へ
と牙を剥くこととなった。直時の攻撃に混乱を極めてしまった彼等
に抗う術は無かった。

司令は討死。空中騎兵は全滅。リスタルに侵入した部隊は連絡途
絶の上、町の外周に待機していた部隊も原因不明の死亡。

本陣で生き残っていた参謀副官が、残余の部隊を掌握。再編と偵
察を命じたところだった。

そこに切り込んだ伝説級の魔女二人に、ヴァロア軍は壊乱した。

リスタル侵攻軍を囷として、マケデイウス王国の最大交易都市で
ある『ロツソ』を奪う。その算段であったヴァロアの意図は挫かれ
た。囷役のリスタル侵攻軍は、大きく数を減じて自国へと逃げ戻っ
た。

ロツソ侵攻のため、国境南部へと集結していた軍団に、攻撃命令
が下されることはなかった。

侵攻を企図していたカール帝国も、ヴァロアへの侵攻作戦を中止
せざるを得なかった。

予定では、ロツソへの侵攻を待つて作戦が発動されるはずであった。
ヴァロアのリスタル侵攻軍が町を占拠した後、Sランク冒険者の義
勇兵とシース公国空中騎兵団が攻撃。在る程度の損害を受ければ
増援がなされる。ロツソ攻撃が主の軍は割けない。更なる戦力がヴ
ァロア国外へ移動することになる。その隙を突く作戦だった。

王城での二人の足止めに失敗したりシユナンテの進言は、ヴァロ

ア領への早期進軍であった。しかし直時の暴走により、リスタル侵攻軍の壊滅があまりにも早かったため、実現しなかった。ヴァロア軍の敗走を決定付けた晴嵐の魔女と黒剣の竜姫の名は、さらに勇名を馳せることになった。

シーイス公国は戦災を被る代償として、カール帝国からの無償借款を約束されていたが、ヴァロア領への侵攻作戦自体が中止となり、借款は減額されてしまった。

しかし、二人の魔女の活躍の影に隠れていたものの、リスタル住民を無傷で撤退させた黒髪の魔術師の情報を得ることが出来た。ノーシュタットに避難した殆どの住民が、直時の魔術支援を施されていた事実が明らかになり、無限の魔力を蔵する人族として、公国首脳部に知れ渡ることとなった。空中騎兵団を全滅させた、風の精霊術師でもあったため、何としても自国に引き入れたいと各国の暗躍が始まる。

直時の行方を、シーイス公国、その情報を分捕ったカール帝国、大きな損害を与えられたヴァロア王国の情報部は血眼となって探していた。各領内へ散っている諜報員にも通達される。

ノーシュタットへと、最期の住民を率いて撤退した冒険者ギルドリスタル支部局長は、両国政府の恫喝に屈せず、直時の情報の詳細を明かさなかった。恩義に報いたというより、冒険者ギルドの名を貶める結果を恐れた故であった。皮肉にもそれが、組織の管理職として彼の評価を高めたのは余談である。

傷が癒えたものの、意識が戻らない直時。彼が眠る宿屋は、ノーシュタットではなく当初の目的通り、マケデイウス王国の交易都市『ロツソ』にあった。

距離的に近いことでもあったし、移動する面子に普人族が皆無で

あつたのも越境を容易くした。国家に属する者がいなかったの
である。ミケ以外、他国に渡ることに異論は無かつたし、当のミケも、
カタリナからの遠話で直時を獲得しようとするシリーズとカールの
情報を聞き、ロツソ行きを翻意したのであつた。

フィアとヒルダは時の有名人であり、目立つという理由から別の
宿をとつていた。直時と宿を同じくするのはミケとリナレス姉妹で
ある。直時とミケ、リナレス姉妹でそれぞれ1部屋ずつを借りてい
た。

あの戦闘から5日。包帯で顔を隠されたままの直時はまだ眠り続
けていた。

「うちは冒険者ギルドで情報を仕入れてくるニヤ。もうすぐフィア
ちゃんが来るけど、ダナちゃん、ラナちゃん、それまでタッチー
のこと頼んだニヤ」

「我等の命に代えてもお守りする。安心してお出かけください」
姉のダナの気負いに逆に不安になるが、フィアがもうすぐ顔を出
す。大丈夫だろうと判断したミケは、冒険者ギルドロツソ支部へと
向かった。

「こんにちはー。様子はどう？」

予め遠話での確認を済ませていたため、直ぐに扉を開くダナ。フ
ード付きのローブで顔を隠し、安物の長杖を手にしたフィアが入っ
てくる。宿屋には治療師だと伝えてあつた。客の一人が一度も姿を
見せないことから、直時は傷病者だと思われる。

「相変わらずです。呼吸は安定していますが、意識が戻る様子はあ
りません」

「そっか…。暫く見ていてあげるから、あなた達はご飯食べてらっ
つゃー」

「では配膳の注文をしてきます。3人分で宜しいでしょうか？」

「食堂行かないの？」

「はい。この方が落ち着きます」

ダナの返事にラナが小さく安堵の吐息を吐く。

(まだ駄目みたいね。こればかりは時間が頼りか…)

ラナの様子にフィアの瞳が曇った。

「判ったわ。それと言葉使いどころにかならない？何度も言うけど堅苦しいのよ」

「高名なフィリスティア様への敬意の表れですので如何ともできません。料理は何を？」

「日替わりのおすすめ料理。果実酒も1壺付けてね」

テーブル用の酒壺で、ピッチャーのようなものである。

「昼間から飲むんですか？まあ、気分を変えるのも良いかもしれませんが。では注文してきます」

「あ。私は隣から椅子をもう一脚持ってきますね」

ダナにくつつくようにラナも部屋を出ていった。

「早く起きなさいよ？」

寢床の傍にあった椅子に座って寝顔を覗き込む。

心配ではあったが、傷は癒えている。意識が戻らないのは、魔力が枯渇するまで使ったからだろう。未熟な頃のフィアも、このような状態に陥ったことがあった。

出会ってそれほどどの時を過ごしたわけではない。長命なエルフの感覚でなら一瞬とも言えた。異世界からの侵入者。最初はメイヴァーユ様の御言葉から、直時の監視役として行動を共にした。

見た目は普人族そのままなのに、その突拍子の無い行動から色々振り回された。腹が立ってフィアが振り回すような行動を取ったことも多々ある。

害意が皆無であり、本人も意識して目立つことは控えていたので、一時別行動を取ったこともあったが、やはりやらかしてくれていた。その結果、メイヴァーユ様の御言葉が監視を指していたわけではないと判った。同行する理由は無くなったはずだった。

それでも一緒に行こうと思ったのは、この異世界人といえることが楽しかったのだ。馬鹿で考え無しのおちよこちよい。簡単な魔術に驚くくせに精霊術が使えたり、妖精人のエルフにも、気にしたふうもなく遠慮なしに会話出来る普人族（の様な人族）。

長命種は数々の積み重なる経験から、感情が希薄になりただただ穏やかに生きるようになってしまふ。フィアの故郷の長く生きた者達も、薄い笑顔を崩さず淡々と毎日を過ごしていた。フィアはそんな生きているか死んでいるかわからない人生は嫌だった。だから故郷を出て、世界を見て廻った。

普人族の世界は刺激に満ちていた。彼等は短い命を燃やし尽くすかのように性急に生きていた。欲望が行動の原動力であるならば、普人族は人族の中でもっとも行動力に満ちた種族だと思った。

過ぎた欲の暴走に、悲劇が繰り返されるのを何度も目撃したが、制御できるなら見習うべき点でもある。感情を鈍化させないためにも、エルフの中では否定的に取られる欲望にフィアは注目した。

フィアが、自分の中に燻ぶる欲望の中から解放を選択したのは『知識欲』だった。好奇心が強かったこともあり、この選択は間違いではなかったようだ。人魔術を修めたのもその一環だった。知ることは喜びだった。

そして出会った異世界人。彼の地の文化はどんなものなのだろう？彼の眼にこの世界はどんな風に映っているのだろうか？新たな知識

欲を刺激する存在だった。それにも増して、直時が引き起こす馬鹿な騒ぎに笑ったり怒ったりする毎日が楽しい。

「早く起きなさい……」

そこに異性としての感情があるかどうか、よわい 齡200を越えたファイアにもまだ判断ができなかった。

穏やかな寝顔に反し、直時の夢は血色であった。

(痛い……。苦しい……。殺してやるっ)

直時の攻撃にズタズタになり、血を流しながらにじり寄る敵兵の群。動かない身体が引きずり倒され、血の涙を流した少年達がかかる。

小さな手に握られた剣が振り下ろされる。全身を貫く刃。

(何が守るためだ！お前がやったのは殺しただけさ！)

亡者の一人が直時の髪の毛を掴んで周囲に顔を向けさせる。半分浸かった血の池からは、恨めしげな顔をした死体が浮いては沈んで、呪いの言葉を吐き出す。

(お前にできるのは殺すことだけ。誰も何も己すら守れるものかっ)
亡者の群がダナとラナを囲んでその姿を覆い尽くす。

(よせっ。やめろっ！)

直時の叫びに嘲笑を返し、亡者達はファイアをミケをアイリスを覆い隠していく。

(やめろおおおおおっ！貴様等っ！殺してやるっ)

夢の中で放った風の刃が、全てを断ち切った。後に残るのは真っ暗な空と、どろどろの血の池に這いつくばった直時だけ…。

(……やっぱり殺すんだ)

眼前の血の中から浮かんだのは、エミールと名乗った少年兵だった。

闇と血の世界で、直時は眼を精いっぱい見開いた。

次の瞬間、赤と黒の世界は光に包まれた。窓から差し込む陽射しが眩しい。

「…あれ？」

直時の眼醒めの第一声は、呆けた疑問形だった。

フィアとリナレス姉妹の昼食が、フィアの絡み酒に移行しそうな時だった。

「…あれ？」

直時の抜けた声が聞こえた。

「……ヒビノ（殿っ・ダナ）（さんっ・ラナ）！」「」

3人が寢床に駆け寄る。

「お、おはよう？」

3人の剣幕に驚いた直時は、とりあえず無難な台詞を返すことにした。脱力した3人はそれぞれ深い溜息を吐いた後、ほぼ同時に口を開く。

「従兵ごときに殺されかけて！」

「貴方が死んでは恩を返せないではないですか！」

「大丈夫ですか？ごめんなさい！ごめんなさい！」

寝起きにこの三重奏は正直拷問である。

「お、お休みなさい」

直時が上掛けを頭まで被ったのは防衛本能であったが、たちまちファイアにひっぺがされた。

「二人ともとりあえず待ちなさい。ヒビノはこれ飲んで。気付けよ」
押しつけられた杯を口にするため、上体を起こそうとする直時。

身体にうまく力が入らないが、ラナが素早く身を支えてくれる。

直時の脳裡にリスタルでの出来事が甦った。

(恐怖の対象になるだろう俺に……。うとうと、罪悪感が……)

あんなことがあった後だ。男性に嫌悪と恐怖を感じているはずであるうラナに気を使わせてしまった。

「大丈夫大丈夫！」

頭がくらくらするが強がるしかない。へらへらと笑いながら、なるべく接触をしないよう身を起こす。

ファイアから受け取った杯には、果実の醸造酒が半分ほど入っていた。甘酸っぱい香りは地球でのベリー系のようだ。直時は甘い酒は苦手だったので、味わうことなく一気に飲み干す。アルコールの刺激は弱い、久し振りの侵入に胃が踊る。

口元を手の甲で拭った直時は、そこに赤褐色の液体が付着したの

を見た。先程までの悪夢が頭をチラつく。きつく閉じた瞼に血の池が甦る。嘔吐感に口元を押さえ、皆から顔を背けた。

「洗面器っ！」

叫ぶフィアを手だけで制止した。喉を逆流する胃液も、記憶の血の臭いも、全てを飲み込む。

「……ふう。もう一杯もらえる？」

「大丈夫なの？」

「口直しだよ」

直時は、フィアの疑念に片眼を瞑ってみせ、空になった杯を差し出した。

新たに注がれた果実酒。色を確かめ、香りを嗅ぎ、その甘酸っぱさを味わいつつ喉へと流し込む。何度かに分けて杯を空にした直時は、改めて3人に向き直った。

「助けてくれて有難う」

今こうして無事にいられるのは、ここにいる人達に助けてもらった以外にない。直時は深々と頭を下げた。

「まあ、言いたい事とか、話さなきゃいけないことがいっぱいあるから関係者を呼んでからにしましょうか」

やれやれと言った風情のフィアが、遠話でミケとヒルダへと連絡をはじめ。直時には誰と会話しているか判らなかつたが、黙って待つことにした。

ダナが部屋の隅から大きな荷物を引っ張って来た。

「ヒビノ殿。貴方の荷は無事持ちだせました。確認してください」

「あ！有難う！そうかあ、持ち出せたんだ…。本当に有難う」

「あの状況下で取りに戻られるなら、大事な物なのでしょう？我等姉妹もその御蔭で助かったようなものです。お運びするのは当然です」

誇らしげなダナに、調子に乗るなと言う鋭い視線がフィアから送られる。

「あのあの！何が入ってたんですか？」

剣呑な気配を察したラナが、直時へ質問する。ぽやっとした雰囲気であるが、意外と気が回るようだ。

「んー。形見：かな」

「御家族のですか？」

「家族は生きてるよ。多分ね。これは……俺の過去の形見ってところか」

ラナとダナは何が何やら判らないようだ。

引き寄せた荷物から文庫本を取り出した直時は、その題名を軽く指でなぞる。愛おしそうに何度も何度も…。

続編を眼にすることは永久にないだろう。つい最近発売された新刊が、既に過去のものとして、想い出の品となっていたのだった。

直時のそんな様子を横目で見るフィアの顔には、少しの心の痛みと理由の無い苛立たしさがあつた。

「全員集まったらヒビノを吊るし上げるからね！」

「……なんで？」

フィアの無慈悲な宣言に涙目になる直時。

空腹時に飲んだ果実酒が直撃したのか、寢床に突っ伏してしまう。

くぐもった眩きは誰にも理解されない日本語だった。

「……梅粥食べたい」

退却後（後書き）

誰が何故そう思って行動したのか？

毎回ちゃんと読み返して更新しないとですね……

同じ過ちを繰り返す私はアフォです。

交易都市ロッシン（前書き）

事後報告会です。

交易都市ロツソ

意識を取り戻した直時は、ファイアの遠話連絡をもらったミケとヒルダが来る前にと、遅い昼食を摂っていた。お粥か雑炊を切望したが、宿のメニューに米のような穀物料理はなかった。

今、直時が嫌そうに口に運んでいるのは、僅かに褐色がかった粘液状の病人食であった。荒く挽いた小麦粉を、水に溶かし、煮ただけの代物である。味は皆無、むしろ麦の薫りだけで咽そうになる。

それでも体力を戻すには食べるしかない。味に眼を瞑こむって、少しずつ咀嚼そしゃくしながら嚥下えんげする。見かねたファイアが注いでくれた果実酒で、無理矢理飲み下していたが、空きつ腹になんとやら……。食べ終えた頃には、かなり酩酊めいていしてしまっていた。

食器が片付けられる頃、ファイアと似たような変装をしたヒルダが到着し、続いてミケが冒険者ギルドから戻ってきた。直時の回復を祝う言葉がそれぞれから発せられ、照れながらお礼の言葉を返す。場が落ち付いたのを見計らって、ミケが皆に声を掛ける。

「それではここに第一回リスタル防衛戦報告会の開会を宣言するニヤ」

隣室から持ち出し、合計4脚の椅子にリナレス姉妹、ファイア、ヒルダが腰を下ろし、直時は寢床の上に胡坐をかく。ミケは立ったままで皆の注意を集めている。

「眼を覚ましたばかりのタッチーのためにも、その後の経過を報告するニヤ。まず、ヴァロア王国リスタル侵攻軍は壊滅。少数が国に帰還を果たしただけニヤ」

ミケの説明に直時の酔いが醒めていく。

他の面子にとっては確認事項であったが、新たに判明した点もあった。ヴァロアのリスタル侵攻作戦が、かなり早期にカールからシイスへと知らされていたこと。ヴァロア軍の真の目的がマケディウスであったこと。そして、隙をついたカール帝国がヴァロアに侵攻するため、情報隠蔽を強制していたこと等である。

リシユナントがそのため暗躍していたことも、冒険者ギルドの情報網から浮かび上がった。ヒルダは察していたようで、特に意外そうな顔もなかった。

ミケの報告がひと段落し、直時が質問の声をあげる。

「シイス公国は小国だよな？ 大交易都市ロツソとの、最短に位置するリスタルの喪失は、無償借款が餌だったとしても損害が大き過ぎないか？ 借款なんて一時しのぎでしかないだろう。ヴァロア軍のロツソ侵攻を阻むために、むしろマケディウス王国と情報を共有して、同盟を組んだほうが良かったと思うが…。まあ、各国の絡みとか知らないから実際の事情はもつと複雑なんだろうけどね」

「長期的に見るなら、シイス公国としてはロツソとの交易が途絶えない方が望ましい。カール帝国だって、シイスを通して交易の利益を得てる。ロツソとの交易より、ヴァロアに攻め込む何らかの理由があつたのかしら？ 国益を考えればヴァロア軍が越境した時点で迎撃して、戦争そのものの短期収束を狙うのが筋だわ」

直時の疑念にフィアも同意する。

「シイスはカールと同盟とはいえ、ほとんど属国扱いニヤ。強引に押し切られたと思ってたけど、他に理由があるのかもしれないニヤ。ギルドにも情報の再検討と洗い出しを上申しておくニヤ」

ミケもギルドの出した結論に疑問を持ったようだ。

「まあ、その辺りのことは国同士の問題だ。私達に関係は薄いだろう。それよりもヒビノは聞きたいことがあるのではないか？」
考え込む3人にヒルダが話題の転換を促す。

「それはそうなんだけど…」

直時の視線はリナレス姉妹と、他にもないヒルダへと向けられる。自分の事情を把握しているのは、今のところフィアとミケだけだ。不必要にぼかした表現では、リナレス姉妹はともかくヒルダには色々と感じられる恐れがある。

「タッチイーが精霊術師だったのは、ここにいる皆が知っていることニヤ。リスタルでの空中戦も有名ニヤ（詳しいことはフィアちゃんを加えて改めて話すニヤ）」

ミケが会話をこなしながら、念話で直時のみに意思を伝える。器用なものである。異世界人であること、魔法陣改造技術のことは伏せるようだ。

「じゃあ自分が意識を失った前後の…リスタルのことを…。それと自分が無事である経緯を聞かせて欲しい」

意識を失う寸前、直時は痛みと恐怖から、今まで覚えたことのない、強い殺意を爆発させた。自分が何をしたのか怖かったが、その直前までだってヴァロア兵を殺していたのだ。誰かを守るという美辞麗句を盾にして…。今更自分がやったことを、なかったことには出来なかった。

ミケは少し躊躇った後、直時を真っ直ぐ見て話し出した。砕けた調子は微塵もない。

「タダトキさんが負傷されたとき、無意識に念話を放ちました。私

とリナレス姉妹が受念。その場へ急行しました。救出直前に、タダトキさんは闇の精霊術を行使。結果、リスタルの町に侵入していたヴァロア兵は一掃されました」

「あの時、俺は標的を定めていなかった。周り全部が敵だと、殺意のまま攻撃を放った。ダナさん、ラナさん、ミケさんが無事だったのは嬉しいけど、…どうなった？」

直時の問いには、他の冒険者への被害はなかったかとの意味が込められていた。直接口に出るなかつただけだ。

「あの時点で、連絡の取れていた未撤退の冒険者義勇兵は、私達3名を含めて8名。生還出来たのは私達だけです。」

「そう…か。俺は守るところか、味方を殺したのか」

「ヒビノ殿。それは身を守るためだったではありませんか！」

自責に項垂れる直時に、ダナが強い声を出す。

「いや。思い出したよ。あの時の俺は助かろうと、生き残ろうとして攻撃したんじゃない。自分を殺そうとする存在が憎かった。紛れもなく憎悪のため、殺すためにだけに力を放った」

「あれは闇の精霊術のひとつ、還魂かんこんの法です。生あるものを安らかな死に就かせ、魂を冥界へと送ります。死者に痛苦は一切与えませんが、憎悪だけが理由ならば、そのような攻撃方法を採用することはないでしょう。例え無意識であってもです。闇の精霊術師の先輩として、私が保証します」

直時の言葉に黙りこんだダナに代わって、ミケが言葉を繋いだ。

「精霊術が収まるのを待って、タダトキさんを確保。出血が激しく治療術が必要なところへファイアさんが来ました。タダトキさんを救ったのはファイアさんです。その後、ファイアさんとヒルダさんが混乱するヴァロア軍を攻撃。撃退しました。意識の無いタダトキさんの安静を優先した結果、ノーシュタットより近距離の『ロツソ』へ運

「なのです」

ここに居る皆のおかげで命を長らえた。直時は寝具の上で正座になり、深々と頭を下げ礼を言った。

「次はヒビノの番ね。ミケちゃんから大体は聞いてるけど、リスタルからの避難民と会った時に別れたんでしょ？ そちら辺から何を見聞きして、どう行動したのか聞かせてくれる？」

ファイアが促す。

直時は思い出しながら話はじめた。

混乱する避難民への魔術補助。町に残っていた住民。ギルドで聞いたヴァロア軍の規模。引き続いての魔術支援。『高原の癒し水亭』での最期の宴。早朝の空襲。避難を無事に終えるため、迎撃の決意。住民の最終避難直前に始まった戦闘。空中戦。撤退支援のため本陣急襲。油断からの負傷。そして、死の解放。

ダナとラナの救助に関しては、あくまで偶然だったことを強調し、助けた結果だけを話した。心の傷は大きいだろうし、変に律儀な彼女等が、恩に拘ってもらっても困る。

「まあなんというか、やっぱり馬鹿ね。思い付きと思い込みで突っ走った拳句、子供に殺されかけるなんて自業自得。それに目立ち過ぎたわ。周辺国がヒビノの獲得に血眼ちまなこよ」

これ見よがしに大きな溜息を吐くファイア。

「タダトキさんは今、シース公国、カール帝国、ヴァロア王国から重要人物として手配されています。シースとカールは共に自国へ迎えたい。ヴァロアは脅威と見做しているようですが、自国へ引き入れることが可能ならどんな取引でもするでしょう」

「リスタルで魔術支援して問われたときは、普人族じゃなくてハ-

「フェルフだと言っておいたけど無駄だったか？」

「髪と瞳の色は珍しいですが、見た目は完全に普人族ですからね。加護や神器を与えられていると疑う者もいる始末です。とにかく、3国以外にも情報を得た国々が動いています」

「戦闘能力ならフィアやヒルダさんの方が上だし、そんな人は他にもいるだろうに……。俺一人探すより、他種族国家目指せば国力なんてすぐ上がるだろ。何故そこまで拘るんだ？」

「有名人を召し抱えることで、国のステイタス向上に繋がるのだからか？首を捻る直時。」

「普人族である、という事が大事なのだ。基本的に普人族以外は国民になれない。何故なら、他の種族は町に住みつくことはあっても、一つ所に留まり続けることは少ない。国家というものに対する帰属意識が、我々と普人族ではかけ離れているのだよ。だからこそ、力を持った普人族というヒビノの獲得に躍起になっている」

ヒルダの説明にも、今ひとつピンと来ない直時。

「つまりだ、普人族国家にとって、他種族は鎖に繋がらない飼い馴らせない獣で、同じ普人族は餌さえ絶やさなければ、飼い馴らすことが出来る家畜ということだ」

「言葉は悪いですが、最も簡単な説明だと思います。補足しますと、普人族が国家という大きな集団を形成するのは、他種族に対抗するためだと言われています。よって、他種族を国民として迎え入れることはあり得ません」

ヒルダのきつい表現に引き気味の直時であったが、驚いたことにミケも同意のようだ。他の面子も同じらしい。

「利用目的は多いわね。なんといつても魔力量。戦時でも平時でも使い放題。直接戦闘でも戦果をあげているし、支援魔術が掛け放題となると補術兵としての価値の方が高いわね。英雄として祭り上げ、

それを従わせることで支配階級の権力強化にもなる。周辺国への牽制としても有効。ヒビノの力が子にも受け継がれるなら、王族の存続安定にも繋がる……。他に何かあるかしら？」

フィアが思い付くまま利用方法を連ねていく。直時にとっては頭の痛くなる内容だ。もういいと手を振って遮り、盛大な溜息を吐いて顔を上げた。

「ほとぼりを冷ますのに身を隠すしかないか……」
呟いた直時へ遠慮勝ちに声が掛かる。ダナである。

「確認したいのですが、良いでしょうか？」
肯定の頷きを返す。

「ヒビノ殿は普人族なのですか？」
直時が、あつと思いつ出した。リナレス姉妹には、情報を口止めしたときに耳の短いハーフェルフだと偽ったのだった。どう答えたものかと思案していたが、ミケがあっさりと答えてしまう。

「普人族です」
眼を見開くダナ。ラナが身を強張らせる。無理もない。ついつい恨みがましい眼で、ミケを見てしまう直時。

（別の世界の人族だとも言うつもりですか？ そもそも信用されませんし、ヒルダさんもいるんですよ。リナレス姉妹ならともかくヒルダさんにハーフェルフだと押し切るのは無理です）

ミケの念話が頭に響く。致し方ない判断だろう。

「身を隠すなら早い方が良いでしょう。ロツソは人も物も出入りが激しく、目立ち難い半面、出入りが容易いため、各国の間者も多数潜入している模様です。この町のギルド会館も監視対象となってい

ます。複数の視線を感じました」
直時が思っていたより状況は逼迫ひっばくしているようだ。

「カール、シイス、ヴァロアと近隣国は駄目ね。最低でもこの3国と交易が無い国まで移動するか、普人族の立ち入らない種族さとの郷に隠れるか……」

「フィアが逃走先を検討している。」

直時も、フィアからもらった知識の中から、ユーレリア大陸の地図を脳裡に広げてみた。

アースフィアの天井と呼ばれる中央山脈。その北西に位置するのが、直時がこの世界に迷い込んだ地である、風廊の森。カール帝国の領内であり、西に接するのが今回戦ったヴァロア王国。シース公国はカールとヴァロアの国境線の南、中央山脈の端にかかっている。更に南には海に面したマケデイウス王国。東西に広がり、良港を数多く押さえている。

風廊の森から、ほぼ真南へと旅してきたわけである。基礎知識内で判断すると更に西の各国は、いがみ合いながらも交易自体は活発であるらしい。潜伏先としては危険だ。

海沿いに東へ行くと、幾つかの小国を挟んで『イリキア』という海洋国家がある。直時の記憶が甦る。加護祭で賑わっていた、ノースユタットの屋台で食べた美味な串焼き。その食材がイリキア産のはずだった。

地図から判断するに、多数の群島を版図に入れている。無人島なら身を隠すにも良いだろう。海の幸も美味そうだ。判断基準としてはどうかとも思っが、どうせ詳しい知識など無い。遠い国でもあるし、直時は訊ねてみることにした。

「イリキアって国はどう？ 結構遠いよ。それに海洋国家みたいだから、ロツソみたいに商業が盛んそうじゃない？ 無人島とかなら隠れるのにもってこいだ」

「イリキアか……。海が綺麗な国だって聞いたかな」

「フィアも詳しくないようだ。ミケはノーシユタツトの露店を憶えていたのか、猫耳をピクンと動かし答えた。

「イリキア王国は、西の隣国リツタイト帝国と小競り合いを続けてますね。まあ、争いを抱えていない普人族国家はありませんが」

「流石はギルド付き冒険者である。各国の情報もある程度網羅しているようだ。」

「イリキアはマケデイウスとも交易が盛んですから、潜伏先としてはリツタイトの方が良いかもしれません。文化的にもこの国を境にすぐく変わりますから、交流自体殆ど無いのです」

「ミケの助言にリツタイトの情報を脳内検索する。フィアの知識に詳しい情報は無いようだ。」

「他種族の郷に匿ってもらおうという案はどうなんだ？」

「ヒルダが突然口を挟む。先程フィアが口にしていた案だ。」

「普人族を受け入れるような種族の郷なんてある？ 私の故郷だって多分無理よ？」

「検討したものの、現実性が低いと判断したフィア。自分の故郷も候補として考えてみたようだった。」

「私も他の種族との交流はあるし、頼れそうな相手もいるけれど、あくまでも個人的な付き合いで、同族の理解が得られるとは思えない」

「有名人であるフィアのコネが通じないとすると、普人族というの

は余程嫌われているのだなあと実感する直時である。ところが、ヒルダが自信満々で答えた。

「私の郷なら誰にも文句は言わせないぞ」

孤高の種族と言われる竜人族の郷に普人族を招き入れる。それがどれだけ不可能事であるかを知る直時以外の面々が驚く。

「ヒルダさんって、もしかして竜人族の偉い人なんですか？」

感じた疑問をそのまま訊ねるミケ。

「竜人族といつても、あちこちに氏族ごと散らばって住んでいて。私の実家は銀竜山地一帯の長なのだ」

「じゃあ！ 黒剣の竜姫の『姫』って！ 女性を意味してたんじゃないかっての？」

「未熟ではあるが、次の長となる予定だ」

フィアの驚愕に恥ずかしそうに答えるヒルダ。直時としては、跡継ぎご愁傷様ですという感想であったが、他の皆は固まっている。

竜人族は、有力氏族ごとに少数で広大な領地を構えている。かつて、普人族が軍勢を率いて攻め込んだこともあったが、ある国が数十人の竜人族に滅ぼされたこともあり、今では竜人族の領域を侵すものはいない。

その氏族のひとつの長だとヒルダは言う。所謂お姫様であった。

「ヒビノ。強くなりたくはないか？ お前には磨けば光る原石の強さがある。普人族が持つ私欲も少ないように見受けられる。お前が望むなら、お前が守りたいと思った全てを守る力を引き出す手助けをしよう」

思いもよらない申し出である。「冗談ではない証拠に、ヒルダは真剣そのものだ。」

「強くはなりたいたいです。でも今回の件でわかりました。俺は誰も守れない。自分の身すら守れない。まずは自分の身を守る力をつけたい。でもそれは、俺のために俺がすべきことであって…。なかなかうまく言えないですね」

直時は少し考えたあと、答えを待つヒルダへと続けた。

「俺は誰に迷惑を掛けるでもなく、静かな穏やかな生活をしたいたいと思ってます。多少は刺激を求める事もあるかもしれませんが、基本的に望んでいるのは平穏です。誰かを守るために戦うなんて柄じゃない。勿論自分の手が届く範囲で、手を伸ばすことに躊躇いはありません。そんなこと、考えてやることでもないですね。でも、救いを求める人を探してまで助けようなんて思ってません。やりたくもないです。それは本人と、その周りの人がなんとかすべき問題で、そのための努力はその人達の義務だと思っんです」

言葉を切った直時は言ったことを反芻はんすうしてから、次へと続ける。

「自分を守るため強くなるのに、無償で他人の力は借りられません。自分で努力すべきだと思います。それでも他人に助けを請うなら、対価を支払ってしかるべきです。今の俺に対価を払うことはできません。だから、ヒルデガルドさんの好意に甘える事はできません」
拙い言葉は、自分の想いを正直に伝えられるように。ヒルダは判ってくれただろうか？

思えばファイアには頼り切っていた気がする。お目付け役だと思えばこそだったが、それも終わった。だからこそ直時は、これからの逃避行には独り発とうと思った。

普人族と見做されている自分が、他種族の者とそこそこの仲の良い知人となれたのだ。それはこれからの人生への励みとなった。

「くつくつくつく…。あはははははははっ！」

突然笑い出したヒルダに驚く直時。何か変なことを言っただろうか？

「聞いたか？ 普人族だぞ？ 普人族がこんなこと言うか？」

笑い過ぎて涙目になったヒルダが、他の面々を見回して言う。実に楽しそうだ。

「それがタツチイーの良いところニヤ」

「あれ？ ミケちゃん、いつもの調子？」

「なんか気負ったのが馬鹿らしくなったのニヤ。ファイアちゃんもやっぱりそれが理由かニヤ？」

「まあね。馬鹿だけどね。それだけに面白いじゃない？」

ヒルダは未だに笑っているし、ミケとファイアは二人で納得し合っている。直時の頭上には見えない疑問符が大量に浮かんでいた。

このような考え方は、普人族以外の種族にこそ顕著であった。個人主義と言っても良いだろう。個体の能力が突出したが故であった。直時も、この世界において特殊な力を持つということ、依存できる共同体に属していないことで似た思考となっていたのだろう。

彼が大量の魔力や精霊術といった能力を獲得していなかったなら、また別の生き方を選ばざるを得なかったかもしれないが。

「ヒビノ殿は今後どうなさるおつもりですか？」

和やかなファイア、ミケ、ヒルダとは対照的に真剣な眼差しのだ。3人の陽気さに水を差すのも憚はばられた直時は、手招きして耳元に囁く。

「できれば明日の夜。最低でも3日以内にここを発つ。君達を慰めることも癒すことも出来ないが、生き残れたことを僥倖うわいせうとして明日の幸せを願っている。姉として大変だろうが、妹さんを大切にな。

ここまで運んでくれたことで、全てはチャラだ。むしろ礼を言わねばならんかもな。有難う」

実質別れの言葉である。リナレス姉妹には正直迷惑しか被^{かぶ}っていないが、全ては過ぎたことだ。ミケに自分の情報を話してしまったことにも、既にわだかまりはない。

仮に彼女等がうつかり逃亡先を喋ってしまったても、交流の無い遠い他国なら動きはかなり制限されるだろう。むしろ、追跡を諦める材料になるかもしれない。それでも追手があるなら危険度を計る指標になるだろう。

(甘いかもしれないけど、マイナス要素を抑制するより利用する方が楽だな)

直時は餞別代りとして、自分の情報をミケやリナレス姉妹に売らせることも考えていた。対価としていくらか分け前をもらえれば、当座の旅費もそこから捻出できそうだ。

(その辺の裏交渉はミケさんに任すか…。各国諜報部から巻き上げた情報料は皆で頭割りして……)

「ミケさん。俺の情報に値段付くかな？潜伏場所とか、行き先とか」

「不確定な情報なら買い叩かれます。実物を見せれば別ですが。例えばタダトキさんがある店に出入りしている。そこへ案内して、確認を取らせる。これなら相応の値段が付くでしょう。」

「ヒビノ、何を企んでるの？」

「俺は今、文無しだからね。逃亡資金を稼ぎたい。こっそり逃げるのも癪だし、手伝ってもらえるかな？俺から皆への依頼だ」

直時はニヤリと笑いかけた。

交易都市ロツソ（後書き）

折角の交易都市ですが、宿屋に缶詰の直時。
次話で悪巧みを実行予定です。

交易都市ロッシン？（前書き）

悪巧み実行前です。

交易都市ロツソ？

フィアは久し振りに街の見物を満喫していた。今までの野暮ったいフードは脱ぎ捨て、街用の身軽な服装である。

襟と袖に刺繍が施された、白い七分袖のブラウス。細い胴を際立たせる、体に密着した驚色のベスト。下は旅用ではあるものの、膝下までの皮のスカートで、履物はいつもの膝まであるブーツだ。軽やかに通りを歩く姿は、まさに風の妖精と言えた。

魔石を加工した装身具や、珍しい果実を調理した冷菓子、港町特有の海の幸の屋台を物珍しそうに覗いて歩く。柔らかい微笑は、それを眼にした者を男女問わず釘付けにし、彼女が去ったあとで囁かれるのは、『晴嵐の魔女』の美しさであった。

休憩にと入った喫茶店で、注文した香茶を一口飲んだところで、フィアに歩み寄る人物があった。

「フィリスティア様ですね。はじめまして」
話しかけてきたのは、柔らかな表情の中、眼だけが笑っていない女性だった。

白髪紅瞳の竜人族、ヒルデガルド・ノイツ・ミューリッツは、戦装束である黒竜の鱗鎧を身に付け、黒剣の鞘紐を肩に引つ掛けながら大通りを歩いていた。目指すは冒険者ギルドロツソ支部である。直時からの目立つ格好で！との要請から選んだ装備であったが、

彼女の威圧感と相まって道行く人々は慌てて彼女の進路から身を避ける。周囲から漏れる畏怖の声は『黒剣の竜姫』。ヒルダは気にする風もなく、威風堂々と歩みを進める。

ギルド会館へと足を踏み入れたヒルダは、受付へと向かった。

「リスタル支部で受けた依頼があるのだが、達成後リスタルは戦闘に巻き込まれた。報酬がどうなったのかを知りたい。もしくは、Pリーダーであったガラム・ガーリヤと連絡が取れるならお願いしたい」

ヒルダが冒険者カードを取り出し、魔力を込めて確認を求める。

「ヒルデガルド・ノインツ・ミューリッツ様。確認しました。少々お待ち下さい」

受付嬢が、少し奥で遠話をはじめ。それを待つヒルダの背後から声が掛かった。

「やあ！ちよつと振りだねえ」

金髪碧眼の優男が笑っている。カール帝国宮廷魔術師、リシュナンテ・バイトリだった。

「貴様には聞きたいことがある。小腹が減っていたところだ。夕飯でも御馳走してもらおうか」

ヒルダは近くの食堂へと誘った。

フィアやヒルダが、名声を餌に標的を釣り上げている頃、ミケは人脈による意図的な情報漏洩により、シークス公国軍情報部との接触に成功していた。

冒険者ギルド、リスタル支部局長のエドモンド・オルグレンは、直時の情報漏洩に難色を示したものの、ミケと親交のあるカタリナ・ベルティの説得により、シイス公国軍部に影響のある貴族へ、直時のロツソでの目撃談を噂話として聞かせた。

その際、現地での目撃者のことをそれとなく伝えたようである。

酔うには少し早い時間。場末のうらびれた酒場に、フードで顔を隠し闇の精霊で気配を極限まで消したミケが、壮年の男と背中合わせになりそれぞれ杯を手にぼそぼそと会話を交わしていた。

「フィアとヒルダさんに続いて、ミケさんも目標との接触成功」
直時は次々と入る遠話を、傍らのリナレス姉妹に判るように報告する。

直時は目覚めた宿屋から一步も出ず、遠話報告の中継に徹していた。リナレス姉妹は、デリケートな作戦に不向きであるとの判断から、直時の護衛を仰せつかっていた。体の良い留守番である。

直時自身は、早々に呼吸法による『気』の還流で魔力を補充。油断さえなければ、いつでも戦闘をこなせるようになっていた。ただし、流失した血液と共に体力が、長期間の寝たきりにより筋力が、共に低下していたのは事実であるためリナレス姉妹の護衛は、そこそこの必要な措置であった。

「ヒルダさんにはカールが接触。ミケさんも狙い通りシイスが釣れたみたいだ。フィアの相手はまだ判らないけど、動きの早さから当事国の3カ国どれかだろうな。もしかしたらマケディウスかもしれないけど……」

直時の報告と予想に真剣に耳を傾けるリナレス姉妹。普人族と云われてからも、傍から離れない胆力は大したものである。

直時としては、意識して不憫な経験に触れないようにしているため、正直いたたまれない。何かあれば大声で報せると言っても、護衛すると言つて聞かない。せめて、リナは部屋で休ませてはどうか？との提案は、リナが強固に拒否したため受け入れてもらえなかった。

「俺達もそろそろ夕食にしないか？」

各国の諜報員と渡り合う3人の順調な報告に、待つ方が疲れては意味が無い。あくまでも身を隠す直時を置いて、リナレス姉妹は注文しておいた料理を取りに厨房へ出向く。

テーブルを飾るのは海産物のごった煮と、飾り気のない具の無い麵の炒め物。南国系と思われる甘い芳香の果実だった。直時にはこれに加えて例の麦粥病人食が添えられていた。

「体調良いから、晩酌を…」

「駄目です！」

「駄目」

お酒を所望した直時だったが、リナレス姉妹には素気無く却下されてしまった。

「いやー。ここまでこっちの思う通りに引つかかってくれるなんて、各国の情報部もたいしたことないねえー。俺がとんずらする時には皆にも対価を払えそうぞで安心したよー」

和気藹々というには遠く、それでも場を和ますように気を使う直

時。

「ヒビノ殿は何故そんなに周囲を気になさるのですか？ ご自分のことを第一に考えられてはいかがですか？」

ダナは直時の軽口を無視するように問う。真剣そのものだ。

「そんなに難しく考えることじゃないと思うがなあ。皆で辛い思いをするより、皆で幸せを分け合う方が良いと思わないか？」

苦笑しながらダナに答える。

「うちの故郷の言葉に、和を持って尊ぶとすべしとか、仲良きことは美しき哉とか、皆で幸せになろうよとかあるんだよ。群れ集う普人族としちゃ、当然の感覚じゃないか？」

「ヒビノ殿の『皆』に我等が入っていることが不思議なのです。何故ですか？」

軽く済まそうとする直時に、なおも食い下がるダナ。

「いい加減『殿』扱いは止めて欲しいんだけどな…。まあ、知つての通り俺は国持ちじゃない流れ者だ。なら、親しくなった相手が身内扱いというのはおかしくないだろ？」

「…私達も身内なのですか？」

ラナが不思議そうに問いかける。

「俺は知り合いが少ないからな。ラナも大事な仲間だと思っているよっ。」

直時が知人と認識できる人達は少ない。友人と言うには相手の同意も必要だし、知人と言うべきだろうが、同じ戦場を駆け回ったのだから仲間と言っても差支えなかるう。

耳をピヨコンと動かしたラナは、俯いて食事を続ける。ミケより

も小振りなその耳をあらためて見た直時は嬉しそうに言う。

「しかし…。ちゃんと繋がって良かったよ。耳と尻尾。ヴァロアの奴等はそれだけでも万死に値する！ あいつらに赤い血が通っているのが不思議だ！」

個人的な見解で憤慨する直時。ビクリと身を強張らせるラナ。嫌なことを思い出したのだろうか。

「あああああああああ！ ごめん！ ごめんよ！ 俺が馬鹿だった…」

ラナの様子に自分の失言に気付いた直時が頭を下げる。

「いえそのっ！ ヒビノ…。タダトキさんに悪意がないのは判つてます。頭を上げて下さい」

ラナが慌てて言う。ダナはその様子に何か考え込んでいるようだ。

夕食を終えた頃、諜報員との接触を終えた3人が装いを改めて集まって来た。もちろん尾行は置き去りにしてある。

「リッテには私達を謀ったことたばかを含めて吹っ掛けた。ヒビノを確認できれば、金貨30枚だと豪語していたぞ」

「シーイスも必死だニヤ。先の戦での支援と戦闘で、タッチイーへのリスタル住民の人氣は絶大ニヤ。噂も尾ひれ背びれが付いてえらいことになってるニヤ。所在確定なら金貨50とのことニヤ」

「私の相手はヴァロアだったわ。指示通り、ヒビノが怒っていると伝えておいた。青い顔して譲歩案を早急に出すって言うってたわ」

三者とも成果は上々のようである。

「ここはあれだ。前祝いとして祝杯をあげるべきではないだろうか？」

晩酌を止められてしまった直時が、酒乱の魔女を味方につけようと画策する。

リナレス姉妹が睨んでいるが、ファイアがいれば100万の援軍を得たも同じである。だいたい病み上がり酒を飲ませるくらいだ。案の定喰いついてくる。

「良いわね！ ヒビノが眼を覚ましたことだし、パーっと飲みましよう！」

「なら、俺の荷物の中に良いモノが…」

「それならもう飲んだわよ？」

「うむ。美味であった」

荷物の中から、ノーシユタットで購入した蒸留酒の酒樽を探そうとした直時の動きが止まる。

「今、何と？」

「美味しく頂きました」

まだ少ししか楽しんでいなかった美酒は、二人の魔女に飲み干されてしまっていた。

「一応止めたニヤ」

「ミケちゃんも飲んだじゃないの！」

「そもそも酒樽の存在を教えたのはミケだったな」
したり顔のミケに、ファイアとヒルダが突っ込む。

直時が恨みがましく、涙目でミケに顔を向けた。

「タッチーは病み上がりだから、強いお酒は体に毒ニヤ！ 今日はおとなしく麦酒と果実酒で我慢するニヤ！ うちの奢り！ ダナちゃん、ラナちゃん、厨房へ行くニヤーッ！」

ミケはリナレス姉妹を引き連れて扉の向こうへと逃げた。

その後は酒が入りつつも、話の中心は今後の予定であった。

「まあ、ヴァロアの動き次第かなあ。明日中になんとかなれば良いけど、駄目なら逃亡を優先するべきだろうな」

欲をかくべきでないと判断する直時。本来なら一矢報いてから去りたいところだ。

「明日、午前中に再度の接触を約束してるから、それで判断するしかないわね」

「相手に考える時間を与えたくないし、交渉が成立するなら直ぐにでも会うつて言うておいて。その際、詫びを形で表せとの念押しも頼む。シーイスとカールは明日でも大丈夫？」

直時の確認にミケとヒルダが頷く。

「それじゃ、明日決行ということだ！ ダナちゃんとラナちゃんはミケさんに同行してね。ヒルダさんはリシュナンの押さえを宜しく！ フィアは、ヴァロアが手間取るようなら切つて良いよ。あと、俺の取り分は予め決めた所で受け渡しお願い。ちゃんと等分に頭割りしてね」

「ヒビノは明日発つ。と、いうことだな」

ヒルダが再確認する。肯定を返す直時。

「最期まで皆には世話になったね。明日の作戦が成功したら、少しでも恩を返せると思う。今まで有難う」

寂しげではあるが、満足感も共にある。直時は満ち足りた様子で皆に頭を下げた。

「ヒビノ殿！ 出立される前にお礼をさせていただきたいのです！」

突然のダナの声に皆が注目する。

「我等姉妹の命を2度も助けていただいた御恩、少しでも返させて
いただきたい！」

「いやいやいや。意識不明の俺を運んでもらったし、眼が覚めるま
で面倒みてもらったし、それでチャラだよ」

「それはここにおられる方々があつてこそです。私達は何も御恩を
返せていません」

なんとか穩便に出立したかつた直時に、真剣な眼差しで詰め寄る
ダナ。

「かといって私達に財産はありません。僭越せんえつではありますが、この
体をご自由にしていただきたい」

「ちよつ！」

突然の申し出に直時の頭が真つ白になる。ホワイトアウトした意
識をすぐさま取り戻し、慌てふためいてダナを落ち着かせようとす
る。

「うら若い女性が簡単にそんなこと言うものじゃない。世話しても
らつてたのは事実だし、俺はそれを充分有難く思っている。無防備
な自分を守ってくれてたつてことは、命を救つたのと釣り合うこと
だと思つよ？」

「いいえ。それも方々（かたがた）の支援あつてこそ。我等姉妹の
為したことなど…。ヒビノ殿も先立つておっしゃられました。これ
は正当な対価です。それとも私達の命はそれほど価値がないと言わ
れますか？」

直時の言葉は、直情傾向にあるダナへ火に油を注いだようである。
ここはダナの泣き所、ラナを盾にするしかない。

「あんなことがあつたばかりだ。俺は普人族だよ？ そんなことよ

り、ラナちゃんのことを大事にしてくれ。俺としてはその方が嬉しい」

「…実は妹のこともあるのです。私は冒険者として独り立ちした後、今回の様な嫌な経験も積みました。しかし、妹はこれが初めてだったのです」

（感情が麻痺してた俺が言うことでもないだろうが、事後のダナの冷静さはそういうことか…）

敵とはいえ人を殺戮した直時は、彼女等が受けた仕打ちに対し、自分の殺意を叩きつけることしかできなかった。その後、意識して行動指示のみを伝えた。傷付いた彼女等に対して、どう慮おもんばかれはいいか判らなかつたのもある。

「その…、ヒビノ殿であれば、妹の心の傷を癒す相手としてふさわしいのではないのかとの迷惑もあり…。無論妹に強要はしません！ 相手は私がさせていただきますが、その、妹を同席させていただければ…」

「あんだ、何言ってるの？」

それまで呆気にとられていた一同を代表してファイアが言う。

「ラナちゃんの様子見てみなさい！ それでもお姉ちゃんなの！」
確かにラナは身を強張らせて震えている。

「冒険者として戦いに身を置いたなら、これは乗り越えるべきことです。そしてその機会が今ある。恩を返すというだけではありません。私としても妹としてもこれは好機なのです」

ダナの思い込みと突っ走り様は直時以上のものである。何かを言おうとしたファイアであるが、それを遮ったダナは直時の右手を取った。

「これが根拠です」

後ろを向いて直時の手を尻の方へ引つ張る。こんなところだと、慌てる直時の掌に温かいものが押し付けられる。

「ダナの尻尾だった。」

一瞬の驚きの後、直時の顔は笑み崩れた。さわさわと巻きついては撫でるように纏わりつく豹人族の尾。艶やかな毛並みと、意外と力強いその感触に陶然としてしまう。

（なんとという肌触り！ 撫でたい！ 撫でまくりたい！ しかし、ここでそんなことすればセクハラもいいところ……。くう！ なんとという攻撃だ！）

直時の隠しきれない喜び様に、フィアは不機嫌に、ミケは興味深そうに、ヒルダは笑いを堪えるようにしている。

（ぬあああ！ 触りたい！ 頬ずりしたい！ なんだっ？ 拷問かっ？ 拷問なのかっ？）

声も無く身悶えする直時の様子を確認したダナが言葉を続ける。

「ヒビノ殿は、普人族が忌み嫌う獣人族の特徴を好いておられます」
少し頬を赤らめながらそう言った。

「あっはっはっはははははっ！」

ヒルダが吹き出す。フィアは相変わらず不機嫌そうだ。

「喫茶室でタッチーがうちのお尻見てたと思ってたけど、実は尻尾だったのかニヤ？」

面白そうに直時の前にお尻を突き出したミケが、短めの尾をフリフリとしてみせる。

それが直時への最終攻撃となった。鼻を押さえ出血を押さえたものの、嘔き出せなかったリビドーがどこかで逆流したらしい。真っ赤になって寝具の上にひっくり返ったのであった。

直時が再び眼を覚めたのは、夜が更け皆が寝静まる頃だった。出迎えたのは誰ひとり欠ける事のない面々で、意識が無い間にどういった話し合いが行われたのか、部屋には直時とリナレス姉妹を残して、意味ありげな視線を流しつつ退室するフィア、ヒルダ、ミケだった。

「……最後に聞くけど本気？ 俺って結構工口いよ？」

「うっ！ か、覚悟は出来ています！」

「わた、私も！」

最期通牒をダナに突きつけるが、観客設定のラナまでもがにじり寄ってくる。

「じゃあ、二人とも並んでベッドに腰掛けて…。そう。じゃあいくよ？」

ベッドから離れていた直時は、固い表情のリナレス姉妹に近寄って、左右の掌をそれぞれの頬へと伸ばし、顔を近付けた。

何故か部屋のすぐ外で待っていたフィア、ミケ、ヒルダは予想を上回る早さで扉を開けた直時の姿に驚いた。10分と経っていない。

「…ヒビノよ。雄^{オス}としてこんなに早いのはどうかと思っぞ？」

「どうせ逃げたんじゃないの？」

ヒルダの酷評や、フィアの嘲笑にも拘わらず直時は満面の笑みである。それは何かをやり遂げた満足感に満ち溢れていた。

ミケが確認した部屋の中には、荒い息を吐きながら顔を赤らめているリナレス姉妹がいた。ただし着衣に乱れは全くない。

「何があつたニヤ？」

流石のミケも状況が飲み込めず、二人へ問い質す。

「…弄ばれました」

息も絶え絶えでダナが答える。

「耳と尻尾を…。撫でまくられ、頬ずりされ、あまつさえ軽く噛み噛みされてしまいました」

なんとか報告するダナの横で、ラナが小指を口に含んでいる。

「我が生涯に一片の悔い無しっ！」

小さくも力強い呟きが、直時の口から聞こえた。

交易都市ロツソ？（後書き）

肉欲より魂的な欲を採った直時でした。

交易都市ロツソ？（前書き）

間が開いてしまいました……

交易都市ロツソ？

マケデイウス王国、交易都市『ロツソ』。ユーレリア大陸西部で最大の交易都市である。南方に位置しながらも良港を備え、多国の商船が出入りし、遙か北の産物も流通している。

日の暮れた後も活気に満ちた街は、魔術の灯りに照らされて未だ生き生きとしていた。

通りを歩く半分が酒精に身を任せ、残り半数が商いを続けている。その中を縫うように歩く小柄な人影があった。

野暮つたいフード付きローブで顔を隠し、大きな荷を背負い、杖代わりなのか槍の石突きで地面を押しながら歩いている。港町故、体格の良い男達に紛れるとその細い体は子供のようにも、女性のようにも見受けられた。

「邪魔だぞお。ちびい」

からかってやるうと思ったのか、すれ違いざまに肩をぶつけようとした酔っ払いがいた。

「おつととつ！」

姿勢を崩した男は、酔いも手伝って地面にひっくり返る。俯き加減な小さな影は、触れる寸前に身を躲し、倒れた男を無視したまま人波へ消えていった。

人影は大通りから外れ、迷うことなく暗い路地を進む。人目が途絶えた時点で闇の精霊により気配を消し、路地裏にで手ぐすねを引く犯罪者達を素通りして目的地へと到着した。

『磯の波頭亭』。年季の入った分厚い扉を肩で押すと、中には麦酒の杯を片手にやる気が無さそうな女性が、独りでカードを捲めくっては並べていた。占い遊びだろうか？

人影が受付前に立っても、時折ちびりと麦酒を飲むだけでカードを並べている。気付かれないのは、闇の精霊のせいだと漸やっく気付き、気配を露わにして声を掛ける。

「宿泊を頼みたい。1人で3日間だ」

小柄な人影は、間違はなく男性の声だった。受付の女性は少し驚いたものの、判銀貨1枚と銀貨1枚を前料金で要求する。怪しげな客には慣れているようだ。

「コソ泥が来たら教えてくれ」

宿賃以外に銀貨1枚をカウンターへと置く。

「上がって右側3つ目の部屋だよ」

正規の宿代は抽斗ひきだしに、銀貨1枚は懐へ納めた受付女性は鍵を差し出す。頷いた人影は大きな荷物に姿を隠しながら狭い階段へと向かった。

部屋に入り鍵を掛け、闇の精霊に扉の封印を頼んだ人影は、大きく息を吐いて被ったフードを脱いだ。その顔の上半分には包帯が巻かれていたが、それも取ってしまう。

(こちらタダトキ。今、宿に着いた)

念話でフィアとミケに連絡を取る。宿を移動した直時だった。

宿を移したのは事前の計画通りであったが、本来なら直接会話で済ます用事があった。しかし、リナレス姉妹を散々弄んだ後、なおもヒルダが居座ったため、ファイア、ミケとの話し合いが出来なかった。宿移動の後の、念話による話し合いとなったのである。

(ファイアよ。魔法陣の話ね?)

(そう。話し合える機会はこれが最後になるだろうから、どうしても済ませておきたかったんだ)

(慌ただしかつたから、まだ冒険者ギルドへ報告も提案もしてないのニヤ)

(ミケさん。『岩盾』^{がんじゅん}は他の冒険者には?)

(町中での戦闘だったから教えてないニヤ)

人魔術の魔法陣は、制御すれば術を発動させずに維持できる。魔術の発展に大いに寄与するだろうが、世を混乱させ得る情報であるということ。それが未だ他に漏れていないことを確認した直時。少し考えた後、二人へと念話を続けた。

(二人にはもう教えた後だから、魔法陣の情報についてはどう扱ってもらっても構わない。必要に迫られる場合もあるかと思うしな)
(で、ヒビノはどうしたいの?)

(俺の都合で言えば、この情報が洩れようが漏れまいが既にお尋ね者扱いになつたし、急いで広めようって気は無くなった。ある程度改造魔術を揃えてから考えたいと思っている)

(魔法陣の維持っていう秘密は重視してないの?)

(まだ誰も気付いてない今なら価値がある情報かもしれないが、二人とも簡単なことだと判つただろ? そのうち誰かが思い付くさ。人魔術が普人族発祥なら、発見するのは当然普人族だろうな。それと万ーリナレス姉妹が口を滑らせても、俺は逃亡済みだ)

(それはちよつと困るニヤ。これ以上普人族に力を持ってもらいた

くは無(いニヤール)

フィアもミケもこの情報の扱いに消極的であるが、放置して良いとも思っていない。念話の調子にも苦悩が滲んでいる。

(この技術が判明して、ある国が戦役に使用したとする。人魔術の種類が増えて戦術に幅ができるだろうけど、火力としてはそれほど脅威にならないんじゃないかな？ ばれれば普人族以外に、高度な人魔術開発を引き起こすというデメリットが生じる。そして、情報収集に関しては世界規模の連絡網を持っているギルドに敵う国は無(い))

直時は、普人族の魔力の少なさ故に、限定された威力の人魔術しか開発できないだろうこと。戦争に使用することにより、その技術は既知となり広まること。普人族以外の魔力なら、普人族が扱えない高度な人魔術の開発、使用が可能なこと。そして何より、ギルドがその情報を見逃さないであろうことを示唆した。

フィアとミケが考え込む気配が、念話を通じて直時に感じられた。

(ここまでは俺が勝手に判断してることだ。あまり深く考えないで俺としては、魔法陣のことはギルドとの取引としては考えてない。何かあったときに對抗する人魔術を開発して、その提供を取引材料にしようと思ってる。勿論、フィアもミケさんも、術の開発は独自にしてもらって構わない。まあ、そういうこと)

長命種であり、高名な冒険者であるフィア。ギルド付き冒険者として活動するミケ。その二人が慎重になる情報であるならば、直時が迂闊(うがっ)に扱わない方が良さだろうと判断は任せることにした。

ただ、いざという時のために、威力の大きな攻撃魔術と、堅固な防御魔術の開発はしておくつもりだった。

(私はこの発見、まだ広めるつもりはない。但し、普人族に使えない魔術開発には賛成ね。ヒビノと同じく独自開発はしておく)

(うちは各国の情勢によつてはギルドへ報告するニヤ。他種族迫害が酷い普人国家の版図内に住む者には、魔法陣の件は伏せて新しい人魔術を提供することもあるかもしれないニヤ)

フィアとミケ、それぞれの答えに何の文句も無い直時は了承した。

(じゃあ、明日は宜しく！ おやすみ！)

返事を待つて念話を終了する。

「いよいよ明日か…。寂しくなるなあ」

呟いた直時は、下着姿になり固い寝床へと潜り込む。その夜もやはり、戦場の悪夢を見た。

翌朝、直時は荷物を宿に置いたまま外出した。フードで顔を隠してはいるが、包帯は巻いていない。

路地裏の宿屋から大通りへと歩き、冒険者ギルドロッソ支部の近くで再度路地裏へと入る。流行つていなさそうな食堂の扉をくぐつて、一番奥の席へと腰を下ろした。

店主ひとりで切り盛りしているのだろう。カウンターから注文を聞かれた直時は、パンと香茶、適当な卵料理と果物を頼む。『探知強化』で鋭敏化した感覚に3方向から視線が感じられるが、泰然としたまま注文を待つ。

オーダーした品を盆ごと置いた店主へ、数枚の硬貨を渡して勘定を済ませる。朝食を眼の前にした直時は、頭を覆っていたフードを除けた。

「黒髪！ 確かに報告通りの容姿です！」

直時の入った食堂の向かいの喫茶店。そこには興奮を隠せないヴァロア情報部の女性と、澄ました様子で香茶を口にするフィアの姿があった。

「で？ どうする？」

「上司が待つております。フィリスティア様には交渉時是非とも同席して、御口添えを頂きたいと……」

「私は構わないけど、ヴァロアに対するヒビノの心証悪いわよ？」

「無論、ヒビノ殿には充分なお詫びを御用意しているとのことですが、フィリスティア様には御手数をお掛けします。そのお礼も誠心誠意御用意しております」

「ふーん。じゃあ、出てきたら声掛けるからそっちの用意は頼んだわよ」

「はいっ。有難うございます！」

（上役を引つ張りだせそうよ。シイスとカールの方は宜しく）
つまらなさそうな表情を崩さず、他のメンバーへと念話を送るフィア。その視線は半熟卵を頬張る直時へと向けられた。

「顔が見えませんが？」

フードを被った人物を顎で示したヒルダにリシュナンテが告げる。二人がいるのはフィアいる喫茶店から死角に位置する路地の角だ。

「竜人族の感覚に間違いはない。あれはヒビノだ。何日か前もこの辺で見た。お前達がギルド会館を見張っているせいでこの辺りをうるうるしていたぞ」

ヒルダの皮肉気な笑いがリツテに向けられる。苦笑する優男の顔が鋭くなった。注目していた人物がフードを外したのだ。

「間違いないようですね。彼です」

「ならとつと報酬を超越せ。私は買いたいものがある」

「彼に興味があったのでは？」

「リスタルでは活躍もしたが、醜態も晒していたしな。所詮は戦の素人だった。もう興味は失せた」

「それは重畳。彼を誘うに障害は少ない方が良いでしょう」

リシュナンテが金貨の入った革袋を手渡す。小さく鼻で笑ったヒルダは、中身を確認めせずその場から離れた。カールを代表するリシュナンテに『黒剣の竜姫』を謀るつもりは微塵もなく、当然の反応であった。

(ヒルダだ。報酬はせしめた。リシュナンテは放置して離脱する)

直時が入った食堂に、先行待機していたのはミケとリナレス姉妹であった。ミケはフードと闇の精霊で顔を隠しているが、4人テーブルの向かいに座るリナレス姉妹は素顔である。

ミケと背中合わせで隣のテーブルに座るのは、シース情報部の者であった。

「そちらのお嬢さん方は？」

「私の護衛だ。それと件の精霊術師のファンでもある」

どちらも微かに聞き取れる程度の囁きだ。リナレス姉妹には、不用意に喋るなど伝えてある。

ミケとしては、リスタル撤退戦で公式に参戦したこの姉妹が、直時が素顔を見せた際の反応を男に見せることで信用度が増すとして同行させたのだった。

「彼だ」

少し離れたところに座った人物を男に報せる。

朝食を食べるのに邪魔になったのだらう。フードを外した顔を確認したシーイス情報部の男は後ろ手にミケへ報酬を渡す。

「あまり注目してくれるなよ」

リナレス姉妹の眼が釘付けになっているのに苦笑しながら男は席を立つ。尾行の増員をし、接触の機会を計るためだ。

「私達はお茶を楽しんでいく。成功を祈る」

振り向くこともせず出て行く男へ囁くミケ。

(ミケより。報酬は手に入れた。シーイスは人員増強する模様)

男と直時へ視線を彷徨わせる姉妹を抑えたミケは、残りの茶を悠然と口にした。

食事を終え、食堂を後にした直時の背後から声が掛けられた。

「フィアか。ちょっと振りだね」

「まあね。元気？」

フィアの斜め後ろには、初対面である女性が従っている。服装こそ街娘と変わらないが、その眼に宿る色が違う。愛想笑いに隠れて相手を値踏みするような冷静な眼。日本での生活に置いて、激戦の営業に身を置く女性に似た眼だった。条件反射的に作り笑顔を表した直時が、フィアに紹介を請い、彼女が名乗る。

「初めまして。フィリスティア様の御紹介に与りましたヴァロア王国の」

ヴァロアの名が出た時点で表情を険しくした直時の周囲に風が集まる。突然放たれた風の刃はフィアの風に弾かれ、背後の壁に深い切れ目を穿^{うが}った。

(やりすぎよ！)

(ちよつとした牽制だよ。これぐらいは当然だろ?)

打ち合わせ通りであるが、演技では済まない攻撃の鋭さに文句を言うフィア。背後の女性は青褪^{あせ}めている。

「敵対してた国の者が何の用だ？」

「まあまあ。私の顔を立てて、ちよつとは話を聞いてよ」

「……少しだけならね」

直時は、とりあえず見せかけの殺気を押さえた。

必死の面持ちでヴァロアの女性に案内されたのは、すぐ近くの大きな宿屋であった。店構えから、高級旅館と呼ぶべきだろう。

大通りを歩く間、フードを被るように言われていたがもう遅い。

直時への尾行は何重にもなされ、先駆けて接触したヴァロアに対して各国は殺気立っていた。

それでも他国の街の中心地。騒ぎを起こすことは控えたようので、襲撃はなかった。

5階建ての最上階、その半分を占める貴賓室の重厚な扉の前で、一行は立ち止まった。遠話で連絡を取っていたのだろう。待たされることなく開いた扉から部屋へと入る。

(室内には6人。それと子供2人。今度は油断しちや駄目よ)

気付かれない様に探查の風を飛ばしたフィアが、直時に注意を促す。腹部に幻の痛みを感じ、微かに眉を顰^{ひそ}めた直時は、了解と念話で返す。

「ようこそいらつしやいました！ 『晴嵐の魔女』 フィリスティア様。タダトキ・ヒビノ様」

二人を出迎えたのは妙齡の女性であつた。

両掌を軽く向けて歓迎の意を表した女性。歳の頃は20代後半に見えるが、その落ちつき様からもつと上かもしれない。緩く波打つた緋色の髪は、纏め上げて白金の髪飾りで留められている。瞳の色は深い藍。直時を見る興味深そうな眼に、冷静さが感じられた。

「私は『ジルベルト・クレマン』と申します。ヴァロア王室第2侍女室に身を置いております。ロツソでは、商いをしながら我が国の者の取りまとめのようなことをしております」

自己紹介をして軽く頭を下げるジルベルト。ゆったりとした臙脂色の夜会服は、背中と胸元を大胆に露出させ、少し屈んただけで中身が見えてしまいそうだ。

直時との交渉に美しい女性を選んだのも、敵愾心を和らげ、まずは心証を良くするためだろう。自然と胸元に吸い込まれる直時の視線を感じ、俯いた顔に微かな笑いが浮かぶ。

（鼻の下が伸びてるわよ？）

（判つてて見てる。油断を誘っているんだよ。でもまあ、精々買いかねないようにはしないとな）

フィアと無言でのやりとりを交わしつつ、室内を確認する。

ジルベルトと名乗つた女性の他に男が5人。1人は扉を開けた執事風の壮年の男。外見から武器は見えない。扉の左右には儀礼用の軍服に胸甲を付け、室内のためか短槍を右手に突いている青年兵。同様の格好の護衛が大きな窓の両脇に控えている。

子供は従兵と同じく12、3歳ぐらい。但し女の子で、茶器を乗せたカートの傍にいる。黒い侍女服の上にエプロンスカート、頭にはレースの付いたカチューシャをしている。

姿を隠している者はいないようだ。強化した知覚にも感じられない。

「こちらの自己紹介は不要のようだな。用件を聞こう」

護衛達を一瞥した直時は、努めて固い声を出す。

「御気分を害してしまつたようで申し訳ございません。元より貴方様方に敵う者共ではありません。しかしながら物騒な御時世ですし、弱い女の浅慮と見逃してはいただけないでしょうか？」

薄い笑みを浮かべたままジルベルトがソファを勧める。一呼吸して、示された席に腰を下ろす。

二人が腰を落ちつけた後、ジルベルトは直時の正面に座った。侍女達が茶の用意をはじめ。目の前に注がれた香茶には手をつけず、相手の言葉を待つ直時。

「ロツソには珍しい品が入ってきます。この葉もそうです。どうぞ御賞味下さい」

「ロツソに攻め込もうとしていた者の台詞とは思えないな。物騒な御時世だ。何が入っているか判らんな。遠慮させてもらおう」

「それは残念。フィリスティア様はいかがですか？」

「私も結構よ。お酒ならもらったけどね」

二人の拒絶にも表情を変えず、ジルベルトは執事に眼で合図する。

「リスタルでの、フィリスティア様、ヒビノ様へのヴァロア軍の攻撃。誠に申し訳ございませんでした。御無礼の段、深くお詫び申し上げます」

両手を祈るように組んで、深く頭を下げる。組んだ手が胸元を押

さえることになり、直時の淡い期待は達せられなかった。自然な仕種の中にも計算された動きに、したたかさを感じる。

(上手く隠すもんだな)

念話ではなく心の中の声であったが、察したファイアが横目で睨んでいた、

ジルベルトのお詫びにも沈黙している二人の前に、執事が別室から運んできた包みを静かに置いた。光沢のある臙脂色の布は、ジルベルトの夜会服と同じ布地のようだ。

「我等が出来る精一杯のお詫びでございます。これで先の戦での無礼を御寛恕ごかんじよいただけられないでしょうか？」

上目遣いの表情は哀れみを請うように、涙が滲んでいるように見える。

「とりあえず確認してみれば？」

ファイアがそう言って、自分の前の包みに手をかける。頷いた直時も包みを開く。

現れた品を眼にした直時は、知らず知らずに感嘆の声を上げてしまふ。ジルベルトの顔に余裕が生まれた。

金の塊、金のインゴット、所謂金の延べ棒いわけぼうが燦然とした輝きを放っていた。

「お気に召していただけましたでしょうか？」

直時の様子から『落ちた』と判断したのdarou。薄い笑みが浮かんでいる。

(ファイア。これで金貨何枚分?)
(マケディウスの刻印があるわね。一番信用がある刻印よ。本物なら金貨100枚。ちょっとそっちの貸してくれる? 無言で渡してね)

直時は念話を悟られないように、一度金塊を手にとって重さを確かめるようにして間を置く。右手にズシリとした感触。それをファイアへと差し出す。

受け取った直時の金塊と自分の金塊を打ち合わせるファイア。金属とは思えないくぐもった音が響き、眼を閉じて耳を澄ませる。音の余韻が去った後、ゆっくりと眼を開く。

「本物ね。普人族の国が個人に支払うなら破格よ? どうする?」

「ふんつ。俺の命は片手の重みか…。安いもんだな」

ここでゴネるのはシナリオ通りである。相手が下手に出ているなら高圧的であるべきだ。

「それではっ! ヒビノ様の御怒りを収めていただくにはどうすれば良いのでしょうか?」

「それを考えるのはそっちだ。ヴァロアが俺のことをどう考えているか、そこるところを見える形で教えて欲しいものだな」

「……承知致しました」

俯いたジルベルトはすぐさま顔を上げ、執事に指示する。

「全部よ」

「しかし、お嬢様!」

初めて声を上げる執事に強い視線を返すジルベルト。一礼した執事は再度隣室へと消える。

執事が運んできたのは、同様の金塊が3本だった。

「わがクレマン商會がロツソで培つてきた全てです。私は国に帰ることになるでしょうが、これでヴァロア王国に対してヒビノ様のお許しが得られるならば本望です」

悲しげな微笑。その瞳から一筋の涙が溢れる。

（大したものだ。俺たちに身分を明かしたことで、本国に帰るのは既定事項だろうにな）

直時の念話に苦笑のニュアンスだけを返すフィア。演技を見抜けず情に流されると思つていたようだ。

（落とし所かな？）

（そうね。妥当じゃない？）

フィアとの念話による密談で仕上げに入直時。

「そこまで買つてくれるのなら、水に流すのも吝かちかではないな。いや、正直お国に興味が湧いたよ。貴女にもね。これでお別れとは名残惜しいが、この後自分にお国の御自慢を聞かせてくれるのは誰だろうか？」

召し抱えるのなら今後も交渉次第だぞ、との意味を匂わせた。出来るだけ欲深そうな表情を心掛ける。

「ヒビノ様の歡心が得られたのならそれに勝る喜びはありません！すぐ国と連絡を取らせて頂きます。ヴァロア自慢の品を持って今夜にでも伺いたいですわ！勿論私が」

ジルベルトが潤んだ瞳で見上げ、声を震わせる。

「それは願つてもない幸運だな。貴女のような美しい女性が聞かせてくれるヴァロアなら、さぞかし魅力的な国と思えるだろう。昼間は街をぶらつく予定だが、夕食前には宿に戻る予定だ。是非とも晩

餐を御一緒したいね」

ニヤけた顔の直時は、伝言があるならと『磯の波濤亭』の宿名を告げた。

「必ず！」

潤んだ瞳のまま、両手を胸元で組み、縋るようなジルベルト。

（演技派だなあ）

（あんたもね。意外だったわ）

フィアの言葉に苦笑したいのを我慢しながら、ヴァロアとの会談場所を後にする二人であった。

交易都市ロツソ？（後書き）

はじめての交渉。

直時はちゃんと演技出来てましたでしょうか？

交易都市ロツソ？（前書き）

ロツソ編終り…かな？

交易都市ロツソ？

ヴァロア王国との初回交渉を終えた直時とフィアは、招かれた高級旅館の前で別行動に移る。フィアは街中へ、直時はギルド会館へと向かった。フードは役に立たなくなっていたが、しっかりと顔を隠す。ギルドでの用事が済むまでは、大っぴらにしたくなかった。

ヴァロア王国に先を越された形のカール帝国とシース公国の諜報員達が、直時と接触する機を窺いつつも互いに牽制しあっている。この3国の大きな動きは、他国の情報部をも刺激したようで、路地裏では少なくない小競り合いも起きていた。

多くの尾行を引き連れて、内心げんなりしつつ直時は冒険者ギルドロツソ支部の扉をくぐった。冒険者登録をしている一部の諜報員以外は、ギルド会館外に留まっている。

ロツソ支部への直時の第一の感想は『広い』であった。リスタル支部はシース公国内の交易拠点として重要ではあったが、首都から遠い国境近くの町だったため、活気はあったが雑然とした雰囲気であった。しかし、ロツソ支部は依頼品の交換所など血腥い部署以外は整然とし、受付も目的別に余裕を持った空間で区切られていた。どの受付が自分の目的に合致するか判断がつかなかったが、間違っていたら教えてくれるだろうとの考え、『依頼報酬の可否』と書かれた受付へと並ぶ。

「御利用有難うございます。本日はどのような御用件でしょうか？」
直時の前の（依頼失敗の判断にごねていた）冒険者を、鉄壁の笑

顔で謝絶した受付嬢が、同じ笑みで迎えてくれる。

「リスタル支部で受けた依頼の報酬の件なのですが、先の混乱で受け取れていません。どの支部でも受け取れるよう手配すると言われたのですが、こちらで受け取れるかどうか調べてもらえませんか？」
そう言っただけで懐から出した依頼書を提示して、冒険者カードに魔力を通して見せた。名前の横にランクGと浮かび上がる。

「少々お待ちください」

最低ランクであったが、何か引っかけた様子の受付嬢がギルド事務室と連絡をとる。

チラチラと窺いながら話す受付嬢の様子に嫌な予感がする。

（リスタル撤退戦じゃ、味方も巻き添えにしたからな。報酬無しかな？ 非を責められたらこちらが不利だけど、義勇兵として登録してなかった件を盾に責任回避するしかないな。どちらにする愉快な話しじゃなさそうだ。ギルドも当てにならないと考えた方が良くもな…）

フードで表情が見えないのを幸いと、顔を顰める直時。何通りかの言い訳を考える。

「別室にて対応させて頂きます。係の者が御案内致します」

若干固くなった笑顔で、少し待つよう告げられた。壁際の長椅子へと向かおうとした直時だったが、腰を下ろす前に慌てた様子で現れた若い男性職員に誘導され、『第3応接室』と掲げられた部屋へと入った。

扉が閉まったことを確認した直時は、フードを背中へと除け、その素顔を晒す。

勧められるまま座り心地の良い椅子に腰を落ちつけると、すぐにお茶が用意された。直時は内心の不安を隠し、悠然と茶の香りを楽しむふりをする。

反対に若い男性職員は、緊張の面持ちで壁際に直立不動だ。

「お待たせしました」

柔和な微笑みを浮かべた壮年の男性が、奥の扉から姿を見せる。年齢相応に腹部へ肉が付いているが、肩幅は広く胸板も厚い。体格だけ見れば威圧されそうであるが、穏やかな表情がそれを感じさせない。

「いえ。大して待っておりません。美味しいお茶も御馳走して頂いてましたし」

直時は手に持ったカップをソーサーに戻す。男性は一言断わってから、直時の正面の椅子に腰を下ろした。

「私はダリオ・ガンディーニと申します。ロッソ支部では依頼事の責任者しております」

軽く一礼して自己紹介する相手に直時も名乗った。

「お問い合わせはリスタルで受けた依頼の報酬でしたね。君、お持ちして」

前半は直時へ、後半は若い職員へ向けた言葉だった。ダリオの言葉に部屋から出て行くが、トレイを持ってすぐに戻って来た。既に用意してあったようだ。

「報酬の金貨10枚です。御確認ください」

「確かに。御配慮有難うございました」

（簡単に払ったな。別室に呼ばれたのは諜報員に対する配慮だけだったのかな？）

拍子抜けする直時だったが、ダリオは言葉を続ける。

「依頼の金銭的な報酬についてはこれで終わりなのですが、他に問題が上がってきましてね」

「リスタル撤退戦に於いて、義勇兵を巻き込んでしまった件ですか？」

とぼけることなく直截ちせつに聞く。自覚していることをダリオに理解しておいてもらうためだ。

「いえいえっ！ あの攻撃はヴァロア軍へ向けてのもの。故意で巻き添えにしたわけではないでしょう？ 彼等の死は残念なことですが、冒険者たるもの不測の事態に対しても、己を守るのは己のみ。それが冒険者の矜持です。ヒビノ様に責任はありません。それに、撤退時に指揮を執っていたのはリスタル支部局長です。もし、責任があるとするれば彼です。尤も、そのような追求はありませんがね」

直時の懸念は杞憂であつたらしい。ダリオは安心させるように笑いかける。

「ギルドで上がってきた問題は、ヒビノ様の冒険者ランクをどうするか？ ということです。今回の功績はあまりにも大きい。特にリスタル住民達からギルドを通して感謝を、との声が多いのです」

「避難時の魔術支援のことなら、依頼でもないですし、他の義勇兵の方々と同じ…。ああ、自分は義勇兵登録してなかったので、それこそ勝手にやったことです。ギルドの規定通り評価に入れなくても良いのでは？ そうでなければ、義勇兵として参戦された方々もランクアップしないといけなくなるでしょう？」

冒険者としてのランクは、あくまでもギルドを通じた依頼の完遂を積み上げることで上がる。信用は一朝一夕で得られるものではない。まして、ギルドは国家間の争いには不干涉を貫いている。義勇兵としての戦果は、ギルドの評価として不適当なのである。

「そこが頭の痛いところでして…。規定に拘り過ぎると冒険者ギルドが世間から叩かれることになるかもしれないのです。つまり、ヒビノ様を不当に低く扱っているよね。リスタル戦での貴方の活躍、その魔力はそれだけ大きな影響を与えたのです」

リスタル住民の完全避難、少数戦力でのヴァロア軍撃退は最も新しい英雄譚として瞬く間に流布していた。

『晴嵐の魔女』と『黒剣の竜姫』が手を携えて一個軍を蹴散らした話と並んで、普人族の直時が、精霊術を駆使して空中騎兵団を殲滅した話は多くの人の口にのぼった。

「まあ、苦肉の策で、先の依頼であった水の神霊ヴィルヘルミーネ様の加護祭を、陰ながら守った功績を大きく評価するという建前で、ヒビノ様のランクを上げようではないかという案が出ておるのです」

「自分としては、他の冒険者と無用の軋轢あつれきが生じることのないよう、規定通りが望ましいのですけど、そのような状況になっているならば方ありませんね。ギルドへの批判を躲せるのでしたら、自分へのやっかみぐらいは引き受けましょう」

冒険者ギルドへ貸しを作り、依頼引き受け時に選択肢が広がるランクアップ。既に注目を集めていることだし、多少やっかみが増えたとところで、損より得られるものが大きいと判断した直時は、ダリオ（冒険者ギルド）の提案に乗ることにした。

「有難うございます。そう言って頂けると助かります。では、冒険者カードをお預かりいたします。ランクアップの手続きをとらせていただきますね」

安堵の息を吐くところを見ると、ギルドへの批判は既に増えているのかもしれない。

「カードの受け取りは通常の受付の方が良いでしょうね。報酬もそ

のときで。フードを取ったまま受付近くの椅子にでも座っていますよ
うか？」

「御心遣い感謝します。是非お願い致します」

ダリオの意図をくんで先に提案する。報酬の金貨をそのままに、
直時は一礼して応接室を後にした。

素顔を晒して長椅子に座る直時。周囲から多くの視線が向けられ、
そこかしこで囁きが交わされる。噂の冒険者の出現にざわめきは収
まらない。

入れ替わり立ち替わり直時の顔を確認しに来る者や、遠話で連絡
を取っている者までいるが、話しかけてくる者はいなかった。誰の
眼にも、興味と畏怖、そして恐怖があった。

「ヒビノ様。タダトキ・ヒビノ様。特別依頼の報酬と冒険者カード
が御用意できました」

リスタル支部の3倍はある受付の広い部屋中に、直時を呼ぶ声が
響き渡る。

(ダリオさん…。やり過ぎ…)

ギルドの対応を周知させるためとはいえ、一斉に注目された直時
は怯んでしまう。それでも動揺を隠して受付へと向かった。

「ヴィルヘルミーネ様の加護祭支援依頼の達成報酬です。御確認下
さい。そして、冒険者カードの更新もさせていただきました。御確
認のため魔力を通してください」

報酬の金貨10枚を確認し、言われた通り冒険者カードに魔力を
ほんの少し込める。

浮かび上がる新しいランク。

「冒険者ランクDへのランクアップです。おめでとございます！」
指示されたからだろうが、受付嬢の大きな声が響く。

（ちよつ！ 3階級も上がってるし！ 戦死でも殉職でも2階級特進なのに！）

叫ぶのは何とか抑えたが、思わず眼が点になる直時だった。

何とか気を落ちつけて、報酬と冒険者カードを懐に仕舞って受付嬢に見送られる直時に声が掛けられる。

「やあ。久し振りだねえ」

少しにやけた明るい優男^{やんぼんこ}。リシュナンテが片手を挙げていた。

「リシュナンテさんか。情報が早いね。顔を見せたのはついさっきだったんだが…」

「君がここにいて、友達の冒険者が教えてくれてね。ロッソにいたのはたまたまさ」

「自分はこれからようやく手に入った報酬で、必要な品を買いに歩かないといけないんでこれで失礼しますよ」

「まあまあ、そう嫌わずに。御馳走するからお昼付き合ってよ？」

リッテは肩に手を置こうとするが避けられてよろめく。

直時は、すれ違いざま小声で告げた。

「ヴァロアは敵対したけど、カールも気に入らない。嫉^{けしか}けたんだろ？ じゃあな」

リスタルとロッソを犠牲にしての、カールのヴァロア侵攻計画を

示唆し、後も見ずに出口に向かう直時の背中。リッテは気にする風も無く、後を追う。

「あんなあ……」

「奴等、いくら出した？」

怒りを浮かべる直時に平然と、しかし微かな声で問いかける。要点だけを極短く、万一聞かれても大丈夫なように……。

直時は怒気を即座に引つ込めた。先程のはポーズだよと言っているのに等しい。

「詫びだけ。5本」

自分には金の延べ棒が4本だったが、さり気なくファイアに支払われた分も勘定に入れる。

「詫びだけで？」

流石に聞き返すリッテ。

「詫びだけだ。後の話は今宵、美女と会食で」

ヴァロアは金と女を用意したぞ？ と、言外に伝える。勿論カールへの催促だ。

「それまでにこちらも詫びを用意する」

「自分はい物だ。その気があるなら探せ」

直時は、今度こそ別れてギルド会館を後にした。

「……奴等、本気だな。急ぐ必要があるね」

小柄な黒髪の後ろ姿を見ながら、リッテは呟いた。

金塊でこまごまとした品の支払いをするわけにはいかなかったの
で、報酬の金貨10枚が無事に支払われた事は、直時にとって喜ば
しいことであった。

素顔のままギルド会館を出た直時は、東西南北へと走る大通りの
内、港へと続く南通りを選んで歩き出した。

ギルド会館等、主要な建物が街の中心に位置するのはロツソでも
同じである。

各国の尾行者が多数ついてくるのは当然だったが、巷で噂の精霊
術師の出現に、道行く人々の少なからぬ者が足を止め、驚きを持っ
て振り返る。好奇心からか、少数だが後をつけてくる者もいた。

(視線が痛いっ！)

表面上は平静を装っているが、本音は穴があれば飛び込んで、視
線を遮る地中を掘り進んで移動したい直時だった。

(まあ、これだけ注目されていれば、いらんちよっかいは減るだろ
う。接触には気を遣ってくるはずだ)

一般人の眼を各国への牽制に利用して、行動の自由を確保する。

直時はまず魔術屋へと足を向けた。改造するにしても、参考に出
来る基本魔術があるのと無いのでは大違いだからだ。以前自己流で
作った電撃系の人魔術はいまいちであったし、先の戦いで本陣急襲
のときに風の防御をすり抜けた、雷撃系攻撃魔術は是非とも入手し
たかった。

「いらつしやいませ！」

愛想良く声を掛けた店主は、直時の姿を確認するやいなやそのま
ま固まった。反応の早さから、魔術屋業界にもかなり詳しい情報が

流れているようだった。

「魔術カATALOG見せて頂けますか？攻撃系、防御系は初歩の魔術で、支援系は全リストをお願いします」

攻撃と防御は、基本さえ押さえておけばいくらでも改造でパワーアップできる。支援系はそもそもどんなものがあるのか把握しておかねばならない。

直時は困った顔で、固まったまま反応が無い店主から、事情を把握していない売り子の女性へと同じ要望を告げる。

勝手に座った椅子で、ごわごわとした羊皮紙の束に眼を通していく。

（攻撃も防御も基本形は4大精霊の能力の再現か…。光と闇は特殊なのかな？ えーっと、雷系は風と水の合成…。合成なのか？）

直時のうる覚えの知識では、精々自転車のライトの発電部分ダイナモを分解して得た知識程度である。磁石と導線を巻いたコイルを移動させて…。考え込みそうになるところに、自然界にある現象へと考えが行き着く。

（あ！ 雷か！ 雷って確か雲の中の氷が気流でぶつかって、静電気が蓄積されて、正負の電位差が大きくなったら…）

記憶の底をひっくり返し納得する。

（風と水の精霊術で落雷は作り出せそうだな。でも制御出来ないと意味はないし、買っておくか）

普及させるつもりなら、人を選ぶ精霊術は意味を為さない。

（支援系は…。こんなにあるのかよ。買う以前の問題だな。買えなくても情報収集せねば！）

購入済みと、盗み見済みの移動系、重量軽減系の他にも様々な魔術が用途ごとに列挙されている。効率を重視した単能魔術の弊害だろう。汎用性に欠ける。自分が望む魔術を探すのに苦労しそうだ。

職業別の支援魔術が揃えられている時点ですさまじい量になっている。直時にとって元の世界では、更に職業分化が進んでいて必要となる専門知識は人魔術の比では無かったが、調べて学ぶという点に関してはアースファイアよりも便利であったように思う。

少なくとも簡略化された説明にも拘わらず、山積みされた大量のごわごわした羊皮紙を一枚一枚確認する苦行は無かったはずだ。身につけると言う点では、転写の術式があるこの世界に軍配があがりそうであるが…。

(データベースの構築と検索の人魔術開発は必須だな…。ハードをどうするかが問題だが…)

兎に角自分の脳内データベースの糧として、情報を読み取ること集中する。実際の術式は後回しであった。

「あの…。これ全部、眼を通されたのですか？」
売り子の女の子（15歳前後と見えた）が、オーバーヒート気味の直時へと問いかけた。

「ん？ 一応ね。でも、ちゃんと覚えてるかは自信無い…」
苦笑気味に答える。

「お求めの魔術は見つかりましたか？」
「長居して申し訳ない。今回は『放電』と『風刃』、それと『風哮』^{ふうこう}の3つを購入させてもらうよ」

第一目的の雷系攻撃魔術と、精霊に頼り切っていた風系攻撃魔術を選ぶ。どれも初歩攻撃魔術である。

「有難うございます！ 『放電』は金貨2枚、『風刃』と『風哮』は金貨1枚です。合計金貨4枚の御会計になります！」

攻撃魔術は初歩でもなかなかの値段である。後に改造発展させていけば元は取れるだろうと、手に入れた金貨を支払う直時。未だに落ち着きを取り戻せない店主を他所に、売り子の女の子は魔法陣の転写をしてくれた。軽い頭痛はいつものことだが、慣れそうにない。

魔術屋を出た直時は、雑貨屋、被服屋を廻り香辛料と調味料を購入して宿屋に戻った。そこそこ散財したと思っていたが、元から持っていた小銭と合わせて、まだ金貨5枚分が懐に残っていた。

「さてと。じゃあ仕上げと行きますか！」

全ての荷物を纏め上げ、宿屋を後にする。宿泊期限はまだきていない。宿屋にはジルベルトからの伝言とリシュナンテからの伝言があった。

それを聞いた直時は苦笑とも自嘲ともつかない笑みを浮かべ、宿屋を後にした。

「ここまでハマるもんかねえ。まあ最後にして最重要の物資調達をしなければ！」

直時の目的地は無論酒屋であった。フィア、ミケ、ヒルダに飲み干された蒸留酒のリベンジである。リナレス姉妹が御相伴に預かったことは直時には内緒であった。知ったなら、猫（正確には豹）耳と尻尾をさらに弄ばれることが判明したからである。

「たのもう！」

酒樽の看板を掲げた店舗に勢い良く突入する。

「店主！ 『紅玉の朝露』はあるか？ ガロン樽で頼む！」

品揃えを確かめる気もないのか、即座に注文する直時は鬼神の才

ーラを纏っていた。所望する品は、ノーシュタットの酒場で飲んだ蒸留酒である。

「ただちにつ！ただちに御用意させて頂きますっ！」

勢いに吞まれた店主が手近の店員達に指示を飛ばす。弾かれたように動き出す店員を満足気に眺めた直時は、この店なら大丈夫だと確信を持った。

「『紅玉の朝露』ですが、樽が色々あります。味の御確認をお願い致します」

店主自らが小振りの水晶グラスに試し酒を持ってくる。

香り確かめた直時は、ほんの少し口に含んで味確かめる。頷いた後、残りの酒を一気に飲み干した。

「間違いない。香りも素晴らしい！是非とも購入させてもらう！」
満面の笑顔で満足を表す直時に安堵する店主。代金は金貨3枚であった。この銘柄は直時が好んだということで、後にプレミアがつくことになる

購入したガロン樽に『浮遊』を掛け、大荷物に加えて店を後にする。

予定の品々を購入した直時は、ロツソの大通りが交差する中央広場へと向かった。時間はまだ昼前である。リシュナンテの伝言にあった会食先も中央広場に面した一流料亭である。

それはさておいて、直時は中央広場の真ん中で荷を解きはじめた。

皮布に覆われた折り畳み自転車である。

フレームとスポーク、他各部の銀色の輝きに周囲の眼が集中した。これまで痛いほどの視線に晒されていた直時には何程の事も無く、無言で組み立てを始める。

直時に対する好奇の視線と、見たことも無い物体に対する興味の視線が集中する。一定の間隔を保っていた周囲の輪から、一人の人物が動き出した。

「珍しいモノだね？ それは何だい？」

昼の会食を申し込んだリシュナテだった。無用の注目を浴びている直時の本意を確かめに来たようだ。

「これはジテンシヤという乗り物だ。人力で動くが、人が走るより早く移動できる乗り物だな。よし。組み上がった」

軽く答える直時に真意を掴めないリツテ。

直時はフレームに槍や荷物を固定し、ペダルを漕ぐのに邪魔にならないか確認している。リツテが傍らにしようがおかまいなしであった。

「準備完了っ！」

満足気な直時は、仕上げとばかりに人魔術、『浮遊』を掛ける。

「この道具についても話してくれるのかな？」

「ああ！ 昼の会食はキャンセルな！」

「…ヴァロアにつくのかい？」

「いやいや。それも遺恨が残るだろ？」

「ならどうする？」

いつもにやけているリシュナテの表情が陰しくなる。それを見

た直時は嬉しそうに言った。

「やっと一矢報いることができたかな？ 自分は……逃げろっ！」
犬歯を剥きだした攻撃的な笑いに反して、消極的な宣言を放った。

直時の周囲に風が集まり空気を凝縮する。3、980円の折り畳み自転車に跨る直時に、緊急を察知した各国の諜報員が駆け寄るが、風に阻まれて近寄ることは出来ない。

「じゃあな！」

そう言った直時は、重量を消した自転車の前輪を持ち上げペダルを踏む。自重を無くしたためグリップは得られないが、風の精霊がその軽やかな身を持ち上げた。

折り畳み自転車に跨った姿は、颯爽と言えないまでも周囲の度肝を抜いて空へと舞い上がる。

（みんな！ 有難う！ さようなら！）

念話でフィア、ミケ、ヒルダ、そしてリナレス姉妹に別れを告げた直時は、ギルド会館の屋根をタイヤで蹴って、更に高空へと上昇した。

交易都市ロツソ? (後書き)

交渉で各国から金をせびるより逃走を選んだ直時でした。

逃避行（前書き）

明日以降所用が目白押しで、駆け足更新です。

見直してきてない！

鉄は熱いうちに打てと言いますし、更新優先！

今回の注意事項として、爬虫類嫌いなら飛ばしてくださいませ。

逃避行

ロツソの中央広場から空へ舞い上がる見慣れない乗り物。そして、それに跨る黒髪の男。噂の精霊術師。見送る人々の顔を眼下に更に高度を稼ぐ。

上昇する直時の周囲へ、追跡するよう舞い上がる影が多数あった。マケデイウス王国ロツソ駐屯の空中騎兵である。不審騎と認識されたようだ。碧鷲と呼ばれる海辺の断崖に生息する猛禽を乗騎として接近する騎兵達。

ハンドルから手を離れた直時は、彼等へ向かって大きく手を振る。害意がないことを確認したが、下へ降りると手振り伝える兵に構わず、ハンドルを握りしめた直時は風の精霊へと増速を願った。

集めた視線を振り切るかのように、その姿は風と共に東へと翔け去った。

(こちらタダトキ。予定通りロツソから離脱。今まで有難う！)

(ミケだニヤ。道中の無事を祈っているのニヤ)

(ダナです！ 御恩はまだ返し切れておりません！ どうか！ どうか… 再会を期待させて下さい…)

ミケの明るい返答とは違って変わったりナレス姉からの念話が入る。

(縁が有ったらまた会おう！)

先の事など判らない。無難な答えを返すに留める直時。

(…待ってます。待ってますから)
ラナのか細かい念話が返ってくる。

(拾った命、大事にしるよ？ 耳と尻尾もな！ 次会った時にも存分に愛でさせてもらうからなっ)

耳の裏とかであれば犬も猫も気持ちよさそうにしてくれるが、耳そのものや尻尾を触られるのを嫌がることの方が多い。欲望の赴くままに触れられた事は、直時にとってこの世界で得た貴重な体験だった。

勿論、羞恥に震えながらも耐え忍ぶ姉妹の姿に心が震えたのは言うまでも無い。

(派手な出立となったな。リッテのあんな顔を見られたのは痛快だったぞ)

(ヒルダさん。お疲れ様でした！ カールには嫌がらせ程度だと思っ
うんで、その後の影響は少ないと思います。自分の行き先への情報漏洩で追加のお小遣い貰っちゃってくださいね。皆もだよ？)

カール帝国からもふんだくってやるうと思っただが、残る皆にはな
るだけ各国の遺恨が向かわないよう配慮したつもりで直時だった。
ヴァロア王国も袖にしたことになるが、直時の心証を回復させただ
けでもファイアに当たることはないだろう。

(ヒビノーっ。御免ねえ。換金に手間取っちゃった)
ファイアが済まなさそうに言う。

ヴァロアからせしめた金塊は換金して頭割り、他の皆が手に入れた
情報料と合わせて等分に分ける必要があり、直時の分け前は宿屋に
届けておく予定であった。逃走直前で預かり荷が無かったため諦

めていた。金貨500枚ともなれば、換金に時間が掛かるのも無理は無い。

（間に合わなかったのは仕方無い。貸しにしとくよ。皆で分けてくれ。その代わりダナとラナとミケさんの耳と尻尾、ファイアの長耳とヒルダさんの竜鱗と尻尾は触らせてもらうからな！）

ダナとラナは確定だろうが、ファイアとヒルダへのそれは命懸けだろう。冗談で言ってみた直時だったが、言った後に嫌な汗が背中を伝う。そんな中でも本命は猫耳猫尻尾のミケさんである。ここで色良い返事があるならば、ほとぼりが冷め次第戻ってくる気満々であった。

（タッチィーのえっちいー）

ミケの含み笑い念話が直時の脳裡を直撃する。脈がありそうだ。

（馬鹿っ！ 借りなんて絶対作らないからね！ 今から届けるから待ってなさい！）

（ヒビノは普人族にしては趣味が良い。そうか、触りたいのか…。それなら触らせてやろう）

ミケの反応に崩れていた顔が硬直する。

（嘘です！ 依頼報酬として存分に使って下さって結構です！ 貸しだなんておこがましいことは申しません！ でも、ミケさんの耳と尻尾は譲れません！）

直時は急きたてられる恐怖感から、精霊にさらなるスピードアップを請う。しかし、猫耳尻尾は譲れない。譲らない！

（逃走のため離脱速度は緩められません！ ファイアもヒルダさんもお元気でっ！）

直時の前方で風の精霊達が大気を切り裂き邪魔を許さない。保護

されているため直接風圧に晒される事は無いが、自転車の背後からは雲が尾を引いていた。

(逃げ…なっ！逃がさ……から…)

フィアだろうと念話が途切れ途切れに届く。効果範囲を越えたようだ。

昼食前ということもあって、空腹の中の逃走であったが、竜巻を背負ったエルフと炎を纏い大剣を振り回す竜人の幻影に急きたてられ、海岸線を東へと飛翔するのであった。

「ん？」

自転車に跨り空を疾駆する直時の眼下に船が見えた。かなり大きな帆船である。しかし、その帆が風を捕えつつも、一向に動く気配が無い。傾いて固定されていることから座礁しているようだった。

直時は高度を落とし、速度を下げて様子を窺ってみる。甲板の上では魔法陣が多数閃いては消えている。船員が人魔術で座礁した船をなんとか動かそうとしているようだが、船首近くにめり込んだ岩礁が船を離してくれないようだ。

少し考えた直時は、自転車の向きを変えた。緩やかに船の周囲を飛びながら降下する。座礁原因はやはり船首の下にある岩礁のようだ。今は固定されているが、下手に離礁しても危なそうだ。穴が穿たれている。

螺旋を描きながら降りてくる姿に気付いた幾人かが大きく手を振っている。助けを求めているのか、助けを呼んで欲しいのだろうか。

片手を振って応えた直時は、傾いた甲板の後部に自転車を着地させた。

「風の精霊術師さんか！ 済まないがロツソへ救難を届けてもらえないか？」

船長と思しき白髪の男性が早速声を掛けてきた。空を飛ぶ姿から精霊術師すぐ判ったようだ。しかし、普人族であることも同時に判ったため、魔力の必要な作業の支援よりは救援要請を頼むことにしたようだ。

「お手伝いしようと思いましたが、先を急ぐのでロツソへは戻れないんですよ。不躰で申し訳ありませんが、破損部分の補修材料はありますか？」

「航海に必要なものは揃っているが、どうしようってんだ？ 補修しようにも、まずは岩礁から逃れないと何もできんぞ？」

「素人判断ですが、離れられてもすぐに浸水してしまいそうです。補修作業さえ迅速に出来るのなら、離礁のお手伝いと浸水は食い止めさせてもらいますが、如何しますか？」

「そんなもん出来る訳ないだろうがっ！」
天の助けと思つた船長だったが、無謀を通り越して無茶なことを言う直時に機嫌が悪くなる。

直時としては、東に向かう途上で目立つことは残してきた皆が漏らす情報への裏付けになり、決して善意だけのことではない。

「噂、知りませんか？ リスタル防衛戦の？」

訝しげな船長の背後で声上がる。

「黒髪の精霊術師！」

船員の一人の叫びに、次々に驚愕が伝播する。

「リスタル撤退の英雄かつ！ まさかこんなところでお目見えするとはな…」

彼も噂を耳にしていたようで、直時を見る眼が変わる。

「もし信じてもらえるのでしたら、船内に入らせて頂けませんか？」
足跡を残すための話題作りという打算があるものの、あくまでも下手に出る直時。

船長もなんとかなれば儲け物とでも思ったのか、噂の精霊術師に興味を引かれたのか、自ら座礁している船首部分へと案内する。

「結構浸水してますね」

腰まで浸かった直時が船長へと言う。船首左側を突き破ったフジツボだらけの黒い岩が船内へと顔を見せていた。

水密区画等、密閉されているわけではない船内から外の風を感じ取る。フィアのよく使う探査の風、精霊の言葉を聞く。

言語では無くイメージとして伝えられる情報は、船全体の現況を余すところなく直時へと知らせてくれた。

（風の精霊ひーちゃんズに出来るなら、水の精霊ぷるちゃんズも出来るはずだよな？ 船底の様子を教えてください）

直時の要請に応えた水の精霊達が、水面下の様子を教えてください。

（船首部分以外に浸水は無し。ここだけ注意してればいいなら、俺だけでも何とかなるか？）

水の精霊に潮流で船を動かしてもらい、構造上、帆に前方から風を当てるのは不味いと思い、風の精霊に船体へ風を当ててもらおう。船体が軋む音がしてゆっくりと動き出す。

「破孔塞げ！ 浸水激しくなるぞ！」

「まだです！ 良いと言うまで待機しててください！」
船長の檣に動きかけた船員を止める直時。

船体を削りつつ離れる岩礁が塞いでいた穴から、海水が大量に入
つて来た。

（水の精霊達、入って来た海水を穴から出して）
要請に応えた精霊が、直時の魔力を糧に動き出す。腰まで来てい
た海水が破孔から逆転映像のように吸い出されていった。

岩礁の呪縛から逃れた船は、再び波の手によって揺れ始める。完
全に引いた船内の海水を確認した直時は船長に向かって補修の指示
を出す。言葉も無い船長を他所に、待機していた船員が動き出した。

不気味な破孔の外に広がる海底の景色に眼を捕られながら、板を
打ち付け、布で隙間を塞ぎ、丸太で抑えて補強する船員達。

「水圧、戻ります。修復箇所注意してください」

直時の警告に支えの丸太を押さえる船員達。多少の漏水はあるも
の、致命的な漏れはないようだ。皆が安堵の息を吐く。

「助かったよ。礼をしたいんだけど？」

「たまたま通りすがっただけです。先を急ぐのでこれで失礼します」
「依頼か？」

「いえいえ。面倒事から逃げてきたんですよ」
直時は詮索する船長へ笑いかける。

「あんたも大変だわな。じゃあ、碌ろくを食はむつもりはないわけか？」
「魅力的な話もあったんですけどね。でも、他の種族の方々の自由

さに懂れちゃいまして、縛られるのは嫌だなあーってね」

「ふあっはっはっはっ！ あんた、良い船乗りになれるよ！」

なんだか知らないが船長には気に入られてしまった直時だった。

「何処まで行くんだ？」

「とりあえず、イリキアまで」

本当の目的地はリツタイト帝国であるが、誤認情報を流しておくのも良いだろう。海が美しいとの話もあるし、できれば少しは滞在したいとも思っていた。

直時は礼を受け取れとの船長のしつこい誘いを断り、再び自転車で空へと舞い上がった。甲板で手を振る皆に別れを告げ、再び進路を東にとる。

「ご飯くらい御馳走になっておけば良かったかなあ……。お腹空いた……」

荷物ある食材は保存食が少しだけである。調味料は各種買い揃えたが、肝心の食材を捕る余裕が無い。

逃亡初日とあって、少しでも距離を稼ぎたい直時は日が傾くまで飛び続けた。

ロツソから海岸線に沿って東を目指していた直時は、水面が茜色に染まりはじめる頃野営の準備に入った。食材は磯で海藻集めをしていたら襲ってきた大きな蛸と、槍で突いて捕獲した魚、それと巻貝である。探知強化で鋭敏化した五感で毒が無いことを確認、念のため海産物ということで水の精霊にも毒性の有無を聞いて安心した直時は砂浜で浜鍋を作っていた。炭水化物として、小麦粉を練った

平べったい団子を鍋に放り込んである。

野营地として選んだ砂浜は、丁度海岸沿いに通る街道が大きく迂回する場所で、人目を気にする必要が無くゆっくりと過ごすことができた。

「やっぱり海産物は独特の臭みがあるなあ。味噌があれば言うこと無いんだがなあ」

香辛料や香草だけでは好みの味に仕上がらなかったようである。愚痴を言いつつも海の幸に舌鼓を打つ。

鍋を熱する熾き火に照らされた直時の背後に、砂をかき分けながら近づく影があった。覚えて以来、殆ど絶やすことなく使っている『探知強化』は、食事中にも拘わらずその存在を教えてくれる。

（気配からして人族じゃないな。魔獣の類かな？）
器を置き、背後を窺う。

接近してきた影は、直時に悟られたと知ると動きを止め、身を固めた。炎を背に闇に眼を凝らす直時。

視界に浮かび上がったのは2メートル程の蛇であった。

砂浜の砂にまみれながらとぐるを巻き、直時を窺っている。なんとなく弱々しいのは、ところどころ裂けている傷口のためだろう。注視する直時より、どうやら鍋の方に気が行っている。空腹のようだ。

「蛇ならナマモノが主食じゃないのか？ これは餌じゃないぞ。火が通ってるんだぞ？」

無駄とは思いつながら話しかける直時。しかし、ここアースファイアでは人族以外にも神が広めた言葉が通じる種族が多い。なんとはなしであるが、その蛇がうらめしそうな、バツが悪そうな表情になったように思う。

「食うか？」

問いかけてみた直時は、予備の食器に鍋の具を盛り蛇の前に置ける。かなり手前であったのは、噛みつかれるのを恐れてだ。

器の中身と直時の顔を交互に見た蛇は、とぐるを解いて器へとにじり寄る。その動きは緩慢で弱々しい。力尽きたのか、器の前で動きを止めてしまった。息も絶え絶えといった様子である。

「…精霊よ 彼の者を癒し給え」

仕方ないかと直時は治癒術を施す。抉られたような傷口が見える見るうちに再生する。

驚いたように自分の身体を見回す蛇。しかし、それを見ていた直時はもつと驚いた。治癒したその蛇には2対3組みの羽根があったのだ。それも鳥類の羽根ではなく、翼竜の骨のようなものに半透明の被膜が張られている。しかもその皮膜は大きくなったり小さくなったり、消失したりしている。魔力でコントロールしているのか？

一頻り自分の身体を確認したその蛇は、被膜を完全に消し、翼の骨組を折り畳んで寄ってきた。大きさの割に全体に丸っこい感じがする。直時は正直可愛いと思ってしまった。

先程まで気にしていた食糧より、直時への興味が勝つたのだろうか？鎌首をもたげた丸みを帯びた頭がまっすぐに見えている。

「元気になったんならご飯食べるよ？」

直時の笑顔を見た途端、蛇が飛びかかる。慌てて腰のナイフに手を掛けるが、図体の割に締め付けられる様子は無く、巻きついたまま頬をチロチロと舐めてくる。治癒する前にはなかった翼の骨が直時をしつかりと捕まえていた。どうやら、羽根の元になる骨が奪われていたようだ。

感謝の意を存分に表したのだろう、漸く器の中身を食べだす翼蛇（しほへび）。尻尾の先は直時の左手に巻き付けられていて、食べながらも時々様子を窺うように顔を向けてくる。懐かれてしまったようだ。

独り佇む晚餐だったが、思わぬ闖入者が入った直時だった。皆との別れの日であったこともあり、暗く静かな波打ち際での出会いに少し感謝した。

気分が良くなった直時は、ロッソで買い求めた酒樽を開け偶然の出会いに星空へ乾杯する。かなり強い酒精であるのに、翼蛇は誘われるように杯へと顔を伸ばす。

「おっ？ お前もいける口か？ ちょっと飲んでみー」

直時の了承を得たことを理解したのか、杯へと二股の細い舌を伸ばす。2、3度舐めたあと顔を突っ込んで飲む。細い喉から胴へと強い蒸留酒が消えていく。

「あはははははっ！ お前、なかなかイケるクチだなっ」

直時は御機嫌である。独り酒も良いが、相方がいるのならそれもまた良い。

蟒蛇（つわばみ）とはよく言ったものである。購入したガロン樽の半分が、今宵の二人（？）の腹に消えた。

「ご機嫌で酔ったせいで野宿の設営をするでもなく、直時は夜風海風に晒されてしまったが、翼蛇は直時に巻きついて暖をとっていたようである。

明け方の陽の光に起こされた直時が呻きながら身を起こす。久しぶりの深酒に、未だ酔いが醒めきっていない。巻きついて眠っていた翼蛇も起きたようで、挨拶代りに頬を舐めてくる。

便利魔術である『出水』^{いでみず}で顔を洗い口をゆすいだ直時は荷物を自転車へと括り付け旅装を整える。翼蛇は傍らでその様子を見守っている。

「お前さんも元気になったことだし、好きなようにしな。昨夜は楽しかったよ」

理解してくれているかどうかは判らないが、別れを告げる。

「じゃあな！」

自転車を跨り、『浮遊』を掛ける。重さから解き放たれたのを感じて、風の精霊を集める。周囲の砂を吹き飛ばして空に舞い上がる直時。その傍には、6本の骨に半透明の被膜を張り巡らせた翼蛇がいた。

「おお！ カッコいいな！ それがお前本来の姿か」

直時の脳裡に『ワイアーム』という名前が浮かぶ。元の世界の架空の魔物の名前である。

ちよつと感動に浸っている直時の脳裡に、距離による制限を無く

した遠話が届いた。

(みーつーけーたー)

念話にもかかわらず、地の底から届く呪いのような感触は、白金の髪、すらりとした肢体のエルフ、フィリスティア・メイ・ファーンのものであった。

逃避行（後書き）

爬虫類も可愛くないですか？

次話はちよこつと間が開きます。

逃避行？（前書き）

れんきゅう？なにそれ？美味しいの？
肉球なら知ってるんだけど？

逃避行？

ロツソ上空から翔け去った黒髪の精霊術師。多くの住民達は驚愕をもって、逃してしまった諜報員達は臍ほそを嚙む思いで見送った。

噂の精霊術師がロツソに滞在していたこと。その姿形や、空中騎兵の追隨を許さない速さ。あれこそ神器では？と目された銀色の乗り物。リスタル戦にまつわる噂話。東の空を見上げたまま、人々は手近の者へと話しかける。

喧騒の中、いち早く動き出したのは各国の諜報員だった。カール帝国、シース公国、ヴァロア王国に属する彼等は、新たな情報を求めて走りだす。ファイア、ヒルダ、ミケヤリナレス姉妹へ接触が計られたのは直ぐであった。

彼女達は事前の打ち合わせ通り、直時がイリキア王国のことを聞いていたこと。その先にあるリツタイト帝国へも興味を持っていたこと等をそれらしく臭わせて、追加報酬を手に入れていた。

しかし、その中でファイアだけが報酬への交渉もせず、接触してきたヴァロアの女性諜報員へ当たり散らしていた。

「では、ヒビノ様はイリキアカリツタイト、兎に角東に向かわれた可能性が高いと？」

「そうよっ！ あんた達があまり五月蠅く飛び回るから嫌になったんじゃないのっ？」

急いで調べた旅装で、大通りを東門へと急ぐファイア。流石に街中から舞い上がるような、目立つことはしない。

ヴァロア諜報員は直時への情報を引き出そうと、焦る彼女に引き離

されまいと追いながら必死で話しかけていた。

（フィアちゃん。追いかけるニヤ？）

（報酬の分け前を届けにね！ 迷惑料のつもりで置いていったならばん殴ってやる！）

換金が間に合わなかった場合、ロツソ逃走後、合流地点を決めて報酬の受け渡しをする予定だった。直時は距離を稼ぐことと、逃亡後の接触が情報提供した皆への疑念を生むとの独断で、独り旅立った。

直時の気遣いはフィアにとって侮辱と感じられた。スパルタではあるものの、直時の保護者としての自負があつたからだ。尤も、当の本人にとっては面白エルフ認定であつたのは秘密である。

（皆の分は冒険者ギルドに預かってもらってるから、各自とりに行ってね！）

直時はまだ知らないことであつたが、冒険者ギルドにはランク別に優遇措置がとられ、ランクB以上の冒険者であれば、地球の銀行に似た預金システムが利用できた。財産をどのギルド支部からでも預け入れ、引き出しが出来るサービスである。

違つのは、預金に対する利息が皆無であり、逆に資金の出し入れに手数料が引かれることだ。これは人族社会（普人族国家以外も含む）において、株や債券、先物や為替といった金融市場が開拓されておらず、あくまでも冒険者をサポートするためのサービスであるからだった。

フィアとヒルダはランクSの冒険者。長命種であるが故、積み上げた経験と実績は大きい。ギルドへの預金額は小国の年間予算程もある。今回の直時からの報酬など、彼女等にとってはさしたる額ではなかつた。

直時からの依頼を受けたのは、純粋な好奇心からであつた。どこ

に興味を惹かれたのかはそれぞれであるが、その突拍子もない言動に面白味を感じ、だからこそ協力した。その結果が置いてけぼりときては、腹の虫がおさまらないのは当然と言えた。

食い下がるヴァロア諜報部員の言葉は、既にファイアの耳に入らず、ロツソ東門を出た瞬間に風の精霊を集めて、街道上を低空へと舞い上がる。

「ひとりでは追いつけないだろう？ 私も行こう」

肩を並べてきたのは、背の翼を広げた竜人族のヒルダであった。

無然とした面持ちのファイアであったが、二人の協力がシースの中央に位置する王都『ヴァルン』から国境沿いの『リスタル』までの道程を、僅か1日で踏破したのはつい最近のことである。

「…お願いするわ」

「こちらこそ風の精霊の加護を^{たの}みにしている。奴は鍛えれば面白そうなのでな」

「……育てるのが趣味？」

「どうだろうな？」

ファイア問いをはぐらかすヒルダ。それ以上は何も言わず、ファイアの背後から手を回して身体を支える。

ヒルダの竜翼が起こす疾風に、ファイアが精霊術と移動系人魔術を合わせた。上昇し加速する。その速度は、暫く前に翔け去った直時を上回るものだった。

直時を捕捉するのに、時間は掛からないと考えていた二人だったが、その日のうちに捕まえることは出来なかった。既に姿を見失っ

ていたことが災いし、ジグザグに探しながらの飛行になったため、予想外に時間を取られてしまったのである。

翌朝、東進を再開した二人の眼に、鋭い光が過ぎる。直時の跨る自転車の金属部分が陽の光を反射させたのだ。その姿を確認したフイアとヒルダはお互いに低く笑い合う。清々しい朝の光が翳ったように思われた。

(みーっけーたー)

直時の脳裡にフイアの念話が響き渡る。明瞭な響きは、魔術効果の範囲内にいるということだ。慌てて見回すと、高速で近づく存在を発見する。念話と広がった翼から、それがフイアとヒルダであると認識する直時。

(えっ？ 何故っ？)

よりもよつて、最も恐ろしい二人組である。直時の背中に冷たい汗が流れる。

「ふふふふ…。先ずは一発！」

「待て！ ヒビノの傍を見る！」

いつもの如く竜巻を放とうとするフイアをヒルダが止めた。直時の横で身をくねらせて舞う影がある。

「あれは…。翼蛇^{ヒバク}？ 飛蛇^{トウゼ}の類かしら」

「いや。翼が6枚もある。形こそ小さいが…」

空を飛ぶ蛇型の魔獣は総称して飛蛇^{ヒバク}と呼ばれる。大小は様々だが、

歳を経たものほど大型になる。そして、その身を浮かせる翼は殆どの種が一對2枚で、4枚ある種でも、後ろの一對は補助翼や舵取りの役目であるため小さいのが普通だ。

しかし、眼の前の種には3対6枚の大きな翼があった。鳥類の羽でも皮膚から変化した皮膜でも、昆虫の翅でもない。魔力で生んだ翼である。

「間違いない。大蛇種だ。それも6本の飛行骨……。虚空大蛇の仔だろっ」

「そんなっ！ 神獣じゃないのっ？」

近付いたことでその姿をはつきりと眼にしたヒルダが断言する。

その名を聞いたファイアが驚くのも無理は無い。神獣はその殆どが神々と共に神域へと身を隠している存在で、地上界でお目にかかるなど稀を通り越して奇跡の部類に入る。

大蛇族は竜族（竜人族ではない）と近く、竜族を祖に持つヒルダであったから知っていたことだった。

空で邂逅を果たしたファイアとヒルダは、青褪めている直時と威嚇する虚空大蛇の仔を交互に見る。

「こうしていても仕方がないわね。とりあえず降りましょう。事情を聞かせてもらおうわ」

3人と一匹（神獣をそう数えて良いかは置く）は、直時の野営していた砂浜へと舞い降りた。

ファイアに平謝りしてどうにか怒りをおさめることに成功した直時は、昨夜の竈を利用して朝食の準備をしていた。

深酒で朝食を抜いていたし、ファイアとヒルダも保存食を少し口に

ただだけで追跡をしていたようで、どうせ腰を落ちつけて話をするのならば、皆で竈を囲むことになったのだ。

火の上で食欲をそそる香りをあげるのは、一抱え程もある甲羅を逆さまに鍋代りとなつている蟹である。中身は勿論蟹と蟹味噌。あとは浜に生えていた強い香りの野草と、直時がロツソで入手した乾燥昆布もどきが入っている。調味料は塩のみ。あとは食材の出汁だけである。

鍋に入りきらなかつた脚は焼き蟹として、虚空大蛇の仔用に捕獲した魚（生魚には顔を背けた）と一緒に火で炙られていた。

朝食にしては豪華な食事に舌鼓を打ちながら、フィアとヒルダは直時へ代わる代わる問いを浴びせていた。

「ヴァロアと遺恨が残ることを気にしてたのか。ヒビノにしては気が回るわね。大きなお世話だけど、お礼は言っておくわ。ありがとうね」

きつい言い方ではあつたが、礼だけは欠かさない。恥ずかしいのか少し照れている。頬が赤い。

「それと、これはヒビノの取り分だからね。ちゃんと受け取りなさい」

金貨が詰め込まれたずつしりとした革袋を直時へと手渡す。個人からでも依頼は依頼。直時がそれを受け取ったことでフィアの依頼は完遂である。満足気な顔を見せた。

「これで授業料を払えるな。一日につき金貨一枚でみっちり鍛えてやるっ」

ヒルダがにやにやと笑いかける。やけに楽しそうだ。焼き蟹に齧り付いていた直時は、愛想笑いを返す。

(多分断われないんだろうなあ…)

断わっても無理矢理訓練を受けさせられそうである。未来の事実として受け入れる直時。

「逃亡先への情報誘導だけど、座礁してた船を助けたのは正解ね。まあ、まだ先は長いから、これからも意図的に目撃されていけば良いと思うわ」

「町とか、時間差でフィアとヒルダさんが来てくれれば、二人はあくまでも追跡中という情報も流せるね」

「私は別に気にしないが、ヒビノがそうしたいのであれば構わんぞ」「逃げないと保証するなら良いわよ」

「…逃げ切れるとは思えませんので」
諦観が漂う直時の様子に、二人は満足気な笑みを浮かべる。

「しかし、二人ともなんでまたついて来ようと思ったの？」
理由が思い付かない直時は首を捻る。

「面白そうだから」

満面の笑顔で八モるエルフと竜人だった。

「フィア、ヒルダさんもこれから一緒に旅するんだよね？」
思案気な直時の問いに肯定を返すフィア。

「じゃあ、言っておいた方が良いと思うんだけどどうかな？ 腹芸とか苦手だし」

「ヴァロア相手に大芝居やたくせに良く言う。でも一緒に旅するなら…ね。それに余計な事を言いふらすタイプじゃないだろうし。釘を刺しておかないと暴走しそうにも思うし」

フィアの言い様に苦笑するヒルダ。彼女の矜持の高さには疑いを

もっていないファイアは、自分の口から直時の素性とこれまでの経緯、そして人魔術の魔法陣の秘密について語った。

ファイアの予想通り、ヒルダが興味を示したのは直時が大量の魔力を持ち、精霊術を操り、そして戦闘には素人であるということだった。普人族のようであるが、実は異世界人であるという事実には興味が無いようだ。

「磨けば光るといふことだな！ フフフフ…」

「砕け散るかもしれないので、何卒お手柔らかにお願いします」

不気味な妄執を感じた直時は、嫌な汗を垂らしながら牽制する。効果は皆無であったのは言うまでも無い。

「ところでその仔のことなんだが…」

うってかわって真剣な表情のヒルダ。直時には神獣について二人が講義した後である。

「傷付いて、飛行骨を奪われていたというのは本当か？」

「はい。全くもって許しがたい！ 神獣とはいえ産まれたての仔の身体を筆り取るなんて！」

直時の憤慨を他所に、ヒルダとファイアには別の心配があった。高位の魔獣や神獣、自分達のような長命種は、仔を儲けることは長い生に於いて稀だ。だからこそ我が仔が産まれたなら、全力の愛情を注ぐことになる。

もしも親である虚空大蛇がこの事実を知ったなら、その怒りはどれ程のものになるか戦慄を禁じ得ない。国が2つ3つ滅ぶくらいで済めば良いほうだろう。

「確か虚空大蛇って、天空の風と光、大蛇の水と大地、そして炎の力を持つてるって話だけど本当なの？」

「それで間違いない……。この仔は産まれたてで神獣の力に目覚めていないようだ、親はどうしていたんだろうな？　卵を盗まれてもしたのかもしれんな」

「そんな大それたことをしでかすなんて、やっぱり？」

「ああ。普人族以外考えられん」

直時の胸に尻尾を巻き付け、器用に焼き魚の肉だけを齧っては？　み下す虚空大蛇の仔。それを微笑ましげに見ながら、時折喉をくすぐっている直時の暢気な様子を見る二人には、言い様のない不安があった。

「まあ、あの仔が殺されていないことは僥倖だった。神獣の身体は神器と同等の高値で取引されるからな。次の町でギルドへ報告しておこつ」

「そうね。犯人の特定さえ出来れば、神獣の攻撃対象も絞られることだし、とばつちりが減らせるでしょう」

フィアとヒルダの真剣なやり取りを他所に、食事を終えた直時と虚空大蛇の仔がじゃれあっている。

「ねえ！　この仔の名前、暫定だけど考えてみたんだ。俺の国で蛇のことを『巳^み』って言うんだけど、大空を舞う蛇ってことで『ミソラ』ってどうかな？」

身体をぐるぐる巻きにされて、口元の食べカスを舐め取られている直時がフィアとヒルダに問う。

「神獣の仔に勝手に名前なんて付けたら駄目なんじゃ？」

「しかし、名が無いと不便であるのも事実だ。当人（？）はどうなのだ？」

フィアの懸念にヒルダが苦笑で返し、直時と虚空大蛇の仔を見やる。

「お前の名前、ミソラ！ ミソラってどうだ？ 嫌なら他にも考え
るぞ？」

直時は砂にカタカナで『ミソラ』と指で書く。初めて見る言語に
ファイアも興味深げだ。

頭を直時に擦りつけてくる様子に、気に入ったと判断した。

「じゃあ、今日からお前は『ミソラ』だ！」

嬉しそうに喉を人差し指で撫でる直時。気持ちよさそうなミソラ
が右の第一飛行骨の先端で直時の頬を突く。まるでお前はなんて言
う名前だ？と聞かれているようだ。

「よし！ じゃあ自己紹介しよう。俺はタダトキ・ヒビノ！ はい、
次」

「フィリスティア・メイ・ファーンよ。通称ファイア」

「ヒルデガルド・ノイツ・ミュリッツと言う。ヒルダで良い」

返事を期待していたわけではないが、それぞれが丁寧に名乗る。

「（ミソラ！）」

全員の脳裡に念話が聞こえた。人魔術ではなく、神霊が使つよう
な念話である。驚く皆へ嬉しそうな笑いの波動が響き渡った。

たらふく朝食を摂った一行は、昼前まで休憩し次の目的地を検討
する。ミソラの情報を早急に伝えるべきだとのことで、東へ進む途
上にあつて一番近くの港町『リネツィア』へと向かうこととなった。

直時は町には寄らず上空を掠めるようにして姿を誇示し、その後、
ファイアとヒルダが到着。ギルドでミソラの件の報告と直時の情報収
集をして、即追跡という段取りである。

ここで問題になったのがミソラの扱いであった。直時に懐いているようだから、町へ降りさせないよう気を遣ったが、足跡を残すという意味で低空飛行を予定している。その直時に寄り添うように飛ぶとなれば注目を集めてしまう。

町の上を通過する時だけ離れていてくれれば良いが、どう理解させるかが問題だ。神獣の姿を眼にする機会などそうはなく、悟られない可能性はあるが、口伝や文献に詳しい者が皆無ということも無い。難しい顔で考え込む3人。

「言葉教えたら大丈夫なんじゃない？」

先程、名付けられたことを理解し、念話を発したことに考えが至った直時が発言する。

「しかし、自分の名前を連呼するだけだぞ？」

ミソラはそれ以外にも伝えようとせず、皆の脳裡に『ミソラ』とい念話と共に歓喜の感情を発しているだけだ。いい加減鬱陶しくなっているヒルダはげんなりとした様子である。

「転写で強制的に憶えさせることも出来るけど？」

「あれはきついからなあ」

フィアの提案にも気がすすまない直時。経験したからこそ、その苦しみを味わせたくはない。ゆっくりと教えていきたい。

「今回俺は姿を見せないことにしない？」

「しかし、今回だけでは済むまい。ミソラが言葉を憶えるまで行方知れずになるのでは、逃亡先への足跡を残すという策は使えないぞ？」

それでも躊躇する直時へ、フィアが代案を出す。

「じゃあ、転写の情報量を制限しましょう。幼児程度の語彙ごいがあればなんとかなるだろうし」

直時もこれには頷くしかなかった。

「ミソラが怖がるだろうから、あんたも一緒に転写受けてね。知識は重複するだろうけど」

フィアの指示に従って、ミソラを身体に巻き付けたまま向き合う直時。安心するよう微笑んで喉をくすぐってやる。何をされるか理解していないようで、笑いの波動を念話で飛ばすミソラ。

「幼き言の葉 拙い知 この仔の知と為さん 転写」

フィアの頭上と、直時、ミソラの頭上の魔法陣が情報を伝達する。重複すると言われていたが、幼児に絞った言葉と知識は未だ知り得たとは言い難いこの世界の知識である。それなりに直時の興味を引く内容だった。頭の痛みもそれほどではなかった。

対してミソラは、突然の知識の流入にびっくりしたようだ。悲鳴のような念話を放ちながら、直時の胸元から服の下へと頭を突っ込んで怯えている。

「（こわい！ こわい！ おでこ痛いー）」

余程怖かったのだろう、直時の服の中へとすっぽりと隠れている。

「喋った！ ミソラが喋ったよ！」

「ふむ。これで問題は解決だな」

二人の言葉にフィアが鼻を高くして腰に両手をあてる。得意げなその様子が、次のミソラの発言で固まった。

「（あのおばちゃん、こわいー）」

驚愕の表情を張りつかせ、凍りつくフィア。直時とヒルダは一瞬

後同時に口に手を当てるが…。

「ぶふっ！」

堪え切れずに嘔き出してしまった。

「っ！」

フィアが叫ぼうとした瞬間、素早い身ごなしで背後から口を押さえたヒルダが耳元で囁く。

「ミソラをこれ以上怯えさせてどうする？ 我慢しろ」

「フッ！ フッ！」

ヒルダの言うことは尤もであったが、笑いを堪えているのは傍目にも明らかだ。口と動きを封じられ、そうかといって精霊術をミソラに放つわけにもいかないフィアは涙目で激情を抑えつける。

「まああれだ。ぶふっ。エルフは長命だって言うし。くはっ。あなたが間違いでもないんじゃないか？ あはははは！」

最期は声に出して笑う直時。ミソラがまとわりついているため、フィアの過激な突っ込みを心配せずに気が大きくなっているようだ。

「…長命種は…、おばさんなのか？」

先程まで味方であったはずのヒルダの声が低い。

「あれ？ ヒルダさん？」

「なるほどエルフは長命だ。フィアも200歳は越えているだろう。…ところで178歳はおばさんなのか？」

明らかに先程までとは笑いの質が違う。直時の余裕が消し飛び、嫌な汗が頬をつたう。

「あー、えー、うー」

言葉にならない直時。ヒルダの拘束が解けたフィアも薄笑いを浮かべている。

「ミ

「ミソラ

「ミソラちゃん」

直時の言葉をかき消すヒルダとフィア。ミソラはびくりと身を震わせる。

「おねーちゃん達のところへ来ないか？」

「おねーちゃん、ミソラちゃんのお顔が見たいなあ」

(あれは笑顔じゃない！ 断じて！ 行くなミソラあ！)

声に出せず心で叫んだ直時だったが、身の危険を感じたのかスルスルと服の下から身を引いていくミソラ。砂の上を蛇行しつつ二人の許へと向かっていく。

フィアとヒルダの背後に到達した後、チラリと直時へと済まなさそうな顔を向け、とぐるを巻いて頭を胴体に埋める。

「(タダトキおにーちゃん…ごめんなさい)」

直時の脳裡にミソラのか細い念話が届いた。

(良いんだミソラ…。あの魔女達に勝てる存在なんて無かったんだ…。忘れていた俺が愚かだったんだ…)

届くと信じて心でミソラに語りかける直時の眼は優しさに満ちていた。

逃避行？（後書き）

命名『ミソラ』です

次回更新は28日以降となります。

逃避行？（前書き）

時間なくて見直し無しで投稿しまっ！

逃避行？

「……、御指導有難う、御座い……ま、した。う、う、麗しきフィアお、くう……。お嬢様。凜々し……い、ぐがが……。ヒルダひ、ひ、姫様」

砂浜にボロ雑巾のように蹲る物体から、魂を絞るような細かい声が聞こえた。心無し屈辱感に塗れているような気もするが、多分気のせいである。

満足気なフィアとヒルダに見下ろされた物体は、『教育』の名の下に暴虐の限りを尽くされた直時の残骸であった。自業自得であったことは否めないが……。

ミスラは自らのとぐろの中に頭を突っ込んで震えている。

「ふう。汗かいちゃったわね。身を清めて来ようか？」

「そうだな。頼めるか？」

フィアとヒルダは頷きあって近くの森へと足を向ける。

「覗いたら息の根を止めるからね」

振り向いたフィアの恫喝にも、答える程の元気が無い直時は息も絶え絶えで頷いた。

森へと入ったフィアとヒルダは、周囲に気配がないのを確かめた後、衣服を脱いで手近の枝へと引っ掛ける。

露わになつたのは背丈はあるものの、細く繊細なファイアの肢体。白い肌ではあるが、あくまでも柔らかい雰囲気を崩さない仄かな薄い肌の色。対照的に、存在感のある胸に引き締まった胴、豊かな腰へと緩急のついた体型のヒルダ。肌は同じく白くはあるが、真っ白な中にほんの少し墨を垂らしたような灰色。硬質な印象である。木漏れ日に煌めくのはファイアの白金の細い髪と白い肌、ヒルダの白い髪と竜鱗である。

「風の精霊、水の精霊、我等が身を清め給え」
「ファイアの声に二つの裸身が優しい水の渦に包まれる。汚れを落とした後は、風が濡れた身体を瞬く間に乾かしてしまふ。」

「炎の吐息で汚れを焼き尽くすより心地良いな」
「貴女、そんなことしてたの？」
ヒルダの眩きに呆れたようなファイア。炎に耐性の強い竜人族ならではの清め方である。

「あれはあれですつきりするんだがな」
「そんなの貴女達（竜人族）しかできないわよ」
やってみるかと思ふヒルダにあくまでも固辞するファイアであった。

身綺麗になつた二人は、身に付けていた衣服もファイアの精霊術によつて洗う。風に乾かされる間、美しい裸身は惜し気もなく晒されているが、それを眼にする幸運な者はいなかった。

「（おにーちゃん…大丈夫？）」
ファイアとヒルダ
鬼達が立ち去つた後、直時へと這い寄つたミソラが心配そうな様

子で聞く。

「だ、だいじょーぶ…。精霊達、癒しを」

治療術を行使した直時から、瘡蓋かさぶたがぼろぼろとこぼれ、全ての傷が完治したことを告げた。

「（これ、ミソラもやってもらった！ 同じ！ おにーちゃん元気になった！）」

一転して嬉しそうなミソラ。直時の頬も自然と緩む。

（意思疎通できるだけで、蛇っ仔をこんなにも可愛いと思ってしまうとは…）

地球にいた時には考えられないことだと直時は思っていたが、実のところそうでもない。犬猫牛馬羊等哺乳類は言つに及ばず、爬虫類でも産まれたばかりの仔蛇を掌に載せては眼を細めていたし、小さな蜥蜴やヤモリ、蛙にも可愛気を感じていた直時である。害の無い毛虫や芋虫を腕に這わせて、その感触を楽しんでドン引きされていた事もあった。

「……………しかし、魔女どもめっ！ 好き放題やってくれやがりましたね…。いつか！ いつか絶対ギャフンと言わせてやるからなあああああああああっ！」

万が一にも森に届かないように、眼の前の大海原へ向かって叫ぶ直時であった。

傷は完治した直時であるが、全身血塗れ土塗れである。フィアとヒルダは森の中で汗を落としているのだろう。女性の身嗜みみだしなは時間が必要との判断から、以前から試したいと思っていた計画を実行に

移すことにした。

「先ずは『岩盾』^{がんじゆん}の魔法陣を用意して」
幸いにも周囲に人気^{ひとけ}は皆無であり、ヒルダには先程事情を説明したから問題はない。砂地に座り込んだ直時は、魔法陣を展開する。発動することなく宙に浮かぶそれを、ミソラが興味深そうに眺めていた。

「形を将棋の駒から箱型に変更して……。これじゃ大き過ぎる。もう少し小さく。でも脚が伸ばせる広さは欲しいな。どうせ屋外でしか使えないからそんなに小さくなくていいか。表面はなるべく滑らかに……。角はR^{アール}をつけておこう」
魔術回路の成形に当たる部分を描き直していく。供給魔力量は必要に応じて増やす。

頻^{しき}りに何これ？ と、問いかけるミソラに、直時は出来てからの楽しみと笑いかけていた。

「土は石に 石は岩に 『岩盾・方舟』！」
新しくアレンジした魔法陣を編み、呪文を唱える。砂地から生えるように現れたのは2メートル四方の箱型の岩。厚みは15センチ程だろう。先程の吹き通り、縁^{ふち}も中も角は全て丸くなっている。

「（おにーちゃん！ 四角のが出てきた！ すごい！）」
「ふふふ。ミソラよ！ ここからが本番だ」

ドヤ顔で水の精霊に働きかけた直時は岩の容器に水を満たす。砂浜にでんつと鎮座した物体は大きな浴槽であった。庶民に入浴の習慣が無いことからこれまで我慢に我慢を重ねていたが、漸く実行する機会を得た直時である。

「ここまででは計算通り！ じゃあ、お湯にせねばなっ」

念のため距離をとり、ミソラは自分の背後まで退がらせる。直時は一番初めに教えてもらった攻撃魔術である『炎弾』の魔法陣を編んだ。

「焼けつく炎 『炎弾』！」

直線ではなく放物線を描いた炎の塊は、狙い変わらず水を湛えた浴槽の中央に着弾した。

ポフッ！

瞬間、辺りは猛烈な水蒸気に包まれる。直時とミソラが待機している場所まで水蒸気を伴った風が届いた。

「うわっぶ！」

流石に熱はあらかた無くなっていたが、蒸気の凄まじさに驚く直時。

確認のため覗き込んだ浴槽にはほんの少し熱湯が残っていただけだった。

「……まさか水が弾け飛んでしまうとは」

初級とはいえ攻撃魔術を放ったのである。手っ取り早いと思った手法であったが、水蒸気爆発を起こし、肝心の湯を沸かすということには失敗だったようだ。

「（無くなっちゃったよ？）」

「ぬっ」

ミソラの前で格好良くきめようとした直時だったが、裏目に出たようだ。

「やはり制御という点では、生活魔術の改造の方が良いということ

か…。ちょっと待ってくれよー。すぐになんとかするからなー」
ミソラの視線に羞恥に染まりながら、使えそうな生活魔術脳内検索する。

（くうーっ！ ここにあの二人がいなくて良かった！ ミソラは良くわかって無さそうだけど、あいつらがいたら絶対に弄られてたな）

不幸中の幸いと思うしかない直時。いくら女性の身嗜みに時間が必要とはいええ、あまり時間を掛けることはできない。

（お湯、お湯かあ。水の精霊ぶるちゃんに頼んだらなんとかなるかもしれないが、ここは自力で乗り切りたい！）

良いところを見せようとして失敗した。それが原因で、不必要なこだわりが頭をもたげる。

「んーっ。ひとつのことに拘るからいかんのだ。人魔術は複数系統を組み合わせている魔術もあるんだし…。」いでみず「出水」に火の術式を組み込むか…。煮炊き用じゃ火力が低そうだけど、広域はやバイし、鍛冶屋用だと強過ぎる。どうすつかなあ」

直時のイメージ的には給湯器である。水を通す過程で適度な加熱が加われば良い。検討結果、『出水』の水線の周りに熱風（適度な炎の術式とそれを纏わりつかせる風の術式）を組み込むことで温水とする方式にする。

いじった魔法陣を何度か発動させ、直時好みの温度より少し高いくらいに設定し（自然放熱や、浴槽が熱を吸い取るのを見越したため）た新たな魔法陣を満を持して編む。

「温かな水の恩恵 『出湯』…！」

呪文も新規一転である。編まれた魔法陣の中心からかなりな勢い

で温水が注がれる。

砂浜の砂を材料として構築された『岩盾・方舟』に、今度こそ満々と湛えられるお湯。腕を捲くりかき混ぜながら温度を確認する直時。

「うむ。良い塩梅だ！ やつと……。やつとお風呂に入れるぜ！」

お風呂は身体と心の洗濯である。日本人にとってこれは譲れないところだ。ミソラは、拳を握り締め感動に浸る直時を不思議そうに見ていた。

全裸の直時は、岩風呂の横で鍋を手桶替わりに掛かり湯をする。その姿をミソラが注視していたが、フィアとヒルダから産まれ立ての幼生であると聞いていたため、さして気にもしていない。

「ふうー……っ」

湯に身を浸した直時は、久し振りの感触に満足の吐息を漏らす。

「（おにーちゃん、気持ち良いの？ ミソラも同じことやりたい！）」

直時の至福に満ちた表情を見たからだろう、身をくねらせアピールするミソラ。

「おう！ 入る前にちゃんとお湯を被るんだぞ？ これはお風呂に入るための礼儀だからな！」

「（うん！ ミソラちゃんとする！）」

浴槽の傍らに真面目な面持ちで屹立したミソラに湯を掛けてやる直時。熱くも無く冷たくも無い温度に、心地良かったのか、ふはあと息を吐く。

「うむ！ 入ってよし！」

「（わーい！ ミソラえらい？）」

「ちゃんと出来たな！ えらいぞっ！」

湯船の縁に肩を載せた直時の笑顔に飛びついてくるミソラ。器用に水面を泳いでいる。

「（ばかばかして、ほわほわして気持ち良いね！）」

頭部だけは湯に漬けないで直時にからみついたミソラは、初めての入浴に御機嫌である。気に入ったようだ。

ゆっくりと湯に浸かりたかった直時だったが、無邪気にはしゃぎ湯面を泳ぎまわるミソラと戯れるのも悪くない。飛沫を掛けられても怒る気は起きず、心からこの時間を楽しんだのであった。

ちなみに汚れた衣服は水と風の精霊にお願いして洗濯し、乾燥まで任せつきりである。浴槽から少し離れた空中で、水の精霊ぶるちやんが汚れを分離し、風の精霊ひーちゃんが乾かしてくれていたりする。

「…裸でなにやってんの？」

戻って来た魔女その1、ファイアが湯に火照った直時に問いかける。それまで奔放にはしゃいでいたミソラが上目遣いに直時へと寄り添った。余程怖かったようだ。

「これは俺の故郷の風習で『露天風呂』と言う。空の下で温かい湯に浸かり、身を清め、身心を癒す習慣だ。ちなみに普通の風呂は各家庭に備わっていて毎日入る」

「これは人魔術で作ったのか？ 屋外用の浴場か、面白いことを考

えたものだ。私の実家にも大浴場はあるが毎日入る事は無いな」
「ヒルダの実家って…。族長とか言ってたわね」

浴槽でふんぞり返り風呂文化を誇る直時を特に意識する様子のない二人。実は平静を装いながらも、直時が瞬きをする瞬間に視線が下へと向いていたりするが、そのような神業を見破れるわけもない。

（自分の裸は見せないけど、男の裸はなんともないのか？ まあ、そんなもんか）

見た目が妙齢の女性達であったが、先程のやりとりで実年齢を思い出した直時は遠慮をかなぐり捨てた。彼女達にとっては男性の裸などもう珍しくもないだろう。恥ずかしいと思う気持ちが無くも無いが、『露天風呂』だと開き直る。

「フィアの郷には入浴の習慣は無いの？」

「沐浴ならするけど、お湯に入る習慣は無いわ。でも、気持ち良さそうね」

「今日も天気は良いようだ。野営で、同じものを作ってもらおう。

それはそれとして、そろそろ用意しろ。移動するぞ」

「了解。ゆつくりしたかったけど、実験が成功ってことで満足しとくか。ミソラ、上がるう」

「（えー？ もっとー！）」

余程風呂を気に入ったのか、駄々をこねて直時に巻きつく。裸体に悶える大蛇（実は産まれ立て）という、第三者から見れば誤解を招きかねない光景に、フィアとヒルダの頬が染まる。

現実駄々つ仔をあやすの図であったりするのだが…。

「おねーさん達が怒るよ？」

直時の囁きに身を強張らせるミソラ。

「（ミソラ、良いコ！ もうおしまい、わかった！）」

この手は使えるな、と満足気に頷いている背後に二人の魔女の影。

「はっ？」

気付いた時には遅かった。作り笑顔のこめかみに青筋を立てたフイアとヒルダは、直時の頭を鷲掴みにしてお湯の中に沈めるのであった。ぶくぶくと口から立ち昇る泡が『ババア…』と弾けていたのは秘密である。

身綺麗になつた一行は、それぞれの荷物を纏めて空へと舞い上がる。浴槽は直時が魔法陣を逆操作で砂に戻し、野営の痕跡を消していた。

「あれ？　なんかミソラの色変わってなくない？」

直時が出合ってから今まで、ミソラは明るい白茶色をしていた。それが今は青灰色になっている。

「多分保護色じゃない？　さっきまでは砂地にいたけど、今は空の上だしね」

空の色と雲の色を模しているのだろうとフイアが答えた。羽が魔力製で半透明なものも目立たないためなのだろう。

「へえ。何気に凄いな。自動迷彩かあ」

「（ミソラすごい？）」

「おう！　凄いぞ！　格好良い！」

直時の言葉に大喜びである。自転車の周りをくるくると飛び回っている。

「準備は良いな？　では『リネツィア』へと急ぐぞ」

ヒルダの声に皆が頷く。一行は一路東へと空を翔ける。

自転車に跨った直時。そのすぐ傍には6枚の羽から風を生み出し飛ぶミソラ。少し後方からは直時と同じく風の精霊に身を任せるフイアと、竜翼を広げミソラと同様に風を媒体に推進の風で飛ぶヒルダ。ある意味移動力に特化した集団である。その移動速度は並の冒険者が『地走り』等の移動系魔法を行使しようとも追いつくことは敵わないものだった。

(打ち合わせ通りヒビノがまずリネツィアの街の上を通過。なるだけ目立て。ミソラは街を迂回してヒビノと合流。二人はそのまま東進。越境し、『フルヴァツカ公国』の街『リジェカ』の手前の海岸線で待機。あの辺は紛争が絶えないから街へは近付くなよ？私とフイアはミソラの件をギルドへ報告し、ヒビノの情報をわざと聞いているから追跡という形をとる)

高速での移動中につき、念話での会話となる。中継は何故か押し付けられた直時だ。相手を指定しての双方向は別だが、集団での連絡は直時が受信してそれを同時通訳のように皆に飛ばすのである。リメレンの泉でリシュナンテが担っていた役割と同じだ。

(ミソラ、おにーちゃんと一緒に良い！)

神獣にも問題無く届いているようだ。安心する人族一同であるが、やはり問題はミソラである。

(街の上を過ぎるまでだから。ミソラは街の上飛んだら、また痛いことされちゃうの。だから隠れて飛んでくれる？)

(やだやだ！ 独りだと怖い…。おにーちゃんと一緒に良い！)

事前のヒルダの説明もフイアの言葉もミソラには効かないようだ。

(そうだ！ 服の中に隠れるなら大丈夫なんじゃない？)

直時は何回も巻きつかれている。

(ミソラ、街の上だけおにーちゃんが抱っこしてあげるから、じっとしてられる?)

(抱っこ? ミソラ抱っこ好き!)

不安そうな念から、途端に喜びへと変わる。

(ちょっと来てみな)

東進を止め、滞空する一行。直時の襟元からミソラが身をくねらせて入っていく。飛行骨は器用に折り畳んでいる。胴を螺旋状に這い、全身を直時の服の下へ潜り込ませると襟元から頭をピヨコンとのぞかせた。

「これで大丈夫なんじゃない?」

滞空しているため声が届く。念話でなく直接声にだす直時。

「ミソラ、街の上はそれで良いわね? 外に出たら駄目よ。我慢できるか?」

フィアが念押しする。

「(ミソラ、これが良い! おにーちゃんあつたかい。ずっとこれで良い)」

「虚空大蛇のイメージが…。竜族と並ぶ大空の覇者なのに…」
ヒルダが額を押さえている。

「ミソラの鱗すべすべだなあ。気持ち良いかも…」

「子供に言つな! 変態!」

直時の呟きにフィアの拳骨が後頭部に炸裂する。空中で一回転しながら、久し振りの普通のツッコミに安心する直時。

「……ふむ。ヒビノは鱗が気持ち良いのか……」
危険な発言をするヒルダに一同の視線が集まる。

「なんだ？」

「人を特殊な趣味を持つかのように形容しないでください！」

直時はあくまでも元の世界においての判断で叫ぶ。爬虫類フェチと思われるのは心外である。

「だが気持ち良いのだろうか？」

「それはミソラが可愛いからです！」

「私はどうだ？」

「普通に綺麗ですよ？ ……怖いけど」

見目は麗しいと言わざるを得ない。但し、後半は小声である。相對したときの圧倒的な力が頭を過ぎる。

「そう言えば普人族のようであるが、普人族とは何の関係も無かったのだっただな」

何かを納得するようなヒルダである。フィアは胡乱わづらわな様子だ。

普人族は欲は強いが排他的である。リナレス姉妹の耳や尾を切り落としたことから判るように、自らと違う特徴を嫌う傾向が強い。しかし、直時からすれば自分達には無い魅力的な特徴である。小説、漫画、ラノベ等でお目にかかれない実物が眼の前に存在するのだ。感動以外の何物でもない。

「うむうむ。これは育て甲斐がありそうだ。是非とも竜人族並に鍛えてやるうー！」

何を納得しているのか判らないが、直時に死の特訓が課されることとなる。

「なんでそんなに張り切ってるんだ…」
脂汗をかく直時を気の毒そうに見るフィアとミソラであった。

その日の午後、マケディウス王国の街のひとつ、『リネツィア』
上空を横切る影があった。見たことのない銀色の乗り物に跨った人
影はその姿を人々に見せつけるかのようにゆっくりと街の上空を巡
る。

緊急出動した駐屯地の空中騎兵が近付くと、大きく手を振りなが
ら街を後にした。銀色のその乗り物と、見たことのない風に靡く漆
黒の髪。それはしつかりと街の住人の眼に焼き付いた。

彼が空中騎兵を振り切って飛び去って一刻後、高名な冒険者が街
を訪れた。『晴嵐の魔女』ことフィリスティア・メイ・ファーンと
『黒剣の竜姫』ことヒルデガルド・ノイツ・ミューリッツである。
西門前に舞い降りた二人は、時間を惜しむかのように冒険者ギル
ドへと足を運び、支部局長へと面談を申し込んだ。通された部屋で
何が語られたかは憶測を呼んだが、すぐに噂は広まった。
『黒髪の精霊術師』を追っている。

どういった経緯で戦友とも言える二人が彼を追っているかは判ら
ないが、先の戦は人々の記憶に新しい。噂は噂を呼び、尾ひれ背び
れがついた話が国内を問わず各国へと駆け廻った。直時達の思惑は
当人達の予想を上回る速度で広まったのだった。

ヴァロア王国の南部、『ライリオン』。リスタル侵攻軍司令官が

治めていた街である。領主の戦死により、家督相続の混乱が吹き荒れている中、僅かに生き残った生還兵の中に参謀の姿があった。

本来なら生き残りの上位者として責任の可否を問われてしかるべき立場にあったが、ヴァロア王国は彼を保護し此度の戦の聴取と分析をしていた。

「つまり、彼は風だけではなく、水と闇の精霊術にも精通しているということですね？」

「私が眼にしたのは風と水の精霊術ですが、その後の経緯を鑑みると闇もですね。しかもあれだけ広範囲に展開できるとなると普人族にあるまじき魔力量であると判断出来ませぬ」

彼と同じく生き残った諜報部の者が立ち合った上での聴取官とのやりとりである。

「ロツソから逃走したというのは本当ですか？」

「間違いない。うちの諜報員を袖にしたことで他国へ走ると思われたが、カールもシーイスも我が国と同様逃げられたようだ」

参謀が顎に拳を当て考え込む。

「…情報が必要です。リスタル滞在前のことも…。あれ程の使い手が今まで無名であったことが不自然です」

「それは既に指示してある。今判明しているのはリスタルには例の『晴嵐の魔女』と共に訪れたことが判っているだけだ。あとはロツソから東へ向かったということくらいか。イリキアカリツタイトが目的地らしい。マケデイウスの『リネツィア』上空を通過したらしいから既に越境しているだろうがな。交渉を再開しようにも相手を捕捉できん。中継を駆使してイリキアの諜報員には連絡はいつているが、リツタイトには侵入も潜入も出来ておらんからな。頭が痛いところだ」

参謀は直時の正体に疑問を持ったようだが、情報部に属する聴取

官は現在の動向に捕らわれているようだ。

「追跡は？」

「相手は空中騎兵を平然と振り切る輩だぞ？ 予想進路上の街へ遠話を中継するのが精いっぱいだ」

「ヴァロア王国も各国に諜報員を潜入させているようだ。他国も同様である。」

「イリキアより東へ逃亡されてはどうしようもないですね。ですが、還ってこないのであればやっかいな要素が無くなったと見るべきでは？」

「欲しい人材とは言え、それが近隣諸国に渡らないのであれば実害は無いと言っている。」

「それはそうなんだがな。王室がこだわってるんだよ」

「フィアの懸念が当たったようだ。実害はなくとも利用価値を考えると地の果てまでも追いかけていたいらしい。」

「それで私に何を？」

「敗軍の参謀にここまで恩赦を与え、事情を話すということは問わずとも判っている。」

「『黒髪の精霊術師』の捕捉と取り込みだ。彼の者の脅威を身をもって知る君ならその重要性も理解できるだろう？ 王室の横やりも激しいのでな」

「……判っている各国の対応は？」

「シーイスは諦めたようだ。カールは追跡隊を放っている。マケデイウスはどこから嗅ぎつけたのか特別部隊を編成して追わせたようだ。各国とも追跡には足が追いついておらんようだ。なんせ移動が早すぎる」

溜息を吐く聴取官を苦笑しながら見る参謀。

「そこまで判っていて自分に情報を話すのは何故ですか？ 諜報部長殿」

下つ端の聴取官を装っていたが、ばれているのは始めから判っていたため参謀の言葉にも驚きは無い。

「阿呆な司令の補佐にと有能な参謀を推したのが私だったからだ。結果は散々だったがな。まあ、罪滅ぼしとでも思ってくれ」

「それなら年金付きで余生を送らせてもらえそうですけど、そのよくな気配は全くないのは何故でしょう？」

「恩に着せるつもりがお見通しか……。考課表の通り嫌な奴だよ、全く……。サミュエル・ペルティエ少佐！ 君は軍籍を剥奪される！ 所属は諜報部へ異動。君の弁舌で『黒髪 of 精霊術師』を我が国へと引き入れるのが任務である。期限は私が上司でいる間は有効だ。金も女も交渉に必要ななら全て使え。権力なら王族に連ねる用意がある。ここまで破格の条件を貴君に委ねるのだ。必ずたらしこめ！」

「拝命いたします」
敬礼するサミュエル。真面目な顔は諜報部長と同時に苦笑に変わった。

(王様のわがままに付き合わされることになるか……)
有能な新たな部下に苦笑を返す上司であった。

逃避行？（後書き）

ヒルダさん、ちょっとだけデレた？

逃避行？（前書き）

越境。目的地はまだです。

逃避行？

マケデイウス王国東部の街『リネツィア』から更に東。小さな半島を跨いでフルヴァツカ公国の港街『リジエカ』がある。

直時達はその手前の半島部、山地から海へと注ぐ河口付近で野営をしていた。河の兩岸は断崖で、近くを通る街道も無い。河口近海も複雑な岩礁が多く海路から外れているため、普人族の眼を気にする必要が無かった。

空が茜色から濃い藍色へと染まる中、一行の顔を照らすのは竈の火。メインディッシュは既に平らげられた、サメとエイの混ざったような魚の串焼き（3メートル強あったが、扁平な頭部から背中まで固い外殻に覆われ、内臓を除くと肉は思った程とれなかった）。今は、それぞれが干し果物や、焼き芋などを肴に蒸留酒や果実酒を口にしていた。

芋や酒類は、駆け足滞在だったにも拘わらずフィアとヒルダが買ってきていた。当然、直時が持参していた蒸留酒も徴収されているが、昼食に引き続き豪華な晚餐に文句はない。

「で、やっぱり追跡はされてるってこと？」
炙ったヒレを齧りながら直時が訊ねる。クニクニとした触感が意外と美味である。

「ミケちゃんからの情報で早速ギルドに伝言が入ってたわー
シーイスは国組織での追跡は諦め、直接冒険者に依頼。ヴァロア

は今のところ情報無し。マケデイウスは利権を報奨として御用商人に情報と懐柔を通達。カールはヒルダにリシュナンテから要請があったということだ。

ほっこり焼けた芋をお手玉しながらファイアが報告する。

「ヒビノを捕捉したのなら、道程を教えて欲しいそうだな。目的地は判っているだろうから、経過から立寄り先へ触れを回すのだろう。あと、まさかと思うが足の速い空中騎兵に強行させるとかな。侵入が漏れれば戦の火種になりそうだが、カール程の大国ならやるかもしれないな」

ヒルダは、直時から分捕った強い蒸留酒を咽もせず一息で飲み干し、杯を差し出す。おかわりのようだ。

「ギルド通さない依頼って受ける冒険者多いの？ 商人は取引先の繋がりとかあるから怖そうだな。無茶をしそうなのはカールと出方が判らないヴァロア…かな？」

ヒルダの杯と自分に蒸留酒を注いだ直時は、ミソラの杯にも足りてやる。

「…その仔、生まれ立てなのよ？ 飲ませ過ぎちゃ駄目よ」

まだ熱そうな芋の皮を剥きはじめてたファイアが、横目で睨んだ。

「一国からの依頼なら、余程危なそうな案件以外大丈夫だと思うんじゃないかしら？ 恩にもなるしね。ただ、ギルドからの受けは悪くなるから報奨と仕官目的の普人族じゃないと受けないんじゃないかしら？」

アツアツの芋に塩を振りかけて齧る。

「リツテからの要請は面倒臭いから却下だな。カールに義理は無い。無茶は恐らく両国ともするかもしれん。特にカールは隣国には強気

で押すだろつな。ヴァロアは先の戦で痛手を被っているからあまり露骨な真似はせんだろう。カールを間に挟むことになるし、ヴァロアが動いたとなれば、カールの御機嫌取りに走る国が出るだろうしな」

ま、そんなに心配することもなかつ、と、ヒルダはあつげらかんとしている。直時としては、ヒルダやファイアのような猛者ではないので不安が拭えないのだが、二人の落ちついた様子にやや安心した。

「…で、だ。深刻な方の話だ。虚空大蛇の卵が親元から奪われ、幼生が虐待されたと聞いたギルドは上を下への大騒ぎとなった」

ヒルダの声音が低くなり、ファイアも顔を伏せる。

神々にも匹敵する力を持つ存在の怒りに触れることを恐れた冒険者ギルドは、その総力を挙げて実行犯と関係者の割り出しをする事となった。場合によっては討伐依頼が全ギルドで出されるかもしれないとのことだ。

「犯人はギルドが責任を持つてことになったの。で、ミソラが無事だつてことを親の神獣に早く知らせるべきだとなったのよ」

ファイアの言葉にもっともだと頷く直時は隣のミソラへ笑みを向ける。

「ミソラ！ お母さんとお父さんに会えるぞ！」

「（ほんと？ ミソラ、まだお母さんもお父さんも会ったことない…。こわくない？）」

転写によって、両親や家族といった概念は憶えているはずだが、生まれてはじめて会うのに不安を感じているようだ。

「もちろん！ きつとミソラ好き好き大好きーってなるよ」

短い間ではあったが、子は親許で愛情を注がれるのが一番だと思

う直時は、満面の笑顔で請け合った。

「それでね。神域を通して報せて欲しいって言われたの」

「神域からは地上を覗けるって言うてたね。じゃあ、メイヴァーユ様経由で？」

頷くファイア。ただ、メイヴァーユから直接ではなく、虚空大蛇と縁の深い他の神霊や神々、神獣を頼るとのことだ。

「じゃあ、すぐにでもミソラは御両親と会えるんだね？」

「…そうね。ほんとうに直ぐよ」

何故か青い顔で向かい合う直時の背後へと視線を移す。いつも余裕たっぷりのヒルダも強張った表情だった。

目立たない地形での野営で、しかもファイアとヒルダがいることで探知強化の上掛けをしていなかった直時は、今更ながら背後の波間から何か大きなモノから流れ落ちる水音を聞いた。

夜の帳が訪れ月ばかりが明るい砂浜に、色濃く落ちる大きな影。

大きなファイゴのような音が規則的な間隔で聞こえ、だんだんと大きくなってくる。

砂を押しつぶす音がしたとき、直時はゆっくりと背後を振り返った。

頭上から覆いかぶさるように降りてくる黒い影は、篝火の灯りを受けて漸くその姿を明らかにする。鎌首をもたげた大蛇の頭が一行のすぐ上で止まった。

宵闇と炎の照り返しではっきりした色は判らないが、濃い青、群青色と、赤紫色の2つの大蛇の頭があった。頭部だけで3メートルを超えている。闇の中、海中に没した体長を計るべくもない。視認

してしまったことで、その圧倒的存在感に金縛りになってしまっ

固まってしまった直時、フィア、ヒルダ。ミソラはその様子に怯えたのか素早く直時の服の下へと隠れてしまった。

シューっという音と共に夜目にも真っ赤な舌がチロリと吐き出されては戻る。

「（我等が愛児まなこを守ってくれたこと、礼を言う）」

突然、一行の頭蓋に響き渡る念話。思いもよらない優しい響きに皆の緊張が解け、ミソラも直時の襟元から顔を出す。

「（元気なのね？ 良かった…。さあ、もつと良く顔を見せて）」

母親だろう赤っばい大蛇の頭が近付く。念話の響きはとても柔らかく優しい。しかし、その迫力に腰が引けてしまいそうになる直時。

フィアとヒルダの方を見るが、眼で『行けっ』と指示されてしまう。ミソラに両親を怖がらせるわけにもいかず、一歩進んでミソラを促すように右腕を差し伸べた。

躊躇うかのようなミソラへ笑顔で頷く直時。少し強張っていたのは仕方無いところだ。襟元から這い出た身をからませながら差し伸べられた手の先へと進むミソラ。

先の割れた大きな舌がミソラの顔を舐める。

臭いか、感触か、気配だろうか？ 何が契機となったかは判らないが、次の瞬間ミソラが飛び出して母大蛇の顔面にへばりつく。

「（お母さんっ！）」

叫ぶ我が仔の身を優しく撫でる母の舌。父大蛇も顔を寄せ、同じ

く撫でる（舐める）。

大きな満足と少しの喪失感を感じ、それでも心からミソラを祝福する直時は、親子の邂逅かいこうから数歩後ずさる。フィアはその肩を軽く掴み、ヒルダは自分より低い頭に手を置いた。

再会を喜び合った神獣の親子は視線を直時へと向けた。

「（今はただただ礼を言う。しかし、どういった経緯であったのか記憶を見せてもらえまいか？）」

許可を求めるかのようなだが、有無を言わせない圧力があつた。ミソラとの出会いは直時が見せるしかない。おっかなびっくりで了承すると、青い大蛇へと近寄る。

「（眼を瞑って気を楽しに……。難しいかもしれんがな）」

後半の含み笑いに少し気が紛れた直時は言う通りにする。何かか頭頂からするりと入り込んでくるような感じがして、脳だけではなく体の内側……。強いて言うならば魂というべきものを優しく撫で上げる感覚がした。

「（眼を開くが良い。そうか……。お主が我が子を救ってくれたのかそれに噂の者であつたとはな。面白い。『巳空ミソラ』か。良い名だ。アナンタよ。我等が子の恩人が名付け親になつてくれたようだぞ？」

『ミソラ』と言う名に異存は無いか？』

父大蛇が母親へと顔を向ける。

「（美しい響きですね。神々から名を頂戴しようと思っておりますましたが気に入りました）」

「（ミソラ、ミソラって好き！ おにーちゃん言ってた！ きれいな空ってという意味もあるんだって！）」

音の違つ漢字で『美空』とも読めると教えてもらっていたようだ。

「…自分ごときが名付け親など、本当によろしいのでしょうか？
神々と較べるべくもないと思うのですが…」
ひたすら恐縮する直時である。

「（良い！ 良い！ これも奇縁というもの。縁は結んで繋がって
ゆくものだ。なにより我が子が気に入っておる）」
念話に楽しげな響きが籠っている。安堵の息を吐く直時。

「（この恩は忘れない。我が名は『ミスガルズ』だ。憶えておいて
欲しい）」

「申し遅れました。自分はタダトキ・ヒビノです」

「（私は『アナタ』宜しくね）」

「（ミソラ！ ミソラ！）」
ミソラの両親へと軽く頭を下げ、ミソラには手を振る。

「（竜の子と妖精の子よ。我が子を害した者が判れば直ぐに教えて
欲しい）」

今までの柔らかさが嘘の様な迫力に、ヒルダとフィアは全身を小
刻みに震えさせながら辛うじて頷いた。ギルドが追っていることは
既に伝えてある。それを理由に報復を保留してもらっていることは
直時は知らない。

「（早い報せを待っていますよ？）」

アナタも怒りを押さえているようだ。神獣の気に当てられた二
人は今にも卒倒しそうだった。

「（では次の再会を楽しみにしている）」

うって変わった様子で直時を見やるミスガルズ。

「（おにーちゃん、一緒に行かないの？）」
「（ミソラよ。我等と人は共に歩めぬ。色々な意味でな。それにまた会える。ミソラがもうちよつと大きくなつたらな）」
優しく言い聞かせる巨大な親に、不承不承頷くミソラ。寂しそうな我が子を優しく舐めるアナンタは、ミソラを顔面に寄せたまま踵を返す。

「ミソラ！ 元気でな！ お父さんとお母さんにいっぱい甘えろよーっ！」

直時は明るい大きな声で別れを告げた。

身をくねらせ沖へと出た神獣は、巨体に見合う飛行骨を空中へ伸ばす。魔力で張られた翼から風を呼び、海水の飛沫を散らせて宙空へと身を躍らせた。

月光に照らされた蛇身は30メートルを超えた。飛沫を月虹へと変え翔け去る姿が消え、暫くしても三人は微動だにせず夜風に身を晒していたのだった。

「…行っちゃったね」
無言で頷く直時。フィアとヒルダの眼前の背中少し寂しそうだった。

「まだ酒はある。今日は呑もう」
ヒルダが元気づけるように首へと腕を回す。

「今日『も』、じゃないですか？」
引つ張られながら苦笑を返す直時の腕を取ったフィアが言う。

「いいから付き合いなさい」

その瞳には常に無い優しさが浮かんでいた。

逃避行？（後書き）

やっぱり神獣とこのままというわけには…。
ミソラあ！！！！

逃避行？

空が濃い群青から明るい藍色へと移り行く夜明け。一陣の浜風に頬を撫でられた人影が起き上がる。燻ぶった竈の傍らに寝そべっていた直時である。

「むーいーいー」

起き上がったものの、座ったまま眼を瞑ってゆらゆらと上半身が揺れていた。今にも倒れ込んでしまいそうである。ミソラとの別れを紛らわせるため、相当深酒をしたようだ。元凶のフィアとヒルダは気持ち良さそうに寝ている。

ともすれば、かくんと落ちる頭を重そうにもたげた直時は、両手で自分の頬を打つ。じんとした痛みに漸く意識が戻って来た。ごしごしと両掌で顔を擦る。

「っは！」

強制的に覚醒させた頭を途切れさせないよう、砂地で見よう見まねの結跏趺坐けっかふざをし、『気』を全身に巡らせる。

（流れは順調。魔力も充分。ゆっくりと吸って、止めて、吐く…）
下腹部に熱いものが貯まり、全身へと溢れだし巡っていく。眠っていた身体が活動準備を調えた。

立ち上がった直時は、水の精霊に真水を用意してもらうと、洗顔と歯磨きを手早く済ませる。歯磨き粉の代わりは、岩塩を砕いた塩

の粒だ。

大きく伸びをした後、そのままストレッチへと入り、全身の筋をほぐした。軽く汗ばむほど念入りにすると、前方の波打ち際へと眼を向ける。

『探知強化』で感覚の強化をし、『アスタの闇衣』の上掛けも忘れず自身に施した直時は、着ていたものを脱いで足元に畳んだ。結構几帳面である。

ミソラの両親が残した砂の溝を歩き、踝くるぶしが浸かるまで海へ入った。早朝の空気は涼しく、足元の海水が温かく感じる。夜が明けきらなため、青黒い波間を恐れ気も無く沖へと進む直時。強化した彼の眼には、輝度、明度も最適化され、解像度もグンと上がって映っている。不安はない。

腰まで海に浸かったところで、軽く勢いをつけて波間に跳び込む。海面から消えた直時は息が続くまで潜水したまま沖へと泳ぐ。

「ふはっ！ きつもちいいーっ！」

再び洋上へと現れたのは30メートルほど沖であった。そのまま仰向けに浮かんだままで波間を漂う。凧なぎの時間であったのか波もうねりも高くない。明るさを増してゆく空を見ながら、泳ぐでもなく波に合わせ軽く手足を動かして揺られるままだ。

競泳は苦手ですぐ泳ぐことは出来ないが、水と戯れるのは大好きなのだ。

「そういえば、今年は海に行つてなかったもんなあ」

直時がのんびりしたらだら過ぎるのは自室だけではない。邪魔（家族からの雑用等）が入らない分快適だと、海だ山だと独りで出かけでは、お酒を飲みながら持参した文庫本を讀んでいたりしていた。

独り海水浴も板についており、砂浜に着くやいなやビーチパラソルと折り畳みチェア、ビーチマットを設置し、クーラーボックスから出したビールを寝転びながら飲むのである。

酔いと太陽に火照ったら、海で軽く泳いだり漂ったりして、また浜辺でビールを飲み、肴を食べる。本を読む。昼寝する。堪能したあとは車で寝て酔いを醒まし、混雑のなくなった深夜の道を帰宅するのである。(飲酒後の遊泳は危険なので絶対にマネしてはいけない。しかも単独なので誰にも気付かれずドザエモンという危険もある！)

「逃げる先は、やっぱり海辺が良いなあ。海の幸も獲れるし、塩だって作れるだろうし」

心地良い波に身をまかせ、緊張感の欠片も無い直時。

「ミソラ、行っちゃったなあ…。ミズガルズさんとアナンタさん、でかかったなあ。いっそ、追手出してる鬱陶しい国を滅ぼしてもらおうかなあ」

物騒なことを口にする。

(まあ、そんなことしたら空白地帯が出来て戦乱を助長するだけだろうけどね)

追跡する諸国の勢力圏を抜けたわけではないのに緩み切っているのは、多くのことがありすぎて緊張を持続するのが難しくなったためである。

意図的に緩む時間を作らねば、またリスタル戦の悪夢を見るようになってしまう。そう自己診断した上での海水浴なのだった。全裸なのは趣味ではなく水着が無いためである。

「ねーさん達は綺麗だけどこえーしなあ。ミケさんが一緒なら良かったのになあ。あの猫耳と三毛猫っぽい短い尻尾に触れられなかつ

たのは今生の心残りベスト3に入るだろうなあ。仔魔狼元気かなあ？ あの子のでっかい肉球をもつとぶにぶにしとくんだった…」

素肌で水の分子に触れている解放感から、色々と駄々漏れな発言の直時である。ぶかぶかと浮かぶその姿に、海底からゆっくりと近づく影がある。

「なんか来てるなあ。全然まったりさせてくれないとは…。精霊さん達」

鋭敏化した感覚と、水の精霊からの警告で接近する何かに気付く。

一瞬動きを止めた影は、直時の様子を窺ったのだろう。次に動いた時には、水面を突き破った大きな顎を噛み合わせていた。湾曲した大きな口からは鋭い牙が並び、大きな物は一抱えもある。

図体の割に小さな眼。鱗が見えずぬめぬめと光る肌。ウミヘビかと思ってしまう長い身体であったが、胴は遥かに太い。黄土色に黒い斑が浮かんだその巨体は、地球で言う『ウツボ』に良く似ていた。直時を一飲みにしよとすることから、大きさは段違いであったが…。

喰い付いたはずの獲物の感触が無く、海面に顔を覗かせたまま辺りを見渡す巨大ウツボ。その頭上10メートル程の空中に、海水を滴らせて浮かぶ直時の姿があった。

「…でかい。小さい種類も多いけど、やたらとでかい生物もいるな。それより、水の中ならともかく素っ裸で空中ってのは落ちつかない…」

スースーと心許無い。特に下半身が。

「ひーちゃん、ぶるちゃんいける？」

風と水の精霊にイメージを伝える。笑い声が聞こえ、肯定を返す

精霊達。

精霊達に肯いた直時は、大ウツボから少し離れた海面へと跳び込んだ。水中で身を反らせ、沈む勢いのベクトルを上へと変える。姿よりも、水音に反応したのだろう。大ウツボが再び見つけた獲物へと躍りかかった。

海面へ顔を出した直時へと迫る大顎。しかし、大ウツボの下顎から強烈な衝撃が襲う。太い水柱が迸り激突したのだ。弾き飛ばされ、海面から空中へと持ち上げられた体長は15メートル程あった。

大ウツボと同じくらいの大さの水柱は、勢いをそのままに方向を変え球形の檻となる。空中に浮かんだ水球の中では、洗濯機の中の洗い物のように大ウツボが廻っていた。海洋生物が溺れそうになっている。浮かせているのは風の精霊達だ。

「朝食にしてやろうかと思ったけど、こんなに大きいと食べ切れないな。それにアナゴも太刀魚も鱧も細長い奴は小骨が多いしな。却下！ アーンド、リリースッ！」

砲丸投げのイメージで、巨大な水球を沖へと投げ飛ばす。風の精霊は忠実にそれを実行した。

離れた沖合いに大きな水柱が聳え立った。激流から解放された大ウツボは着弾の衝撃に暫く腹を見せて痙攣していたが、弱々しい動きながらもやがて海中へと戻っていった。

(ふむ。水、水流を操る…)

直時は、何か思い付いたのか、水の精霊で潮流を作りだす。流れに乗った身は、立ち泳ぎのように首から上だけを浮かべたまま沈むことなく海面を緩やかに滑っている。移動速度を上げていくが白波

は立たない。流れそのものを操っているからだ。

水流と一体になる感覚を掴んだ直時は、次に海面下へと姿を消す。魚のように水を切るわけではなく、身をくねらせるでもなく、ただ流れと共に泳ぎ回る。風の精霊と水の精霊により頭の周囲を空気で覆い、呼吸分の酸素を確保している。

「見難い…」

水中を自在に泳ぎ回っているのに不満をこぼす直時。折角のダイビングであるが、視界が歪んでいるのだった。

顔前の空気と水の接触面をガラスの様に平面化しようとするが、なかなか調節がうまくいかない。

岩礁にぶつからず泳ぎ回れているのは、水の精霊が教えてくれているからだが、いまいち感覚が掴み難い。

（出来れば自分の眼で見たいんだけど仕方ないか？ いや、なら人魔術だったら？）

海底に腰を下ろした直時は、考えながら使えそうな魔法陣を描く。

「凍てつけ 氷の盾 『氷塊・硬』」

以前改造した氷の盾を作りだす。直径1メートル程の円形の氷が出現する。硬度を上げるため、空気を極力排したため透明度は抜群である。

「おーっ！ これならクリアに見える！」

空気と水の間挟んだ氷の盾の向こうには、暗いながらも神秘的な海底の景色が映っている。

ただ問題がひとつ。

「うわっぶ!」

氷の盾は10秒程で消え、油断していた直時は水中に呑まれる。確保していた空気は泡となって海面へ消えた。それを追うように慌てて海面へと向かう直時。

「びっくりした。あの術は持続時間が短いんだよな。しかも移動できん。色々と改良の余地があるな…。さてと、戻るか」

チラリと見た砂浜はかなり遠い。知らない間に沖へと出てしまっていたが、先程のように精霊術で操る水流に乗れば楽に帰れる距離である。

ところが直時は抜き手を切って泳ぎはじめた。そのクロールは競泳選手のように力強くも早くも無いが、それなりに綺麗なフォームである。

砂浜に辿り着いた直時は、仰向けに倒れ荒い息を吐く。胸が大きく上下している。ハードな運動だったようだ。途中、波を頭から被って水を飲んだり、疲れてクロールから平泳ぎに変えたのは秘密である。

その直時の視界に、上空から舞い降りてくる二つの影が映った。風を纏ったフィアと竜翼を広げたヒルダである。

「…おはよう」

「まあ、なんだ。まずは『露天風呂』とやらにでも入ってはどうか?」

フィアもヒルダも不自然に眼を逸らしたままである。

「…俺、真っ裸やん!」

漸く自分の姿に気付いた直時は真っ赤というより真っ青になって、脱いでいた衣服のもとへと走り去った。

「全部見てた？」

『岩盾・方舟』で作った浴槽に浸かりながら、岩壁の向こうへと訊ねる直時。

「黒斑大ウツボに襲われたあたりからかな？」

「うむ。あの精霊術の使い方はなかなか良かったぞ」

『岩盾』の将棋の駒型を衝立ついたてとして、露天風呂がもうひとつ。フエアとヒルダがその湯に浸かり、朝風呂を堪能していた。

「慣れてきたみたいだからわかんと思うけど、精霊術は自分の手足の延長みたいなイメージで使うこと。戦いの流れを考えるのは良いけど、精霊術の働きを考えてるようじゃ駄目よ？」

ヒルダが褒めたが、フエアは採点からが辛いようだ。

（その精霊が出来る事を考え、発生手順を考えたら、実践するタイミングまで持っていくのに時間が掛かって駄目だということかな？）

自分なりに解釈する直時。

「ヒビノの話では魔力も魔術も無い世界だと言っし、ピンとこないのかもしれない。私が責任を持って身体に叩き込んでやるから安心しろ」

含み笑いしているヒルダの楽しそうな声に、温まっているはずの背筋が寒くなる直時。

「ま、まあ、まだ逃亡中でありませうからして、落ちついた先で活動地盤を固めた後じっくりと教わるということだ……」

「昼間は移動するけど、夜なら空いてるじゃない？ 今夜から訓練するわよ」

しどろもどろの直時の発言を遮るおさえファイア。当然だという口調である。

「あうあうあう……。お手柔らかにお願いします……」

観念した声に満足気なファイアとヒルダ。

「私は武術と精霊術を受け持とう。授業料は前に言った通り一日に金貨一枚だ。みっちり教える時間が無いようなので、逃亡中は割引してやるう」

「武術は問題ないとして、ヒルダさんって精霊術使えたんですか？」
直時の疑問も尤もである。炎の吐息ブレスや竜翼の風は、魔力から直接現象を引き起こす竜人族の固有術であり、精霊術や人魔術ではなく直時に教えることができる類のものではない。肉体の強化や変化も種族の固有術に入る。

「体捌たいさばきと同様、反射的に精霊術を行使できるよう訓練する。問題ない」

「それは息をつく間もない連続組み手を延々と続けるということですか？」

「飲み込みが早いじゃないか」

我が意を得たりとばかりに機嫌の良い声だ。直時の未来は真っ黒に塗り潰される。

「ところで砂浜まで帰ってくるのに精霊術を使わなかったのは何故だ？」

精霊術で色々と試していたのは上空から見ていたヒルダとファイアである。この疑問も尤もだ。

「あー…。それはですね。体を動かしたかったのと、基礎体力の向上もあるかなあーと…」

前半が本音で後半は思い付きである。しかし、心機一転で朝晩の筋トレくらいはやるうと思っていたのも事実だ。…このところ酒で酔いつぶれていたが。

「良い心掛けた。だが基礎体力を上げるのならもっと効率的なやり方もある。特にヒビノとファイアは治癒術が使えるからな！」

「ちよつ！ それは治癒術を使う前提の方法なんですかっ？」

「大丈夫。死なないように手加減してやる」

したり顔で頷くヒルダであるが壁の向こうが見えない直時は不安感が最高潮である。

「それで私が人魔術と精霊術、あとはアースファイアの歴史ね。私への報酬はヒビノの『知識』。とりあえずはあんたが持つてる本を読めるよう言語とか、風習とか、文化ね」

「そんなんで良いの？ あーでも知識か…。原理とか構造とか詳しく知ってるわけじゃないから再現は難しいかもしれないけど、危ない知識も多いんだよな。でもまあ、ファイアなら良いか…」

魔法陣の件でも慎重な姿勢を崩さなかったし、神霊であるメイヴアーユとの繋がりもあることだ。知識の暴走にはならないだろうと判断する直時である。

「読書が目的かあ…。文字と文法だけじゃ駄目なんだからな」

「当然でしょ。それが書かれた文化的背景を知る事無しには読解できないじゃない」

同じ世界であれば、言葉は違ってても共通の存在を意味することで翻訳がし易い。直時が比較的この世界の言葉に拒否反応を見せなかったのは、元の世界が空想の産物とはいえファンタジーやSF、伝奇などの物語が氾濫する世界であったからだ。

強烈な頭痛と鼻血に見舞われはしたが…。

「『転写』するにしても情報量多いよ？ 俺の知識量なんて中途半端だけど、現代二ホン語に多少の古語、諺やら外国語。基本的な技術に聞き齧り、歴史に文化に所謂お約束まで入れるとして……。多分初めて転写してくれた量の何倍もある…かも」

「……それ本当？」

直時の言葉に冷や汗を垂らすフィア。あのとときメイヴァーユに指示されたとはいえ、直時へ転写した情報量は並の普人族なら3日3晩意識不明になるであろう量だった。

「こつちの世界に全く無い物なんかは、その概要から知識が必要だろうし…。うーむ、なんとなくて憶えてるようなことも出来る限り理論立てて整理して転写するようにするよ」

直時の言葉がフィアの知識欲を刺激するが、同時に恐怖感をも与える。

「ヒビノの訓練やさしくしてあげるから、転写はちょっとずつね？ 様子見しながらね？」

「えっ！ マジ？ じゃあ初回は平仮名カタカナに身の回りの名詞あたりからいくか…」

腰の引けてしまったフィアの声に、想像していた地獄の特訓からジムのインストラクターレベルに引き下げられるのを感じた直時は様子見ではあるが、親戚の子達へ読み聞かせた昔話の絵本程度から始めようと予定を立てることにするのであった。

露天風呂で身も心もほっこりと癒された三人は、干し果物と干し

肉、磯で獲った巻貝と海藻のスープという簡単な朝食を食べながら次の目的地への検討をする。

初めての露天風呂を経験したフィアとヒルダにいつものキツさは無く、心持ち上気したような姿に日本の文化を評価されたようで直時も満足気である。

「近くの街は『リジエカ』だったよね？ 前回みたいに俺が先行して目立てば良いんだよね？ 今回はミソライないし、街に入って歩き回るのも良いか」

直時としても素通りばかりでは味気ない。

「えーっとね。今回は他へ進路をとって、『フルヴァツカ公国』から逸れようと思ってるの」

フィアの言葉に首を傾げると、その理由を教えてくれる。

「フルヴァツカはマケデイウスみたいに央海に沿って海に面した領地が多いんだけど、周囲の国が港を欲しがってて絶えず狙われている。マケデイウスほど国力が無いから余計にね」

「そこへヒビノが現れたというだけで、いらぬちよっかいを掛ける国が多いのだ。カールは白北海に港を持っているが、央海側にも野心はある。外交圧力でもってフルヴァツカの港を租借しているしな。今はカールに譲歩したことで、周囲の紛争国への牽制になっているが不安定であることに変わりはない」

「俺が現れるだけで紛争の火種になりかねない？ そんな大層なこと…」

「冗談だろうと見た二人の顔は真剣そのものだ。どうやら本当らしいと判断する直時。」

「…ただね、この辺りは何処も小競り合いを続けていて何処へ顔を出しても碌なことになりそうもないのよ」

はあーつと溜息をつくフィア。

脳内に地図を思い浮かべる直時。確かにこの辺りは小国がごちゃごちゃと乱立しているようで、国境線も曖昧である。

「うーん。じゃあいつそのことイリキアまで直行する？」

「余計な混乱を各国に与えないようにするためにはそれが最善だろうな。しかし、イリキア到着まで足跡を残せないというのは我々にとってマイナスになる」

直時の提案にも問題はあるようだ。特に、マケデイウスに残してきたミケヤリナレス姉妹が不利になるようなことは避けたい。

「それで考えたんだけど、私達は空路じゃない？ 陸路で目撃されなくても主要な海路上空を飛ぶことで、商船団に目撃されれば良いと思うのよ」

「なるほど！ ちなみに主要海路の領海は？」

「盲点だったな。海路はだいたい領海外に設定されている。海上輸送は陸に近くては襲われる率が高くなるからな」

フィアの提案に賛成するヒルダ。事情に疎い直時は当然賛成である。

「ヒビノには主要航路を転写するわ。目立つように先行してちょうだい。私達は商船を見かけたら降りてヒビノの進路を聞くようにすれば追跡してるように思うでしょう」

「了解。じゃあ転写よろしく！ ついでに俺の国の言葉の転写もやっておこうか？」

直時の返事に詰まったフィアがふるふると首を横に振る。

「ちよつとずつでいいからっ！ それで充分よっ！」

焦るフィアの様子がちよつと可愛いと思った直時だった。情報量に恐れをなしたと判断していたが、フィアの中ではその内容に畏れ

を抱いていたのは伝わっていなかった。

直時の眼の端にヒルダが二人のやりとりを面白くなさそうにしていた事に気付いたことは幸か不幸か……。少し膨れた頬は普段の様子と違い、見た目（直時主観で20歳前後）より幼げだった。

（なん…だとっ？　これがギャップ萌えか！　流石はヒルダさん！
奇襲を掛けてくるとわっ！）

視線を逸らせた不機嫌な普段は怖いだけの竜人族に、頭を撫でたくなる誘惑に襲われる直時であった。

陽光を反射して洋上を翔ける姿は、3,980（サンキュッパ）
円の折り畳み自転車に跨り風を纏った直時である。

一際大きな船が眼下に見え、目撃情報を提供するため低空へと舞い降りる。

（やたらとだだっ広い甲板だなあ。まるで空母みたいだ）
荷物の中から引っ張り出した風除けの980円のサングラス越しに見える船。

直時の知識に近いのは太平洋戦争時の航空母艦である。木造ではあるが、広い甲板には飛翔生物である獅子胴鷲が日向ぼっこをしているだけで商船に付きものである大量の積荷が無い。座礁して助けた船は帆船であったが、この船にはメインマストも無い。両舷側にとってつけたような帆が張られているだけだ。

（舷側以外帆もないのに進んでるってことは魔術推進か……。でもこれだけ大きな船が主動力を魔術で賄まかなうってことは軍船かな？）

高度を下げて様子を窺った後、早々に離脱した直時。それでも自身の姿を良く見せるため何度か船の周囲を飛び回っている。

直時が航空母艦と思ったのも無理は無い。実際に空中騎兵の洋上基地として試作運用中の艦船であった。

右舷側に聳そびえる艦橋から身を乗り出した人物がこの偶然の邂逅かいこうにほくそ笑んでいた。

「やっと再会できたな。『黒髪の精霊術師』」

ヴァロア海軍の軍服の中に一風変わった情報部の制服を身に纏った人物がいた。央海で試験航海中である空中騎兵母艦に強行着艦し、本国命令を盾に指揮権を掌握した男が呟く。

彼の名は『サミュエル・ペルティエ』。先の戦でヴァロアリストル侵攻軍において参謀として陸軍に在籍していた男であった。

逃避行？（後書き）

ちよっとツンデレっぽくしてみました。

逃避行？（前書き）

サブタイトルのセンスの無さが痛い今日この頃…。

逃避行？

「転属は今から有効だ。装備課で荷を受け取ったら空中騎兵詰所へ行け。書類はこれだ」

ヴァロア王国情報部部长が大きな書類鞆から羊皮紙の束を押し付ける。

「は？」

元リストル侵攻軍参謀サミュエル・ペルティエは耳を疑った。

侵攻作戦失敗の聴き取り調査から始まり、異例の転属、新しい任務を聞いたばかりである。

「貴様の身分は情報部付特務大尉だ。軍部での扱いは2階級上と同等なのは説明するまでもないな？」

「はい。身分について疑問はありません。しかし、今すぐ移動ですか？ 経過説明も任務内容も理解しましたが、標的の目的地は判明しております。追跡は不可能であるとおっしゃいましたよね？ 強引に追跡をするよりは、詳細な情報を収集した上でと愚考しておりますが？」

サミュエルとしては自分の分析力と判断力を買っただけの配属だと思っっている。対象の情報収集とその分析が先だと判断していた。

「標的^{マト}の速度は貴様も判っているだろう？ 情報収集は続行させるし、報告は届けさせる。分析は移動しながらでも出来るだろう？ イリキアが目的地という情報とて正確ではないのだ。一足飛びにリットまで行かれたらどうする？ 今は拙速を尊ぶべきだ」

上司の言葉は尤もであるが、相手は空中騎兵の速度を上回る。リ

ツタイト以東が目的地であれば、こちらも十分な準備の上、長期的な視野で臨むべきだと判断していたサミュエルである。

「心配するな。王家が本気なのだ。物資も資金も人員も白紙委任されている。可能な限りの手を打った。貴様はまず標的と接触することを第一に行動しろ」

任せるとばかりに自分の胸を叩く情報部長。情報部といえば陰湿な噂ばかりを聞くが、まとめ役ともなると案外この男のような親分肌でないと思われないのかもしれない。あくまでも表向きの顔としてだろうが…。

「それに直接追尾は不可能かもしれないが、標的の移動距離は予測以下だ」

「はい。速度に較べて距離が稼げているわけではありません。日中の限られた時間だけを移動にあてていると考えます。全力での移動なら、ロツソ離脱の翌日リネツィア上空に達する時間は確認された半分以下でしょう」

夜間飛行をせず、休息に重きを置いていると判断できる。慎重且つ、安全な道程だ。

ここまで推察されたのは直時達の油断でもあった。戦闘を主とする空中騎兵は長時間の飛行には向かず、彼等の巡航速度は直時達のそれには遥かに及ばない。夜戦専門の騎獣は昼間の活動を制限されるし、中継点を設けて日中用、夜間用と乗り換えるにも自分達の突発的計画に対応できることはまずないと考えていたからだ。

全て納得したわけではないが命令とあれば仕方無い。そう思ったサミュエルは渡された書類を素早く確認していく。速読で脳裡に刻みつける中に、無視できない書類があり手を止めた。

「……民間人も同道せよとはどういうことですか？」

3騎編成で複座。騎兵以外の3人が自分と護衛であるのは理解できるが、残りのひとりが入リア・ブrossールという女性とのことだ。強行軍に耐えられるとは思えない。

「金と女と言っただろうが。現物を見せねば相手も納得するまい。

没落はしたが子爵位の第3息女で器量良しと評判だ」

「貴族の娘っ子に今回の飛行は無理と考えます」

命令とは言え、あまりの無茶振りに非難の眼を向けてしまうサミユエル。

「綺麗な娘っ子でも芯は強い感じだったぞ？ 邪魔なら途中で捨ててくれと言っ覚悟も気に入った。ロツソでの交渉に送り込む予定だったが、仕事内容は同じだ。彼女も既に待機しているだろう。貴様も覚悟を決めて任務を果たせ」

最後の言葉は命令だった。サミユエルは無言で右拳を左肩に当てる。ヴァロア式の敬礼である。

ペルティエ特務大尉にとって何から何まで異例づくめの命令であったが、人払いがされた空中騎兵離着場で待っていた獣騎が一番の驚きであった。

「白い体毛に4枚羽根……。飛竜の上位種……」

翼蜥蜴とは明らかに違う。海竜のように長い首、紡錘形の胴体の中ほどからは大きな主翼、すぐ後ろにやや小さな副翼、尾は二又またに長く伸びている。脚は2本で地走鳥のように細くはあるが、大きな爪は地面をがっしりと掴み、力強さを感じる。

白烏竜^{はくしゅうりゅう}。

人族と変わらぬ知性を持ち、固有術以外にも個体によっては人魔術すら操ることが出来る。強靱さは獅子胴鷲に劣るものの、飛翔速度に優れ、渡りの習性から長距離飛行にも秀でている。本来なら普人族の騎獣になどなるはずもない種族である。

(調教か……。同種や近隣種に知られたらとんでもないことになるな) 卵か、幼生時に捕獲され、調教という名の育成がなされる高位魔獣の存在は意外に多い。発覚した場合その種族を敵に回すことになるが、脆弱さを自覚する普人族にとって高位魔獣の使役は魅力的だ。ハイリスクハイリターンといったところだろう。

装備課へと立ち寄るまでにサミュエルが意見具申した通り、補術兵も待機していた。準備は万端のようだ。

気になるのは彼と同道する二人である。一人は先程懸念を表した子爵の第3息女。エリア・プロサー嬢^{おんとし}。御歳17。ヴァロアの平均的女子より小柄。明るい白茶色の髪は貴族にしては短く、肩口で揃えられている。服装は旅装用ドレスではなく、乗馬用ズボンに飾り気の無いブーツ。上衣の下は詰襟ブラウスであるが、羽織っているのは装飾の無い皮の上着であり、防寒(飛行用だろう)にこついコートを足元の荷物に重ねている。

地味な服装にも拘わらず、整った顔立ちに凜とした美しさが輝いている。書類には従軍経験有り。最終階級は中尉。除隊してさほど経っておらず、立ち姿も背筋が伸びていた。

なによりサミュエルが評価したのは手荷物の少なさであった。貴族の子女であるなら馬車一杯の荷を用意しても驚かなかつただろう。しかし、彼女が用意した手荷物は片手で持ち運べる程度だった。必要最低限の荷を効率良く纏める手際は、優秀な軍人である証拠と思

っている。

(確かに活動的な印象ではあるな。それに較べて…)
書類に護衛とあつた補術兵を洗い顔で見るサミュエル。

オデット・ドUBLE、19歳。第308補術兵大隊所属。階級、
軍曹。

濃紺の髪はショートストレートに、前髪は眼の上で揃えられている。エリア嬢の後ろで侍女然として佇む姿は、小柄なエリアより頭一つ分高い。

(軍人とは言え女性であるから荷は多くなっても仕方が無い。仕方が無いが、貴族の娘に較べて多過ぎるのではないか?)

時間優先で必要経費は国が持つというのに、自分の半身ほどの旅行鞆を2つも用意している。

「ドUBLE軍曹。任務は理解出来ているか？」

「はい。本作戦への魔術支援と、エリア様の護衛と理解しております」

「オデット、護衛の優先順位はペルティエ特務大尉殿の方が上よ」

「はい。エリア様」

サミュエルは知らなかったが二人は知り合いであった。身内と言つても良い。エリア付きの侍女であつたオデットが、彼女の軍入隊にもくっ付いていったのである。

当のエリアが除隊し、オデットが従軍中であるのには理由があつたが、今は置く。

「本作戦の要は早さだ。不要な荷は置いてゆけ。それとエリア様、貴女は除隊された身。私のことはサミュエルと呼び捨てで結構です」
「オデット、だから言ったじゃないの…。特務大尉殿の御命令よ。」

自分の荷だけにしなさい」

呼び方については言及せず、任務に対する不備を指摘するエリア。

「しかしこれはエリア様に最低限御入り用な荷です」

オデットが用意した荷物はエリアのためのものだった。大きな旅行鞆の片方にはドレスや下着をはじめとした衣類が。もう片方には装飾具や香水、化粧品等が収められている。

「軍曹。必要な品は現地で賄える。資金も国庫から出る。エリア嬢に見合う品を、移動先で見繕うのに協力してくれ。移動に時間を取られれば品定めも出来ん」

尚も躊躇うオデットの未練を切るべく、サミュエルが下手に代案を出す。

荷を諦めたオデットが手にしたのは、エリアと同じような小さな手荷物だった。ひとりの軍人としては優秀であるようだ。

場を収めたサミュエルは騎兵達と簡単な確認事項を終え、1番騎の後ろ座席へ着き他の2騎の様子を見る。

それぞれの荷は騎獣の腹部に装着された流線型の格納籠に『浮遊』を掛け収納された（騎兵と乗客である3人にも『浮遊』が施されている）。飛翔準備が調ったことを確認したサミュエルは、用意した補術兵に合図を送る。

全員が鞍と安全帯を繋ぎ、支持架を両手で握って前傾姿勢をとる。鞍の形としてはバイクを2台連ねたような形であるが、体の前面を鞍にピタリと着ける所が少し違う。

1騎につき3人の補術兵が『地走り』を3重に施術。それとは別に『幻景』で視認度を下げる。同時に騎兵が愛騎に念話で離翔を命

令。白鳥竜は一步で宙へと弾かれた。

サミュエルが具申したのは荷（人を含む）の徹底した軽量化と隠密移動、移動魔術の多重掛けであった。早翔け用の王家秘蔵である空中騎兵を用意した情報部長に、やるなら徹底的にやるよう求めたのである。

飛び去っていく風景の早さに手応えを感じ、普段は変化の少ない表情が笑いへと変わるサミュエル特務大尉であった。

一昼夜を移動に費やした結果、翌早朝には央海上を航行する目的の船を見つける事が出来た。『幻影』で友軍が確認し難いことは判っていたので、1番騎が低空で接近し連絡筒を甲板に投下する。暫く上空を旋回していると当直の甲板員から連絡があったのだから。手旗信号が両舷と艦首艦尾で振られている。

「着艦許可出ました。降りますか？」

「降りよう。私は限界だ。君達も御苦労だった。着艦後はゆっくり休んでくれ」

騎兵は僚騎へと念話を飛ばし、順に着艦を伝える。

補術兵の掛けた『地走り』は白鳥竜が自らキャンセルし、エリアの乗る3番騎から順に着艦する。強行軍にへたり込む女性二人。サミュエルは白い顔をしながらも出迎えた艦長へと命令書を提示する。王家の威光もあり、3騎獣と3騎兵と3乗客は最上のもてなしを約束された。

「では我々は休息させていただきます。白鳥竜には治癒術もお願い

致します」

東進を指示し、最後に船室へ向かったサミュエルであるが、寸刻も置かず叩き起こされる羽目になる。

（上空に黒髪の精霊術師！）

艦内に指向性のない緊急念話が響いたのであった。

サミュエルは艦橋の窓から身を乗り出すように上空へと顔を向ける。艦の周囲をゆっくりと飛んでいるのは、縦に並べた銀色の車輪の乗り物に跨った小柄な人族だった。

「黒髪の精霊術師……」

艦橋内の誰かが呻くような声を上げる。ヴァロア軍にとって、恐怖と恥辱を喚起させる存在。

（まさか追い抜いていたとはな）

サミュエルにとって嬉しい誤算である。口元に不敵な笑みが浮かぶ。

何度か艦の周囲を回った後、その人物は右手を振って艦橋を掠めるようにして飛び去った。高度を上げ、東へ向け加速する。瞬く間に小さくなる姿が消えるまで、その場を動くものはいなかった。

「追いますか？」

艦長がサミュエルに問う。勿論、自艦に配属されている空中騎兵にである。

「いえ。艦を東進させていただければ結構です。補術兵には騎獣の

回復を優先させてください。私は正午まで休息をとります。ああ、情報部宛に現在時刻と黒髪確認との連絡をお願いします。では、船室をお借りします」

了解と敬礼する艦長（海軍少佐であるが、特務大尉は中佐相当になるので上官扱い）へと丁寧な答礼を返し艦橋を後にするサミュエル。疲労の極みであったが、血が沸き立っている。眠れるだろうか？ と、梯子のような急勾配の階段を下りるのだった。

彼の心配は杞憂に終わった。簡単に言えば眠る前に再度緊急念話が発せられたのである。直時が去って、ほぼ一刻後、フィアとヒルダが甲板上に降り立ったのである。

（ヴァロアの軍艦みたいよ？ 大丈夫かしら…）

（義勇兵と敵対するのはそのときの戦だけだから問題なかるう？

まあ、遺恨で手出しするなら沈めるだけだ）

フィアが念話で懸念を伝えるが、ヒルダは何も心配していない。

「突然ごめんなさい。私はフィリスティア・メイ・ファーン。ちょっと訊きたいことがあってお邪魔したの。銀色の乗り物に跨った黒髪の普人種を見なかった？ 東に向かって飛んでいったと思うんだけど」

街で訊ねると変わらない調子のフィア。ヒルダは後で黙っている。

「これはこれは…。晴嵐の魔女と黒剣の竜姫がお揃いとは！ お目にかかれて光栄です」

水兵の後ろから進み出たサミュエルは二人の前で軽く頭を下げる。

「私はヴァロア王国のとある役人で、サミュエル・ペルティエと申します」

「御丁寧にどうも。早速で申し訳ないんですけど、『黒髪の精霊術師』って奴が東に向かっているはずなんだけど見なかった？ 言いたくないならそれも仕方ないけど」

『魔女』と言われたことに立腹したファイアが、高圧的な口調に変わる。ヒルダが半ば呆れ顔だ。

「包み隠さず申しましょう。一刻ほど前に本艦の上空を東へ飛び去るのが目撃されました」

「あら。有難う！ 一刻前ね」

ファイアもヒルダも判っていて訊いている。サミュエルの言葉に嘘が無いことを意外に思った。

「ひとつお訊ねしても宜しいでしょうか？」

「どうぞ」

「貴女達が彼を追う理由は？ 依頼ですか？」

愛想笑いをしながらであるが、眼だけは笑っていない。顔を見合わせたファイアとヒルダであるが、ニヤリと笑い合っすぐに答える。

「依頼は受けてないわ。ロッソに置いてけぼりにされたから気分を害してるだけ」

「挨拶も無しに逃げられたのでな。一発殴らないと気が済まんのだ」
直時を追う初期の理由をそのまま正直に言う。尤も今は合流した後のやらせであるが。

「ヴァロア王国からの依頼として、彼の搜索をお願いできますか？」

「一度紹介してあげたでしょ？ 何度も同じ依頼は嫌よ」

「面倒臭い」

取り付く島も無い二人に苦笑を返すしかないサミュエル。しかし、その様子から他国の依頼を受けている可能性は低いと判断された。

「情報ありがとね。私達はもう行くわ」

「カールも本気で追っているらしいぞ？ まあ頑張れ」

フィアが礼を言い、ヒルダが忠告というか、煽りを入れる。苦笑を深めつつも、頭を下げるサミュエル。

ヒルダがフィアを背後から支え、竜翼を広げる。甲板から舞い上がった二人が互いの能力を相乗させ、直時に劣らない速度で東へと天翔ける。見送った水兵達が持ち場に戻る中、サミュエルだけが考え込んでいるようだった。

（追跡が正確過ぎる。精霊術の痕跡を辿る方法があるのか？ それとも…）

微かな疑念が頭をもたげたようだが、さすがに体力の限界だった。ふらつきながら船室へと帰り、正午まで深い眠りに就くサミュエルであった。

「とまあ、そんな感じでヴァロアからお誘いあったんだけど断わってきたわ」

「あのでかい船はやっぱり軍艦だったのか。しかし、二人とも良く無事だったね」

「義勇兵、特に冒険者の義勇兵相手に遺恨を露わに接すれば、国の名声に傷がつくからな。下手をすれば冒険者ギルドから敵性扱いされてしまう」

中央海に浮かぶ群島のひとつ、5キロ四方ほどの無人島で直時、フィア、ヒルダが夕餉を囲んでいた。

「過去にギルドと敵対した国ってあるの？」

「正面切って敵対したところはないわね。ギルド創設に神が関わってるんだもの」

「普人族ならやりかねんがな。うちの直系ではないが、竜人族と敵対した国がいたからな」

「その話なら聞いたよ。100人足らずで一国を滅ぼすんだものな
ー」

かなり物騒な話であるが、だんらん団欒とした雰囲気である。

「じゃあ今日から訓練ね」

「宜しくお願い致します」

「腹が落ち着くまで座学だな」

「りょーかい。んじゃファイア、まずは対価としてうちの国の言語の初歩ね。平仮名と片仮名転写するよー。あと、幼児向け知識とね」

「ん。お願い」

期待に眼を輝かせるファイアに向けて魔法陣を編む。直時とファイアの頭上に現れた魔法陣が繋がり、制限された情報がファイアへと流れる。

「くうーっ！ 転写されるのは久し振りだけど、結構くるわね。これで幼児レベルなの？」

「身の回りの名詞やらとセットで送ったけど、幼稚園：普人族で5歳までくらいかな？ それでも多分こっちにない物もあるから適当に質問してくれていいよ」

頭痛に顔をしか顰めるファイアに直時が答える。実際、車や電車、飛行機等、どこまで説明して良いか判らないので、牽引する獣が不要な早く走る馬車、レールの上を走る連なつた箱馬車、竜のような巨体で空を飛ぶ乗り物、その程度からはじめないと仕方無い。

こめかみを揉みながら新しい知識を咀嚼し理解しようとしている

ファイアを放置して、直時はヒルダへと訓練内容を確認する。

「そつだな。何事も基本からだな。今夜は基礎体力の向上から始めよう」

「方向に異存はありませんが、方法に疑問があります！ 治療術が必要な基礎体力作りって一体どのような方法なんでしょうか？ 場合によっては拒否」

「却下する」

予防線を張る前に玉砕した直時はがっくりと頂垂れた。

うんうん唸って知識と格闘しているファイアを残して島の浜辺まで来た直時は、これから始まる過酷な訓練に怯えつつ、ストレッチを入念にこなす。

「体は温まったようだな。では脱げ」

準備が整った直時にヒルダが命じる。

「は？」

「下着以外は全部脱げ。ああ、靴は良いぞ。初回だし足場まで気に出来ないだろうからな」

「理由を聞いても良いですか？」

「うむ。これから島の外周を走りながら私の剣を避けてもらう。服を着ていては肌で感じる感覚を身につけにくい。そのためだ。剣はぎりぎりで当たるよう振るつもりなので、衣服がズタズタになってしまうからな。一度の訓練で一着駄目にしてしまうのは可哀相だと思つてな」

「色々突つ込みどころが満載なのですが、ひとつだけ！ ぎりぎり当たるか当たらないかじゃないんですか？」

「うむ。ぎりぎり当たるように斬る。心配するな。致命傷には気を付ける」

「いやああああああああああー！ー！ー！」
悲鳴を上げて逃げる直時。そこへ襲いかかるヒルダの眼は赤く爛々と燃えていた。

「……非道い。酷い。あんまりだ」

ヒルダに衣服を穿られ、アースファイアに来てから替えの下着として購入した禪ふんじし一丁にスニーカーという形容するのはばかに憚られる格好の直時。槍を手にしているが、シユールさを際立たせている。どこのブッシュン？ といういでたちだ。

「今回は精霊術を使うなよ。あくまでも基礎体力向上が目的だからな」

「うつつ……。了解です」
訓練前から精神的ダメージが大き過ぎた直時。既に涙目である。

「では開始！ 走れ！」
ヒルダの声でスタートを切る。ハイペースのランニング程度で走り出した直時であるが、背後から濃密な殺気が感じられた。

「ちんたら走るんじゃないっ！」
本能のまま飛び退いた地点に黒剣が振り下ろされる。衝撃に弾け飛ぶ砂。深さ1メートルほどの窪みの底でヒルダが立ち上がる。

（前見て走ってたら死ぬ！ マジで死ぬ！）
ヒルダから眼を離さず、槍を体の前面に立てて構える。右手を下
方石突きの方へ、左手を上方切っ先の方へ。

「止まるなっ！ 走れっ！」

一足飛びで襲い来るヒルダ。後ろ向きに全力疾走しながらヒルダの動きから眼を逸らさない直時。

構えた黒剣が僅かな溜めを見せた。

(来る！)

右手から横薙ぎ。直時は左わき腹に怖気おそけを感じた。右足を蹴って予想される切っ先の範囲から逃れる。

唸りを立てながら擦過する黒剣。ぎりぎり当たらなかった。安堵も束の間、振り切る前に左手で勢いを止めたヒルダの薙ぎ払いが両手で右脇を襲う。サイドステップで空中にあるため避け切れない。右手、槍の下を斬撃下方向に、左手は逃れるよう傾けた上体へ引きつける。逸らす刃に斬られないよう添えるだけ。

鋭い擦過音と共に刀身が槍に沿って走り抜けた。捌さばけたと感じた瞬間着地。即座に後方へと逃れる。

「勘が良いな。全くの素人ではないのか？」

「ハアハア……。ただの生存本能です」

始まったばかりであるのに直時の息は荒い。

「ふっふっふ。やはり面白いな。さあ、立ち止まるなっ！ 動けっ！」

どうやら押しはならないスイッチを押してしまったようだ。心底楽しげな顔で黒剣を振り上げたヒルダが直時へと突進する。

直時の命を懸けた鬼ごっこが一息着いたのは半刻後であった。全身に浅くはあるが斬り傷を追って血塗れ、息も絶え絶えで時折咽ぶような呼吸である。

その姿を満足そうに見下ろすヒルダの元へ、ファイアが歩み寄る。

「どんな感じ？」

「素人同然だと思っていたがなかなかどうして筋は良い。それよりも限界のようだ。治癒を頼む」

「まーかして。精霊達よ」

ファイアの精霊術による治癒が直時を包み込む。傷口は塞がり、^{かさ}瘡蓋が剥がれ、元の身体へと復帰する。

「……ありがと。ファイア」

仰向けのまま直時が礼を言う。

「では第2ラウンドだ」

「ちよっ！ うそっ？」

「身体を見てみる。疲労も治っているだろう？ 筋力も以前に増していないか？」

「え？ いやあんまり実感は……。でも腹はちょっと引き締まったよ。うな気がしないでもないかな？」

腹だけではない。脚も無駄な肉が削ぎ落とされ、多少筋張っているよ。うな気がする。言われればそんな気がするという程度であるが……。

「肉体を酷使した後、回復させれば以前にも増して強靱になる。治癒術が使えるなら、これを繰り返すことで短期間の基礎体力強化がはかれる」

ヒルダが満足そうに説明する。直時もそれに異論は無い。無いが、確実にこの人は……。

「鬼っ！ 悪魔っ！ ヒルダっ！」

「……今、私を前2つと同じ意味で扱ったな？」

ゆらりと黒いオーラが立ち昇ったのを幻視した直時は今度こそ全力で走りだした。

その夜、無人島にある男の悲鳴が長々と響いたのであった。

逃避行？（後書き）

特訓とは精神修養でもある…のか？

逃避行？（前書き）

話が進まないorz

逃避行？

「よし。夜も更^ふけた。本日の訓練は終了だ」
爽やかな声を足元に掛けるヒルダ。

仰向けで激しく胸を上下させている直時は、なんとか自力で治癒術を施せたのか、汗まみれではあるものの傷は残っていない。

「あり、がとう、ござい、ました」
不自然に言葉が切れるのは、合間に呼吸を挟んでいるからだ。

「治癒、しても、しんど、い。疲れ、たー」
「身体を治しても体力の回復はある程度しかないからね。仕方ないわよ」

フィアの言葉に眼を剥く直時。初耳だ。2刻の間に合計5回の治癒術を掛けねばならなかったが、傷が癒えたにもかかわらず、疲労度は蓄積していったのである。

「食べて寝れば大丈夫だ。夜食の獲物は私が狩って来よう。それまでに『露天風呂』で汗を流しておくがいい」

直時の上達具合にヒルダは上機嫌で島の中央の森へと分け入る。
竜人族は夜眼も利くようだ。

本来の目的は直時の基礎体力向上であったが、必死に動くようにと追いたてたヒルダは、彼の対応速度に眼を見張ることになる。勿論手加減しての攻撃であったが、最初の3回ダウンはフィアが治癒を施さねばならなかった。しかし、後の2回は自力での治癒ができるくらいの回避を見せたのだ。

ヒルダの剣先は視力だけで捕捉するのは困難だったが、剥き出しの肌が敏感に感じ取っていた。文字通り『肌で感じる』という感覚を身に付けはじめたのだ。

体力向上と武術の訓練を同時にできることに満足感を抱くヒルダである。直時にとっては災難であるが…。

(叔父さんのしごきを思い出すなあ。容赦のなさは段違いだけど…)
精霊術や人魔術という新しい知識故にそれに頼り切っていたが、直時としては今夜の訓練は、働き出して遠ざかっていた体を動かす感覚を取り戻す切っ掛けとなった。

「…なんだか訓練前より細くなってない？ 本来ならもつと筋肉が付くはずなんだけど」

フィアはほぼ裸の直時の身体を値踏みするように眺めて言う。

「今は無駄な肉が落ちたところなんだと思うよ？ 疲労はあるけど身体は軽くなった気がするからね。それと」

「…あまり見ないでくれる？」

「……ゴメン」

禪にスニーカーという今の自分の姿を思い出し、泣きそうになる直時から慌てて顔を背けるフィアだった。

直時が『露天風呂』で汗と汚れを落としている間に、ヒルダが雉に似た野鳥を捕獲して戻って来た。日本のそれと較べて3倍ほど大きい。フィアが人魔術で手早く血抜きを済ませ串焼きにする。炙られた肉は淡白そうな身からは想像できないほどの脂を滴らせ、香ば

しい匂いを漂わせる。

手拭いを首に引っかけた直時が着替えを済ませてやってきた。薄手のシャツに裾を膝下まで捲りあげ、素足に革のサンダルを引っかけかまこ竈前へと座る。

「良い具合に焼けてるわよ」

ファイアが塩と香辛料をまぶして焼けた肉を手渡してくれる。

「お！ ありがとう！ 美味そうだ。ヒルダさんもありがとう」

二人に礼を言い、焼き立ての鳥肉に齧り付く直時。

激しい運動の後だが、体力回復を身体が求めるのか夕食をきちん
と摂ったにも拘わらず次々と平らげている。

「ヒビノ。今日の私からの教えは人魔術の転写よ」

「おっ！ 攻撃系？」

「そう。攻撃系を含めた私を知る魔法陣全てよ」

「あの……。全部はちよつときついんじゃないかなあー。少しずつ
が良いんだけどなあ」

転写の頭痛は馴れたとはいえキツイことに変わりない。

「予備知識がない状態ならね。でもあなたは魔法陣の改造まで出来る。構造を理解できるようにしている。だから、レパトリーが増える程度の影響しかないはずよ。たぶん」

最後の一言に、納得できるような出来ないような顔の直時。転写による初回の印象が強過ぎたのかもしれない。

「鼻血出ないなら……」

消極的な同意を得たファイアは早速転写を行った。

直時の脳は大量の情報流入による負荷で悲鳴を上げる。しかし、それ以上に脳裡を舞う魔法陣の数々に圧倒される。攻撃魔術を始め、高度な支援魔術、応用による便利な生活魔術、多種多彩な職業魔術ひとつとして同じ形の物は無い。直時は雪の結晶や万華鏡を見る思いで脳裡に描かれる魔法陣に魅了された。

「あ……」

フィアとヒルダが声をあげる。転写による副作用ではなく、新たな知識に興奮した直時の鼻腔から血が垂れていた。

「いやー。これは興味深い！ 流石は異世界だわ。科学技術じゃなくて魔法技術かあ。魔力が動力とか電源で、個人が蓄電池持つてるようなもんだな。普人族は容量少ないから出来る事に限りがあるけど、魔力の多い種族と協力し合えたら一大魔力文明が築けるだろうに！ 神様も色々手伝ってくれりや良いのにねえ」

眼を輝かせて妄想する直時。

火力発電所を務める火竜、水力発電を担う水竜や水の神霊、フィアやヒルダ、自分もできる安定した風力発電のエネルギー供給。魔力を電力に変換することで、社会全体で使用できるエネルギーが増えるはず。巨大建築物も自分は知らないが土の神霊や、土の精霊術の得意とする種族に頼めば短期間で完成するのではなからうか？ 食糧生産も光魔術を活用した植物プラントで大量生産も……。

（火竜の旦那さんが「火力発電の交代いってくるよ」とか言って通勤したり！ ぷぷっ）

擬人化しすぎだとは思いますが、そんな世界に発展するのも楽しそうだと夢想する直時。他の生物や自然と共に暮らす種族のことを忘却しきっている。

「刺激が強過ぎたかしら？」

「さあな？ でも楽しそうだぞ」

妄想の中とはいえ、自分達の世界を改造されているとは思わない
フィアとヒルダであった。

「とりあえず落ち着け」

ヒルダは直時へ果実酒の杯を押し付けた。

明け方。直時はすっかりと目が覚めた。昨夜の疲労が嘘のようだ。
運動後の夜食で満腹になり、寝酒ですぐに深い眠りに落ちたことが、
体力回復と快調な眼醒めをもたらしたのである。

倒れ込むように寝た直時のために、フィアとヒルダが寢床をしつ
らえ運んでくれたのも快眠の理由であった。

二人を起こさないよう、直時は闇の精霊術で気配を消す。ミケが
使っていたことを思い出し、真似たのだ。

離れた場所で入念にストレッチを始める。終わった後、腕立て、
腹筋、幅広腕立て、背筋、スクワットジャンプ、V字腹筋等、思い
付くメニューを10回ずつこなししていく。3セットを消化し、最後
に限界回数プラス1回の腕立て、腹筋で終了。治療術を施す。

身体の軋みが消えたことを確認して、島の外周ランニングに入る。
砂地や岩場、マングローブという地形にたちまち体力を消耗する。
倒れそうになるのを我慢して最後に砂浜を全力疾走。力尽きるまで
走る。敢え無くダウン。2度目の治療術で酷使した筋肉を癒す。

「朝はこんなもんで良かる…。あとは朝食用に魚でも捕るか」

先日のこともあり、下着（越中褌を細くしたような下着。リスタ
ルでもロツソでもこのタイプが多かった）のみ着用し、沖まで風の

精霊術で飛んでから海中へとダイブした。

探知強化を掛け忘れたため、獲物を探すのは水の精霊にお願いし、水中で気配を探る。半透明の水滴のような水の精霊が右の海面近くに注意を促した。サンマに似た細身の魚群が現れる。直時の狙いはその群を狙うように周りを泳ぐ1メートル程の回遊魚だ。

（マグロかカツオみたいなのでっぶりした紡錘形だな。今日の朝食はあれにしよう）

狙いを定めた直時は水流を操り魚雷のように突進。周囲の海水ごと捕獲して海面に躍り出る。リスタル上空で空中騎兵を閉じ込めた風の檻の、水の精霊術版だ。魚の入った水球を、風の精霊で空に浮かべたまま一緒に浜辺まで飛んで帰る。

「絞めた方が良かったんだけ？ でも締める場所なんて知らないからなあ。闇の精霊よ、久遠の眠りを」

漁師が手鉤で頭付近と尾付近を刺すと活きの良いまま締めることができるのは知っているが、正確な知識が無い。一瞬の死であるなら闇の精霊術で良かろうと使用する。水球の中で激しく暴れていた魚が動きを止めるのを確認し、水を解放。魚は微動だにせず砂の上に横たわった。

少し顔を顰めた直時は、軽く頭を振って脱いだ衣服へと袖を通す。嫌な記憶を思い起こすような精霊術を敢えて使ったのには理由があった。

心機一転する！ そう決めたからだ。体を鍛え始めたのならば、心も鍛えよう。そう思った直時だった。

リスタル戦の悪夢を忘れることは出来ないし、忘れるつもりもない。自分の不用意さ故に、多くの者を殺し、殺されかけもした。あの血の海は生涯夢に見る事だろう。

(フィアもヒルダさんも強引だが、好意で色々教えてくれようとしてるんだものな。俺もそれに応えないと！)

気合が入っているようだが、直時は何もこの世界を良くしようとか、発展に寄与しようと思っっているわけではない。昨夜のことは自分が勝手に思い描いた妄想だと承知している。

「まずは、誰を害するでもなく自分のポジションを確保すること！それが最優先だ！」

拳を握って朝日に誓う言葉は、各国が追う『黒髪の精霊術師』としてはあまりにもささやかな決意だった。

朝餉を囲みながら3人は今日の予定を話し合っていた。

直時が獲ってきた魚は思った通り赤身で、味はカツオというより淡泊なマグロという感じであった。ポン酢も醤油もないため、刺身や叩きにせず塩焼きであったことに直時は落胆した。だが、魚醬のような調味料を『高原の癒し水亭』のオットー氏が使っていたことを思い出し、和風調味料を探すことを今後の目標に入れようと決意するのだった。

「今日の予定も昨日と同じ。ヒビノは東方海路に沿って飛行、商船に姿を誇示すること。野営地向きの島があったら早めに着地しておいて。私達は一刻後に後追いするから野営地からの念話はそれを念頭に置いてね」

フィアの確認に首肯する直時。魚肉の串焼きを頬張っていたヒルダが不意に問いかける。

「以前から疑問に思っていたのだが、ヒビノの名はタダトキだろう？　ファイは何故姓で呼ぶのだ？」
「おっ！　ヒルダさん一発じゃん！　ファイは発音し難いって言うだけだ」

「う……。ヒルダまで噛まずに言ってるう」
ファイが悔しそうにヒルダを見る。

「タードアートウーキー。ターダートキー。まあ少し言い難いが、そんなでもなかるう？」

「なんかカクカクしてない？」

「確かに意識しないと発音し難くはあるな」

「…ひとの名前を悪く言わないでくれ」

アースファイアの言語では言い難いようだが、ちゃんと発音できる人もいた。というか、ちゃんと呼んでくれる人の方が多かった。

「ミケが普段呼んでいた略称があったな」

「ああ！　タツチー！」

「それで良いのではないか？」

「却下！　あれはミケさんが呼ぶから良いんだ！　ファイが語尾伸ばしたって可愛くない！」
思わず本音をこぼしてしまった直時。

「な・ん・で・す・っ・て？」

「ファイ御嬢様は可愛い系じゃなくて綺麗系ですからっ！　凜とした美しさですからっ！　だから間延びした呼び方はその美しさに似合わないんじゃないかなーっ！」

笑顔のまま青筋を浮き立たせたファイに必死のフォローが入る。

「ふむ。じゃ、タツチーにしておきましょう」

「……あんまり変わらない気がする」

ギロリ睨むファイアに慌てて口を押さえ、直時は首を左右に振る。

「じゃあタッチイで決まりだな」

ニヤニヤしながら楽しそうなヒルダ。

「タッチイ」

二人の溢れんばかりの満面の微笑みに「ハイ」としか言えなかった直時だった。

真つ青な夏空。ところどころにむくむくと聳え立つ真つ白な積乱雲。眼下には深い海の藍色、点在する島の緑、砂浜の白、環礁のエメラルドグリーン。溢れかえる世界の色に、自転車に跨り空を往く直時は風除けのサングラスを外す。一層際立つ世界の鮮やかさに口元が綻んでくる。

「何度飛んでも気持ちいい！」

オープンカーや単車でもこの爽快感は得られないと思う直時。

自転車で飛んでいるわけではないが、操縦している気分で車体を傾ける。大きく倒した車体の頭を斜め下へ向け、海面に向かって背面で緩降下。ぶつかる寸前ロール。姿勢を真つ直ぐに戻す。海面すれすれを風を切って飛ぶ直時。ときどきうねりの先端がタイヤに当たり、飛沫を飛ばした。

風で白い軌跡を波間に残し、疾駆する自転車。直時の目前に一際大きなうねりが海面を持ち上げる。咄嗟に上昇、後輪が波を切り裂いて盛大に水を弾けさせた。

高度をとった直時は、右へ左へと錐揉みを繰り返し濡れた車体と

身体から滴を飛ばす。目まぐるしく変わる景色の中に3筋の航跡が見えた。商船だ。

「御挨拶、御挨拶つと」

縦列で東から西へと進む商船へ向けて高度と速度を下げた近付く直時。各船の縫うようにスラローム飛行。それぞれのメインマスト上、見張り台で驚いている船員達に手を振りながら飛び去る。

「これはサービス！」

3隻から良く見えるところで大空に大きな弧を描く。3連続宙返りを別れの挨拶として、さらに東を目指す。

「煙幕^{スモーク}出せたら綺麗だったんだけどな」

今無いものは仕方無いが、無ければ作れば良いと考えた直時は、今夜にでも魔法陣を弄ろうと思うのだった。

「あれが『黒髪の精霊術師』か。とんでもねえ早さで飛んでやがるな。念話が届く範囲にうちの船はいたか？駄目か…。しゃーない、日付と時間、容姿と乗り物の絵を添えて伝書飛ばせ。進路も忘れるなよ」

船長の指示に連絡用の海鷹が2羽（1羽は予備）空へと放たれる。その足にはマケデウス王国の大商人、グラツイアーノ家への連絡筒が括りつけられていた。

直時はその後も出合う船全てに自分の姿を印象付けて、東へと飛び去った。一刻遅れで後を追うフィアとヒルダは、じわじわと差が

広がっていることを情報収集するため舞い降りた船から訊き、午後
の追跡では降りる船を絞って飛行に重きを置く旅程となった。

一方直時は、たまには甘い物が欲しいなあということと午後に見
つけた大きな商船へと降り立ち、野菜と果物をはじめ数種の食糧と、
黒糖と香辛料を交渉して買取った。少なくなつた酒も忘れなかつた
のは言うまでも無い。

航路近くに5つの連なつた無人島を発見した直時は、少し早いが
着陸。航路と反対側の砂浜で野営準備を調べ始めた。今までは石を
積み上げた簡易竈であつたが、『岩盾』の元になつた土木錬金術系
魔術である『石化』を改造。火を効率良く使えるよう本格的な竈を
作りあげる。

「そついや薪集めしなくても煮炊き用の火系魔術あつたよな？ で
もまあ時間あるし直火のほうが雰囲気出るもんな…」

一度足を止めたが考え直した直時は、乾いた流木を集め始めた。
ある程度集まつたら縄で縛つて『浮遊』を掛け、引っ張りながら薪
集めを続ける。

竈の中に火を熾し、太い流木に火が移つた時点で下ごしらえを始
める。まずは荒挽きされた大麦のような穀物を『石化』改造で作つ
た土鍋へ投入。乳脂（バターに似た脂）の塊を、流木を削つて作つ
た木べらで透明になるまで炒める。香草のみじん切りと磯で獲つた
貝の身を入れ、塩と香辛料を適当に振りかけたあと、水を入れて蓋
をした。

「米は無かつたけど、パエリアみたいに出来あがつたら良いんだけ
どな」

水加減が適当なので期待は持てない。それでも白米を食べたくて

仕方がない直時の代用創作料理である。

次は普段から使っている鉄鍋にみじん切りしたオルニオン（玉ねぎもどき）を入れ、乳脂でキツネ色になるまで炒める。小麦粉を少量入れて茶色になるまで更に炒める。火から下ろし、別の鍋に乳脂と塩漬け肉をぶつ切りにして投入、軽く焦げ目が付いた時点で水を入れる。塩と香辛料、香りのキツイ野菜と固く繊維が多そうな野菜をぶつ切りにして放り込み、灰汁を取りながら暫く煮込む。先程炒めたオルニオンと小麦粉を投入し、だまにならない様溶かし、『石化』で成形した石板で竈の穴を塞いでその上に鍋を置く。直火にさらさずじつくりコトコト煮込むためだ。

予備の鍋が無く、石化で土鍋をもう一つ作る。リンゴのような梨のような果実を多めに買ったので、生食分は別にとっておいて数個の皮と芯を取り除き土鍋に入れ、水をひたひたにしてから黒糖を水の10分の1くらいを煮ながら溶かす。果実に火が通ったのを確認した直時は火からおろして蜜が果実に浸み込むにまかせる。

そうこうしている間にパエリアもどきが噴きこぼれている。飯盒なら放置するのだが、ご飯でないだけに少し不安だった。しかし、『赤子泣いても蓋とるな!』という言葉を思い出した直時は噴きこぼれるまま放置。収まったところで火からおろして蒸らす。

「こんなもんだと思うがヒルダさん良く食うからなあ。俺も訓練後は腹減るし、何か狩ってくるか…」

鍋をかき混ぜて焦げ付いていないことを確認し、シチューを火にかけてたまにする。直時は一応確認のため念話を飛ばしてみるが、まだ感知できる範囲ではないようだ。服を脱いで海へと入る。

十数分後、鮭のような2メートル程の魚を仕留めた直時が海から

上がって来た。水の精霊術で塩水を洗い流し、風の精霊術で身体を乾かした直時は念話をフィアとヒルダへと飛ばす。

(ヒルダだ。野営場所は決まったか?)

(夕飯の用意も出来てますよー)

(やったあ! もうお腹ぺこぺこよ)

(商船から酒も買ったよ。航路右手に島が5つ連なつてるところがあるから一番大きな島に来て。航路と反対側の浜にいる)

(了解だ。ふふっ。酒付きとは気が利いているじゃないか)

(急いで行くわ)

(ヒビノ了解。待つてる)

念話を切った直時は魚を三枚におろして片側の身を適当な大きさに切り塩と香辛料を振って小麦粉をまぶして待機。残りの身には塩だけ振って作成した石皿に放置。こうしておけば後で何にでも使えるだろう。もったいないくらい身が付いていたが、骨と頭は面倒くさいから海に捨てる。すぐに何かが寄ってきて餌になる。

「お疲れ様」

しばらくして空から舞い降りてきた二人を迎える直時。周囲には既に芳しい香りが充満していた。

「なんか御馳走みたいね」

「うむ! でかした!」

「二人には訓練でこれから世話になるからね。まあお礼の一部ということで。俺も久々に調理らしいことができて楽しかったしね」

石化の応用で砂浜の砂から作成した石製の食卓と椅子、食器の前に二人を招く。

「早速人魔術の改造？」

「これは『石化』を改造したものだけど、魔法陣の脳内検索してみたら造形の職業魔術で似たようなのがあったみたい。ファイアの知識多過ぎだよ」

「良い結果を導くことが出来たなら、回り道であってもその過程は決して無駄ではないぞ」

直時の苦笑にヒルダが言う。

「とりあえずどうぞ。今日仕入れたお酒。前に買った奴ほど美味しくないけどね」

二人の杯に果実酒を注ぐ。

「直ぐに食事にするからちよい待ってね」

予め加熱していた石板に乳脂をたっぷりと乗せ、溶けたところに先程の小麦粉をまぶした魚の切り身を乗せる。脂の爆ぜる音と小麦の焦げる香ばしい匂いが立ち込める。

魚肉を取り分けた皿に残った脂で炒めた野菜を添える。直時は自分の杯と二人へおかわりの果実酒を注ぎ、あらためて席に着く。

「」「乾杯！」「」

三人の杯が重なる。

「じゃあ食べようか」

「うむ。御馳走になる」

「どうぞ召し上がれー」

フィア、ヒルダ、直時がお互いを見やって野外にしては本格的な料理を口にする。

直時の手料理は思ったより好評であった。魚のムニエルもどきは

淡泊ではあったが乳脂が浸み込んでこつてりとした味わい。材料不足のシチューも塩漬け肉が柔らかく煮込めていた。パエリアもどきは少し焦げてしまっていたが、お焦げもまた美味であった。

フィアとヒルダが特に喜んだのは食後のデザートとして供されたコンポートもどきである。直時としてはバニラビーンズやシナモン等で香り付けしたかったが無味物は仕方無い。蒸留酒を少量ふりかけただけだったが、野営がメインでは甘い物自体が果物が干し果物しか口に出来ないのも、これはこれで御馳走であったようだ。

フィアとヒルダが嬉しそうに一口ずつ味わっている姿に自然と笑み崩れる直時。料理を作る側として、喜んで食べてくれる人がいるというのは大きな喜びだなあと、改めて思うのであった。

食後の話題は直時がどんな生活をしていたかが中心になった。フィアが地球の文明に強い興味を示していたこともある。

「良くも悪くものんびんだらりと過ごしてたよ」

苦笑しながらも遠くを見るように話す直時。

生活のため働く毎日。隙を見つけて捻じ込む自分の楽しみ。美味しいお酒。地域のしがらみ。家族との悲喜こもごも。文化背景は判らないが、命のやりとりをするような争いの少ない国に生きていたのを窺わせる話であった。

「じゃあ今度はアースフィアの話ね。ここ100年くらいで私が見聞きした出来事を…話してたら時間が無いわね、転写で！」

「情緒が無いな！」

「私も吟遊詩人だから弾き語りしたいんだけどね。今は早く知識が欲しいでしょ？」

「仕方ないか……。それじゃ、それと各種族の関わりとかも知ってるだけで良いから教えて。祖先がどんな神様だったとか、どの種族がどの種族と友好的だとか、逆に反目してるとか、理由は何故だとか俺の世界じゃ、神の存在があやふやなせいで色々と解釈があつてそのせいで戦争も虐殺も起こつたんだ。その辺りの違いも認識しておきたい」

「あくまでも私の知識でしかないわよ？」

「2000年以上生きてるんだろ？ 逆にお願ひしたいね」

他意のない言葉だったが、フィアとヒルダの表情が微妙に強張る。

(あれ？ 地雷踏んだ？)

直時の背中を悪寒と冷や汗が伝う。

「うん。判つた。私を知る限りの事を教えてあげましょう」

「竜人族が伝え聞くことも私が教えてやろう」

「ああ、うん。アリガトウゴザイマス。でも二人とも何故そんなに本気の眼なのですか？」

ところどころ台詞がカクカクしてしまう直時。訊くまでもないこととはいえ、身の危険を感じる。

「それはね。タッチイが本気で知りたいとおもっているからそう見えるだけなのよ」

「ヒルダさんは転写なのに何故指を鳴らしているのデスカ？」

「それはね。タッチイの身体に教え込むからだよ」

「二人ともどうして大きなお口で笑いを堪えているのデスカ？」

「それはね。これから教えてあげることが楽しいからだよ」「」

頭では無駄な逃走だと理解していたが、本能が直時へ逃げると命じた。風の精霊術を駆使した疾風の如く飛び立った直時を即座に捕獲した二人は『教育』をはじめたのだった。

合掌。

逃避行？（後書き）

追跡グループがもうひとつ出て来ました。

料理って面白いですよね？ 時間があつたらーからビールシチュー作ってみたい。

追う者達？（前書き）

いい加減サブタイトル変えよう…。

追う者達？

「ねえ。タツチイの世界には神々も魔術も精霊術も異種族もいないって言うってたわよね？」

ヒルダに締められながら、ファイアの転写の頭痛に耐えた直時は、対価としての自分の知識を転写した。ヒルダも興味を持ったようで、転写を望む。しごき等への復讐の意味を込めて、今までファイアに転写した分をまとめて送ったため、今は頭を抱えて唸っている。

今回は小学校低学年レベルまでの言語と、参考として昔話や童話、児童向け科学読本っぽいものの知識を転写したのであるが、ファイアは何か腑に落ちない事があるようで難しい顔をしている。

「そうだね。魔力も何もない世界だったよ。人族はアースファイアから見れば普人族だけで、神々も神霊も精霊も魔獣も神獣もない世界だったね」

魔力が無い分、野生獣に較べるとことさら非力な人間であったが、群を作り、道具を作り、技術を発展させることで対抗した。

（あれ？ アースファイアの普人族も同じ？）

疑問が芽生えた直時であるが、他の生命体と意思疎通が出来るということが地球と大違いである。まあ、神だの竜だのが実在する世界に地球の常識をあてはめることもないと思いを放棄する。

「でも昔話やお伽噺にいろんな神々や、竜族やら巨人族やら鬼人族他が山ほど出てくるんだけど？ 昔はいたの？」

「それは想像の中のお話だよ。竜族に関しては人族が生まれるずーっと昔にいたって証拠の化石が出てるけどね」
相違点を無視して例として挙げた。恐竜の化石のことである。

「……想像だけ？ 存在しないのに？ なのに当たり前前に認識されている？」

視線の焦点を合わせず発した問いは何に向けたのか判然としない。フィアはそのまま思考の海に沈んでいく。

(向こうの世界に無い存在がアースフィアには在る……。アースフィアには無い『かがく』が向こうの世界には在る……。無いはずの存在を認識しているヒビノの世界……。メイヴアーユ様は何か知っておられるのかも……)

『知』に己の欲を求めたフィアの思考は続く。

「もしもーし。フィアさーん？ 駄目だこりゃ」

直時は呟きを繰り返すフィアの前で手を振ってみたが反応が無い。何かに没頭しがちな人には良くあることだと放置することにする。

「フィアは思う所があるのだろう。それはさておいて、今夜も始めるぞ。身体を温めておけ、タッチ」

転写の頭痛から復帰したヒルダが告げる。最後の一言はにやけながらである。

「つく！ 楽しそうに弄ってくれる……。ところでまた脱ぐんですか？」

「勿論だ」

「……りようかい」

次に街へ寄ったときに安い短パンを大量購入しようかと心に決める直時だった。

月明かりの下、槍を手に走る直時。探知強化を禁止されているため、本来の知覚でしかない。右手上方から風を切る音。ヒルダの翼だ。星空が人型に切り取られ、その人影が瞬く間に近づく。闇に浮かぶ紅い眼。

（振りかぶり。上段か。斜め回避！）

直時は避け切れない場合を想定し、槍を盾に構えながら右足で砂を蹴り左前方へと踏み込んだ。さらに着地した左足を軸にして、ヒルダの斬撃を半回転しながら避ける。

空振りしたヒルダはそのまま剣を地面へ。勢いに飛び散る砂粒。跳ね返る剣の軌道を力任せに描き変え、切っ先は直時を追う。

（この突きは大丈夫！）

昨晚の訓練でなんとはなしに会得した『肌感覚』が届かないと伝えてくる。

しかし、ヒルダの切り返しの早さは嫌という程味わった直時。サイドステップで跳んでは次撃を避けても宙にいる間に3撃目が飛んてくる。跳んで逃げたい！ その衝動を押さえこみ、渾身の擦り足で後方へ。無理な動きに太腿の筋肉がぶちぶちと嫌な音をたてる。

突きを外されたヒルダは大きく踏み込んで剣を横に振るうが、間髪で後ろへ退いた直時には当たらない。

「うむ。良い判断だ。筋が何本か逝ったようだな。治癒しろ」
攻撃の手を休めたヒルダは、苦痛の色を浮かべる直時に指示した。

「体力向上目的じゃなくて、組み手が主になってませんか？」
精霊術で治癒を施しながら文句を言う直時。

「問題ない。筋の修復は筋力の増加、体力向上にもなっている。一石二鳥だろう？ 癒えたのなら続きだ！」

「ヒイツ！ ここは一息入れる流れじゃっ？」

「そんな流れは断ち切ってやる！ 走れ走れっ！」

後ろ向きに全力疾走する直時へ、嬉々として斬りつけるヒルダ。下着一枚の男を追いまわす凹凸の際立つた姫（竜人の）がボンテール：革鎧姿で剣を振り回し、少なからぬ血潮が飛んでいる。致命傷に至らないことを約束された攻撃（S）は、マ：（M）にとっては永遠に続く快樂であっただろう。不幸なことに直時にM属性は皆無だった。

「今日はどんな感じ？ 見た限りじゃ、あんまり筋肉ついてるように思えないんだけど？」

無数の刀傷を残したまま、仰向けで荒い息を吐く直時の体を吟味したファイアがヒルダに問う。思考の海からは浮上したようだ。

「贅肉が落ちて引き締まったあと、何故か増量せんのだ。筋肉の破損と修復を繰り返しているのだがなあ」

腑に落ちない様子のヒルダの言葉を聞きつつ、治癒を直時に施すファイア。

「…多分遺伝ですよ。うちの家系はちっこくて細っこいのばかりだから」

治癒で復活した直時がヒルダの疑問に答える。

「一族の特徴か…。そんな程度では普人族の中でも脆弱だぞ？」

「そんな程度とか言わないで下さい！　うちの国民性は『小型！
軽量！　高性能！　高出力！　低燃費！』が売りなんですっ！」
　　憐みの視線に思わず嘔みついてしまう直時。

「ふむ。タツチイの気合が戻ったようなので、あと一回全力でやっ
たら終了にしようか」

「了解。じゃあ、その後に精霊術の訓練ね」
　　情け容赦ない二人の魔女に拳を震わせる直時。

「くう……。この……。鬼っ！　悪魔っ！　ヒ」

「ヒ？」

　　怖い笑顔のヒルダ。言葉に詰まった直時は、苦し紛れの言い逃れ
を叫ぶ。

「ヒ、ヒムラー！」

「……なんだそれ？」

　　首を傾げるヒルダを残して直時は闇夜の砂浜を逃走した。転写情
報に無いことであるが、某国の秘密警察長官であることは秘密であ
る。

　　ヒルダの特訓によるポロ雑巾状態から治癒で復活した直時はフィ
アから風の精霊術、攻撃では無く自分の感覚として活用する方法を
教えてもらう。

「探知強化は使ってないわね？　風の精霊術、『探査の風』をなん
となくでなくちゃんと憶えること！　風の精霊が教えてくれるから
身を守る術すべとして最優先に憶えなくちゃいけないわ。今までは状況
が逼迫ひっばくしてなかったから放っておいたけど、これだけはちゃんと憶

えること！」

いつにもまして真面目な声音のフィアに、ヒルダの訓練でダレていた直時が気を引き締める。

「眼を閉じて。精霊の囁きは聞こえる？　じゃあ精霊に目と目になってもらいなさい」

フィアの言葉通りにすると、真っ暗な直時の網膜に周囲の輪郭が白線となって浮かび上がる。

「次に精霊に教えてもらうの。周囲の形。色。臭い」

求める情報を伝達する。白黒のイメージに様々な情報が付加され、眼を瞑^{つむ}っているのにも拘わらず直時の脳裡に色彩豊かな情景が描き出される。驚きに呻く直時。

周囲の地形は元より、刻々と変わる波の形、跳ねる飛沫、風の向き、それに舞うフィアとヒルダの細い髪の毛の様子。

（これは…。探知強化いらんじゃないか？　凄いな！　あと…フィアとヒルダさんの甘いかほりが…）
女性特有の（男からしてだが）芳^{かぐわ}しい香りまでも運んでくる風の精霊に自重を促したくなる直時である。

（風の認知範囲は俺の認知範囲？）

風の精霊が伝えるタイムラグはあるものの、ほぼリアルタイムで脳裡に再現される光景。細く繊細な（体型のみ）フィアと、メリハリのあるヒルダの情報までが風の精霊によって届けられる。

「げふんっ！　げふんっ！」

思いもよらない収穫に咽ぶ直時。ヒルダには判らなかつたようだが、肌をなぶる風に気が付いたフィアの頬に朱が差す。

「……触った？」

「それは風の精霊さんが触っただけです。フィアは触るもクソもなく見てるよね？」

裸を見られたし、訓練中は下着一枚である。居直り具合が半端ではないが、ぐうの音も出ないフィア。

勝ち誇ったように野営地へと向かう直時は、水の精霊に同じ感覚を望めば水中での活動も自由になるなど考察していた。

翌朝、またしても夜明けに合わせて目が覚めた直時。日本では考えられない生活サイクルである。新たな精霊術の活用法や、水や風に身を任せた飛行や遊泳の爽快さ、それを自由に行使できる澄み切った空と海。興味をそそられる事や、気持ち良い事が多過ぎる。暢気に寝ていられるのも最高の贅沢だが、それに勝る楽しみがあった。

脱いだ着衣を丁寧に畳み、靴も脱いで裸足になる。恒例になりつつある禪（正確には下着）姿の早朝トレーニングである。

「運動と治療術の連続使用は凄いな。短期間でこんなに引き締まるとはなあ」

くつきりと分かれた腹筋を確かめるように自分の腹を掌で叩く。肩や二の腕も太くなっている。元が元だけに筋骨隆々とはいかないが、眼前に鏡があれば恥ずかしげも無くボディビルダーのポージングを真似ていたであろう。

入念なストレッチと筋トレ、ランニングで自分に課したノルマを果たした直時は治療を施したあと風の精霊に身を任す。

初めは近寄ってこなかった海鳥に混じって、海面を低空で飛行。ときどき手や足を波に掠らせて海面に白波を立てる。

「っかぁー！ 気持ち良い！」
自然と笑みがこぼれてくる。

両腕を羽根のように広げ、海面すれすれで錐揉み。交互に掌に当たる水の感触。水の精霊術で飛沫を水柱へと変える。飛翔する直時の後を追うように水柱が上がり、10メートル程の高さで崩れ落ちる。海面へと戻る飛沫は朝日を浴び七色の橋を浮かべた。

(右下方、島の沖に水柱！)
姿を隠して上空を飛行する物体。その最後尾から僚騎へと警戒の念話が発せられた。

ヴァロア王国、ペルティエ特務大尉一行は巡航速度でも夜間飛行すれば直時達へ追いつくと判断し、急追しなかった。空中騎兵母艦で十分な休養を取り出発。速度的に無理はせず、しかし休みなしの飛行により2日後の夜明け、早朝の自主訓練中の直時を発見することが出来たのだった。

(3番騎は上空にて待機。1番騎で接近確認する。2番騎は1番騎の後へ。不意の事態には即離脱。万が一のときは母艦へ帰還しろ) サミュエルは即座に指示を飛ばす。3番騎には子爵とはいえ貴族の息女エリアが乗っている。無理はさせられない。

「視えざるを視る 望むは鷹の眼 『遠視』」
『探知強化』の視力強化だけの単能強化版、その分魔力を節約し

た魔術で視力だけを向上させるサミュエル。後ろにつけたオデットも同じ人魔術を使用する。

緩旋回で連続する水柱の先へと接近する2騎。不自然な現象の原因を強化した視力で確認した。はつきりとその黒髪を！

（視認！ 『黒髪の精霊術師』だ！）

興奮を隠せないサミュエルの念話に他の2騎に跨る者達も沸き立つ。

（一旦離脱！ 上空で旋回待機。方針を検討する）

（特務大尉殿。接触するのではないのですか？）

問うたのは1番騎の騎手である空中騎兵だ。他の騎兵や、同乗しているエリアとオデットも同意を念話に込める。

（予定ではイリキアへの先乗りだった。ここで邂逅できたのは僥倖であるが少し考えさせてくれ。この状態でエリア嬢の魅力は十全に発揮できるか？）

軍行動での移動であるため軽装。早翔けに重点を置いたため淑女の身嗜みもへつたくれもない状態である。出来るならば潤沢な軍資金で飾り立て装備万端で標的てきと相対させたい。

（確かにこのままではエリア様の魅力を余すところなく見せつけることは不可能でございますね…）

オデットが相槌を打つ。

サミュエルは考える。万全の態勢ではないが、この好機を逃すは勿体ない。ロツソでの交渉内容の報告レポートも、金と色を使ってそれでも袖にされたとある。イリキアで待ち伏せるとしても、他国との競合があるだろう。単独で接触できるこの機会は千載一遇。交渉事が初

回で終わるわけでもない。標的の傾向を知る上でも一度は当たってみるべきだと思った。

(宜し！ 各騎『幻景』解除！ 標的に接触を試みる。2、3番騎は上空待機。私が交渉につく)

(あら。ここは花を添えて警戒心を緩ませる方が宜しいかと思いません。御供させて下さい)

(エリアお嬢様が往くならば私は従うだけでございます) サミュエルの指示に異論が唱えられる。

(いや！ ここは命令に従って頂かないと！)

(私は軍人ではありませんよ？)

(ファイア、ヒルダさん、何か来た！ 視認し難いけど空中騎兵っぽいのが上空に3騎旋回中！ 二人は念のため身を隠して！)

女性二人を説き伏せようとサミュエルが苦勞している間に、風の精霊から異常を伝えられた直時が探查の風で捕捉していた。

一緒に行動しているのが露見すると不味いとの判断で寝ている二人へ念話を飛ばす。強い警告に弾かれたように島の林へと身を隠すファイアとヒルダ。身の回りの荷物も一緒に引き揚げる。

(一応気付かない振りしておいた方がいいかな？)

(こちらは退避を完了した。相手は窺っているだけか？)

(そうみたいです。あっ！ 姿が見えた！ 魔術で隠してたのを解除してみたい)

飛翔を止め、空中に滞空する直時はゆっくりと近寄る姿を確認する。

(白い竜っぽい4枚羽の騎獣にそれぞれ2人が乗ってる。後席の3

人が手を振ってる)

(騎獣の種類は？ 4枚羽の騎獣を持っている国は無いと思うんだけど…)

直時の報告にファイアが問う。転写済みの知識を脳内検索。合致する種族がいた。白烏竜はくじゅうりゅうである。念話で伝えた直時の脳裡にヒルダの怒りの波動が届いた。

(飛竜族だ！ 本来なら騎獣になぞならん！ 捕獲調教されたのだろっ！)

ミソラが虐待されたのがついこのあいだである。ヒルダの怒りに同調したのか、近づく騎影に直時の眼が険しくなる。

(とりあえず臨戦態勢で接触を待つよ？ 攻撃されたらやりかえすからね)

(白烏竜だけは傷を付けるなよ)
(あんたも相手の攻撃を待たずに危ないと思ったらやっちゃいなさい！)

(了解！)
ヒルダとファイアへ返事を送り、睨みつけるように3騎を見る。

「 (当方に害意無し！ 会見を望む！) 」
声と広域念話で話しかけてくる。周囲に風と水の渦で防壁を作りながら様子を窺う直時。

「 こちらは冒険者タダトキ・ヒビノ！ 名乗れ！ 」
念話は使わず大声で返す。補助として風の精霊に声を届けてもらう。

「 (ヴァロア王国よりの使者、サミュエル・ペルティエと申します！ お話があります！ お傍に近付かせて頂きたい！) 」

先頭を飛ぶ空中騎兵の後席から請願が直時へと発せられる。後続2騎の後席の二人が飛行帽を脱ぎ手を振る。エリアとオデットが援護とばかりに満面の笑顔で両手を振っていた。

(ヴァロア王国の使者を名乗っている。ここまで来てるなら話だけは聞いた方が良い?)

(あそこかあ)

(ここまで来たのなら仕方ない。充分注意しろ。それとできるなら白鳥竜のことも聞き出してくれ)

ヒルダの言葉に肯定を返した直時はヴァロアの使者へ接近の許可を与える。

「話を聞こう。近くの砂浜で野営している」

「提案の受け入れ感謝する」

低速で周囲を旋回する3騎へ声を掛け、風と水の防御をそのままに浜へ戻る。直時の後ろに白鳥竜3騎が続いた。

(エリア様っ！ お相手はお若いですよ！ 少々貧弱ですが噂通り精霊術師ですねっ！ でもでもけっこう引き締まった身体つきですよっ！ お尻ちっさっ！)

(……オデット)

髪と瞳が黒であるという外にも、東洋系の普人族がいないためのつぺりとした顔と小柄な体格に実年齢を誤解されてしまう直時。異様に興奮しているオデットの念話を心配する心優しいエリアであった。

水の精霊術で潮と汗を流し、風の精霊術で体を乾かした直時は黙々と衣服を身に付けている。生活魔術でなく精霊術を行使したのは

相手にプレッシャーを与えるためだ。

「お待たせしました。御婦人方の前で申し訳ないですね」
少し離れた場所で待っていた6名と3頭に向かい合う。

「いいえ。突然の申し出を受けていただけで有難うございます。こちらこそ突然不躰なことで申し訳ありません」

サミュエルが直時の眼から視線を外さずに頭を下げた。

「まあ、楽にしましょう。地よりなるもの 我が意の形に 『椅子』

土系人魔術を改造した直時オリジナルである。6つの魔法陣と6つの石製の椅子が生成された。直時に対面するように1脚。その背後に女性二人用2脚。少し離れたところ、白烏竜の傍に3脚。自身は傍の流木に腰掛ける。

「これは！ 初めて見る人魔術ですね？ 異国の人魔術ですか？」
「そんなところです。座ってください。自分も落ちつかないんでね」
水の防壁は解除したが、ゆるやかに直時の周囲を風が巡っている。警戒を露わにした対応だ。

「では失礼致します」
サミュエルは背後に目配せし着席を促す。全員が座った事を確認して直時の正面に座る。

(今、着席。使者はサミュエル・ペルティエと名乗った男。鶯色)
くすんだ緑色)の髪に碧眼。背は高い180センチくらいかな？
体つきは軍人っぽくない細め)

(油断しちゃ駄目よ。魔術に体格は関係ないからね)

(他の者はどうだ?)

(騎兵の3人は軍人でしよう。座ったけど崩れた感じがしない。女性二人も立ち居振る舞いから軍人っぽい。それこそ魔術師かな？多分使者の護衛。傍らから離れない)

眼の前の者達を順に見ながら念話でフィアとヒルダに報告を欠かさない。会話のやり取りは全て伝えて助言を得るつもりである。

一方ヴァロア側も念話を交わしていた。

(彼との交渉は私に任せてもらいます。口は挟まないようにお願いします。今回、エリア様の身分は隠します)

交渉用の愛想笑いを浮かべながらも冷めた瞳で直時を値踏みするサミュエル。

(了解しました。特務大尉殿。オデットもいいわね?)

エリアの言葉に肯定の念話を返すオデット。二人とも女性将校然として背筋を伸ばしたまま沈黙を貫く。

お互いの出方を窺いながら薄く笑いを浮かべた直時とサミュエル。歴戦の参謀と異世界の素人精霊術師の会見が始まった。

追う者達？（後書き）

禪姿を後ろから見られてました。

追う者達？（前書き）

面倒臭がりの直時はやっぱり面倒臭くなっただようです。

追う者達？

「あらためて名乗らせて頂きます。サミュエル・ペルティエと申します。ヴァロア王国よりタダトキ・ヒビノ殿へ我が国のご紹介をせよとの命を受けております」

口火を切ったのはサミュエルであった。婉曲^{えんきよく}な表現でロツソでの交渉の続きであることを伝える。

「タダトキ・ヒビノ、冒険者だ。クレマン嬢との会食は楽しみだったが、周囲の雑音が酷くてね。ヴァロア王国の国自慢を聞く余裕が無くなってしまった。煩わしくなって旅に出たが挨拶もせず申し訳なかったな。まあ、他の国にも挨拶無しだったし勘弁してもらいたい」

各国の暗躍による大量の尾行者やその小競り合いに気付いていると臭わせる。形だけの詫びだが、特定の国との繋がりはないことを伝えた。勿論はつきりと言葉にはしない。

「しかし素晴らしい早さですね。一日に一カ国か二カ国を跨いでの移動とは、随分お急ぎだったのですね」

「それに追いついた自分達の速度は無視かい？ あの騎獣、白烏竜というのだろうか？ 随分と足が速いじゃないか」

「休み無しで飛び続けた甲斐があったというものです。そうでなければ貴方に追い付くことは叶いませんでした」

サミュエルと直時の緊張感の漂う雑談の陰では、また別の話題が持ち上がっていた。

（お嬢様っ。あのちびっこ精霊術師さん、見かけによらず胆力もありそうですね！ あの元参謀殿と渡り合ってますよ）

（オデット。ひと様をちびっこ呼ばわりするのは感心しません。小柄でも引き締まった体躯でしたし、均整が取れていて良いのではないですか？）

（エリア様とも釣り合いがとれてますものね！ ウフッ）

（私はちびっこではありません！）

（勿論お嬢様は幼くなどありませんわ。いつまでも可憐な少女の装いに隠れた成熟を…）

（久し振りに会ったというのに貴女は変わりありませんね…）

エリアの従軍に同行したオデットであったが、主の婚儀が持ち上がった時点でお役御免となっていた。嫁ぎ先まで同行出来ない侍女に、自由に生きろと言ったエリア。

納得できなくとも、仕方ないと諦めていたオデット。二人を再び引き合わせたのは他ならぬ直時であった。

リスタル侵攻軍に従軍していたエリアの婚約者は直時の本陣急襲時に戦死したのである。

プロサール家として、それなりの家名を誇る伯爵の息子に嫁がせられることが決まったことに本心はともかく、役目として受け入れていたエリアである。

一度会ったが、豪放磊落（ほうほうらいらく）という評判とはかけ離れた傍若無人さに嫌悪しか抱かなかったとしても、家のためと割り切っていた。オデットは最後まで反対していたが…。

プロサール家の道具として役立つ機会を逸したエリアは、同時に開放感も感じていた。婚約者が出陣の折、発した言葉。

『あはは。此度の戦争はまともな戦闘にはならんよ。蹂躪するだけだ。ふふふ。戦利品を期待してくれ』

その台詞に曲がりなりに軍人として過ごした日々を侮辱された気がしていたエリアである。

だが、リスタル侵攻軍が僅かな義勇兵が守るだけの地方都市を制圧すらできず、手もなく敗退した。婚約者はあえなく戦死。ヴァロアの民としては自分でもどうかと思うが、エリアがその報せを聞いたとき、乾いた笑いを止められなかった。

混乱する頭を纏められないときに王府より打診されたのが、『黒髪の精霊術師』を口説き落とすという話だった。どうやら、訳ありの貴族の息女に対してのみ打診されたようで、あまりの露骨さに顔を顰める両親だったが、エリアは自ら志願した。

『お家のためです』

勿論お題目だ。本心は自分をこの感情の混沌に落とし込んだ者が見たかった。それだけである。その相手が今、自分の前にいる。彼の全てを己の全てで判断しようと思集中したそのとき……。

（お嬢様もさっきのお尻をわしつと掴みたいですよねっ？）
オデットの念話がエリアの思考を掻き乱した。

当たり障りのない話題に辟易^{へきえき}としてきた直時は少しきつめの言葉で切り出した。

「長くなりそうだ。単刀直入に聞こうか。想像はしているが、本当のところは知らないしな。自分へ求めることと、ヴァロアが用意した対価は何だ？ 大抵の案件ならば即答できると思うぞ」

（あんだ、面倒になったわね？）

発言内容は会話と同時に念話で送っている。結論を急ぐ直時にフ

イアが呆れる。

(実際面倒だし、対価になると勘違いしてるなら早目に訂正してやったほうが良いだろ?)

サミュエルの答えを待ちながら念話をする直時。

「タダトキ殿には、ヴァロア王国の民となって頂きたい。王府にて相応の身分を御用意させて頂きます。落ち着かれましたら王族へとお迎えする準備があります」

「ヴァロア王国のために働くならば、支配階級の末端として加えてやろう。と、いうことだな?」

「王や貴族と共に民を導いて頂きたいのです」

「美辞麗句は要らない。求められていることは、要するに政への使い勝手の良い道具だろ? 兵器、魔力供給源、精霊術師という存在価値、そんなところか。対価は地位と名誉。金は働き次第か?」

皮肉げに言う直時。

「支度金として金塊を5つ御用意しております。禄は月に金貨10枚を約束、お働きによって報奨が上乘せされるでしょう。正妻には第一王女が候補に挙がっております」

サミュエルは具体的な対価を提示する。金塊の現物は『浮遊』を掛けた上で、騎獣の荷籠に入っていた。

(フィアが前に言ってた予想通りかな?)

(第一王女を当てがってくるとは思ってたけどね)

(王族の継承に血筋の強化は必須だからな。普人族に限ったことではない)

ヒルダが苦々しげに答える。次期族長ということ苦勞もあるのだろう。ヒルダのお見合い光景を想像した直時はクスリと笑う。

(ヒルダのところも大変そうね)

同情を含んだ口調から、フィアの実家でも族長は大変なようだ。

「ふむ。良い話なんだろうな。ただ、自分はその対価に魅力を感じない」

「何故です？」

サミュエルは眉を一瞬動かしただけで表情を崩さず訊ねる。背後のエリアとオデット二人は驚きに口を押さえていた。

「国の保護は生活の安定には魅力的だが、高い地位には気儘な自由も無い。権力闘争も自分には無理。むしろ面倒。金は欲しいが大金は必要ない。自分の望む額は冒険者ギルドで依頼を受ければ十二分に稼げる。嫁さんが王女様ってのは憧れることも無いではないが堅苦しい。それより獣人族の耳や尻尾を愛でる方が100倍も魅力的だ。結論として、地位より自由！ 巨万の富より適度な小遣い！ 王女より猫耳！ 理解してもらえたかな？」

今までの会話で、寄り道した会話よりさっさと回答をぶつけたほうが良いと判断した直時は一気にまくし立てた。

「……我々が有効だと思っていた対価は貴方にとって意味を為さないって？」

「理解が早いな。文官だとごちゃごちゃと婉曲な言い回しでお茶を濁すところだと思っただが、あんた軍人か？」

国会答弁等で日本語に翻訳するのに疲れる受け答えを散々見てきた直時は、即座に理解したサミュエルに好感を覚える。

(あんた……。ぶつちやけたわね…)

(いやいや。フィアよ、あれくらいはつきり言ってやった方が相手のためでもあるぞ？ 私はタッチイを評価する)

(いやもうタッチイはヤメテ…。なんか色々台無しな感じがする

…)
ヒルダの高評価にも素直に喜べない直時だった。

(サミュエル君って、結構理屈っぽいからトドメさしてきます)
グダグダになりそうな気持ちを切り替えて追い打ちをかける直時。

「そうだな。ペルティエさん。仮にだよ？ 同じ条件で君を別の国に引き抜こうとしたら来るかい？」

「っ！」

「命令。忠義。愛国心。家族。しがらみ。まあ色々あるよな？ 君が提示した対価は、そんなもろもろ、今まで自分が生きてきた全てを捨てるに値する対価だと思うかい？」

直時にはもはや帰郷の可能性は無いが、それでも出自を忘れることはない。それにこの問いは『どの国にも属していない普人族』だと思われていたことへの楔となった。

「貴方も何処かの国の民である？」

「当然自分にだって生まれ故郷はあるんだよ？ ただ単に旅をしているとは思わなかったのか？」

冒険者ギルドに所属する普人族は国から外れてしまった者が多く、直時もそのように考えられていた。

冒険者として腕を磨き、名を上げて仕官先を探すような者が多く、リシュナンテのように国家に属したまま活動する者は少数なのだ。後は根っからの旅人氣質の普人族で、これも稀であった。

「さっきの話は無茶苦茶だけど不可能じゃない。金は現物がここにあるんだろ？ それをそっくりそのまま君に進呈して、何処かの国を俺が力尽くで占領。王として君を迎えたらそれを受け入れられるか？ どうだ？」

リスタル侵攻軍を実質一人で止めた直時の言葉は重い。本人にそ

これまで覚悟は無くても襲われた側のサミュエルにとって、絵空事で済ませられない話であった。

「…できません…。私の祖国はヴァロア王国です…。私の愛するべきものは全て祖国にあります…」

「君は正直だな。そういう奴は好きだな。俺もそうだ。俺も自分の祖国を愛している。色々問題は多いがな」

最後の一言には自嘲気味の直時。

「ひとつだけ疑問があります。祖国を大事にしている貴方が、何故自由に拘るのですか？ 祖国に尽くそうとは思わないのですか？」

真剣そのもののサミュエル。

「俺の祖国は自由を権利として謳っている。自由に生きることが罪では無いんだ。勿論責任も義務もあるがね。国家と国民の関係は隷従じゃない。うちの国は独裁国家じゃないから君達には判り難いかも。まあ隠さず言うと、俺はとある理由により祖国に帰ることが出来ない。しかし、今でも祖国を愛している。それが誘いを受けても他国に仕えることができない一番の理由だ」

心情的に二重国籍となる気は無いと伝える直時。最後通牒だ。

「貴方は祖国を愛しているが祖国からは自由である。という解釈で間違いございませんね？」

不意に口を挟んだのは直時が護衛と思っていた女性二人のうち小柄な方、エリアである。

「そうですね。祖国の保護を受けられない状態なので、義務も責任も果たすことができませんから」

「地位も名誉も望まない。財も必要ない。普人族より獣人族を好むならば、貴方は何をもって生せいの糧とするのですか？」

「美味しいご飯であったり、知り合いとの酒宴だったり、小さな目標の達成であったり、新しい出会いであったり……、何気ない日常の繰り返しで充分楽しいです」

直時はささやかな幸せを胸を張って答える。

(今となつては難しいでしょうけどね)

(目立ち過ぎたからな)

(…次からは気をつけます)

こんな遠くまで追跡されるとは、スイス公国周辺には戻れないかもと思う直時。混乱するヴァロアの面々へ最後に安心させるよう声をかける。

「国家間の戦争だの政争だののために自分の力を使うつもりはない。だから心配せず君の祖国は周囲の国と争ってくれ。ただし、俺や俺の知人の不利益になるなら、そのとき自分の手が届くなら容赦なく使うよ？ リスタル戦のときのようにね」

綺麗事ばかりでなく、最後にニヤリと笑って見せる。戦争するなら充分気をつけるということだ。

「フフフツ。貴方が良心的なエゴイストだと理解しました。これはこれで収穫となりましょう。ついては是非とも交渉を続行したいので同行を許可して頂きたい」

「あははははは！ 言うねえ！ だが、断る！」

諦めを見せないサミュエルに笑顔で拒絶する直時。

「あの。私は軍を抜けておりますので付いていっても宜しいですか？」

手を挙げてにこやかに発言したのは先程の小柄な女性である。直時はサミュエルへと疑問の眼差しを向ける。

「本当です。リスタル戦の少し前に彼女は軍役を終えております」
「オイオイ。サミュエルさん。民間人を連れてくるってどうなんだ？」

直時が咎める。

「彼女はある貴族の息女でして。先の戦で活躍した『黒髪の精霊術師』に会いたいと切望されました。私も宮仕えの身でありますから、色々とありまして同行を許可する他なかったのです」

率直な攻撃（精神的に）の方が効くと判断したサミュエルのホラである。

（お嬢様！ 驚掴みですよ！ あのおしりを逃してはなりません！）

（いい加減にしなさい！）

内輪の念話はさて置く。

「お会いするまでどんな方かと想像を巡らしておりましたわ。お会いしてますます興味が湧きました。是非御一緒させてください。ヴアロア王国より、プロサール家の興亡より、私は貴方の行く末を見たい。見届けたい。どうか御一緒させてください」

そう言っただけでエリアは深々と頭を下げる。軍でも既定の角度でしか下げなかった頭である。

この瞬間オデットも軍を抜けるどころか、国を捨てる覚悟を決めていたのであるが、直時の返事は冷淡であった。

「いや。そんなことは俺の知ったこっちゃないし。正直ハニートラップ？ 所謂色仕掛けでしょ？」

交渉からはじまった話であるからその判断は仕方がないが、身も蓋もない男である。

ヴァロア一行が率直過ぎる言葉にあたふたとする中、直時は彼等の背後、一頭の白烏竜の元へと歩み寄る。2番騎の騎獣だ。

交渉の間、直時の生成した椅子に腰を下ろしていた騎手が直立不動で立ち上がる。

「閲兵じゃないんだから…。楽にして。この子等は普通に話して通じる?」

苦笑しつつ騎手へ訊ねる直時。その際周囲に緩く風を纏っていたのは牽制か?

チラリとサミュエルを見た2番騎の騎兵はサミュエルの首肯を確認した後、直立不動で直時に叫ぶように告げる。

「はっ! 声でも念話でも認識できます!」

「へえ。知能高いんだね。この子の名前は?」

「はっ! ブランドウであります!」

「そか。ありがとね」

そう言った直時は騎兵の肩をポンポンと叩くと白烏竜へと手を差し伸べた。

「こんにちは。はじめましてブランドウ。俺はタダトキ。お腹減ってないか?」

困惑する騎獣へ頷く騎兵。直時の機嫌を損ねるわけにいかないのは理解している。

(私はヴァロア王国特騎獣ブランドウ。空腹は許容範囲です)

差し伸べられた手の意味を理解できず、無難な言葉を返す白烏竜。

「我慢できるけど減ってはいるんだね? 朝食を御馳走したいんだ

けど魚は好き？」

手に擦り寄って来るのを期待した直時だったが、困惑で無視されて少々悲しげだ。

（はい。魚肉は好物です）

「そつかそつか。実は俺も朝御飯まだだったんだ。今から調達してくるから待っててね」

傾げた長い首にほわーっとなる直時。『かわういではないか！こんちくしょう！』と、思っているのは秘密である。

朝御飯の対価にナデナデさせてもらおうと気合を入れた直時は、女性がいるのも忘れて下着姿になり波間へと駆け出した。

「ちよつと朝飯狩ってくる！」

十数分後、白烏竜の頭部の大きさを勘案（食べ易さ的に）し、1メートル未満の魚を大量に狩ってきた直時は生が良いか焼くのが良いか訊ねる。勿論、ブランドウに。

生を所望した白烏竜を呼び集めて、最初は手ずから味見をしてもらう。アースフィアでは小型の魚類であるが1メートルのサンマなどオニカマスと変わらない。狩ろうとしたら逆に群れで襲ってきた。その苦勞を美味そうに飲み込む白烏竜の様子で癒す。

（私達も朝食はまだなのだがな？）

（…お腹減った）

ヒルダとフィアの愚痴を華麗にスルーして、ヴァロア一行にも一匹ずつ振る舞うことにする。こちらは生でなく焼き魚である。

（もうちよつと我慢して下さい。この子達とまず打ち解けないと話

も聞けない)

ヒルダが気にしていた白烏竜の件である。忘れてはいなかったよ
うだ。

「騎獣と騎兵は一心同体なんだよね？ やっぱり小さい頃から付き
っ切りで育ててるの？」

直時は2番騎兵に許可をとって食事に満足そうなブランドウの首
を摩なぐさる。サミュエル、エリアとオデットも集まってきた。

どこまで話しているものか判断がつかない騎兵に代わってサミュ
エルが口を開く。

「騎獣は専門の調教師がいます。配属された後、相性を確かめ専属
騎兵として慣熟訓練に入ります」

「君はヴァロアには長いの？」

背中ではサミュエルの説明を聞いた直時は、撫でながらブランドウ
の目を見上げた。

(生まれた時から兄弟と共に仕えています)

「お父さんとお母さんは？」

(会ったことはありません)

直時と白烏竜のやりとりにサミュエルが冷や汗を垂らす。ヴァロ
ア軍にとっては極秘扱いなのだ。

(やはり拐取かいしゅされたのだろうか)

ヒルダが憤る。

(解放できるかな?)

(無理ね。洗脳ってわけじゃなく生まれた時からの調教じゃ…。服

従を当然と思ってるはずよ)

直時の間にフィアが答える。強制的に解放するなら記憶を完全に消去する他ない。魔術に抵抗の高い竜族に部分的な記憶改変を施すことは難しい。

「両親に会いたい?」

(ヴァロア王国が父であり母です)

調教は完璧なようだ。手がない直時はサミュエルを睨む。

「気付かれましたか…。言い訳はしたくないのですが、ヴァロア王国だけではありませんよ? 一応この3頭は王室直属の特殊空戦小队です。他には居ません」

今までの会話から直時がこの情報を言いふらすことはないだろうと判断するも、サミュエルは心証が悪くなるのを感じた。

「君が知らないだけかもしれないよ?」

睨んだままの直時。ミソラの件もある。

(ヒルダさん、どうする?)

(なんとか解放したいが、有効な手段が無い)

口惜しそうだが、どうすることもできない。フィアも沈黙したままだった。

「先程の対価に彼等をタダトキ殿直属にというのを加えましょう」

「……サミュエル君、結構嫌な奴だね」

したり顔で提案するヴァロアの使者へ、直時は苦々しげに言うしかなかった。しかし、ふと思いついた事があった。

(生まれてからずっと限られたことだけを教えられそれが全てと思っっている。じゃあ、『転写』で知識を強制入力すればどうなるかな

?)

(…一考の価値はあるかも。知能が高く、身体能力も魔力も高い。そんな自分が普人族に命令されるがままに従っている。そこに疑義を抱けばすぐには無理でも自立を思つかもしれない)

(竜族ならば己に気付くことが出来るはずだ！ 必ず！ 手があるならば為すまでだ。ファイア、行くぞ！)

(ヒルダ！ 待ちなさいっ。ああっ、もう！ ごめん…、止められなかった)

(まあ、俺も腹立ってたから良いよ。悪いけどファイア、追いついたってことで辻褃合わせ頼める?)

(白鳥竜への『転写』も頼むぞ)

(タッチイの知識と常識じゃあ説得力ないからね。それにこの時点での転写は敵対とも取られかねない。竜人族のヒルダが一緒なら言い訳も立つから私がやるわ)

突然の事態の推移に動揺を表に出さないようブランドウの長い首を撫で続ける直時。その頭が他の2頭と一緒に一方向を向いた。

ヒルダとファイアの到来に、直時も驚くような表情を作って同じ方向へと顔を向けた。怒気も顕な竜人族と表情を消した妖精族が共に降り立った。

「やっと見つけたと思ったら、何だか面白いことになっているわね」
「タ…ヒビノに言いたいことはあるが、まず他に問うべきことがある。その白鳥竜は貴様らの騎獣なのか？」

氷の微笑を浮かべたファイアと、獰猛な笑いを刻んだヒルダ。

「な！ 何故此処につ？」

直時の演技は、二人の迫力に埋もれヴァロア一行は気付かない。

(取り敢えず示威行動としてタッチイへ懲罰ね。派手に吹き飛んで

見せてよ?)

(精霊術で攻撃を緩和しろ。今なら出来るな?)

(え? マジですか?)

ヴァロア一行に対して脅威と認識させるためである。ファイアはともかく、ヒルダは冷静さを欠いていそうなので、直時は慌てて防御へと頭を切り替える。

「私は先ず、挨拶もせず姿を消した馬鹿に制裁を!」

他への被害を避けるため、その場から遁走した直時へとファイアが数条の竜巻を放つ。飛翔せず走っただけの直時は、先頭の竜巻に弾かれた。

高らかに悲鳴を上げながら、風の精霊術で空気の緩衝膜を張り、後続の竜巻群にもみくちゃにされながら高空に弾き飛ばされるかのような演出をする直時。

「私もお仕置きしておくか」

そう宣言したヒルダが炎の吐息ブレスを放つ。

(ちよつと! それは駄目でしょっ?)

(こんな食らったら消し炭になってしまっつ! 死んでしまっつ!)

示威戦闘であるため、受けることが前提である。勧誘対象の直時が叩きのめされることに意味があるのだが、ヒルダのはやり過ぎだ。

「あ」

放った後に気付いたが、灼熱の炎は直時を包み込んだ後だった。

次の瞬間、大きな爆発と水蒸気が直時を中心に発生した。水の精霊術でヒルダの炎を阻み、高熱の水蒸気を風で散らせたようだ。肩

を上下させながら姿を現した直時に、ファイアは胸を撫で下ろした。

ヴァロア一行は声もなく固まり、白烏竜も生物としての本能で二人の魔女に敵わないと理解したようで不用意に動かない。

(いつか後ろからその尻尾に噛み付いてやりますよ)

恨みがましい直時の念話がヒルダの微笑を誘った。

「馬鹿者への制裁は済んだ。それでは再度質問だ。その白烏竜はヴァロアの騎獣か？」

怒気を纏ったヒルダが一步を踏み出した。ファイアは後ろで知らんぷりである。

ヴァロア一行の責任者であるサミュエルの顔から血の気が引いた。

追う者達？（後書き）

いじられキャラの交代なるか？

追う者達？（前書き）

あれ？マツタリな雰囲気だ…。

追う者達？

「返答はどうした？」

笑顔で犬歯を剥き出し、一步一步近付くヒルダ。サミュエルはあまりの迫力に声も出せず脂汗を流している。

(まさかこの場のヴァロア人、皆殺しとかしないですよね？)
皆の集まる場所へと五体満足で帰ってきた直時が念を押す。

(今それをしても解放にはならん。白烏竜だけを残してもヴァロア王国に逃げ帰ってしまうのがオチだろう)

(むしろ彼等を逃さないようにして、知識の転写のあと白烏竜達に少しずつでも世界を見せてあげるのが良いわね)

(じゃあ、この場合は？)
(脅しだ)

竜種の拐取を盾にこちらに従わせる。力の差を見せつけ抵抗の意思を潰す。それも徹底的に。ヒルダの怒りはそう告げていた。

「サミュエルくん？ この場合沈黙は身を守る術にはすべならないと思うよ。正直に答えたほうが身のためだと経験者は思うんだがなあ」
ヴァロア王国への攻めを一身に受けることに気の毒になった直時が助言した。彼の場合、沈黙ではなく余計な一言が墓穴を掘っていただけであるが、この一言が硬直したサミュエルを漸く動かすことになった。

絶対的な強者であると認識したためか、サミュエルはヒルダの前に跪き、今までの経緯を語った。ヴァロア王国が白烏竜を拐取していた件を謝罪しつつも、今回の着任で初めて知ったということ。直時を自国に引き込むにあたり、2代前から王家主流となった現国王

が強烈な横槍を入れてきたこと。そのための支援にあたり、極秘であった王家直属の白烏竜特空隊投入があったこと等である。

「貴方が知る全ての情報を『転写』しなさい。少しでも私が不審に思う嘘が混じったら判っているわね？」

ヒルダが黒剣を突きつけた上で、ファイアが氷の微笑でもって要求した。攻撃魔術等、少しでも怪しい素振りを見せれば命が無い状況下、しかも『晴嵐の魔女』相手に小細工は不可能と判断したサミュエルは諦めと共に頷いた。

背後の5人への牽制は直時が受け持ち、主にサミュエルへの口封じを警戒する。

「ふーん。貴方あのとときの参謀だったのね。ヒビノの本陣急襲で生き残ったんだ」

転写情報を吟味しながらファイアが口にした内容に、直時の表情が険しくなる。自軍侵攻隠蔽のための目撃者皆殺し、リスタルの街への略奪、リナレス姉妹への陵辱等、現代の日本人として許容できない軍人としての行為が頭をよぎったのだ。

「作戦自体は出征前に決まっていたみたいだし、略奪奨励してたのは司令直々だったみたいだし、彼の責任じゃないみたいだけどね」

直時が纏う風の雰囲気を感じたファイアがフォローを入れた。感情のまま暴走されても困る。

その後自分なりの分析を加えた情報を直時とヒルダに転写、情報の共有を図った。

「白烏竜の件は竜に連なる者達に報せるからな。覚悟しておけ」

頭に血が登っていたヒルダも、流石にこの問題を個人に背負わせる気はなかったようである。怒りこそすれ、サミュエルを害することとはなかった。ただ、これからヴァロア王国に『竜禍』と呼ばれる

災害が度々起こることになる。

厳しい容貌いかめに誤解されがちだが、竜種は本来穏やかな気性である。特に上位種の者ほど、己の力を知り控えめな行動を取る。

ただ、この件が露見したことにより、竜族がヴァロア王国においてのみ一切の自重を放棄した。大型竜族が食餌を求めヴァロア領内を訪れ、逃げる魔獣の暴走を引き起こしたり、頻繁に領空を飛び回り巻き起こす風で被害を与えたり、下位の竜種討伐の邪魔に介入したりと、甚大な被害を与えることになる。

「冒険者ギルドにも通達しておくわ。上位魔獣や神獣の仔の行方不明なんてこともあるからね」

フィアの言葉にミソラのことか頭を過ぎる直時。何かあればまずヴァロア王国が疑われる。サミュエルをはじめ、ヴァロア一行はこれから祖国が払う代償の大きさに顔を青くしていた。

「先ずは目の前の白鳥竜のこと。彼等には転写でヴァロアがやったことを教えます」

「勿論異論はないだろうな？」

フィアの言葉に合わせてヒルダが威圧感たっぷりで見つけつける。サミュエルが頷くしかなかったのは言うまでもない。

一行の指揮官であるサミュエルが折れたことにより、ヒルダとフィアが事実上の上官扱いとなった。力ある他種族であったからこそ、逆にスムーズに移行したのかもしれない。直時が同じことを言うても『普人族』であるという対等感から従わなかったであろう。

彼女らの命令に従い騎兵が指示を出し、3頭の白鳥竜がフィアに歩み寄る。フィアの頭上と3頭の頭上に魔法陣が展開され、知識の転写が行われた。

転写の副作用に苦しむ3頭。いや、彼等が本当に苦しんだのは自分達の今までの常識と、知らされた事実の落差故であった。それでも容易に受け入れがたかったのだらう。彼等はそれぞれの騎手である騎兵へと痛む頭を寄せた。

それを羨ましげに見る人物が一人。頭痛の原因は知識の流入であるため、治療術が効かない。そのことにやきもきしていた直時だった。

（お腹に頭を擦りつけてるう。可哀想だけどかわういではないか！
嗚呼！ 羨ましいぞっ、コンチクショウ！）

騎兵達は懸命に愛騎を宥めている。直時はそれを見て、個人としては悪い奴等ではないのだらうなと思った。

「お前たちは我々に従ってもらおう。逃げるなよ？ 勿論ヒビノもだ」
黒剣を右手に傲然と宣言したヒルダ。ヴァロア一行はもとより、直時にとっては既定事項である。

「了解です。だいたいヒルダさんとフィアから逃げ切れるとは思えませんからね」

一応、芝居を続ける。

祖国の被るであろう災いは別として、サミュエルにとって悪い話ではなかった。直時相手には強がったものの、交渉としての対価がほぼ無意味。任務続行にあたってはまず彼が欲するものを見極めなければならぬ。本人には断られていた同行を強制されたことは僥倖と言えた。

色仕掛けと看破され失敗したが、エリアをけしかけるのを憚るつもりもない。所詮男と女。どのような情を持つか判らない。可能性がある限り試みるつもりである。

(白烏竜達のことを優先したのは判るんだけど…)

(なんだ？ 何か異存があるのか？)

直時に不満を感じたヒルダが問い質す。

(行動の自由度が下がらないですか？)

(内輪の話は念話じゃないと駄目ね。タッチの訓練もお預けかしら？)

(訓練は続行だ)

(いやいや！ 一応今日合流したってことなんで、それはあまりにも不自然では？ 自主訓練は欠かさずやりますから、少し様子見しましょうよ)

(却下だ。折角おもし…：身につきはじめたところだ。ここで止めては意味が無い)

(ヒルダ…。タッチを追い掛け回すの楽しんでない？)

フィアのジト目にあさつての方向を向くヒルダ。手加減しているとはいえ、竜人族以外でここまで耐えた上に、上達速度が早い直時は初めてだった。

(本音はさて置いて、建前としては精霊術の戦闘法を身につける基礎訓練だ。疎かには出来ん)

(建前なんですかつ！)

(基礎訓練と精霊術は良いとして、魔法陣の改造は厳禁ね)

(スルーかよ…)

直時は自分が関与できないまま予定が組まれていくのを諦めとも受け入れざるを得なかった。

「こちらの内緒話は終わった。そちらはどうだ？」

イリキアまでの行動の大枠が決まったことで、ヴァロア一向に声をかけるヒルダ。サミュエル達も念話で打ち合わせをしていたようだが、今のところヒルダに従うしかないと結論を出したのだった。

「問題ありません。これからどうされますか？」

サミュエルが代表して答えた。

「イリキアに向かう。各方面に白鳥竜のことを知らせるのは着いてからだな。覚悟しておけよ。逃げた場合は敵対行動と見做す。それはヒビノも同じだ。即座に攻撃するからな」

ヒルダの言葉にサミュエルと直時が首肯する。

「ヒビノは念話の取りまとめもお願いね。こつちとヴァロア側の繋ぎを宜しく」

フィアに頷く直時。フィア、ヒルダ、直時のグループ念話。ヴァロア一行を加えた全体のグループ念話。指揮官であるサミュエルとの個人念話である。無論、ヴァロア側は独自に念話を設定しているはずだ。

「ヒビノの予定飛行空路は央海北側航路沿いよね？ 皆も判ってるわね？」

ヴァロア組に対し、あくまでも直時を追尾していたという姿勢をとる。

「じゃあ、ヴァロア組は先行して巡航速度で飛行。そっちの速度に合わせて追いつく。その後は自分が先頭につくよ。フィアとヒルダさんは……」

「私達は後ろから行く」

万一のヴァロア組逃走に備えてである。

その日、央海の商船航路上空に3人の人族と3騎の空中騎兵の編隊が目撃された。自転車に跨った直時。精霊術で飛ぶフィア。龍翼を広げたヒルダ。それと白烏竜の騎獣3騎。それぞれが各国の船乗り達の目を大いに惹いたのだった。

央海に点在する無人島の一つを野营地として着地した一行は、早速夕飯の支度へと入る。初見でも完成品ならば問題も少ないだろうと、改造人魔術で竈と土鍋を生成した直時は、ヴァロア組に火の用意を頼んで漁に出る。

サミュエルは直時の人魔術に、冒険者ならではの魔術だと感心しつつ、行軍中の輜重隊でも重宝するからと魔法陣の転写を交渉してきた。ヴァロア軍を利用する気はない直時は無論断ったが、結構食い下がっていた。

ヒルダは白烏竜と竜族の話を試み、フィアはヴァロア組の監視をしつつも気軽に話しかける。敵同士ではあったが、それなりの団欒を見せる一行であった。

「私達に痛い目に合ったのに、よく同行する気になったわね」

夕餉を囲みながらフィアがサミュエルに言う。リスタル戦の当事者同士だ。無理もない。

「断ったら殺す気満々だったでしょう？ まあ、私自身あの作戦には思うところもありましたし、タダトキ殿の力を目の当たりにしたからこそと言いましょ。リスタルを守るといふ目的を貫いた行動に、旗は違えども感服しましたからね」

住民避難の最優先。追撃を不可能にした空中騎兵殲滅。命令系統

への奇襲。リスタルの街を荒らさせることなく発動させた闇の精霊術。

戦いの効率を求めて補術兵として活躍、昇進し、魔力の効率使用から戦力の効率使用へと至り、参謀へ昇進したサミュエル。敵であったが、それ故に精霊術師としてだけでなく直時のことを評価していた。最後の攻撃についてはサミュエルの誤解であったが…。

「仇とは思わなかったのか？」
盃を片手に問うたのはヒルダである。

「…そうですね。負けたことは純粹に悔しかったです。対応策を蹴散らされたこともね。でも、戦ですからね。勝つこともあれば負けることもある。遺恨を言えばヴァロアの軍行動の方が…ね。勝敗より兵にとつては生き残れるかどうかですよ。生き残って、任務ですらが会ってみて思ったのは面白い人物であると…。一兵卒みたいな考え無しのように、一方ではしたたかさも持っている。なかなか興味深い人ですよ」

フィアとヒルダに無理矢理付き合わされた酒宴に、酒に弱い性質なのかふらふらと上体を揺らしながら答えたサミュエル。

ヒルダの問いにはフィアと自分のことも入っているのだが、普人族にとつて生ける伝説、災害のように思われているようだ。主に直時について語っている。酔いのせいか、そこには直時との交渉時に見せた鋭さが欠けて見えた。

一方、話題の人物である直時は皆が腹を満たしたのを確認したあと創作料理に試行錯誤していた。限られた調味料と材料を駆使し、なんとか地球での料理を再現しようとしている。

竈の土鍋には焼いた魚の骨と昆布（だと直時が決めつけた海藻の干物）にお酒、少量の塩を加え、煮出した出汁となっている。

直時がかき混ぜているのは、ボール代わりの土鍋に小麦粉と出汁あかわにうみがめ赤鰐海亀の卵、香辛料である。まな板がわりの石板の上にはぶつ切りにされた大蛸の足が用意され、竈の一つにピンポン玉を半分に割ったくらいの半球の穴がいくつも空いた石板が熱せられていた。

「脂身取れた？」

「このくらいで宜しいですか？」

「おー。充分だ。これを熱した石板に塗って…」

エリアとオデットを助手に何やら作っている。ヴァロア王国に不快感はあるも、独裁国の権力外（貴族の末端であるエリアは権力外とは言えないかもしれないが）の者を責めても仕方ない。個人として接し、様子を見ることにした直時だった。

ファイ達に近寄り難い騎兵達も、直時の呑気な雰囲気に興味深げに調理の様子を近付いて見ている。

かき混ぜていた液体を型に流し込み、大蛸のぶつ切りをひとつずつ落としていく直時。次いで石板から溢れればかりに残った液を足す。穴以外の場所が熱で固まりかけると串で縦横に断ち、四辺を素早く穴に織り込むように畳んでいく。両手に持った串はまるで別の生き物のように次々と穴をほじくり返し、球体の焼き物が出来上がっていった。

たこ焼きの再現である。

初めて見る料理と調理法に目を見張るオデット。

「出汁の方はこんなもんだろ。醤油が無いけど仕方ない。あ、エリアちゃん、器とって。オデットちゃんは岩海苔をひとつまみずつ器に入れてね」

鉢に出汁を注ぎ、たこ焼きもどきを入れる。

「うし。完成！ 本当は焼いたのにソース懸けた方が好みなんだけ

どね。出汁たこ焼きも美味しいよ。あ、ちょっと置いてふやかした方が美味しい！ これホント！」

食べ方は人それぞれであるが、自分の好みを押し付ける直時。皆初めての料理なので何を言っても大丈夫である。

出汁を吸って柔らかく膨らんだたこ焼き。岩海苔からは磯の香り。熱々ふわふわのそれを出汁と一緒に口に入れる。中身はコリツとした蛸の身。ハフハフ言いながら異国の食文化を楽しむ一行だった。

「薄味ながら深い味わい……。焼き上げた際の油がスープと混ぜつつ……。侮れません。あっさりしたスープは他の料理にも応用できそうです」

侍女として料理もこなすオデットが舌鼓を打ちながらも調理の手順を反芻する。はんすう

他の面々にも概ね好評であった。コーカソイド系な普人族が蛸をデビルフィッシュ扱いせず、普通に食していたのが直時には意外であったが、地球とは生態系そのものが違うため当然のことだった。蛸などよりグロテスクで凶悪な相貌の生物は山程いる。

その様子を言葉を解する白烏竜達が物欲しそうに見ていた。直時が彼等の分も作り増ししたのは言うまでもない（出汁は冷ました）。

「お前の戦い方はなつとらん！ よって私が鍛えてやるーっ！」

多少棒読み感のある台詞でヴァロア組にアピールしつつ、恒例の訓練に入るヒルダ。

「『黒剣の竜姫』様！ 何卒ご容赦を！」

悪乗りした直時が平伏するが逆にヒルダの怒りを買ってしまい、

拳骨を落とされた。

頭を撫でながら上着を脱ぎ上半身のみ裸になる。下は一番安い替えのズボンで、破れても惜しくは無い。

(流石に若い女性がいるからなあ)

エリアとオデットに配慮したようだ。

直時は距離をとってヒルダに対峙する。槍を両手に左脚を前にやや半身立ち。右手は穂先側を顔へ引き付け、左手は石突き側を少し突き出すように腰の前、斜めに構えた受けの型である。

ヒルダは愛用の黒剣を右手にだらりと下げている。

「では始めよう」

「お手柔らかにお願いします」

直時は既に構えに入っているため、軽く頭を下げるにとどめた。

(じゃあいつものように島の外周走りながらいきますか?)

(いや、フィアだけに監視を任せるのも悪い。この見える範囲でやる。)

念話で確認する直時とヒルダ。今夜はこの砂浜だけが訓練場となる。

「ゆくぞー!」

間合いを一足飛びに縮めたヒルダが右下から斬り上げる。直時は上体だけで右へフェイント。半歩後退。きれいに躲す。

(剣が止まれば突きが来る。掌を返せば斬りおろし…)

攻撃を読もうとするが、空振りしたヒルダは流れる上体を加速、1回転させた。踏み込んでの横薙ぎ。直時は更に後退しながら石突き側を跳ね上げる。黒剣の軌道を逸らせ、回避に成功。踏み込んだ

姿勢のヒルダから間合いを取って走る。

(基礎体力作りが目的だしな)

背中の皮膚がヒルダの剣先を感じるまで走るのをやめない直時。肌がチリつとした瞬間半回転、攻撃を避ける。流す。そして逃げる。

青白い月の光が照らす砂浜で舞う剣と槍。白い髪と黒い髪。フィアにはもう見慣れた光景だったが、ヴァロア一行は魅入られたように凝視していた。

「今日のところはこれくらいにしておこう」

ヒルダは、黒剣を受け切れずに飛ばされた直時にゆっくりと歩み寄り終了を宣言した。仰向けに転がったまま、息も絶え絶えで礼を言う男に駆け寄り影が二つある。エリアとオデットである。

補術兵として修めた人魔術の中には『治癒術』もあり、サミュエルから指示がなされたのだった。

(命令でなくともやりましたけどね)

(エリア様、好感度を上げる好機です！)

呟いた念話にオデットが発破をかける。

「酷い傷…」

「うわあ」

エリアが絶句し、オデットが声を上げるのも無理は無い。全身が切り傷擦り傷打撲傷だらけで、おまけに傷口が汗と砂に塗まみれていた。最後の攻撃以外をを躲し切っていたわけではなく、何度もその身に刃を受けていたのだ。

「今、治癒術を…」

「あーっと。お構い無く。自前で出来るから。精霊さん達お願い」

見る見る内に傷が塞がり、瘡蓋かさぶたと砂が落ちて痣一つない肌が現れる。人魔術による治癒ではここまで劇的な効果は無く、時間と代償が求められる。もっと大きな傷や、特に四肢の欠損であれば触媒として同じ種族の血肉が必要な場合もあるのだ。

精霊術による治癒では、術者の魔力を大量に消費するも、魔力と精霊の働きだけで短時間による治癒を可能にする。それを目の当たりにした二人は驚きに目を瞠みはるしかなかった。

「先程の戦闘に精霊術を使わなかったのは何故ですか？」

「基礎訓練だからね」

「そんなこと仰ってましたっけ？」

「秘密の念話はエリアちゃん達もしてるでしょ？」

軽く肩を竦めたエリアとそっぽを向いたオデット。

「ヒビノー、もうタッチイで良いか。治癒が終わったなら『露天風呂』を用意してくれ。汗を流したい」

「ヒルダさんはタダトキって発音出来るくせに……」

黒剣を納めたヒルダの要請にブツブツ言いながら直時が腰を上げた。貴族であるエリアは『風呂』に入ることもあつたが、こんな場所？ と、首を傾げている。

（『露天風呂』出しても大丈夫かな？）

（完成した魔法陣なら問題ないわ。知り合いだったのは前からだし、この魔術を知ってても不自然に思われないわよ。新しく編み出したと思われた方が危険ね。タッチイの祖国で開発された人魔術とでもしておきなさい）

野営地付近に場所を定め、直時が魔法陣を編んだ。

「土は石に 石は岩に 『岩盾・方舟』ならびに『岩盾』」

2メートル四方の岩風呂が合計4つ、砂の中から生えるように出現し、2つづつを隔てるように岩の壁が並んで聳え立った。

あんぐりと大きく口を開けるヴァロア組に構わず、次の魔法陣を編む直時。

「温かな水の恩恵 『出湯』」

それぞれの浴槽へと4つの魔法陣から注がれるお湯。夜の浜辺に湯気が立ち昇る。

「じゃあそっちが女性陣でこっちが男連中ということだ」

「ありがとう。堪能させてもらっわ」

「覗いたら命が無いと思えよ？」

呆然としたままのエリアとオデットを壁の向こうへと引っ張っていくファイアとヒルダ。

直時が湯に浸かった頃、漸く我に返ったヴァロアの男衆が騒ぎながら服を脱ぎだした。思いも寄らず、上流階級の習慣を経験出来るとあって楽しそうである。

「御一緒させて下さい」

「向こうに入れよ」

「人数的に不公平です」

渋々承諾した直時の入る浴槽に、見よう見真似でかかり湯をしたサミュエルが入ってきた。隣の岩風呂には騎兵3人が仲良く浸かっている。

「珍しい人魔術ですが、なんとという魔力の無駄遣い」

「うちの国じゃあ一日一回入浴するのが普通だからね。風呂は心の洗濯だぞ？ 戦争なんかよりこっちの方が余程魔力の有効活用にな

る」

「確かに心地良いですが……はあ……」

ほっこりしながらも納得いかなそうである。

（一体何者なんだ？ 彼の祖国とはどんな国なんだ？）

消費されたであろう魔力量に、飲まされた酒のせいではなく頭が痛くなるサミュエルだった。

翌朝。直時の自主訓練後、皆で朝食を摂り、本日の予定を話し合う。

「今日でやつとイリキア到着よ。日没前には西部の街『イワニナ』に着けるはず」

飛行経路には他にも小さな町はあるが、冒険者ギルドの支部があるかないか判らない。確実に期すために、フィアでも耳にしたことのある街まで飛ぶことになった。

「私たちの扱いはどうなります？」

サミュエルがフィアとヒルダに訊ねる。エリアとオデットは平気な顔をしているが、騎兵の3人は不安が隠せない。

「ブラン、ブランドウ、ブランドロワの3頭は保護する。お前たちヴァロア人は監視下に置く。まあ捕虜のようなものだと思え」

白烏竜の3頭はいずれ解放するにしても本人達を納得させなくてはならない。ギルドの手を借りる事も必要だろう。ヒルダに彼等を逃す気は無かった。

「とりあえずはギルドに報告してからね。方針が決まるまで身分は

隠すこと。私服で行動、軍服は駄目。入国は『幻景』で躲します」

「夜間に侵入したほうが良くないか？」

ある程度目眩ましをかけるとはいえ、密入国である。直時が懸念する。

「これ見よがしの越境や、あからさまに他国の者ですって顔しなれば問題ないわ。国境線なんて普人族が勝手に決めているだけで、他の種族には関係ないもの」

そう言えば直時も関所を通った覚えがない。街に入る時に徴税されるが、旅券だの身分証だのの提示は求められなかった。

「でもさすがに街中に入ったら新顔の普人族は注目されるわ。白鳥竜達と騎兵のアラン、ジョエル、ポールは街の外で待機。タッチイは彼等の監視。サミュエル、エリア、オデットは私とヒルダと一緒に冒険者ギルドまで来てもらおう」

ギルドでは色々と言わせるつもりでフィアである。

「街はまたお預けかあ」

直時がつまらなさそうに呟いた。

補助魔術を掛け終えた一行は一路東へと飛翔する。白鳥竜達は、様々な疑問を覚えながらもヴァロア人達を乗せて後に続いた。

一行は、幻景によって目立たなくなった姿をさらに高空へと押し上げ、その日誰のめに留まることもないまま、『イリキア王国』へと到着した。

追う者達？（後書き）

騎兵達の名前が最後に登場。

テキトウ感が強過ぎる…。

追う者達？（前書き）

投稿エラーorz

次の日になってしまった…。

追う者達？

『イリキア王国』。勃興の激しい普人族国家の中では、古い歴史を持つ国である。国の形は大雑把に言うとも三日月のようだ。南と東に半島が突出している。央海側に面した南半島と東側に突きだした半島の間、三日月の欠けた部分にあたるのは翠玉海すいぎょくかいと呼ばれる比較的浅い海で、数千とも言われる群島が浮かぶ。大きな島には街が築かれていたが、その殆どに普人族は暮らしていない。

イリキア王国の大陸に接する西部から北部は中央山脈とは独立した山岳系で、高さは勝るとも劣らない急峻きゅうしゅんなものである。その山岳地帯が陸からの侵略を難しくし、長い独立を保った一因となっていた。陸路が移動困難なため、海運が発達。翠玉海用の喫水の浅い船、央海用の大型船等、大小多くの船を有している。

翠玉海を挟んだ更に東に『リツタイト帝国』があり長い間戦に明け暮れていたが、お互いの領土を奪う程の戦力を運ぶことが出来なままであった。海戦が主になるが、一方が勝利を収めても次に占領するための兵を運ぶ船がその海戦によって消耗してしまうため決定的な勝利を手にすることが出来ずにいたのだった。

直時達一行が目指したイリキア西部の街『イワニナ』は、数少ない陸路が交わる山岳の合間に築かれ、街道を行き交う人々や、山岳部で活動する冒険者の拠点となっていた。

イワニナの街からは死角になる山の中腹、少し開けた岩棚に直時

達一行の姿があった。

「何にも無い所だな…。ここで待たなくちゃいかんの？」

白鳥竜達が体を横たえると、狭い空間しか残らない。

「尾根筋に近づくと発見されるかもしれないし、これだけ高地だと高木の森も少ないし、街からだとの辺りが最適だと思うわ」

「ギルド次第だが、なるべく早く話をまとめてくるつもりだ。遅くなるかもしれないが、その時は念話で連絡する」

フィアとヒルダにそう言われれば仕方ない。直時は不満を引つ込めた。

「ここからは白鳥竜達には乗れないから、私の風で運ぶわ。タッチイ、3人に『浮遊』掛けて」

重さを無くせばフィアの風で容易に運ぶ事ができる。長時間複数のモノを制御するのは辛いけど、街はすぐそこだ。頷いた直時は、サミュエル、エリア、オデットに向かって魔法陣を展開する。

「何を言っても今更ですが、一日飛翔したすぐ後で『浮遊』の3連掛けですか…。全く非常識な魔力量ですね」

身が軽くなるのを感じながらサミュエルが苦笑交じりに言う。

「ところで私はとにかくエリア様とダブル軍曹は残しても構わないのでは？ 出来るだけ少ない方が動きやすいでしょう？」

思いついたようにヒルダに提案する。サミュエルとしてはエリアに少しでも直時と関係が持てれば良いし、対話による情報収集もお願いしたい。その旨は既にヴァロア組だけの念話で伝えてあった。

「私達は残っても結構ですよ。二人とも軍で野宿には慣れております」

「嫌だ。狭い。女性陣はできれば街で宿取ったら？ 強行軍の連続だっただろ。ゆっくりしてきな」

エリアの言葉に即座に反対する直時。本音はついつい気を使ってしまう女性陣と油断ならないサミュエルがいない方が気楽だからである。

「それに俺を誘惑するつもりなら、ゆっくり休養をとって肌を調えた方が良いんじゃないかなあ？」

猫耳大好きと大声でのたまったくせにからかっている。

エリアの女心こころに火を点けてしまった発言だったが、オデットが念話で窘めた結果、引き下がったようだ。

「タダトキ様。エリア様のご帰還をお楽しみになさいませ。ペルテイ工特務大尉殿。軍資金の御用意をお願いします」

どうやらオデットの侍女魂にも火が点いたようで、直時に挑戦的な瞳を向けていた。

「サミュエル君、女性陣のエスコート宜しく。頑張れ！」

エリアとオデットに怯んだ直時は、サミュエルへと面倒をおっかぶせ、いつてらっしゃいと手を振る。

ヒルダを先頭に3人を風で運ぶフィア。岩棚からみるみる遠ざかり山陰の向こうへと消えていった。

「さーて。俺達はここでゆっくりとしよう」

騎兵のアラン、ジョエル、ポールに白烏竜達から鞍等くらを外すよう促し、直時は『岩盾・方舟』を発動。『出水いでみず』で飲料用の水槽を作る。旅の渴きを癒す白烏竜。

夕食は直時が今朝作った魚の干物である（風の精霊術で真空の球

を作り、魚を放り込んで水分を蒸発させた。塩をふって生乾きに加工されたそれらは新巻鮭のようであった。持ち運びにはもちろん『浮遊』で軽くして、尚且つ『落霜』おちしもで低温保存してある。

「やっぱり焼いた方が良いよな？　しかし塩分が……。ブランドウ！」

人族用には焼けばいいが、白烏竜の好みが判らず近くにいたブランドウを呼んで意見を聞く。生でいいが塩抜きはして欲しいのとこので、白烏竜達の分は水を入れ替えた岩風呂にしばらく浸しておくことにした。

山々の峰に陽が落ち、周囲を染めていた最後の茜色が消える頃、直時達居残り組は夕食を終え、思い思いの格好でくつろいでいた。その時、一行を照らし始めていた月明かりが翳かげる。

「風が湿っぱいな」

直時の呟きと共にポツポツと降りだした雨は瞬く間に強くなった。

「あー。ちよつと待って。すぐに屋根作るから！」

慌てて荷から防水用の皮布をとりだそうとする騎兵達に告げ、山肌まに歩み寄る直時。

「土は石に　石は岩に　『岩盾』がんじゆん」

いくつもの魔法陣が描かれ、岩棚を覆い隠すように五角形の岩壁が連なつて生えていく。リスタル撤退時、住民を空中騎兵の攻撃から守った岩のドームである。密閉はせず、雨が吹き込まないように大きくはり出した岩のドームに遮られ、雨音は遠いものとなった。軒から滴る水が雨の激しさを物語っているだけだ。

「ちよつと乾かすぞ」

人魔術の『送風』では全員をカバーできないため、風の精霊術で皆を濡らした雫を吹き飛ばす。身を振って水滴を弾こうとしていた白鳥竜達はすっかり乾いた体表にキョトンとしていた。

「雨避けのためだけにこんな大きな魔術を使うなんて…」

2番騎ブランドウの騎手であるジョエルが絶句する。アランとポールも同じ感想のようだ。

「ん？ 便利に使えるなら使ったほうが良いだろ？ これで雨風はしのげるけど、ちょっと寒いな。奥に竈作って火を焚いておこよう」

ジョエル達が気にしたのは普人族なら干からびる程の魔力を惜しげもなく使ったことである。それをさして気にもせず、直時は改造した石化魔術で石の竈を作り煮炊き用で持続する火系人魔術『加熱』の魔法陣を編んだ。暖まってくるドーム内。

あらためて畏怖の念を抱く騎兵達の空気をほぐすため、直時はお伽話や伝説、架空の英雄譚を語りだす。白鳥竜達も興味を抱いたように、お話は竜を主軸に据えたものとなった。

人智を超えた存在として、時には神、時には敵、時には友としてふるまう竜の話。

(あれ？ なんか反応が偏ってるな…)

語り部である直時がそれぞれの反応に気付く。

騎兵達が興味を示したのは竜を勇者が討伐する西洋のお伽話である。人が主人公であるのは同じのだが、人に叡智を与え、神として崇められるような東洋の竜の話には難しい顔をしていた。

逆に白鳥竜達は荒れ狂う大河を鎮めるために竜神に身を捧げた娘の話や、竜と人との間に生まれ、悲嘆に暮れる村人を哀れんで身を削ったようなお伽話に聞き入っていたようだ。

話が一段落したところでドームの外を稲光が走り、数瞬後轟音が山々に反響する。雨足が強まったようだ。

「荒れてきたな…。そういや今夜あたり満月じゃなかった？」

「そうですね。晴れていれば明るい月夜だったでしょうね」

直時の問いにポールが答えた。

「雲の上はまんまるお月様かぁ。怖いねーさん達も黒いサミュエル君もいないことだし、月見酒と洒落込みたかつたねえ」

先程からちびちびと飲んでる盃を掲げてみせる。

「タダトキ殿。雲の上は晴れなのですか？」

「雨は雲から降ってくるんだから当然だろ？ え？ 空中騎兵なのに雲の上まで行ったことないの？」

高層雲とかはともかく、低高度の雨雲など珍しくはないはずなのにと思いう直時。

「下を見ながら飛びますし、そもそも雨が強いと飛びません。軍でも雲に入るとは危険だと禁止されています」

直時の疑問にアランが答える。

（確かに地形を見ながら飛ぶなら低高度か…。騎獣も雨には弱いのかな？ 雲の中の乱気流も問題か…。でも、折角空を飛べるのに勿体無い！）

少し考えた直時は3人と3頭に提案する。

「じゃあ、これから行って見ない？」

騎兵達に対してというよりむしろ白鳥竜達に雲上の世界を見て欲しいと思った。

上官であるサミュエルの許可を得られないことを気にする騎兵達に、『君達捕虜だから。拒否権ねーから』とジユネーヴ条約なんのそのと無理矢理連れ出した直時は、豪雨の中を精霊の風の傘で保護しつつ、一行を雲の上へと導いた。

雲を突き抜けた一行が見た景色は、雲海を皓々(こうこう)と照らす月とは思えないほどの眩い光。ところどころ見える島は山脈の頂。そして、月光にも負けずに輝く星々の煌きだった。

(……キレイ)

皆はブランドウが溜息と共に漏らした念話に同意する。

(どうだ？ この空を自由に飛んでみないか？)

白鳥竜達を含めた念話を新たに設定した直時がブラン、ブランドウ、ブランドロワに伝える。

(自由？)

(好きなように飛んでみるってことだよ。こんな風に！)

両手を翼のように広げた直時は、加速して急上昇、宙に円を描いて飛ぶ。一転して急降下。雲海ストレスで雲を波立たせて弧を描く。再度急上昇して反転。インメルマントーン。戸惑いながら旋回する3騎へと近寄る。

(どうだ？)

笑顔での問いかけにも白鳥竜達からは尚も迷いの念が帰ってくる。背中の騎兵達に気付いた直時は、ニンマリと笑って風の精霊に働きかけた。

(じゃあ、これならどうだ！)

アラン、ジヨエル、ポールは安全帯を引き千切られ、虚空へと投

げ出された。悲鳴を上げる3人を風で受け止め自らの近くへと滞空させる直時。

（もう騎手はいないぞ？ 君達は自分の翼で飛べるはず。この大空でその翼は何を描く？）

初めての単独飛行におろおろしていた白鳥竜だったが、ブランドウが最初に動いた。飛び方は先程の直時を真似ただけであったが、ブランナン、ブランドロワも後に続く。

やがて喜びの波動が念話として伝わり、白鳥竜の兄弟達が上空で戯れ始めた。満足気な直時は青い顔の騎兵達に話しかける。

「君等も飛ばせるんじゃない、飛ぶ感覚を体験させてやるよ」

そう言つて、優雅に宙を舞う白い翼達の元へと3人と共に風を巻いて疾駆しはじめた。

やがて、野営地である岩棚に帰還した一行。3頭の白鳥竜達は興奮を隠せず、兄弟で念話をしているようである。それを微笑ましげに見る直時は、頬を掻きながら岩棚の縁に蹲る3人の騎兵達へと近寄った。

「……うオエーッ！」「」

……吐いていた。

「ゴメン。調子に乗りすぎた……」
心底謝る直時。

飛ばすことと飛ぶことは全く違つたが、飛ばされることはもっと

違ったようであった。

時は少し遡る。

『イワニナ』の街の手前に着地したフィアとヒルダ、連行された形のサミュエル、エリア、オデットは徒歩で街へと入った。

街の周囲には幅が10メートルを超える堀が巡らせてあり、山脈から流れる雪解け水が満々と湛えられている。堀幅と同じ高さの石壁と、そこに建つ楼閣の上には大型の弩いしゆみがいくつも据えられ、守備兵が警戒にあたっていた。

他国の軍事侵攻は山脈越えのため経験したことはないが、稀少な鉱物や魔獣が産出、捕獲されるため、野盗の襲撃は多い。また、飛翔魔獣による被害も多いことから、対空用の弩や投擲機が多数備えられ空中騎兵まで常駐していた。

フィア達の姿は、空を見張ることが多い監視所に早くから発見され、正門前の守衛詰所へ連絡されていた。竜人族であるヒルダと妖精族のエルフであるフィアがいたことから普人族ばかりの野盗と間違われることもなく、税を払って無事正門をくぐる事が出来た。

イワニナの冒険者ギルドは思った以上に活気に満ちていた。稀少品を求める高額な報酬は腕に覚えのある冒険者達と、一攫千金を狙う有象無象を呼び寄せ、品の運搬にも多くの依頼が出されている。フィアやヒルダ等、飛翔可能な冒険者は運搬の依頼を持ち掛けられることも多く、訪れた事はなかったが、イワニナの街の名は耳にしていたのだ。

受付に要件を伝えると別室へ通される一行。不意に現れたSラン

ク2名に緊張したイワニナ支部局長が現れた。

ヴァロア王国に生まれた時から囚われ使われていた白烏竜3頭を保護したこと。故郷も同族のことも知らないその3頭の更正教育が出来る人材への依頼の仲介。高位魔獣や神獣の仔拐取への注意喚起。それに今回判明したヴァロア王国の関与の発表が、ファイア達の要求だった。

「ヴァロア王国の絡むお話とは…。ずいぶんと遠国の方がイリキアまで何用ですか？ 不干渉に抵触する気はありません。個人的に聞きたいものですな」

薄くなつた頭髪を撫でながら、サミュエル達へ向ける視線は鋭かった。

「当然のことながら国の任務です。よって内容までは御容赦願います」

微笑を浮かべた柔らかい口調で拒否を伝える。しかし、内心はかなり焦っていた。

(ギルドから発表があればカール帝国をはじめタダトキ殿追跡隊の注意は間違いなく引くだろう。同行している優位があるとしても、滞在が長くなれば追い付かれる。誘致合戦が激しくなると、下手をすればロッソでの二の舞になりかねない。有効な先手を打つためにも彼の心理分析を急がないと…)

最低でもエリアとオデットのどちらかは残しておくべきだったと後悔するサミュエル。

「お二人からの御依頼はすぐに手配致します。他の街のギルドにも通達しますか？ 勿論ギルドがその能力ありと認める冒険者に直接依頼します」

「イリキアと近隣国のギルドにも同様の依頼を出してくれ。引受人

が現ればすぐに白鳥竜を連れて出向く。それと、私の名で同じ範囲のギルドに竜人族への連絡を要請してくれ。ギルドの発表を待たずに竜人族内だけでも今回のことは知らせておきたい。それに、白鳥竜達の引受人が見つかるかもしれない」

「わかりました。白鳥竜の更正教育依頼はフィリスティア様とヒルデガルド様の連名で。竜人族への連絡要請はヒルデガルド様の名で。早速手配いたします。本日はイワニナにご宿泊ですか？」

少し考えた二人だが、直時の言葉に甘えて久し振りに宿屋に泊まることにして、その旨を伝える。

「では、明日の…そうですね。午後にお立ち寄りください。進展があればお伝えできると思います」

支部局長に領いたフィアとヒルダは他3名を引き連れて冒険者ギルドを後にした。

取り敢えず宿泊先を決めた一行は、女性陣の買い物へと街に繰り出した。サミュエルは当然の如く付き合わされる。わだかまりを欠片も見せず、嬌声を上げながら婦人服だ、装飾品だと騒いでいるエリアとオデットに念話で苦言を呈していた。

（ヒルデガルド様とフィリスティア様相手にどうこう言っても仕方ないのでは？ それよりもタダトキ殿を誘惑するならそれなりの準備が必要です）

（その通りですエリア様！ 私がそれとなくお二人からタダトキ様のお好みを聞き出しますわ！ 特務大尉殿はこの戦闘に投入する資金を供出！ くれぐれも出し惜しみしないようお願い致しますよ？）

両手に大量の荷物を持ったサミュエルはいつ終わるとも知れない消耗戦に付き合わされることとなった。

宿へと戻った女性陣は戦利品を抱えてそれぞれの部屋に入る。気合の入ったエリアとオデットに引き摺られ、消耗品だけ購入し、掘り出し物があれば武器防具、装身用魔具と考えていたファイアとヒルダも何着か新調することになった。

部屋割りはファイアとヒルダ。エリアとオデット。サミュエルは一人部屋の3室。夕食は宿の食堂でとる予定なのだが、女性陣は戦利品の確認のためなかなか現れない。先に食べ始めるわけにもいかないサミュエルは、カウンターで軽めの果実酒をちびちびと舐めながら時間を潰していた。

ややすると隣に座る独りの男性客。チラリと見た姿は中年の交易商人のようだった。埃で汚れた外套の下はそれなりに値が張りそうで、大きな荷を足元に下ろしている。注文を受けたカウンター向この店員が厨房へと顔を向けた瞬間、二つ折りされた掌大の羊皮紙がサミュエルに滑ってきた。

ヴァロア王国諜報部が使用する何処かの家紋に似せた符丁で封蝋がされている。即座に確認したサミュエルは、周囲に注意して男と念話の魔法陣を結んだ。

（トマスと言う。雇われ者だ。封書の中身は知らん。返事を受け取れとのことだ。深夜、早朝どちらが良い？）

（深夜、3刻半後。2階西側、北から2番目の窓から投げる。合図は念話で）

（判った。小さい方の荷はお前さん宛てだ。受取確認を返事に入れておいてくれ）

トマスと名乗った男は、大きな革箱に隠れていた革袋をサミュエルの方へ足で押し出す。盃に残った酒を飲み干したサミュエルは、密書と荷物を手に部屋へと戻った。

静かに扉を閉めたあと、急いで封書を確認する。

（マケデイウスは交易商人と諜報員の二手、シイスは冒険者に一任、カールの動きは不明か……。裏が取れた確定情報がこれでは、未確認を含めるとえらいことになるな）

続いて未確認だが、信頼度の高い情報が列挙してある。

（エスペルランス王国とブリック連合王国が軍商船を東に……。海軍国家が今更動いても遅いが、西の列強に情報が漏れたことが問題だな。エスペルランスにはうちの第二王女が嫁いだはずなのだが……。いや、むしろそこから辿られたかな？）

軍商船とは国营海賊と擲揄はげされる武装商船団である。軍事力を背景に不平等な通商条約を結び各地に植民市を増やしている。そのような国家が東に軍商船を派遣したとなれば、黙っていられない国も増えるだろう。

（マケデイウスは流石だな。商人共の繋がりも思いも寄らないところにあるから油断できない。晴嵐と黒剣が現れたことで足跡は悟られたか……。冒険者を雇ったシイスにもだな。カールの動きはわかんがこの2国に遅れを取るとは思えん。標的に接近できたはずが効果的な手が無い。もどかしいな……。しかも白烏竜が発覚してしまつた。この件は急ぎ本国に知らせねばならん）

思考に時間を割さきたいが、エリア達はともかくフィアとヒルダに不審を抱かせる真似は出来ない。次いで確認した手荷物には、返信用に複雑な模様を描いた羊皮紙と封蝟印が、追加の軍資金と共に入っていた。

荷物に確認用の封印（毛髪一本を触媒に、封が破られたかどうか判る）の人魔術をかけ、物理的な封印魔術を施さずに食堂へと戻るサミュエル。他の面々との食事前に報告書の内容を纏めようと彼の頭は回転を始めていた。

「タッチイはあんまり華美な装いには興味ないみたいよ？ でも女性の胸には拘ってる気がするわね。良く視線が向いてるもの」

「タダトキ様は胸がお好き、と。ふむふむ」

「他種族の耳と同様、尻尾にも思い入れがあるようだぞ？ 運動して尻から太腿も大事なのではないか？」

「そうですね！ お尻は重要です！」

オデットの情報収集は続く。あまりの熱の入れ用にエリアは軽く引いていた。

「それに食に対する努力も並々ならぬものが見受けられますね。エリア様は料理の腕はさっぱりですが、私が御一緒すれば問題ないですわね。拘ってらっしゃる食材とかはありますか？」

「海藻の干物には眼の色を変えてたわ。それとお酒かしらね？」

「味付けはどちらかといえば薄いな。風味は良い物が多いが…」

何故か意気投合したフィアとヒルダにオデットである。味方から情報が駄々漏れになっているのを多少気の毒に思うエリアとサミュエルだった。

女性陣の会話と食事が漸く終わり、部屋へと引き上げた面々。翌日の午前中は街の散策と、念話で連絡を取った直時からの購入依頼（安い短パンと美味しいお酒）。昼食後、ギルドで経過を聞いて、街の外で待つ直時達の元へ戻るということになった。

夕食時の会話は、エリアとオデットにとっては有意義な情報収集だったが、それだけで直時を落とせるとは到底思えないサミュエル。頭を悩ませながらも返信用紙に経過報告を記していく。

ヴァロアが提示した、金、色、権力が武器にならないこと。直時のそれぞれの対価に対する評価。垣間見た魔力量と精霊術、それに知らない異国で別の発展を遂げたであろう人魔術。晴嵐の魔女と黒剣の竜姫との親交。そして重要な案件である白烏竜の露見。冒険者ギルドでの会談内容とフィアとヒルダの要請内容。

できるかぎり簡略に限られた紙面を小さな文字で埋める。各個人の名前は勿論架空の人物名である。最後に触媒が無ければ浮かび上がらない特殊なインクを左手薬指に塗り、報告書の右下の端に押し付けた。それを丸めて平らに折ったあと、封蝋をする。

(トマス。いるか?)

(待機している)

(では宜しく頼む)

夜風に当たるふりをしながら窓を開け、袖口からそっと封書を落とすサミュエル。欠伸と伸びをしたあと窓を閉めると、下で待機していた人物がそれを拾い上げた。

(ブツは受け取った。渡そうか?)

トマスと名乗った男が念話を送ったのはサミュエルではなかった。

(頼む。偽造屋には話しをつけてある)

トマスと連絡を取っていた男が指示を出す。トマスの雇い主はもう一人いて、こちらの報酬はヴァロアの倍であり、本命と言えた。

密書の偽造技術の難易度は高い。各国の各機関が何処にどのような確認処置を施しているかを見破る目と、それを正確に再現する精緻な技術が必要とされる。トマスから密書を受け取った偽造屋は、稀少品の加工職人が多いイワニナで育てた力を別の方向に向けてし

まった闇職人だった。

「開封確認の魔術が掛かっているが封蝋ごと魔力を込めた毛髪を羊皮紙の表面から削ぎ落したから問題ない。さすがは西の大国。蝋の材料は完全に解明はできんから複製は無理だ。書面上にも色々複雑な仕掛けが施してある。時間をくれるならなんとかしてみせるが無理なのだろう？ 内容だけ書き写せば元通り復元してやる。悪いことは言わないからオリジナルを持っていけ」

偽造屋の判断を雇い主に念話で伝えるトマス。

（彼の助言通りにしよう。発覚するには早すぎる。本物を持ってヴアロア側に接触してくれ。それと内容だが　　うむ。了解した。符丁はある程度判っているから解読はこちらです。上手く取り入ってくれ。引き続き仕事を貰えたら報酬は5割増しにさせてもらう。うむ。頼む）

トマスと念話を終えた男は、今日イワニナで仕入れた商品の目録に目を落とした。

「さて、この商品はどれくらい値が付くのかな？」

不敵に笑う向かいには、マケディウス王国の商人が座り、鋭い眼光を愛想笑いに紛らせて懐中へと手を伸ばした。

追う者達？（後書き）

サミュエル君ぴーんち！

追う者達？（前書き）

悩んでたら筆が止まってしまいました。
兎に角書こう！

追う者達？

「ヴァロアの連中が接触し、判断したのがこれだ。金、女、権力に興味は薄い。正攻法では無理だということだ。貴族どころか王族の椅子まで蹴るとはな……。何が彼の欲を満たすのか。注目すべきは他種族の女には靡なびきそうだということくらいか。さて、どう攻めるか……」

商人の念話網を伝って届けられた情報を吟味する男。彼は傍らで酒壺を手に待機している女性に問いかけとも、独り事ともつかない言葉を漏らす。

「益を餌に出来ないのであれば、損を避けるためではどうでしょう？」

減った杯に注ぎ足しながら無表情で答える女性。

「人質か？ 悪手だな。相手の弱みに付け込むということは、こちらが隙を見せた時容赦なく攻められる。永遠に隙を見せないことなど不可能事だ。まして反撃を許した場合、彼の能力は尋常ではないぞ？ 更に晴嵐の魔女と黒剣の竜姫が傍にいる」

話にならんと杯をあおる男。損益を考えれば危険が大き過ぎる。

「人質と思わせなければ良いのでは？ 情に流されやすい人物と見受けられます」

「ふむ。イリキアに獣人族の娼館はいくつあったかな？」

「王都『テーネ』に2館、東都とくと『ティサロニキ』に1館です」

「そこで網を張るか」

「手配致します」

新たに盃を満たした女は酒壺をテーブルに置いて去る。

「味方にはならずとも敵にだけは回したくはないな……。だが王家の注文がある。はてさて、これは儲け話か破産への道か……」

男の苦々しい顔は『黒髪の精霊術師』に係わることで、転び様によつては利益も損害も大きいであろうことを予感していた。

イワニナで久し振りに屋根の下で眠ったフィア、ヒルダ、エリア、オデットの女性陣。街での買物と饗された食事に満足し、心地よい眠りに浸っていた。一方精神的な疲労を被ったサミュエルは、接触してきた連絡員との情報に頭を悩ませていた。本国にこれから起こること、任務達成の可能性、解任の恐れ等のため眠れぬ夜を過ごしていた。

その頃の直時はというと……。

「ブランドウ……、あつたかい……」

直時との飛行に付き合わされた騎兵達、アラン、ジョエル、ポールの3人が青い顔でうなされている中、高地の寒さもなんのその。白鳥竜の翼に抱かれ、あまつさえブランドウの長い首を抱きながらご満悦で微まどろ睡んでいた。

翌朝、雨上がりの街が賑わいだした頃、街見物へと繰り出した5人。水捌けの良い土地なのか、僅かに石畳が濡れているだけである。

サミュエルは平均的な旅人の服装で厚手のくすんだ白い布シャツ

の上になめし革の上衣、茶色のズボンに編み上げブーツ。防水防寒用マントをまとっていて面白くもなんともない。

フィアは藍色の膝下まであるワンピースで合わせ目、袖、裾には浅葱の縁取り。着物のように前合わせで、臍脂に淡いピンクの花模様を散らした幅広の布を腰に巻いて留め、背後でリボンのように蝶々結びにしている。いつものブーツではなく編み上げのサンダルだ。ヒルダは普段の革鎧（戦用の黒竜鱗鎧はめつたに装備しない）という色気のないスタイルから一転し、銀系で装飾が施されたビスチエ風の黒革鎧にローライズの厚手の布ズボンで脚甲付きブーツを履いている。鎧ということで無骨ではあるが上半身の露出度に注目度は高い。

エリアはオデットに押し着せられた結果、襟元や袖口に刺繍を施した真っ白のブラウス。胸元から大きく開いた襟は深い谷間から鎖骨までを余すところ無く魅せつけている。しかもウエストから胸下までをコルセットの様な明るい茶革の胴当てが締め付け、小柄な体型に似つかわしくない大きな胸を強調していた。彼女の髪と同じ薄い茶色の巻きスカートは足首までの丈があつたが、巻きが浅く合わせ目から白い脚が時には腿まで見え隠れしている。着付けをしたオデットは合わせ目が正面か左側面に來るかで悩んだようだったが、大胆にも正面に持つてきたようだ。歩みを進める度に膝頭から腿の半ばまでの素肌が見え隠れする。貴族の夜会服で胸元や肩口、背が露出することには慣れていたエリアも素足を晒すのには羞恥を覚えるようだ。俯きがちで、時折恨みがましい目をオデットに向けていた。

一行で一番注目を浴びていたのは実はオデットであつた。露出なご欠片もない服装にも拘わらずである。詰襟のブラウスに細い臍脂のタイ。上着は短い丈の黒と見紛う濃紺のスリーピースで、下は同色のズボン。足元は黒革のロングブーツである。一度着てみたかつたという若執事服らしいが、体に密着する型であるため豊かな胸元や腰回りが男装の麗人という倒錯的な魅力をまき散らしていた。胸

ポケットに純白のハンカチと白手袋も装備している完璧ぶりだ。

斯様な一行に従うサミュエルは、付き人以下、下男にしか見られていなかったようである。

自分達の買物物は済ませたため、直時の依頼品と食料の購入をメインにイワニナの街を歩く一行。

酒には一家言あるフィアとヒルダが試飲を繰り返した挙句にそれぞれ違う銘柄の蒸留酒を購入した。

直時の訓練用短パンには、安物をまとめ買いしようとしていたフィアであったが、何故かそれを阻止して熱心に見繕った挙句、ヴァロア持ちで精算したのはオデットだった。

昼食を終えた一行は約束していた冒険者ギルドへとその後の報告を聞きに立ち寄る。即座に別室に通され、ギルド支局長自らが対応にあたった。

「白烏竜の保護に関しては周辺国まで手を伸ばしましたが適任者が見つかりませんでした。申し訳ございません。あと、ヒルデガルド様には伝言を言付かっております。文面は通信係と私しか知りません。ご確認をお願いします」

薄くなつた髪を撫でながら、申し訳なさそうに言うギルド支局長。

「それで冒険者ギルドとしては恥の上塗りになってしまいましたが、白烏竜の保護依頼の件、ギルドが依頼者としてヒルデガルド様に保護要請を出すことになりました」

依頼の仲介を受けた側が、そのまま依頼主と同じ内容を頼むのである。本末転倒も良いところだ。

「本気か？」

ヒルダの機嫌が悪くなる。平謝りする支局長は、ギルド本部からの依頼であると強調する。冒険者ギルド創立に関わった神からの要請でもあるらしい。

冒険者ギルド。それは組織という群れから逸脱した存在を、能力に見合った報酬を渡すという救済的な理念で設立されたものである。それに指導力を振るったのは神々の列に連なる『エルメリア』という男神だ。

彼は普人族の始父であるが、娶った相手は未だに語られていない。ギルド設立について一説には個の力で劣る我が子の普人族が、数で多種族を虐げだしたがための贖罪であると言われている。そのため、神のひとりであるにも拘わらず、『あの神』という呼ばれ方をすることが多い。

「納得は出来んがついでの用事ができた。止むを得ない。引き受けよう」

苦々しげに言うヒルダの視線は、手元の伝言へと落ちていた。

「白烏竜はうちの実家に連れ帰る。他の竜族とも親交があるし、普人族から離れて生活することは良い糧になるだろう。竜族に手馴れた者もいるしな」

「え？ 実家まで帰るの？」

「面倒事があつてな…。つたく、婿入りしたいなら私をねじ伏せろとか父上が面倒なことを言い出すから…」

後半は呟きに過ぎなかったが、フィアは察したようだ。どうやら次期族長となるからには伴侶を決めねばならず、その資格がヒルダより強いことらしい。挑戦者があれば受けねばならないようだ。

白烏竜の更正教育依頼は取り消すことになり、ヒルダが実家へと連れ帰ることとなったが、ここで問題となったのはヴァロア組の身

の振り方である。

冒険者ギルドから何らかの拘束や支援（亡命などについて）があるかと思っていたが、相手が冒険者でないこともあり、国家問題に干渉との立場から放置されることになった。サミュエル達は胸を撫で下ろす。

一行は直時達が待つ岩棚に戻るべく、宿屋で荷をまとめる。新調した衣装を魅せつけたいところだが、ひらひらした格好は空を飛ぶのに適さない。

「私は問題ないぞ？」

そう言ったヒルダと必要のないサミュエル以外の面々は衣装へと着替えることになった。女性陣の準備が済むまで自室でひとり待機するサミュエルに念話が入る。

（ギルドへ行ったみたいだな。連絡があれば伝えよう。密書の余裕がなければ念報でとのことだ）

（助かる。白翼が黒剣を携えその郷へ アイリスの花弁は摘まれず 黒は風と共にあり 以上だ）

トマスと名乗る連絡員が復唱。サミュエルの首肯を得て念話を終えた。

白烏竜はヒルダの故郷へ保護、アイリスは国花で花弁はヴァロア国民、ギルドからも直時一行からも処罰無し、直時にはフィアが行。そのような意味であった。

旅装を調べた一行は街の正門外へ。街道脇で飛翔の準備に入る。来るときは直時任せであったが、宿で休息を取ったヴァロア組は自らへ『浮遊』を施術する。幸いにサミュエルとエリアは補術兵であり、オデットは現役であり問題なく自重を消すことが出来た。

行きと同じく、ヴァロア組はファイアの風で宙を運ばれる。近くの山岳を迂回して、直時達が待つ岩棚を目指したが、そこは出た時とは違う様相を呈していた。

「あんの馬鹿っ！ 目立つなって言ってるでしょうがっ！」

ファイアが怒るのも無理は無い。平凡だった山麓に大きな岩のドームと岩柱で支えられた平らな土台の積層物が張り出しているのだ。

（タッチイツ！ おとなしく待ってるって言ったでしょう！ なんぞ野営地を拡張改造してんのよっ！）

（えー。それにつきましては、昨晚の天候悪化が原因であり、雨を凌ぐための工夫が思わぬ副次効果を産みまして）

怒気を放つファイアの念話に直時がしどろもどろで言い訳を始める。

（詳しい話は着いてからにして。着陸には左下の階層を使用してね。右側は発進用だから）

直時の念話に眼下を確認するファイアとヒルダ。山麓から斜めに左右へと平らな岩盤が突き出しており、どちらも出発前には無かったものだ。

反射性の高い鉱物が埋め込んであるのか、右側に『飛ぶ』左側に『降りる』の文字が確認できた。

折りしも右側の岩板からは1騎の空中騎兵（赤羽根鷲：翼長5メートル翼の先端1メートル程が赤い）が舞い上がり、とつてかえした脚に岩板端で鎮座した荷を掴み取って飛び去っていった。

直時から指示された着陸用の左側岩板に舞い降りたファイア達は、様変わりしてしまった野営地を呆れ顔で眺める。

「おーい！ 着陸したら次のために場所空けて！ こっちこっち！ 奥に来てー」

岩棚を覆うドームはリスタルで直時が作った空襲を防いだものと
同じだろう。『岩盾』の五角形の岩が重なりあっている。着地した
岩板も同様の魔術を行使したのだろう。水平に作られているが、と
ころどころの小さな段差は五角形を為している。

上を見上げると5メートルの段差で斜めに交差した影が陽を遮っ
ていた。直時が『発進用』と言った別の岩板である。補強のためと
ころどころに『岩盾・塊』の八角柱が下の階層や山肌とを繋いでい
た。

ファイア達一行が直時の声に歩みを進めると、本人とヴァロア騎兵、
白鳥竜の他に数人の冒険者が話していた。岩壁で仕切られた既舎や
上層に向かう階段等を指差し、意見を交わしている。

「おかえりー」

羊皮紙に何やら書きつけていたが、近づく一行に振り返った直時。
話途中だった冒険者にヴァロア騎兵のアランが耳打ちすると、少し
下がって様子を窺う。『晴嵐の魔女』とか『黒剣の竜姫』とか聞こ
えたので遠慮したのだろう。

「この有様はなんなの？」

怒りは収まったのか、呆れと好奇心が混じった表情のファイアが問
いかける。

「昨晚大雨だっただろ？ それで屋根と居住空間を拡張したんだよ。
雨を凌いで寝てたら雨宿りさせてくれてって冒険者が何人か来てさ。
手狭になったんでさらに拡張して、ついでに使い易いように改造し
たんだよ」

「夜でもあり、飛翔獣の害が多いイワナでは、誤認されかねない
とのことから、一時避難所としての宿を借り、可能であるとのこと
で拡張のお願いをしました。皆、非常に感謝しております」

飛行帽に風除け眼鏡を頭上にずらした獣人族（耳の形から犬人族）の男が口を挟んだ。

「しかし、街に近いのにこんな大規模な空中騎兵の発着場は意味がないのではないか？」

ヒルダが疑問を口にする。

「いえ！ 大助かりです！ イワニナは輸送の依頼が多いのはご存知だと思いますが、飛翔生物による害も多く、暗くなつてからの接近には誤認攻撃等危険も多いのです。厩舎も数が足りず、街の外で野営せざるを得ないこともあります。幸いここからなら念話も届きますし、一時避難所としては理想的です」

「まあ、後はイワニナの領主か冒険者ギルドに分室でも作つて管理してもらえば使い勝手も良くなると思うんだよ。取り敢えずだけど、発着用の岩板と臨時厩舎と簡易宿泊部屋を『岩盾』で小分けして、貯水用に『岩盾・方舟』を何個か作つてある。今は俺が水を貯めておいたけど、後々雨水と浄化槽作れるように階段状に配置してある。奥は暗いけど『灯火』の術式は基本だろうから明かりは個人で対応してもらおう。そんなところかな？」

冒険者の答えと直時の補足説明を聞き、確かに有用だと頷く一行。

「しかしこれだけの工事を一晩で…。ドワーフでも数週間はかかるでしょうに…」

改めて感嘆を漏らすサミュエルは、政治利用などつまらないものでなく、実益において直時の利用に思いを馳せる。軍ならば補術兵大隊に勝る働きになるだろうが、施設部隊においても大活躍しそうだ。参謀として直接戦闘に投入するより、作戦の幅を広げ軍を最も効率的に動かせ得る可能性に、王家の思惑以上に今回の任務の重要性を再認識する。

「取り敢えず言い訳の正当性は認めましょう。た・だ！ 目立つな
ってあれほど言ったでしょうが！」

他の目があるからか、精霊術でなくゲンコツを貰った直時である。
涙目になりながら、一行を宿泊区画の比較的大きな部屋に案内する
のだった。

扉のない玄室のような部屋に入った一行。直時は闇の精霊に入り
口を封印してもらい、部屋の外に会話が漏れないよう万遍無く封を
施した。

「ほう。闇の精霊術も堂に入ってきたな」

「今朝の自主練は影にこもって闇の精霊と対話してましたからね。
闇の精霊術は教えてもらえる人がいないんで自己流でなんとかする
しかないですし」

風の精霊術で音の攪乱もできそうだが、常に制御しなければなら
ないので疲れそうだったということもあり、闇の精霊に一任できる
封呪で済ませた直時だった。

「遅くなりましたが、皆おかえりなさい。イワニナの街はどうだっ
たかな？ 何よりヒルダさん。その革鎧似あってますよ。ちょっと
露出が多くてドキドキしちゃいますね」

胸元と胴の上側だけしか覆っていない。ノースリーブでおへそも
丸出しである。ローライズの革ズボンはお尻ギリギリで竜尾がうね
っている。直時は目のやり場に困ってしまった。

「フフン」

満足気な鼻息を漏らしたヒルダに、フィアとエリア、オデットは
不満気である。

「で、どうになりましたか？ あ、ちょっと待って下さい。ブランド

ウ達、白烏竜も話に加わりたいそうです。今、念話来ました」

直時は白烏竜達とのグループ念話も独自に設定していたようである。会議内容を同時通訳するのも面倒臭いので、一行の全体念話に白烏竜達を追加して各人に発言と共に念話をするよう要請した。会話と同じ内容なら同時念話もさして苦にならない。

「一番の懸念だった白烏竜達は私の故郷で保護することになった」
ヒルダが経緯を説明する。白烏竜の今後と自分の都合。ギルドの対応等である。

「で、残る問題はヴァロアの面々だ。私としてはこのまま放免というのも腹が立つのだが、国の過ちはこれから償わされるだろうし、どうすべきだろう？」

ヒルダの鋭い視線に身を縮ませるヴァロア一行。

「ヒルダさんは帰省されるんですね。寂しくなるなあ。ヴァロアに対しては確かに業腹ですが、彼等は放って置くしかないですね。それより次の目的地を決めようよ」

最後はフィアに向けてである。ヒルダが帰郷し、旅の連れとしてはフィアだけになる。ヴァロア組は埒外であった。

「イリキアのことはあまり詳しくないのよね。王都『テーネ』はここから南東で、東都と呼ばれる第二の都市がここから東北東あたりだったかな？ って、私の知識は転写してあげたんだから判ってるはずじゃない！」

「いや、まあフィアの行きたい方へ行けば良いかなーって思ってたから」

判断を丸投げする気満々の直時だ。

「冗談はさて置き、王都は権力中枢だから面倒臭い。東都『ティサ

「ロニキ」は各国の国境とも近くて逃げるのに楽だからそつちかな？」

「逃げるの前提って…。ちょっとは自重しなさいよ？」

「善処します」

自分達を放置したまま進む話に焦ったのか、サミュエルが口を挟む。

「我々もテイサロニキまで連れて行って欲しいのですが、お願いできませんか？」

「はあ？ 行きたければ勝手にすれば良いじゃない。身ぐるみ剥ごうなんて思っていないからギルドで輸送依頼でもすれば？」

「ギルドに白烏竜の件を報告されたあとでは、私達軍人はともかくエリア嬢の身が心配です。身から出た錆とはいえ、軍人として民間人を危険に晒したくありません。テイサロニキまでいけば西への商船は多いでしょうから、帰国の安全性も高まります。なんとかお願いできませんでしょうか？」

サミュエルが深く頭を下げた。オデットも同様である。エリアは自分がダシに使われているのを自覚しているのだらう、罪悪感から視線を彷徨わせていた。

「白烏竜達の保護も決まったし、足が無いんじゃないだろうか？」

テイサロニキまで送るってことで良いんじゃない？ それで何もかもチャラにすればこっちも後腐れなくて気持ち良いじゃない」

直時の人が良すぎる発言に苦笑しながらもフィアが頷き、ヴァロア組は安堵の吐息を漏らす。丸く収まりそうな場に突然念話が響く。

（私はタダトキ様と御一緒したいです）

念話の主はブランドウだった。

内心の嬉しさを隠して直時は説得を試みる。追われる身で危険が多いこと。普人族の街で騎獣は基本的に厩舎に預けられ不自由する

こと。白鳥竜は希少種であり、狙われる恐れがあること等である。折角自由になれる好機である。同種とは竜人族のヒルダが問い合わせてくれるだろうし、家族も見つかるかもしれない。何よりブランドウ達には自分達の翼で自分の空を飛んで欲しい。その思いが直時に同行を拒ませていた。

「普人族と多民族の関わりを理解するには良いかもしれん」
「考え込んでいたヒルダが口を開く。」

「ブランドンとブランドロワは私と一緒に良いのか？」
（私達はヒルダ様に従います）

ブランドンが答える。兄弟間で話し合ったのだろう、落ち着いた様子だ。

「テイサロニキまでは遠い。ヴァロアの者達を運ぶにしても、フィアとタッチイだけでは大変だろう。連れて行ってやればお前たちも助かるのではないか？」

「確かに助かるけど、この子のその後が心配だわ」
フィアもブランドウの同行を渋る。

「時間は掛かるだろうが、私も用事が済み次第戻ってくる」
「えっ？」

「当然だろう。タッチイへの訓練は始まったばかりだ」
お別れだとはかり思っていた直時にニヤリと笑うヒルダ。

「いや、でも先の予定は何も無いし、どこへ向かうか判らないし」
「移動の予定は立ち寄った街の冒険者ギルドに伝言を頼めば良い。私宛てにな。ギルドの念話網なら何処へでも届く」
逃げ道は閉ざされたようであった。

出発は翌朝にすることにして、直時が築いた空中騎兵（厳密には冒険者は兵ではない）休憩所で夜を明かす事にした一行。個室を基本に間取りを取ったため、会議をした部屋以外は狭い。

二人ずつに別れてそれぞれ散っていく。フィアとヒルダ、エリアとオデット、サミュエルとジョエル、アランとポールである。直時は創設者としての特権で、一部屋を専有していた。

そこへ女性陣が騒ぎながら入ってきた。煙管で久し振りの一服とお土産の蒸留酒をゆっくりと楽しんでいた直時は何事かと入り口に目をやる。

フィアを先頭に、続くエリアはオデットに押し出され、一番後ろでヒルダが苦笑いしている。イワニナの街で買い求めた品で着飾った女性達であった。

突然の華やかさ、艶やかさに目を^{みは}瞞る直時。視線の先では、フィアが優雅に一回転し、エリアがスカートを軽く上げて挨拶しようとしてパツクリ開いた奥の素足を慌てて隠し、執事の仮装をしたオデットがうんうんと頷いていた。

「フィアは何処のお嬢様かと思ったよ。良く似合ってる。そのリボン？ 帯？ 可愛いね。しっかし相変わらず腰細いなあ」

普段からのギャップ故、直時はその清楚さに驚く。ぼおっとなりかけるが、悔しいので表には出さない。

「エリアちゃん…。小柄で凛々しくて可愛らしいエリアちゃんにこんなケシカラン格好をさせたのは誰だっ！」

色仕掛けの生贄として捧げられたように感じた直時が怒鳴った。小柄でありながら、発達した肢体を羞恥に染めて晒している。いくら何でも可哀想になったのだ。

「サミュエルかっ？ あの参謀かっ！ 今すぐ捕縛してやるっ！」

「私の見立てです」
怒りに我を忘れそうになる直時を制したのは執事服のオデットだ
った。

「なんですと？」

「エリア様の魅力、存分にご覧なさいませっ！」

両手をエリアへと広げ、勝利の笑みを浮かべ見おろしてくる。直
時より背が高いので当然だが、傲然としたその姿は執事というより
悪の組織の女幹部である。黒マントとステッキを装備させればさぞ
似合っただろう。

「ぐぬぬ…。確かにちっちゃくて凛々しくあろうと背伸びしている
かのような可愛いエリアちゃんがこんなにもケシカラ：ゲフンゲフ
ン なスタイルの持ち主でそれを遺憾なく発揮する衣装の攻撃力は
甚大な被害を俺の精神に」

女性3人から注がれる冷たい視線に漸く気が付く直時。オデット
だけは勝ち誇ってそっくり返っていた。

「折角オデットちゃんも褒めようと思ってたけど止めだ。止あーめ
ーたー！」

「お褒めに預かり光栄です」

「褒めてない！」

「有難うございます」

「……………」

右腕で胸元を押さえ、左手を背中に当てて完璧な礼をとるオデッ
ト。彼女の余裕の笑みに直時の脳裡には『天敵』の二文字が浮かん
でいた。

追う者達？（後書き）

エリマとオデットはちゃん付け…若いからね！

イワニナの災い（前書き）

序盤は馬鹿な暴走しました。だが、反省も後悔もしない！

閑話のようでも続きのような回です。

イワニナの災い

「さあ！ 脱いで下さい」

女性陣によるお披露目が行われた直時の部屋では、包みを手にしたオデットが迫っていた。

「短パンなんぞ試着するまでもないでしょ？ それに穿く^はとしても皆の前で脱ぐ意味がわからんぞ！」

「タダトキ様ご所望の短ズボンを見立てたのは私です。大きさに間違いはありませんが、ジャストフィットさせるには少々手を加えねばなりません。ご安心下さい。実家が革製品の加工を営んでおりして、調整はお任せください」

「何故^{なにゆえ}革？ 使い潰すんだから安物で良かったのに……。それに大きさをなんていつ測った？」

「見れば分かります」

オデットはしたり顔で頷いている。確かに海で下着姿を見せた憶えがある直時だが、開放的な無人島とは違い、狭い部屋で女性4人に見られながら脱げるはずもない。

にじり寄るオデットに部屋の隅へと追い詰められていく。

対峙する直時の額から一筋の汗が流れ落ちる。滲む右目の視界。次の瞬間オデットの姿が消えた。

床近くまで体を沈み込ませたオデットは直時の懐に潜り込み、電光の速さで伸ばした両の手に獲物をがっしりと掴んだ。

「獲ったあ！」

「いい加減にしなさい」

屈んだことで低くなった紺色の頭頂にエリアの手刀が垂直に落ちた。

貞操が守られた直時はエリアに礼を言っ、それでも引き下がらないオデットに試着を了承する。勿論着替え中は退室するという条件は飲ませた。

(親には見せられないな)

嘆息して下着姿になる。今日のものは更に隠れる面積が少なく、男性用Tバックと言ってもいい。サミュエルに聞いたところ、布地の節約と有尾種族に対応した作りであるとか…。

着替えた革パンもローライズであった。ヴァロアや更に西の普人族国家でも禪様ふんじょうの下着が主流だが、トランクスタイルもあるらしい。下着は馴染んだ品が欲しい直時は、イリキア第二の都市という『テイサロニキ』に望みをかけるのだった。

入室の許可を得た女性陣は目を爛々とさせたオデットを先頭に再度入ってくる。Tシャツ革短パン姿の直時が苦笑しながら迎えた。

「ぴったり。問題なし！ オデットちゃん、選んでくれて有難う。じゃあ、そういうことで…」

「お待ちください」

近付いたオデットが直時の腰を左腕で抱える。男女逆であれば、踊りのエスコートをしているように見えないこともない。

掲げた右手の白手袋。その指先を噛んで取り去る執事姿のオデット。素手となった掌で直時の左腰の裏側から下、左脚との間。つまり左右に割れた左側のお尻を握りしめた。

「あらあら。緊張なさっておいでのようですね」

目を白黒させた直時の耳元で薄笑いを浮かべながら囁く。臀筋でんきんの筋を確認するかのよう^にに強弱を変えて揉み撫でる。

「おいコラちよつとマテ！」

「運動用なのでしょう？ 動きを阻害せず、且つ快適な穿き心地の調整のためです。次は力を抜いてくださいませ」

「本当だな？ 信じるからな？」

勿論と返したオデットは力を抜いた柔らかいお尻を撫で回す。

(硬く引き締まっていた肉が今はこんなにも良い弾力を…)

徐々に息が荒くなり頬に朱が刺してきた。

危機感に駆られた直時は救いを求める眼差しを他の3人に送るが、フィアとヒルダは笑いを堪え、エリアは申し訳なさそうにしながらも視線を泳がせているだけだ。

「また力が入ってます。そうですね、次はもっと力を込めてください。ハアハア。か、硬いつ！」

興奮の極に達したオデットが直時の革短パンの下に手を突っ込むという暴挙に出て、漸く拘束やっゆに動いた3人。引き摺られ、連行されるオデットの表情はそれでも満足気であった。

結局、革短パンの仕立て直しがされることはなかった。

その夜、イワニナのとある豪商の元へ一抱えもある琥珀が運び込まれた。樹液の化石であるこの貴石は、太古の虫等が閉じ込められている場合がある。直時なら地球で放映されたある映画(琥珀の中の蚊が吸った血からDNAを採取して恐竜を復活させる名作)を思い出したかもしれない。

その巨大な琥珀の中、黄色味がかつた飴色に透けて見えるのは蜂

の幼虫と覚しきものだった。大きさは人族の赤子程。50〜60センチくらいだろう。頭部周辺は気泡が入っていたのか、空洞になっているようだ。

「どうだね？」

「これだけ大きな琥珀は例がありませんね。大変貴重でございますよ？　しかし、この気泡はいけませんね。価値が下がります。虫入りというのもそこそこ珍しいので買手は付くでしょうが、割って別々にした方がよろしいでしょう。幸い虫と気泡は端のほうですし、加工は簡単かと思えます」

鑑定を依頼された宝石商が問いに答える。

「ふむ。そうか。職人たちを呼んできてくれ」

使用人が貴石加工に携わる数人を連れて現れる。宝石商の助言を元に、切り離す箇所注文をつける。

「もうちつと大きく削った方が良いんじゃないですかい？　気泡が入ってる箇所は弱いですが、割れちまったら虫入りの方は売り物になりません」

一人の職人が注意を促すが、純琥珀の方をなるべく大きく残したい宝石商と豪商の主人は、そこはお前たちの腕の見せ所だと譲らない。

慎重に石目を吟味した職人たちは、切り出す角度や位置を微修正した。そして原石を切りだそうとした瞬間、中の虫が身震いした。

落胆の声と共に、気泡から幼虫に沿って割れた琥珀が剥離する。途端に香る甘い匂い。今まで嗅いだどの香水とも異なる、甘く蠱惑的な香りに陶然となる一同。

ボタリと落ちた幼虫が細かく痙攣した後、久し振りの外界に深呼吸するように大きく身じろぎした。驚きも束の間、幼虫も売り物に

なると捕獲を命じる主人。この状態で生きていた生命力の強さ。その珍しさ。捕まえられた幼虫が身を縮こまらせると、匂いが強くなる。発生源はこの虫だったのだ。

この匂いを香水に出来ればそれも大儲けできるだろう。そうも考えた主人は早速心当たりの調香師に連絡を取るよう動く。琥珀の中で生きていた程だから、幼虫は頑丈な大箱に嚴重に密閉された。

残り香は屋敷から吹き散らされ、街上空へと舞い上がり、風に乗って山々を巡る。希釈されたその微かな匂いがとある岩山へと届いた。暫くしてその山は唸りを上げる。山全体が震える原因は、数えきれない蜂の羽音のようであった。

曙光が山々を照らし出し、高地の澄み切った空に現れた黒点。それはたちまち数を増やし、やがて一方向へと向かい始める。その先には『イワニナ』の街があった。

オデットの夜襲を警戒し、闇の精霊術で嚴重に部屋を封印していた直時は、すっかり習慣になってしまった早起きで夜明けと共に目を覚ます。深夜の娯楽が酒くらいしかない世界では仕方が無い。

闇の精霊に礼を言いつつ封を解き、昨夜の革短パンツシャツ姿で着陸用岩板へと向かう。

増設したとはいえ、山肌から突き出た部分はそれほど長くない。材料とした土を岩へと圧縮変換し密度を高めた結果、山腹に空洞ができた。そのため、設備自体は外から内部へと拡張することになった。その補強の『岩盾・塊』^{がんじゆん}で更に空間が広がり、厩舎や宿泊部屋はそこにつくられていた。

直時は上下左右斜めと林立する石柱の間を抜け、補強した壁面に亀裂が無いか確認しながら歩く。地質調査や強度計算、たわみ具合等必要だが急造でどうしようも無かったため、些^{ちか}か過剰なまでの補強を施したが不安は晴れないようだった。

朝日を浴びながら柔軟体操をしていると途端に慌ただしい空気が流れ、斜め頭上の発進用岩板から数騎の騎獣と有翼の種族が空へと舞い上がり、イワニナから来たのか着陸のため接近する騎獣の姿もある。

(タツチイ！ イワニナの街が空襲されてる！ 冒険者ギルドから街守備の義勇兵要請が来たわ！)

何事かと思いつつも早朝訓練のための柔軟体操を続けていた直時にフィアが念話で知らせてきた。

(盗賊？)

(いいえ。飛翔生物よ。土竜蜂の大群らしいの！)
脳内情報を検索する直時。

土竜蜂。体長1メートル。強靱な顎と神経性の毒針を持ち、直接攻撃だけでなく毒針を撃ち出す事もできる。山岳部に生息し、高山の岩場に穴を穿ち地中に無数の巣部屋とトンネルを作る。山一つが巣になることもある。獲物と認識されるか、巣穴に近づかない限り攻撃されることは少ない。狩りは単独で行うが、劣勢になると仲間を呼ぶため敵対した場合は速やかに殺すか、逃げることに。

(ヤバイ相手みたいだけど、イワニナで何かやった奴がいるのか？
巣穴をつついたとか？)

(冗談を言っている場合ではないぞ！ 街では既に死傷者も多数出ているらしい。冒険者義勇兵も参戦している。私達も行くぞ！)

状況を飲み込めない直時にヒルダの叱咤が飛ぶ。弾かれたように自室に戻った直時は革ズボンと旅装シャツ、革の上着を着てナイフ等を吊るしたままの革ベルトを装着、槍を片手に発進用岩板へと走る。

(ヴァロア組、白烏竜しゅうりゅうはここで待て。危険と判断したら即時離脱。飛翔準備は整えておけ。それとタダトキは正体を隠せ。特に髪は見せるな)

ヒルダの指示に各人が肯定の念を返す。その中で直時はフィア、ヒルダグループの念話で再確認する。

(俺がイリキアに来たってことをアピールしなくてもいいのかな？)
(派手な戦闘で目立ったらイリキアからも注目されるわよ？ ことの建設だけでも噂になりそうだし、これ以上目立つのは駄目)

(うむ。自重しろ。目立っても良いが正体は隠せ。準備が調べば上部岩板に集合だ。急げよ)

了解の念を送り即座に部屋に戻り、包帯で頭を隠しながらフード付きマントを掴んで走る直時。何故自分が見知らぬ街のために出陣しなければならぬのか？ そんな疑問が一瞬頭を過ぎるが、フィアとヒルダが言うのだ。その判断に己を任せることができる程の信頼は既に持っている。ならばゆくのみ。

「ご武運を！」

サミュエルを先頭に、騎兵がヴァロア式の敬礼で見送る。エリアとオデットの姿がないのは、寝起きの女性であることを考慮にいれて然るべきかもしれない。フィアとヒルダは既に準備を整えていたが、規格外の存在を比較対象としてはいけないだろう。

ヴァロアの4人に消防団式の敬礼で応えながら、先に地を蹴ったフィアとヒルダに続いて離昇する直時。山を回りこんですぐのイワニナ上空には、遠目にも大きな黒点が飛び回っていた。

「なんて数だ…」

呆然と呟く直時。

街上空を覆う土竜蜂の群れ。その羽音は街を覆い尽くし、差し始めた朝日を遮っている。

高速で飛び回る1メートルの飛翔物に、守備兵の対空装備は大した成果を上げているようには見えない。むしろ敵対行動を取ったことで、毒針の犠牲になった兵が屍を晒し、対空射撃の数も散発的になっていった。

その中でも活躍しているのは個体能力の高い冒険者義勇兵である。チームを組んで防御、回復、攻撃、支援と効率的な迎撃を行っていた。だが、全ては焼け石に水。あまりの数の差に倒れていく冒険者も多い。

(無闇に殺しちや駄目よ！ 余計に反撃が激しくなるからね！)

(あの数だ。殲滅なぞ考えるな。来襲の原因を取り除かねばならぬい)

(でもどうやってっ？ 倒れてる人があんなに！)

一人、また一人と毒針に倒れ紫色に染まって痙攣する。土竜蜂のさらに上空から様子を探る探知強化を施した直時は、眼にとまる惨劇と、耳に届く断末魔、悲鳴に焦りだけが募る。

(探査の風。憶えてるわね？ あれを広く街全体に。あんたの魔力量なら出来るはずよ)

(こんなときに訓練かよ！)

(私にはこれだけ広範囲には無理なの！ でもあんたの魔力量なら出来る！ 今やらなくてどうするのっ？)

(探知強化は解け。風の精霊術に集中しろ。識別できたら蜂だけを上空へ吹き飛ばせ)

「好き勝手言ってくれる…」

直時は探知強化をキャンセル。目を閉じて意識を周囲の風と同調

させる。

（根拠のない信頼だけど、やるだけやってやるうじやないの。でも駄目な場合の次善策はあるのか？）

（余計なことは考えないで集中！ 精霊に教えてもらうのをすつ飛ばして、風の精霊と一体化、魔力を流して。風はあんたの眼であり耳であり手足よ。感覚を手放す、広げるイメージ）

（次善策は考えてある。任せろ）

ヒルダの言葉に肯いた直時は、ファイアに言われた通りのイメージ。風が描く周囲の光景。自分を取り巻く風。ファイアの操る風。ヒルダが発する風。

（感じる？ 次はその範囲を広げるの。ゆっくりでいいから。自分の魔力を行き渡らせながらその分意識を広げていくの）

明瞭な自分周辺と違い、ぼやけた認識の境界がある。魔力を風にのせ、その境界を押し広げていく。ゆっくりと、確実に塗りつぶすように。

眼を閉じ集中している直時。その体から溢れる魔力量に、頭では理解しているはずのファイアとヒルダも改めて目を瞠る。周囲に満ちていく濃密な魔力。しかし、それが突然消えた。

（駄目か…。仕方あるまい。次の手を…）

（いいえ。待つて…）

ヒルダが残念そうに念話を発したそのとき、突然彼女等は飛翔の制御ができなくなった。立て直そうとしても思うように飛べない。

（大丈夫。落とさない。もうちょっとだからそのまま待つて…）
直時の念話と共に姿勢が安定する二人。

（魔力が必要ない…だと？）

ヒルダが驚愕する。魔力を風に変換し竜翼から巻き起こして飛んでいたのだが、制御できなくなった時点でそれを止めた。原因を確かめるためだ。自由落下するはずが、風が支えてくれている。フィアも同じだ。

直時の魔力は消えたのではなかった。それは風の精霊との完全同化。風を魔力で操るのではなく、風が直時そのもの。そして、直時そのものとなった風は、イワニナの街の隅々まで吹き渡る。

（俺の風が触れ得る全てが、俺が触れ得る全て…。今、蜂達を引き剥がす）

街中を埋め尽くす蜂の一匹一匹。弩弓の矢。人々が手にした刃。乱れ飛ぶ毒針。奔る攻撃魔術。その全てに風がまとわりつき、軌道の変更を強制した。

（蜂達は一旦街の外まで退かせる。抑えておくからギルドへ対策を）
蜂達は思うように飛べないのに、何が何でも街へと近付こうとしている。彼等をそうさせるのは何か？ 早急に調べ、対応してもらわないといけない。フィアとヒルダにギルドへ向かうよう頼む直時

（二人の風は邪魔しない。いくよ？ 今！）

直時の合図とともに落下するが、フィアもヒルダも直ぐ様自分の位置を取り戻す。

（力技だけは敵わないわね。でも、風の精霊術師として大事な感覚は掴んだよね。ヒルダ、ギルドへ急ぎましょう！）

多数の目標認識も、同時個別対応も、フィアに言わせれば魔力にモノを言わせた力押しである。尤も、風の精霊との同化は評価していた。

(しかし、こんな大規模襲撃など原因が考えつかないな…)

ヒルダの経験でも聞いたことがない。直時の言ではないが、巢をつつかれた程度ではここまでの襲撃にならないし、怒らせたのなら街まで逃げるのは不可能だ。蜂類に持久力は無いが、短時間の飛行速度はとてつもなく速い。

(蜂達が特に集中してた屋敷があった。そこを調べれば手がかりがあるかもしれない。場所は)

直時が二人に伝えた。ファイアは冒険者ギルドへ、ヒルダはその屋敷へと急行する。

「まだ増援が来るか…。いつまで支えきれるか…」

襲撃していた蜂達は風で拘束して街の外で抑えているが、何処から飛んでくるのか後から後から増えていく。直時の風の支配範囲に入った途端自由を奪われるが、諦める様子は全くない。

土竜蜂の大群に覆われた空が陰りを増し、直時の不安は膨れ上がっていくのだった。

冒険者ギルドの扉を蹴破らんばかりの勢いで入ったファイアは、義勇兵への指示や負傷者の治療で慌ただしい最中の職員に支部局長を呼び出させる。

現在、蜂の群れは仲間(直時の名は出さない)が街の外で押し止めていること。稼いだ猶予の間に対応するため、蜂が集まっていた屋敷住人の素性と土竜蜂の詳しい習性の即時調査を要請した。

屋敷についてはイワナにおいて名の知れた豪商のものであるとすぐに判った。ヒルダが既に向かっていたが、応援にギルド職員と護衛の冒険者を向かわせる。

同時にここ数日での依頼を確認。すると、昨日護衛依頼の終了がされており、荷の確認をするが貴石の原石であるとのこと。怪しい点は無かった。

（ヒルダだ。屋敷の主人は死亡。しかし、生き残りの使用人から気になる話を聞いた。昨夜、琥珀の原石から生きた幼虫が出たらしい）
フィアは更なる聴取を頼み、支部局長が呼んだイワニナ周辺の魔獣に詳しい職員に説明する。

「琥珀から？ とてつもない生命力ですね…。幼虫とのことですがどのような？」

フィアはヒルダに催促の念話を送る。

（人族の赤子程の蜂の仔だったらしい。琥珀から出た時と、捕獲した時に何やら甘くて強い匂いがしたようだ。その後、売り物にするつもりで密閉して地下蔵へしまったと言っている）

追加情報を伝えると、若い男性職員は何か気付いたような顔で捲くし立てた。

「土竜蜂の女王蜂の仔では？ 甘い匂いはきつとフェロモンです。それに惹かれて集まっているんです。我々には感知出来ない程希釈されても彼等感じます。それが強いと感じるほど放出されたなら…。それよりも幼虫は生きていますよね？」

「今確認させてるわ。屋敷は蜂の襲撃にひどい有様みたい。地下蔵は無傷。幼虫発見！ 大丈夫、元気だった！」

「良かった！ すぐ群れへ渡すようにしないと…。街から離れた所へ誘導して放置すれば、あとは勝手に保護して帰るはず。でもあの大群を抜けるとなると…」

土竜蜂の報復という最悪の事態は避けられそうだが、穏便に収める手が無い。街中で幼虫を取り戻させれば、その仔を守るために余

計に攻撃性を増すだろうと予測された。

「それは何とかするわ。私とヒルダが運んで、今、群れを抑えてる仲間のフォローもあれば大丈夫でしょう」

フィアは支部局長と職員を安心させ、直時とヒルダに予定を念話を伝えている。

その時、サミュエルからの緊急念話が3人へと響いた。

ヴァロア組は仮設発着場内ではなく、その上空に退避していた。状況によっては直ぐに逃げるよう言われていたからである。

組み合わせは直時追跡時と同じで、1番騎を先頭に三角形の編隊でゆっくりと旋回しながら上空待機していた。

それを最初に見つけたのはオデットであった。『遠視』^{とよみ}で強化した視力で周囲を警戒していたが、街に後続する群れの中に一際密度^{ひときわ}の濃い部分がある。注視する瞳に、他の蜂に隠れながらも別種かと、思つ影を捉えた。

(特務大尉殿。北北西、街へ向かう集団。群塊の中に別種らしき形状を視認)

(なにっ?)

(…大きい、ですわね)

直時の様子に気を取られていたサミュエルより、エリアが確認する方が早かった。その指摘に目標を視認したサミュエルが目を凝らす。少しの沈黙の後、血の気が引いた顔でイワニナに向かった直時達に念話を飛ばす。

(こちらサミュエル！ 新たな群れがイワニナに接近中。女王蜂と

思われる！ 決戦を臨む可能性大！ 至急対処されたい！

巢穴の奥深くで守られている女王の出陣。その事実を総力戦と判断したが故の緊急電話だった。

（女王蜂？ え？ 女王蜂って飛べるの？）

直時の疑念は地球での常識でしかない。巣を作りはじめてしまえば、群れを維持するために卵を生み続けるのが役目となり腹部が肥大化する。そのため飛翔能力が失われる。

しかし、ここアースフィアでは違う。物理的に飛ぶに適した体型でなかるうと、固有術による魔力変換で飛翔が可能な種であるなら、問題になるのは魔力量だけなのだ。

（拙いな。私は幼虫を伴ってイワニナから離れる）

（じゃあ、私はその支援ね。タツチイは私達の離脱後、群れの全部がこちらに来るのを確認してから追いついて。街へ向かわないのを確信できるまでそこを離れたら駄目よ？）

あくまでもイワニナの街を守ることが目的だと釘を刺すフィア。

（大部分がそつちを追うなら俺はヒルダさんとフィアの援護にまわる。多少街に向かつて冒険者義勇兵で対処できるだろ？）

彼女らの意志は尊重するが、直時にとってはフィアとヒルダの方が大事である。イワニナを見捨てるつもりはないが、何もかも面倒を見るつもりもない。大部分を引きつけることができれば、後は彼等の対処に任せる。それは直時の意志だった。

（私達を誰だと思ってるのよ？ でもまあ、それで問題ないかな。ギルドへはその旨連絡しておくわ。それと……ありがとう）

最後の念話は小さかった。ヒルダからは鼻で笑うような返答だった。

た。しかし、どちらも嬉しそうだった。

結果的にその心配は杞憂だった。甘いフェロモンを放出する幼虫を無視する蜂はおらず、群れの全てが追い始める。サミュエルからの連絡で女王蜂も進路を変えたと判った。

直時はせめてもと、未だ息のある人達に精霊術による『治癒』を施す。その後すぐにファイア達を追跡した。

追いついた後は、壁役となり殿しんがりを務め、ファイアは援護から支援にヒルダへ風と人魔術による加速を施す。3人の必死の逃走を余所に、イワニナの街から蜂の黒雲は去り、静まった街路に人々が顔を出し始めていた。

早朝から始まった防衛と追跡は昼近くに終焉を迎える。イワニナから充分距離を取ったところで、追跡してくる女王蜂を待つことにしたのだ。山間の比較的広い地を見つけ着地した3人は、蜂の群れに囲まれた中で休息を取る。

当初の予定では幼虫を放置して土竜蜂が勝手に助けるのを待つつもりであったが、女王蜂が出てきたとなってはきちんと保護した上で直接渡した方が良いとの判断だった。放置して他の魔獣の餌になつてしまつては困る。

蜂の仔を抱いたヒルダ、周囲を警戒するファイア、風の障壁で土竜蜂を寄せ付けない直時の3人は視界を埋め尽くす群れの中、平然と女王蜂を待つ。

「うわぁ。蜂が9割9分に、空が1分……。気持ち悪う」

…訂正。直時は蜂しか見えない視界を閉ざし、風の感覚に身を任せ周囲の地形などを調べてなんとか気を落ち着けようとしていた。

「来たか」

ヒルダの呟きに同意するファイア。それまで3人を覆う緩やかではあるが力強い竜巻に、何度も突破を試みては上空へと吹き飛ばされていた蜂達がおとなしくなりはじめた。

やがて包囲していた蜂の群が左右に別れ、道を作り、地に降りた蜂はかしず傅くように頭を垂れ、宙を飛ぶ蜂は控えるように後ろに退く。

現れたのは他の蜂達より顎と腹部が二回りは大きな蜂達。兵隊蜂である。その後ろには女王蜂。通常見られる土竜蜂の約5倍。だが大きさが違うのは腹部のみで、頭部、胸部は働き蜂とさして変わらない。羽の大きさは逆に小さいほどである。

だが、その溢れんばかりの魔力量は女王の威厳をまざまざと魅せつけ、ゆっくりと、しかし真っ直ぐに近づいてくる姿は風格に満ちていた。

(風の障壁を解け)

(えっ? 大丈夫?)

(相手は一族の長なのよ。まずはこちらが礼を尽くさないとね。でも、油断だけはしないようにね)

ヒルダの指示に疑問を呈する直時だが、ファイアの補足に納得する。全てを中へ巻き上げる風を女王蜂の接近に合わせて緩やかにし、目前に到達したとき完全に霧消させた。周囲の風の精霊とは無論同化したままで、即座に防御、逃亡。もしくは攻撃に移れるようにしている。

「先ずは人族の御無礼、お詫び申し上げます。御子の保護を優先したためこのような遠来への御足労を強いてしまい、重ねてお詫び致します」

ヒルダの謙へりくだった口上に驚きを隠せない直時。

「御子はこの通りご無事です。どうぞ御身の元へ……」

胸に抱いていた幼虫をそつと差し出しながら頭を下げる。

近付いて前肢と中肢の4本を伸ばす女王蜂。兵隊蜂の緊張と直時の緊張が高まる。おくるみに包まれた幼虫は、無事女王蜂の胸に抱かれ、ヒルダとの間に兵隊蜂が数匹割り込んで壁となる。周囲の蜂達の殺気が高まったその時。

(控えよ。我が種の子が無事であった。それで良い)

女王蜂からの念話が辺りに響いた。驚くのは直時だけで、ヒルダとフィアはその言葉に頭を垂れる。

(え？ それで納得するの？ イワニナじゃ死人も出てるんだろ？ 不可抗力じゃないか。せめて事情説明くらいしても…)

(蜂の子が琥珀から生きて現れたってことまでは良いわ。でもそのあと売り飛ばそうとして閉じ込めてたのよ？ どうなるか判る？)

(いや、しかし！)

(無知故というならお互いだらう。そして向こうは一族の存亡をかけての奪還だ。殲滅戦を望むのか？ お前が彼等の敵になるなら私はお前の敵にまわるぞ)

(…っ！)

フィアとヒルダに絶句しか返せない直時。踵を返す女王蜂の後ろ姿に内心の苛立ちをついついぶつけてしまった。

「ひとつだけお聞きしても宜しいでしょうか？」

「莫迦っ！ やめなさい！」

「なにもかも台無しにする気かっ！」

フィアとヒルダが慌てるが、直時は槍を地面に置いて片膝を折る。どうしても聞きたかったのだ。

(申してみよ)

幼虫を胸に抱き振り返った女王。すかさず取り巻く兵隊蜂。

「御身は人族と意志を交わすことができます。人族の街にいきなり襲い掛からず、包囲しての交渉も可能であったのではないでしょうか？ さすれば双方に犠牲は出なかつたかと愚考する次第です。是非ともお考えをお聞かせ頂きたい！」

直時の案では交渉ではなく脅迫であるが、同族に犠牲を出さないなら有効な策である。

（人族が我等と同様に統率がとれているのならば良策かもしれぬ。しかし、お主らは個の利益を尊び、求め、同族同士で騙し合い殺し合うのではないか？ そのような輩の中から我が種族の赤子が助けを求めたのだ）

激昂するでもなく高慢でもなく、無知な存在に言い聞かせるような口調だった。

（争いの後、傷つきながらも我の子の少なからぬモノが生きておった。今、息のある子はおらぬ。あの街に我の子の息吹は絶えた）

傷付き、死んでいったのは何も街の住人や冒険者だけではない。一族の仔を救おうとした土竜蜂達もそうだ。そして、傷つきながらも生き残っていた彼等は人族の手によって全て殺されていた。

人族の治癒には気を使った直時であるが、土竜蜂に対してそんな配慮は欠片も思いつかなかつた。正直、害獣として認識していたに過ぎないのだ。そんな存在にお互いの配慮などと感情のまま言い放った。

それに気がついたとき、竜人族のヒルダ、エルフのフィアと共に旅して、魔狼や虚空大蛇のミソラ、白鳥竜達と心を通わせることができていたと思っていた自分がとてつもなく恥ずかしく、卑しい存在に思えた。

地球で忌々しく思っていた『動物愛護団体』の有り様そのまままで

あつたと自覚してしまった。自分が基準にしていたのは可愛いかわ
愛くないか。そんな卑近なことだったのではないか？そう思い知っ
た。

（人の子よ。我はそのことを責めておるわけではないぞ。お前たち
はそうある存在である。我等はそれを理解している。故にそのよう
に対処したまでだ）

断定される言葉。お前たちはそういう呪われた存在なのだと言わ
れた気がした。普人族の暴虐に憤慨しながらも、自分も同じ穴の貉
であつたのだ。

何も言えない直時にこれ以上言えることは何も無いと判断した女
王蜂は再び踵を返す。しかし、直ぐに足を止める。

（だが、お主はそれを是としないようだな。なら、普人の民を変え
るくらいの力をつけよ。我が言えるのはそれだけだ）

女王蜂が去り、それに付き従った群れが去っても直時は地面に眼
を向けたままだった。

イワニナの災い（後書き）

まだまだこの世界に馴染み切っていないことを思い知った直時…

イワニナ事変後（前書き）

2話分を読み直したり削ったりしてたら短くなったのでまとめて投下。

イワニナ事変後

エフハリスト岳山麓、イワニナに面した反対側に突如築かれた空中騎兵と有翼種の仮設発着場。日も高くなった頃、その着陸用岩板へと3人の人影が舞い降りた。

ひとりには白金の髪を風に舞わせたエルフ、ひとりには白髪を靡かせ紅玉の瞳に強い意思を秘めた竜人、最後のひとりはどんよりとした雰囲気で、顔に包帯を巻いた小柄な男だった。素で闇の精霊が周りを漂っている。彼が呼んだわけではないが、精神状態を心配したようである…。

「お疲れさまです。イワニナ防衛は成功ですね」
サミュエルが代表して労うが、フィアとヒルダは軽く手を振るだけ。直時に至っては目を伏せたまま自室とした部屋へ向かう。実質3人で解決したことは、誰に誇っても良い偉業である。それなのに微妙な雰囲気だ。

「私とフィアは報告のためイワニナギルドへ行く。街の様子も確認しておきたい。まあ、奴のことは気にするな。それより、遅いかも知れんがこの砦の利用者には釘を差しておけ。建築者のことを伏せるようにな。ヴァロアとしてもその方が良いのだろう？」

「勿論、既にそのように。利用者は26名。全員に口止めをしておきました。喋らないとの保証は出来ませんが…」

「抜かりないわね。今日は此処で一泊。明日出発するわ。イワニナは今混乱してるだろうから、輸送依頼等の空中騎兵は可能な限り受け入れるように。今は…、あれ(・・)は放っておきなさい」

ヒルダとフィアの言葉から何かあったと思っただが、とりあえず今

回の経緯を訊ねたサミュエル。

説明に耳を傾けながら考える。わざわざ事件が解決されそうな時に直時が余計な発言をしたのはいただけくない。しかし、戦術（土竜蜂側からして）としてはどうだろうか？

（土竜蜂がとつたのは急襲。大群を以^もつて攻め、目標を重点的に探索攻撃、他は攻撃を受けた場合の応戦のみ。大群故に最小限の応戦だけでもイワニナの手は一杯になる。情報の寸断が可能。土竜蜂の目的は隠される。しかし目標の早期発見、確保に失敗。女王蜂が全戦力で出陣。…もしかしてタダトキ殿が言う戦術をとろうとしていたのではないか？）
今となつては仮定の話でしかない。

サミュエルが問うような眼差しを向けるが、それをうやむやしにたままヒルダとフィアはイワニナへと向かった。直時は自室である。腑に落ちない点はあるが、ヴァロアにとってこれは好機といえた。

（タダトキ殿は先の戦いで参っているようです。元気づけてあげては如何でしょうか？ 無論祖国の利益にもかかいます）

念話に首肯したエリアは直時の許へ足を向け、オデットが後に続く。

何か精神的な負荷を受けているならば、付け込むチャンスである。慰める過程で情を交わすことが出来れば大きな一歩となるだろう。エリアを向かわせた後、騎兵達と発着場利用者への誘導を打ち合わせ、ひとり部屋へと向かうサミュエル。確認したイワニナ防空戦の推移と関与した直時の報告を、連絡員のトマスから本国へと報せてもらわねばならない。

「　　っ！」

岩造りで隣室との防音が完璧なのを良いことに、「の」に濁点を点けて部屋の床で悶え転がっていた直時。部屋の端まで転がっては壁に頭を打ち付け、また反対側へと転がる。

（やっちまった！　メイヴァー君様の前でそんな気は無いって言うてたのにい！　違う！　俺は断じて『勇者』とか気取ったんじゃないっ！　……んだけど、そうだったのか？　何様のつもりだ俺！　身の程をわきまえろおおおおっ！）

一種の躁状態なのは心の自己防衛である。蜂毒に侵された住人の死体やら、四散した蜂の死体やらを思い出すと、全てが自分のせいであつたかのように思えてしまう。

（それに意思疎通出来る種は他にもいるんだろつな。今まで深く考えないで狩りとかしてたけど、この先喋る生き物を狩ったりできるんだろつか？）

盗賊やりスタルでの戦闘はあくまでも自己防衛による殺傷だ。罪の意識はあるが、納得はしている。しかし、獲物として人を対象に出来ないように、喋る猪や鹿、鳥と出会った時自分は狩ることが出来るのかと考えてしまう直時。

（仔魔狼の丸焼き…、ミソラの蒲焼き…、白烏竜の手羽先！　で、出来んっ！　俺には不可能だああああ）

再び苦悶しながら部屋中を転げ回り、止まっては頭をぶつけている。

元の世界でも脳天気を公認される直時とて、今まで『鬱』状態になつたことが皆無ではない。顔に縦線を引いて日々を過ごしたこともある。その精神状態からの復帰が難しいのも経験済みだ。だからこそ意識的に派手な葛藤の最中であつた。

「タダトキ様。入っても宜しいでしょうか？」

そんな中、闇の精霊で封じてある入口から声が掛けられる。エリアの声だ。ピタリと動きを止めた直時は何事も無かったかのように椅子へと座る。咳払いをひとつ。

「あー、今開けるよ」

入り口の闇が去り、オデットを伴ったエリアが入ってくる。空中で哨戒待機していたため、初めて会った時の飾り気は無いが、凛々しい出で立ちだ。

「お邪魔致します。お加減は如何ですか？」

心配そうなエリアの後ろではオデットが薄眼で窺っている。

直時は苦笑を禁じ得ない。色仕掛けが少しでも効果有りと思えばすかさず仕掛けてくる。

（自分の顔付きはアースファイアじゃ平坦、体格は貧弱、珍獣扱いでないならやっぱ『精霊術師』という価値が評価の対象でしかないとなれば、サミュエル君の差金だろうな）

リスタル、ノーシュタット、ロツソとこの世界の街を歩いたことは少ないが、それでもそこを歩く平均的な普人族と自分の容姿を比較することぐらいは容易い。

除隊して間もないためか、貴族の子女にしては短い白茶の髪はともすれば少年のように見えるエリア。凛々しさの中にも女性の気遣いを見せる美しい娘である。

だからこそ、自分に見せる好意は別の意図によるものだと判断してしまふ直時。

あと、オデットの変態行動は判断不能として深く考えないようにする…。

「ご無事のように安心致しました。あら？ 額が擦り剥けていますよ？」

「えーっと。3点倒立していただけ。ご心配なく」

恥ずかしい行動だったので、直時は自分の奇行を隠した。微妙な言い訳だが…。

「お疲れでしょうから、治療は私に任せて下さいな」

「いや、大丈夫。そんなに疲れてないから」

それでも座っている直時の額をよく見ようとエリアが屈む。

「エリア様っ！」

オデットがいきなり声をあげた。大声に驚いたエリアが何事かと問う。

「申し訳ありません。このオデット一生の不覚でございました！ 絶妙なタイミング、見事な位置取り。嗚呼！ 昨日のお召し物であれば完璧であったものをつ！」

己の失敗を心底悔いているオデット。

「あー、あの胸元パツクリの服ね」

直時の呟きに、エリアが顔を真赤にした。

ヴァロア主従の諍いを生温かい目で直時が見ていた頃、フィアとヒルダはイワニナへと向かいながら直時のことを話していた。飛行中のため、念話同士である。

（奴はその場の感情に飲まれすぎだな。ロツソで各国への対応を見た限りでは、そう感情的とは思わなかったが…）

（最近、力をつけてきたから調子に乗っているんだと思う。自覚は無さそうだけど）

（そうなのか？ 使い方はともかく精霊術はもともと使えたのだから？ あれだけの魔力量なら技術が無くとも力技でそうそう引けは取らないと思うが）

（貴女もヒビノの知識を転写されたでしょ？ 精霊術も人魔術もアースフィアに来てから身につけたものよ。元の世界ではただの民草だったそうよ）

直時の前では「タッチイ」と呼んでいるが、いない場では以前のままだ。

（魔力ではない力か……。えねるぎーとか言ったな。私にはよく判らなかつたぞ？）

（私も得た知識を完全に理解できたわけじゃない。ヒビノに聞いたことは山程あるわ。それと同じ。ヒビノも知識だけは詰め込んだけど、きつと理解し切れて無い。そして、あいつはアースフィアに来て大きな力を入れた。最初こそ警戒して慎重だったけど、ヴイルヘルミーネ様に「自由にすれば良い」と言われた。自重こそしているものの、既に枷は無いのよ）

（ふむ。そう考えると調子に乗っているとは言え控え目だな。加護や神器を得た普人族達には酷い迷惑をかけられたものだったしな）
（でもひと度、^{たが}箍が外れるとリスタルの再現よ？ アレには焦ったわ……）

リスタルの町を呑み込んだ闇の精霊。陽の下の生を包み隠した死の夜。フィアとヒルダの表情が引き締まる。

（判っている。それをさせないための訓練だ。力の制御を教えねばな。私は一旦離れるが後は頼んだぞ？）

（勿論よ。でも、ヒルダも物好きね。莫迦に付き合うのは疲れるでしょ？ 放っておいても良いでしょうに……）

(ファイア程じゃない。それにあの手の莫迦は嫌いじゃない。可愛いじゃないか)

苦笑気味のファイアへヒルダはニヤリと笑いかけた。

イワニナは朝の混乱から立ち直り、死者の埋葬、防空設備の補修、物資の調達と前に向かって活動していた。

直接ギルド前へと着陸することもできたが、敢えて正門から徒歩で移動するファイアとヒルダ。

彼女らの活躍で事態の終息を得たことを知った者は、口伝てにそれを広め畏怖と憧憬の眼差しを向けるのだった。

「あの規模の襲来があつたにしては被害はそれほどでもないな」

「ヒビノが頑張つたのもあつたし、土竜蜂が殲滅戦を仕掛けなかつたのが大きかつたと思うわ」

「女王蜂の出陣をどう思う？」

「……同族の仔を保護するだけでは説明がつかないわね」

疑念を残しつつ、街の様子をつぶさに見ながらギルドへと向かう二人。好奇の視線に晒されるのは慣れているが、度々(たびたび)礼に寄ってくる者達には参った。主に瀕死の状態で治癒を施された当事者や、その家族である。

治癒術を施した直時は姿を晒さなかつたため、目立つたファイアとヒルダの行いだと思われたようだ。お礼を言いながら近寄る者も多かった。

無碍にはできず、丁寧な返答をしながらの移動となり予想以上にギルド会館に着くのが遅れてしまった。

ギルドの話では意外に住人の被害が少かつたとのことだった。逆に防戦に集中したイリキア兵と冒険者義勇兵の犠牲が多かつたこ

とが判った。

土竜蜂達の目的が判ってさえいれば減らすことが出来た犠牲であるが、今となつては詮無いことだった。

冒険者ギルドに直時から同意を得ていた案件の仮設発着場の管理を打診。イワニナ政庁に託すよりはギルドへ任せの方が良いとフィアとヒルダも判断していた。

ギルドから即答は無かったが、視察調査するとの答え。使用に耐えるか確認してからのことになるのだらう。何も言われなかったが建設者の正体は直時だとバレていたようである。ギルドの情報網は伊達ではない。

ひとつ、興味深い話が聞けた。魔獣達の生態に詳しいギルド職員からである。樹液が化石となるほどの古いにしへから生き永らえていた幼虫である。その生命力と女王蜂が出てきたことから始祖に繋がる存在であつたかもしれないとのこと。

笑いながら「妄想ですよ？」と念を押した職員の言葉に戦慄を禁じ得ないフィアとヒルダであつた。

始祖直系といえば、いみじくもヒルダが発した『御子』が当てはまる。

混血に寄る変種変化は地上界で多く見られるが、己と全く異なる種との交配、新たな種への結びは神々から連綿と続く神聖な行為である。

本来、混血に適さない種族同士でも神々の祝福を得てそれが可能となる。その新たな種の第一世代を『御子』と呼ぶ。

通常の出産とは異なり、『御子』は数百の赤児としてアースフィアに新生うまれる。保護された境界内か、神域で一定の成長をしたのち地上へと放たれ、新たな種族としての誕生となる。はじまりの種として最低限の保護が与えられるのだ。

件の蜂の仔はその『御子』である第一世代の仔であったのかも
れないと、ギルド職員は躊躇いがちに語った。

イワニナからフィアとヒルダの二人が戻る。しかし、ここで一騒
動が持ち上がった。

直時が白鳥竜のブランドウへ、兄弟と一緒にヒルダと同行すると
言い始めたのだ。

「思うところがあってティサロニキで調べ物したいし、その後は各
種族の集落を訪ねる日々になると思う。正直他に気を回せる余裕は
ない。偉そうなことを言った舌の根も乾かないうちで申し訳ないが、
先ずは自分の知見を優先したい。俺は阿呆だから知らなければなら
ないことが多過ぎるんだ」

今回の件で普人族側の意識。弱者としての歴史を調べたいと思っ
た直時。歴史に置いて、編纂する側の都合が盛り込まれる場合は多
々ある。しかし、それを承知で読み解くならば何を大儀にして何を
敵としていたか、実情もある程度読みとれるのではないかと考えた
のだ。

直時が元の世界で目にしていた「3行で要約」という言葉。膨大
な文章から核心を抽出するその技術にはいつも感心させられていた。
それを自分も試みるつもりだった。

(それは私も同じです。タダトキ様に従うことで知見を広めること
が出来ると考えておりましたが……同じなのです。私もタダトキ
様も……。それは嬉しいことかもしれませぬ。いえ、嬉しいです。是
非とも御一緒して、同じものを見てどう感じるか……。共感と疑問を
共に得たいと思います)

直時の説得にも意志を変えないブランドウ。共感だけを得ると言

われない辺り、直時より何気に理知的であるかもしれない。

「お前はブランドウに新たな世界を指し示したのだから？　ならば見せてやらんでどうする」

ヒルダが叱る。直時にとってアースファイア自体が新たな世界であるのを承知である。どことなくフラフラと流れて行ってしまいそうな直時に錘おもむきを付ける意味合いもあった。

これが契機となり話は直時不利のまま推移した。ブランドウの同行は決定であった。

ヒルダを始めとして皆に責められていた直時の様子に、ブランドウが更に攻勢を強める。

（私からひとつお願いがあります。タダトキ様の『刻印』を頂けないでしょうか？）

「『刻印』？　どつかで聞いたような……」

「神々や精霊の『加護』にあたるものよ。尤も、そんな大それた効果は無いんだけどね」

直時の疑問にファイアが答える。以前、リスタルの『高原の癒し水亭』の給仕である兎人族のミュンにファイアがねだられたこともある。

（ファイアは前に断ってたよね？）

（「縁」が出来るっただけだから、そんな深く考えなくても良いわ。私は自分を誇示してるようで嫌だからしなかつただけ。ブランドウは人族じゃないし良いんじゃないの？）

一応念話で確かめた直時。問題はなさそうなので『刻印』の情報を脳裡に浮かべる。

「独自の紋章を魔力で描いて相手に焼き付ける……。焼き付けるっ？」

「いやいや。痛みとか無いからね。ちよつとピリツとするだけよ？」
「びつくりするよ。この知識ちよつとおかしくないか？ でも焼き付けるのかあ。ブランドウの真つ白な身体に変な紋章付けたくないなあ」

気が進まない様子でブランドウの首筋を撫でる直時。

「それに独自の紋章って言われてもどんなのが良いか判らないし…」
「何でも良いのよ？ 名前から一字取るとか」

「精霊の文字でも良いのではないか？」

「いえいえ！ 此処は黒を意味する紋章が！」

フィアとヒルダにオデットが割って入る。

「小さく力強い感じの紋章が良いですね」

「いつそヴァロアの国旗から…」

エリアとサミュエルまで口出ししてくる。

（名前かあ。「直」とかカクカクし過ぎだよなあ。漢字はボツだな
家紋は：なんか黒地に白抜きか金色のイメージが…。ブランドウの
純白の身体には付けたくないな。日章旗や旭日旗は戦闘機っぽくな
るな。なんか違う…。うーん）

好き勝手な事を言い合っている一同を尻目に、考えこむ直時へブ
ランドウは期待に目を輝かせている。

「ちつこくて良いんだよね？ あと目立たない処で…」

「小さいと「縁」も小さくなるわよ？」

（私はタダトキ様と大きな縁を結びたいです！ それに隠すような
ことはしたくありません！）

思いも寄らない強い口調に思わず謝ってしまいそうになる直時。

ブランドウは右の主翼を大きく広げ、ここに『刻印』を！ と言

う。白鳥竜達のように、空を舞う種族にとって翼は存在意義そのものだ。オロオロする直時へ向けられたのは一行の意地の悪い笑い声。ウフフとクククとフフフとニヤニヤだった。

ちなみに「ウフフ」はフィアとエリア、「ククク」はヒルダで、「フフフ」はオデット、残りの「ニヤニヤ」はサミュエルである。

（もうあれで行くしかないな。あれならブランドウにも似合うだろう）

紋章の形に悩んでいた直時が漸く動いた。

直時の魔力を吸い込んで空中に描き出される紋章。それが広げられたブランドウの翼へと『刻印』として焼き付けられる。副作用なのか当然の現象なのか直時には判らなかつたが、その瞬間眩い光がブランドウの翼を包み、薄れた後には掌大の『刻印』が顕れた。

白鳥竜の純白の翼を汚すこと無く浮かび上がった一枚の花弁。淡い桃色の桜の花弁を模した紋章は、あたかも雪原に舞い散った桜の一枚ひとひらのようだった。

直時の刻印を貰ってご満悦のブランドウ。傍目にも昂揚しているのが判る。その横顔を吹き込んだ風が撫で、彼の視線が宙に止まった。

（あ…。羽？）

その呟きに即座に反応したのはフィアだった。

（タダトキ！ 風の精霊に反応してる！ 相互念話設定してるなら黙らせて！）

（了解！ って、今、タダトキって言ったよね？ 言えたよねっ！）

（余計なところに反応するなっ！ 今はそれどころじゃないから！）
念話は発音しているわけではないが、自分の声を元に発音してい

る。実は直時からの日本語の転写により習得していたようだ。恨めしげに横目でフィアを見つつ、ブランドウとの個人念話を開く直時。

（ブランドウ！ それは風の精霊だ。今は黙っておいてくれ。訳は後で話す。だから皆には秘密！）

（兄弟達にもですか？）

無用の混乱を避けるため頷く直時。ブランドウは不満気ではあったものの、ヴァロア組がいることで警戒する必要に同意する。黙ったものの視線はどうしても風の精霊を追ってしまっていた。

ヒルダは察したようだが、殊更騒ぐこともなく今後の予定を話し出した。

イワニナはまだ混乱から復帰していないので本日はこの仮設発着場で宿泊。翌朝出発。ヒルダがブラン、ブランドロワを連れ実家の銀竜山地へ。ヴァロア組はフィア、直時、ブランドウと共にティサロニキへ。以後の行動は別。

「では解散。サミュエルとアラン、ジョエル、ポールはイワニナからこちらに回される者達の誘導と事情説明。エリアとオデットも補佐してやれ。我々は休む。ブラン、ブランドウ、ブランドロワも充分に休んでおけ。明日はいっぱい飛ばねばならんからな」

口頭での指示とは別に、念話で白鳥竜達へ通達する。厩舎内にて情報共有を促し、精霊についてはフィアから助言を得るようにと念を押した。

休息と言った3人が集まったのは直時の部屋であった。直時が入口を闇の精霊術で封じた途端、フィアとヒルダの静かな怒声が低く響いた。

「あんたの魔力をアテにしたのは認めるけど、あれは過信じゃない？」

「調子に乗るな。お前の力など、まだまだ我等の足元にも及ばないのだぞ」

活を入れる意味合いもあり、自然と厳しい声音である。言い訳を始めるだろうと思っていた二人は直時が無言で土下座したことで不意をつかれてしまった。

「自分の浅はかさでフィリスティアさん、ヒルデガルドさんはもとより、イワニナの人達にとんでもない迷惑を掛ける所でした。申し訳ありませんでした」

改まった様子に面食らう二人。直時は続ける。

「謝れば許されるとは思いません。せめて、自分の手持ちの財産をイワニナで犠牲になった人達へお見舞いとして使って下さい」

元々、各国から集った結果の財産である。直時に惜しむ気持ちは無い。それに殊勝な様子だが、いざとなれば冒険者ギルドで依頼をこなせば良いと考えている。日本と違い、裸一貫でも大金を得る機会はあるのだ。命懸けではあるが…。

「別にイワニナの被害はあんたのせいじゃないでしょう？ 守ったんだから。それよりあんたの意識が問題なの。「守る」ことは「敵の皆殺し」と同義じゃない。判るわね？」

「我等とて人族だ。お前が他種族より人族を守る気持ちも判る。無論、その気持ちも持っている。ただ、人族「だけ」を守る事は無い。魔狼の仔を守ろうとしたお前なら判るだろう？」

直時の反省した様子と、その出自を改めて認識した二人は、問うように言い聞かせる。つまりは考えるということだ。フィアにもヒルダにも直ぐに答えを出させる気はなかった。

「質問があります」

正座したままの直時が二人に手を挙げる。

「良い加減に座れ。そして普通に喋れ」

ヒルダが鬱陶しそうに言いフィアと並んで寝床に腰掛け、直時は肯いて椅子に着く。

「フィアもヒルダさんも意思疎通できる他の種族と戦った…、殺し合ったことはあるの？」

「人族の他についてことね。普通にあるわよ？」

「数えきれないほどあるが？」

「理由を聞いても良い？」

「利害の不一致…かな？」

「お互い譲れないときがある。そんな時は最後まで戦うしかない」

「依頼とかじゃなく食べるため…、捕食対象としては？」

「聞くのが怖かったが、直時は質問を続けた。」

「私は無いわね。他に食べるものはいっぱいあるもの」

「食料目的ではないが、倒した後、結果的に食べることはあった。」

討伐依頼の大型魔獣とか、住人総出で解体してたしな」

「ああ！ そういうのなら私もあったな。高位魔獣だったけど好き勝手畑やら荒らして、こっちの話を全く聞かない奴。食糧難になつてた町の食材にしてやったことがあるわ」

一度は否定したが、ヒルダの話に同意するフィア。直時としては、食材として狩ろうとしたわけではなく結果として食材になったのならば有りなのか、幾分ほっとした様子だ。

「自分が食べるために狩る獲物としては無いってことで良いのかな？」

念を押す直時に二人が返した言葉は「わざわざ話せる相手を選ん

で食べない」とのことだった。

高位の魔獣や神獣は会話が可能だが、それ故に相手も人族を餌にすることは滅多に無い。彼等の逆鱗に触れさえしなければ攻撃されることはなく、普人族の人口増加は対抗し得る天敵しかいなかったことが理由の一因とされていた。

その後はブランドウの話題となった。風の精霊を視認したことで精霊術を使える可能性が高くなった。精霊達と意思の疎通が出来れば風の精霊術を使う白鳥竜の誕生となる。原因は直時の『刻印』としか考えられず、刻印がこれ程劇的な影響を示したことは例がなかった。

「此処だけの話だけど、内包する魔力量も他の2頭より多くなってるみたいなの。たかが刻印なのに、私がメイヴァーユ様から加護を授かった時と同じようなものなのよ」

直時は実感が湧かずふんふんと頷くだけだが、ヒルダはファイアの言葉の重要性に気付いたようだ。難しい顔をしている。

「ブランドウが精霊術を使えるようになるなら、ファイアが俺の時みたいに指導してやってくれないか？ 風の精霊に反応してたのなら適役でしょ」

直時は自分が引き起こしたことよりブランドウのことが気にかかる様子で、すぐにも助言をしてやって欲しそうだ。

「あなた、自分が何やったか判ってる？」

「『刻印』だろ？ んで、たまたまブランドウが風の精霊術に目覚めるかもしれないから、晴嵐の魔女の異名を取るファイアが教えることができる偶然に感謝！ ってことじゃね？」

風と水の精霊と縁が持てたのはファイアのお陰だと思っている直時は、今回のことも遠因としてファイアがあると考えていた。

「タダトキ。お前の刻印、私にもくれないか？ それなら検証も可能だ」

「ちよつと！ 貴女、次期族長でしょう？ 普人族扱いされてるタダトキの刻印なんてバレたらどうすんのよ！」

少し考え込んでいたヒルダの発言にファイアが喰ってかかる。誇り高い竜人族にとって普人族からの刻印などもつてのほかである。

「そうは言ってもファイアは既にメイヴァーユ様の加護を得ている身だ。刻印は無理だろう。それに私の実力ならば同族でも折り紙つきだぞ？ 文句は言わせん」

高位の約定である加護を得ているファイアが刻印を貰うことはメイヴァーユへの冒険に当たる。まあ、そう考えるのは神霊に尊崇の念を抱いているからで、当のメイヴァーユは笑って終わりにしそうであるが…。

そして、ヒルダにとっては竜人族のプライドだけの問題で、力でねじ伏せる自信が在る。良くも悪くも実力主義なのだ。

「だが目立たないようにするにはするべきかもしれん。ちよつと待て」
そう言って後ろを向いたヒルダが着衣をはだけはじめ。直時は慌てて目を背けるが、ちらちらと視線を向けてしまうのは致し方ないところだろう。その度にファイアの不機嫌度が上がっていくのに早く気付くべきである。

ビスチエ風の鎧を外して上半身をすっかりはだけてしまったヒルダに、ファイアがあーでもないこーでもない刻印の位置を話している。

直時は高鳴る鼓動を隠し、決死の覚悟でチラ見した。眼に焼き付いたのは魔力が通っていないため飾り程度に小さくなった竜翼と、それに掛かる真っ直ぐな白い髪。引き締まった腰の後ろ姿と、鱗に

覆われた尻尾だった。たったそれだけのことだったが、深い満足を
得たのだった。

「よし。此処に決めた。タダトキ！ 『刻印』を頼む」

振り返ったヒルダが、両の胸の頂きを左上腕で隠し、右手で指し
示したのは左乳房の下半分。所謂、いわゆる「下乳したちち」と言われる部分であっ
た。

ヒルダのあられない姿にすっかり慌てふためいてしまった直時。
耳まで赤くしながら後ろを向くべきかどうか迷いつつ視線だけを斜
め上に逸らせている。

「……早くしろ。私だって恥ずかしいこともある」

「……スミマセン。と、取り急ぎ、対処させてイタダキマス。って、
本当に良いのでシヨウウカ？」

ヒルダの赤面する様さまに、余計取り乱してしまう直時。

「さつさとやる！」

フィアが直時の頬に人差し指を突き刺して指示する。不機嫌そう
だ。

「ふあい。いきまふ」

細い指先に容赦無くぐりぐりとされながら答えた直時は、桜の花
びらの形に魔力を込め、ヒルダの左胸へと刻んだ。

ブランドウの時と同じように光が迸り、収まった後には桜の花弁
を模した親指大の『刻印』がヒルダの左胸下部シタチチに浮かび上がる。

仄かに青さのある鱗肌に刻まれた薄い桜の花弁は、その美しさを
損なうことなく『刻印』された。直時とフィアは思わずほうっと見
蕩れてしまう。

後ろを向いて直時の視線から逃れたヒルダは、左胸を持ち上げて確認した。

「小さいな？」

何やら不満そうだ。

「いくらヒルダさんの胸が大きいといってもバランスがあるでしょう？ でかでかと刻印は出来ませんよ」

直時が必死で弁解する。

「いいから早く服（鎧）着なさいよ」

ファイアが不機嫌そうに促した。

「じゃあ、精霊を呼んでくれないか？」

身なりを調べたヒルダが要請する。ファイアが風の精霊を。直時が水と闇の精霊をそれぞれ呼び集めた。

「ほう！ これが精霊の姿か。透き通った羽のようだな」

「他には見えない？」

早速精霊を視認するヒルダにファイアが問う。

「他か…。そうだな、黒いモヤモヤした精霊がいるな」

「闇の精霊ですね。水滴みたいなのはいますか？」

直時の問いに首を横に振る。ヒルダに適正がありそうなのは風と闇の精霊のようだ。

「ブランドウで判つてたとは言え、刻印直後に精霊が見えるとはね…」

ファイアが溜息を吐く。

神々や神霊の加護ならともかく、普人族（厳密には違うが）の刻印程度で精霊術習得の可能性が得られるとあっては一大事である。このことが知られれば、直時確保のための競争が過熱しそうだと思いが痛くなるフィアだった。

「魔力も漲ってきたな。はっきりとは自覚できないが、上限が増えた上に補給もされたようだぞ？」

「確かに……。5割増しくらいになってるわ」

魔力に敏感なエルフであるフィアには明確に感じられる。唯でさえ大きな魔力を保持していたヒルダの姿が大きく見えるほどだ。

「ブランドウは他の子達の倍ほどになってたし、なんというか……。本当に規格外ね」

「俺の魔力を分け与えたような感じ？ 減った気がしないんだけど？」

「あんたの場合魔力量が多過ぎて減ったのかどうか判らないわね。戦闘前に例の力を魔力に変換して溜めたでしょ？ それもかなりの量を」

「イエッサー」

寝起きの呼吸法は既に日課となっていたが、イワニナに向かう際にかんりの量を魔力に変換した直時だった。

「まあ、まだ精霊が見えるだけだ。精霊術が使えるかはわからんかな。ブランドウも呼んで試すことにしよう」

ヒルダの提案に肯いたフィアは、直時とブランドウを促して邪魔の入らない空へと場所を移した。

高空で再確認したところ、ヒルダは風と闇の精霊、ブランドウは風と水の精霊を認知できていた。フィアの教導により両者は風の精

霊術を身に付けることが出来た。魔力を風推進に変換して飛翔していたこともあり、すんなりと覚えることが出来たようだ。

水と闇の精霊術に関しては、両者とも苦戦していたが、ブランドはなんとか水の精霊術を小なりとはいえ身に付けることが出来た。これにより精霊による治療術も可能になり、ブランドウについては高位の精霊術師としての開眼をみることになった。一方ヒルダは闇のイメージが固められず、精霊に意思を伝えることが出来ないように、闇の精霊術を会得するには至らなかった。

「そろそろ切り上げましょう。ブランドウ、くれぐれも精霊術のことは他言無用よ？ ヒルダも判ってるわよね？」

「うぬう。闇、闇か…。もう少しで何か…。夜まで頑張れば！」

「駄目よ！ 明日は別行動でしょう？ 次に備えるか、ミケちゃんにでも教えてもらえば？」

フィアのキツイ言葉に不承不承頷くヒルダ。

「風と水の精霊術はフィアに教えてもらったけど、闇は独学なんで教え方が下手で申し訳ない」

直時がヒルダに頭を下げる。空が茜色に染まりつつあり、長時間飛翔し続けていた疲れもある。ただ、集まった面子は空を飛ぶことに関しては苦にならない一行ではあった。直時とフィアは教え疲れである。

ブランドウの風の精霊術はなかなかの上達振りで、今も緩やかな竜巻を起こして、それに身を任せて大喜びで空を旋回している。水の精霊とはあまり意思疎通が上手くいかないようで雨を降らせたり、霧を作ったりする程度だった。

ヒルダも風の精霊術に関しては目覚しく、真空の刃や多重竜巻等は容易く身に付けた。しかし闇の精霊には苦戦してしまい、認知は

できるものの闇の精霊に意思を上手く伝達できないようだった。リスタルで直時が発動した大規模な精霊術を眼にしたことで、精神的なブレーキが掛かっていたのかもしれない。

「むう。仕方ない。風呂を振舞ってもらうことでよしとするか」

「え？ 仮設発着場で風呂ですか？」

「それは良い提案ね。気苦労掛けさせられたんだから私達を労ってくれて当然よね？」

「そりゃ、やれと言われればやるけども、他にも人がいるんだよ？」

「問題ない。口封じは任せる！」

「口止めです！」

物騒なことを言うヒルダであった。

イワナナ事変後（後書き）

悩んでは切り換え、その繰り返しの主人公です。

テイサロニキ(前書き)

間があきましたorz

ティサロニキ

カポーン…。

という音が聞こえてきそうな空間が、エフハリスト山麓に出来た仮説発着場に新設された。一辺が5メートル四方の岩風呂である。それが男女別に壁を隔てて一つづつ。換気を考えて天上は繋がっており、高い位置の天窓から夜空を眺めることも出来た。今のところ不届きな覗きは出ていない。

「十分に掛かり湯を浴びて身を清めた上で湯船に入ること…ふむふむ」

一般に普及していない入浴のための注意書きが岩板に刻まれている。今も一人の山羊人族の若者が説明を読みながら掛かり湯を浴びていた。

精霊術の初歩授業を終えた直時は、ファイアとヒルダの要望を叶えるため『岩盾・方舟』を改造し、大きめの浴場を設置した。ヒルダが怖い事を言ったので、魔法陣の改造と浴場の設置中は闇の精霊に他人を遮断してもらった。本人も大浴場といって良い湯船に満足した様子で、ファイアのお土産である麦酒の小樽とともに風呂上りの一杯！と、発進用岩板へと涼みに出ている。

「こちらにいらっしやいましたか。お風呂、気持良かったです」

「エリアちゃんか。どういたしまして。麦酒だけど飲む？」

風呂上りで上気した顔で頷く。夜着にローブを羽織っているのは湯冷めせぬようオデットが着せたのだろう。

直時は広い岩板の端まで歩くと、岩肌を材料にコップを生成する。石化を応用した食器作り用魔術である。以前作った土鍋やたこ焼き

用石板は直時オリジナルであるが、こちらは既存の人魔術だ。

新たな石杯と空けた自分の杯に魔術を行使する。『落霜』おちしもでキンキンに冷やした容器に小樽から麦酒を注ぎ、新しい方をエリアに渡す。ざらつきが残る石杯がきめ細かい泡を作って滑らかな喉越しだった。

「ふう。美味しい」

「風呂上りの一杯は格別だよなー」

口の端に泡を付けたエリアの笑顔。お世辞ではなく心からの感想だと感じた直時の顔も綻ぶ。視線を空へと移し、星空を横切る雲を観ながら杯をあおり、喉を鳴らした。

「椅子作るうか？」

岩板に直接胡座をかく直時は、子爵息女であるとのエリアに問う。首を振ったエリアは隣に腰を下ろす。

「特務大尉殿が何処かへ報告しているようです」

「やっぱりバレてた？」

「私達は補術兵ですから」

サミュエルとエリア、オデットは、如何に効率よく支援魔術を行えるかを叩きこまれる部隊なので魔力の変化には敏感だ。ブランドウの魔力増大も判っていたようである。

「俺に言っちゃって良かったのか？」

「想定範囲内でしょう？ それにタダトキ様には隠さず当たった方が心を開いてくれると思いましたが」

まあねと頷いた直時。本国から実情に不案内な人員。なら、それを支援する現地作業員がいるのも不思議ではない。そこに気付いたのは、たまたま荷物の中のスパイ物小説が目にとまったことが理由

であつたが…。

(心を開くかあ。サミュエル君じゃなくオデットちゃんの入れ知恵だな)

そこまで単純じゃないんだがと苦笑してしまふ。

「情報は広げるだけ、関わる者が増えるほど漏れる。その確率が高くなる。少なくとも情報の分析までするつもりなら留め置くてた方が良かったんじゃないか？ 自分の裁量の範囲内であれば特にそうだろう。なら、俺の『刻印』の件はサミュエル君の判断を超えたつてことかな？」

顔色を窺う直時へ、エリアは真つ直ぐな視線ともに肯定する。

「独自行動を許されているからもつと権限あるかと思つてたけど、サミュエル君も意外と使えないな。情報漏洩の可能性はヴァロアにも損だと思つが、そこまでの権限は無い…と。刻印による魔力増大が判明したら、各国ともイリキアまででも追つてくるかな？」

「私見で申せば、当然有り得ます。魔石の備蓄をせずつとも戦力の増大が出来るとなれば各国とも更に必死になります。その恐れを鑑みても本国に報せるべき重要案件だと判断されたのでしよう。手厚い支援体制も期待できますしね」

「鬱陶しいな。それで俺の心証が悪くなるとは思わないのか？」

「その分対価を釣り上げてくるでしょうね。タダトキ様の求めるものとは関係無くですけど」

「おつ？ エリアちゃんは判つてるようだね。サミュエル君に言つておいてよ。金も権力も無駄よつてさ」

「特務大尉殿もそれは理解されていると思いますよ？ 私達をテイサロニキで置いてけぼりにされるつもりでしょうが、追跡中止命令が出ない限り追わせて頂きますのでその支援が必要なのでしよう」
「うんざりとした様子の直時に微笑で返すエリア。

「オデットちゃんが陰から様子見してるってことは、これも作戦？」
「任務ですから。でも、それだけでは有りませんよ？ 大きな力を持つている貴方の眼には、どのように世界が見えているのか個人的に興味があります」

オデットから「指を絡めて！」「脚にそつと手を置いて！」とか念話が来ていたが、エリアは無視したまま直時という人物を知ろうと話し続けた。

直時は寝入りばな、再びフィアとヒルダの訪問を受けた。別行動を控えて話しておくことが多いとのこと。

「私がない間の訓練のことだ」
ヒルダの言葉で直時の脳裡に短くはあったが過酷な訓練が浮かぶ。しばらく解放されると考えると自然とにやけてしまう。

これまでの訓練で基礎体力の向上と、危険を肌で知る感覚の会得。イワナ防衛で風の精霊との同化を経験したことも相まって、余程の油断が無い限り命の危険に晒されることはないだろうとのお墨付きをもらった。

フィアとヒルダが懸念した力の暴走をさせないための第一段階である。

次の課題は精霊術を使う根本的な感覚改善であった。曰く、手足を使うように、精霊へ意思を伝えるとのこと。

イメージの具現化は精霊に任せ、精霊術の起こす現象を当然のこととして受け入れるのだという。直時には未だ魔力を特別視する感覚が抜けきっていない。それが人魔術を行使するような、間まと読み易

さをもった精霊術の使い方になっている。

実際に精霊術を使った模擬戦をしたフィアとミケも同じ評価を下していた。

「戦闘の素人との自覚はあるけど、そんなに戦闘にばかり特化させなくても……」

思わずこぼした愚痴に、「死にたくなかったら死に物狂いで身につける！」と二人がかりで説教されてしまった直時。

（要するに、奏者が楽器を、レーザーが車を手足のように操るのと同じく、精霊術を使えるようになれということか……。一般人の俺に……）
のんびりまったりスローライフ等と言っていた頃が懐かしい。

「ああ、そうだ。ブランドウの魔力増加、ヴァロア組にはバレてました」

「ヒルダには『アスタの闇衣』掛けたんだけど無駄だったかしら？」
「前後の事情を考えれば何故隠したのか、想像するのは難しくないからな」

直時が思っていたより二人に動揺は見られない。むしろ諦め口調である。

「テイサロニキで過ごしてみても、各国の反応を待ちましよう。後のことはそれから良いんじゃない？」

「まあ、今更じたばたしても始まらないか」

直時の呑気な発言に二人が冷やかな視線を向けた後、同時に口を開いた。

「お前が言うな！」

朝日が山肌を染め、明るさを増すイワニナ周辺。夜露がキラキラと太陽を反射し、静謐せいひつだった空気に生き物たちの息吹が漂いはじめていた。

一足早く旅装を調えたヒルダとブランとブランドロワ。発進用の上部岩板に出た一行は直時達の見送りを受けていた。

「では暫しの別れだ。タダトキは鍛錬を怠るなよ？ 内容はファイアにも伝えてあるが、昨夜『転写』した通りだ。次に会う時の成長を楽しみにしているからな」

訓練メニューは伝達済み。厳しい内容だったのか、直時は幾分引き攣きんった顔で頷うなづいている。

「ファイアにはギルドに預けた金を幾分渡してある。装備を新調したり、必要な物を揃える時には言うように」

イワニナギルドに立ち寄った折、ヒルダは少なからぬ金額をファイアの口座へと移していた。別行動中に直時が必要としたならファイアの了承の許で使えるようにしただけだったが、昨夜の『刻印』の効果があまりにも劇的だったため、貸しではなく直時への正当な対価として扱あつかうようファイアには伝えてある。

「武器の槍も買い換え時だと思うから良いモノを見繕みとってやってくれ。それと、場合によっては交渉とか……。ロツソでの件もあるし、見栄えの良い服も何着か用意しておかねばならんぞ？」

ファイアにも細々としたことを伝えている。普段からは似つかわしくない様子に苦笑を抑え切れないファイアと直時だ。

「それと訓練時もそうだが、お前は受身過ぎるからな。害意を向け

られたら遠慮なく攻撃するようにしろ。それが出来ないなら即座に逃げる。良いか？　まず、生き延びることを考える。間違っても攻撃を受けてから対応を考える等と悠長なことはするなよ」

これには直時も思い当たる節が多々あるので、素直に頷いている。

「あと防具も買っておけ。頼り過ぎるのは良くないが、いざという時その有無が生死を分けることがある。丸薬や毒消し等も治療術に頼るばかりでなく常備しておけ。その辺り、フィアは無頓着だからな。用心に越したことはない」

「ヒルダに無頓着とか言われるとは思わなかったわ。そんなに心配しなくても大丈夫だから早く出立しなさいよ」

まだ何か伝え忘れないかと首を傾げている様子にフィアが呆れたように言う。同行するブランンとブランドロワも、ブランドウとの別れは済ませヒルダを待っている。

「いや、フィアが一緒だから心配などはしておらんぞ？　ただ、タダトキはうっかり者だから戒めているだけだ。それと何かあればギルドから連絡しろ。判っているな？」

「色々と助言有難うございます。再会まで精進に努めます」

直時が素直に頭を下げる。そろそろ纏めないと終わりそうにないと思っただのだ。

(しかしこんなにも小煩い人だったっけ？　おふくろかよ…)

苦笑はしつかり抑えていたのに、ヒルダの眼が細められる。思考を悟られたかと思っただ直時は咄嗟に作り笑顔で告げる。

「いつてらっしやい！　ヒルダ姉さん」

「えっ？　お、おう！　行ってくる！」

意図したニュアンスとしては「姉御」だったが、ヒルダは言葉そのままに取っていた。そして、それが嫌ではなかった。

背を向け広げた竜翼に隠れて、朱く染まった耳に気がついたのは
フィアだけだった。クスリと小さく笑うフィアに一瞬だけ睨み空へ
と舞い上がるヒルダ。

ブランン、ブランドロワ、2頭の白鳥竜達も続いて翼を羽ばたか
せた。

「姉さんか…。フッ」

地上に残した者達の頭上を一度だけ旋回し進路を西へと取る。

方向を定めた竜達は、人魔術『地走り』（ヒルダはフィアより転
写）で加速して放たれた矢のように瞬く間に小さくなり、直時達の
視界から消えていった。

「じゃあ、私達も出発しましょうか」

フィアの言葉にそれぞれが動き出す。

まず、ブランドウの背にはジョエルが騎手としてつき、後席にサ
ミュエル。ブランドウは複雑な心境のようだが、これが最後の騎乗
となるジョエルの願いを聞き届けることにした。

ブランンとブランドロワから外した二組の鞍と荷籠は一つに縛り
カッチリ固定した。荷籠付きの鞍が二組出来た。エンジンとタイヤ
の無い二人乗りバイクのように見える。

アランとポール。オデットとエリアがそれぞれの鞍に乗り、直時
の自転車に縄で繋いで牽引。姿勢制御は風の精霊術で行う。魔力量
に不自由しない直時であるからこそその芸当だ。

風の精霊術で夜空を振り回されたことを思い出したか、アランと
ポールの騎兵達は青い顔をしていたが、オデットとエリアは騎獣の
背には無い開けた視界にはしゃいでいたようだ。

フィアを先頭に、右側に直時達、左側にブランドウ達が位置して一路ティサロニキへと向かった。

『ティサロニキ』。イリキア王国にある大きな半島のひとつ、東に伸びたアルカトラ半島の翠玉海側に築かれた王国第二の大都市である。アルカトラ半島の先にはボアズ海峡を挟んでリツタイト帝国に近いが、イリキア王国の陸軍戦力の大部分がティサロニキに配備されているため侵攻を許していない。

また、半島の北側は大きな内海『黒影海』こくえいかいに面しており、リツタイト帝国はもとより他の沿岸各国への警戒と牽制も兼ねた戦力配備となっている。黒影海に面した国は黒影海を中心としたなら南西にイリキア王国。西に小国ながら精強な軍隊を持つトラキア国。北から東へと大きく面した北の大国ルーシ帝国。そして南東側にリツタイト帝国が位置し、ほぼ真南にボアズ海峡があり翠玉海へ続いている。

直時達一行は3日かけて、ティサロニキ郊外へと辿り着いた。

着地した後、牽引していた鞍を自転車から解いた。無用の刺激を避けるため、ここからティサロニキまでは地上移動することになる。ブランドウだけは走らせるわけにいかないが、騎獣のいない鞍は『浮遊』と『地走り』を掛け移動することにし、オデットとエリアはそのままに、補術兵上がりのサミュエルがアランと交代し、ブランドウの後席にはポールが座った。

直時の自転車はこれが本来の使い方とばかりに軽快に街道を走る。置いていかれないよう、人魔術による補助は勿論している。

「ところでフィアは何故俺の背中に座ってるの？」

正確には直時が背負った荷を椅子にして横座りで乗っていた。

「浮遊で重さは感じないでしょ？ それよりその『ジテンシヤ』って乗り物も凝った作りよね。落ち着いたらよく見せてね」

興味深げにペダルを漕ぐ（移動魔術を施術しているから意味はないが直時の気分の問題）様子を観察していた。

午後、日没前にティサロニキへと到着した一行は、街の威容に目を見張っていた。

ティサロニキは東西と北側に厚く高い城壁を持ち侵入に備え、翠玉海に面した南側に大きな港が築かれている。港の中央は商船が入り込んでいるが、外側を囲むように大小の軍船が繫留されていた。

城門の外側で一行はそれぞれ税を支払い、軍人と思われる衛兵に名前や所属を尋ねられる。高い能力とプライドを持つエルフが加わるほどの冒険者一行と見做されたためか、蔑ろに出来無いと自然と丁寧な対応になる。それには普通なら騎獣とならない白烏竜であるブランドウを連れていたことも影響していた。

能力の高い冒険者が滞在することで、街が攻撃を受けた時にギルドを通し義勇兵としての参戦を期待出来る。ティサロニキには十分な兵力があるとはいえ、報酬なしに自国の兵の損害が減るならば国益に適う。それ故の対応であった。

「ロツソより大きな街だね」

「交易都市としちゃロツソの方が上みたいだけど、軍の駐留が多いんでしょね。城壁の外にも兵舎が多いもの」

直時にフィアが答える。ブランドウが快適に過ごせる厩舎を問い合わせてもらったところ、上位飛竜種である白烏竜を受け入れられるところを知らない衛兵が上官に確認をとりに行ってくれた。待つ

間、城門から覗く街並みや周辺を観察しているのだ。

「街の中心部は城じゃない？ 政庁なんて建物じゃないぞ」

「もしかしたら王族が統治しているのかもね」

「これは意識して大人しくしておかねば」

自重を心に刻む直時である。

先程の衛兵が上官と思われる人物を伴って戻ってきた。兜には羽の様な角が付いている。

彼が言うには、白鳥竜が街を訪れたことがなく、ブランドウに見合う厩舎はないとのことだった。

どうしたものかと悩むフィアと直時に、知人が広い庭園のある旅館を経営しているが、そこにブランドウの仮宿を作らせるよう頼んでみると言う。勿論、値は張るがヒルダからの対価をそれに充てることで支払いは充分可能だ。フィアも折半せはんするということで、衛兵上官へと宿の紹介をしてもらうことになった。

「そのこの6人は偶然出会っただけの無関係な人達だから、わたしとタダトキ、ブランドウの宿泊をお願いするわ」

ヴァロア組はティサロニキ到着早々放り出されることになった。

このまま引き下がる彼等ではないだろうか…。

「では旅館の者を呼んでご案内させましょう。少々お時間を頂きたい」

念話で連絡を取ってくれる上官に、「お礼」と金貨を握らせるフィア。賄賂と言われれば後ろめたいかも知れないが、便宜を図ってくれたことでもあるし、「心付け」と考えれば安いものである。

紹介された旅館、『落ち月の館』の番頭がやってきたのはそれから間もなくだった。大急ぎでブランドウの寢床をしつらえていて、

夕食後には完成すること。直時達は安心して後に続いた。

大通りを歩く一行は人々の目を引いた。白烏竜が普人族の街を訪れるのも初めてだし、そもそも希少種であるからその姿を見る事自体珍しいのだった。好奇の目に晒されたブランドウは居心地悪そうにしていたが、フィアの堂々とした姿と、自転車を押しながら逆に好奇心を露わに周囲を見ている直時の様子に安心したのか、長い首高く上げて普人族の街を観察しはじめた。

「大通り沿いは石造りの建物ばかりだな。路地奥の方は木造もあるけど少ない。石造り煉瓦造りが多いな」

「木造は燃えるからね。城塞都市みたいだし、戦争を考えたらそうなるのよね」

「そうかあ。しかし彩りの少ない街並みだな」

直時の感覚である大都市につきものの、電飾やけばけばしい看板が無いだけでなく、ノーシユタツトで見たような色彩豊かな露天の布張りや幟のぼり、塗装された商店も無い。人通りは多いものの人々は足早に移動するだけで、他の街で見られた商い等の活気が感じられない。

「大通りは軍隊の通り道でございますからね。路地を隔てた商業区ではまた違った趣が見られますよ」

振り向いた番頭さんが二人に説明する。大通りは行軍に邪魔になるようなものは規制されているとのこと。商業区や、港、飲食街等、楽しめるところは多いらしい。

「…でかい」

「貴族のお屋敷みたいね」

案内された旅館、『落ち月の館』は由緒を感じさせる白亜の建物で、まさに貴族から先代が購入した屋敷を宿屋に改装したとのことだった。

「どうぞ、こちらへ」

導かれたのは馬車ごと乗り付けられるようになっていた本館ではなく、広大な庭園に散在する離れのひとつである。貴族の来客用として使用されていたようで、二人で宿泊するには広すぎるほどであった。

「ブランドウ様の寢所は取り急ぎ作らせております。しばしお待ち頂ければ幸いです」

直時達の泊まる離れに隣接するようにして急ピッチで煉瓦が積み立てられている。浮遊を掛けているため、作業速度は異様な早さである。

(『岩盾』で作ったら早いんだけどどうする?)

(止ましましょ。折角ここまで作ってくれてるんだし、これも料金のうちよ)

直時とフィアの念話を余所に、番頭がブランドウにリクエストを聞いている。

「寢床は麦藁^{むぎわら}、干し草、青草青葉等、ご用意できますがお好みは如何でしょうか？」

(干し草の上に淡紅菊の大葉を薄く敷いて欲しい)

「かしこまりました。お食事は主に鮮魚をご用意させていただきますが、お考えいただけますか？」

長い首を縦に振るブランドウ。天気が良いこともあり、夕食は野外でとなった。建物に入れないブランドウのことを気遣ってくれたようだ。直時とフィアもそれに同意する。

直時にとっては久し振りに口にする本格的な料理。アウトドア料理も楽しくはあるが、作ってもらったものはまた違う趣がある。玄人の技に舌鼓を打ちながら、揃えてもらった各種さまざまなお酒を

試す。

フィアもあーだこーだと論評しつつ楽しそうだ。ブランドウはお酒が苦手らしく魚と果物というバランスの良い食事を摂っていた。直時は彼が肉食とばかり思っていたので少々意外そうである。

辺りに闇が落ちても灯火の術の弱い光の下、夕食会は続き、直時が良い塩梅に酔った時点でお開きとなった。

ブランドウは完成した仮宿で丸くなり、フィアも直時も元貴族邸ということで備えられていた浴槽で旅の垢を落とした後眠りに落ちた。出入り口を闇の精霊で封じようかと思つた直時だったが、ブランドウが外にいるため範囲を決めた人魔術『報笛』（設定した空間を遮る存在があれば術者の耳元で警報を鳴らす術）を施した。

「これからの方針はどうされますか？」

エリアが難しい顔のサミュエルに問いかける。

ヴァロア一行は『落ち月の館』から通り一本逸れた宿屋に居を構えていた。騎兵であるアラン、ジヨエル、ポールは別室で休んでいるが、サミュエル、エリア、オデットは集まって今後の方針を話していた。

「そうですね。必要経費として資金は潤沢ですから、本国からの支援体制が増強されるまでは目標の観察、及び親交といったところですかね」

「元参謀殿としては随分と消極的なのですね」

皮肉気なオデットに苦虫を噛み潰したような顔になる。

「正直ここまで素気無くされるとは思いませんでした。ここは腰を据えて想い人のことを知ることから始めましょう」

「同感です。タダトキ様の事を知ると共に、私達の事も知ってもらいましょう。彼かたの方はかなり変わった風習の国から参られたよう見受けられます。この周辺国のことには疎そつですよ?」

サミュエルへ微笑するエリア。袖にされたというのに打たれ強い。大人しく帰国してくれる気はないようだった。

「私は本国との連絡に勤めます。エリア様とオデットはなるだけ標的と接触を図ってください。彼の行動と発言は漏らさず報告をお願いします」

サミュエルの言葉を最後に肯いたエリアとオデットは部屋へと戻って行った。本人は灯火の術の下、眠ること無く情報を書き出し項目ごとにまとめる作業に入った。

夜も更けた頃、サミュエルが宿を出る。地理を確かめつつある裏通りの酒場へと足を運んだ。

「アイリスの花香酒。氷は3個。肴は羽のあるものを3つ適当に頼む」

カウンターの隅に座り注文を告げ銀貨を放る。受け止めた無愛想な店主兼バーテンが少し動きを止めた。

「肴は今作ってる。ちょいと待ちな。先に酒でも飲んでいてくれ」
露の浮いた杯をコースターに置いて去る。杯を手を取ったサミュエルの視線は杯の底に隠れていたコースターに落ちる。苦手な酒を口に含みつつ空いた左手の指でそれを擦こする。

何気ない仕草で内懐で左手の指先を拭う。懐中のハンカチには水溶性のインクが染みを作っていた。

サミュエルが座ったカウンターの隅。一番離れたところで潰れていた酔客が大きな欠伸を一つして起き上がった。覚束無い足取りで

店を出ていく。

（ドUBLE軍曹。今出ていった奴を追え）

（処理しますか？）

（行き先と接触相手の確認だけで良い。無理なら接近はするな。その時は会った可能性のある顔は全て記憶して欲しい）

（了解）

酒場から出て角を曲った瞬間足取りが確かになった監視対象を『視力強化』で捕捉したオデットは十分な距離を保ったまま後を追った。

ティサロニキ（後書き）

ヒルダさんとフィアは理不尽な姉キャラ！ と、いう作者独自の脳内設定で進めております。描写不足、キャラ変わってね？という御意見は、ひとえに作者の力量不足で申し訳ないです > <

ティサロニキ？（前書き）

ストーリー…進んでくれえ><

数話飛ばして説明不足になったかもです。若干説明追加！説明はもう良いと言われるかもですけど^^；（12/24）

テイサロニキ？

過日、エリアに直時が語った『情報漏洩』の可能性。思い過ごしと笑えなかったサミュエルは、ヴァロア王国との連絡を受け持つ酒場で網を張った。

懸念はテイサロニキに着いた早々当たってしまい、諜報網への他勢力の介入があることが判明した。

「相手は不明でしたが、その存在を確認できたことで吉としましよ
う」

サミュエルの言葉にオデットが少しだけ悔しそうに顔を伏せる。

昨夜の追跡で、対象の男は酒場を2軒ハシゴして、最終的にはテイサロニキで名の通った大きな宿屋へと足を踏み入れた。

高級旅館といって良い宿屋だけに警備も厳しく、尾行の露見は得策でないと判断したサミュエルはオデットへ追跡中止を告げたのだ。
った。

目立った成果が上がらなかったことにオデットは少々不満気であったが、単独にも拘わらず2軒目の酒屋で着替えた（変装した）男を逃さず追跡した手並みには目をみは瞪るものがある。

「今後の調査は独自に人を雇います。直接調査するよりは無難ですよ。それより二人共タダトキ殿が出掛ける頃合いですよ？」

朝食を摂りながら昨夜の詳細をエリアに説明していたが、時間経過に気付き二人を促す。オデットがエリアの外出準備を調えるため部屋へと急かした。

大急ぎ、且つ丁寧に仕立て上げられたエリアと付き従うオデットだったが、直時達と顔を合わせたのは『落ち月の館』前で随分と待った後だった。

野営続きだった直時がフカフカ布団の魔力に囚われていたからである。

直時とフィアは初めて訪れた街ということでは本日見物。ブランドウはその図体のため留守番となった。歩き回るのは苦手ということもある。代わりに午後には空の散歩に付き合うことになった。

宿を出た直時とフィアを待ち構えていたエリアとオデット。二人共白いブラウスに革のベストでパンツを穿^はいていた。違いはエリアが太腿を露出した短パンであったのに対して、オデットは裾の長い乗馬パンツであったことと膝丈の外套を羽織っていたことだ。

護身用として、エリアが先端に魔石を埋め込んだ短杖を腰に挿し、オデットが外套で隠すように刃渡りの長いナイフを両腰に挿していた。

「宜しければ御一緒させて下さい」

微笑みかけるエリアにフィアは冷やかな目を向けている。直時は苦笑しながらハッキリと言った。

「今日は駆け足で街を回るつもりだから駄目。逢引きのお誘いはまたの機会にね」

片手を振って足早に歩き出す。

「あの娘達付いて来てるわよ？」

「放っておこう。相手にしている暇が惜しい」

長身のオデットはともかく小柄なエリアには少々きつい速度で歩く。しかし、従軍経験のためか平気な顔で後ろを歩いている。

直時とフィアは汚れを落とした旅装のまままで出掛けていた。動きやすい服装と、ある程度の武器を携えている。

衛兵の対応が丁寧であったとはいえ、街の治安状態や、イリキア王国が他種族や他国人相手にどう出るか判断がつかなかったためだ。

「まずは冒険者ギルドね。イリキアの国情とティサロニキ周辺の話
を聞かなくちゃ」

「ティサロニキの街の地理もね。凡そは宿で聞いたけど、もっと詳しく知っておきたい」

見上げた視線の先には街の中心に聳える優雅さを排した無骨な城。ティサロニキが東都と呼ばれるため東宮と名付けられた城が威容を誇っていた。

冒険者ギルドではフィアのSランクという肩書きが役に立った。館内にたむろする冒険者達の無遠慮な値踏み視線に晒され直時は居心地悪そうにしていたが、登録カードを確認した受付は二人をすぐに別室へと案内した。そこでフィアが職員へ要件を伝え対価を払い、求める情報を転写してもらう。

（政情は安定してる。王は王都『テーネ』に健在。第一王子が王都から離れた東都『ティサロニキ』を治めているも、跡目争いは皆無能力の確かさから任されているようね。リツタイト帝国との戦争は3年前の海戦で勝利を収めてから小競り合いだけ。大規模な戦争はこのところ無し。近く戦争が起こりそうかどうかギルドは感知しない。建前はそうだけど兆候は見られないそうよ）

- (暫くゆっくりしても大丈夫そうってことかな?)
- (誰かさんがとんでもないポ力を迂闊うかつにやらかさない限りはね!)
- (肝に銘じております…。それとティサロニキ市街の見取り図は?)
- (主要施設付きで転写してくれてる。タダトキにも転写してあげるわ)

職員と他愛ない世間話をしながらフィアと直時は念話で確認しあっている。

頃合いをみて部屋を出ると、ギルド館内を見学していたはずのエリアとオデットが待っていた。手に冒険者カードを持っている。

「登録してしまいました。これで私達もタダトキ様と一緒に冒険者ですね」

「国籍の申告してないんだね?」

嬉しそうに言うエリアだが、感想は置いて気付いた点を指摘する直時。二人共、名前と種族(普人族)、年齢しか記入しなかったようだ。

「例の件(白烏竜)が既に広まっているでしょう。行動に差し支えると判断しました」

自国のことなのにしれつとした顔でオデットが言う。貴族であるエリアは流石にバツが悪そうだ。

ヴァロア王国による白烏竜の洗脳調教が冒険者ギルドから暴露されるや周辺国は表向き非難声明を出した。しかし、ヴァロアと同じく後暗い事に手を染めていた国も幾つかあり、事態を恐れた結果、どこぞの独裁国のように「一部の愚か者の暴走」との発表と共に解放と謝罪を宣言する国もあれば、秘密裏に処分しようとした国もあった。

後者に関しては、監視を強めていたギルドや不審な失踪に留意し

ていた種族に露見。当該種族や近親種族からの不興を買って、ヴァロア王国で後に『竜禍』と呼ばれたのと同様の被害を受けることになる。

惜しむらくは、監視の目が全てに行き届かず何例かの犠牲が出たことである。ただし、殺害が判明した国は復讐に晒され、国力を大きく削ぐこととなった。そのまま衰亡したり、他国の侵略を招いたりしたのは自業自得だろう。

ギルド会館を出た直時とフィアは、脳裡の市街地図と実際の建物を照らし合わせながら街中を歩くことにした。

他の街と同じく、都市計画に沿って開発されたのだろう。城を中心に配し、東西南北へ大きな通りが各城塞門に伸びている。目立つた違いはその広さだろう。迅速な軍の移動を可能にするため、大通りの石畳は幅30メートル以上ある。片側4車線の道路、計8車線程の幅があると思えばいい。

その大通りが東西と北側の門、そして南の港へと真っ直ぐに続いている。各門の前は広場になっており、隊列を組み直すことも出来る。城壁内縁も大通り同様の道幅で、城壁監視を交代した哨兵や、物資輸送の獣車が闊歩かつぽしていた。

駆け足で通りの確認を済ませた直時とフィア。それに遅れること無く付いてきたエリアとオデットの根気に負け、遅い昼食に同席を許す。

御薦めおすすと言われた郷土料理は、もっちりした厚いパン生地に焼いた肉と生野菜を挟んだ料理だった。具のはみ出した大きな餃子か、分厚いタコスといった見た目である。掛かった白いソースはホワイトソースかと思つた直時だったが、酸味が効いたヨーグルトソースで塩と香辛料の効いた肉と瑞々しい生野菜に良く合った。

また、ノーシュタットの露店で食べた串焼きもメニューにあり、黒地走り鳥の弾力のある歯触りを楽しんだ。

「じつ！ これはっ！」

葉で包まれた料理を手にした直時が突然大声を出した。

中からあらわれたのは肉や香味野菜に混ぜられている洋風ちまき。白い半透明の穀物の粒はなんと『米』（に限りなく似ている）だ。

何事かと目を向ける3人に構わず、確かめるように料理を噛み締める直時。

「：間違いはない。『米』だ」

驚きも束の間、給仕を捕まえて何処で売っているかを聞き出している。直時の形相に給仕の娘が泣きそうだ。

「ちよつと落ち着きなさい。どうしたのよ？」

「コメだよ！ コメ！ うちの国じゃあこれが主食でね。これで白いご飯が食べられる！ いやあ、イリキア来て良かった！ イリキア最高っ」

「そ、そう？ 良かったわね？」

あまりの興奮具合にフィアが若干引いていた。

食事の後は主要施設の確認だったが、直時が市場行きを強行に主張した。当然優先度は低いためフィアには却下される。

ガツクリと肩を落とす様子を哀れに思ったか、好機と判断したか、オデットに耳打ちされたエリアが市場に行くと申し出る。微笑むエリアが天使に見えた直時だった。

代金を渡し、店から聞き出した穀物市場の情報を伝え「くれぐれも宜しく！」とエリアを拜んだ直時は別行動に移る。先を歩くフィアはなんとなく不機嫌に見えた。

フィアと直時は歩きながら脳裡の市街地図と実際の街並みを比較

していた。

冒険者ギルド、テイサロニキ支部は城と港を結ぶ南大通りの丁度真ん中辺りに位置していた。今まで立ち寄った街では中心部にあったのだが、イリキアではギルドと国は微妙な距離なのかもしれないとフィアが言う。冒険者である直時達に丁寧な対応だったが、警戒もしていると思った方が良さそうだった。

港湾施設は充実していて、商都ロツソに勝るとも劣らない。ただ、浮かぶ船は軍船が半数ほどを占めていた。西部諸国の貿易東端であることも影響している。これより東へは冒険航海に出る船しかない。

城を中心として街の南東は食料品等の市場が並ぶ。豊富な海産物や野菜、肉等人々の腹を満たす食材で溢れている。

南西は工芸品や装飾品、生活雑貨や衣類の販売店、その工房が軒を連ねている。一般国民の生活に必要な品は街の南半分揃えることが出来る。

北西街は煙突から煙が立ちのぼっていた。鍛冶屋が多いようだ。他にも武器防具を並べた店等、冒険者や商船の護衛兵、王国兵士が装備を調えるのに訪れる地区である。

北東街区。城のすぐ近くに王立図書館がある。一般解放されているのは一部のみで、直時達が閲覧できる書物は小さな別館に並べられているものだけだった。本館は厳重な警備の元、王族や貴族、政まつりごとに携わる文官や軍高官しか立ち入りを許されていない。

北東街区の城壁近くには落ち着いた佇まいの大きな娼館や個室を備えた酒場が点在し、野卑であるが故に活気のある港近辺のそれらとは趣を別にしていた。上流階級の遊戯場ということだろう。陽が高い今は眠っているような雰囲気である。

因みに港近くの歓楽街は昼夜関係なしで猥雑な賑わいをみせている。船乗りという昼夜関係なしの職にとって、陸に上がれば即休暇。昼夜の別なく酒と女を必要とした。

「空や陸の騎獣厩舎は門近くに少数あるだけだったね」

「臭いがきついからね。城壁外には多いみたいね。慣れた冒険者の騎獣は外で自由にさせていることが多いかな？ 弱い騎獣は流石に厩舎入りさせるけどね」

直時の疑問にフィアが答える。何もかもを知識として転写してもらったわけではない。判っていないことは結構多い。

「今日はこんなところね。明日からは店を見て回りましょう。ヒルダに念を押されたことだしタダトキの買い物もね」

「了解。あと俺は図書館にも行ってみるよ。ちよつと調べたいこともあるし」

「じゃあ午前中は別行動で、午後に街見物でいいわね？」

「そうしよう。それよりブランドウが待ってる。早く宿に戻ろう」

直時とフィアは踵かかとを返し、足早に『落ち月の館』へと帰る。その後を追う人影は、年齢も性別も所属もバラバラだったが、決して少ない数ではなかった。

（もう尾行がついてるよ？）

（西方諸国かイリキアか…。これからどれだけ増えるか、増えたとして接触してくるか…。どちらにしてもここにも長くはいられないわねえ）

（イリキア王国内ではまだ目立ったことしたわけじゃ……。って、空中騎兵の仮設発着場があつたか…）

（普人族はいなかったけど、ギルドに管理を委託したからね。イワナでタダトキが姿を見せなかったとはいえ、何処から話が漏れることもあるでしょ？）

（うつつ。反省します）

気付いていることはおくびにも出さず、念話でのみやり取りする。結論としてはイリキア王国が接触してこない限りは無視ということになった。諜報員といえども他国で派手な活動はしないだろうとの

判断だ。イリキア王国についてはお膝元であるため、何らかの動きが見られれば即逃亡するつもりだった。力づくの捕獲に国軍を動員されでもしたら大事だ。

ブランドウを連れて門外へと出た直時とファイアは、衛兵の好奇の視線の中空へと舞い上がる。ファイアは風の精霊術で、直時は既に鞍を捨てたブランドウの首にしがみついでである。

門外まで出たのは、市街地での空中発着が軍以外禁止であったためだ。直時が精霊術師であることも、まだ隠しておくべきとの判断でブランドウに乗ったのである。不便なのを差し引いても、白鳥竜の羽毛は直時にとって至福の肌触りだった。しかも暖かい。

移動のための飛行とは違い、ただ飛ぶことだけを目的に飛ぶことは心地よかった。街から充分離れた空で、二人と一頭が空中で戯れている。ヴァロア軍で叩き込まれた空中機動も、戦いがなければ鬼ごっこである。笑いながら互いに後ろを取り合おうと競う直時とブランドウの姿に、ファイアは微笑みながらも良い訓練になると気付いていた。

空の散歩を堪能した一行が宿に戻るとエリアとオデットが待っていた。約束の『米』と適当な食材を抱えている。

「おおおおお！ 有難う！」
走り寄った直時が麻袋を開けて確認している。まごう事無き米だった。

「こんなに喜ぶとはね。故郷の食べ物なら仕方ないか……。ふたりともお礼に夕飯でもどうかしら？」

直時の喜びように苦笑しながらも、彼の帰ることが出来ない『故郷』に少し心が痛んだファイア。ヴァロア王国の手の者であることに今だけは目を瞑ることにして、直時を喜ばせてくれたエリアとオデ

ツトを食事に誘う。

昨夜と同じく野外に設えられた食卓にフィア、エリア、オデットが着いて食前酒で口を湿らせている。ブランドウは思う存分空を楽しんだため、上機嫌でフィアの後ろで大人しく食事を待っていた。

直時はいとうと早速米を土鍋で炊いている。宿の離れには簡単な調理が出来る厨房も備えられており、それを利用しているのだ。フィアが様子を見に行ったときは、鼻歌交じりで米を研いでいた。歓喜のオーラが出ているようだった。

テーブルに宿が用意した料理が並ぶ頃、お米が炊き上がり『白ご飯』が完成する。しゃもじ代わりの木ベラで混ぜると良い具合にお焦げも出来ており香ばしい匂いをあげた。

「ほつかほか〜 ほつかほか〜」
上機嫌な直時は『石化』改造で作成した人数分のお茶碗へよそっている。ブランドウには大きめのお皿にお茶碗3杯分ほどを盛った。残ったご飯は別の容器に移し、濡れ布巾を掛けて蓋をした。よそつた分を大きなトレイに乗せて皆の許へと運ぶ。

3人の『白ご飯』に対する感想で共通した事。それは…。

「味が無い」「」

であった。他にも「べちゃべちゃする」「喉に詰まる」と散々であった。

「なん……だと…?」

あまりの反応に直時がパンと同じようなモノで、味の濃いものと一緒に食べるのだと言うと、「パン生地の方が味がある」「汁がかかるとバラバラになって食べにくい」「乗せて食べるにも手で掴め

ない」等、苦情の嵐となった。

エリアだけは流石に拙いと思ったのか「これはこれで…」と、途中でフォローを入れるが、中途半端な慰めは余計に直時へ精神的ダメージを負わせた。

おかず ご飯。汁物^{スープ} ご飯。箸休め ご飯。といった日本人なら当たり前な食習慣が無いのだから当然である。直時が西洋風異世界料理に食傷し、日本食を求めたのと同様だ。しかも日本食といっても白ご飯単体で、おかずは並んだ西洋風料理だけなのだから当然の結果だった。

(このままでは日本の食文化の評価が地に落ちてしまう！)
「ぐぬぬ…。明日から本気だすっ！ 見てろよっ」
捨て台詞を残しながら離れへと走る直時。涙目だったのは内緒である。

明日は食材市場、主に調味料を見てまわる決意を固めるのだった。その日の深夜、途中退席したための空腹を満たすよう作ったおにぎりは何故か塩味が強く感じられた。

翌朝、フィアが目覚めたのはスープの香りのせいであった。直時が鍋の出汁にとよく作っていた乾燥海藻^{コンレ}と魚の干物のスープである。調理場を覗くと、予想通り直時がいた。土鍋に具にしては少量の茸と塩漬け肉の欠片を煮込んでいる。味見して塩を少々足していた。

直時自身はもっと早くに起床して、ヒルダに課せられた訓練を済ませ汗を流したあとである。

「おはよう」

「おう！ おはよう」

フィアの挨拶へ返す声に昨夜の拗ねた様子を感じられない。少しほっとする。

「昨日エリアちゃんが米の他にも食材買ってくれてさ。生卵もあつたんだよ。『落霜』とか低温保存の術式があるんだから生モノも普通に売ってるんだなあ」

感想を述べつつ直時が食材保管庫から取り出した卵を割ってかき混ぜる。煮えた鍋に不評につき残った冷やご飯を入れて、かき混ぜ過ぎないように再び沸騰するのを待つ。

再沸騰したら調理用加熱の術式をキャンセル。火を消す。溶き卵を回し入れ、刻んだ香草をふりかけて蓋をする。

「雑炊って料理を作ったけどどうする？ 米を使った料理なんだけどね！」

「…ちよつと根に持ってる？」

「ちよつとね」

「…良い匂いだし、頂こうかな」

多少バツが悪そうなフィアに笑顔で肯いた直時。テーブルで待つよう伝える。

土鍋と二人分の器とスプーンをトレイごとテーブルに載せた直時は、雑炊をよそってフィアの前に置いた。立ち昇る茸の香り。

「美味しいっ！」

「名誉挽回出来たな！ おかわりはご自由に」

直時が思い描く日本料理とはいかないが、多少昨夜の溜飲を下げる事が出来た。食材市場では『味噌』『醤油』に類した調味料を探す予定だが、本来の目的も忘れてはいない。

（俺が願う快適な生活を求めるのが目的の一番だけど、まずは普人
族と他種族の軋轢あつれきがここまで悪化した経緯を知るのが先だ。普人族
以外の感じ方はフィアやヒルダさん見てたら判る。ミケさんはあん
まりだったけど、ダナやラナは敵意剥き出しだったし…。普人族が
数で勢力伸ばしてて、自己中心的で欲深いつて考えには賛同するけ
ど、そこら辺は地球でも同じだもんな。弱いならそれも仕方ないよ
なあ。どちらにしろ普人族側の意識も調べないと。他種族との関係
がどうしようもなさそうならどちらとも距離を置かないといけない
だろうし…）

アースフィアで生きていくしかないが、自分の感知しないことで
煩雑はんざつなことに巻き込まれるのは遠慮したい。特に国家間の政治に関
わるなどもつての外と思つてゐる。直時としてはゆつたりまったり
スローライフという野望を捨ててゐる訳ではないのだ。

それに魅惑の獣人族（直時主観）や意思疎通できる他種族の存在
は直時にとつて大いなる人生の福音と言える。なにより可愛い！
生活習慣は元の世界の快適さを目指し、刺激的な異世界の良いとこ
ろ取りを目論んでゐるのだった。

「じゃあ俺は図書館行つてくる」

一足先に出掛ける支度を終えた直時は、まだ雑炊を口にもぐもぐ
させてゐるフィアを残して宿を後にした。

王立図書館別館の入場料は銀貨1枚である。興味がある者しか入
館しないことを考えれば高額であつた。

直時は歴史や文化にはそれなりの対価を払うべきと考えていたた
め特に気にならなかつたが、いざ入つてみると他に人影がなく司書
らしき女性が気怠げにお茶を飲んでいるだけで閑散としていた。

一般に解放されている程度の書籍ということ、余程暇を持て余
している者くらいしか訪れることがないのであつた。

(国家機密だの、王権の正当性を飾る国史だのはどうでもいい。俺にしてみれば神話も童話も昔話でも構わない。とにかく普人族の今の意識の原点を理解出来れば……)

鼻息も荒く見上げた棚は恐ろしい量の蔵書があった。別館と侮ったのを後悔した。

「でけえ……」

歴史関連の棚を司書に聞いた直時は、目の前の現実には先程までの決意が萎んでいくのをどうすることもできなかった。

アースファイア一般に普及しているのが獣皮紙だとは理解していたが、棚に収められた一冊がとにかく大きいのだ。分厚い革張りの蔵書は高さ60センチを超え、厚さも15センチから20センチはある。試しに一冊引き出してみると重さは30キログラム前後。年若い学者では腰をやられてしまうのではないかと心配になる直時だった。

「あつ！ 『浮遊』か！」

魔術を日常的に使用する習慣が無かった直時の盲点である。重さを消した大きな本を両手いっぱい閲覧机に運ぶ。

ただ、本を運ぶためだけに『浮遊』（100kgの重量消去）を使用するのは直時くらいのもだろう。日常的な人魔術であれば『吊架』や『軽減』等、消費魔力が少ない術だ。

腰を落ち着けた直時は頁を繰る。しかしイリキア王家を賛美する歴史書がほとんどで、それを流し読みしながら気になる記述内容は脳裡に刻む。未読の本の山から既読の本の山を作り次々と頁をめくった。

「……始父と始母の願いにより普く在らんと生まれた人族が普人族

……」

人気の無い図書館の片隅で神話を綴った物語を読み始める直時。

「…神々より授かりし『神器』。力無くとも正しくあるうとする我等に対する神の恩寵…」

多民族に虐げられたと記されているが数冊を読み解く限り敵対しなれば襲われていない。敵対の理由は様々だが、余計な喧嘩を売ったり略奪目的の侵入だったりでは？ と、思ってしまう内容だ。勿論大義名分と判る理由は脳内削除している。

『神器』の授受に関しては、神々に憐れまれているよう感じられた。直時が実物を目にしたのは魔狼が授かった『水霊の珠』^{ミスチ}しかないが、書物によると数多くの『神器』が普人族へと贈られたようだ。それらを以てして少ない魔力の普人族は多民族を退け一大勢力を誇るようになっていったと記されている。

つまりは普人族が地に満ちたのは神々の恩寵であり、神々の意思の結果であると正当性を説いている。旺盛な繁殖力に関する記述は少ない。

「普人族が増長する原因の一端は神々にも在るってことか…。それにしても何故普人族が他種族、特に獣人族を目の敵にするのかがわからん！」

妖精族や竜人族に対しては恐怖混じりであるものの一定の敬意は払っている。ところが獣人族に対しては個体能力で普人族に勝るのは同じであるのに、あからさまに侮蔑の念をぶつけている節がある。能力的にも寿命的にも凡そ倍。そして種族ごとに住み分けている。だからこそ繁殖力で勝る普人族の『手頃な敵』という認定らしいが、本当にそうだろうか？

ケモノ耳や尻尾を愛する直時の個人的な理由を抜きにしても少々納得がいかない。

どちらにしても数十冊（獣皮紙が厚くページ数は少なかった）に目を通したただけなので判断は保留する。直時としては普人族そのものより数々の『神器』を与えたとされる神々への疑念を覚えた図書館初日だった。

昼食を待ち合わせた食堂で摂った直時は、正装に類する服を見繕ってきたフィアに被服店へと強制連行された。

「食材市場がつ！ 味噌と醤油がつ！ 日本食があああっ！」
抵抗する直時を引きずる手はフィアだけではなかった。フィアが同行を渋っていたエリアとオデットが何故か協力している。何らかの密約を疑ってしまう直時だった。

（やっぱり尾行付いてる…。鬱陶うつとうしいなあ）

（実害が無いなら放っておきなさい。ミケちゃん達のためにも暫くは我慢よ！）

何気ない素振りを装ってはいるが一定の間合いを保って移動する者が直時にも複数確認できる。フィアが小さな風をあちこちに飛ばして確認していた。

（この分だと魔術で遠距離監視もされてるんだらうなあ）

（当然でしょうね。そこそこ忘れないようにね！）

はしゃぐ女性陣に仕方なしに付き合う様子も報告されていると思うと気分が滅入る直時だが、監視相手を油断させる演技（素である）だと自分に言い聞かせた。

「成人用だとブカブカね。子供服はある？」

「いえいえフィア様。むしろ女性用を！」

「そこっ！ スカートを持ってくるんじゃない！」

「タダトキ様には半ズボンが似合うと思うのですが…」

「流石ですエリア様っ！ しかしゆったりしたモノよりこちらのタイトな方がお尻の形をっ！」

「却下だっ！」

「威厳が足りないからゆったりとポリユームある上着とかが良いんじゃない？」

「否ですフィア様っ！ 欠点を取り繕うよりは小柄な体躯の魅力を存分に引き出すピッチリしたモノが良いかとっ！」

「オデットちゃん…。怒るよ？」

フィアとエリア、そしてそれに倍するオデットの着せ替え人形となった直時は精根尽き果てるまで引き摺り回されたのだった。

結果、直時が購入させられたのは細かい縫製の白シャツ（襟元や袖口に刺繍あり）と珊瑚鹿の黒革ベスト、黒影海産闇烏貝で染色した絹製（イリキアクワイ蛾の繭糸）の薄手ズボンだった。どれも子ども向けサイズであったのは直時の名誉のため秘密である。

その後も「絶対に嫌だ！ 似合わない！」との直時の意見を無視して購入された翠銀の耳カフス、装飾用黒鋼の籠手、魔王指輪、白金鎖の首輪等が正装時の装飾装備品となった。

主にフィアとオデットの玩具おもちゃとなった直時を、玩具経験者として慰めたエリアである。

数日間、起床後の自主訓練のあと、午前中を図書館で過ごし午後は市場回りとブランドウの空中散歩。夜は食材の和食アレンジと魔法陣の改造といった毎日を過ごしていた直時。周囲の監視尾行も目立った変化はなく、アースフィアに来て初めて日常を感じていた。

ひとつ処に留まって同じ行動を繰り返す。それだけのことに思い

もよらないほどの安心感を抱いていた。

その日も図書館で真新しい情報が無いまま独り頁をめくっていた直時に、声を掛ける人物があらわれた。

「お若いの。知識をお求めなさるか？」

穏やかな笑みを浮かべ小さいながらよく響く声で話しかけたのは、エリアより低い背をさらに丸め、余計に小さい印象を与える老人だった。

図書館という場所に憚り、声に出さず首を縦に振る直時。眼前の老人は禿頭、白髯白眉、肌は薄い緑色で耳は微かに尖っていた。普人族ではないように見受けられる。

「より深い知を望まれるなら我が主が直にお教えくださるじやろう。それを求めるなら付いて来られるがよい」

踵を返した老人が本棚の奥の闇へと歩みを進める。直時が後に続くことに疑いをもっていないようだ。

直時はその老人と目を合わせた瞬間何かの回答を得る確信が芽生えた。名も顔も知らない初見の相手にも拘わらずである。

呆けたように立ち上がった直時は先を進む老人を追った。灯火の術を施さなかったためかひどく暗い。左右を過ぎる棚を埋める本の背表紙の文字も読めない。しかしそれを気にした様子もない。

直時の周囲の闇が濃さを増し、老人の後ろ姿以外見えなくなった。

そしてイリキア東都ティサロニキから直時の姿は消えた。

ティサロニキ？（後書き）

ワードの自動一字下げはテキストだと反映されないんですね。
反映される時とされない時があって腹立ちますw

テイサロニキからの召喚(前書き)

イブ更新!

ティサロニキからの召喚

何も見えない闇の中、先を歩く老人の姿だけがやけに鮮やかに見える。しかし、茫々とした直時の表情に疑問は浮かんでいない。歩みを進める足裏に地の感触はあるがその足音も聞こえない。一切の闇。一切の無音。

耳元でざわめく闇の精霊達の声が聞こえた。虚ろだった直時の目が徐々に焦点を結び始める

「っ！」

正気を取り戻した直時は、自分を取り巻く異様な状況に恐慌を起こしかける。目に映るのは小さな老人の後ろ姿だけ。他には何も知覚できない。

ついさっきまで気にもしていなかった図書館の空気。窓から差し込む陽光も無く、窓越しに聞こえていた喧騒も無く、獣皮紙の匂いも無い。

比較する対象物が存在しない闇の中、平衡感覚さえ危うくなる。しかし連日の空中散歩で鍛えられた三半規管は倒れることも傾くこともさせず己の位置を確固たるものにする。

直時は即座に風の精霊術で防御の風を身に纏い、流れの無い空気を自ら動かす。老人の姿から注意を逸らさず大きく後方へ飛翔、充分な間合いを取る。同時に探査の風で周囲を認識しようとするがどうも上手くいかない。

「ホホッ！ もう自分を取り戻されましたか。精霊は儂より貴方様の方を好んでおるようですのう」

老人が嬉しそうな声をあげた。直時を操った術が解けたというの

に気にしていないようだ。

「自分のような若輩者に『様』付けは勘弁してもらえませんか？
それより今の状況を教えてもらえると有り難いんですがね？」

周囲に群れるのは闇の精霊達。普段なら夜でも考えられない程集まっている。

「図書館での言葉は嘘ではないですか？ 貴方様が知を求められる
を知り、我が主がそれに応えたいと申されましてな。こうして御案内の役を買って出たのですじゃ。外は普人の民が騒がしゅうござい
ましたからな。穩便にお連れするため、少々強引な手を使ったのは
お許しいただきたい」

深々と頭を垂れる老人。警戒を解くわけにはいかないが、真摯な
態度に殺意だけは引つ込める直時。が、現状を知るため全力を尽くす。

（闇の精霊が満ちている……。探査の風と同じ様に出来るか？）

空を舞つたため風を操ったように、海中を水の精霊術で泳ぎ回った
ことがある。なら、闇が支配するこの場なら、闇の精霊と同化する
ことで周囲を認識出来るかもしれない。

（モヤモヤ闇の精霊さん達っ！ ちょっと協力お願いねっ！）

目を閉じて闇と同化するイメージ。周囲の闇に包まれた全てを把握しよう
と魔力を全方位に放出。危険は感じられなくても危機意識が強い。魔力の出し惜しみはしない。

同時に自身の中に存在する力、直時の定義した『気』、ファイア曰く『謎の力』、そしてこの世界に初めて迷い込んだ際メイヴァークが口にした『存在の力』を魔力に変換する。

周囲を包む闇との同調に成功した直時。彼は視覚情報では得られ

なかつた現況を認識する。

（直径は約3メートル。一本道のトンネルか……。だが、おかしい！
後方と前方の存在が途中から曖昧だ。感知できん！）

理解出来ない状況に危機感が高まる。老人から距離を取ったが、直時の後方10メートル以降がどうなっているのか認識することが出来ない。闇の精霊を信じるならば行き止まりではなく『何も無い』のだ。同時に老人の前方10メートル程も同様だ。

今、存在するのは老人と直時の間10メートルとその前後の計30メートルのトンネルだけ。閉じ込められたか？ と、直時の背中を嫌な汗が伝う。

（ダイジョウブ。ダイジョウブ）

声にならない様な声。闇の精霊だ。彼等の歓喜する様子が直時を困惑させる。

「暗示まがいの術を使ったことは心より謝罪いたします。しかし、嘘はいつておりませんぞ。貴方様の望まれることを我が主が提供できる。それを正直に増幅させただけの術でございます。貴方様の望み、それへの回答、どちらが違っていてもこの術は体をなしません。『^{そのなか}唆し』と取られるかもしれませんが、『後押し』と、思つて頂ければ幸いですじゃ」

あくまでも穏やかな老人である。

「（お客人。少々手荒な招待となつてしまった。許されよ。そなたを招いたのは神々の末席に連なる私だ。夜の王『クニクラド』という。異邦の民であるそなたの疑問が数あることは知っている。出来る限りの答えを対価と引き換えに与えよう。ヨンよ。手を煩わせてしまったな。ご苦労だった）」

直時の脳裡に響き渡つたのはかつてメイヴァーユ、ヴェイルヘルミ

「ネと対面したときのような『声』だった。しかも精霊を束ねる神霊ではなく、更に上位の存在。神々のひとりであるという。」

「フンと呼ばれた老人が『声』の主へ深く頭を下げるのと同時に直時を眩暈めまいが襲う。今までトンネルの中だったというのに、突然広い空間が広がった。未だ周囲は闇が覆ったままだが、闇の精霊と同化した直時の感覚は広大なドーム状の空間を認識した。」

「（ようこそ闇の子達の領域へ。我が『クニクラド』。闇の神アスタの眷属にして夜を司る者だ。貴殿をこの地へ迎えられたことを心から嬉しく思う！）」

月光のような朧げな光の下、闇が凝り固まったような人型の塊。それが直時へ喜びも露わに声を掛けた。事態の推移に混乱する直時の耳元を闇の精霊の笑い声が過ぎていった。

「いつものように待っていた。正門からタダトキは出て来なかった。ということね？」

「フィアの詰問にエリアとオデットが頷く。」

昼食の待ち合わせにいつまで経っても来ない直時他二人に業を煮やしたフィアが王立図書館へと出向いた。不機嫌なフィアと館外で待つエリアとオデットが合流。図書館へと足を踏み入れたが直時の姿は無かった。

直時が単独での調べ物を主張したため、エリア達はいつも昼前に図書館に来るのだがいくら待っても出てこない。邪魔をするのが憚られたためそのまま待っていたが、フィアの方が待ちきれなくなつたようだ。

憤然としたフィアを先頭に入館したところ、中にいるのは暇そう

な司書の女性だけ。肝心の直時の姿は無かった。

「またロツソのときみたいに勝手に逃げたんじゃないでしょうね……」

フィアが呟く。状況確認を済ませたエリアとオデットがそれに答えた。

「閲覧用の机上には片付けられていない書物がたくさんあります。本日午前中の入館者はタダトキ様のみ。そして、私とお話なされた中で「書物はひとつの世界だ」と、おっしゃったことがありました。あの御方がこのように無造作に書物を放置されるとは考えられませんが、逃走にしろ拉致されたにしろタダトキ様にとって不測の事態が起きたと判断すべきです」

エリアが静かではあるが強い口調で断言する。最悪の場合も想定している。彼女の言葉に直時が故郷の本を愛おしそうに撫でていたことを思い出すフィア。

「…そうね。貴女達は補術兵だったわよね？ 何か魔術が発動した気配はあった？」

「私達が図書館前に着いたのは昼前ですが、特に異常は感じられませんでした」

「なら異変があったならそれ以前ね。貴女達は館内の正面以外の出入り口を確認して。私は一応宿に戻る。あいつが逃げるなら荷物は持っていくだろうしね。報告はあの元参謀も連れて『落ち月の館』まで来なさい。来客の予定は伝えておくわ」

探査の風を放って図書館の構造は既に把握していたフィアだが敢えてエリア達に申し付ける。確かめたいことがあったからだ。

秀麗な顔立ちを険しい色で染めたフィアは、宿に着くなり加護を与えてくれた神霊、『風を統べる女王』メイヴァーユへと意識を集

中して祈りを捧げた。

（それは本当かつ？ わかった…。私は本国への連絡と各国の動向を調べる。ドウブレ軍曹は調査後エリア様を連れてこちらまで。晴嵐と会う前に打ち合わせだ）

オデットからの報告を聞いたサミュエルは念話しながら外套を羽織って外出の用意を調える。

「いったい何処の誰が…。彼の力を考えれば拉致できるとは考えられんが…」

舌打ちをしながら宿を後にするのだった。

闇の精霊達の嬌声に敵意を削がれた直時は、眼前の「神」をまじまじと見る。しかし、闇が凝り固まったような暗い塊があるのみで、その姿を垣間見ることは出来ない。

「クニクラド様？ 出来れば御姿を顕していただけると安心するのですが」

「（うーむ。これが本来の我の姿なのだが判り難いか？）」

「申し訳ありません。今までお会いしたのがメイヴァーユ様、ヴィルヘルミーネ様といった人型であったのでなんとなく思い込んでいただけです。その御姿が本来のクニクラド様の姿であるならそのままで！ 大変不躓なお願いをしてしまいました！」

神様へ不遜な要望をしてしまったと慌てる直時。

「構わぬ。夜鬼族や夜鳥族等、はるか昔に結んだ折の形もある。お

ぬしがわかりやすい姿を取るのは呼びつけたこちらの礼儀だのう」
闇の中の更に濃い闇の塊が結実する。微かな光の中に顕れた人型は2メートル程の筋肉質の男神の人型。闇を結実したかのような漆黒の体躯は筋肉の鎧に覆われ、背には蝙蝠か竜族のような翼がある。頭に頭髮は無く、面白そうに見開かれた両目と三日月を横にしたような裂け目を見せる紅い口が覗く。はつきり言って 魔のような容貌である。

(こえーっ！ こえーよっ！)

先程の発言を心から後悔した直時はおどおどしながらも言葉を発する。

「お手を煩わづらわせて申し訳ありません。それで自分を招かれた要件とはどういうものなのでしょう？」

「(んあ？ 聞いておらんんだか？ そなたの疑問に応えるためよ。他にこちらから頼みはあるがな)」

ラン老人の言葉が甦り思わず身構える直時。

「確か対価が必要とおっしゃっていました。それは自分が払うことが出来るモノですか？」

「(おぬしにしか出来ぬことだ)」

警戒する直時に重々しく頷くクニクラド。『神』と聞いたが、直時にとっては別種のひとつとしか感じられない。魔力が神力かは判断できないが、保有する量はファイアやヒルダと比べ物にならないのは判る。だが、不思議と驚異とは感じない。

直時にとって外形の驚きはあっても、感じられる魔力は自身のそれと較べて小さく感じられたのだ。それは魔狼父のダウンクルハイトや虚空大蛇のミスガルズやアナンタでもそうだ。彼等の場合その巨きよく軀を恐れた直時である。むしろそれより小さい姿である分クニクラドへの脅威としての認識は少ない。

「（フフフツ。聞いた通りやはり面白い！ 謙へじくつてはおるが存在として是对等と思っておるのう）」
（げっ！ 決してそんなつもりはないんだが、失礼な態度だったかな明るい笑いが響いた。）

「（はっはっはっ！ そう身構えることはない。我は神域入りせなんだが交流はある。おぬしの噂は色々と聞いておるよ。目の前にしてその力のことも理解出来た。だからこそ頼みたいこともあるし、そのためにはおぬしの疑問には全て答えよう！）」
見かけによらず豪放磊落ごうほうらいらくな神のようだ。

「お言葉は大変光栄ですが、自分に出来ることは知れております。色々とお聞き及びのようで重複すると思いますが、自分はこの世界『アースファイア』に来て間がありません。未だに手探りの毎日で自分の居場所さえ無い有様です。おまけに普人族の複数の国家から追跡を受けていて行動にも支障をきたしております。そんな中でクニクラド様の求められる対価を払えるとは思えないので、まずは何を自分にお求めなのかをお聞きしたいです」

後でとんでもない要求をされてはたまったものではない。直時は丁寧な応答ながらも予防線を張る。

「（我がおぬしに求めるのは普人族が遊ばせている『神器』の回収だ。これだけでは言葉が足りないことは重々承知しておる。そこで、我が地上に留まった理由をその目で見てもらいたい。此処は地上界であるが、陽のもとより追われた者達が集う場所。我が望み創ったこの地をおぬしの目で確かめて欲しい。答えはその後で良かる

う」

「わかりました。しかしその前にひとつだけお願いがあります」

「(何だ?)」

クニクラド自身が気にした様子はないが、神へと先に要求しようとする直時にラン老人の顔が険しくなる。闇の中からは他にも複数
の気配から魔力の高まりが直時に感じられた。視線をクニクラドか
ら離さないまま緊張感を増した直時は言葉を続ける。

「自分には連れがおります。ティサロニキから突然消えたとなれば
心配いたします。この地を拝見することに異論はありませんが、せ
めてその者達へ此処に居ることを知らせたいのです」

フィアとブランドウが心配しているかもしれない。そのための要
求だったが、直時が真に恐れたのはフィアの心配ではなく、逃亡と
取られることだ。初めて会ってからまるつきり頭が上がらないエル
フの怒りが実に恐ろしかった。魂的な意味で。

「(おおっ！　そこまでは気が回らなんだ。許せ！　直ぐに使いを
出そう。冒険者ギルドから連絡をするよう誰ぞに報せるようにしよ
う！　いや、確かおぬしの連れはメイヴァーユの加護を得た者だっ
たな？　儂の名で此処に居ることを伝えよう)」

クニクラドは神域経由で神々の伝手つてを使うようだ。

(ちよっ！　神様軽いなっ？　良いのだろうか…)

それをさせた直時が心配することでもないのだろうか、なんだか
この世界の『神』をいうものに図書館で感じたこととは別種の疑念
を感じてしまうのだった。

世界とは繋がっているものの、地上とは異なる何処か。

穏やかな気候に花々が咲き乱れ、しかし奇妙な程静かな場所。広さの割に生き物の息吹があまり感じられない場所。

『神域』と呼ばれる地では、神々や神霊、神獣や聖魔の者達が、地上とは流れの違う緩やかな時を過ごしていた。

小高い丘からひとつのたおやかな人影が風と舞うように滑り降りてくる。丘の麓には湖が静かな水面を湛えていた。薄衣うすぎぬを風に漂わせながらその人影が湖面上を踊る。真っ白な素足は鏡のような湖面に触れないが、宙空を走り抜ける風が水面に軌跡を刻む。

優雅な舞いが突然止んだ。湖面は再び静けさを取り戻す。人影は宙を滑り湖から突き出した石柱の一本にゆっくりと腰を掛けた。

普段なら意識に入っても無視する程度の声。今まで数多あまたの者に与えた己の加護。それ故届く多くの祈りの声。その中から気になる祈りが彼女に捧げられた。

「（フィリスティア。息災でしたか？）」

微笑みながら答えを返したのは『風を統べる女王』メイヴァーユであった。

テイサロニキからの召喚（後書き）

メイヴアーユ様あ…は、しーするー

ティサロニキからの召喚？（前書き）

あけましておめでとうございます

本年も拙い物語ですがお付き合い頂ければ幸いです

ティサロニキからの召喚？

「（そうですね…。それで彼が今何処でどういう状況にあるのか知りたいと？）」

（はい。地上界の小事でお手を煩わせること、恐れ多いことですが、小さき我等にとつては大事。何卒メイヴァーユ様の慈悲を…）

地上界、ティサロニキの宿屋『落月の館』に戻ったフィアは、まず直時の荷を確かめた。折り畳まれた自転車も異世界の書物もそのままだった。

直時をどうこう出来るのは普人族では有り得ない。緊急事態と判断し、床に膝を突き祈りを捧げるフィア。そして、彼女の祈りに予想外の早さで神霊から反応があった。そのことに期待をもって願いを伝えた。

「（視てみましょう。少しお待ちなさいな）」

軽やかな声音。それに感謝の意を伝えながら思う。メイヴァーユという神霊はいつもこんな調子だ。「もっと気楽に〜」と、いうのも口癖だ。それでも畏怖と敬愛が揺らぐことは無く、軽々しい態度を取ることが出来ない。

フィアは両膝を床に揃え、両手を胸前で組んだまま顔を伏せている。その姿勢のまま神霊の次の声を待った。

神域の湖上。石柱に腰を下ろしたままメイヴァーユが意識を集める。

神霊の目の前で風が渦を巻き鏡の様な面を創りだす。神域に住まう者達が地上界の様子を視るため使う手段は様々だ。風の神霊であ

る彼女の場合は、『風の鏡』に統べる精霊達が知覚する事象を映し出す。

「あら？ 真つ暗ね…。うちの子達の『声』が届かないほど闇の精霊の力が強い…。私より高位の神霊、神々が近くにいます？」

直時のいる地上界の情景を映し出すべき鏡面を黒い霧が渦巻き像を結ばない。地上界を見守るといふ名目の神々の暇潰し。その行為は覗き見そのものであるため、地上界に残った高位の存在達はこれを嫌う。

神域という特殊な空域からの一方的な干渉（観賞ともいえる）であるから余計にである。

どうしたものかと可愛らしく人差し指を顎にあて頭を傾けた。すぐに親密な神々を当たらうとしたメイヴァーユ。その時、湖面が波立ち知己が姿を見せた。水の神霊、深淵のヴィルヘルミーネである。

「はあい、メイヴァーユ。ご機嫌如何？ 良い風は吹いているかしら？」

「こんにちは、ヴィルヘルミーネ。少し澱よどんでいるかも…」

「あらま。これって関係あるかしらね？ 貴女に伝言よ。クニクラド様から」

「夜の王が？ 道理で闇の精霊がうちの子達を遮る訳ね…。彼はあそこにいるのね」

「そういう事。察したようだけど伝えておくわ。『タダトキ・ヒビノは夜の王クニクラドが招致。暗護あんごの城を案内中。その旨、フィリスティア・メイ・ファーンへ伝えられることを望む』だそうよ」

ヴィルヘルミーネの言葉に肯いたメイヴァーユはフィアへと声を届ける。

「（フィリスティア。タダトキの行方が判りました。彼は今、夜の

王『クニクラド』様の傍です。貴女には馴染みがないようですが、リツタイト帝国内にある大地の裂け目、大地溝帯『アースフィアの降塔』で、クニクラド様の城『暗護の城』に招かれているようです。彼の神より何らかの託宣を授かれれば後は無事還るでしょう。」「
ヴィルヘルミーネの顔を確認のため一瞥する。彼女は自信満々で肯いた。

（神々の御心に私が口を挟むべきことは何も有りません）

聞き分けの良いフィアに少し溜息をついてしまうメイヴァーユ。
地上界の者はなべて神々や神霊等、自分より高位の存在を盲従する傾向にある。若くして神域入りしてしまった彼女にはそれが少し寂しく感じられる。

（もう少し親密に頼ってくれると嬉しいのに……。つついっい普人族に甘い顔をしてしまう他の神々の気持ちも少し判るわね…）

またひとつ小さく溜息をつくメイヴァーユ。唯一積極的に助けを求めたのが普人族で、非力な種族ということもあり数々の加護や神器が与えられた経緯がある。それが他の種族を虐げるようになった面もあり、神々の恩寵も善し悪しだ。

（メイヴァーユ様。タダトキのことはクニクラド様の御心に沿うとします。しかし、少しお聞きしたい事が在ります…）

ところが今回、フィアからの言葉はメイヴァーユの予想を少し逸れた。ただ、従っただけでなく己の求めるところを表に出したのである。

彼女が訊ね、疑問視したのは次の事柄だった。何故、タダトキの世界で架空とされている存在がアースフィアに現存しているのか？
タダトキが内包している『力』。メイヴァーユが漏らした『存在の力』とは何か？ と、いったことだ。

「（良いでしょう。私は神域において年若い存在ではありませんが、知っていることは語りましょう。フィリスティア、貴女は我が眷属にして加護を与えた子ですものね）」
神霊からファイアへ、アースファイアという世界の成り立ちが語られる事になった。

夜の王クニクラドが直時の案内に付けたのはロン老人だった。この地に誘われた相手であるし、短時間とはいえ操られたため警戒心はいやがうえにも高くなる。

「まあまあそう身構えずとも。お客人に無礼を働くことはございませんので」

「いやいや！ ヨンさん！ 初しよ端はなに自分へ暗示掛けましたよね？」

「ちょっとした老い耄ほれの稚ち戯まじゃよ。それに理由もお話したではありませんよう？ 害意なぞ抱こうものなら闇の精霊が黙もってはおらんかったからのう」

「モヤモヤくん達ですか？ でも最初はスルーだったじゃないですか」

「貴方様の望みを拡大投影し、それを達すると精霊達に確約した上での術式であつたからのう。嘘が混じれば儂の命も無かつたじゃろうな」

「…その言葉が偽りでないことはモヤモヤくん達が保証してくれてますけど、今後こちらの自由意志を操る様な術は止めてくださいよ？ かつとなつて攻撃することもありますよっ？」

「ホッホッホ。くわばらくわばら…。肝に命じておきまする」

甘い限りであるが、直時としては勢いのまま誤認攻撃なぞしたくはない。精霊が安全を囁いていたとしても身の危険を感じれば反射

的に攻撃してしまうかもしれない。リスタルでの記憶は未だに鮮明だ。まだまだ自分を制御出来ているとは言えないのだ。

「クニクラド様が何を考えておいでか判りませんが、正直に言って自分は魔力だけはあるらしい危険物ですからね。そのところをご理解いただけていると有り難いんですけどね」

「僕も全てを聞いておる訳ではございませぬ。それでも貴方様がどういった存在であるかは臆げには理解しております。神に比するが人である…。なるほど、会ったことはなかったが『神人』とはこういった方であるか…」

何やら納得する老人に懽然としたままの直時。一方的に事情を理解し納得している様子が面白くないのだ。

それでも大きな溜息ひとつ。気をとり直した彼は陽の届かないこの地の案内役に頭を下げた。ついでに自分のことは呼び捨てにして欲しいと要望する。

「ヨン老人は了承すると共に自分のことも『ヨン爺』と呼んでくれと言った。皆がそう呼んでいるそうで直時も肯いた。

アースフィアの普人種以外が見かけ通りの年齢でない事は直時も知るところである。そんな老人が謙^{へりくだ}つての案内となれば態度を改めずにはおれない。不興ではあるがそれを抑えることも心得ているのだ。

「ヨン爺は直時の先を歩きながら『暗護の城』の簡単な来歴を語り始めた。単純に言えば光を仰ぐ者、闇を恐れる者達からの過剰な攻撃から逃れた、闇の眷属の駆け込み寺として始まつたらしい。」

普人種が勢力を広げている現在、夜の闇の中では大きな力を振るえるものの、日中は極端に力を制限される闇の眷属は狩られ続けて

いる。ここ『暗護の城』に逃げ込んで来る者達が後を絶たないそうだ。

元の世界では宵闇が支配する時間の半分近くを普通に起きて活動していた直時。自分も半分くらい闇の眷属と見做みなされたから闇の精霊に好かれたのかなあ等と、ヨン爺の話聞きながらもとりとめもなく考えていた。

最初に案内されたのは、種々の夜光花が熱のない光を灯す屋内庭園だった。高い天上からは月を模した明かりが落ちていている。何らかの術式なのだろう。弱い光が闇の中に薄い影を浮かび上がらせていた。

魔族の中に吸血種がいることは与えられた知識では知っていたし、元の世界でも『ヴァンパイア』等の予備知識もある。しかし案内された地底都市（そう言っているいい規模だった）を闊歩かつぽする彼等の数は多かった。クニクラド様かヨン爺の威光かは判らなかったが、紛れ込んだ異物として目立ったものの直時は無事に過すごせた。ただ首筋に視線を据えて、「美味しそう…」と呟いたのは数人どころではない。すれ違う者達が全て美形であったとはいえ、何やら物欲しそうな目を向けられては背中に冷たい汗が流れてしまう。

「じゃあ、次行きましょう！ はいっ！ 次っ！」

焦りながらヨン爺を急かす直時。後で聞いたところ、吸血種に呪いに属する伝染性はないとのこと。物語の中だけとはいえ、ねずみ算的に増える犠牲者に疑問があったが、はからずもそれが実証された瞬間である。地球ではないが…。

また、彼等が食事に要する血液量は致死量には程遠いそうである。怖がって悪かったなあと反省した直時は、後で血を提供することに。本人は献血気分である。

他にもクニクラド直系の夜鳥人族の住む区域では、無音のまま舞い降り傍に寄る住人達に、風の精霊や闇の精霊の助けを借りないと接近を気付けなかったり、闇の眷属の混合種族達（単眼馬頭鬼や三つ目牛鬼、直時の背丈ほどもある顔面ののっぺらぼう、人面蜘蛛、矮鬼人等）による百鬼夜行ばりの行列を見たりと新鮮な驚きに出会っていた。

ただ、彼にとっての驚きはその想像の範囲内、理解の範疇である。細かいところは別として、絵本、童話に始まり、神話や物語等、馴染みのうちだったが、それに殊更疑問を抱くことはなかった。

幾つかの種族達が住む空間を巡り、最後に辿り着いたのは『暗護の城』ほぼ最深部であった。漸く闇の精霊に同化して周囲を『視る』ことに慣れた直時の目には、広漠な闇の中に処々灯る冷たい光、鬼火とその周囲を漂う数々の不定形の存在が感じられた。

「彼等は冥界に渡るのを拒んだ魂達。死んだことを認められなかったり、断ち切れない未練があったりした者達ですじゃ……」

冥界に渡り、魂を真つさらにして新たな生命の器に宿る……。それがここアースフィアで繰り返されてきた輪廻である。冥海で洗い落とされた魂の記憶は想いの海を漂い、ゆっくりと時間をかけて沈んでゆく。

それらの想いは消えること無くアースフィアという世界に積もっていくのだ。

「ですが、全てのモノが生しゅっせんの終焉を受け入れられるわけではないのです……」

ラン爺の顔に慈愛が満ちる。僅かに交じるのは悲しみか？

「中には障さわりを起こす聞かん坊のモノもおりますが、彼等の多くは己に答えの無い答えを求めているのですよ。しかし殆どは癒される

間も無く陽光に焼かれ、忌み嫌われ、被われて強制的に冥界へと送られますじゃ。我が主はそれを憐れに思われましてな。この地にて現世の傷を癒してから送り出されておりますのじゃ」

「彼等の声、聞いても良いですか？ 吐き出して少しでも癒されるなら…」

直時の脳裡にはリスタル戦で手に掛けたヴァロア少年兵達の姿が在った。力をぶつけ合った空中騎兵や成人していただろう正規兵に対しては不思議と罪の意識は感じないが、恐怖と恨みに顔を歪ませ、嘆きと痛みの中死んでいった子供達の姿を忘れることが出来ないでいた。

暴発した闇の精霊術による冥界葬送では眠りに就くのと同様に死んだのだが、それ以前の戦闘は激しいものだった。そこで死んだ者達は相当苦しんだことだろう。血の泥濘でいねいでのたうち回っていた兵達の姿は直時の記憶に刻まれている。

「貴方ならば、闇の精霊達が守ってくれましょう。お好きになされるが良いでしょう」

ヨン爺の言葉に肯いた直時は仄光る鬼火のひとつへ踏み出した。同時に集まる死霊達。

（ 痛いつ！ 熱いつ！ 何故こんなに苦しまないといけないの？ 私が何をしたの？ 俺はこんなところで死ねないっ。あの子達が待つてるんだっ！ 愛しい人…。きっとあの人は帰ってくる…。 何故逆らう？ 儂の言う通りすればこんなことには…。

お腹空いたよ…。お父さんお母さん早く帰ってきて…。妹は僕が…。早く…。 嘘だ嘘だ嘘だ…。彼女は僕のものだお前のものじゃない僕の…。 私は何故こんな姿に？ そうよ。全ては夢…。 悪い夢。目を覚ませばそこにいつもの私がいるの… ）

痛み苦しみ悲しみ恨み辛み妬み嫉み…そして行き場のない愛情。

あらゆる感情が直時へと流れこんでくる。それがただの感情だけなら耐えられなかったかもしれない。

同時に彼等の生きてきた背景が直時の脳裡を駆け巡った。何故、どのようなにして死の瞬間を迎えたか……。迎えねばならなかったのか……。彼等魂の叫びに精神を崩壊させる寸前で踏みとどまれたのは、彼等の生の背景を知ったが故だった。

共感できることも出来ないこともあった。理解できることもしたくないこともあった。でも知ったことでそれら魂の叫びを全否定など出来なかった。ぶつけられる全てをただ受け止める……。共感も憐憫も憤りも全てを押し殺し、ただ、聞く……。それが自分に出来る唯一のことだと思った直時だった。

「死者は速やかに冥界へと旅発て……。新たに生まれ出よ……。確かにそれが世の理ですじゃ。しかし、死者が現世に未練を残すも、己の死を拒むもまた自然の理……。クニクラド様は好きなだけ此処で過ぐすが良いと申されておりますのじゃ」

目を閉じたまま苦悶に耐える直時の耳にラン爺の声が届く。その声音は穏やかで慈しみに満ちていた。

直時を囲む死霊のひとつが薄れて消える。それを確認したラン爺は動かない彼の手をとって彷徨う魂達の輪から連れ出した。直時の目尻から一筋の涙が溢れた。

行き場のない悲しみに混乱する直時が次に連れてこられたのは『降塔』の表層部、地表に近いところである。

「深い地溝帯といえどここには陽の光が届きます。タダトキ殿には陽の光も必要でしょう」

ラン爺の気配りのようだ。日は既に傾いていたが、有り難く申し出を受け落日の光を浴びる直時。闇の精霊達は影に避難しているよ

うで、代わりに風の精霊達がまとわりついてくる。

「風の精霊達の喜びよう…。好かれておいでですのう」

「闇の精霊達に包まれているのも安心感あるんですけどね。風も気持ち良いです」

ほっと一息ついて気分を切り替えることが出来たようだ。窓外遙か高く、大地の裂け目から吹き降ろしてくる風に包まれその身を浮かせる。身に纏った衣の襟や裾がはためいた。

「良い匂いがしますね？」

「ほっほっほ。すぐ上の階では夕餉の準備が始まっておるようですよ。御一緒されますか？」

「それは有り難いですね。色々見聞きして精神的にお腹いっぱいって感じなんです。身体的には減ってるっばい。ご相伴に預かれるなら嬉しいです」

率直な言葉に好意的な笑いを返したヨン爺。直時は招かれるまま足を運んだ。

「オデット、任せます！ 『地走り』！」

エリアが魔法陣を施す。加速を受けたオデットが通路を扼した三人の襲撃者に真正面から突っ込んだ。接触寸前、横の壁を蹴って進路を強制変更。真ん中、先頭の脇を抜け向かって右側の男へ襲いかかった。

両手には刃渡りの長いナイフ。長身を低く地を這う程に屈めて左脇を駆け抜ける。

襲撃者は慌てて長剣を叩きつけようとするが右手の攻撃範囲外だ。切っ先はオデットに届かない。

オデットはすれ違いざま右手を頭上、男の左脇の下へ。擦り上げられた刀身は、深くは無いが鋭い傷を負わせた。切り裂かれた動脈から噴出する鮮やかな血。男は高い悲鳴と共に崩れ落ちた。同時に振るった左手のナイフが左脚の腱を断ったためだ。

「女の身で刃向かうか！」

先頭の男の怒声がエリアに飛ぶ。

左側の男は首領格の背中を守るため身体の向きを後ろへ。構えた長剣の切っ先でオデットの姿を追ったが既にいない。見失うはずのない狭い裏路地である。一瞬の意識の空白。上から被さる影。オデットは疾走のベクトルを上に向け、大きく跳躍していたのだ。

背中合わせの男達の隙間にオデットが静かに着地する。ひとりは頸部から血を噴水のように上げて事切れた。もうひとり、首領と思われる男の喉元と脇腹に血塗れの刃があてられる。

「立派な殿方ですし、抗ってみますか？」

背後から蠱惑的な声で耳元に囁くオデット。左手の刃は喉の皮一枚を裂いて止まり、右ナイフの切っ先は男の右脇腹、軽鎧の継ぎ目に軽く刺さって血を滲ませた。

男は長剣を抜きかけたままの姿で身動きひとつかなわない。降伏の意を示したいが、喉に押しつけられた刃のため首を振ることも声を出すことも出来ない。

「降る気があるなら両手を広げてよく見えるよう上に挙げなさい」
エリアの凜とした声に、顔中脂汗にまみれさせた男はゆっくりと手を挙げた。戦意の喪失を確認したエリアがオデットに目で伝える。

水平に当てられていた喉の刃がゆっくりと位置を変え、血塗れの切っ先を見せつけるようにした後、改めて頸動脈に押し付けられた。

「答えなければ死にます。聞いた事を知らなくても死にます。知らされてないなら考えなさい。根拠を示した上で判断を話しなさい。場所も悪いし時間も無いので質問に入ります。言うまでもないですが、こちらが時間稼ぎと判断した場合も死にますよ？」

「わ、わかった」

エリアの矢継ぎ早の言葉は男から冷静な判断力を削ぐ。慌てて頷くことしか出来ない。

（直接の雇い主は交易船の船主でした。おそらく背後にいるのはマケデイウスでしょう。連中は荒仕事だけの契約でした。監視役は他にいるはずです）

（お疲れさまでした。もう暫く敵の目を引いて下さい。アランとジヨエルをそちらへ向かわせました。合流後は守りを優先して慎重に行動して下さい。情報が取れ次第連絡を入れますので、その後はフイア様の待つ『落月の館』への避難をお願いします）

念話で指示を出していたのはサミュエルだった。彼はヴァロアの諜報員と接触を図ると共に、動きを悟られないよう他国の諜報員の耳目をエリア達に集めたのだ。

直時は毎日図書館へ通い、午後はフイア、エリア、オデットと連れ立って街を歩いていた。監視者達からは、フイアと同時に要注意人物と目されていたのだ。彼の失踪が周囲に露見した場合、手強い妖精族フイアと違い真っ先に狙われることは判っていた。

サミュエルも貴族を囿にすることには気が引けたが、周囲の動きを予測したエリアが自ら買って出たので依頼したのだ。オデットは

憤慨していたようだが、強硬に反対することもなかった。

「オデットがいれば、私に傷ひとつ付けることかなわないでしょう？」

エリアが発した絶対の信頼を示す言葉に、久し振りに忠勇を示せると奮い立ったのである。従軍前はエリアの侍女兼護衛として武術の腕も見せていたのだ。

薄暗い路地裏に3体の遺体を残してエリアとオデットはその場を去った。

尋問内容や諜報員への対処はサミュエルからの念話指示だった。エリアは多少眉を顰めたものの、冷酷な指示に従った。必要だと判断したからだ。

場末の潰れかけた酒場。看板下のランプに火が灯っていることだけが開店を教えている。しかし、店内にいるたった一人の人物は店の者ではなかった。

（タダトキ殿の槍は受付に預けられたまま……。他の出入り口は司書の前を通る……。正門前には来なかった……。魔力の感知は無かった……。彼の場合拉致は無いだろうが、消え方が解せない。誘致か失踪かも判断がつかない。タダトキ殿を見失って仕掛けてきたとなるとマケデウスは白か……。いや、牽制かもしれん。とにかく情報が欲しい）
騎兵のポールを共にヴァロアの現地協力者からの連絡を待つサミュエル。入り口に一番近い席に腰を下ろしている。指定された酒場内には入ったときからずっと人気は無^{ひげ}い。

（特務大尉殿。玄関外に人影はありません。しかし私ひとりでは裏口まで監視できません）

（正面だけで構いません。裏から来るのは目的の人物ですから。違っても正面玄関さえ固められていなければどうということはありません。不審な者が近付いたら連絡を。その場合は即座に撤退です）

念話の途中、店の奥から微かに軋む音がする。誰か来たようだ。サミュエルはいつでも動けるよう腰を浮かせて待つ。

「やあ。随分とお待たせしちゃって申し訳ないですねえ」

やたらと明るく軽い声。若い男らしいが、長身を覆うローブのフードを目深に被^{まぶか}つていて顔は判らない。サミュエルから見えるのはニヤけた口元だけである。

右手には長い錫杖。施された細密な模様から高級品と思われるが、処々その模様を削る傷もあり、金持ちの蒐集品^{コレクション}でないことを窺わせる。何より彼から感じる魔力量が攪乱されていたことがサミュエルに警戒を促した。

（ハツタリでないならかなりの手練……。どのみち認識攪乱の人魔術を使う時点で高等魔術師だろうな）

緊張したまま相手を探るように見る。

「そんな怖い顔しないでくださいよ。ちゃあんと情報は仕入れてきましたから」

「済まないな。では聞かせてくれるかな？」

「勿論ですよー。その前に確認だけど、『晴嵐』は図書館を殆ど調べなかったのですね？」

「そう報告を受けている」

「ふむ」

長身の男は左拳を顎の下にあて、少し首を傾^{かし}げた。何か考え込んでいるようだ。

「おい」

「ああ、すみませーん。各国の情報でしたね。商国も山国も帝国も『黒髪』を見失ったままで、情報を得ようと動きが活発化してますね。彼女達が狙われたのもそのせいでしょう。どの国も彼に関する情報収集の段階でしかないかな?」

「イリキア王国は?」

「イリキアですか…。王都『テーネ』は静かなものです。王族、貴族とも動きは無し。ここ東都『ティサロニキ』の第一王子側も特に注視すべき動きは無いですね。ただ、冒険者ギルドティサロニキ支部の念話連絡の量が増えている…という未確認情報が上がっていますねえ」

「各国の冒険者への依頼は?」

「ギルドを通じた依頼は皆無。個別依頼は調べようもないけど、商国と山国が依頼したのは確実でしょう。ギルドへの問い合わせが念話連絡倍増の原因かもねえ」

大袈裟に溜息を吐きながら首を振る。

「各国の情報に特筆すべき点は無し。特務大尉殿はこれから晴嵐の処へ行くんですよねえ?」

「それが何か?」

「護衛は多い方が良いでしょう? 僕も付き合いますよ」

カラカラと笑いながらの提案だが、サミュエルは警戒を露わにする。

「諜報員として分をわきまえることを勧める」

「いやいや。現地協力員としてこの非常時にこそお役に立たないとねえ? 自分で言うのもなんですが、魔術師としちゃあ一級品ですよ?」

軽々しい口調であるがこれまでの観察から言葉通りの実力が覗うかがえた。情報漏洩の件は放っておけないが、手練の魔術師が一緒なのは

正直心強い。

サミュエルは警戒しながらも同行を許可した。

テイサロニキからの召喚？（後書き）

軽口の魔術師と言えば…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9148t/>

風と異邦の精霊術師

2012年1月10日01時26分発行